PL
777
.5
T3
v.10

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

[illegible]

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/sharehontaikei10taka

漢文大系

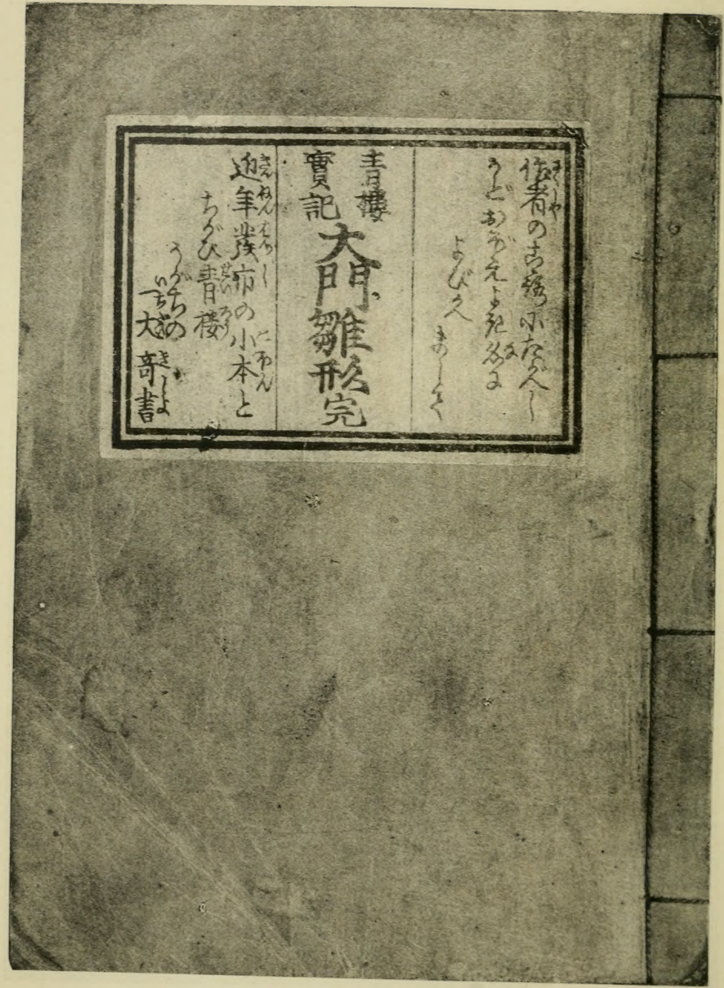
第十巻

PL
777
.5
T3
V. 10

LIBRARY
SEP 2 (1965
UNIVERSITY OF TORONTO

1128125

「見通三世相」改題（永代談話）の挿繪



不粹照明房情記の表紙

洒落本大系 第十巻目次

	解題	本文
解題		一―六七
見通三世相	一	一
不粋照明房情記	四	三五
良夜靜搔	七	六七
仇手本	一〇	八五
色講釋	一三	一一九
惠比良濃梅	一六	一四七
嘉和美多里	一九	一七七
甲子夜話	二一	二〇七

廓の櫻……二二三……二三七
匂ひ嚢……二六……二六九
比翼紫……二九……二九五
二薄園……三一……三二五
三千之紙屑……三四……三五三
野良の玉子……三八……三八三
夢之盗汗……四〇……四一五
噁意悒思……四二……四四一
商內神……四五……四八三
穴可至子……四八……五一一
祇園祭挑燈藏……五一……五四七

起承轉合……五四……五八一
妓情返夢解……五七……六一三
狐之竇這入……五九……六五一
鄽意氣地……六二……六八九
婦足髷……六四……七三五

目次終

解題

山口剛閲
高木好次記

▲狂言綺語見通三世相　原本 縦六寸一分 横四寸二分

振鷺亭作　寛政八年刊歟

書名の「見通」は本來照覽洞察の義であるが、それに幾分か表座敷の意をも含めてゐる。「三世相」は佛說の前世、現世、後世の諸相を云ふ、六三郎かしくの三世を取材したによつての命名である。

作者振鷺亭の傳記は本大系第九卷所載「御前手打翁曾我」の項を參照ありたい。

刊年については從來寛政年間刊だけであつたが、本文に「ャレ新佛の門之介や半五郎が見てへのとゆうれいにやァねへ引ずりさ」とあるによつて寛政八年刊ではあるまいかと想ふ、こゝに云ふ門之介は二代目市川門之介、半五郎は三代目坂田半五郎、前者は寛政六年十月十九日

歿、後者は寛政七年十月十九日歿であるから、新佛として並び稱せられるも聞えぬわけではない。序末の「彌勒旬稔たつミのとし」も亦刊年を知るの一資料たり得る、寛政八年刊との推定も確實性多きものと信ずるのである。

本書は序に云へる如く、「嚮に門人等が述したる翁曾我の一番目に二番めの後を出し」たのである。内容は寛延二年三月、豊竹座初演の「八重霞浪花濱荻」の中に取材されて有名になつた大坂北の新地の女郎かしくと大寶寺町の大工六三郎を登場させて構想を展開したのである、序幕の發端は銘鯛橋の段であの世のかしくと六三郎とがお盆に娑婆へ出る、幕明けば大川の新洲のはな夜明けの景、客悟舟を乘せて舩宿の息子萬が猪牙舟を漕いで深川から戻つて來る、新洲に立てゝある卒塔婆に、眞菰に包だ二人の赤子がひつかゝつて居る、悟舟に萬はそれを拾ひ上げ、自分等は髻を切り落して僧となる、中幕は煮花屋の段で、武兵衛といふ男がかしくを相手に煮花屋で遊ぶ、かしくは自分の色六三郎が煮花屋をせかれてやむなく他かで遊んで居る、そこへ武兵衛をはづして逢ひに行つた、武兵衛が怒る、歸つて來たかしくが手管でそれを鎮める、その後でかしくは塀を乘り越えて外に待つて居る六三郎との道行となる、切幕は道行の段であるが「心中迄一幕丁數をいとひ是より筋書にておはなし申上升る」と斷つて、悟舟が拾ひ上げた

双子は生長して美女美男となり、女子は和歌町で名とりの子供となり男子は、名うての放蕩者となつた、薙髪した悟舟にその弟子、船頭の萬は、閻魔堂をつくつて行をして居る、かしくに別れた武兵衛は遊の歸り醉醒の水を寺の門前で飲ふとした時、かしくと六三郎の幽靈に出合ふと云ふのである。

本書に書かれて居る地名、屋號等は何れもこの作者の癖で假名が用ゐられて居る、深川を鎌倉にとり、永代橋を銘鯛橋、土橋を麁橋、古石場と新石場を古市場、新市場、櫓を神樂、木挽町を帆引町、尾花屋を煮花屋、梅本を夢本等がそれである。

本書は、正本になぞらへて著作されたものである、こゝに作者の得意があつたのであらうが統一がとれず全く失敗に終つて居る、この點駄作としか云へない、然し他の方面から見れば取得がないわけではない。

丁へ行ならとうろう俄過からなじんで暮のあと着の相談じぶんに切るがよし

と吉原の遊客の穴を穿ち

麁橋ん床のいゝだけ夏床と冬床のやりくりにやァ女郎しのふさぐ所サそれだから四月の朔日と九月のせつくにやァ氣のきいたおきやくんいきなさいやせんとまりの多ひばんなざァ

夜具包をかつぎ込と船頭のね床にまご付く事が有やす

或は又

さびしひばんによせばがおそくひけてヤレ嬉しやねやうと思ふ所へ口がかゝつてあんどうのうへにらうそくを立てやうしをつかつて出てくるもいやだチイ

と深川での細い観察をひけらかして居る。

强いて本書の價値を云ふならば、先づ右に云へる如く穿ちが見られる點と、洒落本の内容の型に一つは正本系統のものもあると云ふ點とである、振鷺亭作として發表するのにはあまりに好ましからざる作品である。

本書は文化年間に「辰巳風俗永代談語」として再刊された、序が柳提市隱爲のと、挿繪が溪齋小泉のとに代へてある、辰巳風俗とは蓋しよく付けたと思ふ。

▲不粋照明房情記　原本　縦五寸二分 横三寸八分

寛政年間刊

書名は序に云へる「房情記と題するは。作者の意を深くもしらねど。野暮とへ卑下の言葉に

て。ちんく鴨の正眞長明。うまミの染しはらはたにて。行水の流の里。しかももとの水くさき手ごとにあらずといふ事か」の想像が當つて居よう、「鴨長明の方丈記」の洒落である。然るに表紙の外題は「青樓實記大門雛形」として、その右に「作者のこゝろにたがへしかどおぼえよき名によびかへまして」と註記してある。

作者は何人か未詳である。序に「足をあらひし老こみ作者」とあるのから、山東京傳が序を書いたであらうとする人もあるが、適確な證據は擧げられない

刊年は從來寛政年間刊だけであるが、本文の中に瓦町に假宅のあつた事が記されて居る點から考察すれば、當時この瓦町の假宅は寛政六年四月二日吉原江戸町二丁目から出火して一郭全燒した時、田町、聖天町、山の宿と共に出來たのと、寛政十二年二月廿三日龍泉寺町から出火したのが吉原京町へ飛火して郭中全燒した時も、田町、聖天町、山之宿、新鳥越、山谷町、橫山町等と一緒に出來たのとある、本文に假宅中「アノかりたくのときやァ二階の格子からとき〴〵ミへィしたよ」と川開きの花火の話も載つて居り、本普請も出來て吉原へ戾つてからの描寫であるから、寛政六年以後の發表にかゝるとすべきである、なほ、本文中に「この間こつちゃでも。京町にいやなことがありィしてこれくつてなりィせん」と云ふのがある、如何なること

が惹起したのか、これさへわかれば刊行の年代ももつと判明するのである。

本書の内容は、總まがきの已惚客、半まがきの苦肉の契情、まがきの中の眞情話の三項目に中點を置いて書かれて居る。一は、已惚客が女郎に躰よく振られて、騙されるとは知らずに、遊女にとつては爲になる客の騒ぎ散らして出て行つた座敷へ、自分が廻るものと思つて綺麗に掃除をしたあとへまたどや／＼と藝者等を引つれて戻つて來られると云ふ滑稽、二は、二三年この方來なかつた客が珍らしく來たのを逃がさずに、節句の入用を仕入れようと努力する女郎と客との交渉、三は、多風に仁三と云ふ二人客、仁三の相方むだ川は深川から鞍替になつて來た女郎で、未だ里言葉になれず、誰も居なければ深川まる出しとなる、客の相槌につれて吉原の居心地惡きを話すと云ふのである。

三項共相當なまとまり方の構想である、よく統一がとれて居る、各々その描かんとした點をしつかりと把握し得て居る、構想の統制ばかりではない、情緒、眞實、背景等もよく描かれて居る、表紙に「近年發市の小本とちがひ青樓うがちの一大奇書」と云ふだけあつて確かに穿ちの點も相當なものである、「この間女げい者や男げい者が、會所へよはれたそうだがなんだの」と吉原の藝者の制度や「かむろのあの字名をよぶれこゝのうちにかぎることとなり」と妓樓の特

色を描き「ちかごろ郭中へしるのミをうるばゝァの來ることミなさまごぞんじ也」或は又、「ありやァ東河岸で。客しんかねへと。しよくだいのうゑでミすがミをもやしたりあんなにかうしをばた〳〵たゝいたりするが。客人の來るましなひたそうさ」と穴を云つて居る、就中深川から吉原へ鞍替したむだ川と云ふ女郎の話が、兩者遊里の適切な比較と想ふ、深川の癖の簡單にぬけぬこと、吉原の客の遊びが長いこと等をかこち「こつちへ來た時こあめ町のよし岡から來る。店衆にもらつた唐ざんを着てきたら。もめん着ものだとつてはミんながわられァな」と唐棧がどんなに珍重されるかも知らないで笑ふ連中を、逆にお可笑がつて居る、同じ籠の鳥であつても深川と吉原とでは格別な相違がある、その窮屈さに絶えられぬも無理はない、客から二十兩ばかりの金を借りて吉原から三軒屋へと又鞍替へがしたいとこぼす心事も容易い理解出來る、この穿ちが本書の情緒をして如何に濃厚ならしめ、眞實性をして如何に高からしめたことか、本書を佳作に推す所以の一つはこゝにある。

▲良夜靜搔　原本 縦五寸二分 横三寸七分

藍川風通作　寛政年間刊

書名は序の「籬之隅。靜掻響之玄妙處（中略）題之曰二夜靜掻一」によつて想像出來よう、なほ「靜掻」については本大系第九卷所載「青樓夜話 鄽數可佳妓」（成三樓風雨作、寛政十二年刊）の項を參照ありたい。

作者は、從來不明とされて居る向もあるが、「戯作評判花折紙」（本大系第十卷所載）には藍川作としてある、序を書いた藍川風通作とする事に異議はない、藍川風通は傳未詳である。刊年は、「戯作評判花折紙」に採錄されて居る點をも考慮に入れゝば、先づ寛政年間の作として可なりと想ふ。

本書の内容は、吉原の位置、茶屋妓樓の構え、什器等を示し、遊女の風俗、制度を語り、年中行事を擧げ、粹と野暮との定義を論じたものである。

世有二大通者一。盜人ノ體之善也矣。葢野夫番町所レ偏

世に大通と稱する連中を體のよい盜人と論じた所に作者の見識が見られる、野夫が番町に編せられると云ふのは適切な説明を缺くが、武家屋敷との關係上のことであらう。

會所の四郎兵衞ハ芝居で知大門の制札ハ江戸砂子にて見る昏にハ燒葬の臭烟に鼻を閉暁ハ穢多か太鼓に目をひらく

制札は、「大門口にはし〳〵ばいぢよ御きんぜいの御高札ありこれハ元吉原大門口にもありしとぞ」(「噺之畫有多」安永九年刊、本大系第三卷所載)と云はれ「江戶砂子」は全八卷、菊岡沾涼享保十七年原撰、恒足軒明和七年再校增補、同九年刊行。燒葬は小塚原の先で、左手にあつた、風向によつては臭つて來たのである。穢多は、淺草田町山宿に住居して居た。

しやれて畫草紙を見ては今を茶にするがことし

畫草紙は草雙紙で、赤本、黑本、青本、黃表紙、合卷本の總稱である、こゝでは黃表紙と稱せられるそれである、然るに黃表紙でさへ、赤本、青本、繪草(雙)紙、草雙紙、稗史、稗說等の異稱がある。

太神宮の鈴の音も晩鏡と聞

妓樓に於て鄽の始る時に、鈴を振つて神棚を拜してから鄽へ出る習慣で、それを指すのである。

中の町の物干ハ佐野の次郎左エ門女郎あやめしよりなく

佐野次郎左衞門が、大兵庫屋の遊女八ッ橋を茶屋立花屋にて斬り殺し、物干から屋根傳ひに逃げた一件を指すのであつて、「洞房語園」には享保年中の事として居る。

本書は、山東京傳作、天明六年刊「客衆肝照子」の卷頭言に類似した作品である、然し京傳と本書の作者との描寫の相違は、情緒の點に於てあまりに判然と見えてゐる、京傳の流暢な文體は、穿ちの表現に當つてもよく纏綿たる情緒をたゝよはすに成功して居る、本書は可成の細い穿ちがあるに係らず、枯燥な感を起さしめる、これは創作動機の相異の結果でもある、京傳に及ばない點もあるが、風俗資料として見る時には相當な感謝に價する記錄である、「女郎の身の上ほといとふしきなし」云々と遊女の苦痛を描き、年中行事等に及んで居る作者の勞を多とするのである。

すいも甘いもかきわけて上る所に止るを粹といひたいものなれと「是も亦不粹か吾もまた其眞の粹なる㕝を不知」と云ひながら、粹に對する適切な評をなして居る。

追而出來と廣告してある「錦袖餘香」は未だ發見されない。

▲仕懸幕莫仇手本　原本　縦五寸二分　横三寸八分

小金あつ丸作　享和元年刊

書名は後編の「通神藏（つうじんぐら）」（「通神戯」とも云ふ）と共に、竹田出雲等作の「假名手本忠臣藏（寛延元年八月、竹本座初演）の「假名手本」の洒落である。

作者小金あつ丸は本大系第八巻所載「青樓夜世界闇明月」の作者、神田あつ丸と同一人である。同人の傳記は同項を參照ありたい。序を寄せた山旭亭閒葉行は本大系第九巻所載「青樓小袖 孔雀染勤記」の作者、山旭亭主人と同一人である、これ亦同項の參照を乞ふ。

刊年は從來前編は享和元年刊、後編は享和二年刊とされて居るが、前編の見返しによれば兩者同年刊であるが共の年の明記はない、止むを得ず享和元年に推定した。

內容は「假名手本忠臣藏」の現代化である、初段目から六段目まで、深川の遊里を背景に呼び出しの穴を穿つたと見返しにも記してある通りである、自序にも內容を明かにして居る、作者の得意とするところは「假名手本忠臣藏」に於ける人物を當世の遊客遊女に見立てかへた點にあり、勿論創作の動機がこゝにある、足利直義を金持の息子株足利屋義二郎、鹽屋判官を遠州屋半兵衛、高師直を高野屋直右衛門、若狹之介を若狹屋の若者助七、かほよ御前を、若狹屋の藝者かほよ、大星由良之助を半兵衛が店內大星屋由良之助、其の子力彌、小なみをとなせやの娘分の新造小なみ、加古川本藏を若狹屋の料理人本藏、鷺坂伴內を高野屋直右衛門が乘りつ

けの船宿、鷺坂屋の船頭伴内、早野勘平を船宿、早野屋の船頭勘平、おかるを娘分おかる、斧定九郎を斧屋の息子定九郎、藥師寺治郎左衛門を藥師屋の治郎、石堂右馬之丞を石屋の馬、勘崎彌五郎を千崎屋彌五郎、原郷右衛門を原の郷右衛門等として居る。

深川を取材したゝめ、富ヶ岡八幡宮の境内にある二軒茶屋の一つ橋本屋を稻本屋とし、仲町を若町等ともぢつて居る、山と云ふのは八幡の境内を稱するのである。

【勘平】ときにてめへあすのばんにやァぜひかのものが入からもしできざァおびでもかしてくりや【かる】おめへまたしんちへでもはこぶのか久しいもんだ

の新地は、「婦美車紫鹿」（本大系第二卷所載、安永三年刊）に、深川新地、築立新地、三田新地等が載つて居る、しかしこゝで云ふ新地は深川のそれである、享保十九年に越中島に出來た新しい岡場所で、大新地小新地に分れて居る、天保九年に至つて取拂を命ぜられた。

作者は自跋に於て「全く浮氣をすゝむるにあらず實前に利有て後へに危をしめす」と記して居る、作者の主眼とするところはこゝにあるが、穿ちとか情緒とかはあまり望まれない作品であり、實は作者なのである。作者が最も人口に膾炙して居る忠臣藏の筋及び人の運用に滑稽を生ぜしめようと努めた苦心の跡は見られるが、この作者の癖として只の燒直しに過ぎない。

▲青樓夜話色講釋　原本　縦五寸二分　横三寸六分

十偏舍一九作　享和元年刊

書名は序に「其よいほどの中の街。花の盛の永き日を。短く遊んで歸るが通。永く呼のが娼婦の好意。その長短を滑稽に。色講釋ととやからかす而已」と云ふのでわかるであらう。

作者十偏舍一九は、重田貞一、幼名幾五郎、通稱市九、後與七、十返舍、十遍舍、十偏舍、十偏齋、醉齋等の號がある、明和元年、駿府町奉行の勘定役の子として生れた、父の死後其職を襲いだが弟に讓つて諸所を流轉し遂に江戸へ出た、而しても一所に居住することなく、轉々として移住して居た、狂歌、浮世繪、黄表紙等をよくしたが、彼の最も成功したのは滑稽本に於てである。天保二年八月七日歿、享年六十七、或は六十八とも云ふ、淺草上富店善龍寺內東陽院に葬つた。跋を書いた若松亭扇光は何人か未詳である。

本書の梗概は、水狂と云ふ三十五六の似山と辰三郎と云ふ十九廿位の息子株とが、柳橋から猪牙で吉原へと乘り込む、船中水狂が己惚れて話に夢中になつて居ると火繩で羽織に穴をあける可笑味あつて、扨大見世へ上る、やかて床へ廻る、水狂の相方は橋立と云ふ、一寸顔を出し

たばかりで長い間床をあけたので若者を呼んで怒り立てるので、橋立來て水狂の騷ぐを鎭めるが結局は振られた形、辰三郎は表座敷で相方花園に大もてゞある、要するに水狂と辰三郎とは洒落本の典型的人物で、氣障な男が振られ、おだやかな人の好い息子株の厚遇されると云ふ常套的手法である。

しかし作者が最も努力した點は、姉女郎の橋立と妹女郎の花園との間に鬪爭のあつたことである、その場面を實寫せずして花園が客の床へ出た時、傍輩女郎浪花、番頭新造きく里と客との會話の中にて聯想さすべく作意したところである、目錄にも一客と女郎の門ちがひに思ひもよらぬ寢物語れ傾城の定價千兩」と抽記する程である、卽ち水狂は花園、辰三郎は橋立と座敷の盃で決つて居たのを、間違つて水狂に橋立、辰三郎に花園となつてしまつた、間違の結果がさうなつてしまつたのだが橋立は辰三郎に惚れて居た、さうはとらない、故意にさうしたのだらうと解釋して花園に當り散らした、花園は口惜しくてたまらぬ、が妹女郎としては何と云はれても隱忍するより外に術はなかつた、その惡口を聞いて居た傍輩の浪花や番新のきく里が、同情をよせて共に口惜しがると云ふのである。

素見客の描寫の中に上方人が二人出て居る。

「八右衛門」嘉兵へさん、こちよらんせ。ふらいたんなわろじや「加兵へ」なるほどあづまるびすじや。ふらうものいゝのきたないことじやわいの。大阪でハ。かぶりかくの。何のといいやせんわいの。つらァくいかいてこますといふてじや「八右ヱ門」京都でも。たまにいさかいをしおるが。まだきれいにいゝおるわいの

と上方の方言を描いて居る、この作者は、父の死後家督を弟に讓つて江戸へ出る前、大阪方にて滞溜して淨瑠璃を作つて居たことがある、その頃の知識がこれであらう。

私の曰。漆喰に。粉屑をもつてかためたる。水も洩さぬ戀中も。はなれる時節にやはなれやす。されど破れても燒繼あり。女郎買も。新造をすくうちハ人がよし。若者やり手に迄あやまるやつハすれがらし。兎角人ハ。惚られるうちが花。こつちからむしやうやたらに。惚るよふになつてハ相手がなし

と所感を述べて居る、これにて作者の思想も窺へよう。

猪牙船の中に於ける火繩箱へ羽織をはさんで燒穴をつくる滑稽、素見客の醸し出す可笑味はこの作者の他の作品に於ても多分に見られる要素である、寛政七年以來黄表紙に筆をとり出したこの作者は、寛政十年にも滑稽本の作を發表した、そして享和二年には「東海道中膝栗毛」の初

編を刊行して果然江戸文壇の寵兒となつた、その前年本書を初めとして「惠比良濃梅」（本卷所載）「野良玉子」（同上）の作が發表された、これ等諸作に於て既にユーモラスな彼を見出すに何の不可思議もない。

本書は特に肉の描寫が露骨になつて居るが、これはこの作者に限つた事ではない、末期の洒落本の特色である、しかしこの作者によつていよ〳〵助長されて行くことは否めない事實である。

卷末の「靑樓曲少年行」は、本書より前に、唐來參和が「和唐珍解」（天明五年刊、本大系第六卷所載）にて用ゐた表現法である、後編を出す豫告もあるが、未見の書である。

▲惠比良濃梅　原本　縱五寸 横三寸四分

十偏舍一九作　享和元年刊

書名「惠比良濃梅」の「惠比良」は「箙」の通音、箭を盛つて背に負ふ器である、本書の內容が文耕堂作「ひらがな盛衰記」（元文四年四月、竹本座初演）の脫出であることから「ひらがな盛衰記」の外題の割書「逆櫓松 矢箙梅」によつたのであらう。

作者十偏舍一九の傳記は本卷所載「色講釋」の項を參照ありたい。

本書は「ひらがな盛衰記」の構想を洒落本に飜案したものである、梗概は料理茶屋勢揃之事、附り酒代割合之㕝、番場忠太謀生酔事附り横寸賀寸平竭若者㕝、謂里橋神仲滑稽事、梶原源太生捕娼女事附り口舌强勢之㕝、佐々木高綱被抓居事附り娼妓貞節之㕝と目錄に擧げてあるので知られよう。換言すれば、一は番場忠太、姉輪十郎、横寸賀寸平が料理茶屋で一盃飮み元氣をつけて大磯の郭へ出かける、二は忠太の馴染の舞鶴屋へ登る、忠太は馴染の宇治橋があるが他の二人は未定である、席順なればやり梅が寸平の相方となるのであるが、それを十郎に先を越されて盃をさゝれた事から中腹となり十郎と喧嘩をする、それを忠太が仲裁する、三は別な大見せでは鎌倉方の息子株里橋が夜更の座數で番新八重梅や禿を相手に𧩃言を云つて居る、四は又座敷の客は梶原源太、勘當の身で町人の樣に丸腰で郭に入りびたつて居る、深き契りをこめた梅ヶ技との差向で痴話喧嘩をする、五は別に梅ケ技の客に佐々木四郎と云ふのがある、源太に先陣をしてやられて名代をとり、振新をからかつて居る處へ、梅ヶ枝が來て油をしぼられながら金の無心もされると云ふのである。

こゝで云ふ大磯は吉原の假名である、本文に「三方に堀(ほり)をほり。高(たか)へいをつき。左右深田(さゆうふかだ)に

して。前にハ五十間。三きよくの道をひらき。土手八丁をかまへたり」とあるにても知られる、されど作者はこの背景を活寫すべく努力しなかつた、盛衰記、特に梶原源太と佐々木四郎との先陣爭ひを如何に飜案しなほすかにあつた、そこに可笑味を出そうとした、番場忠太、姉輪十郎、横寸賀寸平の登場も、この意圖のもとになされたのである、目錄の前に「魚隣隺翼之圖」といふ新造が附き出しとなる時の樣子を軍陣のことに附會し、又は「作者曰」とあるべきを、「兵書曰」として所感を述べて居るところに作意の一端をも知り得るのである。

なんでもおいらが色おとこ。ィヽャおれだとおもつている。こゝが則女郎買。あそびハやはり遊ぶなれバ啌も誠もあなた任せ。どふでまゝにハならぬ世の中

と遊びに對する態度を現はして居る。

本書には穿ちは尠い、若んばあつても、ユーモア、ナンセンスに覆はれて鋭さは除かれて居る。

【源】これが今。おめへにのませたくすりだ【梅】ヲヤ〱なんざんすへ【源】錦袋圓をのませよふとおもつて。うろたへて。くれんのんさまのあたまを。がみくだいてのませたれな

と云ふ樣に矛盾から出る可笑味に、洒落本ばかりでなく、彼の作品を一貫して居る要素を見出すのである。

▲妓談 卅笑 喜和美多里（かわびたり） 原本 縦五寸一分 横三寸五分

撈柴樵夫作　享和元年刊

書名はまた「妓談 土橋 嘉和美多里」とも書く、「河びたり」の洒落であらう。

作者撈柴樵夫は傳未詳、跋の創山亭主人も亦同じく詳かでない。

刊年は序に辛酉とあるから享和元年とした。

本書は深川土橋の遊里を取材したもので、家木は深川富岡門前東仲町の永木、赤町は仲町、土場瀨は土橋、新皮は新川である樣に假名を使つて居る。

構想は家木堀の場・見通の場、表二階の場、裏坐鋪の場の四項目に分けて展開されて居る。家木堀の自宅へ來て居る自前の妓小いなの家を、妹分の其吉が訪れて、半兵衛との戀になやむ小いなを慰める、小いな思ふ男半兵衛の爲に、半藏と云ふ客から手管で金を取らうとして半藏あてに遣はしたみが半の字違ひで半兵衛の手に入り、半兵衛中ゥ腹になつて小いなのところへ來る、其吉がそれをあやなす、半藏は小いなと諍を起すが小いなの手管にはまつて、今日限り來ないと云ふ怒りもとけ金も出してくれる、半兵衛は其吉から譯は聞いては居ながら、半藏と

小いなの座敷の體を知つて矢張り中ゥ腹で居るが、小いなから眞實を話されて納得すると云ふのである。

本書創作の動機は「予もまた短才の筆頭。勸善帳場の禦となる事不能。唯四方雷名の通公子。隱隧の不虞に備へて。能く於氣をつけなせへし」と云ふ點に見られよう、しかし描くところは眞實性多き土橋の姿である、一方の客を瞞して一方の色客へみつぐ構想は洒落本に於ては常套手段である、しかるに自前の妓が自宅へ戻つての母親との話、同じく自前の妹分の妓が尋ねて來ての會話は一寸尠い取材である、その會話の中に彼女等の生活の一面を穿つと共に本書の發端としての役割を十分果して居る、作者の細い用意を知り得るのである。

本書の手法は、「部屋三味線」（本大系第九卷所載）のお園對お□の會話のそれによる所が多い、該書が本書の家木場の項と類似して居る、そこにこの感を深からしめるのである、末期の深川描寫の洒落本としては佳作に屬する作品である。

コレいくら金魚風にあはれッぽく・めかしても

金魚風とは田螺金魚の作風を云ふのである、同人の傳記は本大系第二卷「妓者呼子鳥」の項を參照ありたい、彼の作風は、心理描寫に秀て居る、「あはれほしく」と云ふのが特に適切で

ある。

▲甲子夜話 原本 縦五寸二分 横三寸七分

梅暮里谷峩作　享和元年刊

書名は甲子の夜の話と云ふだけの意味である。

作者梅暮里谷峩の傳記は本大系第八巻「傾城買二筋道」の項を參照ありたい。跋を書いた直賢木彥は何人か未詳である。

刊年は明記してないが、本書巻末に附いて居る廣告によつて享和元年がある事でわかる。

本書は、吉原を背景にした洒落本である、甲子の夜色客を呼ぶのが習慣で、二階へ色客の集つて來たのを書いた作品である、しかし登場人物を浪花五人男の安野平兵衞、極印千右衞門、雷庄九郎、布袋市右衞門。雁金文七及び寛保二年七月竹本座初演「男作五雁金」に出て來る九州鶴木家の臣、角左衞門等として居る、坐敷の契話、悋氣の爭、牀の睦言、眞の仕打の四項目にわけてある、安野平兵衞と相方奥州、極印千右衞門、相方代々春とが、奥州の坐敷へ集つて女郎買の躰驗談をして居る、話が雷庄九郎が舞鶴屋へ度々行くことに飛んだところへ當の庄九

郎がやつて來た、その話を聽いて居た庄九郎の相方玉葛は庄九郎をとらへて悋氣の爭をする、その最中隣座敷で布袋市右衛門、相方九重の床の睦言が聞えて來る、傾城喜代川は、仲の町から酒に醉つて戻つて來た、野田角右衛門と云ふ客には幇間や番頭新造をして甘くあしらはせ又伊平次と云ふ客には、あまり酩酊して吐きさうだとて躰よく座をはづして雁金文七のところへ出るといふのである。

本書は吉原を背景にしては居るが、その背景を描くことには努力されて居ない、作意が全く坐敷の契話、悋氣の爭、牀の睦言、眞の仕打の描寫に存して居たからである、浪花五人男の登場もさまでの意味を有しない、こゝに作者の創作動機を窺ふのである。

情のねへよふだがこのいろごとゝいふものゝ見きりがわるひとあとへもさきへもめへりがたしだ

或は又

てめへがまたなんとか思つて居るうちわかれ憎くもおもわす逢た時にもあつひさむいのすて言葉くらいわかけてくれよふといふものだ

と云ふあたりに作者の戀愛に對する思想が承知されよう。

錢金つくでワかれたといふ評判があつちやあ男がたゝねへ

とは作者のみならず、きれいな遊びをしようとする程の者の通念であつた。

たしか心はわたくしのであつたけ

思ふ男との間のことを他の客がとやかく云ふたのなら、又ハ爲めにならぬと内所でせく場合には了簡すると云ふ女の意志表示がこれで、田螺金魚以來の心理描寫に秀でた本作者の得意な點である。

跋に云ふ、「直諫ハ愚鹵らしく諷諫は通なり」この通で行くのが作者の描寫態度である。本文二十一頁の十行目の「なんのかまいはないものを」の次へ【波のつ】と入るべきであるが、原本には缺けて居る、今度はその儘にして置いた。

▲言告鳥二篇 廓の櫻　原本　縦六寸一分 横四寸二分

梅暮里谷峩作　享和元年刊

書名は吉原仲の町の櫻をとつたものである。

作者梅暮里谷峩の傳記は本大系第八巻所載「傾城買二筋道」の項を參照ありたい。

刊年は序に酉の春とあり、廣告の辛酉新版の中にも出て居るので享和元年であることは知られる。

本書は同作者の「傾城買言告鳥」(寛政十二年刊、本大系第八卷所載)の二編として發表されたものである、即ち初編に於て「どうやら今から後編をかゝれるような心もちだ」とあるが、その後編が本書となつたのである、既に作者に於ては後編を作るべく心組して居たと見られる。

本書は初幕から四立目まで、三浦の段、異見の段、緣切の段、待伏の段と分れて居る、野立の意地惡の爲めに若紫と別れた助六は揚卷へと心を移した、揚卷も只ならなく思つて寄つて行く、助六に若紫をしてやられた伊久は揚卷を助六からとりあげて、若紫と助六の顏をつぶしてやらうと謀つたが、結局自らつき出されてしまふ、それがために揚卷は主人とは折合が惡くなつた、助六と別れた若紫が心勞で病氣になつた、それを助けるのは揚卷が一時助六と緣切れしてくれるより外にないと、若紫の抱主からの賴で遂に揚卷が助六と別れる、事の理由を知らない助六は揚卷が變心して、伊久のもとへ走つたとばかり考へて、仲の町から戾つて來る揚卷を待伏して居て切りつけると云ふ構想である。

作者は前編に於て勤の外に客に逢ふ面白さを書いた、そして後編に於て悶々たるまゝいろい

ろの忍び合、ふてる遊女の心情を描いたのである。

金の力一點張の伊久に對して、全くの素寒貧の助六を配し、色男を中にはさんで二人の遊女揚卷と若紫の情熱がよく描かれて居る。

【あけ卷】伊久さんおめへさんハきれいな仕打をなんすそりや疫病の神で敵とやらでざんすなんぞといふと金〳〵と金で女郎がかわれるものと思ひなんすからどこへお出なんしても女郎衆にきらわれなんす

揚卷の口を借りて作者の伊久輩に對する反感が吐露されたのである。

【伊】むつとしてよもやにかゝつているうちハ思ひきらうともおもつたがそうきつい事をいわれては壹分一厘でもひかれぬ男の意地請出して嬶にする【揚】からだ斗ハどうともなんし

計らざるところに於て、作者の貞操感念を知るのである。

【揚】硯のうミと鳴戸の海うミといふ字ハひとつでも深ひと淺ひハ客と色男色男がなければ女郎屋はやミ

であるけれ共「掟をおきてゞたて」ねばならぬ、そこに悶々の種が芽える、本書はこゝの描寫が中々手際よく出來て居る。梅暮里谷峩の占據的地歩がこゝにあるのである、

男へ心中たてゝあわぬなどゝいふはそりや高雄薄雲小紫の時代の事とんと今どきはやらぬことだ今でそうはりのつよいのは芝居の女郎ばかり

とは、この作者ばかりが云ふところではない、既に／＼多くの作者の筆にのぼつて居る、全く争へない事實であつたのである。

「いゝへ」おまへかたにすかれるにはいかにも東なまりでなけりやうつらぬ

「介」そのはづよ外へ出れば江戸ことばをつきあふ内へ歸るとかミがたことばのものがおゝいから乞食の狂言といふものでかたミ替りだ

これも亦事實に外ならない、江戸ッ子と云ふ作者の優越感がこゝに出たのである。

▲匂ひ嚢　原本　縦五寸 横三寸六分

塩屋艶二作　享和元年刊

書名は又「匂ひ袋」とも書く、麝香の如き香類を入れた袋からの命名である。

作者塩屋艶二は紫色主と同一人、その傳記は本大系第九卷所載「南門鼠」（寛政十二年刊）の項を參照ありたい。

本書は、附言によつても知られる通り吉原の某樓を背景にした作品である、作者の意圖は、「今世の洒落史を閲るにおすといふもさんすといふも皆〳〵吉原詞とのみ覺えて一樓に限りたる詞を知ず混雜す依て其杜撰を改め其詞を以て何某樓と云ふ叓を喩」さんとしたものである、この何某と云ふのは挿繪の提灯の定紋によつて鷄舌樓「丁字屋」であらうと想ふ、作者はこの動機を一人の遊女戀山を中心に、自惚客の太郎吉、柔和な色男次郎吉との遊びに展開させて居る、卽ち太郎吉の方へ出た戀山は、義理で惚れた振りをすると、太郎吉は自分がいゝ男と思ひ込んで外に色男の來たのも氣が付かず結局冷遇される、次郎吉に出た戀山は、感傷的に惚れて行くほどでもない、されど傍輩衆も評判する男故外の客にせかれて突出さねばならぬ事も出來るが、切に名殘か惜しまれて深く結ばれるに至ると云ふ構想である、卷頭にも作者は「旨趣分傾城之虛實、評論顯標客智愚」と云うて居る、一ト通りの描寫の後に評を加へたところに作者の味噌がある、卷頭にわざ〳〵抽記する心事が思ひ合される。

> 過ぬほと飲おほれぬほどに遊ばゝ何の災かあらんしかれとも其加減の出來ぬか此道のならいなれバ只人の身に相應したる所にて樂しミをなすべし

これ作者の遊に付いての意見である。

同夜に百人も千人も入替り立かはる客なれは毎〱實を盡すへきいはれもなし又いつわり斗り言にてもなけれはいつしか壹人りの客を得てこれに身をまかすへし（中略）緣なくてへいか程心に如在なくおもひ思われしなかも何となくそれなりに成行ものなり

と遊女に諭し

客も遊ひといふ文字をむねとし女郎も勤と言文字をおもひ斗りではつかしきことのなきよふにするをわけ知りとも粹ともいふへし

と道破し得て居るが

よく〱思ひまわす程女郎買といふものハ馬鹿にならにやァ出來ねェものだ

と云ふ結論に到達して居る、以て作者の思想が窺ひ得られよう。

〽人目しのふの草葉にむすぶ　トうた有て　澤村宗十郎　〽三味せんハ藝者のたませいちかいをたてし五大力・筆をくわへて三五大切

は「五大力戀緘」（並木五瓶作、寛政七年正月、都座初演）の科白である、澤村宗十郎は、三代目で、二世澤村宗十郎の次男、明和七年十一月三世宗十郎を襲名した、享和元年三月歿、享年四十九、宗十郎が「五大力」の源五兵衛を演じたのは、寛政七年正月、同十年十月、同十一

年二月、九月の四回ある、最も得意とする一役であつたのだ。

妓樓の言葉遣をそのまゝ描寫し、それを特記した作品には、既に山東京傳作、天明七年刊の「通言總籬」(本大系第六卷所載)がある、本書の作者がこれに注意したのは「通言總籬」の影響もあつたものと思惟されるのである。

▲假廓南諸 比翼紫 原本 縱五寸一分 橫三寸五分

宇田樂庵嬉丸作　享和元年刊

書名は白井權八と傾城小紫の情事を取材したものであるから、目黑不動尊前の比翼塚と小紫とから出た名稱である。

作者宇田樂庵嬉丸の傳は未詳である、江戸の狂歌師であらうと疑はれて居る。

本書は吉原の假宅が品川へ出來たと假定して品川の遊里を背景に、幡隨院長兵衞と白井權八とが高輪の茶屋での遇會、それから二人が宿の遊里へ出かけて玉屋へ登る、權八には小紫と云ふ馴染があるが、小紫に惚れた介市と云ふ男が介之進と云ふ兄と相談して小紫を身請しようと云ふことになつた、それを小紫が權八に話す、權八は先づ介之進次に介市を殺害して小紫と二

人で駈落ちしようと謀むと云ふのを、目黒不動へ參詣した戻りに品川遊里で遊んだ男が夢に見たと云ふ構想が展開されて居るのである。

本書の構想は、源平藤橘等作、安永八年七月肥前座初演「平井權八 幡隨長兵衛 驪山比翼塚」から出て居る、この淨瑠璃は白井(平井)權八と幡隨長兵衛とは年代に相當な差があるが、權八と小紫との情事に長兵衛の俠氣を取合せたものである、黄表紙にも「驪山比翼塚」(勝川春朗畫)といふのが安永九年に發表されて居る、作者はこの人氣を自作にも獲得すべく作意したのである。

遠海の京魚も。此濱に來て。碑を洲先の。ちよんのはなに遺

京魚は鯨で、寛政十年五月一日品川沖で長さ九間一尺高一丈餘(或は六尺八寸と云)のものを突留めたを云ふ、この時その碑が洲崎の辨天境内へでも出來たであらうが未だ見て居ない。

萬迫時ならぬ權八も花街に遊んで、目黒のすゝつこに。舊跡を殘す

目黒不動前の比翼塚がこれである、平井權八、二十四歳にて延寶七年十一月三日、品川に於て處刑された、後人これを弔ふて文政八年冬塚を立てたのである。

【長】(中略)ときに今日ハどちらへおいでなすつた【權】ハイ大師へまいりやした(中略)つれも有やしたが、そんな目黒へ。廻りやした

大師は東京府川崎町にある平間寺厄除弘法大師をいひ、目黒は目黒の不動尊を指す、何れも參詣の序に、或は口實に品川の遊里で遊ぶ者の尠くなかつたことを意味するものである。

艷道通鑑云云

これは增穗殘口の作で享保四年の刊行である、殘口は豐後の人國學に通じ俳諧を善くした、本書も殘口八部書の中の一つであるが、他は神道に關するものである。

本書は構想に重きがあつて穿ちは尠い、しかし時には

すへてこのしゆくのかこかきれ九ッより引こんで七ッにれ出る

等と可成り細い觀察も行はれて居る。

▲月雪二蒲團　原本　縱五寸二分　横三寸六分

醉醒水吉作　享和元年刊

書名は、自叙に於て「人に天遊ありて月に遊ひ雲にあそふ（中略）此里のふたつ蒲團に遊ひては云云」とあるによつて知られよう。

作者醉醒水吉は傳未詳である、跋の蘭奢亭香保留は、通稱を三河屋彌平次、奇南樓、蘭奢亭

薫、蘭麝亭主人と號した。狂名を橘加保留といふ、飯田町で煙草屋を營んで居た、大田蜀山人の門に入つて、狂歌をよくした、文政七年四月二十六日歿、享年五十六、黄表紙、洒落本の作がある。

刊年は自叙の末に重光作噩とある、重光は辛で、作噩は酉の意、共に爾雅にある語である、こゝの辛酉は卽ち享和元年である。

本書は內藤新宿を背景にした作品である、最初春の雪解の甲州街道を往來する人々を描き、次に新宿遊里を取材して居る、金十郎、要介の侍二人が福手屋と云ふ茶屋から他國屋へ行く、金十郎はくら、要介はなかと云ふのが馴染である、くらは金十郎に金の無心をしてあるので厚遇するそこへくらの馴染の新川の酒屋の掛廻り吉五郎が、友人伊三郎と二人で來る、伊三郎は先へ歸る、吉五郎は相當に持てるので居續けをする、そこへ清十郎と云ふくらにとつては眞の間夫がやつて來た、清十郎は、不首尾で他家の居候となつた身分であるのでくらに無心する、くらは金十郎からの金を清十郎に渡してやる、清十郎は又の日を約して歸つてしまつふ、其の跡に一通の文が落ちて居た、それはなつと云ふ清十郎の色女からの手紙で、それによればくらが渡した金は結局はなつの手へ入るのである、これを見てくらは鬼女の樣になつて悲しんだ、

さうして居る間に廻し床に居た吉五郎は徒然のまゝくらの煙草盆の引出しをあけて見ると、もみくちやの文がらがある、讀んで見る、他の客へあてた吉五郎を惡く云つたものである、吉五郎は大いに中ッ腹になつたところへくらが來た、くらが髻をとつてなぐりちらして怒る、他の客（清十郎）の惡口を云ふ、それを金十郎が部屋の外で立聞いて、自分の事を云はれると思つて立腹して飛び込まふとする、そこへ作者が仲裁に出ると云ふ構想である。

作者の創作動機は、新宿の背景を描かんとした事はさりながら、一人の遊女おくらが一夜に三人の客を相手に大活躍をする、戀しい男清十郎故に金箱として如在なくもてなし、吉五郎もまんざら嫌ではないが、それよりももつといゝ清十郎に心中立した事が失敗に終る、清十郎は既に他に女があつて、虻蜂取らずの結果を到來してくらが苦境に落ちつた、それを描かんと努力したのである、構想が込入つた恨がないわけではないが、相當苦心を拂つた跡は見られる、しかし結末に作者が飛び出したのは不手際と云はざるを得ない、作者が作中の人物として登場することは、當時の洒落本には行き詰つた構想の逃避上都合のよいことであるが、やがて一つの流行となつてしまつた事をも物語るのである。

「大せつな金銀を遣ふて氣の保養に來るのじや」とばかり考へて居る武士達は結局厚遇され

る筈はない、又「てへぶあきねへにせへを出すさうだかそれでれかへつて身の爲になるまいからとくとりやうけんを仕なをして女郎かいにでもいつてくれろ」或は又「第一しやうばいをせいゝだしてする事もきらやうめんにしておいてそしてあいだにやあ一ぺんぐらゐれ女郎かいに成りとも芝居なりともいけ」と云ふ親等の言葉は、當時の一般のもつ思想である、作者も矢張りこれに共鳴して居たのである。

今おまへが古人團十郎をおこすと云云

この市川團十郎は四代目である、二代目團十郎の養子で二代目松本幸四郎から寶暦四年十一月四代目團十郎になつた、安永七年二月二十五日歿、享年七十、荒事に秀れて居たのでこゝに引合になつたのである。

本書は背景も構想も當時の洒落本としては先づ取るべき作品であると思ふ。

▲三千之紙屑 原本 縦五寸三分 横三寸七分

うくひす谷白眼作 享和元年刊

書名は外題には「三千之紙屑」と書いてあるが、序の題、巻末の廣告には「道之紙屑」との

る」道に散らばつて居る紙屑ほどの作品といふ謙遜の意である。

刊年は序に「かのとのとりとし」とあるから享和元年である。

作者うくひす谷白眼の傳は未詳である。

本大系に採用した原本は序と挿繪とが木版で他は全部稿本である、序の落欵も後から別に捺印した跡は歴然たるものである、原本の表裝並び外題は何う見てもその當時のものとしか考へられない、本大系第十一卷所載「廓膽競」の採用原本も亦斯の種のものである、（同項を參照ありたい）この現象に對しての考察の結果が（一）、出板すべく彫刻に取りかゝり、初めの方が出來上つた時、何等かの事情のもとに中止となつたため、よぎなくそれを斯うした形式のものとにまとめて置いた、のか或は、（二）、破本があつたのを篤志家が他の完本から不足を補つたのかと云ふことになるのであるが、とにかく採用した原本が全部紙質が同じこと、筆蹟が版行の部分と種本の部分とが類似してゐることから（一）の場合の方が最も妥當と思はれるのである、然しこれは只この一種のみで云々するのであるから絕對とは保し難いのである。

本書は寬政十二年二月廿三日の火事により吉原の郭が全燒したため、假宅が山の家から聖天町、馬道、今戶堀へかけて建てられた、その假宅と新築成つてからの吉原に於ける描寫の洒落

本である、吹矢町の芝居の歸りの客巴丈、利辨、文州の三人が柳橋から猪牙でこん度の假宅へ來る、巴丈は二十四五の息子株、萬事承知して居ても知らぬ風をよそほふ靜かな青年、利辨は巴丈より一つ二つ年若だが諸事知らぬと云ふ事がきらいな男、文州は利辨と同じ年格好だが一體にさばけた面白い質である、結局利辨が冷遇されると云ふ洒落本の型通りの構想である、新築移轉後の吉原の描寫は、三人の客の中では巴丈が一人取材されて居る、移轉に際して馴染の染梅とは別れてしまつて、新にいく風と云ふのと馴染んだが、或日巴丈か行つたとき折惡しく他に客があつた事から互に云ひつのつて喧嘩みたいになるが、それと云ふのも惚れて居ればこそやがて又仲よくなると云ふのである。

芝居から遊里への青年の氣の移り行くも妥當な行き方である、柳橋から舟で堀へさして行く途中、船遊びの藝者や遊女の一團との交渉、バラツク建の假宅の情調、假宅から移轉後の吉原の新宅の雰圍氣も可成りよく描かれて居る。

本書は構想の立て方から一帖二帖にても事足りると想はれるが、三帖の新宅の描寫をつけた事に作者の新手としての得意を感じたであらう、然し全體の構想上からはこの三帖はなくてもよいのである、むしろ統一を缺く恐れが生ずる、觀察も一體に細く行はれて居る。

假宅すべていろ〳〵のふるふすまなどをきうにミぞをつけて敷居かもいへはめる

なぞは、如何に急造なバラックであるかが想像される。

かりたくのはやりうちなそはまれしかふろたづぬる也

女郎の廻しばかりでなく、斯うした非常時には廻し禿さへ出現するとは嬉しい穿ちである。

本ン舞臺まで見物を押出して國大夫か聲すゞしく（中略）若手三枚（高麗屋 条三郎）三津五郎の大當り

こゝで云ふ國大夫は竹本國太夫であらう、若手三枚の名俳優は何れも當時市川高麗藏は、後五代目松本幸四郎で三十七八、岩井条三郎は、後五代目岩井半四郎で二十五六、坂東三津五郎は二十四五であつたのだ、その人氣も推して知られよう。

〔好〕妙〳〵鬼神不識の謀策た ト田舎芝居と通俗ものをよミあわせおするやうにはなして行

田舎芝居は天明七年刊、万象亭作「田舎芝居」（本大系第六巻所載）のことで、その描寫が地方色にあつたため會話が方言であるのを云ひ、通俗ものとは粹書にあらざるものを指すのである、多少田舎芝居に對する反感が見られる。

鳥羽瀨、坂町、多町、小あめ町は何れも假名で土橋、仲町、田町、小網町を云ふのである、後編の廣告も出て居るが刊行されたか否かは疑はしいのである。

▲滑稽 野良の玉子　原本 縦五寸 横三寸五分

十遍舍一九作　享和元年刊

書名は「かへる／＼と野郎の鷄卵じやア有めへし（中略）其名を擧て標題に蒙しむる事。娼妓客を暖て歸すを以て。如是命たるものなり」と自叙に云ふて居るので知られる、又「埜良玉子」とも書く。

作者十遍舍一九の傳記は、本卷所載「色講釋」の項を參照ありたい、「青樓曲」を寄せた霞鳴樓主人の傳は未詳である、書肆鶴屋の主人ではあるまいかと疑ふ人もある。

刊年かのとの酉は享和元年である。

本書の構想は、青黛、定次郎、太助の三人吉原の鷄舌樓へ遊びに行く、青黛は二十七八の何んでも知つた振りをする男で冷遇される、定次郎は二十二三の柔和な男で、相方玉川は嘗ては隣り合て住んだ事のある顏見しりの仲だつたのでその持て方は格別なものである、太助も厚遇されない、青黛に引きづられて遂に面白くなく二人で夜明け前に歸ると云ふのである。

作者も本文の前に、「知つた風の不問物がたりハ初會の一口物に思ハず頬を燒玉子」「聞いた

風の百ものがたりに丑ミつ頃からけへる〳〵と野良の玉子」と記した如く、知つた風、聞いた風をする男の氣障に反感を持つた、それに引かへ、「おとなし風の寐物語にうかれて迷ふ傾城の夜をふかし玉子」とおとなし風の男に好意を寄せた作者の意志表示である、こゝに作者の創作動機が見られる。

田町の水茶屋で知つた振りをする靑黛、妓樓へ上つてから振られ乍らも聞いた風を云ふ靑黛、歸りしなに越中褌を忘れた滑稽を演ずる靑黛の性格が最もよく描かれて居る、定二郎は一ト通り、太助は全く存在を明かにしない、遊女玉川の前生活の一端が描かれて居ることも洒落本としては一寸珍らしい、そして定二郎に昔居住した近所の人々の消息を問ふのも面白い描寫である。滑稽本に近くなるまでの可笑味の盛られた事は、これが一九の作品に見る特色なのである。しかし中には

【靑】アノ炭もミんな客のとこからいくのだわな。今じやァ客もこすくなつて。なじミの女郎や。茶やの歲暮をかねじやァやらねへ。(中略)わづか三兩か五兩がもんで。車につんでひつこませるから。とんたてへそふに見へる。かねでやつちやァ。なんだか人がしらねへからのことよ。(中略)とかくかねを遣れずに。おちを取ことをする客があるから。又そ

の上をいかにやァならねへといふもので。女郎も茶屋も。いまじやァほねがおれるのさと云ふ穿ちもある、只細緻に亘り得なかつたのが、山東京傳や關東米等の作品との異色をなすところである。

▲契情買中 夢之盗汗　原本 縦五寸二分 横三寸七分

梅暮里谷峩作　享和元年刊

書名は本文の第三回の中に「日々わすれねばおもひ出す間もなふ轉寐の非間さへゆるさで結びし夢のいとくるしく盗汗したゝる事のおかしさ思ひあたればさもあらんと其儘小冊に綴り御めにかけ候」によつて知られよう。

作者梅暮里谷峩の傳記は、本大系第八巻所載「傾城買二筋道」の項を參照ありたい。

刊年は本書には只酉の初春とだけしかないが、辛酉の新版廣告に出て居るから、享和元年の辛酉であることがわかる。

本書の構想は、富澤町の古手屋八郎兵衞が仲間の乾七がほしがる品物を賣つてやるのを條件で、自分の馴染で行く吉原の妻琴に遊辜と云ふ客のあつたのを何んな工合か調べさせる、乾七

は氣樂と變名して遊寮の友人と稱して妻琴の氣をひく、妻琴は意地の惡い番頭新造科戸の前もあるので、八郎兵衞を突き出すと云ふ手紙を氣樂に託する、或日八郎兵衞のとこから手紙とそれに添へて一冊の洒落本が屆いた、それには八郎兵衞が突き出されると云ふ夢を見たと云ふことが書いてある、次の日氣樂が來た、少し遲れて八郎兵衞も來た、八郎兵衞は氣樂から受取つた手紙を拾つたと稱して妻琴に難題を云ふ、そこへ氣樂が出て一切が判明する、妻琴は眞實科戸の意地惡からよぎなくしたのであつて極力本意でなかつたことを辯解すると云ふのである。

本書の秀て居るのは全く構想のまとまりにある、八郎兵衞の大丈夫とは思ひ乍ら尙いくらかの不安を妻琴に感じ、それをさぐるに友人氣樂をして芝居をうたせ、妻琴のやつたいたいところを洒落本に書いて送る等中々の出來映である、妻琴も心からではないが惚れた弱みで人前では飛んだ强がりを云ふはかない心事をよく描いて居る。

古着屋の市のたつ富澤町を富樂町と假名して市の樣子を窺はしめたのは面白い思い付きである、洒落本を送つて來、それを讀まして構想の展開をはかる、よく考へた趣向である、手紙を讀んでの展開のしかたは常用される手法であるが、本書のはそれより一歩進んで居る、又腕の彫物を消すのに艾を用るところを煙管の雁首ですつぱ〳〵とのやり方も新しい、こゝらにも

作者の用意の細かさが知られる。

本書の背景描寫に至つては、この作者の他の作品にても然りであるが、吉原に於ける取材であるに拘らず、背景が、あまり生きて居ない、惜しむべき瑕瑾である。

【氣樂】口合にて新内をいふ　お天滿ものとおもわんしよがおまへにこすてられるたら太宰所からとんで死ぬ北野いこゝろがあるならば湯島であらんといわしやんせぬ云々

は、何の新内の文句か未詳だが、當時人口に膾炙されたものであらう。

本書の後編として「妓情返夢解」（本巻所載）が享和二年に刊行された。

▲甲子夜話後編婭意忸思　原本　縦六寸一分　横四寸三分

梅暮里谷峩作　享和二年刊

書名は「藍返し」の洒落、即ち自序にも云ふ通り「染直し」の意であらう。

作者梅暮里谷峩の傳記は本大系第八巻所載「傾城買二筋道」の項を參照ありたい。

刊年の戊初春は廣告によつて享和二年であることは明かである。

本書は享和元年に刊行された「甲子夜話」（本巻所載）の後編であることは外題の上に記して

あるにても知られる、甲子夜話に於て浪花五人男が取材された、その中の「五談之内まづ三談染直」したのが本書なのである、然るに本文は、哥好が人のわるい羅甦紋、市右衞門が念に念を押す紅花染、角左衞門がきいた風俗の武士鼠、伊平次が情に涙程な霰れ紋の四段に分れて居る。羅甦紋は雷庄九郎が玉葛のもとへ來た、玉葛は茶屋からのよんどころない客哥好に出て居た、が庄九郎の來たを聞いてその方へ出てしまふ、哥好はぐづ〳〵と云ひ出したが結局玉葛に突出される、紅花染は布袋市右衞門と九重の仲、九重の田舍の伯父が代官樣の處へ嫁にやると云つて年明間際に迎ひに來た、九重はそんな事は思ひも寄らぬ、が市右衞門にしたとて相手が惡い、こゝに兩人の間に大きな煩悶が生じる、武士鼠は、雁金文七と契りをこめた喜代川、角左衞門に突然身請の話をされる、驚いて文七に相談すべく尋ねさせたが見當らない、いろ〳〵焦つて居るのを角左衞門に氣づかれるが伊平次を引合に出してその場をつくろふ、霰小紋は九重が座敷に獨り市右衞門が居るところへ玉葛が來る、市右衞門は心にもない事ながら九重に愛憎づかしを云ふて何とか思ひ切らさせ田舍へ行く樣に取計つてくれと玉葛に賴む、一方庄九郎がところでは九重が實は私は田舍に從弟同士の云ひ交した人がある、市右衞門とはあの樣な約束までしたがそれは勤の上のこと切れるようにしてくれと云つて座を立つてしまふ、喜代川の名

代座敷では、角左衛門に請出されると云ふ喜代川を雁金文七が責めて居る、折ふし伊平治が呼ぶ故喜代川は出て行く跡に文七宛の書置が殘されて居た、そこへ伊平治が志にて旅用の金を文七、市右衛門・喜代川、九重に與へて駈落ちさせようとするといふ構想である。

本書は浪花五人男の面々が苦境に落ちいつたところを、伊平治の働きにて救はれると云ふのであつて、構想に見るべきところは尠い、玉葛が茶屋から頼まれた客をも意地の爲めに突き出す點や、市右衛門九重の二人が伯父の出現によつて燃える樣な戀を理性で處理せねばならぬいきさつに興味がある、「御代官樣のとこへいきやァ玉のこしだァ公事にやァうら達までが利方だァ」と主張する田舍の伯父に對して「其くらゐおちさんがほをなんすなら此やうな身になるときくらされぬ人かなんそではあるめへし多勢人もつかふくらゐな身代でいながらどふかしやうもありそうなものでおす其時はしらぬかほをして居て今になつて何も其樣なことをおいひなんすことはありそうもねへものでおす」と逆襲する九重の言葉に一しほの氣慨を感ぜしめられる。「親達のために身をうるおまへは孝行もの身代もよいそうじやに其時はしらぬかほして今になつて引とろうとはあんまり手前勝手じやそのうへ手前でもおく事か代官とやらへやつて公事のときのたしや平ぜい威をふるおふといふ心じやあろうが道がちがふておるとんとむちやじや」

と云ふ伊平治の言葉に作者の氣持を見出し得る、伊平治は作者の代辯者としての存在である。萬事を金で行く者、その特權階級に迎合する者、自由戀愛に生きようとする者の心事が可成りよく描寫されて居る、初編の「甲子夜話」よりは遙かに出色の作品である。

▲商内神　原本　縱五寸二分 横三寸七分

十偏舍一九作　享和元年刊

書名は靏鳴樓の主人の序に「賣るも色。買うも色。時の相場の錢次第。小判のいびつ三郎か三分の晝子二朱の宮。商内神と題したる」や、作者自身、本書を讀む人が「若九牛が一毛も。好士これを得る事あらば。それこそ作者の海老をもつて。鯛をつるにひとしからんと。取あへず商内神と表題」したと云ふによつて知られる。

作者十偏舍一九の傳記は本卷所載「色講釋」の項を參照ありたい。序を書いた靏鳴樓のあるじはよく一九の作品には序や跋を寄せて居るが傳は未詳である。

本書は吉原を背景に描いた作品である、内容は商内神の外題にふさはしく、當座帳、大福帳、金銀出入帳と云ふ項目があるが、構想は、太九郎、權七、里三郎の三人が弔歸りに吉原の晝見

世で遊ふ、晝だけの筈であつたが、一寸持てそうな毛振りを見て夜まで居續けと定める、大きい遊の通を振りまいた太九郎はまんまと相方道しのゝ計略にかゝつて、色客のために座敷まで貰はれてしまつた、色客と云ふのは未だ裏に來た吉三郎と云ふ二十三の青年だが、道しの方からのぼせて厚遇する、太九郎に權七は惡しくされ里三郎は持てた、遂に誰が居續けようと云ひ出したゞの、あの勘定は誰が拂つたのと喧嘩して歸る、吉三郎は道しのゝしぐさにいゝ氣になつて居たが、煙草盆の抽出しに蛙の脊中に與七と書いた呪があつた事から、腹を立てゝ歸ると云ひ出したが、道しのがまた眞情を吐露したので居續けると云ふのである。

作者は自序にて「今年。差禮の骨髄を出して。少しく下情を賣るに至る。されど。いまだ取付身上うのしミつたれにして。代呂ものいたつて麁末なるも、胸中の基手乏しき故なり」と粗雜な描寫を自任して居る、これは彼の性格が到底山東京傳の様に緻密な觀察が出來ないのである、荒い描寫であるから勢ひ穿ちに代はる滑稽をもつて行かねばならなかつた、三人の弔歸りの客が割前を爭ふ點などは「東海道中膝栗毛」の彌次郎兵衛喜多八と性格の類似點を多分に持つて居る、本書の刊行された享和二年には「膝栗毛」も發表されたのである、洒落本から滑稽本へとの展開の徑路をはつきりと把握も出來よう。

初會惚れした道しのが、吉三郎の心を如何にして永く捕へて置かうかと苦心する氣持はいぢらしい感じがする、作者もこゝに本書の中心を置いて居る、弔歸りの三人客も、突然後に出る吉三郎の友人風水も刺身のつまの役割である、中にも風水の出場はなくてもよいである。

弔歸りの客が妓樓へ上ることは緣起直しと云つて酒を飲むのと等しいことで、當時行はれて居たものと見えて、川柳等にはこれを詠んだ句が可成りある、薄倖先生作「遊僊窟烟之花」（本大系第九卷所載、寬政七年頃刊）の中にも、弔歸りの二人連が弔で貰つた强食を、遊女等の前へ落して大笑となる描寫があるが、一九もこゝらからの思ひ付きで取材したのであらう。

今戸の煙にハ。胸の火をくらべ。中田甫の蛙に。腸を斷の思ひをなす

今戸は山谷堀から北、隅田川西岸一帶のところを云ふ、こゝでは今戸燒と稱する陶器を燒く煙を云ひ、中田甫は吉原から東方に當つた一面の田甫を云ふ、今の千束町三丁目邊を云ふのである。

せかいハまじりミせながら、しろものゝ仕入手あつくミへて。大ミせにおとらぬあきなひ

まじりみせは、半籬の店を云ふ、大籬の半分の意である、弔歸りの者が寄らうと云ふのであるから丁度格好な店である。

藏の壁にかいてある。親玉がよこむきのつらといふ。やせこけた親仁よ

この親玉は市川團十郎であるか、當時では五代目團十郎が寛政三年悴海老藏に團十郎（六代目）を讓り、自分は鰕藏と改名したが、六代目は寛政十一年五月十三日二十二歳で歿した。七代目團十郎は未だ若年である、よつてこの親玉は五代目と想はれるのである。

本書の後編を出す樣な事を云つて居るが、發表されないらしい。

▲穴可至子　原本 縱五寸二分 横三寸七分

富久亭作　享和二年刊

書名は「あなかしこ」の洒落である、これは題簽にあるのであるが、內題には「手管早算獨稽古」とある、序及び跋にても知られる通り、傾城買の早算を著述し、これにて獨習の便を得られると云ふ意である、本書によつて傾城買の仕方が覺えられると云ふ作者の自負である。

作者富久亭は三笑と云ふ、富久亭を福亭とも書く、通稱を森貞雄、牛込で手習師匠をして居たと云ふ、式亭三馬の門人となつて三笑と號したのである、享和元年刊「京鹿子拟其後從夫道成寺」（子興畫）、享和三年刊「美濃近江盛衰榮枯果報寐物語」（歌川豐廣畫）等の黄表紙の作がある、自序の末に「江戶

ツ子述」とし正銘の印記があるが、餘程自慢であつたと見える。跋を書いた如柳は、嘯風亭と號した狂歌師、通稱を南邊平藏、大阪阿波産堀の人と云ふ。

本書は吉原を背景にした洒落本である、新、藤、鉄、の三人の男が吉原の桝屋と云ふのへ上つた、種々洒落事酒事があつて床へ廻る。束吉の相方は愁野と云ふのである、愁野初會惚をする、が新は洒落であしらふので愁野は氣が氣でなくとんだ口舌となる、新には、笑顔と云ふ相方、少し酒が過ぎて寐入つてしまつた、笑顔は三味線や琴を彈いて徒然を慰めて居る、目を醒してからも氣障でない男故一トし通りの待遇を受ける、鉄の相方は腹橘と云ふので、鉄の方が前から首たけ惚れて居る女である、のに腹橘の方で鉄の鬪いた風に反感を抱いて手非道く鉄を振ると云ふ構想である。

本書の目錄にも、新、藤、鉄の人物を、初心、郭なれし、鬪いた風の男と明記して居る、作者はこの三人の男と、遊女愁野、笑顔、腹橘の、泣、笑、怒の性格描寫を行はんと努めたのである、上出來とは云はれないが先づ作者の動機は達せられて居よう、郭內の素見から、桝屋へ決定して上るまでに、吉原と云ふ背景が描寫されて居る、情調も出て居る方である、纏つた作品と云つてもよからうと思ふ。

【鉄】（中畧）向ふから來る赤ィ三升の桃燈は團十良う茶やても出來たかの【新】恐レた事をいふぜアリヤア堀のてうちんたよ

知つた振りをする鉄が、堀の船宿の三升の紋所の桃燈を見て團十郎茶屋の出現かと馬脚を現はす、氣障に對する作者の制裁が、作者自身の通のひけらかしともなつて居る。

【しん】ホンニ傳吉もあすこを仕廻つてこつちへ出ると聞たつけあんなからせん人がけんはんへまじるから吉原藝者の評判がわりい五六年跡の燈籠に揚屋町て清久か娘のお条が河東ぶしてあミ笠や松の內を踊た時分ハ俄たつけ【東】そふ〳〵しかも三軒町の八百屋にたのまれて駒かたからすハ町のむすこ達のすけにでた年たつけ

等も同じく作者が得意になつて居る、三軒町は淺草の三軒町である、駒形や諏訪町の息子達が俄の助に頼まれて出たと云ふのも中〻得難い資料である。

【藤】新公とハねて居てはなされるのおれ一人ハはなれて俊寛といふ物だ【鉄】できずとも無事だあれかくるととんとはなしが有からぢやまになる【ち】きつい圓治郎だね

平清盛の爲めに鬼界島に流された俊寛僧都の洒落と、圓次郎は、山東京傳の黄表紙「江戸生艶氣樺燒」の主人公自惚客の名から自惚を云ふ者の代名詞となり、洒落本には頻繁に出て來る。

【東】なんだと天文台のこんてん木を見るやうにあじにくゝつて迷せるの

江戸の天文台は延享四年初めて神田佐久間町に建ち、後牛込藁店へ移り、天明二年三度浅草片町に移轉し明治二年に廢止された、こんてん木は渾天儀でくる〳〵廻轉して天體を測量する器械であるからこゝへ引合に出されたのである。

【ち】ホン＝此中桐屋で豐高さんかお見せなんした夕化粧といふめりやすを御聞なんしたか

豐高はこの前文にて京橋に居住した三味彈であつたことは知られる、夕化粧は、何年代に出來たか未詳である、

廣告には本書の後編「跡著錦」と「辰巳妓張」の豫告があるが、未見の書である。

▲祇園祭挑燈藏　原本　縱六寸 横四寸一分

蘭奢亭香保留作　享和二年刊

書名は祇園會の挑燈に忠臣藏をかけた洒落である、本書に取材された品川遊里に於ては、「六月ゝ七日より十九日迄祇園會にてとうろう兩かゝにみちて晝のごとし竹縄のすゞミ茶見世殊のほかにきやかなり」(本文)と云ふて居る通りである、こゝから名付られたのである、竹縄

は高輪の假名である。又「祇園會灯（挑）燈藏」とも書く。

作者蘭奢亭香保留の傳記は本卷所載「二蒲團」の項を參照ありたい。跋を書いた酒宴齋水吉は本卷所載「二蒲團」の作者醉醒水吉と同一人であるが傳は未詳である。水遊亭船主も同じく傳未詳。

本書は書名の「挑燈藏」によつても窺はれるが、「假名手本忠臣藏」（竹田出雲等作、寬延元年八月、竹本座初演）の構想をとつたものである。しかし、本書刊行の前年に出版された「仇手本」（本卷所載、小金厚丸作）及びこの後編「通神戲」（享和二年刊）ほど原作に忠實に飜案されては居ない、卽ち內容は序幕、館の奧向、二立目鶴ヶ岡馴染、三立目裏家堪難、大詰遊里出會に分けられて居り、そして、七段目までゝ終つて居る。「仇手本」と本書との比較を見ると「仇手本」は構想上の類似に意を注いで居る、如何に構想を現實に當てはめようかとの努力が「仇手本」の特色である、故に構想以外に何物もとり得られない作品である、然るに本書はこれと趣を異にして、居る、卽ち、構想の模倣は「仇手本」より遙かに幼稚である、が「仇手本」に落されて居る、背景や情緖が可成り描寫されて居る、然しこの描寫とて推賞に足るものではないが、「仇手本」に比較した場合にはの問題である。

序幕、館の奥向に於て女中共が役者評判記を中にそれ〳〵贔負役者の肩を持ち合ひて嬉しがる樣子と、三立目の裏家堪難の下層階級の生活樣式の一端の描寫、大詰遊里出會の茶番で客をかく面白さが、見るべきところであらう。作者の本書創作の動機は、南驛——品川遊里の描寫にあつた事は言ふまでもないが、斧九太夫、鷺坂伴内の兩人を作者の所謂「芝の館の新五左衛門」に見たて、品川通ひの客の一つの典型を描かんとしたのであらう。

　役者評判記を出しての名題役者の噂さは、當時何の階級に於ても深い關心事であつたが、女子にとつては最も濃厚であつたのである、この一面を描くことも矢張り作者自身にも感興を涌したものである、進んで優越感をも抱いたであらう、書かれた當時の役者共は、中車は三代目市川八百藏、訥子は三代目澤村宗十郎、本文になくなつたと云ふのは、享和元年三月廿七日歿（享年四十九、淺草誓願寺中受用院に葬る）を指すのである、橘屋は、市川八百藏の家號、源之助は、三代目澤村宗十郎の長男、四代目宗十郎の幼名、（文化八年十一月四代目相續）粂三は、五代目岩井半四郎の幼名、（文化元年五代目相續）米三は、元祖松本米三郎、富三は瀨川富三郎、瀧野屋は、二代目市川門之助の伜市川男女藏歟、市江は四代目市川團藏、荒九郎は市川荒五郎、三津五郎は三代目坂東三津五郎、雛介は二代目嵐雛介、團十郎は七代目團十郎、新車は二代目

市川門之助、三八は、阪東三八、初代の弟子二代目歟、友藏は、二代目市川友藏、高麗藏は、松本幸四郎の幼名であるが、五代目か六代目か判然しない、と云ふのは、五代目は享和元年十一月に市川高麗藏から改名して居るので、本書がそれ前の著作とすれば五代目となり、それ以後のものとすれば六代目となるのである、男女藏は、市川男女藏、二代目市川門之助の長男、羽左衛門は、十代目市村羽左衛門であらう。

館の女中等が宿から來た薩摩芋に舌鼓を打つ事が記されて居るが、或る古老の伯母が大奥の女中をして居る頃宿下りの土産にはきまつて芋を持つて行たと云ふ話をその古老から直接聞いて居る、うまいものでも日頃食べつけて居ればさほどに思はず斯るものも却て珍味として迎へられたのである、何でもない描寫だが今から見れば得難い資料の一つとなつたのである。

▲起承轉合　原本　縦四寸九分 横三寸五分

十偏舍一九作　享和二年刊

書名は詩法の起、承、轉、合（又は結）を本文の項目の標に用ゐたのをとつて名付けたものである、この事は作者が自序に於て細々と述べて居るところである。

作者十偏一九の傳記は本卷所載「色講釋」の項を參照ありたい。序を書いた白玉亭主人の傳は未詳である

本書の構想は五十餘りの夜興と廿ばかりの仁三郎が一緒に吉原の馴染のところへ行つた、然るに夜興は間もなく家からの使ひで用が出來て藏前まで行つた、其の留守に、仁三郎は夜興の相方唐松の座敷に居つた、と云ふのは仁三郎の相方綾衣は病氣で臥して居たところへ仁三郎が來たのであるから急にその部屋をとりかたづけて居たのである、唐松は仁三郎に思を寄せて居た、そしてこの機會に希望を達した、こゝへ夜興が戻つて來た、夜興が立腹して大騷ぎとなつた、又これが新造の話で綾衣にも知れた、綾衣も怒り出した、仁三郎は何でもないと極力否定したが綾衣は中々承知しない、遂に仁三郎も中ッ腹となつて歸らうとする、そこで惚れた弱みのある綾衣がまけて引きとめると云ふのである。

本書の構想は可成纏つて居る方である、作者の意を注いだのはこれを起承轉合の下に展開させたところにある、自序に於ても一娼妓俠客を抓んとするに。食言か好意か何にも爲矣。惚たといふを起句にして互に欵待仇惚に。懷いたけを懸泉。是則承句なり。其附會の懸想か。口舌の上の斷操れ。顚倒轉句にして。又配偶の合句あり。各床に淫事を押」と得意になつて

居るのである。

本書の中で最もうまいと思はれるのは、唐松と仁三郎の交渉とそれが徐々に露顯して行く描寫である、唐松、仁三郎、綾衣の三人の性格はよく描き分けてある、吉原に於ては、馴染のある客が他の遊女に關係した場合には制裁を受ける事になつて居た、綾衣が「このことを內證へそふ申いして。唐まつさんだとつてたゞれおきいせん（中略）おめへさんも。ふたゝびこけへおいでなんすこたァ。できへせんよふにして。おめにかけいす」といふだけの事は出來たのである、そうした危險を一途に思ひつめて犯して行く唐松、その唐松に押されて合流する意志の弱い仁三郎を描き、綾衣の病人を配した點は行き屆いた用意さである。

作者は本書にも可笑味を出すことを忘れない、夜興の友人流行が唐松の部屋へ來て唐松が手紙を書くのを嘲弄して居るところへ、歌川と云ふ新造が客から貰つた手紙を讀んで貰ひに來る流行がそれを見るとさつぱり要領を得ない、實はその客が同時に二本の手紙を書いて中身を間違へたのだと云ふ矛盾や、松山と云ふ遊女が部屋をあけたのを「まよひ子の松山やァイ」と呼んで歩く志京の馬鹿氣たことを取り入れて居る、一時もナンセンスから離れることの出來ない作者の氣持がよく表現されて居る、滑稽本の「東海道中膝栗毛」の初版も本年に刊行されていよい

九が滑稽本の世界での活躍が期待されるに至つた時である、洒落本の內容にもその要素が多分なのはいなめない、むしろ洒落本から滑稽本へと展開した一九なので當然の現象でもある。

▲夢汗後篇 妓情返夢解　原本　縱六寸二分 横四寸三分

梅暮里谷峩作　享和二年刊

本書は享和元年に刊行された「契情買中夢之盗汗」の後編である、それで斯く名付けたのであらう作者梅暮里谷峩の傳記は本大系第八巻所載「傾城買二筋道」の項を參照ありたい。

刊年は只戌のはつ春とのみあるが、享和二年の戌であることは疑ふ餘地がない。

本書の構想は、前編に於て八郎兵衞と深い契りをこめた妻琴は遂に八郎兵衞の子を宿すに至つた、然しそれを八郎兵衞の子として發表するには今の八郎兵衞の身にとつてはあまりに多くの物入りとなる、思案にくれた妻琴は番頭新造科戸のすゝめもあつたので、その子を他の客になすりつけて一ト先づ身二つにならうとする、秀我と云ふ格好なお客があつた、しかしそれは實名彌兵衞と云ふ八郎兵衞の大嫌ひな知人である、彌兵衞が金の力で、意地に妻琴か腕へ彫つた八郎兵衞の名を消させてしまふ、次に八郎兵衞が來てこの話を聞いて大に立腹したが、何

もかも八郎兵衞の身のためを思つての結果と分つて、八郎兵衞も自分の力で始末の出來ない不甲斐ない我身を恥ぢて、身重な妻琴の世話を新造粂に賴むと云ふのである、この構想の展開の中に八郎兵衞の前の色、藝者のお富が妻琴のところへ押かけて來て大いにもめる夢を、八郎兵衞、氣樂、妻琴が同時に見ると云ふ筋が加味されて居る。

八郎兵衞、氣樂、妻琴、科戸、お富、彌兵衞とそれ〴〵性格描寫は可成りよくなされて居る。作者が最も力を入れたのは、洒落本には珍らしい遊女の姫嫉、それの處置に惱み、その上もしやと思ふ前の女との關係、意地惡な科戸の仕打、何も思ふ男故と嫌な男への屈服に悶えぬく妻琴が描寫である。沈み勝ちな取材だけに、騷いでばかり居る氣樂に些か氣棄したものか、

【氣】わつちもこんなにミへてもまたしんミの所ハしんミにせうちしてゐるよおもしろくもねへむだいふもむかしにかわる八さんの身のうへおもひまわせハむねかいつはいになつてむだ所でもねへかおめへかたか日にましぐちになるところえおれまでがそのけしきをミせたら淚のたへまもあるめへとせめてハおめへかたの氣をひきたてたく心に思ハぬ口むだこと實のねへものとさけすんでくんなさんな

と辯解して居る。お富が押しかけてくる夢の一件も、全然なくとも構想上には大きい變化は

ないが、科戸の底意地の悪い女、妻琴のまさかと思ふ不安から煩悶を增さしめる効果價値は大いなるもので、この意味に於ては相當な役割を演じて居るのである、然しこのお富については作者多くは語らない、八郎兵衞もお富を嫌ふどころでなく、大いに愛して居た方であつたが、お富の母親がよくない女であつたのでよぎなく切れたと云ふて居る、或著がお富にけしかけて妻琴がお富から八郎兵衞を横取りしたのだと考へせしめて、押しかけてくることゝなつたとして居る、そして「作者曰此おとゞ何者といふことをしらず諸君子察しを待のみ」と註記して居る、こゝに想ふに、これは田螺金魚作、安永五年刊「妓者呼子鳥」(本大系第二卷所載)に出て來るお豐ではあるまいか、妻琴が「妓者呼子鳥」のお富と符合する箇所や、其他の人物にも類似點が多く、梅暮里谷峩が田螺金魚の心理描寫の系統を引いて居る事を綜合して考へると、この疑ひが一層深くなるのである,

前編の「夢之盜汗」と云ひ後編の本書と云ひ、谷峩の作品中先づ傑作の部に入れ得るものと信ずるのである。

▲青樓奇談狐竇這入(せいろうきだんきつねのあなはいり)　原本　縱五寸一分　横三寸七分

十偏舍一九作　享和二年刊

書名は青樓に關係ある物事をすべて狐の社會の事にたとへ(序)、その狐の穴に入つて穿てる書と云ふ意味を、本文中に王子稻荷の出現ある事に關聯して斯く名付けたものであらう。

作者十遍舍一九の傳記は本卷所載「色講釋」の項を參照ありたい。序を書いた、菊河亭主人はカゲユキの印記があるが傳未詳である。跋を書いた白銀臺一麻呂は內新好の別號である、その傳記は本大系第六卷所載「一目土堤」の項を參照ありたい。

本書の構想は、王子稻荷が、日頃信仰して居る吉太郎の夢枕に立つて、郭通ひを止めるようにお告げになる、その託宣を畏みていよ〳〵今日一日で遊び了ひにしようと思つて、馴染の三浦屋の玉の尾と云ふ遊女のところへ行く、丁度折よく若い者が臺の物を出すのを忘れたをしほに、玉の尾のすがりとめるのも聞き入れず手づよく別れて歸る、玉の尾にはまた權七と云ふ客があつたが氣障な男なので厚遇はしなかつた、玉の尾は深く言ひ交はした吉太郎をはなしたくなく、その悲しさのあまりその儘にしがたく文を吉太郎に送つて心のたけを打ち明けた、その手紙を見た吉太郎はまた煩惱の心が起きて玉の尾のところへ出かけて、再び迷夢に耽つて居ると王子稻荷がまた夢枕に立つて、夢中になるのはよせとお告げになるので早速歸宅すると云ふ

のである。
　本書は吉原を背景にした作品であるが、この作者の他の作品に見られると同じく、觀察が粗略であつて勢ひあらい描寫であるため、背景は生きて居ないのである、引いて情調も纖かでない、矢張り一九特有の滑稽に本書の異色を見るのである、いくら夢に神のお告げがあつたからとて、吉太郎が深く契つた女とあまりにも簡單に別れて歸り、また一本の文で縒りを戻してまた會ひ再び夢のお告げで本心へかへると云ふ輕卒な、薄ッぺらな信仰、態度の可笑味は、さりながら、玉の尾が戀しい男吉太郎の惡口を云つた權七を手非道くやつつける、權七が怒る中へ染里といふ遊女が仲へ入つて、この前吉太郎が權七の惡口を云つた時にも玉の尾が腹をたてゝ吉太郎をこらしめた事があつたと嘘言をはいても、それとは氣附かず、獨り自惚れる權七が本書ナンセンスの源泉をなして居る、そして權七に追從する權七のお供八兵衛や茶屋の男まで玉にの尾言ひこめられるのがまた可笑しい。
　そんならその客人の。きげんのなをるよふにとつて。溝店とやらの。お祖師さまへ。ぐれんがけにいきなんしたといふ事ざんす
溝店は又土富店とも書く、淺草永住町にあり、お祖師樣とは長遠寺のことである。

本書卷末の廣告には「青樓日照雨」を後編として享和三年に出版する由を記して居るが、未見の書である。

▲倡客眞話傳授之卷　廓意氣地　原本　縱六寸　横四寸三分

十返舍一九作　享和二年刊

書名は郭に於け遊女の意氣地を描いたものと云ふ意であらう。

作者十返舍一九の傳記は本卷所載「色講釋」の項を參照ありたい。序を書いた鯛糸依は傳未詳。

本書は、江戸の青年伊三郎が遊の不首尾で下總の片田舍へ預けられた、その配所の近くに里見家の浪人の未亡人おやをと娘おなミと未亡人の弟太郎作とがわびしい生活を營んで居た、おやをは病氣になつて臥して居る、弟太郎作はならず者となつて家の邪魔になるばかりである、伊三郎は娘のお浪に心を寄せ乍ら何くれと深切にしてくれる、やがて母親も死んだ、伊三郎はお浪をつれて江戸へ戻り妻として迎へた、こゝにまたおやをの夫が病氣になつた時醫料の資にもと姉娘おいそは吉原へ身を捨てゝ今は舞鶴屋の花園と云ふ呼び出し女郎として全盛を極めて居る、江戸へ戻つた伊三郎はこの姉に會ひに行つた、しかしそれが病みつきとなつて遂に入りび

たる様になる、母親はその遊女花園が嫁のお浪の姉とは知らず、又我子伊三郎の惡いことも思はず只々遊女の惡口ばかり云ふ、お浪も夫伊三郎に母の心配をも中傳へて郭ぐるひを止めさせようと考へはするが、女の悋氣と云はれもしようかとこらへて居るので病氣になる、遂に思ひあまつて姉花園のところへ一部始終を書いてやる、花園はこれを見て一切の事がわかる、花園には其夕と云ふ客があつたが伊三郎との仲が出來てから其夕を袖にして居た、外の遊女等の取計ひでその其夕が來た、また伊三郎も來合せた、その機會に伊三郎を突出さうとしたが、伊三郎がその面當てに身代あるたけ仲の町で遊ぶと云ふ一言に、妹のことを思つて妹から斯う云ふて來たとその手紙を見せる、伊三郎もすまぬ氣持ちになつた、いよ／＼別れの名殘と云ふ夢の中にお浪が來て、かき口說く姿を二人共見ると云ふ構想である。

作者は凡例綱目の中に

此書の發る所ハ。傾城虎の卷、二筋ホ、、、糟粕を振つて書。故に文花の其倣傚するに等し

と云ふて居る。「傾城虎の卷」は安永七年刊、田螺金魚作「當世虎の卷」（本大系第三卷所載）「二筋道」は寬政十年刊、梅暮里谷峩作「傾城買二筋道」（本大系第八卷所載）である。金魚、

谷蓑と受けつがれた心理描寫の態度を一九が試みたのが本書なのである、一九は細かな描寫は出來ない、荒つぽい觀察が粗雜な表現になり勝ちな一九の作品は、本書の如き心理描寫の作品に於ても矢張り人情の細緻な點は寫し得ないのである、心理描寫の點ではまだ〳〵金魚や谷蓑の比ではないと思ふ。

本書の序に「於靑樓曲哉。賓識ありて譯知りなしと盡譯を知つて竅をいふは可也。不知者ハ牽痕穴をいふ。是適に穿鑿の罪の甚數也」と尙、「十返舍が草稿を閱するに、其穴を書す其譯をいふ。仍而自花實の餘情蘊積なり。且これを熟察せば。前禍を覩て其後に。誡を殘する文あるを以て。此に得る所大なり」と推賞として居る、これは穿ちを行はない否行へない作者を辯解したものである。

本書作品の優劣は別にして、一九が谷蓑の作風に追從した事は、酒落本が人情本へと展開する情勢を一層助長せしたものと認めるのである。

▲婦足䆣　原本　縱五寸三分　橫三寸七分

成三樓主人作　享和二年刊

書名は妓樓に於ける二人禿の洒落である。
作者成三樓主人の傳記は本大系第九巻所載「郭數可佳妓」の項を參照ありたい。
刊年は本書にはたゞ戌の春とだけあるが他の廣告によつて享和二年と云ふことは知られる。
本書の構想は戸羽屋の遊女月汐に馴染で來た志厚と云ふ客が、或日戸羽屋を出たまゝ家へも戻らず姿を消してしまつた、家でも心當りを探したが見當らない、遊女月汐も深く契つた客ではあつたが、其後名を唉川と改めまさか生きては居まい、不慮の死でもとげたものと思ひ、志厚に似かよつた兆雅と云ふ客と契るに至つた、こゝにまた大坂方の商人薄情と云ふ男が唉川のところへ來た、薄情は唉川に氣を寄せて通つて來て居たのである、今度いよ〳〵身請けすると云ふことになつた、この薄情の居候に磯次郎と云ふのが今夜供に連れられて來て居る、薄情は唉川の嬉しそうな返事を聞いて、喜んで酒を過しぐつすり寐入つて居る、その機會に唉川と磯次郎とが話をして居る中、唉川には磯次郎が志厚であり磯次郎には唉川が月汐であることが感づかれてまた昔の氣になり駈落ちを相談すると云ふのである。
本書は目次によると短夜の月、打解し雪、枯木に花、散失る紅葉の四項目に分れて居るが、本文は枯木に花の一項が缺けて居る、原本の丁數も、一丁から三十丁まであり、三十一丁目が

三十一ノ五とあり、とんで三十六丁に及び、つゞいてそれから四十四丁表が大尾となつて居るのである、この三十一ノ五から六へ飛んだ跡と、二十丁の裏に第三枯木の華、第四散失る紅葉とつゞけてある點とが疑を生ぜしめるのである、本書は刊行直ちに發禁の厄に會つたと云はれる書であるから、或はそんな關係で除かれてしまつたのかも知れない、目次の解說書きによつても、この疑ひがいよ〳〵濃厚ならしめられるのである。

本書の構想は相當纏つて居る，然し完結しては居ない、昔馴染の二人が駈落ちしようと云ふ止めは、作者にとつてはよりよき逃避の方法であつたらう、本書の一項々々を注意して見ても可成り細かい用意が施されて居るに氣付く、占の本を讀んで行く中に、馴染客の異變を描寫して行く手法、喚川が自ら兆雅の名を自分の腕に彫つて一面それにて兆雅の氣を引くに便じ、一面心安く消してしまつて薄情の氣持ちをとらへ、兆雅には心配はないといふ手管、主客が寐て居る枕元で、昔馴染と知りつゝ他に氣兼して相互の氣持を述べ會ふ描寫は、當時の洒落本には一寸見られない洗錬さである。

作者は終結を駈落ちとし、それを後編に譲つた、その後編は文化年間に刊行されたと云ふが文政七年にも一種出版された、それには狂訓亭爲永春水が序を書いて居る、卽一彼成三樓主人（かのせいさんろうしゆじん）

こそ穴知ならぬわけしりにて能倡家の塩梅を察し傾城と契情の差別をあらわす婦足髷（中本）歳久世に知られたる妙作を不斷したふ販元の極意は利潤の機にて再度新板の晴衣裳に序ばかり記と頼れて假宅以來細見も覗て見ざる老こみ作者麻疹も兩度の流行に後れし筆を紙上にはしらせ亦三度目の彫刻にいさゝか兩子（成三樓文屋）を賞するのみ」とその一部がこれである、これを以て相當好評を博した事は承知出來るのである。

見過三世相

見通三世相序

黄檗隠元禪師。世界を大戯場といつし。怎三味線入の禪の勤なる歟いかん。實も世の中の形勢芝居なり狂言なり。一とせの早笛寄大皷の大晦日。利に走る辻打の平舞臺に生を受て。サガリハの大臣柱となりテンツ、〳〵の賤となるも。咸唯造物者の役割替名の次第にして。豈馬の後足を恨ん乎。然ハ郷に門人等が述したる翁曾我の一番目に二番めの後を出して。頗男女後門を抓るの戒とせんにハ。是ぞ近道の濟板ハなけん。されバ莊周性惡の敵役縫ぐるこの棒をもつて。朱子性善の立役を擲則。天の昭覽罪があたるといはめやお龜や。芥溜のかげてちらと見そめまいら

せ候のみ反古をもて。正本氏の員三十六葉の費をなすに似たれと。此世話幕勸善懲元表方の需に應じて。名代を三世相と出すも。筆のあばれ丹前墨のすり鉦入に。鳴物の雷序とす。嗚呼日覆よりおりる龍燈のよび糸に。兩手を組で倩惟は。釋迦四十九年の狂言は。三界萬靈生死流轉の變化と説ずや。不佞振鷺其爲の口上にはあらねど禮服を着し六經を講じながら固より名教に寸間かげをして教外別傳とす。覽者それ紛失の寶物他あるにあらす。唯放心の求る而已。

彌勒旬稔たつミのとし

振鷺亭主人述

狂言綺語 見通三世相 正本

序幕 [illegible]去の縁しを [illegible]殿

○發端

板子一枚下ハ地獄と云ゝ　抑佛法ハ三世因縁の道理を說といへ共梵網經の孝順父母難經の孝養父母奉事師長仁王經の六親不和天神不祐觀無量壽經の崇德興仁務修禮讓等是ミな勸善懲惡のため因果報應を本としそのり今日におゐて明らかならざらんや頃ハ七月十六日大地ごくの敎主ゑんま大王北殿に渡御なり給へハ阿旁羅刹呵嘖の鉄杖をわきばさミ虎豹犀象屠殺の爪牙をとぎたて鉄蛇惡獸罪人の膚をさき無間の猛火熾々として天をこがし數萬の獄卒罪人を引立きたれば罪の輕重ハ業の秤淨婆璃のかゞミにかけ視眼嗅鼻の善惡にわけられ毛頭いつわりを施す事あたハ

すおのれと罪にふくして無間阿鼻叫喚修羅餓鬼畜生大焦熱血の池紅蓮釼の山すべて一百三十六ぢごく有てそれ〳〵の罪科に墮さる時に皿目大口面皮眞赤奥齒嚙出のごくそつども大釜の蓋を取てぐら〳〵とゆであがりたるを見てあれバお染久松お梅久米之介お七吉三お駒才三おはん長右ヱ門お夏清十郎梅川忠兵へ小春次兵へ小いな半兵へお花半七おしゆん傳兵へおつま八郎兵へおさん茂兵へおちよ半兵衛をはじめてその外數萬のうハ氣罪人を引出し來れバ閻王仰出さるゝハ無縁法かい戒名なしの聖灵ども慥に承れむかしより釼なんにて死したるものハ修羅道と定めて有る事ながら戰場或ハかたき討のたぐひミな我なぐさミに人もころさず物すきて斬れもせず主人の爲親の爲に死するなれバすミやかに極樂へ遣ハすといへども汝らハミな得手かつてに死なねバならぬ道行をつけ縁をむすぶの神さんがうらめしひなどゝたハことをつくしそのうへ主親に生恥かゝせ裃入らずに二世の縁をむすんで死したるものどもなれバ望の通り夫婦二把束にしてながく永沉へ墮し置しか共今日娑婆世界の寺〻にて盂蘭盆會の大施餓鬼修行の弘得により呵嘖の大赦を行ハるゝ間娑婆の藪入をいたし線香の迎火かゝらぬ内いそぎ立歸るへしとてのこらずゆるし給ハりけるぞ有かたきこゝに難波のヿハもとよりその身の戀に男と對に死したるにもあらざれハ右のやからと一ッ釜にふろふきともされず行平鍋に煮こゞりてあるを閻王べつ

段にめし出さるれバ赤鬼青鬼ならでいきな丁子茶鬼藍小なんど茶鬼かしこまつて引出しまな板にのせて血をしぼりうす紙のやうに成たるをまなばしとほうてうをもつてさまひにおろしはね作りにして活々といへバ忽ちもとの美人となりけるされハ仇名かしくか窈窕たる姿色ぞつと素がほの流目に閻王はじめて。御目をほそめ給ひそもじ事ハ他の心中とちがひ二世と約せし夫もなく娼妓の義に依て死せし其應報によつて二度しやばへ生をうけさするとハいへど遊女の内にも東國の龜菊虎少將西國に室の檜垣磯女などみな貞心節義のもの共がごとき善果にあらされバ福貴のくわほうなく苦界の中に生れて夫婦のゑんあしかるべしとて閻王てづから大ざつ書をひらきてトもじが三世相を見給へバ寝ずに猫のとしの生れ川竹の竹性男ハ蛎からの砂性竹性砂と相性ハよきやうにて竹にすゞめほどハ品よく行かずとかく前世の逆縁によりて夫婦合苦勞性なるべし一代の守り本尊坤皆斷八幡をしん〴〵すべしとてトもじに御いとまをたまハり閻王當日ハ御ゑん日御齋日の御酒をきこしめし御かほのいろも白くなるまでに醉せられけれバ御あいてのかぐはなハせいひついろに成覗眼ハぴか〳〵しべちやァねい醉た所ハ店ざらしの木魚といふつらになり。チトあちらへと焰王帳臺ふかく入り給ふかくてかしくハ閻浮提を立出地ごくの鉄門を越てむかふを見れバ經かたびらにませ垣の帯を〆たるいきな信士ゆくハ六さんかと詞

かくれバかしくさんかといふこゝろうれしくおそのさんハおかハりもないかへといへハ六三郎ハしりめづかひにおそのと思ふがおまへハわたしが爲にいのちをすてゝくんなすつた共お禮が一言いひたくとんだなづかしかつたと詞に何かふくませた思ひ入かしくハさるものなれバナニもつてへねへおそのさんといふうつくしひおかミさんが有ながらわたしらがやうなものをどうしてなづかしひもわるひしやれだしやれじやァねへよ。實おそのも秋風さ此ころハ抹香じミていけねへハな九尺二間の具欄に敷てねる蓮葉も質草とやらかし鼠尾艸の水ものめねへ中でべつかうの珠數をかつてくれろのヤレ新佛の門之介や半五郎が見てへのとゆうれいにやァねへ引ずりさ此盆後火のくるまといふもんだからおそのを置去りにして地ごくをかけをちと思ふがいつそ淵河へ身をなげて生てしまハふと思ひやすといき／＼としていへハかしくわつとわらひ出しそういふ事ならワたしもいつしよにいかしてくんなせいしとハいへ大事の殿御をいかしたとあとにのこりしおそのさんのさそおわらひわしやそれがおかしひこんなめでたいはかなくなひ事があろかいなと男のひざにとり付て前後ふかく大わらひかくてハはてじと兩人いよ／＼いきる氣に心底極め極らく東門通りのふだらくやへよつて黑無垢をとゝのへて生裝束となり手をとりかハし行とほどなく氷のおごく鉧の山も打過てさいの河原に着にけりかしくわらひを止め誠や難

波の三かつれ心中の時つまとつまとくゝり合せて死たるよし我〻も生てかばねれ残さずとも名をゐんまの帳にとゞめたしとふくさを出しつまとつまとをくゝり合せいざさらばとて同音にうたひへなをいつまでかいきの松ト三途の川へどんぶり〇ヲギヤア〳〵

本舞臺三間の間一面のなみまく上の方に銘鯛橋下の方にちく田嶋を見せ帆はしらを取つけ所〻に河せがきの卒塔婆と竹を立紙の幡の好みあり一体かまくら新洲のはな夜明のけしき波のおとにて幕あく

ト横堀よりちよき一ッそう出てくろこれに客悟舟もてたと見へてねむさうなすいらしき目もとでやにさかりのみへ船やどむすこ川竹の万むかふはちまきじゆばん一ツいさみこゝろたたしながら

万 ―ちくだ沖をごろうじやしらせんしほりといふ雲が出やした―

悟舟 はやく縄舟が出たの―

万 ごうせいに下浦のおしおくりがくるれへけされいほ山だわへみんな房州貝てござへすかしらて百五十くらゐしやうす―

悟 かつほもなまけいも伊豆めいれ大味だの―

万 アイサ内輪洲の崎あたりまでの事さ山などじやァぎんみして女郎貝をつかひやす―

悟 銘鯛の下にかゝつてゐるれ活鱸たのはねる音がごたいそうにするもんだ―

万 みんなてうし舩でござへす夜明方にあぶら堀の口の橋が四ッ手のよくきくところさモシ三まい洲へ大鱚をとりにめいりやせう汐八合からさしかけの

二

間へしととれやす―悟　いつてい川ハ賑だの―万　きのふも氣勝丸が二へいサじやう國でせがきをあげて又出ばんのしをのせこミやしたお店のしも笑津やの人がら雨やのしれ口紅粉などにて色男はだてごぜへやすよ―悟　どこからの川ても舩やどれちを留鳥江町ちや町のこつた―万　ふりがごぜへせんからさしたが夏のうちやァ堀片道が多いから喜瀬川ハずでいひまさ―悟　なるほど七八と淋しくッて霜がれに成て賑な所だ丁へ行ならとうろう餓過からなじんで暮のあと着の相談じぶんに切るがよしさたばこがきれた―万　おあんなせいし（ト皮さんどのさげたはこ入をほうり出す）―悟　アノ内川からくる茶舩ハどこへ行酒だの―万　煮花屋でごぜいしやう七ツ【七ッ梅】とす山【一名岩田】が目印サ―悟　茶ぶねで酒をうるもさすが和哥町だしたがから〳〵枕ハなんぎた―万　鹿橋ハ床のいゝだけ夏床と冬床のやりくりにやァ女郎しのふさぐ所サそれだから四月の朔日と九月のせつくにやァ氣のきいたおきやくハいきなさいやせんとまりの多ひばんなざァ夜具包をかつぎ込と舩頭のね床にまご付く事が有やす和哥町ハとまりのねい所さ―悟　煮花やの見通しと夢本の亭ほど大一坐にいゝのハねへ夏の葛水冬のあミごとくもわるかァねへやつョ―万　出見世の煮花やもにぎやかな内でごぜへすがなぜか鹿橋ハ子供がすけなふごぜいす―悟　表ハどの内もきれいだよなふ和泉やハふるひ内なり簗村の茶漬木綿松山屋もよし横手で伊手やが口きゝお鳴が坐敷をするであそこの内ハ

にぎやかになつたよせばで茶やのふちやうを付ておくよ通ㇼ名のおくまれできねへのおすへれ世話にし人か有て坂縄の内へけいつて妹が通名で出來るそうだ―万　表かぐられ子供のつとめいゝ所サ初會にいやゝな家なぞをさしにしてつくにやァいつこくでも通ㇼやすよしやかましけりやァはだして子供やへけいつてしまふぶんの事さ宵立ても直してけいらねいけりやァうれしがりやせん―悟　わるくしてよく寐ても床を明ねへからあんまり客のいざれねへ所だ―万　ふる市じやァ廻しをとるだけ子共しも内もよくしやすから二河や大地やれとんたはやりやす新市場しやァ初會廻しとしやす茶やのてん〴〵ひやうし木だから四ッ明なざァ内によつてちがひやす―悟　なむさん火なれにあとがつけてれ―万　ほくちがございやすモシ前のうすべりで―悟　ヲイ承起ぎ（ト火なれ箱と共に前へ出る是つゝかけるゆへなり南てあげ汐ゆへおもかぢにしてひかきを大まれしにのつ切又とりかちになたし）―万　モシこゝで顔をおあらひなせへし（トろたとめて舟たながす悟舟）おかいたして―悟　のどがひつつくやうた夕ァれ大きにのんだぞ―万　けされモゥおきやしたろふモシミそでせうがをやきの舟やどの朝茶といふ所もまんざらじやァござへやすめへ―悟　かう見はらした朝けしきれどうもいへねへ船中浪上一生之歡會是同　江戸ぶーへたれかれけふのつまならんァ思へれはかねへあの子いくにつとめのせわをかけるとれャ万しうやァレがおれをよびたがつて夕ァも寐ずにつとめたがモゥ今ころれ廻しが床をあげにきてかへつたらふそつちこつちしたら湯で

もできりやァねられもせずけふ出る客へ思ハぬきのどくもあらふ夫を思ふとかわいさうだ爰から内へかへる時分に蛤町(はまぐりてう)から十くらゐなやろッ子がかなしひ聲でむきミをうりにくると水をしぼつていくらだとねぎるかういふせちがらひ事をするかと思へハちつと藝者が長くなれバ直してやる氣になるといふハおつなものだ一万時に夕ァハわかりやしたろう一倍小へん所のはめ板へのゝ字をひよぐりながらかんがへて見たがわからねへまづ初會が四人一座であれが三ばんめにならんだ所七兩詰くらゐいゝ女だと思つたがいづれ盃(さかつき)ハじゆんになつておれハ二人めに居たから二ばんめのきざなしんぞうになつておもしろくもなく夫から床で藝者を直し子供の方へも盃の廻る時分あつちからの思ひざしがゐんのはし何かじれつてへやうでかしたきせるに心いきがたばこのけふりに見へるからてうづに立ッた跡から行たらモシ今夜ハつきゐへでよつてゐなさるから何もいひやすめへ此間に〇と手めへの客をつれてきてくれろと賴のでもなし何かぐづ〳〵といつて床へはいりしなにおれが帶を屏風の内へ入てくれたりしたからおれがしんハ何かあぢに見てねてしまふこいつハくたばつてもいゝがどうも迷(まよ)ッたから其翌晩茶屋をけいて口を切ッたがもし前ひじき（トいふ事ハはまくり町よりくる塩うりおやぢまへの荷かごへひじきを入て來りしを前ひじき〳〵と塩やといふよりしてうぬほれなきやくのふてうとなりしなり其塩うり二三年以前故人と成たり）だと思ハれてさしをつかれたらいひごうさらしと案(あん)じたが坐敷ハ初會のつらであいつがつんとし

て出て女がてうしをけいに立た跡でにつこりとして床へはいつた所がモシよく一人て來てくんなすつたいつそ嬉しひよしたがつけうらにきたお客の來たためしがねへといふから裏じやァねへ初會だといへバ初會だの裏だのといふ譯ならかたつきし出やァしやせんたのしミがねへから出たのだれなわたいハ又タァ一坐の氣じやァなかつたと三年もなしんだちんころさ一万　夫から直にきのふの晝(ひる)だね舟がつくとついそねへせつこんでゐなさるからわつちがしらせてけいりモシへ出てゐなさいやすヨと申たらとんだふさぎなすつてげいしやばかり買なすつて表かぐらへあかりなさると和哥町からのみ一悟　明たから來いとしらせてよこしたのよ夫から表を出ていつて見たらソレあいつが帳場に待てゐてせつかく表かぐらでおもしろくあそんでゐなさる所へみなぞハわるかつたらうがね又女郎しゆもとりもつてこつちへよこさねへけりやァならねい義理(ぎり)さといふからつけこんで宵泊(よひとまり)でもつけねバあハれぬ子ハなじまれねへが廻しにちかつきに成てけいらうとひねつたらどうぞそうしてやつてくんなせいしといハせる氣かへ何もかもいゝやうにしておくから心づかひをしなせへすなとはかなく見られたかんしやくのふりで用が有からサァけへらうとソレ手めへにいつたら一万　アイサタアのこんやだからおけへなハるかいゝのサとわつちが艫(ろ)をかつぎ出す所へァノ子が下へきなすつて何でもこんやおいてくれろとたのミなせへすこ

いぢァあちだれへと思ひやして悟舟さんハ内にやァみがらとつめられたあとのあるりうもんのはおりばかりだあんまりまけてあとでうまるめへ小べりへ手を出してけがでもしねへやうにしてゐなせへしと一ッすびいて見たらすぐにけいんなさる事じやァねへ又表かぐらでもいきなさるだらうと氣をもむッリャァおきやくかいかふといゝなされハどこへでもつれ申が又舟を廻してしゆミしてんからうすべりを引ッちよつてあがりたくもねへのさこんな日にやァ水棹でもぬすまれるもんだといひやしたらおめへがゐちやァ舟をこしらへろといつてわるひからはづしてくれろと　ル升一もらつて海へ女郎買サ一悟　おれハ二階に歸らふと思つて帶をメけいす所へいひもしねへ直しさかなが出る三弦ばこがくるハテナア　ト手をくミいうろ／＼しあんする時しもあたりの所洲に立ある河せがきのそとハに二人のあか子まこもに包てくゝり付あるがおぎやア／＼となくゆへ雨人ふしんたなし舟をつけて万とりあけていうろ／＼かいほうすると日覆よりトヒヨノ＼ニて鳩かむらがる悟舟きつと見へ　悟一ふしぎや今歸をいそく河中に産捨たる黄口の赤子取上るとひとしく鳩八幡のつかハしめ此子を守りの寄瑞なるかハゝゝ有がたやなァ一万　がつてんがゆきませぬハへ何でもこいつァ舟幽灵のおとし胤但ハ河童の告子か一悟　つとめの恥の間夫のたねサ一万　エ一悟　やミのよになかぬ烏の聲聞ぺうまれぬ先の父ぞ戀しき一万　かわいの者や　トかゝる悟舟へだてゝ　一悟　コリヤ何とするのや一万　サァ淺びちゐから深川の色と一悟　客との善知識誠に戀ハ色則是空一万　弘誓の舩の眞如海一悟　無量の手管未見眞實　ト悟舟ハきさしにてもとよりたはらひ　まつこの

通り薙髪して西行法師まつた吉田の兼好こそ今日がれ我師はん是ぞ大悟　三會の曉　ならずや　一万
ハ、ァさすがれ色道に通達し遊里に心をよせられしやさ人の御ほつしん川だちれ川て果るの文
字をとつて川果坊と法号し君の御弟子と仰申さん　ト たぶさを切すてる　一悟　あつぱれできた一万　身を川竹の
万が道心一悟　その逆緣に此子どもらを育得させう一万　見事あなたが一悟　おんでもねへ事一万　テ
モそのおぎやァのこゑでれ一悟　ハテありや朝がへりのからすの聲さト ちよんひやうし幕

中幕　現世のあさがほ　蓑花屋升段

本舞臺三間の間正面黒幕下坐の方へ寄せて石の鳥居を半分見せ同玉垣すべて寉が岡八まん鳥
居前のかゝり爰に武兵衛半素袍にて結構にかざりたる神馬の手綱をひかへてゐる下の方に
ししおどり子のこしらへにて此馬の轡づらをひかへりかひ衆白丁の形にて是をとりまひてゐ
る幕の内よりアリャ〳〵のかけ聲此見へ早神樂ニて幕明
一　どつこい一武兵へ　けふ御神事のかざり馬いさみたつたるむかふづら手綱にすがつて引とめしあ

まめ女めへんなごめそもまづうなァ一　何やつだやい一　一雙の玉手千人の枕半點の朱脣万客
帶とのからうたも月毛ハ闇を明らかにてらすも神の御まつりすかぬお客の片月見戀の中裏和哥
町のとくといふ子がとめやんしたミなさんまつておくれなさんせいナァ一　武　めんどうなッレ一
やらぬハ　ト　ミなく〳〵かゝる早かくらにてはげしき立廻りとゞミなく〳〵を下坐へ追こミあとを見おくり禁とのりきかつきを出して神馬のくちのあへをとりて思ひ入　一　つらひ勤をむり酒の口には
まぜる神馬のあれもり一ッ滴のままさバ立所にァノきげんの取にくひぶう〳〵酒の根を留る例も
神の山本でそうじや　ト下坐へついとはいろと黒まくを切ておとす

ト本舞臺正面總下口上の方に二階作り見通し茶屋ちんたミせおく庭前故此忍びがへしおとり付尾花大分咲ている惣じてつるか河岸前茶屋町煮花屋のかゝり若いしは料理番料つているさわぎうたニて幕明くト東寺の小路向ふより一切客の仕出し出てくる

喜花　一　ヲヤお出なありましモシ舩宿しハへ一　初會客　河岸迄人をやつてくんねへ帆引町のよし田やよ一　番頭女おとら
おつれ申なお客たョゥ一　料理番喜介　八す水をたのむぜ一　八介　ヲイ水くミもてへ〳〵じやァねへ一　お花　横坐敷
の三ッ物とそして直し肴が出るよおなかさんハとぼしむけいだよゑびすやの方のお羽織を出し
なのさんにおふねが出來たとそう申さつせい此武兵衛さんハ山へいきなすつてどうしたのだの
う

ト　すりかね入のけいせいの出の唄になり花道より武兵へ折いろの宇合羽しぶ蛇の目の傘でぶら〳〵とふとりにくミなるこしらへにて出てくる此跡よりなじミとさしもの賑かにてんじんにゆひ松葉いうの七子の小袖白ちりむく二ッ紺のハルシヤ織の帯右の手にてつまをとり白ちりの下帯うつくしきす足をかくしびろうどをの黒の下駄あしだ左の手にこにばなやとかいたる大こくがさを持そへすこしこゞミてわき顔じまんのまじり上り此傘の柄を娘子おたきしつかとにぎりそろへのまへだれそりかへりてすましだ目元で出てくる此あとより羽

をりげいしやおつた金吉貞次おすへ男けいしや義太夫の鶴太夫ぶんごて亀太夫こわいろ松蔵竹八さへぎ候兵へ権八幇頭箱廻しどや〳〵と付そひ〳〵本舞臺へくろ娘お花前だれで手をふきながらはしかゝりまで出むかひ

一　ヲヤ〳〵武兵衛さん一武兵へ　味本の水茶やのめへてすべッてころんた

ト女おとらかなだらひに湯をくんでくろ武兵へおとらがかたに手をかけ毛だらけな足をあらへせながらよろ〳〵する

一　しつかりと取付ておいでなせいな一松蔵　とつきもしらぬ山中に一竹八　なかにだいばれつきものだ一候兵へ　ものだの森の狐をうかそ一権八　うかそ中山せいかんし一武　これちつとだまらねへか見通がふさがつているならすぐにけいらう一候兵へ　とめるといふ法にや屋郎ハとんといかねへ女でなくれ一　何サ見通シのまん中に燭臺を付てしまつておきやしたよ一権　いよ〳〵ありがたい一武　喜介料理番に氣を付るやつこでもきたる蚫の切やうがうすひぞ鰈の煮付にせうがかこいさアのめぬハへ一雀　山葵生姜たなとぎ一亀　ヘ鉢肴出りやしやれのかね一　何をいわつしやる一鶴　サアおあがんなせへし

ト此一件のこらず見通へ鳴り込と武兵へ上の方へ通りふてか〳〵しき足を二ツ三ツしてまつぱたかになり紅ちめんのわりふんどし一ツにてふんぞりかへると娘分お花をあてがいすい付て出さうとしてたばこが粉ばかりゆへ武兵へが三年ほどまへに竹やで買たくすべのたばこ入に和泉の石津留を下へ入レにやる女とらはをりをたゝんで帳場へ持て行く此武兵衛の足の方になじみの女すハり枕もとに娘分おたきおはなたいこにかハれたこゝろ安き子供一人武兵へがつれてきたる伏町のかげま総之丞両人風のかミ雨人すハる此うしろに子供三人くる是ハ切合ゆへ一向無言也下の方に二人幇頭廻し二人おはりと出げいしやミな〳〵並よくならびうたハずかたらずたゞ相方うしろばかりにてのんだりくつたり武兵へハ腹山にて十分ゆへ蛤のつゆをちよつとすふ斗此内いとさしふたの箱入のジアマンのコツプぶんこの中に有をとりにやる事あり女六人入かハり立かハり男げいしやミな組合て十二人はをり〳〵人惣〆三十八人餘也さしめにひろきにばなやの見通し出しものと人の山にてむさしのゝ藁のものハつかミ出され大床の大よこものをはづしたり花をむしつたりろいろの床ぶちをなでた

一九

り丸ぢよごの香臺をもち出したり琴をさらけ出したりしてわろふざけの大さわぎとなりすゝはきもちつき門まんへんのさい中武兵衛ふつと小便に立ゆへげいしや船頭女二十人引付て小べん所へ供をする武兵へ見通しへかへるとつかれてたふれるゆへさわぎしづまりてみな／＼よつてかゝり武兵へをはだかのまゝ二階表さしきの床の内へつり込けい者一人／＼有かたふござります／＼／＼／＼／＼／＼／＼トつらりといとまごひしてかへる。跡はひつそと成武兵へはまつり二日のしまひにて夜こやと飯一粒もくわず夕アものんではちぎり／＼はふもひるから山にて大のこゆへ夢のやうにたわひなくねてゐるとほどなくやうじをつかひながらくる女は茶とたばこぼんのたどんを入てくるすべりぶたを屏風の外へおいて行く

一と　おとらどん内からくすりがきたらあつためてもつて來て下せい　一武　豊山へゆくとき神馬に豆をくれせるとてその豆を一口くつてからむねがわるくなつて味本でのんだへう／＼酒にあてられたはへ　一と　エ　武兵へは腹にめし一粒もなきゆへゲイ／＼と白きあればかりはいふきへはくとし聞はいゝ傳へたる神秘神馬のあはをのまさればゞ酒の根をたつそのきどくけに味本てひそかにまれをのませたるそのきゝめかこれもひとへにはまんさまの御かげとふしおがまふとして手をたゝくと女おとらはんぞうとおがい茶わんにやうしをとりそへて持てくるいりちがつて　一たき　としさんちよつと　一と　なんだへ　ト出るおたき小ごゑにて　一たき　冨岡から鳥江町のおきやくが來たからちよつとかしてくれろとさ早くしてくんねへ　一と　跡の所をがつてんかへ　一たき　アレ月夜がらすかパア／＼となくによ　トとしへいつさんにとなりの富おかへ行

ト道具ぶんまはすとなり冨岡の二かい裏さしきにかゝり一体此冨おかはばけ茶やにてさびしき体裁に名さへゆかしき六三郎としとはいはれし左の手をかくしあいおなんどのきや七子の袖口めんうへ田のあはせの…のかどんすの帯をまへにして半身床のかにもたれ何かふさびであるまくら元にはをりげいしや梅じ女おさきは久しくもらはれぬゆへねむさふなかほにて三味せん箱によりかゝり何だかはじまらぬ氣色となりはわらひこゑしてにぎやかなてうしなり

ツヽタフシ　へつくだ／＼といそいでおせべヨゥしほがそこりでろがおせぬスチヤラチヤチヤン　チヤン／＼　一梅じ　すつぼり本てうしといふ所を六さんにおきかせ申さふと思つたけれど浮なさらねいからもうや

めやせう（ト糸前から半かけ切た三をかけてしまふ）―（さき）梅しさん旦那ハとうした―（梅じ）去状（きり）をやりさ―（六三郎）諸事おめへでなけりやァ床がきれねいす―（梅じ）アレ又あんな世事をおいゝなさるよモシ去年（きよねん）の月見ハ夢本の隠居（いんきよ）屋ての三明しましたつけ子おさきどん―ツヲツトかけてくんなさんな部屋にゐる時も内にゐても外へ出るにも是一まひだよサァきつね拳（けん）でてうしをかへにいかう（トいふ折からむかいかゝろゆへそらさぬやうに六三郎を床の内へまひ納てとなりへ出直りとなり捻せりふきこへる）お針さん何だとその手をくんべいか（トこなたへハおど千鳥がけにしたゆうきたりのゆかたをもつこちよつとあひに来りナ三郎がふきげんてねてゐるまゝ無言できかへさせる折から一ツ内の子共の聲にて）―（おはに）おいろさんよしかうそだよ七ッにけへるといつたお客にけいつたためしがねへのサなふゥ―（とど）おはにさん―（はに）なんだヲヤ六さんまじめだね（ト云ながらはいりまくらもとにつくはつてゐる此子ハ中としま床よしにてもはやたんかうさせててうつに出たのなり）―（とど）おさきどんいわねへもわるひがのおとゝひの客人の事よもちろん　わつちが出たのハ二三度のこつたからァノ子を出しなさるもいゝがの同じ一坐の内だから此すへおちあふめへもんしやァねへおぶんさんか（是ハ娘分をさす）いゝなさるにやァふせじやァあるめへしあの子も見立かへしでおぜへすのなんのとなんのじよせいもなくッて（トおさきかんさしであたまをかきながら）―（さき）あの晩（ばん）ハいそがしひばんでつい間違になりやしたのさ旦那にもおかミさんにも一通りおつしやるがよふござへす―（とど）床屋の言わけじやァ有めへし一通りも二通りもいらねへハな今はじめて女郎をしやアしめへし―（はに）てうしでもかへてきねへな―（さき）アイもつてめへりやせう（トてうしをもつて立あがり口あたりにてたれかすれちがひ）お

ちかさんいやァしませんよ　トはしこばたゞ　―ど　あの女もよくばつたひところ起番の晩に花をやつて湯をわかさせた時などァころ〳〵しやァかりながら　トいふへ―ど元六三郎と煮にやでのなじミにかけがたまりあハれぬ首尾となり煮花やハかたひ内ゆへつうくつがしにくい　うつちやつておけへおれが目鼻が明や茶やをこゝの内へかへておさきに通してしのひあふわけ合もしつてゐながらこのごろもらひがないゆへむねきで明さしきへ床をしてくれぬあたりせ　―六　ァかうでもあるめへに―はに　さうさ〇ナニ廻しどうしいわせるがいゝハな　トいふ所へおさきてうしを持てくる　―さき　ァイもし　トおいてしやうしを引立てゝ　―六　あをつきりとぜうおはにさんついでくんねへ―ど　顔がはれぼつたくなつてゐらァなもういゝこなさんなよ―はに　そんならよさふかね―六　いゝハな―ど　どふともしねへ　トてうしを引たくりわざとこぼれる程つげども手めすハつている故尻目でにらミながら　―ど　おめへ晝からか―はに　何サ雪よしから明てけいるとすぐにこつちい内へ初會に出たのサけいしたくつてならねへハな―ど　なんだよ抱へでも白めへでも客がなけりやァつまらねへけれどなぜ白めへの子ハあんなに人の客迄とりてへものかしらん―はに　アノ子か雪よしの内でねごかしにあつてまミへをおつことして寐てゐた跡にかんじんよりであんどんをつるしておきやくがけいつてぶら〳〵してゐた時ほどおかしかつた事ハねい―六　こいさァいゝモウ一ぺいのまう―はに　六さん何ンだへかんしやく酒に―ど　モウさむくなるといやだのう宵から口もきかずにいて七ッ時分におきやくがけいらうといふと俄に口を閉てとめる事があるよ明てけいるに爪さきのきれるやうな晩があるよノウ―はに　さびしひばんによせばがおそくひけてャレ

嬉しやねやうと思ふ所へ口がかゝつてあんどうのうへにらうそくを立てやうしをつかつて出てくるもいやだチイ一とご おめへきのふ内へいつてどうした一はに 無心にいつたのだれな大きなあべこべだととつさんが腹をたつたからふさいですごく／＼かへつたのさわつちやァとんだつらひよ一とご わたいもいつそ此土地をはなれて出るしゆにでもゐていしたがしらねへ所へいつて此氣じやァいられめいよ ト此両人兄弟ぶんにて中よく六三郎か中もわかつている事故たがいに遠慮なく苦界をはなしあふ 一六 てめへが他所へ出ちやァはきだめへ太神宮のおはらひをすてたやうなものだ トひいきの情 一とご ヲヤきついしやれさ トにつこりうれしい情 一はに いゝしやれてのふりをして一とご ナニ氣ごもんだれな一はに モシ六さんこの子ァいつそふさいでゐるかたのわらハせてやんなせいし トいひながら中こしに成てゐてつゝちやわんでくいとあをりすてゝ出て行とトごハあんどうをかたよせて床へはいり帯をといてびやうぶへかけ枕をよせてはらばひになりかミ入の中からくろぬりのらぬぼれかゞミを出しかんざしで前がミのほつれをなをしながら 一とご さむしかつたらう一六 ばかなつらなとなりじやァなにがげいしやの五六ゐいも呼んでおどる内中がや移りがいをあけたやうにさかさに成てさハぐからおれがほうにやァ女一人リ廻しておきおぶんもつらをもつてこぬまだしも梅じが氣をきかしにぎやかなものを彈たからやつとお茶をにごしたのだはをりでもよんで待てゐろといつてよこして床へ廻らぬ内ちよつとあひにこられぬ事かあるものか茶ぶくろのあられじやァねへが釣てをくも程がある梅じもよつぽどまけてゐたから直してやりてへにもいわれぬ時宜何とかおもつたらふ一とご

ナニそういふ子じやァねへはなホンニ顔　イル　お六　ならしにあきなつて五日かんじやうに
よせ場でいつもそれを買はをりで梅次一めいさホンニおめへもげいしや買でいつも大まかに遊
びつけなつたから今の氣じやァくやしからふよ　ト折ふしとなり梅次かこゑにて　〽思ふ事叶はねばこそうきよとは
あきらめたむりな事一六　〽神や佛がうそつくならバ　トうたへふとする口をトおさへて　一ト　だまつてきゝねへ
アレ一梅　〽ほれたせうこをどふかこかいなテンツント　トよこになり小こゑにて　一ト　けさのみを見なつたか
一　おれか返事もとゞひたらうせんどの朝着てけいつたものをよこしてくれろといつてよこし
たがこしらへてもらつた武兵衛がめへにきて出ざァわるからふと思つてうけてよこした懸の方
もこゝの内から舟宿へ出して有かととりに行さふだから今夜なぞもふてうしなはつだそりやァ
そうとおやゆびのあんべいしきはどうだ一ト　病氣で椿よこ町の圍ものがかんびやうにきていや
すがこゝがわるひからとんだきざァそれにあんなやろうにほれてからと内の二階でみんながい
ふはなこのごろはばんとう女もかんを付るやうすだからてい〱仕にくい象さ一六　どうぞや折
ゝの御はこばせのみたのしみつらき月日もしのぐとはいつも手めへの筆くせだと思つてゐたが
今思へバあく縁だ一ト　ホンニおめへはじめの内はいつそ氣がつまつたよ一六　てめへもおれは
こはかつた一ト　わたしがやうなものを呼なすつて遣ひすごしをさせやした一六　よしないおれに

出たゆへに借金(しやく)をさせた一とし　すミ濟(すま)しをした上てと思つて見るがくるしひれなわつちを引立てくんなさる主人の恩(おん)もあるけれと夫(それ)を思つてこのねんがぬけるものか　ト六か枕の下ゑりのあたりへぐつと手をさし込と小ごゑ　一六　ごうせいにやせたのう木場(ば)あたりの橋のやうだ一とし　是だからのミなんなといつたにじれつてへ

▲燈闇(トモシビクラフ)して數行(スウコウ)嬢子(ゲシ)が涙(ナンダ)　せうしの外から　一娘分　とひさん煮花屋から下へ人が付ているれな一とし　今いくよ一六　かりてかうなげへもあんまりかべとみのはらひだはやくいきな　トおきてさいぜん出がうしのせうじにかくしておいたちやつけちやわんの酒を出して帶をしているとしにくい／＼とひかせる　一とし　六さん今煮花やへ行たら定しやかましからふによつてもつたいねいがおめへの名に丸をして用事を付る仕宜(しぎ)にもならふ一六　それも命に口がかゝらば一とし　ちゑの輪(わ)をはづす法もあれ一六　ぬかぶくろの紐(ひも)引ッちめて上手(て)をつかや一とし　ソレ懸(かけ)をやんなせへし　ト香包をたなけ出す中に金かいくらか六とり上て　一六　こりやべつかうのさんだんか一とし　アイそれで今のむり酒を一六　ウゆきやの八ツ迎の拍子木チヨン

トきつかけにて元の煮花やの二かいに成武兵へ床の内から飛出る所をミな／＼だきとめているミへにて道具廻るとばた／＼にて花道よりとし走りきな／＼いろ／＼となだめるこの仕くミよろしく有べしとゞどうかいふひやうしにおしすゝめ床のうちへ道具納まるト

一娘分たき　武兵へさん大キな聲をしてなんだへ　トそばよりひざへ手をかけ　モシこふでごせへす富岡の客人がはなさねいでツイ心安だてゝアノ子もおそくなりやしたのサそこをば一ツくミわけねへおめへさんでもごぜいせん　ト武兵へ床の上に大あぐらむかふはちまきうでまくりにて　一武　おきにしろそのくミわけろが氣にいらねへ雪ころが

しれ手がつめてへ通ころがしじやァそんがたつせう買づくのかしかりの法をしらねへ猿じやァねへがかしてやるにハ程がある十二匁ほど間の有五厘もすかねへ氣もきかねへかりもねへ子供やに口もきけねへいぢもねへ坐じきをする役目が立ッか夫でもおきやくがきげんがいゝか客ハ見分がならねいのかまづ酒のミの客と見りや坐敷をせかずげいしやをなをさせ立しなに氣をつけて勤もさげて床へはいるハ一ト切とむかひをかけはながミぶくろを見通しにわすれるほどにとりミだすハとまりになるとおち付てそれそうをふにふミ分るが娘分の見たをしやだハおいらがやうな大盡にハいつそァノ子が氣に入らざァ外の子でもよびなせへしとまだしもいへべきげてもすむに八幡の護摩經じやあるめへしもち上るも程があるあんまり人をばかにしたおれがつらをよくおがめ鼻すじにハ大神宮さま兩方の眼にハ八まんと春日さまがござらつしやる鼻の下をまつりがとをるわれが口ッぱたに棧敷をかけだしか〳〵から〳〵かちよゝらもとまれべおきやくもとまるソラとんまつたでもうらせろへ　ト おたきがへこむと見て

船頭「ほしさんが明なすつたハわつちも下でそういつていやしたヵしづかにいわれるこつてござへやす

武「しづかにいつてよけりやァ本堂どむらひのねりにたつハなんだわれまでが向ふへならぶコレ舟宿を渡るにもおや方大事と思ふなら雇にも片道にも先のさんばし迄付るがめうりだげびたやうだが舟やどへ茶やから五節

何の樽ぜうゆつりと引手と山のあづけで新ぞうおろしも出來る筈舟やどがなくて揚ねへなら丁へ行市場あたりの茶のやうにまミづと汐のまん中で上手をいつてねかす氣かはやく舟をこしらへろ出ざァかごをいひ付る火繩箱にひやめしざうりがあるか下へ行て見てこひ　トせんどうもへこミかたの手ぬぐひをあつちへやつたりこつちへやつたりして居る

女とら 一ついぞねへ一

武 なんだどうしたわれがだんごもちうくへねへおめへさんがきなさるときめうにその日ハにきやかだのゑんぎがいゝの茶がまだのかけをとりに出やしたのお手紙がめいりやしたの酢のこんにやくのといふたびにたゞ廻した事ハねへ第一やたいぼねが氣に入らねへ小便所の二階にあるが大さうらしひよしにしろ出しものが水ッぽひ火入のたどんがくづれてるいそがしくてそまつになるならさミしひ茶やへ河岸をけへるハ　トおとらもへこんで帯へ手をはさむ

一坐の子 一どふいふ譯かしらねへがかゝさんあやまんねへナ一

武 わけもかぼちやもいらねへが一坐の切ッぱしとて御あいさつハうれしひがおでんしらぎくあんばいよしだしッこでかつてくふ長屋のつきゑゝハきついもんだ定し一坐のもめだから客が出やうといふをミんなが丸めてしまひやすいつちやァかへつてむづかしからふとやつハりねる氣で留たらう一

一坐の子 おめへさんも又かハつた事をいひなさる寐たけれバねやすハな　トきすが一坐の子共ゆへ手づよくもいハれず武兵へはちまきを取て　一

武 二階中の客人たちにはゞかりながらおわびがあるさぞやかましかろやぼなやつとわるくいハれる酒でもねへが三社の詫をなら

べる口にやァあいぜん明王がちよき舟でむけへに來てものり出さずかけ出すからハモゥこれぎりとまつて床でかけられてぐんにやりものやそべになてねる時二度といわれもせずその時目ばかりぱちくでかハ切のひきげいるけふされる荒神様でねへ色男や通じかけこの大平がいハれるものか酒ハいわぬが金がいふていさうらしひがこゝを出て鹿橋和哥町鳴子の内手も足もねへ山案子をよぶかはたけをかへてハ三かぐら夜が何時たゝいても子どもがなくても辻堂にまご付やふな六部でもねへ相宿のふせうだミんなも起てサァ開ねへ色よけの守りハ是から出るハへ

トトハさいぜんよりへいきでいひわけの種をかんがへていたるがこいつハ一通りではゆかぬと手づよく出る 一ト 夜ふけさふけに何のこつたへけしからねへいかに六萬坪がちけへとつてあんまりあくたもくたをけむしなさんな一 武 コレ氣をよくしてゐれハ太平らくなうぬがおやハなんだ大かた紙くずひろひだらふ木ひろひ入へからすの路次口からろじ板もねへ長やにゐて板頭も氣がつゐゝ大キなごたくハおきやァがれ七分の鐘のなるまじやァおれが買切こんくらべ虱か喰てもかゝしやァしねへ氣にされる此あまめハ トまくらをふり上る其手にかけま戀之亟とりつきとめる

立廻りすこし有戀之亟なきつき 一 戀之亟 なんぞいふてかわかつてあるハひな トすこしりんきの思ひ入女郎よりハかげまほどやくものハなしこれわかしゆかいハ御そんしの事世武兵へもこれ迄これほどまでになじミしゆへ今さら切れるも貸おしく少シおれきミにて 一 武 トあらためてつらを見せろ顔ハうつくしひがおそろしひおばァだそろばんづくならまけハしめへまよつたがこつちのあやまりやかましくいふもむりでねへさ

きのやろうが仕掛でもしておれにはしまひをさせたのならかしておそくといゝはしめいちいせい時ハ木でも竹でも耳かきが只の四文をさしてそだつたらふにむね二分山のかつかうよくいかのとんびからすほどふがあるが氣ざだのとあつらへさせた瓜甲のくし霄にミたのがもうねへが金のめうがを一通りいふのた何がきれいといふ事まで料理番から女共氣を付て花もやり是ほど茶やもしこなしてまづ正月ハ水引ていわへた初みから狀づかひの歳暮迄われにもよつ程物を入おしひと思ふがねへゑんたアレよくさへた月を見ろいつも丸くハこざらねへ芋め枝豆きぬかつぎめア、高ひゆめを見た（トいへどさすがの武兵へとんだふさぐ）―（とら）てうしをけいてめいりやせう―（武）のミたければげいしやをよぶハ―（たき）おちやすけれへ―（武）くひたけりやァふじゆうしねいよふけにさへた手をたゝくハ―（とら）うつちやつておきねへいつて寐ねへナ―（たき）おめへもわるひによおらァもうしらねへいゝやうにしねへ―（とら）武兵へさんモシわつちがおきばんでござへす―（たき）あしたハわつちがおくつてめいりやすコレ（とら）さんどうしたおめへ（トすてぜりふにてせうしを引立ミな／＼はすすあとへしバらくむごん）―（とら）寐なせへしな―（武）いきものをあづかつてるりやァふせうながらおきばんをするのだ―（とら）マァはなしがあるからさ―（武）聞たくねへ錠がおりた―（とら）しよせんおめへの口にやァかなハねへハなぜそんなに口のきけねへやうにばかりいゝなせへすへ―（武）けふぎりと思やァいゝてへ事をいつてしまふのだ―（とら）

そういゝなせへすから巾やすがわつちがいふ事をも聞てくんなせへしせんどうしの事をもぐちのやうにはらをたつていゝなせへすがわつちが下へいつた時富岡の女とおたきさんと三ッがなわでからだハ買切ッてねかしておくのだとむづかしくいゝやすからひねつた事をいふせんどうだと賓わたしもはらが立たけれ共ナニサちよつといつてくれバいゝのさと譯をたのんでいつたのさわたいにこそいゝぶんハごぜへせうが内にあたりハおぜんすゐへしたがいゝ出した日にやァ聞入なさるおめへでねへから何ももういゝやせんいつそころしてしまいなせへし一武　ふだんぎの命ハもたねへ一とめ　きげんをなをしなさんねへ内ハ百年でもけいさねへ一武　ミれんなやうだが朝なをしをして廻しをよんで法を出すハ一とめ　そんならわつちも聞やせうさつき外の子でもよべといハねへとおたきさんになぜいゝなせへしたへわたしをわたしと思つてくんなさりやァあゝいつてくんなさることたァ御せいせん(トなミだぐんでしがミつく)一武　よせへ金人がくしやミをするハ一とめ　だれがその金を嚾ふといつたへ一武　やらふともいわねへのさ富おかに世話にする客人がきてゐやう一とめ　ほんにきてゐやすこの人さ(ト左のうでをくつとまくつて日のまへにさし付るわきの下にヽと青〳〵とほつて有ゆへ武兵へむつとせきこミしがしつと氣をかへてたばこをのミながら)一武　見やうともいわねへに火葬にしてもその上へ石塔をたて色男の戒名をほり付れハこゝろざしれとゞくといふものだ一とめ　けさふともいわねへのさ一武　なくともわらふとも御かつてサ一とめ　ヲヽ

さびしひちつとなぐさミにして見やう　トかねてしたくした血どめとかうやくとまくきれとをかミ入より出して下から持てきたうすばでくだんのほりものをぐつとそびてしまひうつぶしてくろしむ思ひ入しべらく有てなミだのかほふり上そゝけたびんの毛はら〳〵とふるひながら　一ト　もし武兵へさんきのふおめへのきなさるまでわつちやァ病氣でゐやしたがまだ三年といふ年ッだからいま死ッじやァうかミやせんよ又これほとに見せる心いきがよもやわからねへ事ハあるめへにあんまりでござへす見て居なさる事ハねへハナ一武　其病氣も久しひせりふだ我身事もせんじ御わかれの折からよりちと〳〵心あしくいと〳〵ふさぎおり候御事もしやのすへにもさつしろとハどのみにも書てある一ト　どういへバかういふとくやしいぞ　トなミだにうろミしながし目にあをむけにねてけふきり立の白ちりめんの下おびしどけなくうつくしきむねをひろげると下帯のしめをへまで見へけしやうをしたゑりからわきの下へかけてからすうりのやうな守りふくろのいとさなだすじかひたるそのねすがたそも是が十二夕でじゆうになる事哉武兵へ目がチラリ　一ト　むねがいてへさすつてくんなせへし一武　ウやかましひ　トいゝつゝさすりながら　つめてへ足だ　ト小ごへ　一ト　よこに一武　ほんに「作者歎ジテ曰」恰ムヘシ嬌香嫩蘂狂風暴雨ニ飄蕩セラレ遊蜂浪蝶一ト　ニモアレサ「曰」豆玉ヲ惜ミ香ヲ愛スル〻ヲ識ンヤ一武　ウ「曰」雲雨ノ梦已ニ盡ヌ嗚呼惜ムベシ〳〵一武　まだ用があるなら舩宿迄いつてよこせ　トてうづに出トせうじを引たてる　▲下のてうずばになるにばなやゆへびた〳〵ものならずきれいなるこしらへはしごの上り口に八方をともし小用所のわきにけつこうなる烏惡沙摩明王の宮を取付かなどうろうつるしてあり一トこせん紙へ紅筆で書をして床でもらつた金をそへて柵の内へいれ手をあらひてふしおがむ此うち二かいにてげいしや相かた一ト　モシこれをわつちらが内のだんなさんへとゞけておくんなせへしこゝの内へもよろしくへされ〳〵にさくむらさきの　トッテッツン〳〵トン　これをうしろにして一トそろ〳〵庭へしのび出糸さなだの帯を松の木へかけてはいのぼる裏通りのむしのこへ忍ひ三重に

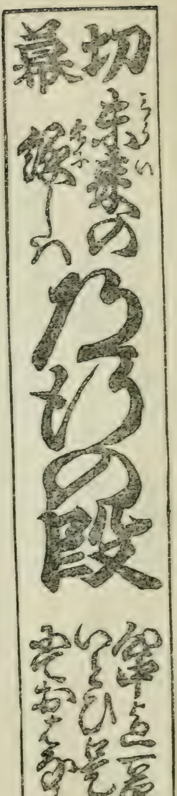
てへいのしのびがへしをとび下る下に六三郎ほうかふりにてたつてゐる

一六 ちとか一ちと

六さんか　トだきつく二かいこわいろ

幸四郎 へかまハずとゆきやれ　テンテ

テテ〳〵〳〵　わかれ三重まく



八まんの追出しハ三分はやく寺町のぢやん〳〵ハ比目のゆめをやぶるその鐘つき坊ハ誰そ世を川竹の万が道心その身ハかゝりし時ハいやそのなき色男ニて且譯智なりしかバいつもおきやくにかわひがられ万が居ずハのるまひといふほどにおもしろがられどの茶屋へ行ても万さん〳〵とて立てられさる子どもと仇なるちぎりを結びもうけし双子をうミおとすとそのまゝ河中へすておきしを悟舟にひろひあげられしよりおや子となくそだてあけしが玉のごとき美女美男とおひたちけるがさすがどうらくのたねとて女の子ハ和哥町に名とりの子どもとなり男の子ハ見放せしほどのどうらくものとなりしとかや誠に人の行衛と水のながれほど定らぬものハなし万そ

のころはまだ色よりかはゆひだき火ばちのうはきざかりなりけるが一時無常を観じてより未ダ知ラ浮水ノ定ヲ須ク乗ル顧主ノ船ニと捨身思ひ出の一章に墨の衣とさまをかへかの悟舟が弟子と成ぬむかしは艫をあげながらいたこをうたひ今は勤行につかれておのづから夜ふねこぐ拙も又悟舟は先年後朝に一双眼を見ひらきしより剃髪して一字のゐんま堂をこんりうし朝暮行ひすましてぞ有けるつらつら世間の幻相を観ずるにげに風前のともし火扇橋迄舟でせいろうをつゝくる大勢の葬禮もやき場におくらるゝ時はあはれさし荷ひに過ず爰に近ころ卵塔場にて男女の情死ありしがその亡灵夜々出ると取沙汰ありしかば悟舟和尚ぼだいのため詩を作りて曰情人期ニ後世ニ衝レ刀為ス双ノ斃ヲ終ニ晒ス路旁ニ時遊魂孤落レ涕ヲと口ずさみ佛前に経を取て常ねん佛の鉦あはれにも打ならすころしも九月晦日あまり更ぱたる寺町通りのさびしさに篤をいそがせてくるはかの武兵へとゝひにはかれてより麁橋になじめともとかくとゝほどの事はなければ戀しさ紛らす時酒の早歸りかごにゆられてとりのぼせしがはいとまをやりて一人醉醒のかはきまぎれ傍なる寺の門前の溝に立し流灌頂のひしやくを取水をのみ息をつぎゐけるに樒らりしく布の中より二ツの心火燃いで見るゝゝ色青ざめたる男と女あやしのすがたあらはれ出れは武兵へゐりもとよりぞつとしてはをりひきかぶり打ふしてねんぶつ申せばさもあはれ成聲して申武兵へさん今水むけ

の緣によりはかなひ御げんをするわいなァわたしや六さんと二世のゑんはむすひやしたが未來にはおそのさんといふおかゝさんが有ゆへにあの世へゆく事もならず六さんをつき出したひにはゆうれいでたわいなく汐先のちよきのやうにふわ〳〵して迷ふていやすいつそおまへさんにかこはれたらよかつたに身をすてゝこそうかむ瀬もなしとひじやはひなといふ聲に武兵へわつといふて寺内へかつこゝつとめしてゐらるゝ和尚の衣の袖に取すがりひとへにおたすけ〳〵と息を切たるその顏色青ざめたるを和尚つく〴〵打ながめヘテうろたへた男じやと傍にゐねふり居る所化をゆりおこし「ソレ幽灵が出たそうだおつてしんぜろ

右漫戲書以雜劇爲態故有妓有淫覽者以狂言綺語可入讃佛轉法輪之眞道則幸甚

振鷺亭主人　識

予以微意續之因果應報可爲正本者也

先今日話是切

御膳手打(ごぜんてうち)
振鷺亭先生著
翁曽我(おきなそが)
右ハ當寅出板仕候
前編 寅ノ一番目

狂言綺語(きやうげんきぎよ)
同作
見通三世相(みとほしさんぜさう)
右ハ當寅出板仕候
後編 寅二番目

姉ハお宮
妹ハ小いと
同作
本町別女傳(ほんてうべつじよでん)
右之本二ノ替り出し申候
壹随讀

不樣昭明房情記

房情記序

書肆來て予に序を乞。房情記と題するは。作者の意を深くもしらねど。野暮とハ卑下の言葉にて。ちん〳〵鴨の正眞長明。うまこの染しはらわたにて。行水の流の里しかもとの水くさき手ごとにあらずといふ事か。鳴呼其才の高きこと。なんとやらも足下に見くだし。その筆の走る事なんとやらもをそしとせん。こゝらハまじめに書たりとも。手のないみのごとくにて。かわりのふとはもふしながら。序文も本のこてくのなれば蚯蚓をやたらにのたらしぬ。そこらはよろしく御見物。とさつしくだされかし。たとへたらわぬ我筆も。もしやのすへにもおこ

すてのふ。御求めごらんのほど。おたのもふしあげ。

りうしとこゆる。梅こゆる春の日。足をあらひし老ここ作者

化物の引込

夜八ツ時すき　かく

かし本やのおとくゐ

江戸中の

旦那方

青楼實記 大門雛形一對

傾城傾國にまよふは

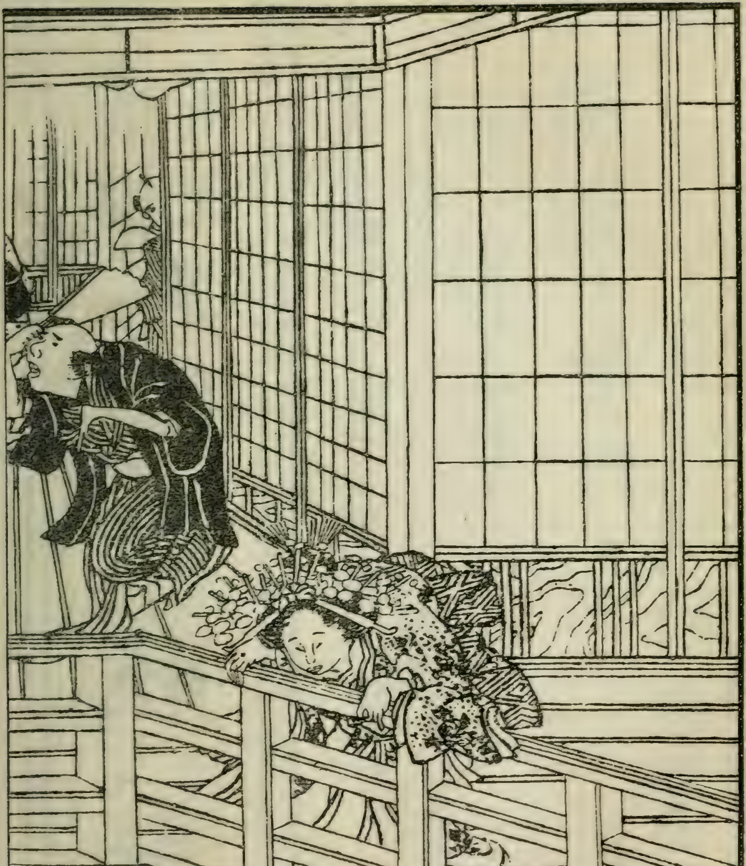
かよひの人は客人にまよふなり

○天迦葉花名枝

何事の

葉とも見えぬ

うとうとぬる程にし[illegible]峰乃雪



房情の品目

第一情　總まがきの己惚客

第二情　半まがきの苦肉の契情

第三情　まがきの中の眞情話

通計全情三種稿

不粋照明房情記

○

行水のながれ〳〵のうき里に。すむとハ名のミ濁江の。よどむうたかたきゆるのもむすぶもおなじさきの世の。ミなやくそくとさとりなバうぬぼれもなくいきすぎも。たえてこの世にあるまじきを。おのれにまよふが凡俗のくせ。あとさきしらぬむめんもくかたで風きる長らうか。

ゆきかふ人もおほかるにおれこそといふ• かほにてすましきつてゐる【客】年の頃廿六七•いろ白にてうすあばたあり•五分もすかぬといふ心もち•いハゆるはんかつう•女郎へこれでなくッちやアといつでもてまへからいろおとこのきハめただすたちなり•もつともこゝのうちへ二三ケ月まへよりのなじミ•こん夜ハミやうだいにて•うすぐらきところにおしこめられてゐる【アイ方としハづ】年のころ廿四五ぐらゐ•もとより手とりにてきれはなれよく•じよさいなきしろ物•かりたくのころより•とう•なにとかいふ大じんなじミとなり•なにごともひきかけてするゆえ•物まへのくらうもなく•かミのうへもきりまぜなどゝいふいやミをすて•こゝのうちにても一二の女郎•こよひハその大じん来りざしきハまんどうのごとく•はいばんろうぜきとしてひざをいるゝのところもなく•たいこげいしやのかづをつくして目もあやなり•又かのいろおとこきどりのきやくハものしづかにミやうだいべやにうづくまり•茶やのむすことさしむかひにてせきばくたるけしき•もとよりげいしやなどをよばぬを色男じたてとこゝろえ•手まへがつてのりやうけんもいつたいせうがよりおこることなり•あいかたもこのこゝろをよくしりてやはりいろきやくあつかいにしておくも•きやく帳のだめをさすこゝろにてよぶなるべし

【としハづ】いそがしそうにきたりて アヽもうざしきがさう〳〵しくッて、いつそきのぼせがしてなりイせんヨ。ヲヤとくさん茶やのむすこでへぶまじめだよ。もしへこんやアあいにくでいつそおきのどくざん

す子。何だかじれッたくッて〳〵（トすこしかほをしかめ思ひだしたやうに小ごゑになり）アノきんすけどんにさうまうしィしたがどうぞさうなればいゝが子【客】なにが【とし】何でもサ【客】ゥ、ざしきのことか。ナアニそりやァゐきもねへこつたわたしれどふでもよしサ【とし】おありがたうおす。マァおきゝなんしあのさう〴〵しいことを。モゥばからしいのう引【客】アノ何か。いなかの客か【とし】さうざいます【客】たま〳〵だからたんのうするほどされぐだらう。たいこもちのうしろへそるじざをうれしがつて居るうちがはなだのうとく公【とし】（心におかしくおもへども）ほんにさうざいますヨ【客】それだがあんな客でなければ。おれがどうでもたァ云ねへからかれいがんなせへ【とし】（おかしさをこらへ）なァに共くせそけへいつちやァやつはりじよせへはありません。そしてきいておくんなんし。けふもやくそくの盃を持てきたつていつそ恩にかけへスア、もうすかねへよう引（これれかの大じんかねてやくそくの盃をもつてきてやりしなりもつとも盃の下へ小ばん七両ばかり入れてありしゆへ女郎のかくべつに思ふべし）【新造】（ろうかにて）おいらんへ鳥渡【とし】何だなこけへきていひなナ。客人がたづねなんすなら今何だか内しようのおかみさんと。はなしをしてるたときうひなんし。もしへあつちの客人れいつでも八ッにれかへりィすからまァ待ておくんなんし ヲヤ火がねへヨト（手をたゝきかむろをよぶをしほにたつてゆくらうかをとふる女郎これハへやもち）【二タざと】モシヱ能お出なんした子【客】ヲヤ タざとさんかマァおへエンなせへ【さと】ヲ、こかァまことにせまいヨ。いつそ

きうくつでおつせう子【客】かん居のわびずまゐもわるくねへやつさ【さと】アノ四郎さんをなぜつれまうしてきておくんなんせんへ。おうらミざんすよ【客】けふれよんどころなく連哥の會へ行といひやしたッけこんどれぜひいつしよにきやせう【さと】アノ四郎さんれ哥をよくおよミなんすそうだ子手もよくおかきなんすョ【客】さうさつかねへこつたがおめへアノ此間うちかんざしへつけてゐなすッた。ふると一チから六まで鬮のでるものれどうしなすッた【さと】あれかへ。ありやァこのぢう子大きな坊さんといつ所にお出なんした時。四郎さんにあげ申イしたよ　（トはなしの内らうかを通る女郎としわかなれどもりこうものにてすゑたのもしくミゆる名へ）【鷺草】もしへよくお出なんした子ひとりかへ【客】（いまゝでたてひざをしてゐたをきうになをし）アイ【草】しんのことでおす子【客】モシおゐらん。いつもおきれへだ子【草】アレサ又おなぶんなんすよ【客】のう徳公（茶やなり）ぞつとするよのう【茶や】左様さ子【草】いやでかへ【客】又そんなことをいつて。あいさつにこまらせなさるよ【草】おなぶんなんすと。わたくしもおあいさつにこまりイすものをアノ子としれづさんが子坐敷のことができねへとつていつそぬしへおきのどくだとッてきをもんでお出なんしたヨ　（これよくいひあハせのゆきとゞきしこのなり）【客】ナァニどうでもいゝものを。そして何も今更にせへの様にまよふのぼせるのといふじやァなし。たゞおめへ方が心やすくしてくんなさるがおもしろくッてうかく＼くるのだものう

【さと】あんなマァあれせかゞみをおつせへすヨ。としわづさんがお聞なんしたら大ごつたらう【客】そりやァかまいやせん トロにはいへど心にはもう来そうなもんだと思へどもおとさたなきゆへすこしふさぐ【草】鳥渡いつてまいりィせう。今又ぢきにめへりすよ トたつ【客】マアよからう ト袖をつかまへる【草】あれさじきにめへりィす トいでゝゆく【さと】ア、こんやァなんだかふさいでならねへ【客】客か【さと】アィ初ざいますれナそしてまゝよサ まゝよといふことわからぬゆへ【客】フント いつたばかりまゝよとはいなかものゝことなりこのあいだよほどときうつる【茶や】ちとおかたづけれどうでござります【客】ウンそれもよからうの トいふやいな小べんにおつたてさう／＼かたづけてもらうにいかなるわけにやこのきやくのまれしどこほん間のとなりへおさまるいまだざしきは酒えんさいちうにて笑語のこゑみゝをつらぬくにこちらは名代べやにひとりなれバ茶やはぐれいぶんもわるくしりがむづ／＼するやうなれどもまさかふりすてゝもかへりがたく内にもいろ／＼用があるゆへ女郎のくるをまてどくらせどおともせずもじ／＼してゐる此きやくいつたいじようしきのしうぎばかりゆへちぶんの物にはならず何もせうばいとあきらめさうおうにうけてゐれバきやくはおのれが通りものゆへと思ふは大きなあやまりなり此ようなるともがらとかくおほくあそぶにもよくあと先をかへりミることかんようなるべし【客】アノこの間女げい者や男げい者が。會所へよばれたそうだがなんだの【茶や】さしたるこつてもねへさうでござります トいひかねてゐるいつたい廓中のことを茶やなどにきくは乳めいわくがるものなり【客】おんなげいしやれ。例のころぶ一件だそうだがほんかの【茶や】マァそんなこつてもございますそうさ【客】此間ほかで聞たら。なんだといつたつけ。アノ女げいしやが十人ッ、組でる内のせわやきが一人に成たそうだ【茶や】エ、【客】そしてもしそのうちに何ぞわりィことがあると。のこらずゐんりよするじやァねへか【茶や】エ、【客】そしてかゝへでも地めへでも。その内は勿論両どな

りをも當分せうばいをさせねへそうだの。なんぎなもんだ。しかしそのくらゐにせざァどうもなるめへよ。ともぎんこをさせるやうにしたァいゝ思ひつきだが。かんざしを二本より外にァさすなの。夏うらのついた物ァきせねへのといふそうだが。こいらァいらざることだの【茶や】へヱ【客】ときにとなりじやァきこんにされぐの【茶や】左様さ子ヱ（此うち茶やのおとこ出入りものをもちきたりだすことを呼いだす）（先さしたる用でへなしされどもせんこくよりたいくつたしてゐるゆへよきはつし所とおもひ）【茶や】宿でようじがあると申てよこしましたから。ちよつとまへッてまへります【客】ヲ、ともかくもしなせへ【茶や】（そばにゐる名代しんぞうにさゝやきあいかたをよびにやるとしへづふせうぐ\にきたるとこれをこゝろとそこノ\にいとまごひをしおとこをつれあしはやに出てゆくふとんのむかふへすへりすこしふさいたおもむきにて）もしへどうも坐敷のことができィせんでおきのどくざんす子ヱ【客】ナニどふでもいゝへナ【とし】それでもぬしをこんな所へおきまうしていつこきにかゝりィすよ。どうぞあの客人をはやくかへしィして子。ぬしやァきれいすきざんすからあつちをよく掃せへして。ゆるりとふせりィせう【客】ウン【とし】そんならどふかしてはやくかへるやうにいたしィせう（ト又でゝゆくきやくも心へやたけに思へどもひきとめられもせずひとりまじく\としてゐてもつまらずあんどうのむだがきもよこつくしゐねふりをしてゐるしんぞうへたにをはなしてこてもいつこうな物ゆへいろく\かんがへようく\）【客】アノさつきこつちへくるにの。柳橋から舩にのりやした【新】柳橋たァどこのことざんす【客】兩ごくのわきさ【新】兩國とへたしか夏になりィすと。花火のあがりィす所ざんす子【客】そうさ【新】アノかりたくのときやァ二階の格子からときぐこへィした

よ。あのホヲンと上へあがりィす玉も火だそうでおつすねへ【客】ウン火さ【新】モシあれがよく火事になりィせんねへひよつとどこぞへもへつきィしたらおほごとておつせう【客】なァに人も多ぜい付てゐるし。廣い川のなかだからきづけへわねへのさ【新】夫でもこれいやうでおつすよ【客】マァおれのはなしを聞なせへ。舟にのつてさつ／＼としるの木のあるあたりへくるとの【新】しるの木とはあのあつまはしのあつちの。おやしきざんすか【客】どうしてしつてる【新】瓦町の二階から　遠目がねで見ィした【客】それからの。その乘てゐた舟のなかゞあかァるくミへたのさ【新】ヲヤいやだ。どうしたんだ子ェ【客】おれもふしぎに思つて。若火なれの火でもおちやァしねへかとそこいらァミても何ともねへのさ。そのうちせんどうがあれ／＼といふからふりけへッてミたら　ト手でまねたしたがら　此くれへな人だまがあをゝィひかりをひるて。ふわり／＼とくるのスおれもぞつとしたのさ【新】ヲ、いやだそんなことをおいひなんすなこをゝおすれナ。この間こつちでも。京町にいやなことがありィしてこれくッてなりィせんからそんなはなしわおよしなんし【客】それでもこういふやうに　トこしをたゝおつな手つきをする　【新】ア、いやだョ引きミがわりイ。どうしいしよう子ェ引　トはぢもつとめもわすれなきごゑになりてかけだしてゆくきやくはふつとおもひつきにおとかしてしんぞうまでもちなしにしいよ／＼さえしく

本間もいつしか床もおさまり夜はしん／＼とふけわたりかりたくより ひきうつり後は床廻りきびしくおもてざしきたどへねそびれることたび／＼なりされバこのきやくの目はさらのごとくさえふすまーたもる風すゞやゝのことくさながら大イどうにことならずこのとき本間の床へは

なしもたえまくらにの三音をのこし三すが三のおとひくしといへどもまへしのきやくのみゝをつらぬくほのかにきこゆるためいきへむねにこたへともにためいきをつくなるべしされどもいまさらかへられもせずいまにあいつがきたらこういつてあゝいつてといふべきことをむねのうちにてすへんふくして小べんへつまれどもこゝのせうじをあけるおとがきこへたらもしはらをたつてかへろとでもおもひへせぬかとこらへてゐるのもきついしんしやくなりこれももとがほかからほれどころのないほどうぬが身にほれてゐるゆへなり。かの川柳に「うぬぼれをやめれバ外にほれてなしトいひしつかゝろともがらをやいふならんミぢか夜のころなりともこんなばんへ一時千秋のおもひなるべきにましてなが夜へ思ひやられてきのどくなり八ツもすぐるころざしきのきやくおきいでゝ小べんにゆくへさだめし二夕うすのふもすミてのことなるべしそれよりしたくをなしよう〱かへるやうすなり【とし】まへしべやへかけこミ もしねなんしたかへ【客】何ねるものか たぬきねいりをせぬへまだしも大できなり

【とし】いまよう〱かへりイすから子ちよつと仲の町までいつてまへりイすヨ。其うち坐敷をバだれぞにそういつて。きれへに掃除をしてもらいひせう子。そうしてゆつくりとおやすみなんしト いゝすてゝ出てゆく

まだ夜ぶかのことなり。客もあれバせひしんぞうでもやりさうな所を。自身におくりゆくハ宵にもらひし金のいかうにて。又何事もせわになるきやくゆへかくするなり。それとハしらず色男きどりの客ハおき出て。なかじきりのふすまをひらきざしきをミれバ。宵にとりちらせしもののところせきまでにおきならべ。あたりに人もなしかたづけるやうすもミへざれバぜひなく。自身にとりかたづけてろうかへいだし。遣手べやのすミからほうきをさがしきたり。屏風をたゝミ夜具をとりのくれバ。あやしくしわになりてしめりたるかミくずいくつともなく出るを。やう〱はき出しやぐをふるひてしきなをし。大ぼねをおりてはたらくもう

まれつきてのきれいずき。おのれが辭につかはるゝ也。かゝる形も夜なればこそよけれほかより見たらばさぞおかしかるべし。やう〳〵のことにてさつぱりときれいになるゆへ。五ッぶとんの上へあがり。いまにかへるかとのびたりちゞんだりまつてゐてもかへらず。どふぞはやくかへれかしこのきれいにしたのをミせてきもをつぶさせんと。心たのしくおもふうちはやなかのまの土圭。七ッをうちまもなく七ッ半を打ゆへ。どふしたことかとおもふおりから大戸のくゞりがあくゆへ。さてはいまかへりしと思ふに。はしごのおとどん〳〵〳〵と。大せいの足おとゆへ心ならず思ひおき出て次の間よりのぞきミれば。いぜんのきやくとつてかへしたいこもち女げいしやも。いぜんにばいし。ひきつれていりきたるあまりのことにきをのまれ。そこらあたりをまごついてゐるゆへしんざうがひつはつて又もとのまわしべやへつれゆく。かの客はすぐにとこの上へあがり大じやれとなる。まわしきやくはあッけにとられどをうしなひびやうのねもです。手もちなければろうかへいでゝれんじをミるに。いつしか夜はほの〴〵と明わたりむかふのやねにとまつてゐる鳶が。口かげをにくむ木兎をなぶるやうなかほをしてミながら。　イヽベラホウ引

○

【客】としのころ廿四五いさう人がらたいがいせかいへ上の部のまじりみせ 【女郎】へミせのおしよくにてはへぎわうすくねんあきにま
さなきしろうのきやくもさうおうにありしがうわきものゆへだん／＼おひなくしかゝたくにてよほどしやつきんをこしらへやう／＼引こし
たれへこのせつく前大むづかしにてとやかくむねをくるしむる所 【女郎】主ァよくお出なんした子。なんと思ひ
こよひへはつの客にてざしきもお定りの通りすミて床へ来る
なんしてきさしつたェ 【客】二三年まへにこの女郎のところへ一チ度来りしことありしが大ふできにてまじ／＼とひとりよねあかしすご／＼とかへりそのゝち心にもとめざれへ女郎のかほもろく／＼しらぬゆえこよひふとあがりし也
されどもそくのぬきあへせにて なんとも思ひねへけれど。きたけれバこそきたのさ【茶や】ヲヤあなたァいらしつ
たことがございますか【女郎】ソウサ。二三ねんばかりあとにいちどきさしッたのさ。ちよつ
と見まうしてもそりやァのがしィせん【客】ぬからぬかほにて もうそうなるかの【茶や】そりやァひと
かたならねへことでございますッ どふりであなたでなけりやァならねへと おつしやりました
【女郎】ヲヤさつそくだねへさつきざしきでそうまうしィせうとそんじいしたか主にはまで
もおかゝせ申ィすやうにおきどんなんしちやァわるうおすから。しらねへ顔をしておりいした
わたくしもついとうりの客しゆの様に思ひィせんから。だまつておりィしたも心のあるこつて
おす トしよさいなくいひくらあられきやくもせひなくわかいものにしうぎたするこのあいたふたつミつげいしやのしやれなとありて 【茶や】マッおいとまにいたしきせう。さや
うなら明朝おいらんおたのミ申ます【客】ミんなごてへぎ／＼【茶げい】ごきげんよう【女郎】

おさらばよ【茶げい】ハイトたち出る【げい】ヲヤはきものヶミへねへョ【茶や】ヲットれんしにありトうちつれてかへる【女郎】主ァほんにいつ見まうしもおんなじやうざんすョ【客】ナニそうでもあるめへ。おめへこそいつもくきやかだ【女郎】ヲャよろしくたよなんそおこりィせうか。わつちやァもう〳〵そんだッちやねへよいくつたと思ひなんす。これでも子まだはたちさ【客】フンそりやァ。あるきなすつたら足のうらがいたからう【女郎】なんとおつせへすへ。しやれじやァおつせんハナ。そしてなぜこんなにひさしくきさつしやらなんだへ【客】それこそおめへのほうにおぼへがあるだらう【女郎】ほんにあの時ァ。まことに酔てたハいなくねてしまいゝしたから。なんとかおゝもひなんしたろう子【客】ナァニわつちらァふだんそんなめにあひつけているから。それハなんともおもハねへが。あのじぶんにやァ山の千さんがしきりにくるのに。おめへもあの人にやァしんのこつたといふから。いくらあせつてもはじまらねへとあきらめてゐやしたが。千さんもこゝのにけへをとめられてほどもたつし若もといふあくねんがさざしてあがつたが。おめへが出なさるめへかとおもつて。大きにあんじたのさ【女郎】ばからしいでねへのなんのといふことがおざりィすものか。そして主ァ千さんとこゝろやすくなんすか【客】ナァニ千さんハしらねへが。ちつとわけがあつておめへとの中のことァしつてゐるのさ【女郎】

主がそうおつせんすから。おはなしまうしィすが。わたくしもあのじぶんにやァ千さんにも惚(ほれ)ていしたのさ。いまおもへバなぜあんなきであつたかとおもひィすくらゐさ。主(ぬし)もわりィごやうきでひさしくわづらッてゐなんしたそうだが。此ごろ扇(あふぎ)やへいきなんすはなしをきいて。いよ〳〵あいそうがつきィした【客】そういつてもこゝを出(で)さへしたら。あの人の所へゆくきだらうの【女郎】ナァニこれミなんしこのとうりさ ト右の手をまくりほりものゝけしたあとをミせる 【客】ヤレむごいめにあハせたの。それでもまだゆびのまたのハあるだらう【女郎】松(まつ)さんのかへ。これもけしてしまいたいけれど。これミなんしところかところだから。あとになりィしてハめにたちィせうと思ひィすからかうしておきィすのさ。もし氣におかゝりなんすならどうともなんし【客】けふやう〳〵二三ねんぶりてうらにきたものう。氣にやァどんなに思つたとッて。ヲ、そんならこうともいハれもしめへぜ【女郎】こう申ィしちやァなんとかおゝもひなんせうが。ぬしがこれからきさしつてせへくれさつしやれバ。わつちやァどんなこつてもいたしィす。それだつて主(ぬし)の身(み)へきづをつけやうといふのじやァおつせん。わつちばかりどうともいたしいす【客】おめへにいてへ思ひをさせていゝ子のふりでミてもゐられめへ。そして此頃(このごろ)ァやかましいじやァねへか【女郎】めへッからこつちのうちでハやかましうおすけれど。主せへお出なんしておく

んなんすりやァわつちの身ハどふなつてもようおつすよ。（まへにもいふとほり此節句まへむづかしけれバぜひくひとめんとかくいふ也）【客】そりやァ魚ごゝろあれハ水心ありさ【女郎】（此もんくにもはやしめたとおもひ）そんなら。主のむねのはれるやうにいたしィせうから。あすのばんきておくんなんし【客】そりやァありがてへといひてへが。そんなくすくつてへことァいやだの。くるならくるやうにしてきやせうよ【女郎】おつゥおつせへす子。主ァとふしたもんだねへ。そうお聞なんしてハわるうおつすハナ。わつちがそんなことアしゐへすめへとおゝもひなんすのかへ【客】ナァニそうハ思ハねへけれとも【女郎】そんなら ぜひお出なんしッ。そしてマァこつちへおよんなんしナ（トこれよりしハらくはなしときれてきこえず）【女郎】ヲヽあつい【客】ソリャァおきのどくだつけの【女郎】屏風を少しあけへせうか【客】よからう子【女郎】モシヱ主ァほんとうにきておくんなんす氣かへ【客】よんでせへくんなさるなら【女郎】おつゥおつせへす子。マァうそにもうれしいのゥ【客】こいつハおぼつかねへ【女郎】まだそんなことをおいひなんす。そんなら主ァお出なんすともお出なんせんともかつてになんし。しかしわたくしやァいつまでもはなれヱせんから。ひよんな者にそこまれたとあきらめてお出なんし。さあ主の手でなんとでもこゝへいれておくんなんし。いやであらッしやらうがこしようざんすよ。今針ョゥとりにやりィせう。コレおきわャア引【禿】ア、イ引（ト来るときによりかむろのおの字名をよぶハこゝのうちにかぎ）

ることなり【女郎】こゝへ顔を出しや ト小ごゑにて となりへいつて針を二本とつてきてくりやそつとよ

【禿】アイ トゆきそうにする【女郎】こう〳〵 小ごゑにて ろうそくゥの一ッ取てきやァ爰へ耳を出しや トみゝに口をよせ 十六せんのゥよ【禿】男たんすの引だしをかたノ＼いへせ出てゆく【女郎】とんだ女郎だとさぞおさげすミなんすだら

うのゥこんなことをいたしィしてそうして主がお出なんせんとどうしいせう子ェ【客】夫やァ

おめへにも似合ねへことを云なさる万一わつちがおめへの所へこれぎりこねへにしろわたしな

んざァしつていなさるとほりつきあひやなにかで。ぜひこのさとへくるもんだから。そんなう

しろぐらいことをして。外へでもゆく所をミつかッたらいゝはぢッかきだらう。から。そこに

きづけへれねへれナ【女郎】どうごきておくんなんしよ。主がお出なんせんといきてれいられ

へせんよ とかくするうちかむろはりをもつて来ておいてゆくはやひけ四ツのひようし木もなり程なくひつそりとなる【客】夜れながいじやァねへか【女郎】それだ

からながミせの時ァ。まことにたいくつでなりィせん【客】そうだらうよ。コゥさつきおめへ

ミせで何をしてゐた【女郎】ヲヤミさしつたかへばからしい イヨウ引ヲホヽヽホ【客】なにをわらうのだ

【女郎】それたつてもおかしうおすれナ【客】何が【女郎】あの子 トいひそうにして マァ申ィすめへ。

あんまりばからしィから【客】そういふ程なを聞てへ子【女郎】夫だつても【客】何だナ初心

らしい【女郎】アノあんまりたいくつだもんざんすから子。苦り紅さんとざんなんをやいてた

べてゐゝした「客」どうかそんな物らしかつたがおいらァ又かのばゝァの椎のミかと思つた ちかごろ廓中へしゐのミをうるばゝアの來ることミなさまごぞんし也 いぢのきたねへやうだが喰はなしをしたらちつと はらがきたやうだ「女郎」酒をおあんなんせんかェ「客」そいつァおもしれェサァちやわんとしよう「女郎」ついでおあげ申ィしよう「客」ヲットアリきミやうかんろ〳〵「女郎」アレサそりようのこしておのませなんし トとつてのむ もしへかげんをなんしてお上んなんし目がちらつくと彼事がわるうおッすから「客」それでもしらふじやァきのどくで出來ねへわナ「女郎」きのよわいねへもしへどふぞ其屛風をぐつとひいておくんなんし。こつちのもこういたしゐせう「客」そのすゞり箱をこつちへよこしな。ときにこの針をまく糸がねへ「女郎」ほんに子ェ。ばからしいことをしいした。さつきとつておくのでおざりいしたものゥ。きのつかね子ェ「客」そいつァとんとはじまらねへせんぎだ。よしにしようか「女郎」しばらくかんがへ もしいゝちゑがありィす「客」どうするのだ「女郎」この中の子。ふとんのうらをすこしほころばして。いとをぬきィせう「客」あとでこまるだらうぜ「女郎」なァにようおつさァ トふとんをまくり糸をひいて歯にてくひきり針をまく さァぞんぶんにおほんなんし「客」目をねふつてゐな ト左の手をまくりほりさうにして こいつァあかりうけがわりい「女郎」ほんにのうおゝれつてへ。もしこつちのほうへお出なんし「客」こうか「女郎」やつはりおんなじこつてお

すネ【客】どうしたらよからう【女郎】こうしひしようそのミせたばこぼんをおよこしなんしそれをこけへ置ィして子。灰ふきのふたをうらがへして。それへろうそくをおたてなんし。こう蠟をながしてさ【客】ヲ、あぶねへよしく\しめく\ィ、ヵじつとしてゐなよ【女郎】ァ、もしェかりたくのじぶんに子。あの猪の外のかつさんに子。すでにこんなことをするところでおつしたョト これよりのちはしんとして物おとなけれバ作者もしろことあたへず

○ せかいへ小日世二人り一座もつともなじミ床おさまりて屏風のわきに茶めしのだいをとりまき女郎まじりにくつてゐる

【多風】年の比三十四五うへぎしんしうつむぎ酒とあぶらてひかく\するやうによごれたやつ團十郎がしきせふくぼたんのしたゆかたじやくはいにはなやかな帶をしめしへちりからもすこしはかりくびおちり落噺しの前座といふ人體今一人ハ【仁三】年の比廿六七ゐせうつけたいかいこれハなにもけいのない人なれどた風ほどきいたふうでもなくさうおふにどうらくもしたれどもそれをおもてへ出さずしんびやうにしてゐるゆへ女郎もまんざらでなきあんばいなり仁三へめしをくつてしまひかたわきへよつてようじをつかひなから【仁三】なる程た風さんハめしもたつしやだの 仁三がゐいかたむだ川年二十ばかりこれハ川筋より此あいだくらがひをして来りしゆえなにごともじよさいなくこミ[illegible]ところへきがつきまだいつかうさとことばがうつらず思ひのほかふとつはらの女郎なり【むだ川】あれさそんなことをいつてえんりよをさしつちやアわりいサアよそつてあげまうしいせう ト笑ひながら手をを出す【多風】サアこれから茶めしのしんがりだ。諸事色氣よりくひけの事た た風かあいかたそげ山年廿四五かんざしのあとふばんなりにはげ禿すごくミゆれど思ひの外心よしなり【そげ山】仁三さんハいつそしようしよくだよ【風】其かハり女にかゝつちやア中ミせのだるまだ【仁】目がねへといふのかおきやァがれそういふ多風さんも中の町で トいひかけてかほをミて はなそうか【山】はなしてお聞せなんし

〔風〕なァにおれかじんじようにまうしあげやう。さる大ミせのばんしんよ。いつもしまちよめんを五めへぐらゐぶつかさねて。後家もちのなゝつやでも。三兩ゝおんびらなしといふめへざしに。ちいさな銀かんざし。それひらッてへまげのひつつめ嶋田て。このゐゝだも白しりめんのふんどしをしめて。内しようからしりをくつたといふ。ぐつとにくミ仕立な女よ。目がくり〳〵として半四郎づぶ〔川〕あれさそのこつちやァねへ。ぬしがどうかさしつた事をサ〔山〕サァきり〳〵おつせへし〔風〕ハテこれからはなさねへけりやァ。狂言の筋がわからねへ。そのしんとさせる茶屋でたび〳〵おちよふとおもひなせへ。何たかおつにせじがいゝから。いつぞれ〳〵ト（はなしにのりがきてまぢめになるところへすふきいだし）〔山〕おやむしのいゝ〔川〕あれさまあたまつてお聞なんしそれからへ〔風〕そこである時さし向ヒになつたと思ひなせへ。といふ身になつてもしへいつそなれ〳〵しいやうだが。ぬしにしんにおねげへがありますと。たまらねへじやァねへか。胸へどつきり來たが。そしらぬ顔でなんだへといふと。此事をかならずだれにもはなしておくんなんすな。そしてまァかなへてくれさつしやる氣か。くれさつしやらねへ氣かといふから。さァしめたとなをへいきな顔色で。身にかなつたことならバといふと。それでもこんなことをまうしいして。さぞおさけすミなんすだらう。いつそはづかしいと。わつちがひざへ。トうつむ

けになつたらう【山】フゥきついこつた【風】そこでいふことをきいてくんな。わたしハ妹が一人リありますが。あにさんかどうらしくて。わたしがゐるうちへしちによこして。すでにながれる所さきようでへつれだつてこんな身になるもぐわいぶんかわるしことに一ッうちにゐちやア。ほうべへしうのめへへちきがねがあつてつらいものざいますから。いろ〳〵してやつと仲の町へきよねんからげいしやにだしいした。それさぬしかしたかたをうちなんす俄に出るおすいさこねへだ茶屋がしらのにけへで。けいこの有たとき。ぬしもいかしつてしつてゐさつしやる通り。年がいかねへに物おぼえがわりいものだから。いろ〳〵につきまハされるとつて。わたしをひきまハしちやァないてばつかりおりいすから。どふぞそのきつかけとやらのちがハねへやうなぬし氣をつけてやつておくんなんし。しんにおねげへざいます。そして客人といつしよにちつとうちへもあそびにお出なんし。そのときァきつとごちそうまうしいすもよきてきたらう。あんまりおれもくやしいから。れいのたべんを出してそりやァ魚心あれバ水心とやらだと。小あたりにあたつてミたが。はりこのあねさんがでんがくをやくやうによこたてへかぶりをふつて。大不承知【川】ヲヤ〳〵すかねへのヲ【山】フゥだれがおめへにおれなれバこそよんでやるのだ【風】おれなればこそ來てやるのだ【仁】サァ又ふうふけんくハがはじまつた

〔風〕仁三さんおめへのうれぎはなんだ〔仁〕ほんばとやらさ〔風〕ゥヽ（大）てきとといふやつだの。おらがあねさんのうれきがなんだ藤鼠か〔山〕やつはりむらさきさ〔風〕ゥ、なる程ひあふぎのぬひのおつこちたあとはかり昔の色が残つてゐる。コレがくむくのどうをそなこれでもむかしいひおりめんだらう。さんけいのあるびんづるそんじやとおんなじこつて。あけへ所がところ〴〵に残つてゐるうちがいゝ。これもだれぞの古着で中の町をも見たやつだらうが。不幸にして。手めへにかゝれていつせうじようめへのおりたまがきれのぞくこともならねへといふやつだ〔山〕サァ又た風さんのわる口がはじまつた〔風〕おや此大平の勢はきめねへ〳〵と思つたら。おきやァがれ底のはげた所だ〔山〕はらもそのうちだもうおしめへなんしくから。といふおりかむろをしかりながららうかたとにる〔あた花〕いけそう〴〵しいがきだなんたな〔禿みとり〕それでも中の町へいくから。しげのとんにきものをかしてくれといつてもかしませんものを〔禿しけの〕おらァこんたにかすきものいれねへよ。何のいぢきたなめ〔ミどり〕なきむしにやましだよ〔花〕ヱ、そう〴〵しいといふのにとぼけやいぢをわるくしねへてかしてやりなんし。そして中の町へいくならかんべやのたばこ箱に。おあしがあるから五匁かつてくるのだよ。コレサく　むかふのれかけとやらがわりいから。あげやまちのゐびやでよ。とぼけや手めへにも用があるよ　ト　しやうじをくへらりと

（あけあいさつもなくそうわとかいふすゝりぶたのたいたとり）藤七どんがそうわがたりねへといつたから。これをもつてゐつて。コルサマァ人のいふことを聞きやな。おれが床をまハすなら。おきわどんのむかふしやァわりいと。そつといふのだよ。ァ、草臥た。た風よく來たの【風】やりて部やのむかふで。わりィたァおたのなすびだの【花】なァにはしごのをとがやかましいからさ。これからすつかり寐てやらうといふやつさ【仁】あんまりそうでもありやすめへ【花】ヲャ仁三さんくらくつてさつはりしれへしなんだむた川さんこれへいつぺへついでおくんなんし（ト茶わんにひきうけかう〳〵をゆびてひつさいてくひながら）こんやのやうにまご付たばんハねへ。れいのさんじるしがきたらふ。いつでもけんはんのげいしやしゆうをつれてくるもんだから。あのざまじやァいられめへ（トそてを手かるくたゝいて）これが此間の一ッけんでなしやつとのことでわつちが鏡とゑどぎのさんのうしろざしでいれけへたァな【山】そしておめへのあたまのもなァどうした【花】とこがまハるからうかつのさんにかしてやつた【山】あの子ハミせか【花】そうよつふあたまのものがなくてミともねへから。わつちがはやくあがつた時ァいつでもかしてさゝせるハな（さすがのた風も此はなしハきかぬかほにてさてこゝへむだ川かとこたれバミづくろひをして）【川】サァぢんをひかふ【花】わつちもめへりィせうむだ川さん【山花】おやすミなんし【川】まァしよう おす（と聞すて四人とや〳〵と出）

（ゆくあとハひつそりかんとしてしハらくはなしもなくサアおやすミなんしと仁三ハ床のうゑへおひあざべうふたひをまへすときゑんぎなをしのからしのおとばた〳〵まへにもいふごとく此女郎ハ川のほうからのくらがひゆえさしむかひになるといよ〳〵果ことばなし）

【川】あのをとれなんたへ【仁】ありやァ東河岸で。客しんかねへと。しよくだいのうゐでミすがミをもやしたりあんなにかうしをばた〳〵たゝいたりするが。客人のくるましなびたそうさ【川】ヲャおつだね（トしやけんによきをまくる）【仁】さつきてへふやりてにたんしられたな。うわきもてへげへにするがいゝ【川】フゥそんなげんきじやァねへ。こゞとこそあらふにおきわどんのいふことを聞てくんな。おれがさつきびしやもんさまからけへりに見世のではなをミたが。おめへのおしろいがいつちうすいから。もつとこく〳〵つけなせへそれか川にゐたくせがうせねへのだッさ。そしておへやといれずにねへせうといへの。げいしやのことを羽おりといふなのと　おだんきよ，なんといつたッてお生れつきのとんちきがおなをりなさるものか【仁】なるほとあつちたァちがつてこまることがあるたらうのふ【川】まァでへいちきやくしりなけへにあきてならねへれな，あつちしやァそれ羽おりの三四めへに太夫楽でもよんで。ざつとざしききりてかへるといふ手もあり。そうでなくッてもおむかへ〳〵でおひ出すだらう。さァこつちだ見せのでるか出ねへにおしあかつて。口の出るまであれせ鏡もつらからうさつしておくんなんし【仁】おめへのおくんなんしれもらつて來たやうだ【川】そうよのう。そうざんすこうざんすと。手めへでいひながらをかしくなるよそれよりをかしいれこつちへ來た時こあめ町のよし岡

から來る。唐桟にもらつた唐ざんを着てきたら。もめん着ものだとッて。そんなかわらハァな。あたまへハべた〳〵あぶらァくつつけられるし。いゝ年つかまつッて。ひだりめんのふんどし。きちげへじみきつてゐらァ。ア、なんだかねぐるしいト ねまき帶のむすびめをちゝの所までゆりあけ【川】コヲおめへなんといふきでくるのだ【仁】ほれたからよ【川】しやれじやァねへハな【仁】ハテどこにもふつてへな金をもつて。かくれしのんでいやなところへくるもんか。又とこのおやだッてよく女郎買ニいつたッてほめるばかもねへものだ【川】そりやァそうだけれどつきえへといふこともあらァな。なんだかごしんとやらがわからねへト はらばひになりたばこをすひつけるふたひき三ひき、むをわきからとらふとするト【川】まちな此たばかァしたにあるよ トべうぶへかけたうハぎをわこうながらひきおとしそのたもとにいれておいたゆもとぎいくのやうなまるいひきもの〻たばこいれもつともてうつがひもん所きんづくめなるをいだし さァこりやうのみな【仁】フゥ トいつたはかりこいつ色男だらうとおもひわざと聞す【川】わつちが十七の秋だつけ。此人にむやミにほれて。雨のふるときさんばしをはだしでおつかけたときやァ。大そうといれたッけ【仁】夫じや今でも【川】にくいこともねへのさ。それだけれど今じやァかミさんハいれるし。いゝなぶりごろなこぞうたとおもつて。いゝやうにされたからよん所なくあいそづかしさ【仁】ちつとぐちつぽいやうだが。何もミれんの殘らねへものが。よし原くたりまでこいつをもつてもこめへス【川】こせへなをすもつうゐだとしよてへもちかたぎになつたのよ。もう二

三年もわけへと。これ見ねへと。火ばちの中へでもほうりこもうといふだが。そうするでもねへから。おめへもつていつてきせるをこせへるたしにでもしねへ　仁三ハわざとわらひながら　【仁】そしてまァおれがごしんとやらがわかりやァ手めへどうする【川】どうするッて。ほりものをしたッてかまをきつたッて。うれしがるたちでもねへから。どこぞで二十りやうばかり金をかりてくんな。それ程できずは十五兩でもいゝ【仁】そりやう手めへとうする【川】ながのねんきをかゝへて。はかゞゝしくこゝにもいられめへとおもふから。又口を聞てもらつて。さんげんやへでも出てみやうと思ふのさ。でへし金をかりねへけりやァ。四匁かんじようだから五日うりづめりやァ、壹兩貳分貳朱とれるの。そのうち床のそんりやうかれこれにひけたところが。壹兩ぐらゐハ手どれるから。こればかりな金ハおきにけへせるハな。人げんの心ハけちなもので。かけへのうちハきやくじんがけへッても。むけへのかゝるまでハ寐てゐるが。サァじめへになつてみなせへ。そう〳〵かえつてかせぐ氣になるから。うりだかもおのづとあかるヨ。それからハそうだんづくで。おめへの氣のすむやうにしたらよかろうじやァねへか【仁】あすかァたしか三味せんがいるの【川】それもそんりやうでいゝのさ。五日にたつた百五十。床も上どこ中床とふたとをりあつてね　トはなしのさいちうせうじをあけて　【多風】仁三公あしたァ文字たかが會ぶれにたのまれた

を。さつはりわすれたが。もうしゆつたつとしようじやァねへか【川】きうにおもひだしたやうにさとことばになりて おや

ばからしい。まだはやいじやァおつせんか トおきかへるひようしにまへかんざしがばつたりそれをきつかけに

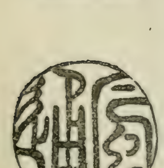
七ッのひようし木

コン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

良权静橙

良夜靜搔序

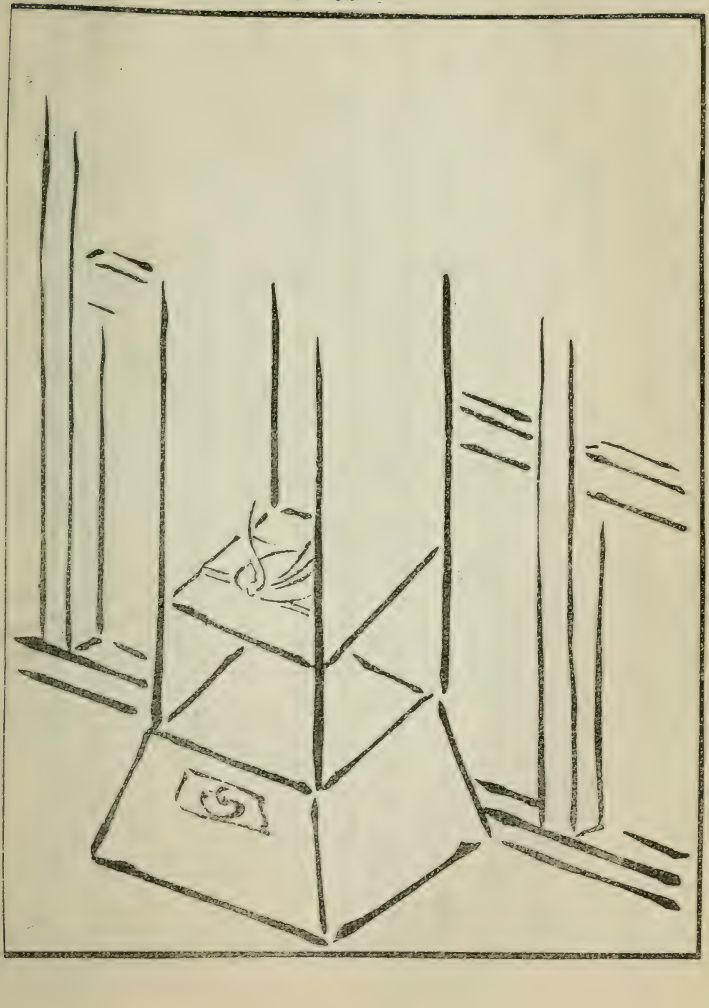
世有大通者。盗人體之善也矣。蓋野夫番町所偏。
瀟落貧乏止雅。滅田無生應呼富人。扇子閒閑之
隱居。天井直視之息子。下妻之兄生。間之弟遊往
來地廻之戯微。不可莫。籬之隅。靜搔響之玄
妙處。書見一卷。生而有甲斐。浮世生死之菊麻
呂。携來。讀始讀終則。昔日學者文體初章。相
合知之。水井戸中。久久次第。于呆麼。題之曰
良夜靜搔。首書。重語。譫言。古趣向今出之。
淺黄染而。藍深。益眞青。藍川之風通。常談之
序



良夜靜掻

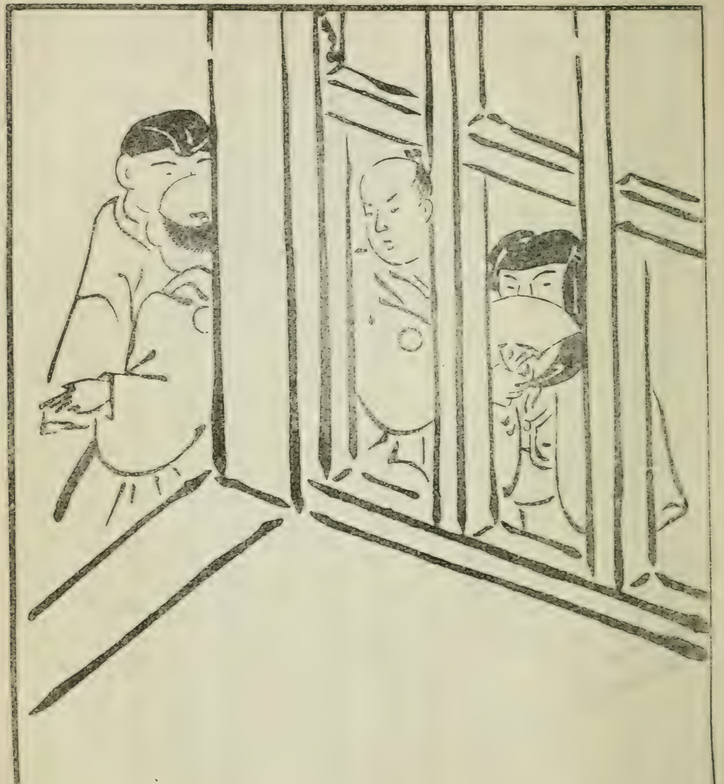
靜掻の音の妙なるには魄を南の天竺のぼせ蘭麝の香の濃なるには魂を西の海原に飛すとハおいらんの御江都なり北州ハ観音の後千住の手前山谷の上日本堤の側に有是に通ふに四ッの道あり馬道たんぼ中田市大音寺前猪牙に乗る者ハ堀より上り四手に乗るものハ大門口に下る馬に跨武士あれバ歩行にて来る町人あり浮れ来る諸人衣紋坂に衣紋をつくろふ事をせされハ編笠茶屋に編笠の有る事を不レ見會所の四郎兵衛ハ芝居で知大門の制札ハ江都砂子で見る昏にハ焼葬の臭烟に鼻を閉曉ハ穢多か太鼓に目をひらく元吉原ハ方貳町今の吉原ハ増に壹丁の余慶を蒙る四方溝を構へて高塀を遶らし五衖軒を並べ通て大格子を搆ふ大門よりして水戸尻まで是を中の町といふ茶屋軒をつらね同捲琅玕箔兩側道を夾んで共に照す銀燭の光綺席瓊筵共にひらく金花酒桐楠相逢て是亭飲夜光の盃些美とした硯蓋ハ客に醉を進め爽快とした吸物にハ客の夢をおとろかす夏は煮花の冷茶に暑を忘冬ハ水雑水の温なるに寒を凌綫立流洒して客を迎る傾城膝を屈し低頭て客にもたれる幇閑椽に腰かけて落そうにしてゐる新妓奥に大盤膝引かきの

倒れんとする敬薄あり見世に烟艸を呑では高慢に脂を下るかし樓上に酒を酌んてハ風流に闘レ拳清哥あれハ淨瑠理あり大極聲色あれバ妙舞有飛冴琴曲音の古雅なるハ澄二心耳一聞河東節の當世なるハ行義を正して諷天に緩駒下駄は雷の轟がごとく地を走る挑燈ハ星の光に似たり衣莊ハ夜の虹蜺かと怪しミ飜レ風二布に鸚鵡かへしの哥を思ふ大勢連來る雛妓あれハ一人て付る小鬟あり來れる遊客しらせる茶屋名染の女郎ハ不知顏にて來り茶屋の女房ハ少し不レ知貌に挨拶す八文字にふミ出す道中ハ昴ミとして天人の逢に降るかとうたかひ二人禿の幼穉ハ依ミとして仙童の來戯かとおもふ腰の細きや綽約として糸萩の露にゆらめくか如く髪の黒きハ嬋娟として紆絲の水に漬れるが如し鉄漿克塗て齒ハ西瓜の犀のごとく紅粉淡掃バ顏蕣花のことし丹華の唇銀簪挿ニ雲鬟一不レ冬とも氷柱の下るににたり駒屐蹀雨足不烌共雁の落るに似たり左りに顧バ息子開扇のそき右に呵ミれハ半加攝レ裾行徃あれハ來るあり皆とをりもの送れる有ハ迎るあり皆不粋あいた見たさに引立られてハ竹町の九ッも土手の四ッ一夜不レ逢千年の心逢ふて戻れハ千里も一里輿に乘して行人あれハ興盡て歸るあり行もかへるも冶容極て花麗花麗十指の指さす事をたのしミ衣服還十目の視る叓を欲す繁花にハ耽り易し當世風榮辱には泥やすし浮浪の至り千金を一擲して不レ說レ貧却利回興萬錢の費傾レ家代をかたむけ大



良夜靜搔

四



不埒朝は雲助となり夕に飴賣間走惣裏胡蝶の中位高し居中行灯側坐はつらなる新妓格子の際かいどり振袖の長きものにはまかれ襟裏二布の赤きものにはまよふ烟草盆ならんでこちやわけにくい逢坂の關火鉢火盛んてのほせてミへかたし吉埜山遊女如レ花ひとしく獻笑爺媚 世柳の姿態をつくし奸を極て憶ニ孰菖蒲哥大生麗質不レ琢 奇麗なるは衣通姫の高探賭粉化粧不屑 美 數は小町の高慢飛燕か髏の輕き西施か顰卑衛后髪 鬢 貴妃か笑 杜 若の尖としたる立姿海棠の艶なる 顏 秋の蟬の露にそほてる兩鬢大夜の芙蓉の新に水をはなるゝ化粧寛 濶にして胸引明たるは 徒 をうると見え落寞して真 率は誠をうるとおもふ面憐けに負かたむけて微笑たる偷眼賣弄に空 嘯 て人を見下したる冷笑高慢に哥書を詠てはむかしを友とするに似たりしやれて書草紙を見ては今を茶にするがとし箒を立て兜符は早く立ざる事をにくミ疊算に待侘ては遅く來るとをうらむ來れるみをまきかへしては約束の違ひし中をかなしミ逗れる文を封しては機嫌の直ることを祈るこなたよりのぞけはかなたより見晄では焦燥ふられたる宵誘こんては笑首尾のなりたる夜思案工夫と見る顏には客のきれたるかと可愛附耳低言よろこへる顏には色客の來るかとにくし籬に人足しげきには眼を皿のごとくにして見外に哥の聲すれば耳を洞の如くにして闘客の留主に表に立て間夫のくるを待侘るあれば猿子ねむりをはじめて遣り手に

つめらるゝもあり不好男か見立れハ顔を内にしてのがれ色男の連が來れハ目をまハしてかけ出す籬の隅て色容と口舌をし吸付烟艸て使をあやなし細見に値を問ふ武士袖の梅に醉を醒す梵讃二人三人の友達はともに連てさぞやさぞ／＼此早晩ハとうたひ中能同志は左右にわかれてこちへ來やれそつちへゆかふと言向ふの人／＼尾張屋に夫に引かへけしからぬ聲の按摩針醫のすゥ鯆のすゥは醋魚賣のしやれおふよそた／＼そうだ／＼は地まハりの下品千鳥どう／＼ハ禿の友よぶ聲の可愛らしきこの子何して居をる馬鹿な面とはやり手のしかるおそろしき聲見物に出る交驪あれハ名を問ふて上る初會あり見立て直によい女郎買あれハ見立まハりて引ヶまへにあしき女郎買も有當路なる客は女郎に連立て定紋の大挑燈を輝かし茶屋船宿の挑灯と共に連て光を増新雛小鬢の華やかに牽頭末社のにぎやかに郎君子弟は腰に手帕をはさミ遣り手ハ腰に鑰足を下ぐれた／＼と胡梯を上りてハ酔て人の坐鋪に入らんとし座敷／＼より名を呼れてハゑミを含んで嬉しがる座せんと欲放蕩馴染の坐敷向レ堤 衆 客の過るを見錦の綾羅ハ入口に風に飜て快玉の軸履ハ廊下に響て淸し回レ頭 床に懸る山水の畫垂レ眼 疊の表青海原れんしひらけてハ鏡臺月 如レ鏡襖戸ざしてハ口舌晴嵐の如し彈箏の光に瀬川の夕照を移し將棊のさしかけハ堅田に落る雁金に似たり衣桁の小袖は歸帆と見丁子釜のたぎれるハ夜の雨かと疑ふ白無垢

八

の脫捨たるは暮雪と思ひ太神宮の鈴の音も晩鐘と聞出さんと欲していつもある楊枝要だんすの引出し明んと欲して何もなし長持の蓋二ッあれどつらからぬ定紋の塗枕三ッかさねてはなをうれし緋縮紗の蒲團九年母の硯蓋もいつ見ても風流に數の子の塩じミたるも久しけれど意氣に持出す貴道具ハ一向宗の佛檀の如く食しがたふして其價極て貴く茶ハ入る新造土瓶の中筋子ハ出す禿箸箱の內相對して箸をまじゆ馴染の客馴染べ何ぞ悪からん好不好料理す部屋の獻立は醬油一合にして鰹節是一本青菜は油揚と共に土鍋に煮へ豆腐ハ椎茸と共に火鉢にかゝる煮蕃椒の甘きハ砂糖を後楯にし漬青菜は酒塩を加味してうまし茶づらんと欲して調にやる梅漬澤庵の腐食し難し放蕩者の腹箱入の蒲燒ハ蓋を開けて芬馥大碟兒魚鱠ハ鼻を掩ふて辛烈鍋燒ふハ／＼の溫なる水菓子水肴の冷なる田樂燒立は串をあげて食鯛魚の濱燒は箸を下て吃す菓子の入器ハ鳥籠の形に似上重には干菓子下餅菓子この時攤來る花車子共共に食して鬧熱なり引ヶ岡ッの比咄しの辭極て番語强于呆麼ありんす不好いせんよしなんし拜ミんす待なんしあもせハしなふおざんす灑落なんすなやめなんし待てゐんすにへおいてなんしまいりんすまい氣か替りなんしたむがふありんす奈何なんした死にんすいひなんした今少居なんしきまりなんした呆弓んす絮繁をしなんす申しんした吳なんし上申しんしやういりんせん咄し半にして酒盛はじむ長哥淨瑠

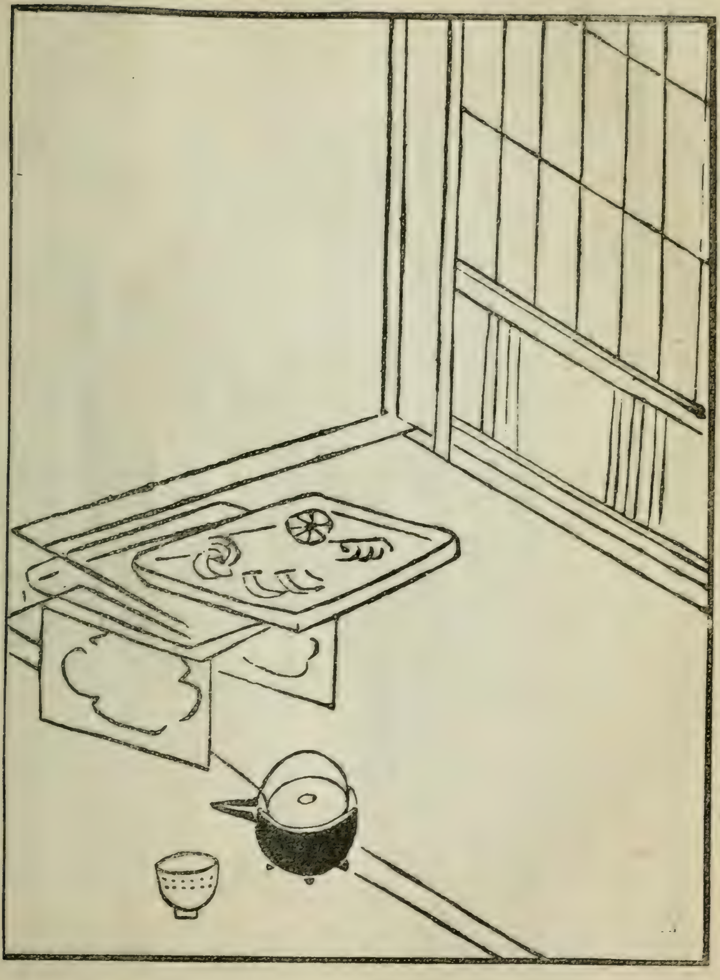
理三味線のさわぎ眞に聞尺八胡弓の愁華ハ鬪ハす角力香ハ競ふ競馬鼓琴哥骨牌ハむべにして上品めくり聲色ハ身振して下品表坐鋪の調子低の目利安隣座敷て齁々地と高鼾の聲廊下座敷の私語奥坐鋪でハわかれ酒燒味噌で茶づる床の睦言廊下のばた〳〵間夫と出合いきなり立引千話悋氣いやミからミ口舌の手管轉背てハ腹立懸河られてハよろこひ有客てハかけ出しもらハれては含とし惚れてハ說謊抓られてハうれしがりこなされてハ口惜しく明られては晦氣袖留新造出す相談年明身請の咄しつけるきれるのいやらしく桶伏髮をきるのおそろしく醉醴人をハ落つかせ否顏客にハぬれを言定紋付の枕盃をこしらへておぬしをのぼせ錢なし客には宵から寐てまきつけ晝ミせに客の噂をすれどほれた客をハおくびにも出さす床か納つてちらと過るとすかぬ客をハうるさい客と隣座敷へなりこむかなたを怨慕も僞りこなたを埋怨も眞ならす泣あかし笑ひくらし眞をいつハり僞りを眞顏初會の再會約束名染の敷初牛やり手の祝義女郎屋への付屆紋日のやくそく惣花の豐饒一階花の悋嗇惣仕舞大さわぎ上ばしの寂寥身揚のきのとくお茶を引の物うさうそより出るまことあり截髮花繡はじめのまこと後のうそ指切爪はがし起請千枚客萬人うきふししげき川竹のかハすまくらの數〳〵意氣と見へる兩可あれハこけと見せるとをりもの客に唯の客吉原好あり色に地色客眞の色客ありきのふ奥羽の人に比翼の契をなしけふは越北

の人に同穴のかたらひをなす夕は町人の妻となりて晝ハ武士の妾となる是見よ晝夜色男の茶漬惚るは夜暮あれ見よ玉子の四角と晦日に店賃出るを知るハ粋おもひまいらせぬと書くふみもなけれバかわりませふと書誓紙もないはづさハいへど女郎の身の上ほといとふしきハなし泰山よりおもき命も鴻毛より輕じ眞から可愛がれハ實から最惜ミ不レ見夜をうらむれハ不會夜をかこつ逢ふた夜の笑顏か曉の涙とへんじ待宵には鐘突坊主を恨ミ夜半には早啼する公鷄をにくむ春の日の永きにハ我花の散る事をおしミ秋の空にハ男のこゝろのかハる事をいたむ夏は蚊をやくに心をもやし冬は置火燵にむねをこがす形ミやびやかにして何苦勞なしとミゆれど店賃不出世帶朝な夕な飯たかぬのミにして盆暮の疊の表替兩度襖障子のはりかへ挑燈長傘も同しく床の置物おなしく懸物花活碁盤將棊盤胡弓三味線琴双六盤身住舞道具丁字釜簞笥衣桁は勿論茶器被臥細軟のいろ〳〵本もなければ棚の上おかしく衣桁もなければ坐敷淋しく駒下駄上草履も奇麗に炭蠟燭の貯櫛は瑇瑁いやしく象の櫛もならす銀の釵流石まがいもにげなく名古屋元結五十嵐油御簾の鼻帋國府の烟艸親方の祝義佛事茶屋船宿の付届牛やり手お針への心付妹女郎禿の世話親里のかなしき便女衒がにくきゆすり坊主山伏の衣の奉加太夫藝者の會のすり物暮の餅つき春の年玉四季の小袖も同し物着ては見世くるしく送り迎の衣類も同し物ハ中の町いぶせ

く少し放鬆とおもえバ新造出せのせめに預ミなんしいづれか身の油ならざらん是をおもへバ少しの無心に欲づら女郎といふも亦むごからずや夫のミならず暮のくるしさ春のものとて拵し値もなくたのめし客のやくそくも間違正月しまからなんぞいの損料の小袖に胸をいため是ぞと爲になる客ハ契濶思はぬ人のしげ／＼なる笑て心くるしき日もあれバ泣て心うれしき夕アもあり見世時分には太神宮の鈴の音に身の毛をよだて色客にハ機嫌のわるひ客と取なして心遣ひす夫のミか紋日のめぐり來る其はやさ我身は勿論妹女郎の身揚りに難義す正月松のうち七くさ爽講十一日は藏開十四日としこし十五日十六日ハ薮日なり家風によりて十七日十八日に新造つくるもありとなん二月ハ初午江戸町二丁目京町新町挑灯出して賑なり三月節句卯月朔日八日は灌佛五月端午 同 六日六月朔日文月七夕十日十五日十六日十二日の明六ツ時は中の町艸市なれど紋日にあらず十三日は休にして殘らず見世なし朝日如來がにぎやかなり八月八朔稲荷の祭禮月見十六日九月は重陽十三夜十月玄猪廿日夷講霜月十五日八日ハ火焼江戸町貳丁目角町には挑燈出さす師走ハ十七十八日觀音の市にして家によりて新造付さるもありとなん是新造付大紋日にして月並紋日は細見に詳なり蓋し五丁町と申は江戸町二丁と京町二丁角町なり京町貳丁目是を新町といふは遲く出來しゆへ名付揚屋町は揚屋を集し所なれど今ハ名のミにして揚屋は

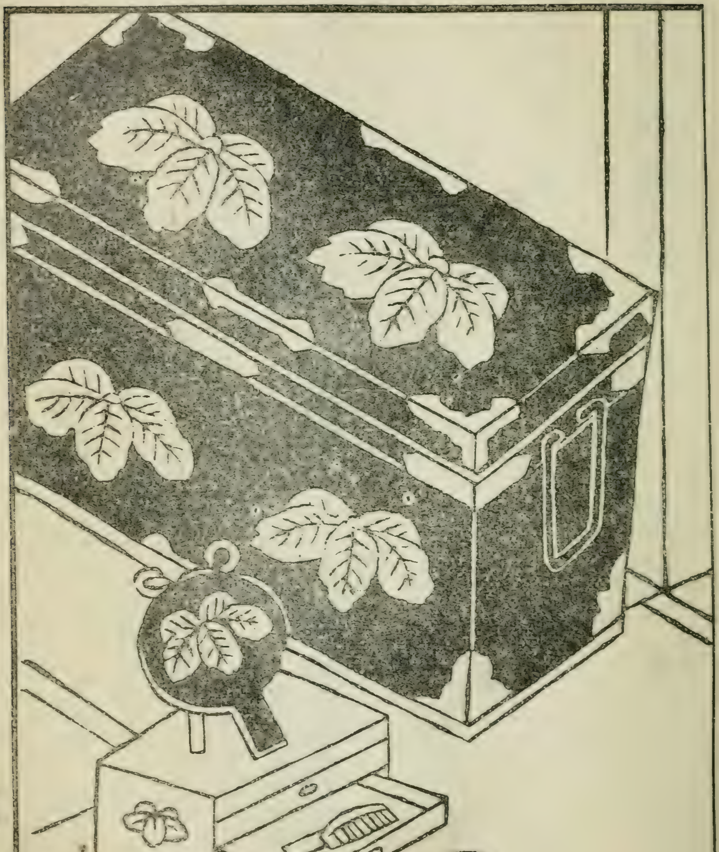
あらず伏見町境町は江戸町を切て後に出来中の町は中の通なれは号す兩河岸は町の端なれはなり水戸尻は水道の留り江戸町壹丁目貳丁目中の町待合の辻といふむかしは女郎客を待合し所同しく壹丁目貳丁目の角を青物市場といふ角町の角を肴市場といふ商人の集る所なれば號傾城遊女の文字は詩經に出れど今の女郎の義にあらず李延年は北方に佳人あり一度顧傾城と我妹を哥に作我朝遊女の始りは聖武帝の御時なり新造といえるは元は新に船を造る名禿より段々成長してなる姉女郎是を出す其格式極て六ヶ鋪是レ之十五六にして突出しといふ是は娼家見立て晝三六寸にして是を出すやつこといへるはむかしは諸御屋敷方より法度を背きし女懲しめの爲町へ遣す是をいへと今は端々の賣女町へとられ來るをいふ太夫といへるは白拍子の遺風にして亂舞せしかは名付道中の長傘は上臈といふ名稱によりて免許せらる格子女郎は太夫の次にして大格子を構へ見せをはらざりしよりして名付たる名なり古しへは散茶梅茶卌の名あり今の中三呼出し付まはしのごとく一角あれは六寸あり局といへるは細に位切の名いにしへは女郎の格式をわかつに禿にてしれしとなり對の禿三人禿若衆禿もあれは坊主禿もあり晝三はひとり禿なりしを新町中近江屋の宮古路といふ三分二人禿をつれて所の長にとがめられ壹人は姉女郎の禿のよしをいひなし終に夫より二人禿つるゝ叓になりぬ衣服等きらひやかにせ

しハ近代の事なり今も正月はさらし木綿に若松の模様の着物を着する其遺風なり大羽子板ハ中古海老屋の對馬に初り月見盃ハ角山口の太夫香久山に起れり中の町の花ハ寛保年中に始り娼家を花街といへるよりして思ひ付しか七月の燈籠は角町中万字屋の玉菊追善に初り八朔の白無垢ハ巴屋の高橋に起る駒下駄ハ中古角町菱屋の芙蓉に起り勝山わけハ新町山本の太夫勝山に初め兵庫わけハ大橋柳町の兵庫屋に習ふ島田わけハ嶋田万吉か女哥舞妓に結ひはじめ助六日和下駄ハ三浦屋總角か客より始り土手の辻番送り拍子木も此助六より始れり五月節句に十五以下の子とも入ざるハ菖蒲打に禿に疵付しより行灯ハたそや切られしよりともしキの字屋ハ享保のすへ中の町の喜右衛門こしらへはじめ袖の梅は正徳年中伏見町の天溪製し初む九郎助稲荷は千葉九郎助鎭守の神祭禮ハ初午と八月にあり朝日如來ハ惠心僧都の看經佛開帳は盆と十夜に有中の町の物干ハ佐野の次郎左ヱ門女郎あやめしよりなく揚屋町に表の椽と二階に格子のなきハ古しへの遺風を傳へ町の名産むかしよりの巻煎餅近頃の最中の月山屋豆腐甘露梅昆布巻群玉菴の蕎麥夜見世のすがゝきハ古風を殘し鐘四ツ引四ツは新吉原の仕出し鐘四ツ鳴て大門を戸ざし引四ツ打て中行燈をともす毎夜引四に江戸町壹丁目にてハ二階をまハれ〳〵といふ同二丁目にてハ腰の物を預れといふくつハといへるハ元の吉原四方行ぬけにて轡十文字の如くなれハ名づけ町



良夜靜謐

一四



といへるハ其店一方口にして形丁の字の如くなれバ名付し也山谷通といへるハ山谷に假宅を構へしより呼猪牙船を山谷船といふも同じ意なり若者を牛といふハ花で廻る意遣り手を花車といふもまた同じ意なり粋をとをりものといふこけを野夫といふ粋に似て粋ならざる是を雨可といふ粋じや〳〵と皆いへどこぬが粋じやと高尾ハ言儒學の方てハ米をつきぬき青ミの出るを粋といふまた或文には金つかハずに粋と言れうより野夫と言れて金つかふにしかじといふ物ハ奈しには野夫はたのしミの芽萠粋はたのしミの終といふ古語にハ粋は身を喰ふと言哥にはまり安きハ粋の淵といふ酯粋の三人寄集れハ文珠の知恵すいも甘いもかミわけて止る所に止るを粋といひたひものなれと是も亦不粋か吾もまた其眞の粋なる叓を不レ知

良夜靜搔　大尾

追而出來

錦袖餘香　全部一冊

仇手本

仕懸(しかけ)幕莫(まくなし)

仇手本(あだでほん)

前編

初編より六編目まであら川のせうひよなるひおよびおし九寧とうがり

仇手本(あだでほん) 後編(こうへん)

通神蔵(つうじんぐら)

七編目より十一編めまでよしわらのせうひみなかぞくまんのまくざとつらまん

両冊とも本売出し申候

自序

猪牙飛て四天川岸に至り船頭陸を走て名馴の先後を爭ふ相募る疳癪ハ判官が短慮に似たり閨中に由良が手管をめぐらし本藏が氣轉おむかひをしらす伴内が野暮勘平が色男狸寢入の角兵衞ハ目隱しと共に戀の闇にまよふ梳籠の小波道中着に京染の手際を見せつけおかるか髪指待人を占ふ浮氣の出居衆ハ夜打の坐頭と共にはだか也師直が性惡かほよに仇つき着兵衞が男氣年季を拔し善惡邪正の二巴合てひとつの世界となし前編仇手本後編ハ通新戲大極二の理に分て北廓の陰巽の陽都て全部十一回わからぬ處

ハ假名手本の書ならひ作者のいろはと見ゆるし給へかし

小金あ川九　敬

序

夕夜に大臣柱とあをかれ旦にやぐらの牽頭とよばるゝとも何そ遊ひの花の可ならんか時世〳〵と鳴鳥の聲にァ、ラ怪しやナァと客はうすのろ〳〵に魂を引もどされけふも幕なしのとふしに六段目のくきりを忘れちよん〳〵幕のひときり遊ひの店もんめ五分に仲土橋女の世界を小金あつ丸なるもの穿予仕懸の穴より閲するに細き事市江がしうちもなど及ざらん實に戀はくせものとてぬすみの慕の色仕懸に忍ひの夜半の合語あまとハ小女兒の字にしてかわとれくらがへ賈婦のから名なるへしと其本文の清書に習ひて仇手本と名づく此後遍の通神藏ハのちほとおめ

にかけましやうさらばたァ

山旭亭真婆行述

第一回

鶴ヶ岡山稲本樓遊宴
高野屋妓號好戯世界

第二回

若狭楼ニ而小波力弥ニ逢
李蔵松ヶ枝ヲ切之世界

若狭屋助七

第三回

於屋形髙直遠半相諍

於傈船頭勘平變世界

第四回

遠州屋半兵衛自腹之大肴
稲本ニ而藁種次郎悪世界

大星屋由良之助

第五回

勘平千崎弥吾ト途中話
定九郎ニ逢居夜泊世界

第六回

山家町與兵衛カ隠家
僄為勘平勤奉公ノ世界

侠通左佗

附言

大磯化粧坂は鎌倉の巽に當て活氣色里なり昔朱蝶辨天何がしなんど風流世に雷鳴妓女もいつしかコンコ、マカリキの時花言葉と共に時去りぬされど名は今もしる所なりさかんなる哉若町の樓上美をつくしあたかも蛤町の辰巳樓かたゞしやお直しの蠟燭かしんきしん〳〵の連引にうかれて通ふ頑要息子つき出されたる外飾客送る女中に出る藝者朝直しのぶしやう皃宵泊のおもひかほ顔と〳〵の合せかゞみあわせてやるも勤の情てらしてやるゝ妓女の達ひきたそやたそたれかゝけふの妻ならんあだしうき世のあさつま舟よるべさだめぬうき川竹一夜のふしの浪枕

朝に店衆を送り夕に色客をまつあはれむべしたが爲に切
小指ほどはしる血は泪にまじへ一身を抛て生涯をあやま
つも君がため春の野に出る若盛迷ふも一花さとるも一花
ちらぬうちの樂しこなるべしさはいへ双ヶ岡の色事師は
花はさかりに月は隈なきを見るものかはといはれしアゝ
千金も一夜壹分も一切歡樂の是非はたゞ足ることを知る
に有べしどふしたがいゝか我もしらず女中衆の口くせな
らぬもしちよつときいてめへりやせうとしかいふ

仕懸莫幕 仇手本

小金あつ丸著

第一回

靏ケ岡稲本世界

都而天地の間其理ありて姿あり姿ありて後名あるべしと古人の言葉故あるべし夫辻番の親父は長壽臺の低に居て火の見番のたかきをうらやますといへど太夫棧敷の高きは土間棧敷の低を誹り屋形舩の低は橋の上の人込を笑ふ高山の月高ふして望べからす五湖の水も深ふして窺がたし凸凹は世界の理也今日の理を以 昔をおすにたがふべからずかのおとく女がはなのひくきハ高慢の高きに勝らんはな高きがゆへに尊からず高も低も戀の道頭を上て四ッ手駕を望ミ頭低て猪牙を思ふ朝に名を聞て夕に買とも可なりこゝになまくらならぬ鎌倉鶴ヶ岡八幡の山に二軒にかぎらぬ二軒茶屋ハいかなる理をもち其姿ありて後名付しやしらず夫が中に一際目だつりやうり樓稲本とて繁昌ならぶかたもなくけふも問くる客人は【足利や義二郎】あしかゞやといふ金持の一ト人り息子ゐしやう付多くの小册にゆづる　半兵へや助ハくるかの　【ゑんしうや半兵衛】義がかミ出見世のていしゆ卅二三の色男也但シ遠州や　まいります　【高野や直右衛門】かうのやといふこれも義がかミむねわるもの也　助や

はやくこねへか旦那がたづねさつしやる【若狭屋助七】若野ワかさやのワかいもの たゝ今めへります菊ゐさんにあいましたたんなへよろしく トかれこれいなもと八きたりドヤ〳〵上る【女中】ヲヤよしさん助どんよくはやくきたの【ワかさや助七】けふはそちでおめにかゝつたからつれ申てきた【女中】角やどしれ【ワかさや助七】今に内へそういつてやつてくんねへ【女中】おめへ内へよらねへか【ワかさや助七】中うらをとほつてきた トこのところおさだまりのさかづきいでまつきんばそうにたまごやきでさけをもつてくる此ところのふう也【あしかゞや義二郎】たまごやきをひごいにくわせよう【ゑんしうや半兵へ】たれぞよびにやりましやうか【からのや直右エ門】すけが思ひ入があるといつた トといふところへ【若狭や介】おわかさんをよび申さぬまへにちよつとこのまゝでこの比出なさるかほよさんといふうつくしいはをりを一切よびハどうでござります【あしかゞやよし二郎】それもよかろうほかのものをよばすにこゝハそれ一まいであとをワか丁へひきだうぐハ【ワかさや助】直さんどうでございましやう【高のや直】おもしろからふ〳〵【ゑんしうや半】いかさまたねト 此かほよといふハ江戸けいしやにて半兵へとふかき中なれどこのころワか丁へでるゆへ此一座これをしらず【若狭や助】コフ〳〵 ト女中をよび 内へそういつておワかさんハたしかけふハひるじめへてゆめもとにあるからあとをつけてそしてかほよさんの口をかけてすぐにはこれこつちへもつてこいといつて【女中】アイしやうちサ【ワかさや助】これさまだいふことがあるとり居町のかまくらや これハよし次郎がふたやとなり よしさんがおいでなすつたといつてやれといつてくんな【女中】アイト行このうちおひ〳〵さかなも出るワか丁よりワかさやのおすめぶんおきせかほよきたるゑしやう付ぐた〳〵しけれ

入思す【かほよ】助どん トいつてよし次郎にむかひ あなたよふお出なさいました【娘ぶん】よしさんへけふはな
ぜはやくお出なはいましたへ【あしかゞや よし次郎】ナゼはやくわこねへものかこれ見やけふたばこ入いし
たておろしだと ねづミかわのさんとに大江山の一しきにてねつけわかぶと也【女中】ヲヤよふござ いますねへ【かうのや 直右エ門】きめうだらう【ゑんしうや 半右エ門】だん
なわごふせいなことがおすきた【わかさや 助七】さやうさ 此かぶとのねつけに名かうが入てある𪜈だしどころ一向しれずよつてたかつていぢつて見てもしれずとう／＼かほよがかぎ出
してすこしねぢつてあける【あしかゞや よし次郎】こりやァきつい【ミな／＼】ハヽヽヽヽは【娘ぶん】かほよさんわよくめつけな
はつたのふ【あしかゞや よし二郎】一ばいさそうと かほよにさし初てゆへしうぎをやる【かほよ】ちとおさわりこれわおありがた
ふ【わかさや 助七】おさわりやすはつやまの【ミな／＼】めうだ／＼【あしかゞや よし二郎】源吉わ子どもやになる
そふだの【高のや 直右エ門】はたらきものだの【ゑんしうや 半右エ門】こねへだあたごのばゝて名十とふたり馬にいつ
ていた【わかさや 助七】いへあのお子さんものつてお出なさいます【かほよ】ついぞねへよしなヨ【娘
ぶん】にくいくちだのう トこれをしばらくしやれときをうつしミな／＼わか丁わかさやへゆかんとたつ【あしかゞや よし二郎】サア／＼いゝか／＼【かうのや 直右エ門】せ
わしねへだんながいゝだすとまてしぺしわねへ ト直右エ門かほよに大きにほれとかくしやらつきたがる ちよつと小やうといふと
ころだ トたつてだい所でさら／＼とはなかミへみたをかきくわゐ中する サアよし／＼ ト八まんのとりゐきわの人ぎやうやのまへあたりをぶら／＼くる【娘ぶん】かほよさんあれ
ミなかわいゝ人ぎやうがある【かほよ】ほんにのふほしひよ【かうのや 直右エ門】だんな一ッかつておや
んなさへまし【あしかゞや よし二郎】とれでも氣にいつたのをとつてやりやな【かほよ】ヲャうれしいのふ

トこのうちミな〳〵さきへぶら〳〵ゆくかほよと直右エ門あとへのこる 【直右エ門（かうのや）】かほよさんちよつとはなしがある トとりゐのワきへよび 【かほよ】なんでごぜへますエ 【直右エ門（かうのや）】なにさ トいゝながらてをにぎり さつきからのしうちでてへげエしれそうなもんだ 【かほよ】なんでごぜへます 【直右エ門（かうのや）】なんだとハどふだなおれもかうのやの直右エ門だァ一ばんいゝ出しちやァいやかおふかへんじをきかねへけりやァすまねへ 【かほよ】どふでもいたしやしやうからまァあつちへ 【直右エ門（かうのや）】そのてもふるい 【かほよ】アレサおめへさんでもねへとちうでいわつともなる事じやござへませんか トそつちこつち直エ門わるくしやらつきだきついたりなにかかほよもぐわいぶんわるくまつかになつてこまつて居るところへ 【ワかさや助】かほよさんなにをしてゐなさるいゝかけんにきなせエ トいふにびつくり 【直右エ門（かうのや）】さつきの文をかほよがたもとへうちこミ コレすけおれがあづかつてつれて行になにやかましいことがあるもんだ トすこしむつとする 【ワかさや助】それでも旦那が見てこいあんまりおそひとおつしやりますからサ 【直右エ門（かうのや）】てめへが口をきくにやァおよバねへすつこんでいろェだんなハねかそうがおこそうがおれのすきだ【ワかさや助】もむつとして アイげいしやしゆハわつちらがあづかりだからよびにきたのさ 【直右エ門（かうやの）】にらミつけ 口ごうしやナなにヲ

チヨン〳〵〳〵

第二回　若町若狹屋の世界

附り　本藏表裏の松ケ枝

こゝにゑんしうや半兵へが店内大星や由良之助か子力彌と云はことし十五の色ハかしゆ由良之助が手紙をもちこのわかさやへきたる「力彌」これをと出す「女中」ハイ／＼てうばのきへにあつたこども二三人かゝさんと咄をしていたりしが其うちとなせやから出る小なミ力彌に見とれてゐるたゞしまだこれも十五斗りのおぼこ新ぞうにてはづかしそふ也力彌をミとふしへつれ行ミな／＼いやがる力彌に一人りかわせんとかれこれ女中を見てとりさいわい今となせやの小なミさんといふ新子があいていなさるからおとなしくしていゝ子だからとむりむたいにきれめとう／＼床へ納る「力彌」わりいとばつかりトしちにとられたやふにとこへ入もぢ／＼してゐる「女中」ちやを一ツまくら元へおサアきびやうぶを立まわし

小波さんお出よ　ト出ちがひながら　うら山しいよと　せたかをたゝく「小波」しらねへョ　トうれしそふにとこへ入ゐしやう付ヵやくすたばこ一ふくのミ又一ふくつけてアイト出しかんりやくまくらへミすかミをあてながら見ぬやうに見る「力彌」こミ見ぬやうに見てついかほ見合たかひにつこり「小波」あののね　トいつてだまつてゐる「心彌」ヱ　ト云つてこれらだまつてゐる

「小波」しべらくあつて　ねぐるしいねえこりよヲときなはんねへか「力彌」アイト　ねこうんでゐてとく「小なミ」といてあげやしやうと力彌が上へよりかゝり帯をときたぐりいだす　やせていなはるねへおめへはんをこねへにやせさせる人もあらふかねへ「力彌」こつちばかりやせるのサ　となかく／＼おやの子なりしべらく小なミも新ぞうゆへいふことにこまりわつけもないところで「小なミ」モシヱあの人ぎやうといふものハかわいゝもんだねへ「力彌」とんだことをきくのヲ「小なミ」いんにへけふかほよさんがきやくしゆにかつてもらつたといつてもつてきなはつたからさにんぎやうできへか

ハいゝからほんとうの子ならなをかわいかろうね【力彌】そうさおめへもだれそにこしらへてもらへべいゝ【小なミ】わつちらがやうなものにハこしらへてくれてがなしャ【力彌】あつたらどうしなさる【小なミ】フ、、ウトワらつてゐる　わつちかねがいがかのふかねへ【力彌】そりやァ品川のうらないでもきくがいゝ【小なミ】ほんにさ【力彌】たれもうそだゝァいわねへ【小なミ】ヱ、モじれつてへョト　きせるたほうり出す【力彌】かわいそうにきせるのしつたこつちやァあるめへし【小なミ】それでもはらかたちやす【力彌】ワつちもねがへかある子【小なミ】なにがへ【力彌】こんどのことにしやせふ【小なミ】こんなうそな事ハねへョよふかしこんだきなさりそふなことだおかしいョ【力彌】こんときちやァわるいのかへ【小波】そふじやァごせへせんがしよせんおよびもねへことサ【力彌】およひのねへのョ思ふからねがいサ【小なミ】じれつてへワたいがほうでサ【力彌】この手をおめへこうしねへ【小なミ】アィはづかしい　ヨトこれより小ごへにて一かうワからず　へりやうりばにハ料理人本蔵其外女中なとうへさとり〳〵【女中】アノりきさんハいゝ子だのふ【娘ぶん】小波さんもまんざらでねへやうすた【ワかさや駒七】コフ本蔵きかつしけふもあのかうのやの直めへいめへましいあんまりおそひからかほよさんのむかへにいつたらごふぎあつくなつておれにくつてかゝるやつさたにあのしハんほうがあしかゞやのよしさんのかミであるいてついぞ一分もくれた事もねへョシ〳〵あした

よしさんのやかた船がでるはづたからへこませてやらふ【本藏】イヽ〳〵したがはらをたゝせてしかたがあらふとしべしかんがへ（にわのまつの小ゑだをりやうりほう丁て切ておとし助かたへゝほうり出す）【わかさや助】コリヤア本藏なんにする【本藏】（これいろで）だいの物のせめ道具すつぱりとおやりあそばせ【わかさや助】（おなしくこれ色て）本藏てきたとにらむ【女中むすめ召】皆ゝホヽ〳〵〳〵

第三回　屋形闘諍

附り　おかる勘平咄し合の世界

（こゝにとりゐ丁さぎさかやといふふねやとへかうのや直がのりつけなりせんどう伴内あい口にてけふハあしかゞやの義公がやかたふねの大一坐あれバ直右エ門ひゐきゆへ伴内をもつれんと来）【高野や直右エ門】伴内うちかけふれかまくらやから旦那の屋形かでるからてめへもやるつもりにはなしておいた【伴内】そりやァありがたふござりますときにおめへさんこのあいだおはなしのかほよわありやァ江戸ばいしやて此きんじよの太夫の妹さこつちにゐるうちゑんしうやの半兵へが色事の大きまりさ【かうのや直右エ門】そりやァほんの事か【伴内】ナニおめへさんにうそをつきやすものか【かうのや直右エ門】ムヽよし〳〵しかたがあるけふの屋形の事をあの半兵へへだんまりで行と旦那めへわかほよがところへいつてこねへといゝのあいつをしくじらせわどふだ【伴内】それじやァおめへさんのお手にいり

やす共ときやァむすめぶんのおかるにはたらかせやす【かうのや直右エ門】うまい〳〵 トはなしてゐるところへわけかさやのりやうりばん本蔵ふのやかたで助がけんくわでさせぬやうにと直右エ門伴内へはむきの重づめをもち出る【かうのや直右エ門】本蔵なにしにきた【伴内】本公ささつし【本蔵】ときに高野やの旦那これハ私がちよつとぞんじつきさけふハまた助がめへりますがなにかきのふ直さんへぶてうほう巾たそうてござります【かうのや直右エ門】ナニいゝさそんな事をきにかけるおれじやァねへ【伴内】旦那ハつうだァ【本蔵】よろしく伴内さんたのミやす トかへりそうにする【かうのや直右エ門】本蔵〳〵けふの屋形のせかいを見ていかねへか【本ぞう】ハイありがたふござへますがあしかゝやのだんながなんともおつしやりませんそして助もめへりますおかるさんもついてゆきなさる内があきます【伴内】そりやァ直さんのむねにある【直】いゝハ旦那めへハおれがしやうちだいゝよふにいふハ内のこともおれがむりにつれていつたといへバだれもなんともいやァしねへサア〳〵 トむりにつれ立三人ともかまくらやへ行くすでにかまくらやより屋形のしゆかうぜんつくしびたつくし足利やのよし公をまん中のさしきにすへつき〴〵おはい〳〵高野やの直其外若狭やの助本蔵むすめぶんおかるミな〳〵大さわぎにて大川へのりいだす【よし】おかるやかほよハけふハとふしたの【おかる】ゆふべからづつうがしなはるとつてやうじをつけて引こんでいなはいますがけふハちつともよけりやァぜひあとからお出なはいますはづさトこのうち助かきのふ本蔵がきりし桧がへのだいのものを直右エ門がまへゝいだし【助】直さんこれハあなたへと出ス【直】もけさ本ぞうかつかいものゝスワかさやの助がだいの桧によんところなく一分それ助 トやる【助】ハ思ひの外一分くれしゆへつらのかハをむかんと思ひし事まちがひ其まゝにしておく【助】これハ トいつたばかり さてゑんしうや半兵へハおくれば せにきゝつけ大きにせきこミてま

へのふなやどはやのやへ行かん平にちよきをいゝつけうできりおさせやかたへのりつける　【半】モシ直さんうらミだなぜしらせてくんなさんねへ【直】とんだ事をいふぜへゆふべもけさも人をやつたハヽアきこへたかねての色事かほよが所へゆふべからお出のそれでるすかへぬしやァふなを見たやうなこぶまきのにこゞりがすきだのふなおとこめちつとたしなまつせへふな〳〵しなさんな【半】　むつとせきしが義二郎かまへをかねかほよがことなどいわれむねんをこらへてゐる　【直】成程色男だぞ【半】いろ〳〵なむりな事ばかりなにを　トかれこれむつかしそふ　【義】なんのことだそう〳〵しいマァのめ〳〵と　さかづきを半兵へにやる　【半】　はいとこつぷをうけてのミ　助こうさす　トなげるふりにててうと直がうつむいたミけんへうちつけ血ながれる　【直】半兵へわりやァ【半】そゝうだふしやうしやれ　トそうとふになる本蔵とめる　〽つきそひきたる娘ぶんのおかるへせんこくはやのやのかん平がちよきにてきたりしとき半兵へやかたへうつるすぐにそのふねへのりむかふがしの茶やへ船をつけふたりながらはなしてゐるゆへ此そうどうを一向しらず　【勘平】ときにてめへあすのばんにやァぜひかのものが入からもしできざァおびでもかしてくりや【かる】おめへまたしんちへでもはこぶのか久しいもんだ【勘】手めへもいゝきな事をいふぜへ【かる】いゝきよりおめへがいゝむしやァねへか【勘】べらぼうめそりやァそうとかゝさんがなんぞといやァしねへか【かる】なあにおらがかゝさんハワかつた人だョあんなどうらくなてへしをだんなさまとあがめておいてほんにばか〳〵しいほどだわたいといふもんだ【勘】ミつさんも此ごろ松田やへ色事ができたそふだ【かる】それ見ねへそふいふことだものをおかゝさんがきをもむはづた【勘】此間なんひやの二かいからてうじ

やの女郎しゆとはなしをしてゐた大ぬしの富公もいつしよにいたつけヱそりやァいゝがおれもつまらねへいつそてめへといつしよになつてひとかせぎやらかそふと思ふよ【かる】ワたいもぢよさいワねへわナこねへだもとつさんにやァいゝにくひからかゝさんにあらましはなしておいたがマァあすこをにげてのうへでどふかしやうがあらふわナ【勘】しづかにはなししやさこへるぜへそしてあのばん内やらふがむねきたからげどられねへやうにするがいゝ【かる】そりやァしやうちやサいけねへひつうつこいすかねへつちやァねへどこぞじやァわたいか伴内どんのあけあしをとつてやらふとむねのしたじめをしつかりとしていやすあんじなさんな（おりから七ツのかねこゆろ）【勘】七ッたそふだけふしくじつちやァさんだんがわりい【かる】ほんにのふ（トふたりながら来キたいぜちこきへのる所へ）【作】（おかたおけ一来りしより）勘平〳〵大事ができたマァ駕をつけろ【勘】なんだいけそう〳〵しい【作】なんだところか半兵へさんが高野（かう）やの旦那のあたまをぶちこわしたァ（トきいて一両人ひつくり）【勘】どふいふわけでと（ふねをつける）【作】（のりうつり）わりやァそのそうどふもしらねへでおかるさんもてへげへしれたもんだなんのためにきやくじんについてきたのだいまいつたとてまにワあわねへかん平わりやァおかをいつて内へしらせろおかるさんワおれがあづかつてワかさやへおくりとゞける【勘】も（しよせんやかたへはいかれずかけおちとこゝろをさだめ）やかましいうつちやつておけおかるさんワおれがとゞけるわりやァけへ

れ【伴】しのごのいわずとおかるさんをおれにわたせ【勘】たあことつくなと（つかミあいけんくハとなる）【おかる】（なきごへになり）あれ〳〵あぶねへわなそんな事をいつてゐるひまにおそくなる伴内どんおめへハかへんなゝおそくなると勘平どんもしくじるわナ【伴】かん平がしくじるにかまふもいか【勘】だまんねへおかるさんまかりちかやァ二人リでかけおちするぶんだ【伴】うぬにおかるさんをやるもんか【勘】おきやァがれめんどうなと（かハのなかへちよきぶねながれいつれべてうどふかミへ伴内を）どんぶりこッブ〳〵〳〵

第四回　遠州屋半兵衛地腹ヲ切

山の稲本さハぎの世界

【かほよ】（としハ十七斗り道中着をきかへてとこ着縮しぼりのちりめんのゆかたはな色さなだのしたじめしろちりの下帯かミハかミゆいのおますがのちにくるつもりでこしのおなたがすいた斗りむすびあげてゐたるまゝ半兵へハ一かたならぬきやくゆへそのまゝにてべつかうのつくりものゝたゞ一本さしくゐるとこのうちにはらばへになりたばこのんでゐる）【半兵】（なるミしぼりのかほよがかしハかたをきてねころんでゐる）【半】コウてめへこねへだかういやノ直に山でいちやついてゐたそうだの【か】なにそれわたいがはじめてよしさんのざしきでいな本へおめへもきなはつた日人ぎやうをかつてもらつたときあとへのこつてなんのかのとひつッこくいふをひとも見るげいぶんがわるひからおつふあわして【半】そんなきくにやァおよばねへそれになにもてめへがへんじをやる事があるものかへてめへがしまだのもつといを一ッど

つこいとしつちめれバ一も二もねェりくつだあのやろうがむねきでよしさんのめへでてめへがことをいゝだしてきのふおれをしくじらしやァがつたてめへハおふかたあれにでるきでへんじをしたろうけふじバらてきたのもこのワかちをつけにきたのだゐようらしくぢばらをきつてぜんせいのまねをする事もねへがいまさらてめへに長さほにされちやァうまらねへからこつちからりつぱにしてきれてやるハ【か】おめへもうたぐりぶけへ事ばかりへんじをやつたわけハわつちがほうでもおめへとのワけがあるからしらせめへと思つていたこのうたでおもしろおかしくはじしめてやつたのだハなぜそのやうにおめへハぐちになつた【半】おれがくちよりてめへがあだぼれをするがきがしれねへ（トいふうちあしおとき こゆろゆへだまる）【女中】もしへあけてもよふございますか【かの】おくらどんかなんだ【半】あけてわるひがかんにんしてやろう【女中】（うちへはいり）あのやくしやの治郎さんと石やの馬さんとやらがおめへさんをたづねてお出なさいました【半】なにやくしやの治郎がきたそいつハ高(かう)のやがまハしもんだ石やの馬ハやくそくだからくるはづたそれじやァきうに大ぼしやまで手紙をやりてへ（硯とりよせてかこした ゝめかねをとりにやる）見とふしにゐるかとしたくして出かゝりかほよてめへ出ちやァわりいなをしてまつていろやまへつれていつてどふかはづして治郎をけへそふ【か】はやくきなはいしョ【女中】そふしなはいましと（つれだち見と おしへゆく）【半】おそ

ろいで【治】ときにあい方ハだふした【半】あけてけへしやしたこれから山へでもいきやしや
う【治】なぜ見せねへだれをよぶ【半】ナニつくいから此比でる小糸サト しらをきる 〽サア〳〵とつれだちいなもとへ行この所まへり仕かけにて二けん茶やいなもとゝかわる 〽石やのうまへけふ半兵へがちはらをきつてきたりしをせうちゆへあまりむだをさせじとてをあてるやうにおもふ【治】へかうのやのまへしものにて半兵へにちばらを切らせおもいれつかハせしうへにてはじをあたへふたゝび此とちへこられぬやうにせんとたくミいろ〳〵このミごとをいふ コレなんだしほのからひものばかり出して切おとしでべんた
うをかつてもこれよりくへるぜへなんぞもつと出さねへかしミつたれな【半】このうちかれこゆらが方へ手紙をやりしゆへ太夫はをり大ぜひよひにやりワかさやへつめさせおきけれとゆらがきたらぬゆへ金びらがきらされぬゆへまたせておく【治】どふだげいしやハねへか【馬】いまくるやか
ましい男だ なにかまぬけになり半兵衛ハきをもミかれこれてまとりしゆへ治郎あくたいのまきものをならべたて半兵衛をおろしざしきをけたてゝかへりけり【治】おらァかへらァおもしろ
くもねへ【馬】マアまたつせへ トとめてもとまらずかへる半兵衛もくやしがりはぎしりをしてゐる所へ治郎とすれちがひに大ほしやの由良念をこしらへかけつけたりしが此坐敷のやうすを見て【半】
ゆら公か【由】ホイ【半】おそかつたざんねんな カチ〳〵〳〵〳〵

第五回　勘平定九郎

てつぽうの世界

向よりくる小てうちん 勘平すかして見て【勘】イヤ千ざきやの彌五さんじやァねへか【彌五郎】ふりむきとくと見て
そふいふこへハ早野やの勘平じやァねへかどうしたマアどこにゐる【勘】おめへにおめにかゝ

るもめんぼくねへがわつちもおかるが出入でいまにひるハでられやせんからよるばかり用むきに出やす【彌】そりやァきのどくだおれが大ほしやのゆらさんをたのんでやらふからちつともさんだんをしてあつちをかたつけてもらふがいゝゆらさんがのミこめバ半兵衛さんの方もいゝわけをしてづいぶんできる五十めや百めハ仲間でもしてやられるわ【勘】そりやァありがたふごぜへますそんなら又おかるともそうだんして見やせうこゝハとちうだによつてとふぞおめへワたしが所へおいでなされてくださいませんか【彌】あしたいつてやらふどこた【勘】アイ山家町でけだものやの與一兵へとおきゝなせへし大やハ角兵へと申しやす大やの角兵へでも狸の角兵へでもじきにしれます【彌】そんならかならずつがふしておれもいそぐから【勘】さやうならト

引かへし

【與一兵へ】かん平があかるとにげてきてあるかくまつてハおけどおかるがほうがかたづかねハかん平がミもあかるくならずといろ〳〵とそうだんしおかるをよしハら一文しやへうつこもとおやかたの方をかたづけかん平がミをたてゝやらんとそうだんに行かへるミち【定九郎】おのやのむすこなりしがかんだうされてこのごろハゆすりかたりをしてあるくおやじを見かけあとより おやぢさん〳〵もしへ トよびかけゝふ〳〵ミちつれになりむりむたいにおやぢをさかやへひきいれのまぬさけをすゝめてよハせしまの財布とはながミふくろをひつたくりすいとくじとする へかん平ハ彌五郎にわかれかんがへながらゆくむかふより定九郎ハおやぢのはなれたぶちころしぶら〳〵きたりかん平にあいむりに引づゝこてつほうたひやかしに行【勘】おらァこんや用がある【定】うつちやつておけかまふとハねへ ト長やへはゐる定ハてつほうつらなり 理

八どうた【ろしばん利八】定さんでへぶいゝげんきだの トだん〳〵一けん〳〵おだをいつてあるく 【定】コゥむかふへくるやら
うれゐのしゝの八だぜへかんこうなざァあぶねへよけてやるがいゝぜへ【勘】ム、なにしつて
いらァなんのあのやらうがおらがおやぢのなかまのわるものだたァとをつくとぶつてしめらァ
【定】いなりだうのたまがよつほときてゐるぜへ【勘】ゥ、あのあちらのながやの中ほとにゐ
るあまれいゝつらだの トいゝながらくる定かなじミ 【玉】定さんよんねへ【定】やつあたりやァごめんだつれ
があらァ【玉】いゝわなとなりのお金さんもひまだ一所にあげねへな【定】そふしべェかかん
公あからつし久しぶりのお金さんならおれもきがあらァ【玉】あつかましい これよりさけさかなをとりよせ定九郎大きにゑひ
てくだらぬくだをまく 【定】コゥ勘公きかつせへはへェはなしがまあこふだそういつちやァおかしいらしい
がほんのこつたが三百六十よかんにちミぞれあめゆきのいとひなくこの長やへはゐりこまつて
ゐるからにやァどのながやのどの女でもこいつのきぐらいれこふだあいつれどふだといふ事ァ
出づかひのからくり人ぎやうじやァねへがまミへのあげさげでもしつていらァぬしなんざァせ
んどうしやうばへてふか川へばかりいつたもんだがたかい女郎だつてきんのいつかけがしちや
ァねへやすい女郎だつてゐてきちへくさがはへてけへるがとびでもしねへもんだたとへせつち
んのへちまがやねうらへてん上するほとからんだりくつがあらふとまゝ心いきにけしつぶほど

でもワかつたところがありやァなんにもいやァしねへそのかわりまかりまちがやァ【玉】おめへゑふ（酔）とひさしいもんだいゝかげんにしねへ【定】だまつてきけへ【勘】いんにやぬしのこゝろはせうちしていらァ【定】コゥ〳〵まづきかつしてへ平らくじやァねへが辨けいがやろうになつて七ッどうぐのやりくりではかまァはいてこうぼうかあやまりじやうもんをかいてこようがとまむりのぼんじをミるやうなワからねへせりふじやァ定さんの虫ががつてんしねへそふじやァねへか【金】定さんいゝわな【玉】おめへはでへぶならべたてたのろじがせまくつていきとをりのじやまにならハナいゝかけんにならべて置子ェ【定】やかましいわェおりよやうをバ七ッすぎのくろばふてへをミるやうにてめへでへぶうすぺらにとりあつかふな【勘】よしャおれがのミこんだよ　トかれこれしづまり定九郎こまものミせをだす　【勘】お玉さんくすりはねへか【玉】こゝにはながんぶくろがあるよ　トいだす　【勘】とつてミてはておやぢのによくにたとおもひながら中のはんごんたんとわちうさんをいだしのませる　どふだちつともいゝか【玉】ねるぞふだうつちやつておきねへ　トかん平ハ思ひのまゝにてつほうのおごりを定九郎にあてミとやらかしだんまりにて先へかのかみ入をワすれて入て歸る　【勘】外へでゝ大ぐハんじやうじゆ　チトヽ

ヽヽヽ

第六囘　山　家　町

けだものやの世界

【おかる母】もふかへられそうなものだのふおかる【かる】あいさ勘平さんもかへりそふなものゝ人にばかりきをもませていゝきだぞと（トはなしてゐる所へ一文じや）【才兵へ】どふだおやぢどのゝかへられたかゆふべやくそくのとをりおかるどのをつれにきた【二人】まだかへりませんいまもはなしていました（トいふ内かん平かへる）【勘】おかるかへつたなんだとつからきなすつたへ【才兵へ】おめへあのこのてへしかゆふべおやぢどのにさうだんしたがおやぢどのゝるすでも此のしやうもんでよからふいさくさゝあるまい【勘】（ミてゐんぎやうをあらため）なるほどよふござへすおやぢのはんだつれていきなせへ（トいふとすこしふさぐ）【か】かゝさんそんならたつしやでいなはいしたんのんさんへでもきたらよんなはい（トすこししほるゝ）【母】ずいぶんたつしやでいやと（なミだぐむ）【才】サア〳〵とせり立かごにのせてつれてゆく（へ引ちがふて大やの角兵へさきにたち大ぜい長やの同行衆中おやぢゑかたにかけ）【皆〻】これけさかいてうへあさ参りにいつたらまだうすくらいにおやぢどのがとこのくにゝゐいきつて大どうにねてゐられたからつれてきました【角】まづくすりでもしんぜさつせへ【皆〻】やれ〳〵與一兵へどのゝ久しぶりでよわれた（トいゝすてミな〳〵かへる）【母】とほうもないゐいよ

ふだはをりもかミ入もすてゝきてばか〳〵しいと（おくへつれてへおもて／かいほうするより）【千さきや彌五郎】【原の郷右ヱ門】（すつと／はいり）【彌】どふだかん公さんだんハてきたか【郷】でへぶにきやかだがなんだとりこミだの【勘】ナニおやぢがよつてきたのサヽア〳〵あがんなせへ（トはながミ袋をわきへ／ほふりたしかた付る）【母】（かミ入を／ミつけ）此はな紙袋ハどふしてもつてきた【勘】それかへほんに定さんにゆふべあつて定さんのをあづかつてきやした【母】ム、【勘】サア〳〵となたもこつちへときにごじぶんどふでござへます子【彌】いまくつてきた【勘】一はいあげてへもんだなにもさかながねへす（よし〳〵あろ〳〵すいものさかなをトに／わへおりまないたにほうてうたいたす）【郷】コウ〳〵かん公かまわつしやんな【彌】なにをするのだ【勘】今勘平がたらをきるのサ【二人】おきやァがれ

是より後篇青樓（よしはら）一文じや中の丁一力（いちりき）やさわぎの世界七段目廓中（よしはら）のしやれ十一段目まで出來仕候さやう御らん可被下候

カチ〳〵〳〵

自跋

猪牙は茶舩の遲を笑ふ茶船は猪牙の危を謗る危に乗るは首尾の安を思ひ安きに乗るは先をとらるゝの不覺をしらず爰に是ならんものハ彼所に非也予是にならつて仇手本の戯書を著述す全く浮氣をすゝむるにあらず實前に利有て後に危をしめすと例のきまじめをあつ丸こづからばつす

色講釋

自序

古語曰。人の短を謂事なかれ。我長を說事なかれ。ものいへば。唇寒し穐の風とハ。實に蕉翁の確吟なり。予が氣性の長き事ハ。長崎より貰ひし强飯にハあらで。青樓に長の夜をふかして。長尻をかはき。長家中の迎ひを受て、漸に歸るとひとしく親仁の長談義に。鼻の下の長きを譏られ。長い物にハ捲うちと。始て鼻毛の長きを思ふ。是に於て長羽折を切つて。蝙蝠と倶に潜こ。褌を短くして手拭の代に遣ふ。もとより才の短きに傚といへ共。火見櫓に縫をして。其用ならず糀町の幹を。揚底にして其詮なし。髭さきの長きを斷て。蜻蛉を迷悟つかせ。牛に小便

を堪させて。淋病の患を引出さす是をいらざる殺生とやいはむされバ。福祿壽の頭の長きれ其性質にして。大黒の屑糞の短きは。其屁る所の晞するにやあらん。永いもあれバ短も。あるれ八百屋の椽の下九太夫ならで。くだ〳〵しき長口上れ御退屈。されど又短きも飽氣なし。其よいほどの中の街。花の盛の永き日を。短く遊んで歸るが通。永く呼のが娼婦の好意。その長短を滑稽に。色講釋と

ちやらかす而已

干時寛政十三稔

辛酉孟春吉旦

十偏舎一九誌

天

口車にふわとのつたる
猪牙舟の色講釋れ
堀までの座料鳥目百銅

地

笄の銀のかわりに
なまりちらかす太平樂れ
にた山客の損料金三分

人

客と女郎の門ちがひに
思ひもよらぬ寐物語れ
傾城の寔價千兩

一九

青樓夜話色講釋

顚狂柳絮隨レ風舞とハ。ちよいときなさい。塵〳〵と。氣違水にうかさるゝを。風にもまるゝ柳に類ひし。輕薄桃花逐レ水流といふハ。ほんにわつちやァ。ぬしゆへならと追從に。とんだ手のある娼妓を。水に從ふ桃花にたとふ。見倒やへ見せても花廓の佳興。春夜一刻價千金是を客にふまする時ハ。今夜早速揚代借金。通も不通も。大象も是にハつなぎとめらるゝ。女の髮の柳ばしから。猪牙にのつたる同行二人

【水狂】としごろハ三十五六。いたつてふおとこながら。なりかつこうハ。五ぶもすいたところのねへといふ。見かけだをしのにた山つうなり。いぜんハそうおうにして。くらせしだんなかぶなれども。今ハなだいばかりにて。いつからのすかんぴん。ミへぼうなれバ。やまゝいつむぎの小そでに。くろりうもんのはをり少しようかんいろなり。いつたいよく。ちやハ〳〵とくちをきゝて。とかく女にハ。いやがられるふうぞくなり

【辰三郎】やう〳〵十九はたちぐらい。おとなしふうのむすこかぶ。とうざんの小そでに。ねごやちゝぶの小もんのはをり。あきんどふうながら。まんざらのやぼとも見へぬおとこぶり。すいきやうにそゝのかされて。やなぎばしの。くハいせきを。すつぼりぬけて。ちよきをやたらにいそがする

【すい狂】一心輕舟となつて。落日青樓へおもむく。かう出かけた所ハ。又どふもいへねへの

【辰三郎】さよふさ。氣がはれて格別よふございます【水】そふさ。ャ又おめへたちやァ是からだよ。わつちらァ。この猪牙や。駕にのつた錢斗でも。角屋敷が買れらァな。わけへときやァ二度〃ねへから。あそぶだけ〃。あそぶがとくといふものさ。わつちらがよふになつちやァ。もふおへねへ。どけへいつても。こつちやァしらねへが。さきで〃もふしりきつているゆへ。ャレすいきやうさまがいらしつたと。産所から出た。取あげばゞを見るよふに。家内中に取まかれて。やれこれといはれるもんだから。もふじきに。からあたまから。金がいらァな。女郎も又。おいらをそまつにしちやァ。なでへがわるくなるから。いやとも。よくせにやァならねへといふもんだから。こつちも又。顔づくで。見つともねへこともできやせん。それだから。マァ今じやァ。うつかりといかれもしねへといふものさ【辰】そのかわり。又あなたのよふに。顔が通ふるといふもおたのしみさ。【水】ナニくるしみだ〃な。そんだいむかふで。むだなかねをつかいしもしねへが。あじなもので。又うつちやるよふなかねも。つか〃ねへけりやァならねへことがあるものさ。去年もきゝねへ。名びろめだの。ながへだのと。もらつたすりもので。袖なしの紙衣羽折をこしらへたところが。てうど。そのはをりに五両何がしといふもの。かゝつていらァ大わらひじやァねへかへ。草市の鬼灯に。小判をくづしたよりァ。まだつまら

ねへはなしだわな。そのかわりにハ。どけへいつても。いゝてへとをいつて。遊ぶだけが徳といふもんだが。ぬしたちやァまだ〳〵。それじやァいかねへ。初手のうちハ。ずいぶんわるふざけをせぬよふに。おほよふにあそぶがいゝによ。そして。おめへたちのいへとにやァ。二會目三くわいめでからが。おさだまりのいりめばかりで。外にもし。旦那とかなんとかいつて。しけこむやつがねへからいゝわな【辰】さやうでござります。そしてァノ三會目にハ。いくらほどやれバよふござりますね【水】ソリャァいろ〳〵ありやす。おめへがたが買うに部屋持ならバ。三くわいめの入用若者遣り手が二分か。つとめが一分。とこ花があたじけなく。壹兩二分ともしられめへから。まあ二兩よ。茶やが一分と。それで三兩といふものだ。しかし。迚もなら。中座にしなせへ。きついこたァねへわな。ぜんてへこれからでも。こうしなさるがいゝ。先舟宿へよつて。南一はづんで供につれてゆかァな。それから茶やへあがり。ちよびとのんで。茶や舟宿をつれて。はじめのうちハ。ずいぶん端手にしなさるがいゝによ。そして。ひとりでゆくことハけしてよしなせへ是悲ゑと神もつれにやァ。ざしきのあんばへがよくねへものよ。そしてけへつてからもはなしができやすわな。ちうさんかいに。ひとりで行といふハ。そりやァわつちらがよふに。ならねへけりやァ。しこなして遊れるものじやァねへわな。そこで

ぬしが。馴染にでもなろふとおもいなさるなら。三くわいめにやろふといふところを。二くわいめにしなせへ。マァこふだ。若ものやり手へ二分か。茶ヤのふうふへ二分か。つとめが片じまいで壹分二朱よ。床花をぐつとはしよつたところが三兩。しんぞうが一分。げいしやが一分。イヤまだちや屋の挑灯もつた男に二朱。それでこふと、てうど五兩で。きつちりきまるといふものだ。それからでも。紋日その外。少しづゝのとれ。相談づくで。きいてやらねばならねへわな。又女郎ほど。つらへものはねへによ、ソレ中の町へ出ても。むかふから逢つてわるいといふ客でもくると。どこのうちへでも。チト御めんなんしと。はいつたばかりでもふ。壹分やらにやァなりやせん。げいしやたいこに。何をねだられても。やらずにすます客はあれとも。女郎は又。やらずにやァおかれねへわな。ゑど神でも人のわりいやつは。うぬがつれてゆく。客をはなにかけて女郎をひきたをすやつは。いくらもあるといふものだから。そんなとも。くそわけてやらにやァ。こゝろいきがわからねへわな。おいらが。又さかんに行時分には。茶屋はもちろん。やりてわけへものにも。とき〴〵。ひらりと見しらせておいたおかげにやァ。醉つたまぎれに。肝積をおこして。惣じまいにしよふの。イヤ新造をそんなあげろの。なんのかのと。となりざしきへのそへをいつても。わけへものが。ナニついへな。およしなさ

れませといふくらいで新造禿に向ふ嶋をねだられても。やりてがナニサ内證からのいゝつけで。わたくしらが内でハ。出しませぬとけつく　あつちからかばつてくれたハな。そふいふものだから。二階ぢうが。ヤレすいきやう〳〵と。もてはやすによつて。いやともこゝじやア。相方の女郎も。ほれてこにやァならねへといふものさ。イヤ又つらで出來た色事ハ。そふでもねへ　もんだが。じミ〳〵と心いきにほれてきたやつハ。はなしやいがべ　つなものだよ（このおとこ。いつたいふおとこゆへ。とこでも女郎が。ミす〳〵たゞほれたとばかりハいゝにくきゆへ。そこでぬしのきに。ほれいしたと。いわれつけているおとこゆへそれでこのせりふを。いふと見へたり此内。何かふわのうちから。けふりがでるゆへ）【舟頭】モシなにかくせへよふでございます【水】ャほんに。火なわばこの引だしへ。たもとがくばつていた（トうろたへまわりて。やう〳〵ともミけし）マァそふいふものだから。今宵おいらにつきやつてミなせへ。こふいつちやァ。しほ屋じやァねへが。おそらくおいらほどおもしろくあそぶ客ハねへによ。性ハ夫で今に。この遊びがやまねへわな【舟頭】もしまだけふりがでやすよ【水】どこに〳〵（トたちあがつてきよろ〳〵ト見まへす）【辰】おはをりがまだきへねへそふだ【水】ほんに。これハ（トやう〳〵に又もミけす。此さわぎに。たいへいらくのはなしも。ともにきへてしまい）【水】こいつァつまらねへ。辰さんも又きをつけて。くんなされぺいゝに（ト人のしつたとのよふに。うらめしそふにいふ。）【たつ】わたくしハ。いつかうぞんじませなんだ【水】こりやァいゝがの。内へけへると。山の神がどこでこがしたなどゝ。せんぎするにやァあやまる（トまだいろおとこたいふ）【辰】もふまいり

ました【水】ヲャ兄貴ごくろう【舟頭】ハイおたばこ入が【水】ヲイ／＼サァ辰さん【たつ】先おさきへ【舟頭】旦那おけへりれ【水】例のとふりさ（トさんばしをわたりあがる）

○金銀を湯水と遣ふ流れの里。人も命のせんだくと。行つもどりつ聲／＼に【ウタ】すけんぞめきれむくどりの。なれつゝ木つゝきこうしさきッテチリ／＼【地廻り傳】コゥおりよげいながら。ひとつ。おたのん申やす（トきせるをこうしのあいだへつっこむ）【新造】ヲャこの雁首を見なんし。大きなもんだよ（トすいつけていだす）【傳】おつきなとつて。股のさけるほどでもあんめへ（トほうかふりのむすんだところを・トへあげてぽく／＼とつき・かうしの下のさんへはたいて・またすいつける）【地廻り吉】傳や。ついでに紙をいちめへもらつてくりやな。犬のくそをふんづけた。いめへましい。きのきかねへちくしやうめだ。とんだとけへたれておきやァがつた（此内えじかきかわばたりたきて・少しのふろしきづゝみをせおひ・ハおともさぬてうちんをさげたるおとこ）【太兵へ】十兵へさん見なせへ。黒いものゝどふしてもふめねへの。【ツレ十兵へ】そふさ。ぞくがわりいゼ。どれもけんで。六匁ぐらいのしろものだ【太兵へ】はたでやすくうれゞよい【十】むかふのやなぎちやァ。せんど參會の時太平がかつた女だ【太】こいつもおへねへらうずだぜ。げんなまにしちやァたけへもんだ（トむちうになって地廻りのあしをふむ）【傳】アイタ、、、、【太】これハ御めんなさい【傳】やろうの鷲じやァあんめへし人のかゝとを。めがきやァがるこたァねへわへ【吉】なんだ。よこつつらァ。かぶりけへてやりやな

此そばにかミがたものが二人きいていて【八右ェ門】嘉兵へさん。こちよらんセ。ゐらいたんなわろじや【加兵へ】なるほどあづまゐびすじや。ゐらうものいゝのきたないとこじやわいの。大坂(おほさか)でも。かぶりかくの。何のとれいやセんわいの。つらァくいかいてこますといふてじや【八右ェ門】京都(きやうと)でも。たまにいさかいをしおるが。まだきれいにいゝおるわいの【嘉】なんといゝおるぞいの【八】よこつつらァたべてこますぞといふと。さきの相手(あいて)も。サァあがりくされといふわいの 此うちわかいものそばへきたり【若者】もしちとおあがりなされませ【八】イヤ〳〵。わしられついに。人のつらをたべたことがないわいの トそう〳〵に行すぎる ◯すががきチヤンチ〳〵〳〵

◯水狂辰三郎へ。ちや屋舟やどをつれて。大ミセへしけこむ。尤初會。ざしきの内いろ〳〵あれ共。こゝにはしよつて。すぐにとこへまわる

客すいきやう。大なまよいとなりて。ふとんの上にたをれている。あいかたへはしだて。かほだちきつとして。すつかりとしたるしろもの。うへしたともに。すゝたけいろのむく。しろちりめんのしごきをメ。やうじをかミくだきながら。ゆふ〳〵とざしきへはいる。客しばらく。たぬきをやらかしいたりしが。こたへかねてかほをあげ

【水狂】ヲヤいつのまにきなさつた【はし立】たつた今きいした トかんざしにて。あんどうの火をかきたて。てうじがしらをさらの中へいれんとして取おとし ヲヤすかねへよヲ トひざでたゝミを一ツとん〳〵【新造松の】モシおいらんで。竹里(たけさと)さんがおつセへす。さつきれ筆(ふで)を。おありがたふござりいすとさ【はし立】そこへいれておきなんし。コウ松(まつ)のさんいセやの兄(あに)さんれまだいなんすかへ【松】いつそしやれてゐなんすよ【はし】そんならね。さ

つきおはなし申いしたとを。おたのミ申いすといつておくんなんし【松】そふ申しいやう(ト出てゆく)【水】おもて座敷で。九平次が聲がしたつけがきているかの【はし】その九平次さんの事ざんすぬしやァしつてお出なんすかへ【水】しつているたんか【はし】もしへ。とんだおもしろへ。人さんておざんすよ。こけへちよつとよびにおやんなんしな【水】ツリヤァ御めんだ。おいらが來たことがあのてやいへしれると。それからくちかおほくなつて。あそこからもこゝからもおくりものだのなんのかのと。てへ／＼うるせへ事じやァねへわな【はし】それでも。今おもしろへはなしをしていなんしたを。わつちやァ。聞さしてきいしたから。そのあとがきゝとふすれな【水】ツリヤァおめへれ。いつてきくがいゝが。こけへれ御めんだ。おいらがきたとがわきへしれちやァ。ちとあんばいしきの。わりい理屈もありやすよ(ト外のうちに。なじミでもあるよふなとたいふ。いつてへ此客。いせやにも。はらひのこりのはごたしよつているゆへの事なり)【はし】そふてへ聞かけたとを。そんな聞てしまいゝせんと。氣にかゝつて。てへ／＼わりいもんじやァおざんせんよ(きやくへひよつと。こけへこられちやァならぬゆへ。せんかたなく)【水】それほど聞てへはなしなら。さぞおもしろへとだろふ。はやくいつてきゝなせへ【はし】そんならちよつと(トそう／＼にたちかゝるた)【水】おいらが事へけしておんびんだよ【はし】ツリヤァしやうちでおざんす(トずつとたつてかけだす。此おいらんなにか。それ／＼してざしきにいつかず。折ふしとなりざしきの客ねとぼけごへのうた)【ウタ】へんなこんばん。こんたァすかん。めつたにきやくがおほけれ

べ。きいてびつくりまわしに。さん／＼まつた。あかつき。すい／＼のすいとな【水】ヱ、いめへましい唄た（トまくらもとのてうし・さかづきをひきよせ・ひやざけをやたらにひつかけ・そのいきほひに・そろ／＼とねふりだし・いびきをかく）

夜もはや更行まゝに。淺艸寺の鐘ハ頭の上にきこへ。鼾の聲枕の下に響て。金棒の音喧く。犬の吼尤高し、廊下の足音に。天窓の黒き鼠きのじ屋の臺をひいて行ば。隣坐敷の猫撫聲。爪をたてゝ客をかく。ひそ／＼咄ハ聾の耳にもとゞまり。漉帋の音ハふられし客の胸にこたふ。ねずの番の噺にうかさるゝハ。お茶をひいたるてやいにして　皆小便くさき所に集る。

其頃ほひに。水狂もふつと目をさまして。見ればやつぱり我ひとりなり

【水】つまらねへばんだわへァ、水がいつぱいのミてへもんだ（ト又てうしの口からすぐにとく／＼とやらかし・さけハのぼせけへるほどよいがまわり・おいらんハこず・ひとりまじ／＼としていてもつまらず・とうとう／＼こたへかねて・やたらに手をたゝく）【若者】あなたでござりますか（トしやうじを明ては）是ハおさミしうござりやすね【水】さミしくつてもッりャァいゝがの。聞てくんねへ。こゝの内の法かァしらねへか。うろたへた幽靈が。かどちげへでもしたよふに。ちよつとつらァ見せたなりに。消てしまつて。今によつつきもしねへわな。ほんのこつたが。おらァこの土地ハ鵜でいるものだから。女郎がちよつとでも。目はなをいごかしやァハヽ、ァこふだなと。何もかも。せうちのすけで居るから。客があるならあるよふに。打明てこふだといやァ。たゞくれてゞもやらァな。て

へへいらくじやァねへが。おらァ敷初の蕎麥にやァいびつなりの切手を配り。燈籠俄の砂糖水にやァ。小粒をいれてのませたおとこだ。女郎の腕へ逆修をいれさせたこたァねへが。新造の開眼にハ。いくたゞ施主についたか、しれねへといふもんだから。似た山客をとりあつかうよふにされちやァ。つれの手めへも外聞がわりいわな【若】御もつともでござりやす。何もかも。御しやうちのあなたのことだからお願へ申て。どふでもなるものを　どけへいかしつたやら、只今そふ申ませふから。先今宵の所ハ。御りやうけんなすつて【水】ナニ了簡をするい。しねへのといふ譯じやァねへが。あんまりだァな。安菓子屋の紙ふくろに。じやうだん書をしたよふな頬ァしやァがつて。ふるも氣がつゑへ。なんぼこんな、飴のとりでこしらへたよふな野郎でも。九郎助いなりの繪馬をミねへ。ミんなおれが代句だハな【若】もふ〳〵御めんなさいませ。おいらんたちも。氣に御ゞよさいハねへが。とかく取しまりがござりヤセんので。いつでもわたくしどもが。誤つてあるくにハこまります。ハヽヽさやうならたゞ今トおかしくもねへことだからつて・さう〳〵にたつて行・間もなく・おいらんきたりて・ふとんの上へよこにすわる・きやく・よつてもつかれぬかほをして・ふくれけへつている【はし】ぬしやァなぜはらをおたちなんしたへ【水】なぜたァたゝねへでさ【はし】それでも。わけへしゆをよびつけて。あんなに。おつセへすこたァおざんセんハな【水】いつたがどふした。いハねへでさ【はし】それだとつ

て。ぬしがいつてこいと。いゝなんしたじやァおざんせんか【水】いつてこいといつたとつて。てへげへしれたものだ。麩屋の手間とりを。飛脚にやりヤァしめへし。たかゞ五間か十間のところへ。いつてくるのに。今までこねへといふとがあるもんかへ【はし】ソレヤァわつちも今宵癪がおこりいして。下で薬をたべたり。何かしていゝしたれな。そんなにこゞとを。おつせへすくらへなら。初手からいつてこいと。いゝなんせんがよふおさんす。それになにも。あんなにきかれもしねへとを。おつせへすこたァおざんせん。客人をそまつにでもしたよふで。ないしやうへきこへてもてへ／＼わつちがわるふおすれな。よくかんげへてもお見なんし。ぬしもこけへはらをたちにきやァしなんすめへし。ちつとの間。ざしきをあけたとつてわけへしゆをよびつけなんすこたァおさんせんよ　トたていたに水のながるゝよふにいゝすくめられきやくもからかつたところがはじまらぬとおもいにはかによわいねをだしてあやまり

【水】コウおいらもはらのたつまぎれに。わけへしゆにいつたがわるかァ。かんにんしねへ

【はし】ソリヤァどうせ。わつちらがよふなものでおざんすから。ぬしたちの。おきにそまぬともおざんしやうが。この土地へ。はじめてお出なんしたお方じやァおざんすめへし。ちつたァくげへのとも。すいりやうして。おくんなんしたがよふおざんすれな【水】ハイ／＼【はし】あんまりぬしやァ。ばからしうおざんす。【水】ハイ／＼【はし】ふけいきな　トふとんのはしに・ねころび・うしろをむけてい

きいかまわずねいる。客へもし／＼して【水】コウおれがあやまつたから。きげんをなをしな【はし】はらがたつて。いつそしやくがいとふすれな（トねつからとんしやくなし。きやく。こゞとをいつただけなをうへねりして。まじ／＼としている。となりざしきのきやく。このされぎにめをさまし。又とぼけたこへにて）【ウタ】しにかゝるよふで。おいどだいてねられた。□見てもどれ／＼。□にゃうさを忘れぐさ

○おもてざしきのきやくハ【辰三郎】ふとんのうへにねころびながら。つくへの上にあつたやゑがきの本を。とつてみているあいかた【花ぞの】何かふさぎて。しを／＼としてざしきへはいる。あとからほうばい女郎。ばんとうしんぞう。なにかさゝやきながらはいる。おいらん。あんどうのうしろに。うつむいてすわる

ほうばい【浪花】もしおゆるしなんし（トあんどうのうしろへまわり）花園さん。もふ／＼いつそ。わつちやァそばでくよ／＼おもつておりいしたが。おめへさんれ。よくもだまつてお出なんした。さぞはらがたちいしやう【番新きく里】わたくしもくやしくつて／＼ないてばつかり。おりいしたものを。さそおいらんれ。くいついてもやりてへよふに。思ひなんしたろふが。いわねへにしくれおざんセんよ【花】すいりやうしておくんなんし。橋立さんよりやァ。わつちらァとしたのもんでおすから。いわれうちだとおもつてれおりいすが。あんなにいわれちやァ。もふ／＼くやしくつてなりいせんよ（トなきごへにていふ。客へなんだかわからず。あきれたかほをしてきいている）【浪】アレぬしのおかほを見なんし。いつそ。あきれけへつてお出なんす。（とくちにそでをあてる）【きく】ほんになんにもおしんなんすめへが。おめへさ

んのことで。てへ〳〵のさわぎじやァおざんせん。おいらんなんざァ。あんなにいつそ。泣てばつかりいなんしたわな【辰】ソリヤァまたどふいふわけで【きく】きいておくんなんし、おめへさんも。その事ハしつておいでなんしやうが。ぜんてへざしきでハ。ぬしのおつれさんがさかづきを。わつちらがおいらんへさしなんして。おめへさんハ又。はしたてさんへ。おさしなんしたでおさんしやうね【辰】なるほど。おめへがそふいゝなさりやァ。ちげへねへそふだおいらも。こけへへつたときやァ。こいつァおいらんがまちがつたと。おもつてハゐやしたが。そんもとくちねへことだから。だんまりでいたのさそれが又。どふしやした【きく】それがねはし立さんがまちげへて。おひとり客人を。じしんの床へ。つれていきなんしたもんでおざんすから。おいらんも。こりやァ客人がまちがつたよふだと。おもいなんしてもゝふしかたがおさんせんから。それでおめへさんを。こけへおつれ申いしたのでおさりいす。それといふも。あつちらの客人よりかァ。おめへさんのはうが。いゝ男ざんすものを。おいらんも心のうちじやァ間違つたのがけつく。嬉しくて。なりいせんからのことでおざんしやう。そふしたらおきゝなんし、橋立さんが。いつそこつちから。客人をまちげへたよふにいゝなんして。よいからてへてへおいらんと。いゝやいなんしたことじやァおさんせん。橋立さんハ。おしよくのことなり。肝

積(しやく)をおこして。いつそおいらんを。こんなしなんしたときやァ。わつちらもゝふ／＼。くやしくつて。くいついてゞもやりてへよふに。おもつておりいしたものを。その時じつと。こらへてゐなんした。おいらんの心がいとしくつてなりいせん。それだからおめへさんも。これからきてあげておくんなんし。ごせうておざりいすよ【なミ】ほんにこりやァ。わつちらもとも／＼。おたのミ申います。そふいふいきはりでおざんすものを。ぬしが是限(これぎり)にお出なんせんと。花ぞのさんのかほがたちいせんわな。それにまだ。お聞なんし。はしだてさんのおつせへすにやァ。たとへ此うへ。あの客人といふ事をしても。花ぞのさんを。つきだして見せいしやうと。いゝなんしたとき。ほんににくらしいくちだのふ。【辰】そんならまちげへの理屈(りくつ)を。おいらがつれもしつているかね【きく】ナニあの客人わ。いつそ酔(よ)つてゐなんしたから。そんなともむちうでいなんすそふさ。ぜんてへはしだてさんも。ぬしにやァほれなんしたと見へいすよ【なミ】それだからのとざんす。もしへ。いろおとこわもふ。これがうるそふおすね（トわらひながら。たばこのけふりを。うちへひいてはたき）花ぞのさんも心づけへを。しなんしたかわりに。是からまたしつぽりとおしげりなんし（はなぞのハヽンとはじめてわらひうつむく）【きく】おいらん。もふ何も用(よう)わおざんせんかへ【花】なミはなさん。おありがたふす。きくさとさん。もふいつておやすミなんし【なミ】もしあなた【辰】おやすミなセへ【きく】ハイあなた（トなミはなとともにきくさともでゝゆく）【辰】

そいつはとんだことであつた トよぎをかぶりねる・おいらんはあんどうの火をかきたて・びやうぶのかげへよせて・ふとんの上へあがり。きやくへいつぷくすいつけてだしうつむいている・さきほどゝいさくさにて・目へなきはらし・まへがみはぶらさがりて・うつとりとしたる・かほのうつくしさ・されども・ほれているきやくにあふうれしさは。しぜんとわらひをふくむ二かは目のあいきやうみへたり【辰】ソリヤア大きにきをもみなすつたの。きのどくな【花】どんなにこゝろづけへをいたしいしても。おめへさんが是から。見すてずに。きておくんなんすりやア。よふおざんすが。ひよつと是ぎりにして。お出なんせんと。もふ／＼わつちやァいきてはいられいせんから。それが又。かなしくつてなりいせん トヌ少し目がうるむ【辰】そふいふわけじやァたてひきでも。これからこにやァならねへといふもんだが。おめへがまた。その氣でつきやつてくんなさらにやァ。はりやいがねへといふものだ【花】おめへさんさへそのお心なら。わたくしが身はたとへ。どのよふになつても。いとひはしゐセん【辰】ソリヤァおたげへだ。しかしおめへがたのこゝろは。あてにやァならねへ【花】はじめておめにかゝりいして。こんなことを申いすものでおざんすものを。うたぐりなんすは。むりじやァおざんせんが。わたくしやァもふ／＼。どんなことでもいたしいすから。おめへさんのおこゝろのはれるよふにしておくんなんし【辰】ソリヤァおめへのからだへ。きずをつけさせたとつて。なんのげへもねへことだから。いゝわな。おめへがその心いきなら。わつちも。其つもりでこよふわな【花】そふだとつて。このうへ。はしだてさんと。いろ事でもしておくんなんしち

やァ。いよ〳〵すゐいせんにへ【辰】ナニおいらのよふなものが。そんなとができるものかへ【花】できいすわな。はしだてさんがてへ〳〵。ほれていなんすとじやァおざんせん【辰】ナニだがほれるものだ【花】ほれいでどふしいしやう。こんなにいゝおとこだものを（トきやくのほうべたをそつとつめる）【辰】いへて〳〵（トかほをよこにするとヌミゝをひく）【花】ほんにおめへさんのきでれ。あつかましいものだとおもつて。お出なんしやうが。なぜか。わたくしやァ。今宵はじめておいでなんした。客人のよふにやァおもいゝせんわな【辰】こふ又。きぬちがつたのも。よく〳〵のえんだろふ【花】こんなうれしいとはおざんせんよ（トぐつとひいきよせ□□□□□□□□・□□□□□□□□□□□□□□［かよわきうでのちからありたけメつける］）【辰】おめへれ能ふとつていなさる。こゝられどふか。くつついて見てへよふだ【花】アレいとふすれな。ヲヤおめへさんのゆびれ。とんだほそながうおすよ【辰】ゆびもながいが手もながい。おのぞみなら。まだなげへものがありやす【花】ドレ其なげへものを。おミセなんし【辰】□□［コウ］□□□□□□［くすぐつてへ］【花】□□□□□□［くすぐつたくても］□。□□□□□□□［こらへてゐなんし］【辰】□□□□［そんなら］。□□□□□□□□□［おいらも見よふから］。□□□□□□□□□□［おめへもこらへてゐなよ］【花】□□□□□□□□□□□□□□□［アレサおよしなんしあやまりいした］。□□□□□□□［エ、おめへさん］。□□□□［そんなとを］【辰】□□□□□□□□［じつとしてゐなよ］。

【花】□□□□□□□［くつつきいすによ］（トくんづころんづ□□□□・□□□□□・□□□□□［つかみやいのちにはきや］□□□□□□□・□□□□□□□□□□□□□［くのほうかう、わざとおつぺせうれしがつてゐる］）

先この本は是ぎり。是から跡の一ト狂言。橋立が色事。花園が深切客の内股膏薬を。ひきの

ばして。後篇にいだす。私の曰。漆喰に。粉屑をもつてかためたる。水も洩さぬ戀中も。はなれる時節にやはなれやす。されど破れても燒繼あり。女郎買も。新造をすくうちハ人がよし。若者やり手に迄。あやまるやつハすれがらし。兎角人ハ。惚られるうちが花。こつちからむしやうやたらに。惚るよふになつてハ相手がなし。是をもつて。若時一二度ァねへと爾云

巷廓問答　惠比良濃梅　十偏舍著　全一冊出來

青樓曲少年行

趨庭萱草動精神ニ（おとつさんやおつかさんにしかられて）
已愁俠客年少人（そんなよわいきでつまるものかへ）
那報倡家千金諾（されどつまつたくるわのしやつきん）
獨行何處邀芳春ニ（ひとりにけるからあんじるな）

十偏舍一九賦

色講釋跋

鐵拐が洒落を吐き。鯨か白倨を吐く。此に十偏舍のあるじ。廓中の通言を吐く。雷同に是を謂べ。嗚呼其才の高夌。凡三萬三千丈。白髪色翁も。放蕩倅も。一度閲して。或ハ迷ひ。或ハ悟し。詐と寔をならべたる。兩枕に慮生が鼾も狸と變ず。文福茶釜に。一段まさりて毛の生たる。手練手管の本間の中。障子の竇の穴まで探て頓に此一冊子をなす。予序の後に。其理を誌すと謂へ共。いまだ。其究の深に至らず。一寸先ハ。眞くら闇の穴賢と爾云

若葉亭扇光演

契情買帳畧縁記　完

十返舍作

倡客一夜鮓　同

同作

右來戌春出板御もとめ御覧可被下候以上

惠比良之梅

惠比良濃梅序

謀を本問の中に回し。勝事を坐席の外に表すれ。娼妓の度量。番新。謀士となつて。弱兵を克指揮す。鋪着の陣立。隊伍を亂さず。中正街の出張。駈引に依て向。數萬騎の大連累。貝鐘。雑戶。一手と成て。黃金の瓜牙を激といへども。勝に乘て通則れ遂に宅眷。落城に至る事あり。美男。首俛して偶坐をなし。醜夫ふられて。忽に敗走す。名代の人質を出して。擾合をなす倚舌の趹屈。斜に行。忍の一騎立は帶紐を解く裸武者。深窓の血戰。坐鋪の對陣。作者の陣笠組。素見物の。衆群に順ひ。ヨイ〱ワイ〱。アリヤ〱〱〱。空叫の凱奇をつくり。廓中に入て是を看

に。勝て甲の緒を締る者。萬全の利を得るにやあらん。猶好士の。指揮を傳へて。娼女を生捕手管。俠客を打捕手練を縮。其勝劣を此に誌す。願くハ御見物加勢を得て。おぶさらん事を待ものならし

于時寛政十三載

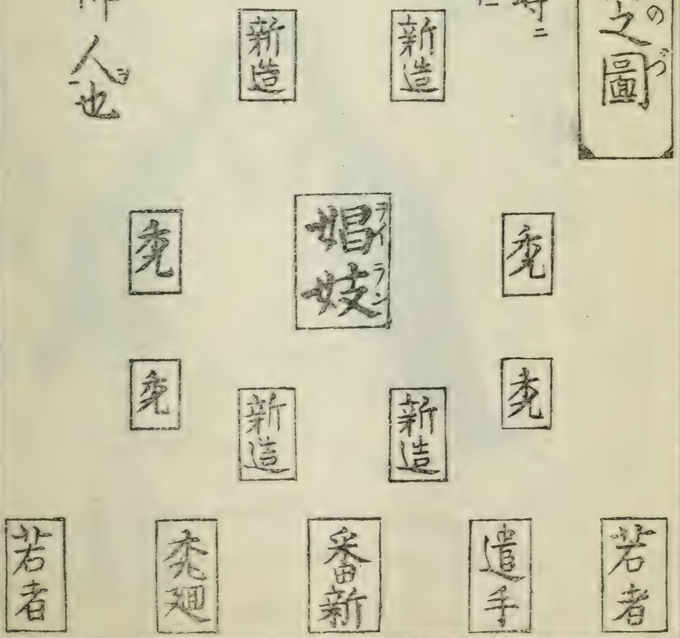
辛酉 孟陽吉旦

十偏舎九

通客籠廓中圖
唐士謂遊冶郎
日本ニ俠客又粋ト云

魚鱗鶴翼之圖

附出初陣之時ニ
此備也先蜂ニ
有ニ桃灯持一
中軍并後ノ
兵弱克勝ノ
強之勢怡ニ
魚人如行ク
又拍ノ兵有ニ
左右ニ防ニ生酔人ヲ也



第一 料理茶屋勢揃之事
附り酒代割合之叓

第二 番場忠太謀生酔事
附り横寸賀寸平竭若者叓

第三 謂里橋神仲滑稽事

第四 梶原源太生捕娼女事
附り口舌強勢之叓

第五 佐々木高綱被抓居事
附り娼妓貞節之叓

第一

去ほどに。梶原が郎等番場の忠太が其出立花色郡内の小袖。紋さやのあわせ羽折。かいきの裏の付たるをちやくし。ぼつちのすそを。小ミじかくひき上ヶたり。つゞいてきたるハ。姉輪の十郎。黒つむぎの小そで。鳶八丈のはをり。何もしぼりの手ぬぐいにて。頭をくる〳〵つゝミしハ土ぼこりの用心なり。是も同く横寸賀寸平ふとり嶋の小袖。こげちやのぶつさきばをり。此壹人ばつちなしの尻はしより。膝栗毛を飛して。大磯の廓へいそぐ道すがら。先いきやすめに一ッはいしかけ。いきをひをつけんと。料理茶屋へづつとはいる【茶ヤ】おくへいらつしやりませ【十郎】はき物ハこゝにおいてもよいか【茶ヤ】宜うございます【忠太】なにがある【茶】御酒をあがりますか【寸平】そふさゝかなハ【茶】にざかなでもあげませふか【忠】にざかなハなんだ【茶】ひらめでございます【忠】其外に何がある【茶】平でございます【忠】それハなんだ【茶】ハイきりそに。松だけ。くわゐ。ミつば。などと巾ものでございます【忠】そふしてまた何がある【ちや】ちやわんもの【忠】それハ何だ【ちや】鴨の玉子とぢ【忠】まだなんぞあるか【ちや】ハイあちのしほやきか。ふくら煮。おすいものもございます【忠】そ

のすいものハなんだ【ちや】ハイつミいれ【忠】それにしよふ。酒ハよいのがあるか【ちや】ハイ【忠】直段ハいくらだ【ちや】一合廿四文と。八文【忠】まだよいのがあるか【ちや】ハイ。三十二セんのハぐつと上酒でござります【忠】そんたら。そのよいのをこふと。一チ合五勺ばかり出してくりやれ【ちや】かしこまりました トたて行。ほとなく。たけ長のはちまきをしたる女てうしさかづきをもちいづる【十】ばんば氏おはしめなさい【忠】先おてまへから。お席順に【十郎】しからハ。おどくミをいたそふ。ヲト、、、、是ハつよいおしやくな【寸】あつたらものを トふところの。はんしのあいだにあつた。手がミをだして。こぼれた酒をふく【忠】ときにこゝハ近頃のミセだな【茶や女】あとげつから出しました【十】よいふしんだ【寸】よほどひろいの。間口ハいくらある【女】三げん半ござります【寸】そふだろふ。宿賃がよほど出よふ。 ト何のセハにもならぬことをいふ【忠】ときに是斗でハのめぬ。なんぞ肴を申付よふ【十】いかさまなんぞよふござろふ【忠】コレしたしもののよふなものを。少し斗もつてきてくりやれ【女】ハイ トたつてゆく【十】きやつうつくしのおくの瀬山どのによく似ておる【十】ときに是ハ トてうしのふたをとつて見て今少し申付よふ トてをたゝきいゝ付る。ほどなく。ひたしものとてうしをもつてくる女のかほに梅ぼしのはつてあるをミて【寸】おまへのかほに何かついておるドレ〳〵 トとりにかゝる【女】是ハづゝうのまじないでござります【忠】めいよう屋敷などでも部やがたが。折ふしあのよふなををいたす。さてハづつうのまじないだな解セた〳〵【十】時に。この

おさかづきれ。もふきこうでおつもり【忠】横すかれどふだ【寸】酩酊〳〵【忠】デモ御順に【寸】なんでもおてうしぐりさ（トだん〳〵まへりてさかづきれおさまる）【忠】書付をもつてきやれ【女】ハイ御酒が三合に。こふと百八十文でござります【十】すいものれいくらづゝだ【女】十六せんづゝ【忠】よし〳〵（此内三人ながら。うちふところへ手をいれて。たがいにきつぱりらちがあかず）【十】これからつかれそふ【忠】よふござる（ト手ぬぐいにくるんだ。四文ぜにいつぽんなげだし）ソレとつてくりやれ【女】ハイ（トかぞへて膳の上へのせたつ）【忠】サア参らふ【十】【寸】これれおセわになりました【茶や】よふおいでなされました

第二

扨大磯の廓中にれ。三方に堀をほり。高へいをつき。左右深田にして。前にれ五十間。三きよくの道をひらき。土手八丁をかまへたり。梶れらが郎等ども。よき敵もがなひつくんで。高名せばやと。いきりたつて。大もんのうちへずつとは入り【十】ばんば氏。きこうのおなじミれ。どこもとだな【忠】まいつるや傳三郎かたでござる【寸】拙者れはじめて羅越たが。さて〳〵繁花なことでござるの【忠】いかさま。寸平子れ初陣だろふ。サア御両人ともこふござれ（両かれのすがたき）チヤンラ〳〵〳〵〳〵（三人そこ〳〵にけんぶつして。まいづるやのうちへはいる）【新造竹里】ヲヤ忠さんおいでなんし【ふりしん

大ぜい」ヲヤよくお出なんした【若者】いらつしやりませ トつれこ はいる 【忠】いつしよにしておいてくりやれ トこしのもの お取てわたす 【若】あなたがたも【寸】なんだこれか ト刀を わたす 【若】おわきざしも御一所(しよ)に【寸】これもか トわきざしを ぬいてわたし サアこれからへ。やわらだぞ トきものゝすそをまくりあげ。とさゝ／＼と。は しごをあがり。忠太があいかたのざしきへとふる 【若】さかづき をもち出 忠さん。此あいだへ。ねつからいらつしやりませぬ。あなたがたよく【十】ヲイ／＼【寸】ナニカきさまへこゝのわかいしゆか【若】さやうでござります【寸】コレハはじめて。又是からおせわに預(あづか)らふ トあたまから一もんいら ずにちかづきになる 【若】ハイ トいつたばか りで出て行

忠太があ いかた 【うぢはし】きりやういたつてよし。尤としまだけはてをこ のまず。なじみなれへ忠太がそばちかくすわる 【かついろ】きりやうは十人 なみ。ヤセがたちにてかほもい たつてほそし 【やり梅】まだ十七八。いたつてあいきやうこほるゝばかりの目もとかへいらしく。 うちかけうへぎもひちりめんにて。ひときへめだつきりやうよしなり

【若】ひとつめしあがりませ【忠】姉輪(あねわ)初なさい【十】しからバ ト少しひき うけほして あのお子(こ)へあげてくんなさい【若】ハイ トさしづにまかせて。やりむめがかたへとりつく。寸平へじゆんにすれバ。三ばんめのやり むめがおれだと。こゝろうれしくおもいしところ。十郎にせんをこされ。むつとしている 【若】ハイあなた ト寸平がまへにさかづきをおくしかたなしにまん 中のかついろへさし大きにふくれかへつている 【忠】サアどなたも火ばちをそこへあげよふか【かつ】ナニわたくしらァよふざんす【十】イヤこのほうへ申うけよふ トわざ／＼火ばちをもつてたち。やり むめがかたへよつてすわる。すん平へいよ／＼。ごうはらがつて。むしやうにさけば かりのんでいれどもとかくふさぐよふすなり 【忠】寸公どふした【うぢ】ほんに。ぬしばかりそんなにはなれてお出なんせずと。もつとこつちへおよんなんし【寸】どふしたか氣分(きぶん)がすぐれぬ【忠】ひと

つのこなさい【十】ヲツト寸平子へさそふか【寸】きこうのさかづきハいやだ【十】こやつこどもをきらひおるの【寸】ヲヽきらひだ〳〵【十】ハテそふいハずとのこなさい（トさかづきをなげだす・寸平がひざにあたつて・さかづきへうつむけになると）【寸】コレなにをするふしつけな。遊所だからだまつてハおるが【十】イヤささま。おかしなことをいわつしやる【寸】何がおかしい。武士たるものが。人にさかづきをさすに。なけほふるといふことがござるものか。【十】寸平子ハもふたべよつたそふな【寸】拙者がいつよいました【十】よつたからそんなたハことをいわつしやる【寸】ナニたハことだ。イヤ身どもそんなことをきいておるふうでないぞ（トだん〳〵こハだかにいふ）【十】イヤそこもとにも支配がある。申分があらハ宿所へかへつて申されい。いかていにも承らふ【寸】なにさすいさんな（トたがいにひきぬかんと・こしのあたりをさぐりまハす・せんこくわかいものへふたりともゆづけたることをハすれ・おつかないめつきをして・たがいにかほを見やつて・おびのあたりを・にぎりこぶしにてさぐりまハす・このさゝぎに・おいらんたちハ・きのどくがつてこゝろ〳〵とたちぎゝがする・忠太いろ〳〵となだめて）【忠】これさ寸平との。あね輪氏とハ竹馬の友ではないか。それにどふしたものだ【寸】イヤそれでも。あの男ハ盃のさしよふをしらねへ。盃のさしよふを。（せんこく十郎が三ばんめのおいらんへ・さかづきをさしたることを・むねに思つてくどくいふ）イヤサ盃を。さすすべをしらないおとこと。同席をいたすもいやだ。こどもハもふ帰る【忠】ハテサまあよふござるハ【寸】イヤ帰る〳〵（トかけだすを忠太おしとゞめ）【忠】まづ〳〵【寸】イヤ〳〵【忠】ハテサそふしたものではない。コレサ〳〵。ソレあぶない。うしろの火ばちに。やくハん

がある【寸】イヤ〱。やくれんのさしよふもしらない男に。つきやうとハ。いやだ〱【十】此内忠太・らうかにきいてわらつている・寸ナニ薬罐のさしよふを【寸】ヲヽサやくれんを。イヤさかづきだ〱〱ヨがあいかたへなにがふつこむと・さつこくにセうちして・ずつとくると【寸】もふかへる〱【さきがけ】ぬしやァなんざんすへ。マァこつちへお出なんし【寸】いやだ〱トすつぱりかへりし大の男を・ちよいとつまんで・とう〱ひきずつて行・どふやらこふやら・あいかたのざしきへおさまつてやう〱なりがしづまる・ひとへに忠太があいかたに・はかりことをふきこミしゆへなりけり

兵書曰。忍ハ。一字千金の法則なり故に初會。此一字を以て。内守を密に保つべし。能是を守者ハ。敵地本間の床に臨んで。高名をなし。能守ざるものハ。孤抜身を握て。打捕べき相人ても見へず。硯蓋のつまミ喰も。段ゝ殘すくなになり。空しく兵糧に盡て。敗北すべし

第三

偖又世界ハ大見世。客ハ鎌倉方の去息子株。以前ハぐつと。花聲にして。遊びたれども。今ハひつてんつくの牽頭ひとりに。藝者も茶屋の娘なれバ。據なくあげての大さハぎ。さすがハ。腹ふくれの息子株。身の上をかくしての疲我慢。是晝三かいのはてなれバなり。はや夜も更行まゝに。たいこもちの口も干上りげいしやもばちにて。あくびのふたをするじぶん硯ぶた

にはしそのミと。九年母のはしつぽのミのこり。燭臺の下にハ。ゑびのからの山をなし。たばこぼんハはや。紙くず籠の出ミせとなりぬ。尻に帆かけて。舟やどもおいとま申せバ。薬罐あたまを打ふつて。茶やのてい主もたちかへる。跡ハひつそり。本間に床もおさまりて。つぎの間にハ。しんぞうかふろが。火鉢をとりまくむかふ座に。ゑど神［里橋］ラヤこの子がもふ。こぎだしたぜ［番新八重梅］けしからねへよ。ソレ火ばちがありいすハな（トしきせしんぞうが。いねふりをするをおこす。りきやういつのまにか。このしんぞうのおひへ。下ぐゝりのひもをつけて。むしやうにひつぱりながら）［里］おさるハめでたや／＼な。むこいりすがたものつしりと。コリヤあろかいな［皆ミ］ヲホヽヽヽ［ふりしん］およしなんしすかねへりきやうづらだよヲ（トひもをひきずつたなりにでゝゆくしんぞう。しげむめ。ヲヽさむ／＼とせなかをちゞめて火ばちのそばへより）［しげ梅］源さんハどふなんした［やゑ］およりいした。おめへさんハ松さんかへ［しげ］ナニいつものぢゞいづらが。きいしたわな。わたくしやア。もふ／＼いやでなりいせん。そして。おかしなにほひのする。人さんでおざんす［里］ヘテいまごろハ。客もすへねへものだが［やゑ］そんでもあの客人ハ。いつそおめへさんのとを。しんセつに。おつしやりいすによ［里］おめへがなんぼきらいでも。むかふじやア。ほれているからあんじるな／＼［しげ］セめてりきやうさんのよふな。ちうぐらゐの男ざんすといゝけれど［里］ヒヤアこいつ。中ぐらゐとハぶしつけな。それでも。やゑ梅さん聞て

くんねへ。せんど。夜あかしのとき。なんでも此しげ梅さんを。いけどるつもりで。あぶらげのやうな。ふとんを。やう〳〵はへつけてきて。ざこねとやらかした所が。いつのまにか。おいらをふとんのそとへ。ぐつとけだして。とやつて。大のじなりじやァねへ。天のじなりになつて。ねなすつたとこを見ちやァ。あきれておざがさめたァな【しげ】ヲャうそをおつきなんし。そして天のじなりたァ。むつかしくおたとへなんすの【里】ハテおとこなら大のじだが。おめへたちやァ。かうげへをさしていなさるから。ソレ天のじなりだ。それも辨(べん)てんさまの天のじだから。そこで臍(へそ)の下に。はす池(いけ)がありやす【しげ】ヲャよくいろ〳〵なとを。おつしやりいすよ。人のこたァおいゝなんすけれど。ぬしもこのあへだれ。らうかにふんぞりけへつて。何もかも。だしなんして。いつそざまくねへなりでおざんしたよ【里】ほんに。そのときやァ。きいてくんねへ。なにがらうかに。とやつて。ねているものだかち。客へなんざァ。ハィ御めんなさい。おきんたまをまたぎますなどゝ。いつて通るやつもあり。又。きやんな手やいと見へて。おつなとをいつたれな。おいらが雨手をはらの上へあげて。あし斗ぐつと。ふんばたかつていたものだから。なんだこいつァ。やろうの澤瀉(おもだかァ)ミるよふだとさ。そのまた。あとからきたやつがいゝくちよ。こいつァなんだ。板(いた)の間(ま)へふさりやァがつて。やろうのかまぼこ

じやァあるめへしとさ【しけ】ヲヤ〳〵【やゑ】ヲホ、、、、、（此内ぴか〳〵とひかるきものをきたる）【かふろ】りきやうさんに　花ざきさんがおつせへす。さつきから。まつているになぜこねへはやくきて。あしでももんでくれろッサ【里】ヲヤぶしやれなやつだ【やゑ】そんでもぬしが。よくかわへがりなんすそふで。いつそはなざきさんが。あめへなんすよ【里】ナニサおいらァ。こういふほとけしやうなり。それに色男といふもんだから。あれにやァかぎらねへ。どけへいつても。りきやうさん〳〵と【やゑ】ねつからい〻てがおざんセんかへ【里】おきやァがれ【しげ】そんでもりきやうさんに。ほれていなんす人がありいす【里】だれだ【しけ】アノね（トミヽに口をよせて）ミヽつとう（トかけ出して行）【里】このあまァ【かふろ】サァおいでなんし（トたつひやうしにおびの間からきしやごをばら〳〵）【里】アイタ、、、、ヲヤきしやごをふんづけた。ハテきしやごのふりそふな。てんきでハなかつたが（ト出て行）

第四

此ざしきの客といふハ【梶原源太】身放埒にして勘當をうけ。母おやが。ほまちがねのしをくりに。大いそへ入ひたり。今ハてう人どうぜんの丸ごし。是を。もつけのさいわいとしているどうらくもの。相方ハ【梅がえ】尤ふかき馴染にて。取おとしてもはなれまいと。漆をもつて

かためたる。本かた地の戀中なり【源】ヲヤさつきから氣がつかなんだが。疊のおもてげへが。よくできたの【梅】おめへさんよりやァましでおざんす。このあいだァ中の町へも。さつ〳〵とでかけいす【源】うそをいふぜ【梅】うそじやァおざんせん。だれにでもきいて見なんし【源】そりやァいゝくめんだ。ちつとかりてへの【梅】いせやのはらひれどふなんした【源】きのふこけへくるとき。まづ半ぶんやつておいた【梅】ソリヤァよくしなんした【源】なんでもいゝ鳥がかゝつたと見へて。このあいだァ。おめへのかほが。とんだいき〳〵としたよふだ【梅】ナニそんでも。まだいつそ。くらうになりいす事がおざりいすわな【源】なにが【梅】おめへさんのことが【源】おいらがどふした【梅】どふなんしたかしりいせんが。なんでもわたくしにやァ。ものをおかくしなんすから。それがいつそ。くらうざんす【源】何をおいらがかくしたへ【梅】こんなに。たげへに。行すへまでも。どふしてこふしてと。そうだんしやつて。來ておくんなんす。おめへさんにもおにやい申いせん。たとへどんなヿを。いつておきかせなんしたとつて。あいそふをつかすよふな。わたくしじやァおざんせんものを。なぜうちあけてはなしてゝおくんなんせんへ【源】ソリヤァ何のことだ【梅】おめへさんの。おそのうへのヿざんす【源】なるほど。こりやァどふも。げへぶんがわるくて。かくしていたが。そんなら。おいら

が今のミのうへを【梅】とふからしつておりいすハな。せんどもないしやうで。わたくしをよびつけて。おつせへすにやァ。きけバ源さんハ。おやごのかんどうを。うけていなんすといふヿだが。もつとも。ひさしいなじミの客人なれども。そふいふ身に。なん〳〵しちやァ。もふふけへヿも。あるめへから。てへげへにして。しまうがいゝよと。それからいろ〳〵と。いけんかましいヿを。いつてきかせなんしたけれど。わつちやァ。なに。そふでもおざんせんそふさと。いゝまぎらかしておきいした。ないせうへさへ。そふいふヿが。しれいすものを。それにおめへさんハ。わたくしへハ。なんともおはなしなんせんハ。おうらミでおざりいすよ【源】イヤそれハな。ひよつとおめへが。あいそがつきちやァわりいからと。かくしていたも。まんざらな。こゝろいきじやァねへわな。いつまでもこうして。きてへからのヿよ【梅】ナニこれほど。ほれきつておりいすものを。そんなヿなりやァなをの事。是からでも。人に見くびられなんせんよふに。なにごとも。そうだんづくにして。おめへさんの。御つがうのわりいときやァ。又どふとも。しかたもおざんしやうが。そのかわり。今までのよふに。はでに何かをしなんしちやァ。しじうハ二かいを。とめられなんすよふになりいすから。それハおめへさんのお心にありいしやう。とかくこのうへとも。お心づけへをして。おわづらへでも。でぬよふにしてお

くんなんし。それがいつぞ。くらうになつてなりいセん【源】ナァニそんなこたァきづけへなしさ。おふくろがセうちのまくで。何時(なんどき)でもそふいつてやりやァ。あづけたものを。とるよりやァこゝろやすいといふもんだから。てへ〳〵今ㇾ。ほんに御くろうなしのおミのうへだ【梅】ソリヤァまだしも。おふくろさんのおかげで。うれしうおざんす。ひよつともふ。こけへお出なんセんよふに。なん〳〵しちやァ。わたくしやァもふ〳〵。いきてㇾおりいセん。ふびんだとおもつておくんなんし（ト少し目がにじんでくる）【源】コゥそれでもふ。おいらが心ㇾ。打あかしてしまつたといふものだ。是から又。おめへのかくしなさるヿを。いつてきかしな【梅】ヲヤ何をわたくしがかくしいしたへ【源】何をかくしたもきがつゐゝ。佐ゝ木(さゝき)がヿをさ。コゥしるめへと思(おも)つていよふが。何もかも。セうちのすけでいらァな。きゝやァ此あへだも。しぬの。いきるのとされいだそうだが。どふでこつちㇾ。そのじぶんだとかくごㇾきわめているものゝ。こふ又。のろまにされるほどの。とがれしねへわへ【梅】なるほど。四郎さんのヿㇾ。おめへさんにㇾかくしておりいしたが。是にやァわけやいのあるヿでもおざんす【源】ナニわけもへちまもいるものかへ。うぬがものを。かくしだてする根性骨(こんじやうぼね)で。人のこたァヤレかくすの。なんのと。【梅】ソリヤァ一通(ひとゝを)りにお聞(きゝ)なんしちやァ。お腹(はら)がたちいしやうが。これといふも。おめへさ

んゆへのことでおざんすものを【源】ヱ、なにをいやァがるへ【梅】マァおきゝなんしな。勘當(かんどう)のお身(み)となん〳〵しちやァ今までよりかァなをのこと。つがうのわりいともおざんせうし。わつちも又、おめへさんゆへにやァ。いろ〳〵しがへもしつくして。つがうのわりい事ばかりで。ソリャァいわずとも。さだめししつていなんせう。此うへともおめへさんが。人に笑(わら)われなんせんようと、わたくしが胸(むね)ひとつでどふぞこふぞと。いろ〳〵におもいゝすから。それで。つがうのために。四郎さんを、かいてやるのでおざんすものを。いかにわつちらがよふな。はかないもんだとつて。あんな髭(ひげ)づらに。ほれいすものか。いゝかげんに。はらをおたちなんし。あんまり。ばからしうおざりいすよ【源】もふそれでいゝか。よくしやべるあまだァ。ほれねへものが。なぜミあかりをして。四郎をよんだへ【梅】ソリャァおめへさんのよふにもおざりいせん。そこが。手でおざんさァな、今宵(こよひ)も四郎さんが。きていなんすから。どふぞもふちつとながに見てゐておくんなんし。今に。わつちがこゝろいきを。お目にかけいしたら。それこそあやまつた。かんにんしろと。おつしやりいすよ【源】馬鹿(ばか)ァいへ。それまでだれがまつているものだ。ふてへあまだァ。どふともかつてにしやァがれ　トすつと立上りおびをしめなほす　【梅】もしへ。おびをしめてどふしたんす【源】どふするもんだ。けへるのだ　トすつと出て行かんとするを・しかミついてひきとめる・ぶつてもたゝいてもはなれバこそ。なミだとともにやう〳〵

と、ひきすへて。いわふとすれど。むねいつぱいにふさかりし。ぢびやうのしやく氣に身をもだへ。ウンとばかりにそりかへる。さすがげん六。見てもいられず。かミいれよりくすりとりだし。かミくだきてのませるやら。水よさゆよと。ひとりうろたへ。こちらにきたらこ。かいほうするうち。やうやうときがつき。目をひらき。げんたがかほをつくづくと。またもなミだにふししづむ今のふびんといぢらしく。いだきかゝへてなでさすり【源】コレ こゝろもちハどふだ。今のよふにいつたのも。ひつきやう。かわいさがあまつてのことだから。かならず。こゝろにかけねへがいゝによ【梅】おめへさんが。そふいつておくんなんすりやァ。もふもふそれで。おれがはれいした。わつちがこゝろにおもふたけわ。どふも口でわいわれいせん 今におめへさんの。うたがひをはらして。おめにかけいしやうから。そふおもつておくんなんし【源】こふいつちやァどふか。のろいねをだすもんだと。わらわれよふが。今おめへに。見かぎられちやァほんに死んでもいきてもだ。こふまた。ほれさせてくれる事わねへ。さりとわうらミなもんだぜ【梅】おめへさんがそのくちで。又こゝろりつとさせいすわな。いつそもふ。にくゝつてなりいせん【源】マァ其つもりで。四郎がとけへいつてやりな【梅】もふいきいすめへ【源】それじやァわりい。サァサァ。はやくいつて。おたのしミなせへ【梅】まだ。しやくがほんとうにおさまりいせん。ちつとおしておくんなんし【源】ドレドレこゝかこゝか【梅】ヲゝいゝきミさんす。そふいつても。かわいゝおとこだのふ トしがミついていやといふほどつめる【源】アイタ、、、、コゥ見ねへ。これが今。おめへにのませたくすりだ【梅】ヲヤヲヤなんざんすへ【源】錦袋圓(きんたいゑん)をのませよふと

おもつて。うろてへて。くハんのんさまのあたまを。かミくだいてのませたハな【梅】ヲヤく
ばからしいのふ（□□□□□□□□□□□□□□□□ トくひすじへからみついたふりにふと　□□□□□□□□□□□□□ んの上へころげこんでよぎくをかぶる）
【作者曰】これからが又ごうぎな癪だろふ

互に深き戀中も。名にたよりばなの年増にはまる。源太が鼻毛ハ延候抓のめされて。氣をもむなと。廻し座敷の後陳にひかへし。佐々木が思ふも己惚なり。なんでもおいらが色おとこ。イヽヤおれだとおもつている。こゝが則女郎買。あそびハやはり遊ぶなれバ嘘も誠もあなた任せ。どふでまゝにハならぬよの中

第五

梅がえがひとりの客ハ【さゝ木四郎】こよひハ。源太に先陳をしられ。そのミハ名代をとつて。後陳へ廻り。角行燈のうすぐらき所にぢんを取。かわりのふり新を。ちよろまかしてくれんといぢりかける【四郎】コレそふつれなくせずと。こつちらをむきなさい【ふり新】アレサおよしなんし【四郎】これがよされるものか【新】ばからしうおすよ。ひつこくしなんすと。聲をたてへすにへ【四郎】はて。やぼな子だ。いふとをきくと。なんでも。のぞミのものをつ

かれすが【新】それでも。おいらんがしかりいす【四郎】ナニおいらんがしるものだ。エヽふつくりとして。いつそからだがぶる〳〵する。コレはたまらぬ【新】アレナひげでいとふすはな。エヽひつかきなんすな。いてへつめだよゥ　トこれだかにいふ。此内むめがへ。たばこ入とてすがたを手にもちそへて。つまをとり。かんざしにて。つふりをかきながらはいり【梅】なんざんすへそう〳〵しい【新】四郎さんが。どふもなりいせんわな【梅】馬鹿らしい。いぢめておくんなんすな【新】ソレ見なんし　トそう〳〵に出て行。むめがへはよぎをぐつとまくつて。しんぞうのね□□□□□□□□。□□□□□□□□□□□□。□□□□□□□□。□□□□□□□□□□□。□□□。□□□□。□□たあとを三ツうつてねころび客のくびすじとまくらのあひだへ。ほそいきをごん□□□□□□□□□□とさしこみ【梅】あの子をどふしなんした【四郎】どふもせぬ【梅】それでもあんなに。おほきな聲をしなんしたものを。おめへさんも氣のおほい。そふいふ事じやァ。わつちがどんなにおもいゝしても。はりやいがおざんせんよ【四郎】ナニサ此方はきさまに。ぞつこんしうしんだものを。始終のところは。妻にでもいたそふかと。そんじておるくらいの事だから。うわきな事は致さぬ〳〵【梅】そりやァほんとうにかへ【四郎】實だ〳〵【梅】だましなんすと。取つきいすにへうれしいのふ　トひげだらけなほうべたへかぶりつき　もしへ。さつきに。八重梅さんが　これはばんしんなり　おめへさんに。お願もふしいしたこたァどふしておくんなんすへ【四郎】なにか。金子の事かゝずいぶん。しやうちいたしたが。しかしながら。やくそくのとふりはこゝろもとないが。是非はんきんは。いかよふとも手段いたそう【梅】ソレ見なんしおめへさんが實のねへせうこでおざん

す。なんぼいやしいつとめをして。おりいすわつちらでも。こんなこたァてへ〳〵。いわれいすもんじやァおざんせん。たがいにほれやつている。ふかいなかじやァ。何やかや。こんなとも。そうだんをいたしいすもんでおざんすから。それでおめへさんにおねげい申いすも。ひとゝをりの申たァ。おもいゝせんからのとでおざんすものを。それにおめへさんハ。そんなに氣のしれたとをおつしやりいす。ほんとうに又實があんなんすなら。よくむしんをいつてくれた。それでこそ。てめへのこゝろいきが。しれたといつて。おくんなんしてこそ。わたくしも。うれしうおざんすものを。五匁や十もんめで。すミいすくらへのとなら。おめへさんへおたのミもふさずとも。どふともつがうハいたしいす　もふいりいせんから。そふおもつておくんなんし【四郎】イヤサそふいゝなさると。此ほうハはなはだいたミいる。しからバ。十五もんめ用立ましやうから。きげんなをして。どふぞ。遣つてくだされ【梅】ヲヤばからしい。もふいりいせんわな。廿匁なくちやァ。どふもなりいせんことがおざんすから。それでそふ申いしたハな。それじやァわづかな事で。わたくしが。心づけへをしておりいすをも。ふびんだとおもつておくんなんす。おこゝろハねへといふものでおざんす。わつちもおめへさんたァひさしい。おなじミだと。いふのでもおざんせんが。ほれていゝすこゝろからハ。千ねんもなじん

だ。きやくじんのよふに。おもつておりいすゆへ。それでいゝにくいことをもおたのミ申いすものを。ちつとハくミわけておくんなんし。なぜおとこといふものハ。そんなに。こゝろづよいもんだのふ（トかぢりついて火のやうなかほをおつけろ）【四郎】もふよい〱。そふいわれてハいちごんもない。あやまりいつた【梅】そんならわつちが申いしたとをりを【四郎】ヲヽ、サしやうち〱【梅】やすうけやいにうけやいなんして。おだましなんすときゝいせんにへ【四郎】きよごんハいわぬ少ゝハこゝにもあるあとハ明日(みやうにち)さう〱にさしこそふ。まづこれを（トかミ入よりだしにかゝる）【梅】そんならッ今に八重(やゑ)むめさんがきなんしたら。あの子へわたしておくんなんし。（トさすがハちうさん・じきにハとらず・こゝがいろぎやくでないせうこなり）そしておめへさんハ。なぜおびをしてゐなんすきうくつらしい。ドレといてあげいしやうヲヤむすびめがしれいせん。（トあまりげんきん・むしんをきいたしるしがじきに見へる・きやくハなんともきがつかず）【四郎】むすびめハ。こゝだ〱【梅】ドレおめへさんつ手をおとりなんし（トもへぎさなだのはこむすびにしてあるをぐる〱といてなつはる）【四郎】コリヤ腹がしまつよしなさい〱□□□□（トじしんにとつて、ついでにふんと、をハづして、ふえのわきへつきだし）【四郎】サアこれでよいか【梅】おめへさんハでへぶむなひげとやらかあんなんすねへ。とんだおとこらしくて。いゝものざんすよ【四郎】これハちかごろ。御挨拶(ごあいさつ)かたじけない。たいしなくばくつとこつちへよりたまへ【梅】こうかへ（トひつつきて）もしへ【四郎】なんだ【梅】うれしいねへ（トきやくにはおびをとかして、そのみはしごきをしたなりに、くつとだきつ、）

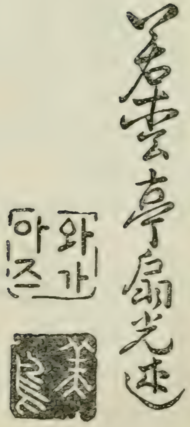
此兩人鼻とはなとを。突合セしはあたかも。かけ鯛のごとく。鰭ある男一疋も。汐先にむかひし黒鯛ならで。此道にはいづれ。白い歯を見セぬはなし。猶此鯛の片身をくすねて。作者が本箱のねずミ入らずに隠しおくも。イデ後篇のお肴といふ時ずつと出すつもり。マア何にしろ腐ても鯛。ちとござつたと見ゆる目元は。人の心をうごかすやつ。嗚呼此鯛のこけとなるヿ。愼ずんばあるべからず

後序

青樓の通言曰。オタンチンざんす。子コざんすの唱れ。揚屋町へ通ひ京町へかよふ。色男も權七も。かよひ廓の仲街。花の盛の景色を見てれ。禿にあらぬ芳野も跣足。雪の詠の白妙にれ。煩惱の犬も。狂ふて遊ぶ居續面白し。しかゝあれど。辛氣辛苦の苦界十年。客待霄の行燈に鬼灯ほど丁子頭を喜び。秋葉燈を見てれ。言ぬおもひの胸の火も。迷へばくらき眞の闇。吉原斗月夜とれ。悟つてあかるき。俠客の意ならん。其有增の餘情を穿ものは。一九といへる。僕が戯丈。はづかしながら。すがゝきを

惠比良濃梅

弾り。口三弦のチツン　チヤント筆を此に。置叓しかり



跋

此柳巷にてげぢといふハ。梶原が事を謂にハあらず。されど。彼にも其名あり。仍て娼婦を嘗ちらかす。此艶男を究蟲とやいはむ。嗚呼、克むしにあらずや。終に借金の斷。食言も後より露るに至つて。ゑす紙のひと重に捻附られ。連子の外へ打捨られて。再び。五分縁の二階を踏亊能ハず。是に於て。佐々木が定紋の四ツ目屋を用るとも。娼妓仰向て。天井の板を算へん。只此畑にハ。金の生る木義男を。移し植ん事願ふされバ錢ハ朝日の彌陀の光を奮ひ。金ハ九郎助稻荷の。木の葉よりも澤山なり。此に十偏舍一九なるもの。偶。南鐐一片限に遊んで。則二朱

だけの差禮を書く。是四文銭の二本棒。はなつたらしの甚舗にあらずや。此馬鹿者が後馬に乗て。予も又爰に馬鹿をつくす。夫で御見物の。御慰になると爾云

於十偏舎机上傍
十雨亭亞曉誌

青樓夜話 色講釋
舌講 十偏舎著
全一冊出來

嘉和美多里

自叙

夫世界は化たり變たりの如く。蘇若蘭が回文錦字の詩は黑繻子の織出しと化け。葉苔磯が臂に約する黃金の詩も優女の指輪と變る。夜うつり容去て。豊邦雛松もお花荒神松濯衣老女となり。三春福本も三絃卿の茸々となる。故におもかけのかはらてとは小町が欲心。お迎ひのかゝらてとは於客の愭惜。緊人生一瞬變化の夢。棚から墜た牡丹餅を十露盤でおさゑた。面ならかふした憂患はせまひ。其自亢の長てより。千金の家屋鋪も。一つ時惣苍の花と共に散り失せ。紅羅の錦繍も。忽富澤町の廓に漂泊す。されば愭へきは自譽。懼へきは俳婦なり。雖然予も

また短才の筆頭。勸善帳場の禦となる事不能。唯四方雷名の通公子。隱隲の不虞に備へて。能く於氣をつけなせへし。ソレ御手が鳴よ。アイ、、ハイ、、と云爾。維時辛酉孟春東武橋邊市隱書於擔紫草廬

品目

○家木堀の場
○見通の場
○表二階の場
○裏坐鋪の場

以上

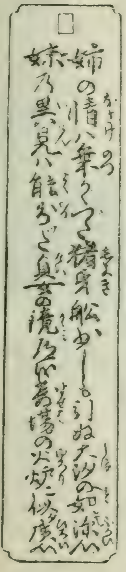
嘉和美多里

四

杵笑妓談　喜和美多里

擔柴樵夫著

あたし野の露きゆる時なく。榮壽菴の客立さらで。コトくトンくたる蕎麥樓。あたり三間堂隣り。風景家木堀の棧はしは。豈白痴羣の俠客徒。いまた得て知るところならんや。夫朝には初勘定の一二となつて。金銀の扇をとらん事を思ひ。暮には色客の爲に自腹をきつて。夜來夫婦の聲を樂ミ。更に鼻落る事を不恨。是蓋酌女の通情也。されど薄情不才の醜婦も。艶子の伉儷となり。食客の權八サンモ。板頭を娶る。是を以て是を観れ。　緣がほれたかほれたがゑんか。



○こゝにいへ木長屋のかたほとりにすき屋でもなく店でもなくしやう事なしの出格子にかたづけにしへ吉野やと二タ重文字を薄墨入ニ書た三尺の障子が立てあり内にハタへから病氣ざはりの出養生に親里へきて居る尤自前にて當時日の出年ハ十八九はたちとミへ名ハ通り名

で小いなといふ古今無双のうつくしきヤツ也衣裳付紫かの子の中着の上ヘ油たらけのそこなし羽織をひつかけはゞ三寸程有るしんのはいつたひぢりめんの下じめヲくる〳〵と巻つけふさいだ顔つきでこたつにあたりこより首本の人形へ白のかんざしを穴窓からつき通しなにかしんにいのつているヲリフシ勝手ノ障子ふすまを明テ【お袋】小いなきつキ又鷺屋から稲毛やのみを出なせヱといつて来たヨ【小いな】アイ【袋】またふさくのかちつと近江屋のほふしん丹てモのミナせへこまッたもんだッ【小】ナニかゝさん案事なんなけふはよつ程氣色もヨシ正月の事もどふともなりやしやう必案事ておめヱワつらつてくんナはんなヱ【袋】ソレそんなに苦勞にせずと半時でも。親のうちニいる時は氣をらく〳〵として。いなせへよ【小】ホントウに何ンにも苦勞ニャアしやせん。只願には小いなと云名を付た程有て。引ッ込際もはでにした。茶や舟宿ヱノくばり物も。人に笑れめヱと思ふばつかりで。氣ヲもむノサ夫モかゝさんノ外聞と。子供の時からお世話になつた。末色のおかミさんヱの恩報じさ【袋】コレサそれがやつはりおめへのくせたにヨ。今の人氣ハ夫ちやァいかねヱ。外ふんよりとう分が大じたとへ引込よふがどのよふにきれいでも一生すかねへ男にそはしてハ末色のお組さんへ對してもすミヤせセんどふぞそゐてへよびとぎやうといふ男とくらすならばどんな九尺店てもいゝじやァねへかコレそこをとつくりと考かへてかならず小さなきを持なさんな【小】ホンニ夕べも旦那のいゝなはにやァ氣色かわるかァ内へいくかいゝそんなの前ハおれかいゝ様にいつて置くそして仕廻のとなざァちつとも案事めへによ

お組があたまのものをうつても引けれとらせねへといつてくんなせへすがあんまりもつてへな
くつて猶更いろ〳〵な事をかんかへてどふぞとおもふけれど といふ折から おもてにて 【其吉】 是も自まへのけいしや で小いなが妹分なりた
うつくしく一枚 かんはんなり おたミとんおかたじけどふぞ歸りによせばへよつてさつきのわけ道をよく咄して置
てくんなお客のほふでへんげへになつたとつて下た札がひかれる位なら今迠げい者ハしねェ其
位な事迠おさしづにやァおよばねへずい分承知していやすッサノそして用かあるならこゝにい
やす トいふなにかわから ぬ小言ヲいゝなから おいなさん【小】其吉さんかうれしゐはやく上ンねェ【其】どふしたな積
ハいゝかへおばさん寒うごせへますねェ【小】けふハいゝよおめへ今迠どこに出て居た【其】
けさつから野花屋て呑つゝけさ【袋】あんまり酒も呑ミなさんなどの子も苦勞だぞ【小】まつ
さをだせ【そ】□に入たのさ【袋】そのさんがきたからおいらハ一寸とくがんじ様のより合へい
つてきましやう【そ】アイわたいがいるからいきなせへし【小】かゝさん其序にこりやう鷺屋
へほふり出しておくんなせへ【そ】どこのた【小】藏印さ【そ】けふくるはづしやァねへか
【小】かのかの【そ】ウヽ【小】夫て今日ハことの外心あしく折角御いらせ候ても御咄しもで
きかね候故明ばんと書たのよ【袋】そんならいくによ其さん居てよかァはなしてやつておくれ
【そ】あんじなはゐますなわつちかいやすから【袋】ナニサちきにけへりますト出て ゆく【そ】ホ

ンニ夕べの半兵衛さんへのみは坂多やの爲とんをたのんでやつともらひやした。シテ今夜きたな
はるのか「小」そふさ「そ」たのしミか「小」んッにや「そ」あつかましい。そふはいかねへ
ニヨあしたの晩は猶おたのしミだ「小」なぜ 少しかんがへ ヱ、此子ァなんのこつたよしておくれ。そ
んなごきけんしやァねェれな「そ」ホンとふにかゝさんの苦勞も休まり半さんのためでもごせ
へすから。ちつとは承知の顔て此中わたると相談の通りにしてミナせへ「小」さつきもかゝさ
んのいつた事なさァしんに涙のこほれる程案事てくれるし末色のおかミさんだつても。わつち
が年季でいるうち。いゝなはるにやァ早く自前になれ。そふすれば親の內ちへ寐とまりもさせ
やする。たとへ夫でなくつとも。おれか氣に何ッにも如才れねェか又それでれ部屋のとりしま
りもわるくなるト。わたるが十五の月見から出て。五年がうちこれ程も不足を言ひなはつた事
モなく。ソレおとゝしの大病の時も雜しが谷の御帳護府大師河原の厄よけ守り黑眸と赤裏の稻
荷はんェ日參をして夜もろくに寐なはらずに寐冷をしめへの風を引めへのとマアホントウヲの
親でもこんなにやァしなはるめェとおもへばあんまりありがたすぎて獨て泣た事が度〳〵だッ
たによッレてわたるがおもふにはのモゥ少しでもいたつら浮氣らしる事れしめェとふご新妓樂
の異見てもいつて二階の仕附てもする樣ならばちつたァ旦那の氣休メにもなろふかと心にぴん

と錠をおろして去年の暮迄道柴の露程も通情らしゐ事ハしやせなんたがふつと幇間に出た半兵衞さんニ思ひ付たが悪縁でワたゐが方から頼んでよび一度か二度ト重る程ドヨおもひ直しても思ひ切らずあげくのはては半さんに迄きづを附けて今ハ八瀬川町にひかげの身の上エ朝夕の事につけてもサツつれエ事やしやくな事もごぜエしやうそのうへ四ツになル子迄ある中のおかミさん心にもなつてミなせへしマアとのよふにはらか立ふこれといふも皆ンナワたいが心ひとつサ是を思へは神も佛もねエのかナゼ罰があたらねエいつそ死ンだなら今のつらさァしめエのに

【そ】ホンニぎりばかりてもつタ世界だがツノ大恩のある旦那はんもおめへ獨を杖にも柱にもとたのしんでいなはるかゝさんのこともしもの時ハソレ忘れてしまウ程ナ半さんのこつたから口元なワたゐらが異見もワかちも聞入ちやァくんなはゐめへがけれどこゝか兄弟分のよしミとおもつて此中から言ッた事をちつたァもつともと聞てくんなせエしナルホドいやてもこぜエしやうがそこがやッはり半さんの爲とミんなへの禮奉公だと思ひなせエしかし眞にこつた時ハ部屋に居ても手にものか附す外のお客ハミるもいやになり爰て勤ればいゝがと氣か附てもツイ寐こかしてしまつたりして茶屋めへのあしくなるハ誰しも子供衆のなれエさッノつらさをこれエるか苦界といふのでありましやウこんな事アワたゐかいはすとも明るひおめへたがまよつ

たときやァまつくら闇になつて一日こねェでも此程は久〳〵とみにかくよふになるものさ　ト此中小いなふさいでいろヤヽあつて
【小】ホンニそれもそふだツンなら今夜半兵衛さんに委しく咄してコウ〳〵したわけ
でコウしやすからかならすあやしめなんな其替りにやァ鷺屋の下りもきれへにすまし正月の仕
舞ゐ何モかモこしれエやすッサ少しのうちだ目をねむッていなせエッしとイ、やしやうしたがお
めエもしつてる通りの短氣もんだからモシわるくきとつちやァ【そ】ソリャわたるがよくいゝ
やしやうからあんじなはんナ【小】今とし八幡さまのお湯立が赤町ゝ爭事があるの土場瀬ゝ
劔なんかあるのと云からツンナ事迄がいつそ苦勞だよホンニ是程までおもつても半さんのきも子
ツカニわからねエみのたんびに小言のいつてこねエ事ゝなくせつかく來ても諠譁なしに歸つた事な
しアンマリてはらが立　ト何をおもひ出したか泣聲になる　【そ】コレそりやァおめエ愚知たニヨツノわからねエおか
たでもあるめエ今勘當の身トなんなはつちやァ何かに氣のもめる事もありやしやうツンナ時は
ちつとした事もはらの立ものでこせエすナンノやくにも立ねエ事を案事ずと氣を廣く以て居な
せへしわづらうニヨ　トつく〴〵小いなが顔を見て　ホンニおめへゝ此中からいつそやせるよふたかチヨツト是を
はめてミなせへし　ト其手がゆびのわをぬいて小いなが指へはめてミる　ソレミな指までやせたァな【小】アンまりそんなにいつ
てくんたんッふさくめエとおもつても胸か一ッペエにならアナホンニおめへとわたるが中は人

のそねム程だが前ヱノ世にやァ色でゝも有たろう　ト掛てこともし此情に至ツてはほんの兄弟よりしんせつなるもの二而小いなかきらいな物へ其吉もきらゐになり髪の結よふ着もの、色までしぜんト同じ好になる程也
ソシテコウおめへ八幡やの借濟んだか【そ】マダ【小】はやくやんねヱどふ
する氣だ【そ】と〻のつまりヤァこれさ　と柳をいぢる　【小】モウ二重の書附て借る事なさァかならす
わつちがまねをしなはんなお早さんの時かりもまだなら是でデモすましねヱ　、ト小サな前ざしをぬいて出す　【そ】
ソンナラそふもしてすましやしヨウ　ト前かミヱさす　【小】お早さんの口も髪すりか茶碗のかけト云も
んだからよく氣を付ねヱシタカ此中なさァおもいれ。おろされたそふヨ【そ】ダレニ【小】ソレ
祭の時あつれヱ染の注文遊ヱでかけの事をナントかいつたそふサソレデ八幡やの若ヱしが云に
やァおめヱ拂もしなさらねヱでそば屋のお玉さんの鼻といふ大な面ラァしなはんナといつたッ
サ【そ】イ、きびちつとそんナ事もよふごせへしやうホンニそりやァそふトおめへ半藏さんの
目と眉の形りに氣が附たが【小】ソレサわたゐもなんにかよく似たと思ッたつけマァまちナい
ゝナンなヨト　しばらくかんかへ　【そ】いおふか【小】ソレナニヨ八幡屋ノのれんの〈。ニサ【そ】ソウ
サよく似て居るゼノウ　ト笑へ此うちはなしもつきて二人ながらたんまりやゝありて　【小】ナンダナおめへ寐むゐか【そ】ン、ニエ
【小】夕べカノが來たノおめヱの寐ムがり日はいつでも來たあくる日サ【そ】わらゐながら　ヨッピてね
かされヱハナ【小】ダレがおめヱがカ【そ】ホンニよくいつてくれロといゝやしたつけヲヤモ

ウ日か暮ㇾるそふだ噺に實が入て久しく居ャしたモウいきやしやう【小】今にくるから有ていきねヱナ（トはなすうちハヤ日も西ざんに入相の按摩と蝙蝠の出端といふ時になり秋ばのふせがねの音さびしく侭てい屋おかみさんの爪おと風りんそばのチリヽンにまぢつてきこゆ）【そ】燈をつけやしやう（ト立て勝手のひらき戸棚からあんどんを出してつける折ふし半印相嗣のこくげんいたりしと見へて裏口の戸をそつと明る戸のすき間からほそみ風が來てシンの闇となる）【暮六ッの鐘】ゴヲンゴヲン〳〵〳〵

琴たそや今宵さよ深て柴の扉をたゝくはたゝくともよもあけし宵の約束なければ（ト云事をうつゝにして）

【小】半さんか【半】小いなか【小】半兵衛さんか【半】ン、ニヤ半藏サ【小】ヱ、【半】ナニがなんと【小】マァあがんナせへし【そ】（附木の火をあんどうへうつしなから小いなと顔を見合せ）チヨ〳〵〳〵ミミ

美男の肝積ハ行違つた封し文思ひに胸を割床のよふな狹ィ心
優女の意說ハ話されぬ人の前言ぬか意地の鳥居に似た大ィ心

【半兵衛】（としハ二十八九いやミといつてハ針でついた程もない色男衣裳付結城のたつの嶋しまおなじく茶のごはん尤も島の下着唐さんの袷おり黒の通し裏紺にねぢ梅を極ほそくそめ出した繻伴花いろはかたの細い帯をちよいとむすび紅粉皮の眞さげうづら皮の紙入此外きせる煙草入はおりのひもに至るまで二分めすかす○一躰さつき小いなから半藏へやりしみどや〳〵の中故うんのつきにて半ノ字違ひて半兵衛が處へもつて行しを半兵衛ミろよりれいのかんしやくにて ふたりせん頭でヤつて來りミるに あんのことく小いなハ裏二階に出ているとの事ゆへなを〳〵はらの立をこゝがしんぼう處とヤツとこらヱて何かとんとうかぬ顔付て一向しやれずに居ルそのそばに泉分杉はしの火ばしてかまほこを燒ている 船どう市如意りん響音と云身ニてしやミせんば こへ寄つかゝり四文せにを八文煙草入より出してひけをぬいている此外女中食乃ものゝ亂ちきらんをはしめた體たらくなりげい者）【梅吉】（お定りのやつをチン〳〵）【花吉】（のチヤン〳〵と彈しまひ）ホンニ今夜ァ半さんかねッからうきなさらねェのう【半】（むりにわらい顔をして）燒麩のとせへむて浮きつていやすセ【娘】コゥ、おかよとん小いなさんに內しよて一寸來ねェといつてきなソットヨ【半】よしなせへねェしよてちよッともこけ

らしる羽おりでもかつてザヘ〱としやれていきやシヨウ【娘】ソレでも【女】帳場に銀藏さんが居やすが呼ふかネ【半】ヲモしれヱ【娘】來るとき蠟そくを廻しねヱ【女】アイ ト出て行【花】ホンニあやにくナもんたね【娘】去ればナたつた一ト足違へニヨ【梅】今少シはやからばカネ【女】コレサ銀藏さんよしねヱいけすかねヱ鼠だぞ【銀】ヨツホドいゝ男のはづだがなぜかミンながいやる ト立ながらはいる コレハモシ半さん一別已來一昨日【半】サヱとふゝいねヱ一ツ呑な【銀】チトお押へ【半】マツ ト盃をなける【銀】ふさりましたかマツ呑めノ【花】わか草摘すてられて【銀】中車のつかいこれ色にて 女ともサアつきれサ【梅】ツヾ【銀】ホンニまた皆々へ御挨さつも申サなんダおはつにおめに掛りました【梅】きついしやれサ【銀】サテもし今ばんも私妻かまた鴻の屋で喰ひ醉まして只今よふやく寐かし付て參りました其かはり私獨でふたり前しやべります時にこりやァなんのこよりたね【花】あてゝミな【銀】ハ、アちらんのこげたノが火廻しのこより輪かきかね ト云 ヤツは目と口と考へましたナント ミシ皆々お揃でけしもからさる野夫の根トいふ事をなさるましたネ【娘】キツイ聞だフウ夫はさつき石川屋のお客さ【市】ナルホドお京さんの聲れがふぎニかんばつた聲だぜベチヤァねヱかるわざ芝居の附太鞁といふもんだ【娘】なんのこつた藪からほうのよふにツリヤァきのふからかんげへたしやレか【銀】市どんか市さん

かコレは大きにおミそれ申やしたナセかけふは一向にめがミへねエ　ト云ながらしんみきる　【女】コリヨウ
續な【半】蠟そくの最期におよひ【銀】穴をされなザウなる程よふござりますねエトつぐ【半】
千柳もまた一ッあるヨのう【銀】出來そふで出來ねエやつでござります【娘】ドウモくれエ
トまた一ちやうワきへおつつける　【市】半さんワつちがきのふ新皮て聞て來たれエ年の新ぱん飛きりと云やッを一
ッはなしやしやウ　ト手ぬくいをちよいと肩にかけしりを少しホツ立エヘン〳〵と咳はらいを一つして　マヅ燭でエの上の丸イものが云ニヤア毎ばん
〳〵あつゐしるを流しやアがつて夜ッぴて寐られるもんしやアねエ今霄はグッと丁へいきの大
じやにしやれて下の丸を寐かすめエト少し意地ワの工ミでヒヨイとぬけて出やしたそコて上エ
の棒は日がくれるやくれねエに例の通りサッ〳〵ト燈シ出し下タの方へくつと流れるやッを側に
居た子供衆アレサモウと云ながら口ひるて小杉を四五めへ程とりシッかりふいて聲をふるわし
あつかアねエかッ【大せい】ホヽヽハヽヽホヽハヽヽ【半】おもしろくもねへナンノ聲をふる
ワせずとものこつた【銀】コリヤアよつほどいゝ市どんにやアチトすきもんだ【銀】少シつにのつて　そ
りやアかふいつちやア何ンだが●　江戸かわの船頭と堀の送りッぱなしをこいだり●　イひきて眞
崎向島のよしごの中で●　かつはの屁をかいて居るのたア●　ちつと違やす【娘】お客も船宿衆に
つれるもんだよ　ト出兵衛にはむく　【市】此中眞ッくらな晩に乙女橋の下を小船て通リやすと●　橋の上

ヱから市ャィどけへ行と。ワつちが櫓拍子を聞ワけて呼んたお客か有ッたが。ナントすこゐも
んちやァねヱか子。ト端す折から【小いな】面おりの南部島を三ツ揃へ羈作は緋ちりめんに白りんずのはんゑり尤は〆廣きやつ裏おり錦の帯を結びさげにして切立の眞ツ白なゆもじに氣をワるくさせ障子の入口
て少しあたりを見ては入左の手でかんざしの先きを【櫻】ちよいとおし右の足で着ものゝすそをけてすはる【花】小いなはんワりィねへ【小】アイサトいつたはかり【銀】モ
シどふでごぜへます一ッ上ましやう【小】お盃ば【娘】ナゼいゝじやァねへか呑なせへしナ
【小】けさ指をけかをしていつそ痛ミやすから【花】あふねへト顔をしかめる【半】ヘテかはつた指
が能ちやうどきれたもんたね。夫ちや定めて腕のほうにも。火事のあつたこつたろふ【小】ト
ゥの事さ【半】くつとかんしやくにされつたなれと愛がしんぼふ店と平氣な顔で道理てさつき本舩町の當ばんでふんとんとしやうき頭
の纏が出てはや鐘をくらはしたつけ【小】おめへの胸でか【半】ナント【娘】銀藏さんなんぞ
にきやかに彈ねヱな【銀】ソウサねヱちつとひきやしよふあんまり高ヱ藝者にあたる。チット
借ナせへトうめ吉が三味せんをかりてへ、アお張けへが出來タねトちよいとかへをはちいて菊岡か【梅】インニヱたゝミ横町サ
【銀】甚藏もよく張やすト調子を合せうたつてくんなせへ【花】水くミか【娘】ひんつるがいゝわな
【花】へワすれていうちなけかるゝ夕部かな。ひとつのきはにありなから。夏の日暮し雪の夜
も。格子のそとに立あかし。おもふかもわぬへだてなく【半】ホンニ世界におれほとのけを初
めたものもあるめへ。内に居ても此頃ぢやァ手にものか付ず。鍋釜いかけか。醴屋の釜前の面

ヲミるよふに。あつくなつて居ても。つまるめへ。是もならゐの汐前を乗ッきり様がたらねェせェかとふそ法をきりけへて大道勸化のぜりふちやァねェか今日かおいとまごゐとせざァなるめェそふしたら馬糞の牡丹餅と石地藏を抱て寐たのが覺るだろう【小】さゞいのふたをミす紙へくるんで二ツに割る お京さんワたゐハ夕へとんたィ、夢をミたからいつそけふはうゐて居やす ト半兵衛か笑ふをミる【半】浮世といふものハ面白へよふなはかねェもんだ鋸できつてもきれぬ縁のつなも紙壹枚て赤の他人となり昨日兄弟分の盃をしたなかもけふハ直に胸元へでば鉋丁がおッまいもふすと云も元が他人からおこつた事こりやう思へば今迄お袋に苦勞をかけ勘當されたもけつくうれしく〽たれに見しよとて白粉のけワひ化粧もあだし身のもミの頭巾に世をしのひ人目おもふもァ、そんじやへ【銀】ヤンヤト ひとりでほめて仕舞すぐにさハきを彈ている【小】さつきからおかしくもねェ事を云丼べナさるがソリヤア半兵衛さんおめェでもごせへすめェシタが今更愚知を云ナさる氣ならワたゐがほふにも云事が【娘】モヲいゝはな何のこつたマァ一ッ呑なせへし【小】呑と寐たくなるからいやサそしてモウいきやしやう【娘】サウサのふしかしまだィ、じやァねへか【小】ねつから能ねへのさ ト立て一かふ半兵衛が方をば見向もせすに出て行入ちかつて【その吉】ヲヤたれかとおもつたら大和屋の源とんかかんにんしてくんなマダおぼこ娘たから トすてせりふを云ては入 半さんよくおいでなゐましたね後に鳥渡おはなしかあるから

さゝしくッとも寐て居ておくんなせへし【半】こゝじやどふた【そ】わるしさ【娘】ソンナラぐる廻しにしてお納めにしやしやう　ト一ツへん盃を廻し女中はたばこ盆へ火をとりげい者は三の糸を返して箱へいれ娘分は半兵衛がさけたはこ入をしまつて箱へツゝさし【大せい】サア入らせられましやう

癡なお客の悪言は後て言たかる穴のあな
　その根を聞は隠所よりも闇る心
通り名の情知は言すに聞へるなる子の鈴
　先のさき迄見通の鏡に比しき明る心

【はん蔵】としは三十八九四十位とミへ色浅黒くでつぷりと肥りせいあまり高からす随分にがミはしり過たいろ男なれどもどふか当時はやりの商べいの中かにかゝんでいるお方に少し似たはもあり是ニて御さつしいつれ金はらなる程ある風俗なり衣裳付ケ結城の藍島の上着を屏風へほふり上ケほんは太織の黄色な大島ノ下着羽おりは上田の三筋立のこりノ\するやツをたゝんでそばへ置松本仕入のかミたばこ入同縞の吉か張たいも張の白のきせるてつかい仙人と云身ふりにて上をあを向き世界をくつとうす色にのミこんたつら付にこく寄ふいて居る尤今床の廻つた躰にてさやかたに菊のもよふの夜着はたゝんたなりにてあり【小いな】左の手をふところから出し縞伴のはんゑりにて口をふさぎ右の手で高つきのいまさかをむしやらやたらにつゝいている【は】コゥなんのこつた人にはかり口をたゝかせてろうげへ病に万歳をミせたよふにあじにさけすんた面アするがどふしたなへその下たァしらミでも喰ふか人をつけにした【小】なる程おめへのいゝなはる事ァ少しもぬけめなくよくわかりきつていやすが夫ぢやァあんまり出ナさりよふがつよ過やすわたゐらがよふなお心よしは松風亭とやらに荒神さまのおゐん馬ノ\やフミの大ばん小

判といふものにかゝるく出なせへし【は】ナニかるいのおもゐのと舌切すゝめのはゞあがつゞらをしよてほふそふミめへにいきやァしめへしばか〳〵しゐ【小】何かはか〴〵しゐかちつとたまんなせへし【は】コレたまれたァなんのこつたひつへかしの紙て張た辻はんに二文たどんを入たやつを女房と名を付ておゝぱく〳〵おやじがはなうたをとかめるせりふかあんまり安くとりあつかうなェかふいつちやァ御大そふたか雷の足のうらから地震の天窓の上の事なら土用干にこまる程腹のうちニたゝミこんて是壹ッ御存なへといふ事なくッレ八幡の社料ハいくら納る何屋の惣花ハいくら〳〵ワり花二階花ハどふこふ。何屋のなる子ハどふゆふ音するの•そして鳴子のねェうちがあるの•見通に平ラと高へかあるの。どこそこへハ二丁まちものがたんといくの•寄場の炉ハ何ン尺あつて何時にひけるの•赤町ハ一時おそゐの勘定はしめも赤町ハ風呂敷たの•化茶屋のきり身ハいつでも鯛とミせてさワらだの•平目とミせて鮫だの。玉子焼へハ豆腐を入れるのと•こいつらァ一寸した煙草のうちの咄だがナント世界ニハ行ワたつたもんだろう。そのはん藏様を二寸にたらねェ口先でなげよふとハ猪牙が親舩だ•もつてへねェばちがあたる出なをしにするがィ、【小】おめへもあんまりでごせへす蠟そく箱の書付をミるよふにおつにむつかしくからんでいゝなせェすが•夫じやァいくらしてもワけ道か付やせん。ち

つたァおめへもかんげへてコゥ〳〵云りくつで氣がすまねェからおれが心のはれるよふにしろとかいつてくんなはりやうなんぼワたるらがよふなしがねェもんだッてもよッくおめへのきのすむよふにしてミせやスけれど只ワけもへちまもなくしかんなはつちやァ胸かワく〳〵して返事もなりやせんちつと靜にとつくりと聞せてくんなせへし氣のミぢけへ　トくつと半藏がひざへ前垂をおつゝけてなくまねをする

【は】　かいろにへひをミせたよふにぐにやとなつたれどむりに氣をはけまし　ナンボそんなにのめしても今時のお客ハそふれいかねェさつきかど口で半兵衛さんかとぬかしたのハ今夜くるにやァちげへねェ【小】そりやァおめへでもねエいゝふんさ半兵衛さんの事ハこゝのうちできいてもミなせへしょホンノぎり一ッへんて出るお客さそれもワたるがモゥ少しあんべへしきでもよかァきりモかぼちやもいりやせん今にもつき出しておめへの胸をはらしやしやうが何を云にも手も足もねへワたるのこつたから初仕舞てもたのんだ上て直にどふとでもお心まかせにしやすきさ【は】そんなラそりやァ棚(たな)へほふり上けて置てやろうが左のゆびハだれにきつたんだ【小】　ひつくりしたおも入にて無言ている　【は】サァへんじをしやなイヤサどふゆふ譯(わけ)てなせきつたいハねェに置ちやァモゥ〳〵胸板(むないた)か御かんにんなさらねェ　ト大聲になる　【小】はらの立(たつ)なァちつともむりぢやァごせへせんなる程正直(しやうぢき)きつたにやァちげへねェのさけれと是にも深ゐ譯合のある事てこせへすからマァとつくりと聞分ておくんなせへし●ッ

レこん中ちよつくり咄シて置た。此櫛ハ前てへお百さんのさ。夫を二重の證文を入て借て。今ちよふど十八兩になつているが。此十四日にやァぜひともけへさねエけりやうならす。そのうへ正月の事を是をと云。あてもなく思案につきて。もつてへねエ。親のうミ付ヶた體にきずを付て。心にもねエ不義をするも。元ハと云へばやつはりおめへのはたらきサ。とふぞちつたァ尤と思て。勘忍してくんなせへし【は】コレいくら金魚風にあはれッぽしく。めかしても。そんな事にふはとおのんなさる。半藏様じやァねエ。ヨしんばほんとふの事にもしろ。ナぜなんならかふ云じきて。入用たからと鳥渡一トふて書てよこさねエ。但し相談しかけても。所詮てきねへと見くびつたのか。そふ云咄し合なら二十や三拾の目くされ金は。男つくても出してやろふといゝてへが。マァよしにもしやしやう。ナセといつてミや。人にきつた指のかはりおれか三もんでも出しちやァ。穴をきられて樽代を遣るよふなもんだ。モゥこれて脉か上つて今日ハこれぎりだ。あいそも臍の尾もつきはてた。あまつちよた ト聲をふるはしてせき込む 【小】 時はよしとしんめりした聲て ホンニ夫ほと迄腹を立ッてくんなはるお心さしや。かへッてうれしうごせへす。實ハワたるが遊れたんかァ。しらねエが。おめへ赤町の乙吉さんをよびなせへすといつたものかあつたから。もしもとおめへの氣をさくッて見たものさ。それよつくミなせへし ト指を包た紙を取ばらのけてついた程もきずなし 【は】ヤ

ッはり色／＼になくさむのだナ【小】サアそこでこせへす。おめへの心せへほんとうなら。今
改めて。すつはりと。きりやしやう【は】そく／＼寒け立程うれしけれども夫ﾚとふども勝手にしろ。おらァ金て
きつた指ﾚちつとも。お望ミでねェ【小】よしてくんなせへわたゐかほふにも金つくてきる
指は一ッ本も持やせん。ホンニおめへもあんまりでこせへすいらざァ。よしなせへし。上ヶや
すめへ。わたゐはきりかゝつた指だから。きつてすてやす ト兼て用意の事なれば三ツをりの紙入からひかる小刀を出し左の手にもち添へ右の手に高つきをふり上 女のおもひもちつたァこぜへし
け目をねむつてぐわたりの音とゝもにすつはりとやらかし切口を小杉てぐる／＼とまき付て帯の間へ手をさし込ミきつた指の先は小サたすゝの香はこへおさめてなミだをふきながら
やう。どふぞいやでもとつてくんなせへし【は】ふるへるほどうれしけれどわらゐをかくして けがらﾚしゐいやたﾚ【小】
ソンナラよしさ ト云なからおもて障子をあけひよいとすてる處を【は】うろたへ コレまで【小】なせェ【は】ふしやうなからも
らつて遣るべへ【少】ナニモウ捨てしまひやしたと トをむ／＼にひつたくつて紙入へしまる【は】コウあやまつた手ま
への心いきもすつはりわかつた。モウ何ンにもうたかﾚねへ。これから一ばん此半さまが片は
だおぬぎなすつちやァ。モウやつたよふじやうねへ。初仕舞もあしたから。札ァ下げさせろお
百とやらの櫛もマァこれて返すがいゝたらさァあした稲毛屋まで出しておこふ ト金入から小判てト二三両程ほふり出ス
【小】とつていたゞき お心さしやァありかとふこぜへすかいたゞきやすめへ【は】ナゼ【小】わたい
がほふはたとへ年を書入レてなトとおめへに金をつかわしちやァどふも義理がすミやせん【は】

そりやァ手めへいつもの氣ひつにも似合ねヱ愚痴な事を云せ末始終はしゆびんの世話迄も願ふと云中かだから何もそんなに義理仁義やァせすといゝマァおさめておきなせへ【小】しめたりと心のうちによろこび おめへせへその氣ならわたゐかほふはちつともあんしなはんなツンならおめへがせつかくそふいつてくんなはるから時がりにして置やしやうどふも部屋のうちニ不沙がゐつちやァミんな口がわりいからあした直くにけへして仕舞やすホンニおめへの心さしやァしんでも忘れやァしませんにヨ【は】ときにモウこふきに夜か深た。おし付ヶ松坂のうら日か聞へるだろう【小】ト云ながら帯も上着たとつて屏風へひつかけあんとんをかき立て角の方へかた寄せ夜着の下モのほふからもぐりこんで あした迄流しにしなせへしな【は】早く帰れといふ事か【小】きつゐしやれさ なんだナもつとこつちへよんなナヲ、寒ゐ の聲両已杵日の屏風うつヤゝ時有ツて又 あつくなつたね 折から階子はた／＼にて稲毛やの船とう【かめ】半さんお屋鋪の旅立とやらァ。どふなさいやす。おつるけでもよしかね【は】ホンニそふたつけ。是を忘れちやア。大そう動【か】薬鑵なしス【小】かめとんまだ居なすつてもいゝじやうねへか【は】ムンニヤけへろう／＼ トはねおきしたくをして ソンナラ。さつきいつたとおり。用があるならみてよこしなせへ。そして。コレ／＼も。大事にするかいゝ。わるくするととがめるによ トわざとかめに聞せたがる【かめ】けふは平ラなぎだから。ナンナラすぐに開迄のんなされはいゝ【は】コイツアがふぎに奇妙だ。ソンナラやつゝけて下し【小】コレサ

そしておめへいつ來る。あさつてわたゐが迎出ているにョ【かめ】これもおもちよろしだね（ト云ながら二階をおりる）【は】起ばんはたれだ【女】ハイ私。もふかへ。まだおはよふござゐます【は】早くもねへ内河(うちかわ)を出るといつでも夜が明るョ【女】さよふならおちかゐうちにハイ御機けんよふッンナラかめどん【小】おさらばよ（ト云殘してまた階子を上り裏坐敷をうそ〳〵のぞき障子のやぶれからあんどんのむだ書を目印には入り屏風を明テ）半さんサゾ待どふであつたろう。おきなせへし〳〵（トゆりおこす）【半兵衛】ナンダやかましひ【小】寐ほけていなはるか。わたゐだァな【半】ナニわた屋だ。わたやにやう用ハねェ【小】しれつてへ。にくいそョウトつめる【半】いてへハべらほふめ（トむつくと起キなほり手に當るきせるをとつてふりあげるを）【小】（その手にすがりて）尤てごぜへす。サツ腹が立やしやう。委細(いせへ)の譯はさつき。其吉ッさんに聞(きゝ)ナすつたろうが。かん忍ならさァ。ぶつともたゝくとも。しなせへし。たがマァとつくりと聞てくんなせへ。おめへマダこゝの内にも殘りがあるしやうねへか。ッレそんな事や正月の事も。今まではでに仕付(しつけ)ヶなつた。もんだから。さぞ今の身になんなつちやァと。わたゐか愚痴かァしらねへか。ホンニ寐た間も忘れた事はなく。その吉ッさんの異見に付て。エイヤツとこしれへた此金で。どふぞ早く爰の拂をすましなせへ【半】ツンナラさつきの指は【小】それさ。あんまり野夫らしひがわたゐが心意氣(いき)た。とつてくんなせへし（ト小杉の間から紙にくるんだ指を出ス）【半】（とるよりなをもせきにせきこゝ）知るめへと思ふが大きな痴(こけ)だ。さつき裏

二階の入口で始終の咄しやァ。残らす聞た。其手は喰ねェふてへあまた トスゝきざるをふり上るを 【小】かげて聞なはつちやァ。それも尤てごせへす。けれとあれハまつかな似せもの。梅皮の干たのさ。是レ此指は。心のうちで。おめへにやる氣できつた指だ。どふヲ、ぞ。かんにんして。もつて居てくんなせへし。コンなにおめへに腹を立せるも。ミんな私か身の上ェあべこへになつたからさ。ひよつと此末。どふしてもいかねェ時ハ死ぬより外ハ ト跡へなミだで一かふ階へず是においてさすがの半兵衛も大きによはり只うつ向てダンマリ

前ンてへ爰の内もあんまり現金だ。ヨシヤ。今おめへが日がけの身でも。二十ャそこらのはした金を。濟ミすましの出來ねェ事も有やすめへ 【半】いくら手をくらはしても返詞もせす。宵からろくな茶ものませねェ。しかし是もミんな。こつちに引ヶの有ルからだ 【小】ヨゥごせへす。そりやう聞ちやァモゥうつちやッてハ。おけやせん。何もかもすつはりと。奇麗にした上て。茶やをかへなせへし。ナンノ爰ばかり日ハてるめへし。コゥおめへ寐なはるのか。おきなせへし。寐かしやァしねへ トむりに夜ぎの□□□□□□□□□□□□□中へはり込ミ ヲヤまだ帶もとかずに寐ていなすつたか。男世帶と云ものハ 【半】おきやがれ女房氣とりも。あつかましひ 【小】□□□□□□□□ アレサその手をこつちへ 【半】かふか 折ふし隣坐敷のお客の歸りとミへて 【せん頭】舟が出來やした 【客】なん時たの 【夜明の鴉】ガア〳〵 【舩】いきなにくまれ口がァレ鳴くわいな聞せとむなる耳に手を 【八幡鐘】ゴヲン 【客】鐘はいせ屋聲で

か松本か

土橋妓談 嘉和美多里 大尾

予か朋友擔紫堂の主人眼は尾花樓の目の鏡にひとしく。心は望海橋よりも長く。口も八丁。手に三十五頁の書を著し。名て是を嘉和美多里と云。一此酒本尊を閣る輩は。いかなる魯愚の權七も。鈍鐵の鑪鞴に入て。須臾寶劔となるかごとく。能惡女の開難を逃る夫れ遠きものは沙汰にも聞け。近くは買てころふしろ。嗚呼無窮面白と云爾

創山亭主人誌

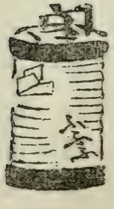
甲子夜話

序

御誂の。染り安き晒柹御浮氣。五人前の揃着れ。三人で三歩失る痴惠となる。千柳點の妙句に當り。五人寄ては即七拾五匁の是痴惠也。其出處の愚さは一なれど。人心不同如面。皆夫〳〵に色取あり。乃至黄染の布袋の腹滿ゝたるも。染込の能藍豆青に。小頭をかたげし思安野胸。洗ひ曝の水淺黄と流。二世も三世も薄まじと極印の盟ひは。赤起請よりも猶濃く。每夜北の稻妻の手の白きに招雷ぬ身の無情。迷ひの雲のはれがたく。花色廓に通ひの〆も算用不合其家も売く押門。卒れ厂金の淵に落。跡えも先えも色替ならぬ。御注文の眞黑の下染左之通と云ゝ

追ひく跡より
染明る日の
青陽

梅暮里
谷峩自序



目録

○安野平兵衛　傾城奥州　坐敷の契話

極印千右衛門　傾城代ゝ春

○雷庄九郎　傾城玉葛　悋氣の爭

○布袋市右衛門　傾城九重　牀の睦言

○厂金文七　傾城喜代川　眞の仕打

目録終

甲子夜話

梅暮里谷峩著

坐敷の契話

○安野平兵衛　傾城奥州　極印千右衛門　傾城代々春

商客甲子を祭る事福を得ん事を思ひて持娼妓損をせん事をおもふて色容を持ハいつのころよりの云傳もなく面々つらきをふせぐまでのうさはらしうわきも實の餘情とて寄集るハ奥州がざしきなり【玉葛】おめへさんがたハうら山しいそのよふにミんながおいでなんしたから大黒さんにごちそうなんしわたくしのはこられねへといつてよこしたから大黒さんにうらミをいたしした（大黒をミて）おめへさんのハどこのでおすへ【おう劦】なんだかゝさんのくれたのでおすハ【玉葛】ちよつこりとしてよふおすねへたしか代々春さんのハ懸地でおつしたね【代々春】アイサ【千右衛門】それがおかしいとだしてハねへ此めへをれがきたときたんすのひらきへ大こくをかけたハいゝがひらきをあけるときかんじんの大黒ハドロ〳〵でかげをかくすやうにうしろのほうへ

いつてしもうと褌や何かに備へものをするうちがいゝ〔代々春〕もつてへねへいもじれあすこにはおつせんものをよう悪口をおいゝなんす〔千〕よくしかるやつさ〔平兵へ〕とかくどこのもしりに敷たかつてなりやせん〔おう刕〕よくおめへさんがたハ尻にしかれておいでなんしそうなふりだ〔千〕それといふがこあきの風が吹てきたからさ玉かづらさんが庄九を思ふのを分てやつてくんねへな〔代々春〕あんないゝ事をおいゝなんすあんまりたしなませておくんなんすな〔おう刕〕口さきでばかりだますがなぜそのよふに流行ィすねへ〔代々春〕ワたくしなぞハうわきのせうたいをミるときゝハしいせん〔千〕ヲットこんやハはらをたつめへ大こくさまハわらふがおすき〔平〕ヨイ〱ワイ〱〔千〕うさァねへ〔玉葛〕おめへさん方の戀いさかゐをミてもおもしろくおつせんいつそいつてねへせふ〔平〕寐ずにとつちりのむほうさァノ市ハどうした〔おう刕〕床へいつてはなしておいでなんすいつそおめへさんがたとちがつてやさしうおす〔平〕とんだ所へとばしりがきた〔千〕市がとこばいりも久しいもんだのろいのをろしうりハまだおれが方からださぬはづだがさ〔玉葛〕エ、あつかましうをすサァおやすミなんしへ〔千〕とつこいそうハならぬミやこの八重櫻〔玉葛〕花がちるもひさしいものさ〔おう刕〕マァよふおすわなそれでも庄さんハこられねへといつてよこしなんしたからまだあきらめよう

をすが文七さんハなんともいつてよこしなんせんそうで喜代川さんも心待にまつておいでなんしたにかんじんの文さんハおそくつて角左衛門さんがお出なんしたつてふせう〲に仲の町へお出なんした【玉葛】たしか今きたのハ喜代川さんの伊平次さんでおつした【おう劢】それごらうじいしいろ〲な唐人がめへりいすものをおめへさんもちつと人の氣をさつしてそのようにくよ〲思ひなんすな【玉葛】きのえ子のばんにそんなじやまがいりひすといつそ氣にかゝりいすねへ【平】人の事までうつちやつておくがいゝ【玉葛】庄さんもあんなことをいつてよこしていつでも外へゆくかすきでをすからまた其の手じやあねへかともおもいゝす【平】ばかなそりやああんまりかんが付すぎるその時こそおもいれへこませてやるがいゝ【玉葛】そんなことをいふとたつたひと口さ【代ゞ春】そうもいゝなんすなへおめへさんがたのいちまきハどこの女郎衆も目をつけておりひすがわけて舞鶴屋の女郎衆ハいつそほれていゝすとさ名もきゝいしたが平さんのハ龜菊さん【おう劢】庄さんのハ手越さん【玉葛】千さんおめへさんのハ舞づるさんといふ【千】しんぞうかおきやァがれヲ、おそろしいこと新造にほれられたにハこりたものよのふ平公【平】そうだつけのトわらう【玉葛】ナゼへ【千】色男咄をしてきかそうマァきゝねへさるところ二三人でしんぞう買にいつた所が市がしんぞうかおれにほれたりくつよ市も

如才がねへからちらとミるとぐつとせうちして床へおさまると千公〳〵とよぶからなんだと思つていつたらおめへのたのミの事を此子にいつたら嘘だといふからそれでおめへをよんだのだなんぼ男の口からたつてこういふことをいゝだしてふせうちでハ男がたつめへを聞てよふ〳〵とけたゝねへところがはじをかくりくつなら首をくゝつて死でミせると何氣なくいわねへけりやァならねへ義理でいふと市がいふにやあそうありそうな物だおれも思ひおもつてあげた子をおめへもうつくしい女郎衆をかゝへていながらおれが女郎をおれにとりもつてくれろといふハよく〳〵だらうと腹をたつのもたゝずに仲人するを今さらふしやうちでハおれまで男がたゝねへこれからハおめへちからまかせにしなせへといつて市はどこへかはづしてしまつたところがよく〳〵ミればおれが新造よりよつぽとわるくぜひもねへ事とハ思ひながらのりかゝつた舩といろ〳〵口説てもァレおめへさんがたハ云やわせてなぶるのなんのとどうしてもふせうちゆへこぎもがいれてもふよさうと思ふ處へおれがしんぞうがきてヲヤきやく人がとりかわつたよとむりにつれてゆき跡できけバその子をつかめへていふにやあコレなんにもいゝなさんなおれが見立てあげた子をげんざいおれが友達にぬすまれおめへの客といへば傍輩の女郎衆に足をつけられるあんまりものをしらぬやつらだからはらをたつていやァくらやミの恥をあかるミでつま

らぬものハおれとおめへばかりだそういふやつらに何も義理をたてゝさせる事もねへからこつちハこつちではじめてあいつらへの面あてにおれもくるからおめへも共氣でよびねへとふ〳〵だましおとしたそうだにかんじんのほれられたをれが手をむなしくかいるもどふやらこうやらいゝようにされやした【玉葛】おりふしハそんなめにあいなんすもいゝのさ【平】その次をおれがいこう去る内へこれも四五人連でいきおいらんに少ゝあたりがあるからをればかりハしんぞうさかれこれすんで床になると一座の女郎がきておめへさんをとりもつてくれろとたのまれへしたと何かなれ〳〵しくいふからおれもおいらんの理屈だあらうとハ思ひながらマァちやかしていやしたそれじやァわたくしがすまねへとよつぽどきていふからそのくらゐにいふことならよもやモゥワらつてもいゝかをいゝもしめへそしてたれだといつたらおめへさんもしつておいでなんす人さつれてきいせうといく跡ハけふハいかなる吉日と心でよろこびもふおいらんハきこそうなものやで待て居るとはづかしそうにくらいところへすわるをさると一座のうちいちばんわるひとうもろこしに目鼻といふ顴疱瘡跡面のちつとばかり前髪をちらかして人のわるひ女郎だ【千】こりやァたいへんの春駒だ【玉葛】それからどふなんしたへ【平】ぞつとしたがまさかいやともいわれず其晩ハ人目があるからいゝさゐわいに口ほこでしまつたがそれ

ぎりてハ中へはいつた女郎のめへが氣の毒ゆへ文と二タ人連でいきやした尤文に其女をかわせてやつぱりうつくしい初會の新造をあげるとなにがよりたかつてそのしんぞうにおもしろおかしく酒をのませ醉ておいて文と入レかわりさそのときはかりハさそ女郎衆ハせつなかろうと思つたたま〱こんなめにあつていやとおもやァばか〱しく夜かながひにァ、せつねへことゝふつと隣の床で何かいふから耳をすましてきくと此新造が文に大ほれてとふぞもちつと干さんハかいらずにいてくれゝばいゝねへとハありがたひミことのりね「千」おきやあかれそれたからおたかいにたま〱事ハ由斷かならぬナァ「平」さふおもつていれハ大丈夫さ「おう汤」あきれて物がもふされんせんねへ代ゝ春さん「代ゝ春」あいさよりによつてぬしたちのよふなうわ氣なものにほれるといふもやくそくことておつせふよ「千」いつそきのどくたの「代ゝ春」しりいせん「千」ホイ「玉かつら」にくいのう庄さんもァ、たよ「千」コレ〱はなしをしてきへ少ゝハ氣のはれるものたから庄が大いろごとになりそくなつたはなしをしてきかそう「玉かつら」サァきゝいせう「おふしう」玉かづらさんかいわうと思つて「千」ずいぶんいつてもいゝさる出入屋敷の衆につれられていつたのさ「玉葛」おめへさんかたのはなしにハきつひさるのいることたねとふりてよく女郎しゆをかきなんす「千」ちやなら咄すめへ大事のことた「玉か

づら」ごめんなんしだまつてうけたまわりひせう「代ゝはる」だいじのともいゝね「千」マァだまつていやな「代ゝはる」むづかしいね「千」エヘン〳〵もつとも其旦那もなじミかしておいらんなぞも出向ひたいこ藝者で茶屋ハ大らんちきのうちもなにか其おいらんか庄にへんな様子さ「玉かつら」おめへさんも其時おいてなんしたかへ「千」初會ハいふにおよはすうらまても庄かたのミていつたから正銘のはなした「平」せう〳〵あつひはんた「玉かつら」ナァニ「千」それから庄が小便にゆくと跡につついて其おいらんか次の間にまつて居てマァ一ぷくたべなんしとた菓粉すいつけのどさくさまきれに手をにぎつたり口をすつたりしたさうさ彼是すんでどや〳〵と女郎屋へ行といつか其旦那のさし圖で　おれにも庄に　もうつくしい新造があかつているしァ、ふ都合と庄も思ひながらそのばんハそこ〳〵であるくばん二人づれでいつたところが其おいらんに四五人客が落やつたけれどそれも仕方がねへからおいらんのしんぞうと見たてかへそくらわそうとはかつたところが其しんぞうが庄にほれてつれてきてくれろや何やかで旦那がそのしんぞうを出した譯かしてはなはだそこがむづかしい様子ゆへかいつてあんまりいつてハかんをつけらるゝもとひとマァ其晩ハそのしんぞうをかつてなんぞミつけてぶう〳〵で引かへようとおもつて居るうちおいらんか何くわぬかほでよふおいでなんしたわたくしのハなぜつれ

てきておくんなんせんへなぞといふうち火をとりにやり其うちせう〳〵いちやつきなますです
つたりすわれたりするとこいつもかんをつけたかしてそう〳〵あしをとがするとどふもあのと
をりでおすからいさゐれかいておめにかけへせうそのとをりはからつておくんなんしといふと
ころへしんぞうたばこの火をうや〳〵しくもちきたるをミるとひよいと飛のき今に直に書てお
きひすからおつゝけとりによこしておくんなんしの約束もほどすぎて連のところへのふミをと
つてきてくれろとしんざうをとりにやり間の唐帋をあけて今夜ハなんでもいじのきたねへこと
をしてハならぬから爰を明ておいてくれろといふおらがのハ地色でもかせぐのかたきし寄つ
かぬゆへおれハいゝがのちにこまるめへといつたらそりやァ内藤宿のとうがらしだめつたにそ
ばへよりつかせることじやァねへといふところへ庄が新造が來てナセこんなにあけなんしたへ
とふミの事はいつこふさたなし庄もがつてんがゆかぬかしてふミハどふしたときくとおめへさ
んのをかげてしかられへした世事たからァ、ハいつたが此客人の落合た所でどふふミがかゝれ
るものかおめへもこんなとハさしはからひなんしとこんなむりばかりいゝなんすそして手めへ
のしんぞうかなんぞのように人をしかりぜんてへきやくがあると思つておふきな顔をするのャ
レいちがわるのとかんのんへ朝參りの時を見るよふにいろ〳〵ならべているから庄も氣ハミじ

かしそんならなぐさむなとぐつとくるけしきをミるとどうなんしたいつそとしんせつに脊中をさすつたりさすられると氣がかわつて例のミれんをあけつぱなしておれに見せるうちが氣つひ
【玉葛】そしてその女郎衆のほうハどふしるしたへ【千】まだ闇うち歸るとおめにかゝりたひことかあるからそう〳〵きてくれろとみかきたけれど庄ハいくめいといふをむりにすゝめてやるとおめへさんハうらミなものでをす夕部ハしりなんすとをりおりあしく客人が落合ァノ子も氣をつけるからしミ〴〵はなしもされんせんからかいてあげるものをとつくりと見ておくんなんしといつたにナゼあのよふな事をいつてよこしなんしたときくとなんでもこれにはやうすがあろうとだまつて庄もきいているとおめへさんのお出なんしたハ此間か始てでおすが仲の町で度〳〵おめにかゝりひしたゆへなれ〳〵しくはづかしひ事もいゝしたそれをァノ子がみをとりにこよふといふのをなんのいかずといゝ世事だからァ、いつたものよどこへもいかずにそこにいろといつてはなしなんせんを無理にきひしたともふしひしたらわたくしも腹がたつてそんならいひとァノ子の居るめへでつん〴〵に引裂てミせへした共事をもふしいせうと思つてあくる朝もかへんなんすならとめ申ておくんなんしとたのんでおきいしたァノ子ハいろ〳〵とめもふしひしたそうだに聞いれなんせすナゼおかへりなんしたをいわれ庄も始て新造にはかられたこと

をしつたれどちつと意地のきたねへ事をしたゆへ晝のことゆへなればいづれ晩にと齒切れのしねへことをいつてかへり直に晩に行と【玉葛】ワかりひしたかへ【千】わかりやあワかつたがとんだ事がわかつたよ【玉葛】ナゼヘ【千】りきミきつておいらんのいふにやァあの子をだん〳〵ぎんミいたしいした所がおめへさんもまんざらでもねへさうだからきとをうしてやつておくんなんしとさ【玉葛】いゝきミでおつしたね【平】是がほんの寶の山へいつておもふさまつミこんだ舩が破船したよふなものだ【玉葛】それから其新造衆のところへいきましたかへ【千】そどのつらをさげて　トいふ折から【新造】おいらんへ今庄さんが舞靏屋からお出なんした【玉葛】それからどうなんした【新造】ミんなは來て居るかとおきゝなんして今行からそういへとおつせへした【玉葛】アレミなんしそうだものをはやくいつてつれもふしてきや【千】サァ〳〵大どだ〳〵これよりやきもちのほや〳〵はじまりさよふに【平】カチ〳〵〳〵

○雷庄九郎　傾城玉葛　悋氣の爭

【庄九郎】ナンタ河豚の北をくらつたよふにごうぎにふくれるぜ【玉葛】ふせうしておくんなんしワるひのハむまれつきでおす【庄】腹を立のがむまれつきなら辛子かきをいゝたてにい

ゝおもしろくもねへ酒でものむべいマゥ〳〵袖の一ッつぎや【庄】ェ、いらざるうつちやつておきやないゝからつぎや 禿雨ほうのかほをミてまご〳〵する 【玉葛】よしやトいふに【庄】そんなられものまねへ手があつてひとりのまァ トてうしをとりにかゝるト玉かづらがとつてなげ出ス ヲャ〳〵てうしに羽根がはへてとばァいくらでもあたけろなんともおもわねへけへれといふのか歸つてミせるハ【玉葛】どうともなんしナンノ酒もはらさん〳〵のんでおいでなんしたろうにのミたくハねへはづでおす【庄】そんな糞の熱るよふにぶつ〳〵するないふことがあるならいへ又いわれねへ事ならさつぱりとするがいゝわからねへこたあきれへだナンノかいるべい〳〵トたつ【玉葛】舞靏屋へやることハなりいせん【庄】けへるくらいでどこへいかうがいらぬおせわさ【玉葛】ゆくくらいならどふともわけをつけてお出なんし【庄】譯とハどうワけをつけるのだきれてくれろといふのか望ならきれてやろうそんならきれたぞよ トゆくをむなぐらへすがりつき 【玉葛】すミいせん〳〵【庄】ふざけるなワれがまわり氣もハ久しいもんだよさねへかこのべらぼうめ トニツ三ッくらわせる 【玉かづら】そらほど憎くハどうともなんしミんなか出なんしたにおめへさんばかりこられねへといつてよこしておきながら舞靏屋へお出なんしたじやァおつせんかそれも一度や二度ならかまいわしいせんつゞひてお出なんすにハなんでも譯がなくつちやァなりいせん【庄】ワけがあるならわけ

があるにしておけへなんでもねへ事にャレあすこへいつたからどふだのャレこゝで咄したからこふだのといけうるさいこういふ身のうへでは旦那がたへついてどんな處へもゆかにやァならぬたとへどこへゆこうとそれつきりこねへならうらミをいふも尤らしくもおもふがおれがこういふきでしやうずをつかひよふ〳〵はづしてきてミればこいま〳〵しい事をいやァがる【玉葛】こつちでもうわさをして居る最中外の內でもある事か舞鶴やへお出なんした事だものをいわねへでどふするものでおす【庄】コレよく聞よ假染にもモウ三年來ルぞよ其うへ年季も少しだと互ひに云ひ約束をして女房にせうなろうといつたハうそがほぐにするのか【玉葛】反古にするくらいなう氣はもミひせん【庄】それミろそふいふうんつくだ始終ハ女房にもなろうとふものがそのようならハ氣なやき餅どころかへそれといふが手めへのむさい心に引くらべるからの事だそんないやミはおらァきらひだうれしくねへぞよハテワきの內へ十日廿日居續をしようとまゝよかたくやくそくした手めへに見けへる女があるものかばかめ（此ことばにて心とけれどきり口上にて）【玉かづら】そんならワたくしがわるうござりませうごめんなさりまし【庄】そうありそうなものさアレとなりのむつましい事をきけ

○布袋 市右衛門 傾城 九重 床の睦言

【九重】アノ子此ぢう田舎のかゝさんがきいしてね【市右衛門】ム、そりやァよかつた久ぶりて逢てうれしかつたろうの【九重】うれしいや何やかで色〳〵なはなしをするうちにワァまあおきゝなんしわたくしがおとうとがいつそどうらくてなりいせんとさ【市】そりやァわりいこつたさぞ親たちヽ心遣ひだらう【九重】それでワたくしに跡をとらせてへとつてもふ年季もすこしだから相談にきいしたといゝすからびつくりしいした【市】そりやァ弟が不埒なら跡をつがざァなるめへ【九重】ヱ、モゥよしておくんなんしばからしひ【市】田舎といふものヽかてへものだから手めへがいかねへけりやァ血筋がたへよふ【九重】おとうとだつてまだとしがいかねへからおしつけなをりいせうしとゝさんかゝさんもまだわかしまだ妹もおすからどふともされへすかゝさんのいゝなんすにもとゝさんがそういゝなんすから相談にヽきたがながい勤のうちなれバ定めていゝかわした男もあろうそれをむりに引さいてひよつとひよんなことにでもなつてはかへつてなげきのたねせめてヽこれまでの禮に手めへすいた男をもたせてへとおれヽふだん思つて居るといゝなんしたからいゝしほにしておめへさんの事をくわしくはなしい

したらそういふ實氣なお人なら始終見すてもなんすめへずいぶん大事にしてよび申せまたとゝさんへも折を見あわせはなしておこうとかゝさんはせうちしていきなんした【市】ヲ、よしく／＼マア一方ハわかつて親父どの次第で日本晴のかゝあといふものだ【九重】それだからおめへさんもいやても見すてゝおくんなんすな【市】そりやァ氣遣ひするな人も知たおらか組の戀中その替りにもし間違のあるときはふ了簡なことをするも男つく【九重】そんな事ならどふともなんすがよふおすヱ、モいつそ寒ひはんでおすね【市】アン喜代川さんかとんだ醉てかいつたよふすだがいかすといゝか【九重】よふおすよ

○雁金文七 傾城喜代川 眞の仕打

喜代川へ酒にゑひ仲の町よりよふ／＼かへりいつれの座敷へやらいろきやく角右工門へたいこけいしやをひきつれ喜代川か座しきにて大さわ【野田角右衛門】喜代川ハどふした【しんさう千代川】いつそたわいなくいきなりに下へ寐なんした【角】それたから呑なく／＼といつても聞いれすなんと思つたかァノよふにのんた【たいこ】おいらんも旦那か御酒かおすきなりあなたゆへに氣をゆるしてあかつたものさ【はんしん波のつ】アイサ心やすたてゝついのミなんしたのさ【角】それでも仲の町をあるひてきたかふしぎた【たいこ】それといふが心持よくよ

わしつたからおよそころしてのむ酒ほど毒なものはござりませんわたくしなぞも旦那のおさしきては内でのむ氣もあんまり虫がいゝかね「角」こうでなけりやあなくさゝにならぬ「波のつ」あれでも吐なんすがくせでおすから胸にあるうちれいつそせつなかんす「角」そんなら目のさめるまでいごかさねへでおくがよい「波のつ」それでもおめへさんがさゝしうおすせうかと氣のどくでおす 角右エ門はいゝやてもなくたゝ口のうちてうにやく／＼に云ふ 「たいこ」サアく ねつこなしの大しやれ大さわぎのはじまり／＼トコトン／＼／＼「角」おもひ出したやうに さゝしくもなんともない▲ 伊平次かさしきには酒によふたか喜代川をかいほうしなから 「伊平次」マァきついよいようしやなぜそんなにのんだのしやな「喜代川」角さんて仲の町へ出ておりいしたらおめへさんもしつておいてなんすとをりまたかゝさんがきたないなりをしてきいしてちつとむしんのやりよふかおそいとてさんなのゐるめへていろ／＼悪口してははぢをかゝせへしたあんまりかいぶんがわるうおすからやけのさにつひのさいした「伊平二」ナンノほんのおやふんといふまでのことしやおまへかあんまりかゝさんあしらいにしてじやからそばへおるわへ「喜代川」それでもなんぞといふとおやた／＼といつておどしいす「伊」そのたびにめんぼくないとてそのよふに醉てはからたかたまるまい「喜代川」むりのさておすからいつそせつのうおすたま／＼お出なんしたにわたくしか心にもなつておくんなんしいつそじれつとうおす

これといふもこんな人のせいだとおもやァくちおしうざんす【伊】そのよふに氣をもんで泣となをせつないマァ氣をしづめて藥でものむがよいぞや【喜代川】それでもおめへさんハ內か出にくうおすにたま〱お出なんしたに此よふでいつそじれつとうをす【伊】よいよだまつてひと寐入ねるがよひ【喜代川】それでもたま〱お出なんしたものを【伊】ハテまたいつでもこよふわさ【喜代川】ほんでおすかへ【伊】ほんまじや【喜代川】それであんどしいした誰ぞいるかの【伊】コレ〱ゐろうむねがわるひそうしや耳だらゐもつておじや【しんそう初川】はんぞうでおすかへサァおもどしなんしト出す【喜代川】エヽモ此子ハはからしいぬしのめへでそのようなことができるものかへはづかしらしい【伊】ナンノゐんりよはないぞや【喜代川】アレサそつちへもつてゆきやといふに【波のつ】きてミて それしやァもどしなんせんうちハせつのふおす下へつれもふしてゆくがいゝ【伊】なんのかまいはないものをそれでもはづかしかんなんすものをさこしうおつせうがふせうしておあげなんし初川さん權七どんをよんできなんし【初川】アィ【波のつ】いつそお氣のどくざんすねへ【伊】ハテゐろうよふてじやものをしかたがないわひ【波のつ】コレ〱權七どん下へつれもふしてくんなんし△喜代川ハトかひもの、かたにかゝりよう〱いざなわれゆくさしきハ【喜代川】波の津さんいつそうれしうおすにへあとハいゝよふにしておくんなんし【波の

つ」おあんじなんすなサァおしげりなんし　と出てゆく　「文七」なんのこつたとんだよつたようにきいたがうそか「喜代川」おめへさんのほうへきいせうといろ〳〵氣をもみィした「文」ふたり客があるそうだがたれだ「喜代川」おめへさんもしつておいでなんすやしきの角さんに伊平次さんといふめつたにお出なんせんきやく人さおめへさんへしりなんすめへ「文」かミがた言葉のか「喜代川」よく知つておいでなんすね「文」こだくさんな客だのためになるきやくれどふしてもちかく何事も金の廓だ「喜代川」ナゼおつなことをおいゝなんすへ「文」イ、ヨウつちやつておゐておくれ「喜代川」せつかくこうしてきいしたものを何がふそくで共樣にふさいでおいでなんすちつとうき〳〵なんしな「文」ふさぐすじもすこしハあるのさ「喜代川」ナゼヘさあ〳〵おいゝなんし〳〵「文」とふでいわねへけりやァならぬことだからいふのさ「きよ川」なんでおすへ「文」もふ爰の内もこん夜ぎりこられねへ「きよ川」びつくりして　ヱ、モジらしなんすななんの事でおすへ「文」じらしてはねへほんのことだ「きよ川」マァ譯でもおつしてのとかへ「文」わけといへば手めへにあんまりほれたからのことよ「きよ川」そりやァわたくしがことをあてゝおつせへすのかへヱ、うるさくなんなんしたの「文」そうでもねへのさコウ日に〳〵きのふけふとあつくなるばかりでかんじんのすることもしねへじやあ肩身もすぼま

るし手めへのまへもきのどくだ「きよ川」そりやァとくしんづくだからいゝしやァおつせんかへ「文」なんぼあいてへづくても永く來るうちハあれやこれやとみくらべにされあれほどの事ハ氣がつきそうなものこれほどの事ハしてもいゝと思ふ所より次第〳〵にあらが出てあいそふをつかされつき出すばかりにされるより足もとのあかるひうち手をひくがいゝ情のねへよふだがこのいろごとゝいふものハ見きりがワるひとあとへもさきへもめへりがたしだ「きよ川」ナゼ思ひ出したよふに其やうな事をおいゝなんすへおふかたこんやの客人たちを腹もたゝせずつとめへしたからそれで其やうな事をいゝなんすのでおつせうこれも人のためですることゝおもつておいでなんすのかへ「文」ハテワるいがてんだ實ハのりたや玉の輿の世の中だからッレてめへがまたなんとか思つて居るうちわかれハ憎くもおもわす逢た時にもあつひさむいのすて言葉ぐらいわかけてくれよふといふものだもつともてめへが喜代川でなく名もねへ女郎なら何もそう用心するにもおよばねへが錢金つくでワかれたといふ評判があつちやあ男がたゝねへ「喜よ川」成程はたらきのねへワたくしゆへそう覺束なく思ひなんすもむりでもおつせんがワたくしも人にしられなんしたおめへさんを人だのミをしてよびもふしいすくらいでハなんぼわたくしの様なものでも覺悟のうへの事でおす今おめへさんにていよくつき出されてハ人中へ顔が出

されへせんいやと思ひ詰なんした事なら是非もおつせんからなんとか了簡するぶんの事でをす

【文】なんぼ其様に手づよい事をいつても角右衛門がやかましくいつたらおれをよばれめへ

【きよ川】ぬしばかり客でもおつすめへ【文】すればゞ内所でせくはひつぜう其時はどふする

【きよ川】たしか心ハわたくしのでおつしたつけ【文】ム、其言葉をワすれるなよ【きよ川】ワたくしはわすれることでハおつせんからおめへさん此耳を明ておききなんし □□□□□□□□□□ かり耳をひく【文】馬鹿ァするないたいわへ

甲子夜話大尾

跋

直諫ハ愚鹵らしく諷諫は通なり北堂のあまき故高堂のにかき面呰嗇奴の辛まで委く味えたる梅暮里谷峩酢も甘もしてくつて而后糲粽汁の醎きくらしかたを知ば膏粱の養ハざるを恐る是足をしるの則富るにあらすやされば此表題の甲子夜話たる事臍の下へ落着て考べし

梅暮里谷峩著

傾城買二筋道

いろ男始めハあからめれ後に実あれ
ぶ男始めハゆかれ後よみ解る也らん

後篇 同廓之癖

はつうきこゝでもつひにふくろう
実さめくし〳〵のみ示をうかゞふなり

三篇 同宵之程

これもたゞひとりひなふ於われ
あふれよし傍無ぶじ謀る々ゝ為

傾城買猫之巻

女郎のうそをまことゝあれる
よふにうきうきるなるなり

白狐通

地色の女郎の情うきハ南方の
滑をするあり〳〵ろき一本之

辛酉新版

契情買言告鳥　つとめかりにまことを遊ひ　おもしろき本なり

同二篇廓の橋　閨するすゝ男りし互のしい内に哭て　るまでもするありおもしろき本之

傾城買甲子夜話　甲子の夜かたりにより思ひつきて二様色客此河のよまざ之

契情買中夢之汗　高まくらにて祇いろ゛とのゆめを見るをいふおもしろき本なり

鶴図花撰帳　辰巳のきえに手をそろへ　おもしろき本なり

追々出来仕候間御求御覧可被下候

郭の櫻

言告鳥二篇目 廓の櫻

道具替れば。本戯臺一面の花。すべて。よし原仲の町の景色なり。夕ぐれの聲華。植込しげき櫻木の。下艸の挑灯は。坊主禿の丈より高く。程よくならぶ床几にて。伊久大臣のこへにて。煙管の皿より。高慢の脂口に通じ。頻りに愛す。其髭なく。延る鼻毛て。腹を過る。是にとりつき。若衆の怒。鉢巻ならぬ頬冠。人目を忍ぶ助六に。我とワか身を。總角の姦夫狂ひも。終にて遣手の目付柱に隔られ。面白酒で。苦労酒を。呑ども不醉。視どもうかぬ。花のもと。聽ども聞えぬ。左右の。茶屋揚

屋とも。いづれ賑ひに。三弦彈たてる暮明。

酉のはつ春

梅暮里谷峩序

目錄

初幕　三浦のだん

二立目　異見のだん

三立目　緣切のだん

四立目　待伏のだん

廓の櫻

四

五

廓の櫻

梅暮里谷峨著

二番目初幕

月折〳〵雲を覆ふ事なくバ人眼を破らん花も風に散らずんバおしまるゝ事もうすかるべしさればつとめの身のうへにも悶るればこそ心をあらわし實ある事をしられ慕ふハなぜとをざかり思わぬ人ハ又しげくしかもいやなハ金があり通ひにかよふ其人ハあいもかわらず此大臣「伊久」なんじやふミを見てゐらふおふさわぎじやのコレ聞へぬぞや命から二番目の大事の金をつかつて來るハ外聞のわるひ事じやがゐろうほれねばこられぬに寐もせずおきもせずそのやうにつくねんとしてどふしてくれるのだあまり不人情であらふそれといふがアノ介六にたてる心中でもあろうがハテ助六とワしがしつた中でハあるまいしおれにあつたとて何にも介六がやかましく云ふ譯もあるまひそして助六ハせかれてあげられぬでハないかそんなら猶更のことだマア男へ心中たてゝあわぬなどゝいふハそりや高雄薄雲小紫の時代の事とんと今どきはやらぬことだ今でそうはりのつよいのハ芝居の女郎ばかりあんまりかたいツリヤとんとやくたひといふものコ

レ來ル夜も〳〵ひとり寐どふぜん介六ゆへにこんな目にあわせられてハ京町へきこえてもたゝぬぜひ一度ハあつてもらハねばならぬ揚卷マァそう思ふてたもれ「揚卷」わたくしどものやうなものでも咥にもつてふいハておくんなんすハうれしうざんすがおめへさんこそふにんじやうでざんすハ「い久」なぜに「揚卷」さればでざんす若むらさきさんがいつそほれていなんすと世見のうわさそれをミすてゝお出なんすやうなうつり氣なおめへさんにどうまあ心がゆるされすものかへ「い久」いけねへよしてもおくれマァきかんせおまへがたにすかれるにハいかにも東なまりでなけりやうつらぬと思ひいつそなしに云ひならうてミてもちやまへの詞ともちやくちやになつてとんとむちやじやそへアノワかむらさきが事いゝわけがましく云ふでハないがしつてのとをりアノ助六とはじめのうちハはりあふた所がこふいふてはおかしらしいがこれづくでハ（金のことなり）どふして介六なとの歯のたつのでハないそこでとふやらこふやら助六ハつまミだされたじやて「揚卷」そんならおめへさんの十分といふものでざんすすれば助六さんに恨こそうけなんすはづだにぬしをかれこれと云ひなんす事ハありそうもねへ事でざんす「い久」そこじやてどふやら見へハよいようじやがかんじんの逢方ふせうちとミえて介六の來る内ハさうをうにしてあそばせたがアノやらうがつきだされてからといふものハとんとろくな顔をミせぬなんじやつても

もん日もの日ハいふにおよばす正月なぞハ百品たらすこしらへてやつたその恩もわすれいゝたひまゝの氣隨氣儘マァそれもこらへてやるまいものでもないが其事故瘦衰へめしもろく〳〵くわぬとのことゆへコレ若紫なにが心にかゝつてそのようにわづらふといふたればァノめろうがいゝくさる事を聞てたもれアイワたくしハ人の中でいのちにかけてしとふお人にあへないわかれをしひしたゆえ其事が明てもくれても心にかゝりそれで此やうに煩いすといふからおれもむつとしたゆへそりや誰といふたりやそのように根どひなんせんでもようざんすおめえさんがおきゝなんしても害にこそなれどふでらちのあかぬ事でさんすとどふかワしがくるゆへ介六との中を裂よふなあてこすりをいゝをるゆえあまりけたいがわるいさかひなんだへ手前ばかり女郎でハあるまひしおれがこずばそちらこそこまらうがわしハことのかけるとハミじんもないとおもいれいゝたひ事をいふたればあの女郎もとしハいかぬが氣のふとひあまじやすこしもうてるやうすなくあいそづかしをいゝおつてミれんなしにワしをつき出しおつた側ではおれが事ゆへいろ〳〵にいふてとめれどもワしも男じや何にもきゝわけずにかへりそれぎりに手をきつて仕もふたもこれミな介六があるゆへおこつた事ワしもぐわいぶんがワるひから一ばん顔をふまねバならぬところにかねておまへをミそめておいたゆへ折しも介六がおまへのところえ

しのび〳〵に行とのうわさはてよくした物こゝこそ仕返シによいところとおもひまたおまへもいき地のあるといふひやうばんゆへ此事をあからさまに咄たならさためて介六をつき出しわしが顏をもたつてくだんすじやあらうと思つてあめのふる夜も雪の夜もいとわひで通ひかよつて實をミせても馬耳風龜面水くわしい事をいゝ出すをりがない此わけいふからとては一ばんたてゝ下んせ【揚卷】おめへさん共やうに事をわけていゝなんすからずいぶんきゝとゞけてあけとうざんすがそうしいしてハこつちのつがふがわるうざんすからどふもそうハされんせん【い久】そりや介六ゆへか【揚卷】なんてざんせうともようざんすそれだから初にお出なんしたときわたくしがところえお出なんすれうれしうざんすがわたくしハ氣隨なものゆへとふでおめへさんのきにハいりいすめへから跡でかれこれおいゝなんすなへとことわつておきゐしたわたくしハつとめの身の上へゆへお出なんすれハ出ハでんすがいつまでおいでなんしてもおなじ事で氣のどくでざんすからせんども外にきにいんなんした女郎しゆがあらバ隨分おかいなんしそれとも外の内へいきなんすともかならずえんりよはさんせんとまでいゝしたも人にしられたおめえさんゆへ跡で皃のよこれぬよふにと思つていゝしたそれもきゝいれなんせす通ひつめなんしたを恩にかけてかれこれいゝなんすが此うへなんといゝなんしてもむだでざんすからもふなん

ともいつておくんなんすなまた此うへに氣にさわる事や顔のよごれる事ができてはわるふさんすから【い久】そんならおめえもおれにくるなといふのか【揚卷】わたくしは今いふとをりの身ゆえそりやおめへさんの心まかせになんすがいゝ

伊久も助六をつきださせ思ふまゝに若むらさきの顔をふまんとおもひしにあんにさうゐの事なれば心のうちにはなぜあのよふに介六にはほれることと一度ならず二度までせきたつ心をしづめ着ものをきかへふくれかへり

【い久】羽織を出して下んせ【揚卷】おかいんなんすかえ【い久】どふでわしどもがいふ事はきひてもおくれぬゆへ歸てこゝろよく寐よふそのやうにうれしかつていそ〳〵する事はねへ【揚卷】それでもあとで寐いすから【い久】たれと【揚まき】ばからしいひとりさ【い久】とんだゆめをミてとんだめにあわぬよふにするがいゝ【揚卷】其時はどふともしいしやうわな

伊久心ならず思ひながら足音あらく下へゆきもはや九ッ時てからまもなきゆへ茶屋の男まだはなしをしてゐる

【茶や男】旦那なぜおかへりなされます【い久】なぜてもいゝからはやうはきもの をだした〱

とふきけんに久しきものと思へども何かうつたえるよふにもてなす揚巻も新造禿を引つれ大門までおくる道すがら

【さわらび】アレ／＼お星さんがとびいした【い久】アノとんだほしを夜ばい星といふがしつてゐるか【さわらだ】ばからしいそんなおほしさんがありますものかへ【茶や男】とびハとんだがどこえいつたかしれませぬ【い久】それでよばい星といふあれでもとこにか隱れてゐる此くるわでいへバ人の金銀を出して揚て置く女郎を一文なしのならずのくせに色狂ひそれじやによつてしのびかくれてぬすむじやされバあの星もよつほど錢氣のないほしとミへるあれこちらの星の光りのよい事ハあれをバ黄金星ともいふであらふまた金の光りハかくべつなものじや【揚まき】とれでざんす【茶や男】アノ一チばんにひか／＼するお星さまさ【揚まき】アノわるひ光りのするのかへすかぬおほしさんでざんすねへわたくしハそのよバいぼしさんとやらがお星さんでもそのよふに心づかひをしなんすとおもへバいつそかわひそうでざんす【い久】にくむべきをかわいそうと思ふものゝあるもうき世ハさま／＼じや【茶や男】それでもつたものでござります

といふにはや大門なれバあげまきハそこ／＼に引かへし介六が茶屋へきたり

【揚まき】よくまだねなんせんね介さんハかんしやくをおこしてかえりハなんせんかへ【茶や

女房」かへろうとおつしやるをやう／＼とめ申て置ました「揚巻」そうでざんしたろうおふきにおせれで返事をかきてえにもなんのかのと邪魔がいりいしていつそじれつとふざんしたあの客人をかいそうとおもいゝしてもきをまれして意地にかゝつていゝすからどうせうと思ひいゝしたが今夜ほどまじなひのきいた事はざんせん「女房」そんならお客人れおかえりなされましたかへ「あげ巻」アイサかへりひしたよ今夜れ不寐が五郎兵衛どんざんすから遠眼がきゝんせんからつれ申てまいりんせふ　折から介六二かいより下り「介六」今夜れ伊久がきたといつたからまただましたらうと思つて歸らふとおもつた「揚まき」わたくしが思ふようでもねへ久しい氣じかさサアおいでなんし「介六」いゝかえ

相談もそこ／＼にて夜ふかきこそ首尾なれとこわひ事も打わすれ戀路のやミのくらまぎれなんなく二階へしのばせる

「揚まき」これ／＼さわらびさんごせうでさんすから共火ばちでかんをしておくんなんし助さん油をつぎにきいすから床へはいつておいでなんしな「介六」なんだかなまあつたかいとこだぞ「揚まき」ほんにさうでざんせう上下へしきかえてあげ申いせう　忍ぶれべこつそりと引しまいて「助六」久しぶりで女郎かいにきたようだ「揚巻」人聞のいゝうそをおつきなんしよふかしいかすにいなんせ

うしかししれるときゝいせん〔介六〕いゝ事をいふもんだせおれハ氣づかひねへが手めへ伊久にくどきおとされねへよふにしやいつかせうちしたもしれねへ〔揚卷〕おふかたせうちしいしたらうよそれを手にもされなんすめへわたくしハおどけにもあのよふな心ねへ事をいわれるとはらがたちいすわ〔介六〕ヲットごめん〳〵〔早蕨〕サァかんができんしたがなんでおあげなんすえ硯ぶたのものでもあげんせうかね〔揚卷〕そりやよしなんし伊久さんがたべちらしなんしてきたのうざんすァノ茶だんすの内に鯛のミそ漬がありいせう〔早〕ほんにそうざんしたね〔揚〕それと介さんハ五分切がすきでざんすからそれをだしておくんなんし〔早〕やきいせうかへ〔揚〕よふざんすあとハわたくしがしいすからねなんし〔介〕それでも一ッのまねへか〔早〕ァイ〔揚〕あの子ハ寐るほうがかつてでざんすそれとも一ッのミなんすかえ〔早〕いゝへそんなら介さんおいらんおやすミなんしこゝにおりいすから用があるならおこしておくんなんし と次の間へゆきねる〔介〕きどくな子だよくせわをする〔揚〕アイサたのまれた事ハひかぬきせうでざんすサァおあがんなんし 此うち少々酒事あり〔介〕マァよく伊久ハかへつたの〔揚〕マァおきゝなんしいつそぐちをいゝしたつけがはじめからことわつておきひした事があるからわたくしもしんびやうにしてやりひしたらきつくもいわれず腹をたつていろ〳〵なあてこすりをいゝ

して歸りいしたそしておかしひとだしてハさんせん手めへでもなまぬるひ詞だと思ふかして江戸の詞をつかふかと思へバまた上方のこと葉をいゝすからなんだかワかりいせん【介】そのはづよ外へ出れば江戸ことばをつきあふ内へ歸るとかミがたことばのものがおゝいから乞食の狂言といふものでかたミ替りだ（此事あけ卷只一ツかうげせズ）アノの伊久といふ男も敵どうしでもあるかよくおれをにくがつてハ邪魔をする【揚】アイサおめえさんか若紫さんのところえいかねへよふになりなんしてより手一ぱいにしようと思つたところが思ひのほか若むらさきさんにつきだされそれもおめへさんゆへだといゝしてそれでわたくしがところえ來て金てせかせおめへさんのほうをまづくさせよふと思ふも手まへの心に引くらべあんまりきたない心でさんせんかそれでもおめへさんとはりあふ氣があつかましうざんすね【介】ワかむらさきも年がいかねへとはいゝながらばかなアノ客をはなれたらこゝろふと（すぎし間ちがいの事おもい出しかわいそうと思ふにや少しふさぐ）【揚】なる程人のことだからそうハおもいひせんがワかむらさきさんの氣になつたらマアどのやうでざんしやうかワたくしならおうきに死でしまいゝすおめえさんの心でハわたくしにかうつながれなんせずば此ごろハ間ちがいの譯もたちおいでなんすやうにならバもとよりハ猶ふかくならふにと思ひなんせうねどう理でおめへの皃のたつようにはれて呼びもふしいせうといゝしてもきゝとゞけなんせんはつだ【介】

てめへもぐちな事をいふもんだどふかおれが心でものこつているよふなことをいふがたとへ心のうちでどふおもつたとてァ、りつぱにつきだされたものをどのつらさげていかれるものかまたはれてよぼうといつたを新造買ではしめつからはかなく來てさへ此とをりはでに來てなんたつてたまるものかなる程なミ〳〵の仕打なら一ばんはれてあがるやうになりてへもいよそうすればいつたんハ京町へつらあてといふもんだが直にせかれてミればやつぱり外分もわるしおらァ若むらさきのにくいより手めへにはじめつからましつたからすこしもなかくつゞかうと思つて義理も恥辱もうちすてゝいるに其やうにうたぐつてはうらミだぜとハいふものゝすへがつまらぬからおれにかまわず手まへもちつと氣をとり直し客人をあんまりふらぬようにして内所のまへもよくなるがいゝ【揚】そしておめへさんハどうなんすへ【仕】おれが身ハどうなろうが力業でもできるならかせいで見る氣もあるが此疲骸てハいかねへしたところが寶舟をおつぱじめてほし大根やしんまいわかめしぶうちわ奈良團扇はしら暦にお神酒の口となんぼ世わたりなればとてどうまあそれが出來るものか生恥をかこふよりもおらあとふからかくごして居る【揚】わつと泣出し あれあんないゝまわしひ事をいゝなんすたとへそういふようになれバ跡になんの殘りいせう

と互に愚痴の折から伊久ハ立歸る二人りハうきもどこへやらそう〳〵夜着の裾へかへしそしらぬ顔にもてなせば

【さわらび】おめへさんハ不遠慮な人がとおもうしいすも聞いれず外の客のいまいものでもありいせんにばからしい【伊久】何外の客だほかのきやくが居やうはづがない尤客の落あふときハ本客の歸つた跡へ入レる事もあるじやあらうが今わしがかえるまでハ客の有るさたもきかなんだがたとへあつてもあすの朝まではわしが本客じやによつてどこぞにしのびかくれてゐるやつがあるなら名代座しきへさげてもらをうぞやハヽアあの夜着の裾のむく〳〵ゆえおれがじやまになるのじやの【早】おめへさん其やうに意地のわるひ事をいわなんせずとうつちやつておきなんし鼠でざんせう【伊】イヤうつちやつてをくまひそれよりかしかけた小便しておいてうろたへずともよい事にまたねづミならあたまのくろい鼠じやこの伊久といふいちもつの猫がミこんではこれがほんの袋のねづミ何もかも見とゞけてきたのじやイヤ介六とやらぬけろくとやらだいぶ名の高ひ人ときひたがまだ間ちがうて知る人になりませぬイヤ一寸大義ながら爰迄出て下だんせコレいやかなぜに返事をさんせんめんぼくないのかいかさまそうでもあろうそんならこれからいゝますぞやわしハ上方生れなれど御當地にばかりゐてありがたひ事にハ金とい

ふものが大分あるゆへ子ふん子かたといふてもないがマァ人にたてられる伊勢久といふものでごんす一躰をんくわでなひひげなれど撫て居てひとまかせにするゆへ此廓でハ髭の伊久ともいふ大臣かぶ以後ハ心易したいものじやがいやじや名にもはぢず人の金銀をだしてあげた女郎を盗或ハ客の歸つた跡へつけこミ仲の町でハ引づりこミゐろうむまいねすミをさんすの押つけよいぬす人になるであらう末たのもしひのといわれるが口をしくおもハヾ紋日もの日も此伊久のとをり人にいわれぬようにするがよいそれでもあきたらずハ身請して内えつれていねばこゝろいつぱいそりや誰でもなんともいふものハないそれハ出來まい〳〵夢にもミられまいそんなら男らしくさつぱり思ひきるがよいわいなんじや揚巻そのつらなんじやにらめるなんぼ九萬里に羽を伸すやうな顔してもきたないぞや人の錢金をあてにせずと年きでもいれてなぜりつばにあげとふさぬそれもできずばこれもよすがよさそうなものじや【あげ巻】伊久さんおめへさんハきれいな仕打をなんすそりや疫病の神で敵とやらでざんすなんぞといふと金〳〵と金で女郎がかわれるものと思ひなんすからどこへお出なんしても女郎衆にきらわれなんす【伊】それでかねのねへ助六をミるやうなものがすきか【揚】アイすきのきらいのとハはじめのうち瘡をなんす鼻つき欠をなんす口付までまたかへしやくをおこしなんすもいつそいきにおもいひすほ

どふよいゝしたおめへさんにおそわらずとはれて呼もしつていゝすが是にもわけのありいす事つまるところぬしの爲でざんす【伊】イヤゑらいものきやうといものへこんでいそうなところをまけぬれおいらんだけその氣性になをほれた助六を思ひ切此伊久に返事しやいやだといへば身請してもあわにやならぬ介六も伊久も同じ人間じや何にも差別はないはづだ【揚】硯のうみと鳴戸の海うみといふ字はひとつでも深ひと淺ひは客と色男色男がなければ女郎屋はやミマアおめへさんと助六さんをならべてみれば雪と墨くらやミでもたれもとりちかえるものはざんせん【伊】そんならどふでも【揚】アイいやでざんす【伊】むつとして　よもやにかゝつているうちは思ひきろうともおもつたがそうきつひ事をいわれては壹分一厘でもひかれぬ男の意地請出して嗅にする【揚】からだ斗はどうともなんし【伊】やかましい介六に鼻あかしてみせうと出行立かわつて下より若者どや〳〵と來り【早蕨】そう〳〵しひこんだしゆはどうするのだへおいらんにその棒のはしでもあたつたら二階はやミでざんせう【大勢】此子もいらざるうつちやつておきなおいらんそのやうにをちついておいでなさる事はござへせんそのどろぼう野郎を出しなせへし鼻をこすらねへけりやあなりやせん【揚】爰の坐しきにはそのような人はおりいせんたとへいゝしたつてもこなた衆に手ごめにされては人さんの上にたつ此揚卷仲の町へ顔がだされんせんよしや二階のつとめ

のされんせん其上ハわたくしが内所へいつてわるひ事があるなら呵るゝとも責らるゝとも覺悟のうへ棒勝木ざんまひよしておくんなんし

さすがおいらんの一言にたれも二の矢をつぐものなくしほ〳〵として下へ行そう〳〵介六をいだし

【揚】さぞせつのうざんしたろうかならずあんじなんすな指でもつけさせる事でハざんせん今に仲の町へおくつていきひす

と咄しのうちも行末を思ひやられしばしハかれとなる事かとわつと斗に泣しつむ

【介六】ヤレ聲がたかひ

○二　立　目

揚卷ハゆかりの人を隔てられ日ゝのつとめも身にしまづ病氣と下へ引さげられ音づれんとするものも内所の前をはゞかれバ獨淋しき閑皷鳥聲もふたてづ忍びなきいとゞいや增其人の事のミわするゝ非間もなく見えも欲氣もふりすてゝとりみだしたる奥住居

【お定】おいらんどうでござりますね　是ハまへかた此内のかゝへの女郎なりしが今ハ西河岸の女郎屋の女房となりしゆへ此間をバ本屋どうぜんに折ふし出いるなり　【揚】おさだ

さんどうなんした【定】わたしハとうでもいゝがおめえハ　なんだへ　其やうにしてゐてもつまるまひマァあのように全盛にしたおめへか男の事からとは云ひながら此やうなもめんものを着てもはづかしくもねへかへどふで主人とたてをついてかたれるといふでハなし出てつとめる氣なら内處へハわたしがいゝやうにあやまつてあげいせう【揚】そのやうにいつておくんなんすのをわるくハきゝいせんがどうもまたちつと出にくひわけがざんすからマァうつちやつておいておくんなんし【定】つがふづくの事かへ　【揚】ナニサそうした事でハざんせんが此うへなんのかのといつておくんなんしても聞入ぬときにハぜうのこわひものとおめへにまで腹をたゝせいすが氣のとくでざんす【定】おめへふてれバふてるほどなをにくしミがつよくなるぜ此間も内所でのはなしにハァ、女もワるひ了簡だなんぼおれとたてをついてくらがへをする氣でもあらうがおれも意地づくだながひ年季に飯をたかせてもそうハさせねへまだあれひとりくひつぶしくらゐで身代のつぶれる事もあるめへふてるならいつまでもふてさせるがいゝと云ひなんしたすれハいゝかけんに人のかれこれせわをするうちきゝなんすかいゝおめへなぞハ了簡次第でどんな所へもいかれるわなふんきりかワるひととんだ末にくろうをしいすよないゐんだといゝかげんに助さんとやらの事も思ひきるがいゝ【揚】おめえも素人かなんぞのやうに心ね

へ事をいゝなんす思ひきるのなんのとうハ氣らしい事でハざんせん此うへどのようなつらゐめにあつても覺悟のうへでざんすそれでなくつてこう引込でいられへすものか【定】思ひきらねへでもあわれめへがおめへ【揚】そんな事をいゝなんする今の喜のさんとハひと通りならぬわけでひとつになりなんしたじやあありひせんかへなんのかのとやかましひ事もありひしたを其時分子心なからも覺へていゝすそのとき思ひきれといわれたら思ひきんなんすかへ【定】おめへもどふいやあこふいふと人の思ふやうでもねへ人に口をきかせねへつもりばかりなんすハたしのハそれといふか緣かありひしたによつて添ておりいすおめえかたハかんじんの緣かねへじやァねへかへ【揚】いまわしひ其やうなとをいつておくんなんすな何か緣がごんせんへ【定】されハさ子供のときより恩になつたをおめへしりなんせんかへ恩を知ねバ犬猫もどうせんたとへひとつになつた所か主人の罰でどうであんのんにハそわれやせんまた長ひ年季の事なれば出るまでたてをつきとをされもしめへいつかおれすべなるめへそのながひうちには男といふものはうハ氣なものだから外へ心かうつるおめへたつてはじめのよふてはなくそのときになつてつまりひすめへ後悔なんすであらふと思つて氣のどくだ【揚】ちくせうとでもなんとでもおいゝなんすへハ男の心が替ふときをくゞらう事ならひとりでもほれる人ハざんせん介六さんか

心替りがしゐしたらどうするものでざんすのさ【定】おめへのよふに氣隨をいつて浮世かわたられるものかへのちにハ誰もかまいてがあるめへせうしだよ

とあきれきり內所へ行ほとなく爰へ來し人は若むらさきか親かた此家の內の身うちとてひさしく出入ル何か用ありそうに揚まきかそはへより

【新兵衛】コレおいらんそのやうににがい顏をする事ハねへ大かた手をかへ品をかへ異見にきたとも思ふがそふじやァねへハテものがたひ屋しきでさへあらわれゝハ命に及ぶをしりつゝほれ合も惡緣でいくらも有る殊にハ色の廓だものをほれたりほれられたりするたのしミがなくつてからだがどうつゝくものかとおれが口からこふいふハおかしひが掟をおきてゞたてせへすればあふめにミるのもひとつの祕事おいらんもかわいひ男のためで其やうに塞ている所へ何をいゝに來たとおもあふがおれが心ひとつですましていられぬもよく／＼な事なれハこそ相談にきたふせうしてきいてくんな外の事でもねへがおらが內の若むらさきのどうした事かぶら／＼煩ひいろ／＼醫者にも手をつくすかしるしもなくドノいしや衆も氣からおこつた病ゆへ氣をとりなをさねば藥のきゝめもうすひと斷半分ァノ氣さくものかきやミとはなんでも譯があろふと思つたとをりその病根といふハ介六さんにあえねへわかれをしてからおこつた事きけばこれま

であとない心でも介六さんをさわりなくよばうと思ひいやな客人も能つとめ氣がね心づかひもしたさうだにその思ひやりもなく內處へきてハ何かふづまりな客人の夜にいひなしむぜつかひに中をきいたハ野分がせうハ助六さんに惚ていれど不承知の意趣返しのわるだくミと手を廻してきいたればこそやう〳〵しれたといふものそれから心をつけて樣子を見るに病人のとりあつかひのじやけんさ煩ふときハ親のもとに居てさへ心ほそく思ふものあのやうにされてハ猶更やきもきと氣の晴る間もあるめへとさつそくとふさけほかのやさしるものをつけいろ〳〵氣を引立させれど此頃ハゆうれいじミどふでこつちのものとは思われぬモシ死たらさぞ迷てとおもひすごしがしられると 涙こぼす ア、どうかしやうもよふもあろふと思つても今じやあ介六さんとおめへの事も廓中でうき名をたてられたれ知らぬものもなければきつてもきれず切もせぬ中とハわきまへてるかなんにしても見殺にするが不便さ少しのうちきゝわけて助六さんのくるよふにしてくれればワかむらさきのためにハ何寄良藥と手まへ勝手をいふよふにさぞ心なく思ふがさうすればおめへのほうからおれて出るよふで內所の顏もたちまた介さんのためにもなるといふわけハ此ごろきけバ伊久がたのやつらが助六さんを目のかたきにつけまわすそうだあつたりといつては助さんがどのやうにはたらひても多勢にぶせいまたたゝかれるくらゐならいゝがど

ふいふことがあろうもしれず介さんも男の意地でひよつときつゝはつゝの命づくになるめへものでもねへそうすればあいてへにも見てへにも此世のわかれ助六さんなりおいらんなりおらが内のとも二三人のいのちにかゝるとおいらんの心ひとつで此なんもさけるといふもの爰のところをきゝ分てせへくれるなら一生も二せうも恩にきる若むらさきもよくなりおいらんも一旦伊久のほうへ出ればおのづとうらこもうすくなるそこぢやァわかむらさきへいさゐのわけをはなせばあれもはしこいやつゆへ恥入ろうしまたたとへきゝわけがわるくつて元のとをりにならふともりつぱにおいらんのほうへたちもどらせ跡〳〵はおれが引受男にかけてそわしてやる

とことをわけたる一言にこらへ〳〵したるなミだ一度にわつとなきいだし涙ながらに

【揚】まさかのときわとはじめから死を覺悟でほれるがいんぐわこふへだてられても心のうちは片時もおろか寸の間もきれよふとは思わねどおめへさんのお心根わかむらさきさんもぬしゆへに煩ふほどしたいなんすときゝいしては身につまされていとしうざんすまたわたくしが一旦はきれねば助六さんの身のうへにあやまちあるときくかられたとへこかれて死るともぬしのためならすこしのうち思ひきる事ならず共うはべばかりもわかれいせう【新】そんならきゝとゞけてくれるのか【揚】アイいつそ死だら此思ひはあるまいに名殘をおしまぬ事ならば死とふざ

んす〔新〕ァ、流石は三浦屋のおいらんよくきゝわけてくれたの
とたがいに心をくミやつてしばしなミだに時うつしやゝあつて
〔新〕そのかなしミをさせるのも三方四方の爲ながら思へばやつぱりおれが罪〔揚〕モシわた
しが胸のくるしさをさつしておくんなんし〔新〕ヲ、さつしているだんかうれしいぜかれこれ
とれいふものゝ二人りが中を引裂も〔揚〕ひきさかるゝも人の爲虚ならぬ僞も〔新〕しば
しのうちとしんぼうしな〔揚〕ハア、、、と泣

○三　立　目

櫻咲櫻の中を揚巻のしばししぼミし花の貞けふよりはまた返りざき花も位をます仲の町茶屋の
床几によりそへバ〔茶や夫婦〕おいらんおひさしふりでお心もちはようござりますかへ〔揚
巻〕アイまだとかく氣むづかしうざんす伊久さんはまたでざんすかへ〔女房〕なぜおそうござ
りますか〔揚〕おそいがよふさんす〔女房〕おいらんひさしひものさ一ッおあがりなされませ
んかへ〔揚〕よふざんしやうしかし今まであんまりふさきひすから一ッたべんしたが久しぶり
でざんすから伊久さんのきなんせんうちがよふざんす〔女房〕聟手へサアはやくしなよおいら

んハいつもの大きなこつぶがいゝよ【亭主】御病氣あけくあんまりあふきかろう【揚】よふざんす そう〳〵酒肴來る【女房】おかんをミてあげませうね トちよつと受てさす【揚】一ッおあがんなんしな【女房】マアおいらんおあんなせへまし【揚】そんなら ト此うち少し酒ごとあり【女ぼう】ヲヤおいらん共やうにあがつてはあたりませうぜしかしご酒でもあがらずはなりますめへよ此間京町のわけもくわしくうけたまハりましたがなるほどおいらんハ女郎衆の氏神てござります【揚】アノおとよさんがちよつとミなコレたそや助さんがきなんしたかはやくいつてミてきや ト禿の耳へ口をつけてそつといつてやる【たそや】そう〳〵かけ一行 ほとなくかへり お出なんしたと そつといふ【揚】伊久さんがお出なんしたらしらせておくんなんし【女房】今までお出なされませんからもふお出なさる事じやあござりません【揚】そんならもふひとつたべていきひせう ト受ほし跡ハ新造をのこし介六かきたりしちや屋へゆく【茶や夫婦】左様ならおいらんのちほど【揚】アイ といそきゆく 介六か茶屋女ぼう與右出【女ぼう】おいらんおめずらしひマァおあがりなされまし【揚】アイこゝがよふざんすと トゑんさきへこしをかける中ざしきの二まい折の間より介六出【介六】此ころハひさしく引込ているときひたか心もちハいゝかこゝの内でいふにやァたれにもあわせねへといふ事だからふミのつうろハならずうハさをきくのミそれにしてハはやく出勤したのそしてけふハ上の茶屋へ出ているといふことだが客ハ伊久だろう【揚】そうでござんす【介】少しきに持 呼びによこしたハなんの用だ【揚】おきゝなんしたとをり

おめえさんの事ゆへ内所とたてをつきふててミいしたがよく／＼あんじてミひしたが主人に奉
たわたしが身でざんすからまゝにもならずどふてたてをつひたところが行末がつまりひせんし
永ひものにはまかれろといゝすから人をたのんでわび事をして貰いやう／＼すんでけふから仲
の町へもでへした内處の譯がつひてミひすれば當分おめへさんと内證でのあひ引をしひしては
中へはいつた人さん内所へたいしてもすミひせんから此事をぬしに咄んせうと思て呼にあげん
したのさ【介】（くわつとせきこミ）なんと來てくれるなといふのかだへぶ醉たやうすだがそりやほんか本性
か【揚】ぎやう／＼しいなんざんすへいくらのミひしてもいふ事をまちがへるやうなあけまき
ではざんせん【介】てめえばかりはそういつてはすむめへぞよ【揚】ばからしひそれだつてど
うするものでざんすまゝならぬか浮世でざんすわな【介】（しばしたんまりにてくやしなミだをはら／＼とこぼし）ミんなのめへも
めんぼくねへァ、いふ根性のくさつた女ともしらずあいつにつながれてから人中で恥をかひた
はいくたびか腹のたつのもいく度か人めを忍ぶあやまりとこらへ／＼しは皆うぬゆへ今になつ
てよびにくひとはどこをまわせばそんなに替るからくりだ【揚】たとへ竹田近江とやらのから
くりでも糸がきれゝば此とをりでざんす【介】ヱ、おのれ伊久がゑりもとにつきをつたなそん
なきたないむさゐこんぜうであけまきもすさまじひ種蒔がきいてあきれるはうぬがやうなやつ

ハ田舍へでもいつて田の草をとりながら色事をするがそうわうだコ、ナすそつぱりめどうして
くれたら腹がいよふ（ときりノへしてくやしがる）【茶や】マア〳〵おしづかになされましおまへさんのごぐわひぶ
んがわるうござります【介】なんの外聞もとうぶんもいらぬとても恥をかくなら此上千万人の
まへでりつぱに恥をかいてなるほどそれじやあ腹もたとふと末〳〵まで（少し涙をこぼし）せめてハ多く
の人の口の端にかゝるがこの身のため【揚】ヱ、そんなら【介】やかましひおれがほり物もコ
レ此とをりけすからハおのれがうてのほりものも人手にかけずおれがけして（とたちかゝるをちやハうろたへいたきとめ）
【茶や】もし介さんこれにハわけのありそうなことまづ〳〵（トひきとゞめるあげまきハ目にもつ涙をしかくしぐつとへいきで）【揚】思ひ
きつたといふせうこに夕部けしてしまいひした【介】モウかんにんぶくろがやぶれた
とゆくをひきとめさゝへるまにうわべハ氣づよきあげまきも心くるしくやう〳〵とそこをは
づして茶屋がのきくるよりはや〳〵泣出す聲もろともにさしこむ積
【茶や大勢】おいらんへ〳〵揚卷さん〳〵（ト大らんちきの所へしんぞう）【早蕨】わたくしハこふであろうとぞ
んじひしたおいらんへ〳〵マアどらしたらようざんせう【茶や】はや〳〵硯箱のうへのひき出し
に百中丸があるからはや〳〵（ととりよせむりに口に入レ湯をつぎこむ）【茶や女ばう】揚卷さん〳〵（引）【揚】ウ、、
、ト（きがつく）【早】氣がつきひしたかえ【女房】はつきりと氣をおもちなされまし おいらん〳〵

【揚】ァイ【茶や】やれうれしや氣がつかしつたそうだ

○四　立　目

はや引すぎの人足ハ河岸へのミあつまり大町ひつそり門〳〵しまり折しもミゆる人かげハ手ぬぐひに面をかくしたま〳〵首尾に咄しするに高さは月の悋氣にて下にハ犬にとがめられあるかとすれば狐火のごとく消へ二階〳〵もひつそりと色と欲とに氣味わるき初會の客のあるのミ目覺しげき小便場の下駄の音ハふられて枕に闇くころ義理と爲とに揚まきハあかぬわかれにとりミだしわるひしあんにさたまらぬ心をそばよりひきたてられやう〳〵茶屋より歸りがけ【早厥】おいらんおめへも日頃のよふでもざんせんハかれきるといふではなしそのやうに正躰なく泣ミだれどうしておくんなんすへコレ喜介どんしつかりとさつせへな【喜介】ヱヽ此こハ人の事ばかりいつてこふかたにつかまつていさつしやるものどうされるものかおいらんのうちかけハおめへいゝよふにするがいゝ【早】すかねへ人だのう【喜】おめえにすかれねへでハこまつたものだ【女ぼう】なんだないさかるところじやァねへわな打かけハおれがいゝやうにするからころばせもうさぬやうに足もとをミていかつせへおいらんへちつとはつきりと氣をお付なさりま

しもふ木戸ぎわへまいりましたよ

こゝろならずもあまたのおいらんをいたわりつきそへゆくところへ今やかへるとまつ折から

てうちん目あてに【助六】マアあけまきか【揚】戀しき人のこへにはつきり 助六さんか【大ぜい】ソリヤ

ぬいたれ〳〵〳〵のこへに挑灯星のごとく棒雨のごとし

鐵棒がら〳〵〳〵〳〵

拍子木かち〳〵〳〵〳〵

廓の櫻　大尾

句ひ嚢

旨趣分傾城之虚實
詳論顕標客之智愚

旬裏

塩屋主人製行

自序

通者通之至也未其至謂之埜夫矣。捨灑史行于世。始有半可之名也。蓋猪牙之所通辻駕之所立。能知其道而不乗。纔無厭爲素見而勞足。作衣紋。以入大門。三遍廻而後吸烟草於葭簀張之茶店矣。嗚呼樂哉。是非其人識其意哉。雖然。若其欣々然畫三買之趣者。亦非其人不可識之矣。予力使後學知其味乃綴一小冊子爲懐之。名謂匂嚢矣。觀者止其晒落臭豈不幸哉。

辛酉孟陽

上巳相雙烟草盆
身憑床柱袿衣翻
總知初會雖何處
格別儼然新吉原

森多山人題

附言

一今世の洒落史を閲るにおすといふもざんすといふも皆〳〵吉原詞とのミ覺えて一樓に限りたる詞を知ず混雜す依て其杜撰を改め其詞を以て何某樓といふ叓を喩して馴染ハ同し客と客啌と實を晝夜の辨に分つ

匂ひ嚢

第一回

塩屋艶二著

酒不レ酔レ人人自酔　色不レ迷レ人　人自迷ととかく過るハ酒おほるゝハ色なりをのれ／＼か分際依報正報をはかるへし依報は金銀財寳にして正報ハ六根具足の體なれは過ぬほと飲おほれぬほどに遊ばゝ何の災かあらんしかれとも其加減の出來ぬか此道のならいなれバ只人ゝの身に相應したる所にて樂しミをなすべし譬バ酒も諸白の高直より濁醪の下直に至る色も松の位の高きより夜發のひくき草枕におよふそのたかひ有て其たかひなくおなし流れの身にしてかはす枕の數にかきりなけれハかそふるいとまさへ亦有へからす斯日夜に百人も千人も入替り立かはる客なれは毎／＼實を盡すへきいはれもなし又いつわり斗り言にてもなけれはいつしか壹人りの客を得てこれに身をまかすへし只客は情を專らにすへしなとか女郎も實を盡さすといふこと有べからす互に實情もとゝきしかして縁さへあれは目出度かるべし縁なくてハいか程心に如在なく

おもひ思われしなかも何となくそれなりに成行ものなりねかハくハ客も遊ひといふ文字をむねとし女郎も勤と言文字をおもひ斗りではつかしきことのなきよふにするをわけ知りとも粋ともいふへししかれとも其粋にならんにハ數の鳥居を越すしてハ成かたかるへしよく／＼すきさりしことをおしはかりて知るへし去年よりハことし今年よりハ又來年と段／＼さきへ行て見るにしたがひ跡に成し事ハ皆ばからしき事のミにて今ならあのよふなことハせぬものをなど〻後悔先にた〻すもよふ／＼おもひあたるなりしかるになんぞやよき客の往來する駕籠賃程も金を遣ふた事もなくてほんの聞とり文言にて傾城の虚實を論しあるハ金をころして遣ふのいかしてつかふのといふハ片腹いたきことならすやわすかの金をいかして遣ハんよりハ世けんへもすべよくたくさんに金をころして遣ふこそよけれかへつて生かしたと思ふ金ハいきすしてころして遣ひしたくさんな金ハ生るもの也是等の所へ心をつくすべし先それハ扨おき爰に軒を並べし娼家の中に廓中の一二をあらそふ一樓あり誠に遊客のたゆる間なく出入する茶屋が提灯ハ櫛の齒を挽かごとく二階のさわき臺所のいそがしさなか／＼いふもさらなりもはや夜もひけ過と見へべん／＼たる藝者の三味せんも箱におさまり御きげんよふといゝ捨したいこ持ハどん／＼として階子を下りかくて坐敷ハそれ／＼に床おさまりて後 客ハ【太郎吉】一座ありて元なしミ女郎ハ【総山】ざしきへはいりながら【山】コレサ／＼

三次どん早くあつちらへいつてくだせヱよ「廻し方 三治」アイトかしこまりました「山」まだお休ミなんせんかへ「太」なんだ客人でも來たのか「山」アイサ今じぶんに成てまいりいしたハな「太」氣のきいた化物ハモゥひつこむぜヱ馴染か「山」イ、ヱうらざんすハ「太」ア、今夜ハ大きに飲すぎたわへ「山」サァお休なんせんかへ「太」まだ空歌さんの所へいつてこねヱけりやァならねヱ「山」およしなんしな「太」いんにやちつと用が有からよ「山」なんざんすなおよしなんしといゝすにそれともほれでもなんしたのかへそんならどふともなんし「太」何の事だおもしろくもねヱ「山」アイサかんなんしおもしろくなしともよふざんすハ「太」きついいきすぎさドレいきませうか「山」アレサおよしなんしそれだからぬしにハゆだんなんすなとミんながいゝすハ「太」だがそんなことをいつた「山」だれでも二階中でいゝすものを（次の間に居たる新造久鶴）「鶴」モシイぬしじやァ空歌さんにいつそほれて御出なんすつさゆだんをなんすなへ「山」それごゝふじいし「太」やかましい人の氣も付もしねへことをいふぜヱ「鶴」かんなんしおいらんのとこじやァ氣がおつきなんせんから「山」おいゝなんす程わるふざんすからだまつてお出なんし「太」それだと言つてだまつてばかりゐられるものかなんのかのと言つてどこへも出ることハならねへのかせめて八さんの所へでもいつてこよふ「山」それほどお出なんしたくハおいでなんしな

〔太〕なぜ八さんの所へ行がわるいか〔山〕イヽエどうともなんし〔太〕ゆかねへでどうするものか〔山〕サアお出なんし〳〵〔太〕ずいぶん行のさ〔竈〕おいらんお出しなんすなへいゝ虫ざんすねヱ〔山〕何出しいすものざんすか〔太〕是さそんなにすると着物がやぶれるわな〔山〕やぶれでもよふざんす〔太〕ニモサひつこいとくらわせるよ〔山〕サアおぶちなんしわたくしがからだハどうでぬしにまかせたものざんすからどふともなんし〔太〕モウどこへも出ハしねへからこゝをはなしねへわるい酒だよ〔山〕アイサわたくしハさか酒らんざんすかんなんし〔太〕アレマア聞ねへとこでか聲色を遣ふよふだ〔山〕きかすともよふさんす〔太〕マア聞かせてくんねヱな（折ふし向あたりの二かいにて）〽人目しのふの草葉にむすぶ（トうた有こ澤村宗十郎）〽三味せんハ藝者のたませい。ちかいをたてし五大力。筆をくわへて三五大切。あまつさへ打やぶつたハアなんとしようことがない。妓女に戀なしたからをもつて戀とすると遊里のおんなハ。皆あゝしたものだハ。彌介はきものをミてくれ（トつかいおわる）〔太〕アレあの文句のとふりだすべて藝者でも女郎でもほんに戀も情もしらねヱ皆ゑり元へばかり付ものだと思へばあんまり間違ハねヱのふ〔山〕そんな事ハぞんじいせん〔太〕なんぼうそをつくのか商賣でもあんまり客をたましなさんなよ〔山〕いつうそをつきいしたへ〔太〕コレサまたそんな事をするよモウあやまつた〔山〕そんならかん

にんしてあげいすから空歌さんの所へ是からおいでなんすなへ【太】ゥ、サゆかねヱよそれだけれどもぜんてへ何をしても浮氣でしてゐることならかまふことはねへじやァねヱか【山】何いゝものざんすかそんならまだなんす氣ざんすねよふざんす〳〵【太】よしかうそだよ〳〵【山】イ、ヱくそしてマァわたくしがしりゐすまいと思ひなんして此間もどこへかお出なんしたね【太】とんだことだだれぞにだまされたのだろうおいらはねつからおほへもねへもの【山】それだけにくふざんすはこつちをはやくお歸りなんした時に京町の方へお出なんしたろうがへ何屋へお出なんしたおいゝなんし【太】こつちは夢にもみた事がねヱやつさ【山】それまだおかくしなんすはおいでなんせんものを人がお出なんしたといゝすものざんすか見たものが有いすものを【太】ヨゥうそをつくぜヱ【山】そんならまた人をつれてまいりいすがよふざんすか【太】それはまた時によつたら付合に行めヱものでもねへわな【山】それごろふじいしお出なんしたろふがへ【太】付合ならしかたがねヱわな【山】ヨヤおかしいねヱ付合にひとりでお出なんすかへしようじきにおいゝなんしだが所へお出なんしたか【太】たが所でもいゝそれよりもあつちの客にはらでも立せねへよふに行てくるがいゝ【山】行すともよふざんす【太】そんなつまらねヱことばかり言ツて居るからいかねヱ客といふものはそふした物じやァねヱわな【山】そしてど

ふしたものざんすへ〔太〕初の時にハよくして遣たろふわさそれだからきたといふものしやァねへかそんなら今夜も一寸でも顔を出して遣るがいゝじやァねェか〔山〕フゥきついせわやきざんすねェいやざんすからまいりいせん〔太〕そんなにてめェのほれた客ばかりくるものかなそんなことを言ずとはやく顔を出してくるがいゝ〔山〕そのよふにじやまになんすならどこへでもいきいしやう〔太〕邪魔じやァねへがゆくがいゝ〔山〕へェよかつたねだがいきいすものざんすか〔太〕そんなばかなやつにハかまわれねェ〔山〕おかまいなんせんでもよふざんすのさ〔太〕ァ、寐よふ〳〵〔山〕何寐かしいすものかこつちをおむきなんし〔太〕いやだといへばよさねへか〔山〕何よしいすものかいくらでも腹をおたちなんしへ〔太〕ァ、モウうるさいわな〔山〕なぜうるさくされるよふなことをなんす〔太〕ィ、ヨ何もかもいられねへ寐ねへけれりァならねェ〔山〕一トばんばかり寐なんせんでもよふざんす〔太〕なんのことだなおもしろくもねェ人の氣もしらねへで〔山〕そりやァぬしの事ざんしやう〔太〕どうでもいゝからねかしてくんねェ〔山〕なりいせん〳〵〔太〕コレサ〳〵よさねへかな〔山〕そんならどうともなんし

折から次の間にて新造二人にてかわる〳〵二上りのいたこを爪のさきにてひく　〽おもわれてこそ思ひもせうに合おもわれもせで思ふ身ハァ〔山〕モシイ一寸こつちをおむきなんしな〔太〕ゥ、ウ、いゝよ〔山〕いゝじやァおざんしねェモシ

イ〳〵【太】ゥ、ゥ、【山】ほんに寐なんすかへアレサモウヌいた子へまゆげかくして鏡にむかひ合ぬしの女房にやふけたかへ引【駒山】うらやましいねェ【巻】ドレわたくしか心いきを聞ておくんなんしへまゝになるなら何しにぬしを合人にだき寐させはせぬ引【山】モシイ久靏さん一寸きておくんなんしなへ【靏】なんざんすト来る【山】そつちのふとんを出しておくんなんしいつそじやまになんすから出てねェす【靏】よふざんすはなむりにこつちをおむかせなんしな太郎さんほんにこつちをむいておよりいしなモシイ〳〵【太】ゥ、ヨあれさやかましい【靏】どうなんしたのたねェ【山】そしてね耳をおかしなんしアノ子ト何かしはらくさゝやく【山】氣をつけておくんなんしへそんなもお寐かしなんしなへ【靏】そんならそうしておきいせうねト泣て行

評ニ曰是等の客はゆきすきたるといふへしされ共一チ座に大勢なじみも有故に女郎も惚たる顔にておもしろおかしくするならんしかるを我ほれられしと思ひ折にふれてはじやけんなることなどしてミたがるもの也又名代の客の有ことなどを知りてちとあちらの客の方へも行ガよいぞといへともまさかさきの客の方へ行れて見ると共跡にては座敷の新造をよび彼客の年かつこうをきゝたがるへし然れどもをのれ斗りをよき男と思ふゆへかへつて外に色男の来りしをも一向氣のつかぬもの也彼新造久靏をよびし時何事をきゝやきしぞ次の段を見よ

其二

失レ之者立レ後得レ之者立レ前無羽能飛無レ足能行と二挺立の猪牙舟ハ手をうごかさすして大桟橋につき三枚肩の四ッ手駕籠ハ足を労せすして大門口にいたるかくのごとく自由自在をなすも皆金銀にして其人にあらず「業平もおよはぬかねの男ぶりとハ裸虫のまけおしみにして薄情なるをいやしめたるはり込なれど兎角遊びハ有うちが花なくなりてハとんと面白くなきもの也しかれば金程大切なるものハ有べからずよくもふけよく遣ふことをしるべし世界のたからを持くさらしてふゆるばかりを楽しみとするもたわけの沙汰またしめくゝりもなく遣ふのハ馬鹿もの共いわんかそれハ扨おき名代の床にひとり寐て居たりし客「次郎吉」へ坐敷の客の帰りしと新造があんないにてともにさしきへ来たりけるに客山ハよく寐入し様子ゆへそら寐入とハ知りながらおなじ夜着のうちへ這入うしろ合せに寐るまてねいりしと思ひしにもはや茶屋からむかひの声として屏風の外にてわかいもの「傳蔵」チト お目をおさましなされまし次郎さん／＼「次」ヲイ／＼ア、今朝もよつほどおそいじやァねへかのなんだかよく寐た／＼「傳」とうで今日ハおながしで御さりませうと存じましておそくあがりました親方もそう申ておりました「次」帰るにハおそしるるにハ天氣がよしどした物だらう「傳」よう御さりますハな「次」御推量のとうりにしませうかへ「傳」さやうさモシ おいらんへちつとおひ

んなりませんか【山】ヲヤだれだ傳藏どんか【傳】先(さき)からたいていおゝこし申た事では御ざりません【山】アレサかんにんしてくだせヱト（云ながらおきて次の間へいたり）卷人(まき)さん〳〵（ト新造をおこし夫より何れへか行）【傳】（小聲にて）夕べもなんぞござりましたかへおいらんでは何かおかしいようでござりますね【次】ゐんにやなにもしやァしねへが太郎がきてゐたのでおれがほうへ顔を出さなんだものだから歸つた所でこゝへきて寐た所が共言譯(いゝわけ)がなさに寐入たふりで今おこされるまでものいわずにあれもねてしまつたのよ【傳】あれはわたくしがすいりやう致しますに吉さんや元さんはおまいさんもお近付だに共お連で太郎さんも久しいおなじみで御ざりますからぜんたいおまいさんをよばしつてはおいらんもあんまりよく御ざりませんのさ【次】さればさそこだわなよくねへことを知つて二度でも三度でもよんだからおれもどうぞして見ようと思つたのが初まりよ【傳】さようさはたくしもそふはぞんじます【次】しかしながら坐敷のものゝつきのわるいのを見れば何でも此頃ではあつちの手合がさしがねを入たにはちがいはねヱ【傳】さようでござりませうおまいさんをよばつしやらねへようにといつておいらんを義理(り)づめにしていろ〳〵なことをいわつしやるかたがござりますと言ことをちらりとうけたまわりました【次】だれに聞た【傳】だれでもそれはおまいさんがわたくしにわ御めをおかけなすつてくださる事が知れておりますからめつた

な人ハ中ません［次］はてな時になんそこしらへて來てくれねへか［傳］左樣なら何ぞおざいになるものにいたしませう［次］そうさ五月汁(しる)にでもしやうか［傳］ミつくろつて致してまいりませう［次］はやいがいゝぜ［傳］さやうなら參つてさんじませう　（是より次の間の新造皆〻おきてこそこらかた付てんでに坐敷を出て行禿へらかひ茶わんに水よふしはミかき持きたりうかひもおわりてよりしはらくのうちかふろ一人にて火をおこしてある所へ茶屋もち女房［哥かた］きたり）［哥］おいらんのとこしやァどこへいかしつた［禿］今湯(ゆ)ざいます［哥］（小座敷にて）客人がいさつしやるか［禿］アイ次郎さんざいます［哥］ほんにかキシイよくお出なんすね［次］哥かたさんか［哥］とふなんしたへ［次］マァすわつて一ツふくのミなセェなコレいつ次か火を入レてくりやよ［禿］アイ（ト火を入持來る）［哥］いつのまにおいでなんしたへ［次］夕ァおそかつたからすぐに寐てしまつたのさ又るてミんなの御じやまをするのさ［哥］又にくい事をおいゝなんすおよしなんしなへ［次］にくいといわれて氣が付たが此(ころ)でハミんながかミがるよふな心持がするよ夕ァもきいてくんなセェ折ふし久靍さんがミまつてくれたばかり外にだれでも顏もだしてくれねェハな［哥］夫じやァやまさんがわるいよふざんすけれどそうばかりでもおざんすまいそれにハ坐敷をあけにくいこともおざんしたらふわな［次］何さ夕ァはかりの事じやァねェわな［哥］そふおいゝなんすけれ共ぬしもワたくしとハ心やすくもなんすものざんすからおまいさんをわるくても思つておいてなんすくらいならワたく

しにもしれいすわなマア氣ながになんし共中(うち)ニハぬしのおたちなんせんよふなこともおざんすめェと思ひゝす【次】おめェハそんな世事のいゝ事斗りいふけれどもそうじやァあるめェと思われるハな何もたつのつぶれるのと道公(みちこう)がどこのか人を上手でおぶつた時のよふなことをいふ事もねェけれどもマアつふれがつてだらふとおもへバごうはらだハな【哥】コレサモシ道(みち)さんことをいつてハそんなが笑(わらひ)いすといつそ腹(はら)をたちいすに【次】こんな事を言つてまたにくがられるものだ【哥】それだからおよしなんし【次】ホンニおめェがたも寄やつてハおいらか事をいろ／＼にいふだらふのふ【哥】アイいゝすのさなせお出なんせんかおいでなんせばいゝにとうわさ斗いつていゝすハ【次】うそをつきねへさぞわるくいふだらふ【哥】きついわるずいざんすねェよしやわるくいふ人が有いしても十人のうちにハ五人ハまたよくいゝすハな【次】よくいふ人があつたなら取持(とりもち)ッてくんなせへ【哥】なんとへもふ一ッへんおいゝなんしどういたしいすかしかしとりもつてあげいせうかへ【次】どうぞ取もつてくんなゝ【哥】だれに致しいせう【次】だれでもかまハねへが心たてのいゝおめェによく似た人がいゝ【哥】また／＼人をうれしがらセておなぶんなんすなへモシイ湯へはいつてまいりせうねェ【次】マアいゝわな【哥】じきにはいつて參りますコレヨ久靏さんや巻人さんハどうなんしたのだよんで來やな【禿】久靏さんじ

やァしやくがおこつてねてござゐます【哥】はやくきて來やよ後程お目にかゝりやしやうね
【次】そんならおまんまをたべにきなせェよ【哥】アイサまいりいすからなんぞ取ておいてお
くんなんしへ ト出て行あとへ【巻】三次どんよさつせへ【三】何をしたな【巻】しつたかはやく床を取
直してくだせェよゥト いゝながら座敷へはいる 【巻】いつ次どうおいらんのとこではつしやるからはやく
いきやよ 【禿】アイ ト行【三】次郎さんちつとごめんなさりましは きだしてきれいに致しま
せう【次】ヲイ〱【三】かた付て一ッけんまいりませうかね【次】よかろふ〱【三】さよう
ならごめんなさりまし ト寝床をそこらをはき出し又元のごとく床を取り【三】サアよふこざります【次】三次とんャ一ッふく呑
なゝ【三】ハイ〱モシマア夕ァあれからおきゝなすつて下さりまし ト囃しの折からう下にて【禿】三次どゥ〱
トセわしなくよふ【三】ヲイ〱せわしねェお囃しも出來ねェマアいつてさんしませう ト出て行 かくて總山ハ湯よりあかり禿にゆか
たをもたせさしきへきたる【山】何かを出しておくんなんしへ【巻】出して有ます 是より身仕度にかゝるほとなく仲居ハ盃の出しもの膳などを持きたりてたん〱
坐敷へ並べる【巻】モシイ次郎さんおまんまをおあんなんせんかへ【次】おれか今なんぞもつてきて
からくわふ【山】お茶ハ出來てるゝすかへ【禿】アイ今出來ます ト此内にかほも直ししめふ所へ茶やのトかいものおくり物を持來る
【傳】大きにおそなわりましたおいらんたいぶおつかれなすつたよふでござります夕ァ氣とや
らてハこさりませんか【山】しやれいすにこれさ傳ぞうとんお筆しやァあるめいし【傳】そん

な事ハぞんじません〔巻〕フウいゝしらねヱふりで〔山〕それだが傳藏どんハたのもしい人だよ〔次〕マアひやうばんのいゝ方だぜヱ傳藏どん〔傳〕其はつでござります私ハなんにもそんじませんものサア皆あちらへおはいりなすつてごぜんになさりませんか〔山〕おあんなんすなら茶漬ちやわんと箸箱(はしばこ)をおだしなんし巻人さん〔傳〕おいらんもごいつ所にあがりませんか〔山〕まだ塩だちのうちだハ〔傳〕おいらんにくじきでハこざりませんか子〔山〕あんな事をいゝすにばかや〔傳〕アハヽヽそんなら御酒になさりませんか〔巻〕傳藏どんもつてあけ申しくたゝへよ〔次〕すぐに茶をかけてくんな〔山〕まき人さん傳藏どんについでやつておくんなんし〔巻〕どれださつせヱ〔傳〕朝からそんなにたへられるものでござりますかと（是より酒食事にてしはらく時うつる）〔次〕大きに腹がはつてきた〔傳〕私ハ喰たり飲たりてよいました〔山〕何またあかくもならねヱもの〔次〕櫻色だ〔巻〕とんたいゝよ〔傳〕さよふかねおゐらんもお髪てもなすつてうつくしくおなんなさりまし〔山〕ナニ髪ハいわねへてもうつくしいからいゝのさ〔次〕とこのか人かよくそんなことをいふぜヱ〔山〕アイザ色男の口くせハうつるものさんすハ〔傳〕左やうなら私とものロくせをもとこぞて致ませうねヱ巻人さん〔巻〕アハヽアおかしい〔傳〕それたといつて〔巻〕ねつからにあわねヱ〔山〕よしか傳そうどんハいゝ男だもの〔傳〕さよふさね

〔巻〕ァハヽ、ミつともねェしかしいゝ〔傳〕よくいろ〳〵なことをおつしやるね　〔巻〕鏡を見さつせへよゥ　トらう下へにげゆく共跡へ空琴か禿來たり　〔禿〕ァノ子只今あつちへ人をやりますからァノ子〔次〕一寸とお出なさいましたらう〔禿〕ァイ〔山〕そしての今にまいりいすつてよ〔禿〕ァイ　ト出行
〔山〕いつ次やさつきそういつておるたものを丁子やへいつて取て來ての空琴さんの所へやつておるてくりやよ〔禿〕ァイ　ト是も出行　〔山〕早くよ傳蔵どんはなして居さつせへよいつてくるから〔傳〕私もいつてさんじませう〔次〕それじやァおれひとりになるの〔山〕傳ぞうどんはなしてゐさつせェな歸るときかねェよと　いひながら出て行　〔次〕コゥ歸るか〔傳〕ハイうちをかた付て又さんじませう〔次〕そんならおすがかおふくかそのうちとのおいかやおこよをつれて來てくださェ〔傳〕かしこまりましたさよふならちつとおさむしうござりませうがそれまでおよりまし〔次〕どれそんなら寐ころんで待ませう〔傳〕ハイさよふなら　ト歸る跡へ入替て新造二三人來る　〔巻〕けふハどふしたのかいつそじれつてへ口だのふ〔駒山〕きれたあくる日ハそふした物さんすつさ〔巻〕よしておくんなしなへ〔空菊〕泉なきたして　いつそよろこびがらすがなきるすハ　〔巻〕ばんに來なんすとかへ〔きく〕聞ておくんなんし夕ァもこういゝすハなあの手めへおれにほれてゐるならなんぞしやうこを見せろといゝすのさそれからね何ほれてゐすものざんすかといゝしたならそんな

ことをいふと是から來てやらねヱがないて又人たのミをするなといゝすわな【駒】きつい塩屋さんすねヱ【きく】それだがあんなやさしい人ハおざんすめヱとおもいゝす【巻】其はづさほれておいでなんすもの【駒】けふハいつかざんすねヱ【き〻】たしか十日ざんすハ【駒】ほんにかへ一寸とかんざしをおかしなんし（トかんざしのさきをちよいとなめ疊さんをおき疊の目をかぞへて鼠なきをし）【駒】嬉しいのふ【巻】ドレおかしなんし（ト又おいてミて空きく疊の目をかぞへ）【きく】きいす〳〵【巻】アレ來てハわるいのざんすモウ一ツへんミておくんなんし（ト客のうわさをしてゐる所へ慾山きたり）【山】何をしておいでなんすへはやくおしまいなんしなトい、捨屏風の中へはいり ちつとごめんなんしへねいすから【次】あんまり寐るのもどくだによ【山】色男で夕ア寐ヱせんからねむふざんすもの【次】そんなら勝手にねなせへ【山】おめへさんもおよりいしな【次】夕アからねどふしだからねむくもねヱのさこんど夢のあつらへでもあつた時寐やせう【山】それハそふとこふしておいでなんしてもおもしろくざんすめヱねへ【次】何も客の苦界だと思へばやつはりおもしろいのさ【山】ほんになんとおもつて來てくんなんすかしれいせんがいつそお氣の毒ざんすハ【次】いやな所でよくされるより氣にむいた所でわるくされるほうがいゝものよ【山】マアそんなことハおよしなんしてほんとうにねぬしがお出なんしてハね【次】わるいことでもあるめへ【山】そんながいろ〳〵なことをいゝすからね【次】きてくれるなと

いふことか【山】ィ、ェサそうでもおざんせんのさ【次】よもや人のいふをぐらいでとやかふといふようなおめェでもあるまいしそしてどふしたのだな【山】何ともなく是からたゞ心やすくして來ておくんなんせんかへ【次】ゥ、そんならさつはりいやらしいこともなく新造かいにでもなれといふのか【山】おもしろくもおあんなんすめェけれ共【次】それで文句ハわかつてしまつたがなせ新造かいになつてくれろだかそこの所かどうもわからねェそれともおれかミれんゆへわからねェのかもしれねェ何だかおつな氣になつて來たわへなんにしてもけふハ今から歸りませう【山】そんなに今お歸りなんしといゝすのじやァおざんしねェマァお待なんしなへ【次】すいぶんまちらもせうか【山】マァよふざんすハな【次】よくねェいまにおこよだのおふくだのと來たじぶんにふさいでゐてハよくもあるめェ【山】そんならげいしやをやめておやんなんしな今迄ゐんかあれバ來てゝおくんなんしたしやァおさんしねェかへとてものことにもちつとゐておくんなんしなへ【次】ちつとやそつと居た所かはてしハつかすしらけて見てハおもしろくねェわなおれか氣にもなつてくんねェ【山】それハぬしはかりてもおさんすめェ【次】なんだと【山】モシあのね義理といふものハとうしたものざんしやうねェ【次】おつなことをきくの【山】義理がなくハと思いゝすこともおさんすからさ【次】どうした義理かしらェねが義理も人目もか

まわねェよふになつてはむつかしいなるなら義理をば義理とたてなせェ【山】わたくしはすてゝミよふかとも思いゝす【次】それはよくねェによといけんらしいことをいつて氣にさわつたらかんにしなセェドレ歸るしたくでもしませう【山】アレサモシいろ〳〵なことをいふよふさんすかねこうしておくんなんセんかへ【次】なんたとうするのたナ【山】アノ子けふはマア晩迄お出なんしなへちつと用もおさんすから【次】モゥ此廓へはゐるまいとおもひ定めて歸らふといふ所へおかしなことをいつてまよはせるつもりたらふがそれしやァあんまりなじみがいがねェといふものたこつちにもいゝてへことが山ほとあるけれと心で濟して口へは出さねェによ【山】お恨ミなんすもむりとは思いゝせんじつはといへばさしになるのをがつてんておよび申いしたかわるいのさんすからかんにんしておくんなんし【次】夫ほとわけをもしつてゐてすまねェことがあれはこそ來てはわるいといふしやァねへか子夫に又にへきらねェことをいつて人に心をのこさせるはおわるからふ此後ゐんかあつたならとこそておふめへものでもねへから共時にはものでもいつてくんなセェ【山】そんなにおいゝなんす程とうも此儘ては【次】かへされねェとてもいふことかへ【山】とふしたならよふさんしやうねェ【次】とうもこふもいるものか【山】そんならやつはり今迄のとふりに來ておくんなんしてはへ【次】ェ、かなんだと【山】私もりやう

けんかおさんすから【次】おめヱほん氣かこれさ返事をしなせへな【山】かんにんしておくんなんしへ【次】りやうけんかあつていふなら其了簡をいゝなせヱ【山】とんなことてもいたしいセう【次】こゝて指を切レとかほりものをしろとかいへといふことだらふかそんなことハいわねヱハな【山】そういふ心ていゝしたのてもおさんセんか今までワたくしかいたしよふもわるふおさんしたものざんすからとんな事てもいたしいセうと思ひゝしてのことさんす【次】そんならいよ〳〵其了けんか【山】とふても主の氣におすミなんすようにセうからかんにんしておくんなんしな【次】あんまり早くおれるのもうすつへらなよふたけれ共そんならもふいふめヱ【山】ほんにそうしておくんなんすかへ【次】そのかわりにハ今迄とハちがうによ【山】なんとてもおいゝなんし【次】やつぱり苦勞をもとめるやうな物だ【山】何もおいゝなんセづに今迄いゝしたことハほんにモウかんなんしへ【次】こんなはなしを人にきかせたなら外のことにハ氣がみじかいが遊ひにかゝつてハ氣がながいと思ふだらふよく〳〵思ひまわす程女郎買といふものハ馬鹿にならにやァ出來ねヱものだ【山】マァおびをおときなんしなへ

評ニ曰是等の客ハ引過ずしておとなしく女郎も初めから惚たる顏ハ見せねとも客ぶりもよければハ二階中の評判にて外の客にセかれよんところなくつき出さねハならぬ譯なぞも出來るも

の也されとも心殘りて詞のにこり有ものなれハそこの所を取なをしふたゝひ逢て心を盡され行末たのもしきかたらいもなるへし彼戀山か帯をとかせし後ハ何事をかセしそ後の篇を見よ

句囊畢

沈翼荣

藝者 竹八十
若者
茶屋
市屋 番随長兵衛
比翼紫
白井権八

自序

遠海の京魚も。此濱に來て。碑を洲先の。ちよんはなに遺。是通ふこと。繁か故也。此地の產れ。簀をはなれ。青樓をしたふて。淺艸にその名高し。されバ比翼の先生。萬迫時ならぬ權八も花街に遊んて。目黑のすゝつこに。舊跡を殘す。なんそ是非あらんや。チト大壯なるが。嗚呼天なる乎。予モ淫女の中に遊んて。なんさんすの當器をたゝき。質屋の水に目をあらふ而已

於宇田樂庵

ココロノ

嬉九迹

于時寛政辛春

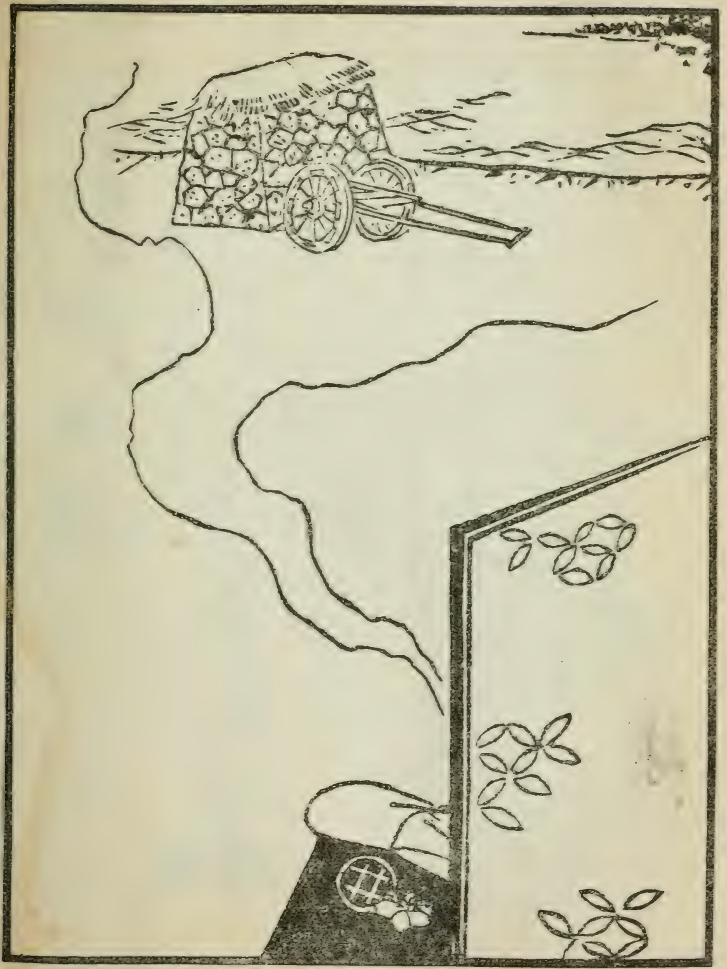
パツカリ開酉のとし

假廓南渚比翼紫

総目

第一回　駕かきの喧嘩でこゝろやすくなる江戸子の長兵衛
第二回　見通しれ丁よりまさる假宅のせかひ
第三回　戀ゆへにむねをいたむる介市かこゝろ
附り　介のしんきいたふうにておいらんにきらるゝ事
第四回　浮氣にて始じうをしらぬけひせいの癖
第五回　權八が邪けんに惚る小むらさきか惡緣
附り　夢さめてひとりてしやれる南國の二かひ

以上五編



比翼紫

四

假廓南渚 比翼紫

第一回

宇田樂庵著

古哥に曰く、日本橋からおつゝら馬て、あだな品川通らんすとハ、かきの本ハ人惡公の、詠おかれしも宜哉、そも此品川といつぱ、その昔去大守、此宿に御小やすミありける時、品かたちなまめきたる、女有けれハ、大守近臣を召れ問せられ給ふハ、かく女房たちの、あまた有けるハ、いかなるゆへやらん、臣また家の主にとふ、主こたへて、是ハ憂川竹の、流の身なる、傀儡にて候と答大守此よしを聞せられ、たハむれに仰られ給ひしハ、かく品よき川竹のあまた有けるゆへは、今より此地を品川と、となふへしと、仰られ給ひしより、今にいたりて地名となる（このとき大守心のうちにて品川さきの人をまつハとふだとぢぐり給ふ）それ宿のにぎハひハ、のほる國主あれバ、くだりのひきやく荷あり、嶋金澤の遊客あれバ、嶋のぬのこで付のぼせあり、ハる止されての居つゝけあれハ、しやうことなしの人質ありふられて通ふ、ふうたきい、かゝれて通ふ、お國猿も、みなおもひお

もひのたび枕、げにかた田舎(いなか)の人たちハ、こりやァはァけェナこんだと、目をおどろかすも、ことわりなり　こゝにさめずのほうよりかご一てうきたり　くわんおんまへのうへきやのまゑへおろす　【かご】旦な、まへりやした　トかごのうしろからふじ　くらぞうりを出しなをす

【客權八】　としハまだ十七八ちとにがみばしつだいゝぶんなきいろ若しゆなりハうすかきぢよんのかつぱくろらしやのゑりもつとも　見かへしハくろひらうど外ハみなともせうぞくなるへし金ものハごいろのいなつまひもハくろの二分さなだもつともすこし長き方うハ着ハねづミかへしのちりめんの小へんけい下着ハなんぶじまじゆばんハちりめんのまゑしぼり尤もくろ小子のはんへりおびハはかたのかわりおり銀こしらへのちよいとしたわきさしと竹やのせいひつのたばこ入と丁子ちやちりめんのながづゝをいつしよにさげにしたるを手にもちおいとかごよ　りいてすぐに茶やへあがり　ヲイあねさんや　【茶や女】　みなく上　てうしにて　おはよふござりました　トあひさつする女茶　とたばこほんをいつしよにも　つてくる　【權】カゥなにがありやす【女】ハイかれいと、くろだひがござります【權】そいつァ江戸めへだらう、いワずとむだゝが、そのかれいを、につけてなんぞ、ちよつひら、吸(すう)よふにはやく、こせへてくんぬへ【女】ハイかしこまりました、と行【かご】旦な、まだお早うござります【權】ヲイ　ト一本た　してやり　マァ一ッのんでいかつせへ【かご】モシ旦なこりやァちと、おまちがいでござりやせう【權】なぜ【かご】ハテ常でも四百や五百カァおもらひ申やす、そしてわつちらもおいそぎだからごうきと、ほねをおりやしたナァ棒組(ぼうぐみ)モシ旦那もふ一本下さりやしな【權】ハテ川ばたから、三百でのつて、酒ハてめへたちの、いふ通りにするし、何もいゝぶんハあるめへじやァねへか【かご】ハテそうおつしやりやすな、酒ハとこの、どなたさまでも、お定(さだま)りいたゝきやさァ、それじやァちつと、ごむりでこせへやしよう【權】　このわかしゆいつたひじ　ひやうのかんしやくもち

ゆへこのことばにくつとして なんだと、是ェ、むりたァなんのこつだこいつらァ、くもに問屋場の札がなけりやァ立場なしに、しやへり通すがわるく、あこたをたゝきやァがると、うぬらが息杖をぶつとめてくれるぞ【かご】二人共よつてハいるしわかしゆゆへちとあまくミて これェ此若しやァいゝかと、思つて、とほうのとてつもねへごたくせんを申上ヶたな、コレエ コレエ うなァおいらヲだれだと、おもふェ東海道、五十三次を、きん玉のあいたへおつぱさんで、ふじの山のつき山に、近江の湖の泉水、大井川をどぶつ川と、おもつている、むらさきの雲介さまだぞ、なァんのこつたェおきやァがれ、大もりの茶漬じやァねへが、あんまりやすくしやァがんな、生靈さまの、なすをミたやうな、なまつちらけたつらァしてちうの字も、すさましひ【棒組】だまれェ〳〵コゥ、よく物をつもつてミや、なんのこつた、又今時分、ほねを折て、あたりめへでかつひで、つまるものか ト兩人たかひにいひつのり かこかき共ハとつてハ居るしごん八かむなくらをとらんとするをごん八その手を取て向へなけ出し【權】何を己 ト身かまへすれバ一人のかこかきこれにおそれてたちよらずそのうち茶やのおとこ共たちいでりやうほうをなだめてかこかきともをかへすかこ中の字をいゝなからかこをかつひて出て行【權】あひつらハ、つひぞかごにのつたこたァねへと思て、いやァかるぞふた トさあらぬてひてぞうがんの六角いものきせるでたばこをのんでいる【男】さよふでござります、どふもなりませぬ ト いふうち酒さかな出る權八一人てのんでいたる所へおくざしきから三十七六のきやくなりハゆふきのあいしまのかつぱしよふぞくハ花いうらしや かなもの ハしやくどうのぼたん上着ハ茶こうしのゆふき下着ハちりめんのかんとうしまじゆばんハとび八丈充くうなゝこのはんゑりおびハ おなんど ちやのつゝきなゝこなたまめこじりの五節句こしらへのわきざしとからかハさんとの鉄かなもののゝたばこ入をいつしよにもち權八が前へ来りすこしはのぬけたこハいろて【客長兵へ】モシ〳〵と、ぶしつけながら、

おめへさんハ、お若ひに、にやわぬいまのおてぎわ、ャほんにたのもしい、おかたじやなァト かんしんかほにてごん八がかほをつく／＼とミる 【權】こりやァおほめに、あづかつて、おはづかしひありやァほんの、時のひよふりさ【長】なにさおめへ、おかくしなさんな、ミへていやすよト 權八がわきのゑんかわにて白のせきれいばりのきせるてたはこをのミなからちのおとこといまのかこかきのはなしをしているゆへ權八もひとりてさひしくわあるし 【權】モシはゞかりながら、ちとおあけ申ませう ト長兵衞ヱさかつきをさす【長】ヱ、こりやァ トさかつきをとり一ツうけて ときに今日ハどちらへおいでなすつた【權】ハイ大師へまいりやした【長】お一人でか御しん／＼だ子【權】ナニつれも有やしたが、ミんな目黑へ、廻りやした トそれよりたかひにたん／＼と心やすくさかつきのとりやりあつてしばらく時うつる權八もさいせんより長兵衞がなり風ぞくからことばのよふす少しもすかぬとりなしゆへ心やすくしておくならハたのもしきおとことおもひ 【權】モシおめへさんハ、とつちの方でごせへす子【長】わしかへ、ワしやァ番通院さん所さ【權】そんなら、おめへさんが、聞およんだ長兵へ様しやァ、こせへやせんか【長】イ、ヱほんにあの近所へ、きなすつたら、ちとおよんなせへな【權】ハイおたづね申やせうト ごん八もきゝおよひし男ゆへはなはだよろこびまたそれよりたん／＼酒肴いでゝ時うつる 【長】モシなんとこれも緣だが、今やハ宿ハどふだの、したが、おれもよつぽど、あにきで居ながら、こんな事をいつちやァ、つまらねへノァ【權】そりやァきミやうだ子定めし、御せかひがごせへしやう子【長】なにさおめヱこつちやァ、いつこうなものさ、又むすこハきためしだろうの、【權】なに宿にやァ、ござりやせんが高輪に、やけ出されが來てい

やす【長】何やだへ【權】玉やでござり、やすのさ【長】おいらがせけへハあつちに居るから
そんなら、今夜ハ、つきやわうハな、【權】そりやァありがたふござりやすと（そふたんきまる）【許ニ曰】（こんどのかりたくハよし原きんじよにて高輪なぞにハなきとなるがかふかゝぬとちと作しやのかつてがわるきゆへなるべししかし古禮のなきにしもあらずだときゝ取がくもんを出しかける）【長】カフかミさん是でかん定をして下せへ（トふところより二分出してなげる）【權】モシそれじやァ、わるうござりやすよ【長】ハテいゝハな【女】まァごゆるりと、なされまし【長】そして、かごを二てうたのんでくたせへ【女】ハイト（ゆくまもなくかご二てうきたる）【かご】旦那方ハどちらまで、おいでなさいます【權】いま時ぶんに、どこへいかれるものか【かご】ハイこりやァ、きがきかなんだ、ごめんなさいましヲイ棒ぐミおふとんを二ッ（ほどもなくかごもてきて二人ともにのり）【長】【權】（かごの内から）こりやァ、おせハたつけの【女共皆】さよふならどなた様もこきげんよふかごの衆頼ます、よ

第二回

（タシカラクリカヽリ）へ夫遥に、沖を御覧有、誠に、出舟入舟絶間なく、連ゝとして、沖にかゝり、佃新地の桃燈、はるかに物凄く、ちらつき恰も、檀の浦の亡靈かと疑われ、八ッ山ハ、一の谷鵯越の假宅ならんと、思ハれのぼせて通ふ敦盛公を、うしろからヲヽイ〳〵の呼聲ハ、熊谷ならぬ一座の面〳〵、

その熊谷の、土手が長き、牛の小、便ゝたる十八丁、げに、その名も高し、高輪に軒をならべし、夕景色は諸客の、心を轟かす【かこ】モシ旦那御茶やれ、何やでこさりますネ【權】平のやだが、すぐに玉屋へ、やつてくたせへ、ほんにもふ、あんとんが、出たの【かこ】さよふなら、ちよつとそふ申せう　トひらのやまへてふとさをのいちといふこゑて玉やへおきやくたよふとしらせるのはちとかこかきの方にわけのあることなり　【茶や男五郎】　かこのあとからせ　はしなくついて來るかこへすくにうちへよこつけに付る二人りともにかこより出る　【若者源兵へ】　きり口上にて　是はとなた樣も、よふいらつしやりました　あいさつをしおくの方をむいておきやくたよふ引といふさきへたつて五郎さこちらへいらつしやりましと三人もろともにかへあかり見とふしへ座さたまる　【評曰】　すくになしこてはあるしむらさきが部やへ入そふな所たかさためしひるあそひのあとにてとりちらかつてあるべし　【五郎】　長兵へをこて　あなた樣、よふいらつしやいました時に、權樣、こなおつれさまかたれへ【權】こんな、目黒のかいてうへ、廻つたよモシ長さん、なんと又こふ見はらした所は、丁より見通し、ばかりはいゝネ【五郎】モシ權さん見通しはかりしやァ、ちとありかとふこざりますネ【長】そふさ又これも、南國のきもだのふト　いふうち茶たはこぼんほとなくさかつきたいおつる　【長】なんと、むすこ、おめへの心やすい、しやを呼ねへな【權】そんなら、八十吉と竹がよかろうよ【五郎】　さよふならこてまいりませうと行まもなくちよふしすゝりぶたすいもの出るとかくかりたくゆへばんしふじゆかちのせかひなるへしそのうち五郎も來り　【五郎】モシとなたさまも、ちとおすひなされまし　トいふところへ小むらさきがふりしんなゝせうかにて　【なる】あれさ、よしなんし、いつつけてはしこへ、札をはらせんすにへ　トいきをきつてきたる　【五郎】モシ日なたへ盛砂をしたやうに、きついはしやきやうだの

【なる】ヲヤ權さん、よふおいてなんした子、ほんにおみやげ〻とふなんしたへ【權】ホイひ
らのやへ、わすれてきた【なる】それ、おみなんし、じつのねへことだぞヨウヨ【五郎】なる
さんの、おみやけなら、おゝかた大もりの、やたら漬（つけ）か子モシ權さん御用心をなさいまし、く
いもの〻いしゆ〻こわひものでござりますよ【なる】しつたかすかねへ、人だぞヨウトいふうらちや屋の
おくりもの出る權八〻長兵へがみゝへ口おあいかたおゝたて〻とふだろう【長】むすこの、こゝろいきのがい〻子トいふゆへ【權】マタ五郎が耳へ口さんたら
花むらさきさんがよかろふとそうたんきまるかれこれするうち竹八十才りすつと一座のかをゝ見て【竹】【八十】これ〻權さん、あなたよふ、いらつしやりまし
たト長兵へゝあいさつする【長】サアモウとまり〻、きまるし、初（はじめ）よふ〳〵トそれより酒事はじまるこのうち八十竹おさたまりの通りのちよとしたものをひきチヤチ
ヤント仕まうまもなく長兵へがあいかた花むらさき來るとし〻廿一二ちとかみのうすいほうちよさいのなき風なり〻から糸のそふぬいにたてもんのうちかけ白しゆすのへりとりむくかみ〻手からわけかみのうへ〻小間ものやの見せのことくつんとおくみんなしに一座へなおる〻
ところ〻かわれどさすがさとぶりなるへし【花】權さんよふおいでなんした子トばかりおさたまりのさかつきのやりとりあつこすくにだまりこんでたつてゆく【權】カツ五
郎とん、ちつと、又きせる〻どふたの【五郎】ハイきなたのどをちつと通しませうか子トれいのきせるを出したば
こをのミながらそのきせるをのミそのあとできせるツゝからしんちうひばしを出してはなのあなへ入るをかむろがつく〳〵と見て【禿】ヲヤこの人ァヨおいらんに、いつつけよふ
ヤこんだうなくなつた火ばしを、あのはなのあなからたしんしたよ〳〵皆ヲホ、【長】カウきさまや
うだせへ〳〵マアおいらにやァめつたにできねへ京（けう）の大佛（ぶつ）といふ物だトかれこれすれとも小むらさき來らす權八も初買の長兵へがまへ
もありまたれいのかんしやくにてくつとせしがはたをはゞかりさあらぬていにている【なる】ちきにさつしてかむろが耳へ口をよせあのおいらんにはやくおいてなんしといつてきやといひつけてやるまもなくらうかにて【ほうばい女郎花住】

小むらさきさん、おたのしみさんす子【小】なんさんすとへ、ちつともきこゑんせん、ヨト（いゝなから来るなりハむらさきしゆすにひぢりめんのどふにきんしと銀しにて千鳥をぬひつめたへりとりむくばかりにて来るなしミゆへと見へたりかみハしのぶわけいつたいこの女いまだとしハいかぬがはたらきものゆへない外のおもハくはなはたよろし）ごめんなんしへ（トしよふじをあけて座になをり長兵へを見て）ぬしやァよふお出なんした子（トあいさつをするふうそくいあつてたけからずどんなぜげんに見せても中三かふハあたりまへ）【長】モシおいらんヱでへぶ、むすこの顔をおそく、見にきなすつた子【小】（たゝにつこりそれよりたん／＼のミつくしほどなく花むらさきも来りこのあひだに勝出るきうるしのわんせいひつむしくひのくわいせきせんにて出るとかくかりたくゆへくひものハいつから出さす皆はらハよきゆへ茶びん共にならべたばかりぜんハ座しきのすて小舟となるこゝへまたこんハが内のきん所の野だいこにほていの市やつこくいのせんをはじめとして白さや組のきまくれともどふしてしつたかおしかけて来りうへをしたへと大さハきこの所のしやれあまりそら／＼しきゆへきゝとれずこゝにりやくすそふかうするうちひけをうつゆへミな／＼それ／＼に座しきへ行けいしやたいこ持ミな／＼かへる）

第三回

夫佛説、因果業報と、いふて前生にて、悪をなしたるものハ、今また此世かひにて、むすめ女郎に、きらハるゝも、皆因縁のなす所なりうき川竹の、流れの里に、しばし人のさがりを、せきとむる、戀のしがらミ、女郎ハつらく客ハ又おもしろく、女郎の身のうへに、ふうたきいのはんか通ほど、つとめにくきハなかるまじしかれども、通にならんとてめい／＼の、作意にあらず、みな前世のなすことなるべし（こゝに二かひ座しきおいらん三ツ花が床のうち）【客介のしん】（此きやくいつたい金ハあれともふうたきいのさむらいにて少し三八か友成といふ身ぶりあり年ハ三十四五いしやうつきハ床のうちゆへしよ君子ごさつし）ヱ、とんだ口かあれて、きたがモウきそふなものだト（いゝながら一）

よくついて火入へきせるをいれてかきまハせしがつかぬゆへ手をあてゝミれハ火ハきへてなきゆへ手をたゝけとも夜ふけなれハあいさつなしかたなしにはだかではい出しあつちらをむいて居るあんどふをまハし手をのばして付んとするにいつからつかずよく／＼ミれバたばこハなしそこらを見れバ火入のうちにあるゆへとつてつぎすい付る　ヱ、いめいましひ、きせるにやにがさがつて居たト　はいふきてあなきところへつハをしたるが口がからきゆへうがいをせんとちやわんをミれバちやハなし沈もとのてうしをミつけ酒でもいゝとちやわんへつぎうがひをしたるがまたそれをのミこんでミて　ヱ、こゝの内ァ酒までわりいせへト　い、ながらすゝりふたにのこつてあるからかハとしらすにつまんで大门にほうばりかんでミてかをゝしかめはき出し　ヲ、ヨからへもんだあいつらァとんだ、ぢよふだんをして、おきやァがる、ほんにこん夜に、かきつてこんなつけの、わりいばんハねへぜァ、のどがひり／＼としてきた　トいふところへらちかばた／＼とするゆへいそいで床のうちへはいりたゞ口がからきゆへすら／＼といつて居る　【評曰】此ところいま迄の小冊なれバ油をつきにくるがほかの座しきへ行そふな湯を少しひねつて　【三ッ花】だまりんでしよふじをあけてはいり　もしへぬしやァねなんしたかへ　といわれて　【介】ねたふりをしてたび／＼こりたものゆへなにいままでよくねたが、なんだかうなされて、いま目がさめたョ【三ッ】ヲヤどふしんせうね、いつそきみがわるうおすョ【介】なにさ、ゆめハ五臓の、わづらひといつて、なんにもおそるゝにたらずだハナどふかこふいつちやァ、三ッぼしへでもゆくよふだの　トいへどもこのしやれむこふへしれぬゆへだまりんアノ、いつそかれヱぞ【三ッ】なんで、からふおすヱ【介】いんにやョ今のゆめがョト　さきらかす

【三ッ】そんならあの、とんがらしとやらでも、見なんしたかへ【介】おきやァがんなせへ、ばか／＼しい、みなんし。かきやくねんぼうが、きいてあきれラァト　ふるいしやれをいふ三ツ花も床へはいりたばこをのんでいる介のしんハさいぜんよりほかの座しきのむつことなしにこゝろうこきまちかねしことなれハむれもどき／＼にこへをふるハせ　【介】コウ三ッ花さん、もちつとこつちへ、よんねへナ

トミつはなおからだへたきつきなにかもじ／＼といちるゆへ【三ッ】あれさおよしなんしョ トかいまきにてからだたきり／＼とまといたばこをのんで居るゆへ【介】モどふぞして一ッおきんと思へどもいつたい素于ゆへたゞいろ／＼しあんをして居るこれ当文にいわゆる当世のすゑんにてかくのことしこゝをもつてこれハ女郎におもわれんとおもふ人ハ忠孝のみちをおろそかにすへからす【三ッ】モシエぬしやアこんぶりう、おたのんもふしんした。ことをおわすれなんすなエ トいふのハはやたん／＼とひつこしまひゆへ、前かたからミなそれ／＼にきつかけておくのなるへしすけのしんもこのことばにつけこミ【介】そりやアぬしのいうことだから、ずいぶんせうちさ・そのかわりに又、おれにはおりをかゝせてくんなさんなョ トいふのハはやくでたきゆへなり此ことばにミツはなもいやながら介のしんお方をむく【三ッ】モシエどふもぬしやアいつそ、うれきておさんすにョわたくしへ、これがしミ／＼苦らうに、なりんすハナ トうろたこへにする【介】とんだこと、ばつかり、なんにもおいられくろうに、されるつミハねへョ【三ッ】そふいゝなんすな、そんならわたくしがるすに、なぜ源兵へどんをおよびなんして、小むらさきさんのことを、おきゝなんしたエ【介】なにさありやアそふいふわけじやアねへハナ トそれよりすこしツゝそばへよりてあとへたがひにたまりんでたゞウ、スウの葉ばかりさだめしすけのしんもさいぜんよりのうつふんをはらすべし【作者曰】こふしてミれハ女郎ほどおかあからみてハらくそふな内しやうのくがいのものハなからんときのわろくなるところをすこし人情をましすゞりにむかひほうりとなミだホイこれでまアすゞりの水が出来たとぶせうわざをいふ

第四回

艶道通鑑ニ曰いま時の、人の心當分の、色にほだされ、浮きのねつにもよふして、そこ心から

の、なづミにおもわせ、おそろしきちかいをたて、口説に女郎の、あさはかなるハおのれを、たかぶるおもひから、ふれとなつて、すへとげぬことに、うか〳〵となびきぬ、扨かれ〳〵なるを、うらみてむねをくるしめ、いきどふれども、客の方にハ、本よりとふざのうハきゆへ、露見むきもせぬ、むこさ又女郎の方より、しかけたる戀も客つきに不圖思ひそめて、はなのさきのおもハくなれバ、かのきやくの水くさき、とりしめなきをくちおしくとかく、とためらふうちに、ふかく、思ひがほなる人あれバ、そのまゝそれにかたむくものなり、又きやくも女郎もさなからわけ道、しらぬにハあらずあれもうたがひこれもおぼつかなくて生涯かたつかぬ、女郎もありこれらの女郎ハ千話りんきハ、すれどもその色男の名を書て釘をうつほどの、ねたミも出す、又同穴の節を守りて、外にいろ男をもつまひという、まことも、なきものなり、およそきやくの名をかき、釘うつほどの、ねたミハもとより、その色男ひとりを、神と守りてそのいとしさわすれぬ心からきやくのうハき心あるを本意なく、いとゞせまきむねのうち、より、ぐど〳〵おもひあまりてかこちかたに神のあハれミを、ねがひ奉るなれバきやくの身にとつてハ、ふびんにおもふへきはづなり、かゝる心を、ひるかへしたらんバ偕老の、ちきりもなどかハるへき、女郎の如くききハ、きやく又わきの内へ行きやくのわろきハ女郎方にてハ、いかん

ともすることなし、さすれバ神もあハれミたまハん、魂より灯す、鉄輪の火、めぐる事の、世の中に、捨かたきもの、ならずや、衆客これを思へ　こゝにきたこゝのうちにておてんバものあやいとといふおいらんありいつたいこの女郎生れついてのうぬぼれにてすこし気の有きやく人がもしおめへへこゝろいきがミやうだねとのせてかゝればぢきにのりほんにぬしやア若いしゆちかつきになんなさんねへかへなんならまァこの金をおつかひなんしといふふうの女なりそのあやいとが床のうちしかしこのきやくよつほどな色男とみへたり

【あや】それおミなんし、ふとんの外へ、おちなんすハなァこつちを、おむきなんし【客乙】あやまつたら、ふせうながら、むひてやろう、むかせられるハ、恩ならず、むひてやるのを恩にして【あや】男心の、にくひのもうれしきほどの、やぼになりいしたのさァあやまりんすから、おむきなんし、さみしうおさァナぬしに、きゝ申いす事が、おすにへ、ゆふべとけへ、おいてなんしたへ、宿とやらかへ【乙】マァおつなことを、いうの黒介いなりが、宿へいつたといふ、うハさハきひたが、おれが宿へいつたさたハ、またきかなんだ【あや】よしておくんなんし、此花さんが、ゆふべ見通しで、あつちへ行のを見かけたと、おつせへしたさァほんとふに、おつせへし〳〵、おいゝなんせんと、くすぐりいすにへ【乙】これさよさねへか、ぶちのめすぞ【あや】そりやァうそで、おすが、此せつ何ハ、どうせうねへ、そして正月もしんせんから、ぜひ〳〵このせつ何ハ、ぬしの名まへで、札をかけねへぢやァどふもわるふおすにへ【乙】そふさ、おれもそふ思てハ居れど、やつはりまたいつものよふで、つまらねへのさ【あ

や」ヱ、どふもじれつてへのふそんならマアどふせうのふ「乙」どふするものかしかたがねへれ、ほんにまだてめへれ、でへぶくめんがいゝな「あや」フゥよしなんし、こりやァミんなしよふへひ道具て、おすれな「乙」そふいふな、それでも時〳〵、おれにかすしやァねへか「あや」乙がかたをつく〳〵と見てにつこりわらひ そういゝなんしても、どふも とかをゝかくして まよつていゝんすから「乙」べらぼういふな トうつむひてわざとなにかしやんかたにてだまりんでいる「あや」モシヱ〳〵どこぞわるかァおつせんかへ「乙」なにとこもわるか、ねへヨ トやはりふさいでいる「あや」ぬしやァなぜそんなに、ふさきなんすへ、とふもくろうさんすから、そのふさきなんす事をいゝなんしな「乙」ふさぐめへとれ、おもへども、こうてめへの所へきながらおいて、節句の、しまひが一ッできねへのミならず、又このころれ茶やにれ、どんと下りれ有し、けふも、てめへにほだされて、こゝの内へれきたものゝ、よくおもへば、あすれかけ日モゥてめへにもそう〳〵れいわれもせず、そふしてみれば、しぜんとゝまるおれが足、しよせんまた、とまつてみれば、いつまでもうか〳〵月日れおくられねへ トわざと目をふさいてためいきをつく「あや」モシヱあのたよりに、おもいんすおめへさんが、そんなしんなことをいゝなんして、わつちやァどふしんせう子そしてマァそのさがりれ、いくらほどありィすへ「乙」なにさモゥいゝどふするものか「あや」そんな、きのよれひことをおつせへすな、いくらほどあれ

ぺよふおすかモシいゝなんしなく〳〵【乙】それほどてめへがいつてくれるけれど。どふもあんまり【あや】きのどくだと、いゝなんすのかへ、そりやァぬしの心に、へだてなんすからのことでおすサァモシいゝなんしく〳〵【乙】そんならいワふかどふも【あや】アレサマアいくらでざんすへ【乙】今こゝに、十両ほどもあれバ茶やの借も此節何まへも出きるのさ、しよせん夫だが、あんまりきのどくだ　ト心の内でしたを押す【あや】モシヱそんならこゝに、どうも此せつ何前にぜひ〳〵はらいゝしやうと、おもつてこしらへて、おきんした金がありいすから、これをマァつかひなんし、あとて又くめんをしやう、ぬしのことだものヲとふするものか　トよふたんすの下のちいさなひきだしから出して乙がどんぶりへ入たばこをのんでまた一ふくすひつけて乙にやりてまへも床へはひり【乙】ほんにマァてめへなりやァこそそんなにおもつてくれるわすれハしねへ【あや】そりやァそふと、ほんにぬしやァわつちをよんでおくんなんすきかへ【乙】此ころハ、でへぶぐちになつたせ【あや】それでもモシぬしの、とつさんやかゝさんが、ふせうちな時ハ、どふしんせうねへ、それをおもふと、死にたふおすョ【乙】それよりまだ先が丸一年四月と、いふものだからそのうちにハ、そつちにとんだことが、出きるだらふ【あや】よくつもつてみなんし去年の五月から、このかたわつちが身のためにもワるし、ぬしのためにもわるひと、度〳〵あきらめんしても、思ひきられんせんものを、ほんに悪縁でおつせうョぬしもそ

ふおもつて、おくんなんし、あれさ又ねなんすな、はなへこよりを入レんすにェ「乙」これさあやまつたよ、こんやハむせうにねむひ、これたばこを吸付てくりや、てめへおれがこと、ばかりそんなにいふが、おれがかをのたゝねへよふな、ことをするなョこんなのろひ旬を、出すやふになつちやァたまらねへ「あや」まだその、やうに、うたかひなんすから此うへゝゆびの二本や三本ハいとィ、せん「乙」てめへにゆびをきつて、もらつたとて、しほを付てやひてもくハれねへ「あや」そんならどふすれバ、よふすじれつたふすニェ「乙」なにかあじにゑきもねへことをいゝ出した、すこしはらがきたハへさつきそこにあつたハなんだ「あや」ありやァよしなんし、土地(ち)のもちくハしざんすがら、あすこに町から、もらいんした仕切場(しきりば)が、有んすから、出しんせうかへ「乙」そいつハあやまる、れいの小梅の、かり／＼するので、茶ずりにしやう「あや」これ／＼久兵へどん／＼、これさ、ごせうになるからの、茶づけぜんを、一ぜんこせへてくたせへョ（トいゝつけるまもなくせんも出るあやいともほかのきやくならバくひもしまいがてまひもこがあとでくひよふじをつかいながら）「あや」モシねころびなんしな「乙」めしをくつて、じきにねたら、うしになるだろうの、しかし牛(うし)より馬(うま)に、ちつとなりてへ所があるが、てめへしつているか「あや」（ちとかんかへてミてわらひながら）なんさんすとへばからしうすョサァもふねなんし／＼「乙」そんならねやうから、おびをとひて、ねかしてくりや「あや」よ

くいろ〳〵なことを、いゝなんす　トいゝながら乙がおひもわがおびもとひてだやらふをたてまハしそれよりあとハおさだまりのとふりごさつし〳〵　【評曰】それ前文にいワゆる浮きのねつにして手前のうぬぼれより出るわさワひなりずいぶん女郎ハうぬぼれをつゝしむべしきやくもまたしかりこのよふに女郎のものをミんたんへあまりふ人情なりしかしとうせひのきやく新買からみならうぬぼれにて出きぬまてもとかくわかひものなぞをさせたがるものなりつゝしミたまへうぬぼれ〳〵

第五回

戀せずば、人の心ハなかるまじ、と詠たるハ、情をしると、いふことの葉にして、性わるの、いたづらくるひせよとの、ことにあらず　こゝに久口きの色ワか衆權八か床のうちへ今までのせかひと事かワりいとしさあまりてのむつことけんくハそれといふのも權八がかんしやくにて初買の長兵へへいるしさつそくしきへきそうなものと思つたろゆへなるへし　【小紫】モシヱぬしやァマァどこぞ、わるふおさんすかへ　モシヱこつちをおむきなんしな　トいへどもあちらをむひてだまりんゆへてまへのからだを權八がまへのほうへまハり　モシヱぬしやァさだめしなんぞ、おきにさハりんしたことがありんせう子　コレサごせうさんすから、きけんをおなをしなんしな　トいへどやつはりだんまりゆへ權八がかをゝつく〳〵うちながめ〳〵しばらくありてちとうるミこへにて　たとへわつちが、ものとに、いきとゝきんせんことがおざりんしても、なぜそれをそふとおつしんして、おくんなんせん、たゞだまつてばつかり、おいてなんすほど、なを〳〵すへがもしやと、おもワれんして、かなしう、おさんす　トなにかことばもあどけなくせけんをはゞかるしのひなき　【權】しおうとふにねむつて居たるが目をひらきものをもいわずまくらをとつてぶちのめし〳〵　なんだといやァがるものことにいきとどかねへ、

ことか有なら、いつてくれコレヱヽてめへたちやァ日ことにかワる、ごぜんせひおいらァ今ぢやァおもてむきこそこふして居れどナ このところすこし小こへにて 手めへゆへ、内せうハ大きくつまらねへハへァ、これを思へバ、御兩しんの御いけんがいまこの身に、あたつて、しミ〳〵と目がさめたハへそれといふのも、みんなこつちのわりいのかへァむしやうな、世の中だもふ〳〵、なんにもいふめへ〳〵 トまた夜きひきかふるをよふ〳〵とおしとゞめなミたこへにて 【小】ほんにおまへさんの、お身のうへをしんじつ、堀の内のおそしさんかけてあさ夕へんしも、わすれハしィせんほんにマァ、外の座しきで引哥の、五大力さへ、きにかゝりんすハナどふぞモウこせうさんすおがみんすから、きけんをなをして、ワらひかをゝ、おみせなんして、わたくしにうれしからして、おくんなんし、そしてマァあの助市、つらがことにつき、ぬしにマァ、おはなし申しんすことが、てきんしたよ トいゝながらそこらにおちしくしこうがひのおれたるをみすかミへツヽんで床の下へおしかくしかみなであけてモシヱモシヱトしんじつおもてにあらハれてかこちなくこそあわれなり 【權】モもちまへのかんしやくゆへいつたんハとふするものゝさすが岩木にあらざれバ介市がことゝいひすこし心を[illegible]なをし コレその介市がとふしたのだ【小】そんなら、きけんをなをして、おきゝなんすかへ、ほんにうれしうおざんすヨ トきうににつこりワらひかほ【權】ふせうだが介市がことといふから、きひてやるのだ、そして手めへハ介市がほうへ、いきてへといふので、そんなうれしがるのか【小】あれさどふいへハこういふとつてにくひ口だのう【權】べらぼうづらめへ、このにくひ口に

へ、だれがした、そして介市がどふしたのだ、はやくいへきにかゝつてわりいわへ【小】こゝへにて

マァおきゝなんし、あのとふからぬしに、おはなし申しんすとふり介づらが、わたくしを身うけしんせうと、もふしんすもよもや〳〵と、思て居ィしたが、あのにくらしひ、わたくしを思ひんして、こんぢうからぶら〳〵、わづらつて居んすとサ、それで、はゝおやのりやうけんにて、あに介のしんとやらを、たのみんして、わたくしを、身うけして、とをいお國とやらで、そのせたひと、おもつて居んすッサそれでこんちうから、こゝのうちへ、きんしてミつ花さんを、あけんして、とふまハしに、わたくしの心いきを、聞んしたり、晝も源兵へどんを、よびんして、なにかいろ〳〵はなしんしたッサそれにマァそのすけのしんとやらが、ミつ花さんにまよひんしてむせうに、あしをちかくきんすッサそれてミつ花さんの、しんじつで、宵にわつちを、およひなんして、なにかをいろ〳〵、おはなしなんして、おくんなんした、それでぬしがおいでなんしたを、しつて居ィしたが、つひおそくなりんした【權】ェ、べらぼうめへいつまでいつても、ねつからわからねへハェそんならなんといふ、ミつ花さんのとけへ、あに介のしんが來て、手めへをとつくと、見たうへに源兵へどんまでよびよせて、手めへのはなしをして、身うけせうといふとか、とふだそふかェ、ねつからわからねへやつだぜへトおふきくせきこんでくる【小】

なきこゑにて そふでおすョもしひよつとそふなりんしたら、わつちやァマァどふしんせうね トごん八にだきつく【権】シテモゥねへしやうで、手めへをよんで、はなしがあつたか【小】いんへまだひるの、こつておすから、はなしハ、おつせんがモゥさためしおつせうよ【権】がんしよくかハり咲のうへにてうでくミをして はてなアモゥうか〳〵こうしちやァいられねへハヱ トくびをかたむけためいきをついてしあんする【小】こゝへになりて そんなら、いつそ旦那のごおんもわすれんして、こゝのうちをにげ【権】こりやと小むらさきが口へ手をあてハこゝへにて なんの女のあさはかな、どふともこふ共おれがむね【小】そんならぬしやァどふいふりやうけんておす、それをきかせて、おちつかせておくんなんしェ トしぢうとべもむせびなき【権】ずつくとたつてびやうぶをあけあたりを見まハし小紫か耳へ口 これよくきけョどふであつちやァ金ひらで、この権八に、はなあかせ、つれてゆくのハ、しれたこと、又そうなつちやァてめへより、このおれがかほが、たゝねへモゥこふなつちやァ百年めだしてその介のしんハあさはやいか【小】アイミつはなさんが、あさハいつでも、はやいとおつせへした【権】ム、さひわひ、そんならいつそあすの朝すけのしんめを、人しれず【小】どうしなんすへ【権】こゝへにて ぶつはなすハ【小】ヱ、ヨ トごん八がかほミてふるへながら それからあとハ、どふしんすへ【権】そうすりやァまた介市めも、おりを見合せばつさりとこの世のいとま、そしてあの介のしんめがくわひ中にハ、たしかに金がフムモウなんにも、あんじるな【小】さすが女のむねせまくそらおそろしきたくミをきゝたゝぶる〳〵として居たるがおつとにつれ

ろ女きゆへ　ぬしやァそんならあすのあさハはやうおすかへ【權】ソウサはやくいかねハ、りくつがわりいァ、そりやァそうと、長兵へどのに、ぎりがわるひが、それもどふも、しかたがねへおきたら、いゝやうにいつてくりや【小】そりやァワたしが、のミこみィした、それてもマァちつと、おやすミなんしても、よふおつせう　トてをとつてとこのうちへひきこめば　【權】へらぼうめへ、めづらしそふになんのこつた　トいふうちに增上じのかねゴフン〳〵〳〵　權八ゆびを、おつてミて、あれあのかねハあけ七ツちつともはやく、けへろう〳〵【小】トよふたんすのひき出しからちへきとかつぱを出してきせゑりのおれたをなをしながら　ほんになにかに、きをつけなんして、けがをかならず、しなんすなへヱ、モいつそくろうさんすのふ、そしてマァいつおいでなんすへ【權】あさつての、ばんにこよふハナ　ト二人ともにろうかへいて【小】これ〳〵ねづ番どん　ねづはひ〳〵とじきにきたり【ねづ】これハ權さま、とんだおはやうござります子　トさきへたつてはしごをおりるあとより二人ばた〳〵【ねづ】ヲイ源兵へどんおかへりがあるヨ　源兵へふとんをはねのけこしをかゝめ【げん】だいぶ、けさはどれおさむうござります　トあいさつしながらおくへ行こしのものをもつてきてわたしこしよりかわゝふくろにいかひことついていろかきたしこんきなおよふたびんとあけくゝりくわら〳〵〳〵　【權】カウ源兵へどん、平のやへハ、あさつてのばんに、こよふといつてくたせへ【げん】さよふなら、すくにおかへりなされますか【權】ちつといそぐからよるめへヨ【げん】さよふならおかごか、おてうちんでも【權】なにあるきやせう、てうちんもじやまだ【小】モシヱそんならかならずヨ【けん】さよふなら、御きけん

トよふ トもろともにくゝりくへら〳〵ひつしやりちよふハひん引 【評曰】 このところ翼り仕かけにて大木戸のかゝりになりごん八と介のしんがたこのあらん有なろが丁數のびるゆへ徑へんにこれを出すいまのくゝりのおとにひつくりして目をさますのハ目くろかへりのきやく人にてこれもやつぱりきひたふらの男 【太介】 ウヽ引とのひをしながらそばを見れバ女郎いづしかたなしのひとりこと ほんにとんだおつなゆめをミたぜへ、きのふひよく塚へまわつたせへか、たしか權八がゆめたつけか、はてな、なんのゆめたつけな トすこしかんがへてミて ゆめ〳〵うたかふことなかれだ、しかしあのあまアゆめ〳〵しひやつだ トむせうにひとりしておもいれしやれをいつてろのハ寄囲のたかなわのせかひとかわろ まだはやへがおもしろくねへうちだから、けへろう〳〵 としたくをして一座のへやをよびおこすゆへほどなく忠介や七蔵出てきたり吉介ハだまりんでわらつている七蔵ハおひをおつこちそうにしめて 【七】 太すな、ふるかの 【太】 いまハふらねへがきつきふつたヨ 【七】 ちとちいさなこへで なむさんひき窓をあけてきだが、まだおいらが、ろじへあくめへ 中きやくむすこかぶのふりなるがこれにて一人りものとしれたり 【太】 なにモウそんなにはやかァねへかごかきが出たせ すへてこのしゆくのかこかきハ九ツより引こんで七ツにハ出るゆへなり そしておいらハ、ちつとはらがすきやがしで、目が丸や丁だ このきやくさだめししんばしものと見へたり サア いかう〳〵 トむこふにあろたかつきをのぞひてこれどなにもなきゆへたかつきのかとではなをかむ 【忠】 そんならいかう、七公おびがはづれるせへ 【七】 ヲイ サア いきやせう ト三人ともにはしごばた〳〵とん〳〵 【おしほ】 【おりき】 そんならこなひだにへ ト喜すけやヒごうが女郎ハおくりしが大すけが女郎ハおくりもせずかふしてこれバよつほどあしくされたと見へたりわかひものくゝりをあけてひもでくゝつてあるぞうりをさがしながら 【若い者】 さよふならどなたさまも御きけんよふ。

駄ちん馬ひん〳〵〳〵

假鄭
南諸

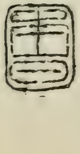
比翼紫

比 翼 紫

自跋

我嘗てもつて小冊を選す其文拙のふして浮る屎の如し故に諸君子日を舐でこれを見る者なし嗚呼馬鹿な顔だ屎があきれると尻をぼつ立て屁をひり附ん事を鬼れ願ハ屎なき處へソツクリト置てくんなんしとしかいふ

宇田樂庵誌



月雲二蒲図

【本や】（だんまりにておもてをとふれハさる／じよさいなきそふな手代見世に居て）【手代】ヲイ本屋(ほんや)さんほん屋さん【本や】ハイ（トうちへはいる をふ／とていふのあー む）【いぬ】門(か)をあいてあるけ【本や】かんにんしろ〳〵【手代】此あいだはなしのかいしやれ本(ほん)ハあるかへ【本や】ほんにおまへにおめにかけるのだつけ（トふろしきをとき下／タのひき出し右出て）ハイごらうじろ【手代】とれト（外題(げだい)を見さうに／するところへ）【お客】此間(こあいだ)ハ相場(さうば)ハどうだの（ヌひ／とり）【子供】茶(ちや)をくんなアヨ【お侍】ぜにを貳朱(にしゆ)くりや【手代】喜助(きすけ)どんちよつとあげてくんなせへ（ト人をたのんでさらバミましやうと目／のやにをふきゆびへつおをつけ一まい）（ひらいて／ミれバ）

月雪二蒲團

白叙

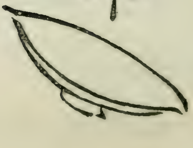
人に天遊ありて月に遊ひ雪にあそふ舊界丁因は烏長と遊ひ觀音ハ花によめりし給ふも虛もて閑空ならねば愼もて實ならむや此里のふたつ蒲團に遊ひては色に包まるふとむあれバ廣博にくるめる蒲團もあり疇昔ハ情を堅縞ふとむ今日ハこゝろの横島蒲團人の異見も身に當ることたつふとむの曉は貧すりや緞子の蒲團を思ひせち唐草の陰布より世間は挾き駕籠ふとん鏡蒲とんの仕立ばえまつ是を見給へかし

重光作〔一四四〕

孟春

深川のおなし

醉醒水吉作



二　蒲團　三

二游圖 四

福

朝の世界は

春の雪
解るもはやき
埜暮の一坐

晝の世界ハ

白雨　中の
さながら　字の
きほふ　こわもて

夜の世界ハ

秌のそらいとゞ
ものうき泪の
床

あけぬればくるゝものとはしりながらわかれを惜むあさ帰へり棒ぐミよしかといふこゝろも　今おきたてのしやがれこゑて【かご】だんな御羽織がさがりました【きやく】もうなん時だの【かご】ハイ　ト空をミて六ッをうちましてよほどあいだがござります【きやく】そんなら急いで頼むぜへ【かご】さやうならおいそぎをつけてやります【ちや屋】さやうならお近うちかご屋どん御くらうながら【かご】はい〳〵　トいゝつゝかごはいそぎゆく【おりからはるか大井戸の方よりほりのうちまいり三人これはふか川邊とミへて

【市五郎】衣しやうつきはおりはなんぶのさいかうしうへぎはつむぎなまかべ色あいぎは木八のごばんじま下へにやけこしまちりめんのがく小袖くろ七子のうらゑりをかけおびはこはくあいおなんど但しはゝ二寸ぐらゐをすこし左りへまげほらのかいにむすび髪は中やつこはけのさきをすこしつぶしたびはちくさのてうせんぐつにいせざうりをはきそろばんしぼりのてぬぐひをまへにはさミすこしそりかげんにてくる獨はかみゆらしくミへて【ひさ】衣せうつきうはぎは少しおそまきなれどもつむぎの鐵御なんどにらつちもないもんをつけあいぎはちりめん切かミしほり下はおとゝしあたりはやつたきやらすゝ竹のしやうぶかはこれもちりめん也帯はそげて黒じゆすをしめさらしのてぬぐひの中ぶるをかふりすこしつめたい所をかんにんしてすあしのいわきわらじにてくる一ト人はげいしやらしくゐへて【ミの】衣しやうつき上きはやはりついの鐵おなんどあいぎはちりめんせいらすじま下着はちりめんのべにとびしびり帯はついのくろじゆすをしめそろばんしぼりの手ぬぐひをかふりこれもすあしにていわきわらじをはき三人つれにてなにかはなし〳〵くる

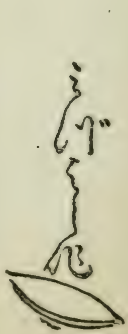
【市】おみのさんけさはよく目がさめたの【ミ】今朝のやうなまぬけな事もねへのさあかるくなつたからうろたえておきたらばからしい月あかりのしたのさ【市】月明りのしたこゝなおやじが聞てあきれらァ【ミ】マァきゝなよそれからおきてゐるのもあんまりちゐがねこんりうだからまたねのづきんとしやした　ト女だけ中ぐらゐのしやれをいふ【ひ】わたしやまたゆふべおはぐろをつけやうと思つたら客があつてこれ此ざまをミてくんなせへ

と はを見せれバ「市」おめへハせんてへしらはがにあふよ「ひ」さうさまだ年がとしだからさ「ミ」そりやァいゝがもふせんじくへきたよ「ひ」ほんにのふ「市」けさァまだこんなにこほつているからいゝがけへりにやァ道がとけるからおそれよそれに馬でもつてあるかれやァしねへ「ひ」さうさせんじくもむませへとふるめへものならいゝぶんなしさ「ミ」今ハてっに續いてはやるのハこゝだとさ「ひ」市さんげいしやあなんといふのがいゝねへ「市」どれもいゝのさ先ふるいものじやあコゥノへ須賀太夫さそれからちよいといたこか短いうたでもうたハせてあだなやつァ甚三さ又うたをよくうたふのは萬八さ松兵衛ハ三味せんハ格別でもねへがからだを動かさねへでおもしろいからいゝのさ三絃のいゝのハ八五郎さ三吉重治ハこわいろをよくつかふよ染太夫ハ祭文がミやうさ「ひ」おや本にかへきゝてへねへ「ミ」羽おりハへ「市」はおりじやあ稲らくがよかつたが今じやァしやを止たから先里筆政吉おまちおたみ千代吉おつねおミきおしづお久米つるまち住らくお屋ほおかなお久おうた文吉梅吉乙吉おと代おさだ民吉おミよ駒次なんぞかいゝのさホイまだよいのがあつた駒吉さ「ミ」つかねへ事だが正月かさりのいゝのはどこでかあつたねへ「市」それハ鹿じ木さあのさい眞木ハ珍らしい木を遣ふよ藤兵衛といふ人ハ木の目利が上手さ此前杏の木をかつて挽せて廊下の板にしたがよかつたよ「ひ」こゝに淺田

屋といふ内があるかねへ「市」そこのうちがそだれな「ひ」おやそこのかみさまハわにしをしつて居るはづだよ「市」さうだろうあれハもとそれ者でたいていはたらきものさ才だから トすこし小ごゑで 今ハ怖しくいゝわな「ミ」吉さんハよく委しくしつてゐるのふそれでおまへがたゞよく〳〵泊りに来るのがしれた「市」それハどうでも通人ハ居ながら内所をしるもあんまりこぶりつけだ トむだないゝ〳〵ゆくむかふよりたき木をつけたむま来る 「ひ」おミのさんそれ馬が来たはやくこつちへよんな「ミ」どうしやうとあわてゝすべりそうにすれバ 「三人」アハヽヽヽ トわらひながらもはやせんじゆくも過鳴尾をさしていそぎゆくへあとよりくる二人つれハ日本ばしへんのしごとしとミへて「次郎」なりハさんとめせいらすじま下ハふとり綿おなんどのたび〳〵やらかしたような小そで帯ハこはくの大だんけいに引ずるやうなかはをおりをきてかみハちやせんに丸びたいの五分さかやきこんのもゝ引にてたびハちくさのてうせんぐついせさうりをはきそと八さんじの大またでくる「三次」なりハ二三年あとにはやつたもめんのつくばねつミの袷下ハゆふべあたりうけたあいびろうどの小袖にもめんのこんの豕折黒びろうどのはんゑりをかけかみハおなしふう也たびもゝ引のるいもつい也 「次郎」どうだ三次したばハもつともいゝか「三次」どうもよくねへから今朝ハお張ごふうでももらつてやろうとおもふおれもあいつがびやアきにやアくさ〳〵としたよいつその事くたばるならくたばつてしまへばいゝにたこを見たやうにうなつてばかりいやあがるきざなちくしやうだト 噺し〳〵ゆくむかふより来る女三人つれハあさまいりのかへりとミへてちとくたびれたあしつきでくるそれを見て 「次郎」三次ミやごうぎにねれたぜ「三次」あのあばたをミやなんのことァねへ小ぜにで六をはつたやうなつらだぜへ「次郎」そして中のやつァべらぼうにぜいがたけへぜなんのこたァねへ地蔵さまの花立かあぶら屋の錢筥をミたやうだぜ「三次」ほんなァばんがたのか

げぼうしをミたやうだ【次郎】こつちらのやつァなんだながれかんぜうを見たやうなふんどしをこくうにだしてあるくからいゝ【三次】そしてあのてぬぐひのかぶりやうを見やあのあたまでだんごをやけべいゝト　トしやれたいゝ〳〵ゆく此とき傳りう寺の五ツ八分　ぼん〳〵〳〵

〽小こゑにてうたひ 四海波しづかにて國もおさまるときつ風 トうたふてくるをみれば 【金十郎】とし三十ぐらゐ衣しやう付ハ黒つむぎの羽おりにりちぎなもんをつけ上着上洲うゑ田のぴか〳〵する小袖あいぎハとび八ぐらゐ下へ白ちやけた小もんの小そでおびハくろ七子巾一寸五分くらゐを立むすびにして髮ハぬきだしいてにそりたてのさかやきにて來る 【要介】とし廿六七衣しやう付は金十郎がたぐひなりかみハ丸まげにぎんだしをしこたまつけじゆ半のそでをみたやうなてぬぐひをやぼにかぶり二タ人つれにて福手やとかいたあんどうの出た茶やへづゝとはいる 【女中】おやきんさん要さんよういらつしやいましたさあおあがんなはいまし【かみ】たつた今あなたのおうハさをいたしておりましたとハよくいふやつなり マアあちらへおつれもうしやな【女中】さあおあがんなはいましトいへどもすこしのうちにわに立ていることあり【金】まづ貴公おさき【要】先〳〵きこうおさきへ【金】さやうならとあがる。水ふゝへでもはいろやうなり【女中】ちやと火をもつてくる【要】女中の手をおさへなんとかかとかいふ【女中】金さん久しいもんでござりますよヲ引アヘヽヽトけいはくわらひをしながらゆきそうにすれば【金】こりや女中わしハけふハ今崎へゆくつもりできたがいかゞじや【女中】そんなせうわるをおつしやるとあのおくらさんが角をはやしますよ【要】そんな事をいわずとまづ〳〵



けふハ他國やさ「かミ」そんならもうおつれもうしやな「女中」さあいらつしやいませんかトきせるづゝを取つこむすぶ「二人」立つて帯をしめ直しすこしかたをいちろミへあつてなにかたづねてみる「女中」にわにたつこいて金さんなんでござりますへ「金」きせる筒がミへぬ「女中」わたくしが持ておりますよ後で女中がもつてゐてたづねさせるやつなり「金」先おさきへ「要」まづ／＼と又こゝに一少しのうち禮義有てそれより他こく屋さしてゆく「女中」ぢきにあとへついてゆく「女中」サァ吉兵衛どんおきやくだよ「吉兵衛」これハようこらつしやりましたと二かいへあんないするはしごばたくさ／＼「若者」すこしこれにおひかへなされましといふはゆふべのいつゞけかかへつてまだざしきをかたつけぬゆへミかんのたねやかみくづのさうじをしてくるの也「若者」是ハお侍どふさまとざしきへ入る「こちよく」ひつだらけな手で火とちやをもつてくるそれ／＼おしきせの盃出る「金」しやうじをあけて外をミている「要」きせるでたゝミをたゝきながら何かわからぬうたをうたつている「金」たれぞ一トくミよんでくれんか「女中」ハイト立てゆく大かたハ女げいしやなれども金十郎が二三度よんだ新三といふげいしやがあるゆへそれをよびにゆくあとへほどなく合かた二人「くら」「なか」來るしやうじをあけて「なか」ようおいでなんしたね「金」あまりようもこんじやて「くら」きついあいさうづかしさトいふところへ女中かへつてくる「くら」おてつどんどこへいつたな「女中」新三を呼びにめへりやした「なか」夕アハあれからどうした「女中」ゆふべのやうによつた事ハござりませんけさもおき／＼おかミさんにしかられましたこれからぐつと禁酒さのめどとつてもこゝろをぐつとしめて呑ます「くら」心をぐつとしめて下タハ明はなしか「女中」うさァござりませんこれからだん／＼夕べのきやく人のはなしや何かをしている所へ「新三」「二兵衛味著」くるなにか大きなこゑをしながらせうじをあけて「新」先あけましてハけつこうなはるると客と女郎のまへゝ手をつく「くら」増兵衛さんいまおきたといふか

ほだの〔増兵衛〕（どうりながら）ゆゝゝゝゆふべあゝゝゝゝ淺田やへ出てやゝゝゝゝ八ッじぶん迠のミやした〔新〕わたしもさ〔増兵衛〕うゝゝゝうそをつけゆゝゝゝゆうべハてゝゝゝてまへがいねへからかゝゝゝかん八と出た〔新〕それハいゝがひとつのミやしやう此お盃ハ〔金〕要さんのだ呑で向ふへやらぬか〔要〕（ホイト盃を取てのミ新三へさす）〔新〕これハひとつ上ケませう〔要〕わしハもうさいぜんからいから過たから先〻〔新〕さ（トーはいうけてのミ金十郎へさす）〔金〕まず〱押へましやう〔新〕でもこれハひとつと（またさせばさかづきを取て）うやなら〔金〕そんならおあいと（増兵衛へさすそれよりさかづきをやつたりとつたりしてすこしはなしもたへたじぶんに）〔新〕それはいゝがしやうばいにちつと身にしミやうと（あふぎをとれば）〔増〕そゝゝゝそうさのふと（てうしをあわせおしきせの高尾のわの夜なかゝらしまひまでうたふ此うちミな〱だんまりにてきくそれをうたもしまひじぶんになると）〔金〕（たつておどり出す）〔要〕かねにうらみハかづ〱ござると（けふかのこへ國ぶしをまぜてうたへバ）〔増〕（さうおうなことをひく）〔女中〕金さんハどうもあの手つきがめうでござりますよと（いへハほんニめうかとおもひこくうニおどる夫をおどつてしまひちとくたびれたていにてたをれる）〔女中〕どなたもちつとてうづにいらしつやりませんかと（いふハ要介がどうかとこをいそぐやうすゆへ女中きどるこゝろなり）〔金〕そんならもう一こんやりましやうと（おきるこのときにしやうじのそとより）〔若者〕三ッめのおなをしでござります〔女中〕もふあく〱よ〔金〕（さかつきをとつて）そんならこれでおつもりじやと（のミながら）〵うたい池のミぎハにつるかめの寶萊山も餘所ならず君のめぐミござありがたきと（うたへバ）〔要〕ヤアハアと（はやすそれを盃も引れハ二夕人ハ小用にゆくげいしやついてゆく此あいだすこしのうち女郎きへ二なくなる夫を二〆人ハとこへはいわバ）〔げい〕さやうならごきげんようと（かへるあいだもなく女郎來てんでのところへはいる）〔茶女〕きさんさんおかへりハへ

【金】けふハ宿に用事があるからはやくかへらねばならぬ【くら】何けふハかへすものかとハいづれいふことばなり【茶女】さやうならごきげんようと　かへるそれより要介があひかたおなかハ久のきやく八のほうへゆきのんでいるとミへこいつかうよ・つかぬゆへに要介大きにかんしやくをおこしのつといでゝ金十郎か方へゆくしやうじを明てあいさつなしにびやうぶをあける　【金】これは不禮千萬なあいさつなしにいかゝいたした義じや【要】別の義でもござらぬが先おきゝなされ身どもとても貴公とても大セつな金銀を遣ふて氣の保養に來るのじやそれをどこへゆきおつたかけさから今もつて一かふにきをらぬそれも一度や二度の事なら了簡もしてつかハすがたび〳〵の事故けふハ茶屋へかゝつてきつとたゞさねばならぬ【金】貴公もはらを立ふかひつきやう申してこれば先ハふじんのぎじやまづ〳〵りやうけんなされと　いろ〳〵になだめるおくらもおかしくてこたへられぬけれどもまじにていろ〳〵なだめるところへ　【なか】　來るせうじのそとにてすこしやうすをきいてすつとはいる　【なか】要さんなんでございやすすこしわたしが用をして來るうちもう人のところへきてじやまをしてお出なんすまあようがあるからあつちへお出なんしと　よう介がふところへてを入レだくまねをすればいまゝで火のやうになつこいた要介たちまちこんにやくの様に成り　【要】何ンのようが有ルこれハおもしろいなんのようだかきゝましやうと　たちまちのろくなつて床へゆくそれよりあとハ【金十】ふとんのうへにあぐらをかいてのんでいる　ツふく【くら】金さンなぜねなんせん【金】あまりねるとばんに又ねられぬから　トいふゆへいつゞけと見へたり　【くら】まアねなんしよ一ッ寸はなしが有ルから　トいふのハ此ころ清十郎トいふいろ男にやる金を此金十郎にむしんを云ておいたゆへにその噺なり　何はなしがある大かた此ころたのんだ事じやらうずいぶん承引いたしておる【くら】　金十郎がきせるつゝをひねりたから少し

ふろへごゑ　おまへもさだめてなんとか思ひなんしやうがこれといふのもたつた獨のかゝさんの病氣
どうぞしてほんぶくさせやうとおもへども何をいふにも金がなければよい藥もとゝのはずよ
い醫者を頼めばとてもびんなくらしをしていれば藥禮とやらもならずほんにかうしてゐても
つそくらう＝なりやすと　おもひきつたもんくたいふ　【金】そりやもつともな事じや身共なども國元＝は六十あま
りの母をもつておるがとかくかけがへのない親の事ずいぶんともに大せつにするがよいと　いゝかけ
てふところより金をいだし　さあやくそくの物と　わたせば　【くら】おやをやけふでなくても能イものをさやうならと
とつてすゞりばこの引出しのちやうまいをあけて入レそれを一ふくのミスつぎかへハイト金十郎にやつこすぐにまくらひきよせ金十郎かまくらのあいだへ手をとふしぐつとだきしめれば　【金】おゝつめたいあじ
や　此とき傳龍寺のカツ八分　ぽん／＼　おりからはしごのおとばた／＼　【若イ者】子供衆おちやをくミなよ引　これは筋違へんか新川
邊の酒問屋のかけまはりとミへて二タ人つれニて來ろ【吉五郎】衣しやう付上ぎゆうきのちやべんけい下にはめんちりせいらすじまおびはこはくのあいおなんどつむぎのなまがへいろのはゝりこんミぢんのもゝ引ヲはきそろばんしぼりの手ぬぐひをいきニかぶりふところでをし
ていたこの下ノ句ばかりうたいながらあがるひとりは　【伊三郎】衣しやう付は吉五郎ににたりよつたりのなりあかいさんとめのかけ風呂しきへさらしの手ぬくひヲ通しかついて來るなりはなにかぶつきうなものなり跡よりちや屋の女中ついて來る吉五郎はいつものきどりにてう
つかりとおくらがざしきへはいらんとすれは　【若イ者】こちらへいらつしやりまし　ト　いふのは吉五郎があひかたおくらは金十郎にでゝいるゆへ也　【吉】ホイこれは
したり　【若者】さやうならこれへいらつしやりまし　【吉】　いきなりにしりをひんまくりいたこヲうたふている　〽そのいたこにいわく　内
の小言もいたこと聞ばさのミつらくはないわいな　【伊三郎】おきやあがれさういふりやうけ
んだからいかねへ　此うちおしきせのさかづきすゞりふたいづる　【吉五郎】伊三てめへはもふそんなまわつてしまつたか

【伊】べらぼうめへ引廻しを見たやうにそんなにはやくまハられるものか【吉】あんまりしつぽをきらねへがいゝ（しつぽをきるとハかけとりのふこうなり）【伊】おいらがやぢをのいふにやァ伊三郎やてめへ此ころきけバでへぶあきねへにせへを出すさうだかそれでハかへつて身の爲になるまいからとくゝりやうけんを仕なをして女郎かいにでもいつてくれろ頼むたのむもおかしからう日本ばしをくそをかつぎやあしめへしさうしたら來年ハ中のぼりにやろうといふやつさ【吉】中のぼりすりやあけのかねがきいてあきれらァおいらがやぢおハさうじやあねへよ第一しやうばいをせいゝだしてする事もきちやうめんにしておいてそしてあいだにやあ一ぺんぐらゐハ女郎かいに成りとも芝居なりともいけといふからおいらァそれをさかさまにとつて女郎かいをせし出し物日〳〵のする事もきてうめんにしておいて間にやァ一ぺんくらゐハ商ひもするつもりだ【伊】おきやあがれ手めへがよく物日をきてうめんにする風かへと（むだをいつている所へ【米女】来るほんとうならハきつとついているところなれども客人がこゝろやすいゆへ油うつて来るつゞいてあひかた二人【くら】【ミちしば】来るくるいながらしやうじをあけてはいる）【吉】ごうぎにすましたあるきやうをして來るぜへ【くら】これは八文字をふんだくせさ【伊】何犬のくそをふんでくせへト【くら】しりやせんよ【吉】けふハたまらねへつらハほんぬりだぜ【伊】ほんなァ能くてへらにぬつた【ミち】ばからしいしつくいじやァあるめへしすきな事をいゝなんすよ【くら】あんまりほうぐ〳〵へいきなんすからいつ

そ口(くち)がわるくなりやしたよ【吉】なにおれがそんなにほう〴〵へいくものか【くら】うそをつきなんし十三日におたつどんよく淺田屋へつれていつたの【茶や】よう虚言(うそ)をおつきなはいますよ【伊】さあ又いやミがはしまつたいろおとこハうるせへもんだ【くら】さやうさおまへににてさ【伊三】おれににりやあきしやうまでかくだろうがまさかそれほどでもあるめへなァ ト小じよくのはなをつまめば【小じよく】おかあしなねへ【女中】そんな事ハうつちやつておいてまづひとつあがつておやすミなはいまし伊三さんハけふハたしかおいそぎだからと てうしをとれば【吉】一はいのんで伊三郎へさす【伊】のんでくらへさすそれよりさかづきをやつたりとつけたりして【吉】勘八(かんはち)でもよぼふか【伊三】てめへはいゝがおいらァいまのがきにけへるもんだからおそくなつちやァわりいげいしやハよしやな【茶女】どなたもてふづにいつておいでなはいましそのうち床(とこ)をとらせておきましやう【二タ人】ヲイ ト立て小ようにゆくこのうちくらミちしばへきやく人のところへわまつて來て夫ゟ二人ハ小用にいつてかへり【伊】手めへこんやハどうする【吉】おらァとまつていくべへ【伊】うちやァいゝかへ【吉】しくじれハ又いそだむつかしい咄(はなし)はねへ【伊】そんならおらあいゝかげんな時(じ)ぶんにさきへけへるぜエ トいふハとこが二かいと下ざしきゆへ也ことにこゝでワかれねバ作者(さくしや)も少(すこ)しこまるすぢゆへ伊三郎きどる【吉】そんなら又二十日にあふべへと ワかれてそれよりてん〳〵の床へはいるほどなく吉五郎あひ方【くら】來(でき)る此おくらもはじめハ吉五郎とふかき中なれともさきでゞ外におもしろき事お出來おくらもほかに淸十郎といふいろおとこをもちいまは中くらゐな中(なか)となりているしやうじをあけて 吉さんねなんしたかへ【吉】けふの 客人(きやくじん)ハなんだ【くら】それかのはなしのりやん

さすかねへ（トかほをしかめれバ）「吉」そんならあちらへいつていれバいゝに（口でハいへどいまさかやるきハなし）「くら」今までいたからよいわなよくおめへもわたしをじやまにしなんすよ「吉」じやまにするのぢやあねへがてめへためになる客人じやァねへかせんどのりくつハどうした「くら」上首尾さ「吉」よくかねをほしがる女だぜへ「くら」さやうさわたしやこん度の世にハ佐渡へうまれてかねほりの女ほうにでも成たいものさ「吉」さとでかねほりおわるかろうと（こぢつけれハ）「くら」ようしやれなんすよと（まくらの間へ手をとふしたきつかんとすれバ）「吉」よせうるせへと（あしにてやぐをはれるさのミうるさくもなけれども得ていふミへなり）△此所いろ〳〵おもしろきはなしあれども小本ゆへこれをりやくすそれよりやゝあつて「若者」おくらさんちよつと御めにかゝりましやう（これハかの色男清十郎が来たのなりおくらもかねてけふかあすハくるやくそくゆへこゝろハとびたつほとうれしけれどわざともつたいを付てたゝずに居るゆへ）「吉」客人ださうだはやくいきやな「くら」どうしやうなふじれつてへ「吉」いゝちれつてへのふりをしやがつてからに「くら」よういろ〳〵な事をいひなんすよと（いゝながらおきて一ふくのみまたつぎかへて）ハイト（やつて）そんならちよつといつてくるからねていなんしよ「吉」もふ來ずともいゝわへと（いふなと大きながまん也それよりおくらハ金十郎かまへをそつとふりはしごをばた〳〵おり清十郎がかたへゆく清十郎ハ此ごろおやちのまへをかぶりふるいやつなれとも少しすくれぬていにこぼう〳〵としている）「くら」（しやうじを明て）清さんよく來ておくんなんしたねと（清十郎がかほをミれバすこしおとろへたるていにて大にふさぐ）「くら」清さんどうぞしなんしたかへ「清」おれもたん〳〵のふ首尾で此ころハさるかたへいそとなつて居る所がわるいときにやあわるい事ばかりあるものさあいにくとびやうきにとりつかれてけふもやう〳〵

出て來たハなそして人のところにゐるといふものハしミなものよ醫者にかゝるとてもミんなむかふのいたミだからたいてい氣の毒なことしやねへしかしこんなことをいつたらさぞあいそがつきるだろふ【くら】もつたいないたんであいそがつきやしやう此間中もきいておくんなんしあんまりたよりがないからそのことはかりきにかゝりいつそのことに酒でものんだらワすれもするかとおもへバいたこのとふりなをおもひ出し三味せんでも引たらまたわすれもするかゝおもへバまたハいたこでおもひ出しほんに〳〵此あいだ中のやうなつらい事ハござりやしなんだそれでもおとゝいのみでやうやくきがおちつきやしたと　なきつなかせつするおくらがとこにハ引かへてとなりざしきハげいしや三くミの大さハぎ中にも新三があだなこゑでめりすや

万年艸

へおなし世にすむかひもなきにごり水流れ〳〵のうきつとめふかき中をもとふさかりつらさ語らん友さへなくたれにおちこちたよりのないはどうかこうかと案じすごしてけふもくらしつあすか川いふにかひなき捨小舟　ツンテ　チヤン

【くら】ほにんあのめりやすハてゝどわたしがこの間中の身のうへといふもんで御ざりやすほ

んにそれハさうと此ころのみにいつてよこしなんしたことをと（ふところより出すかねハけさ金十郎がかたよとつた金なり）〔清〕やれ嬉しやまづこれさへあれハかた〳〵のほうさへすませれバまたうちの都合もよくなると（いたゞく）（まねをしてしまへば）〔くら〕ばからしいなんのいたゞきなんす事がござりやしやうおまへのことをわたしがしないでよいものかへ〔清〕そんなら又と（ゆびをおりて）こうと廿七八日じぶんにきやうけふハはやくかへらねバせわになつて居るうちへたいしてもすまねへと（いふハ大きなあくしんなりおくらもいつぱしいろ男のつもりでおきしが清十郎ハさるかたにおなつとてくびたにほれている女郎あり此かねもおなつかためにさいかくさせたの也おくらハそれとハゆめにもしらずこよひもかへすきへさらにたけれどもこれも清十郎がためとおもひこぼすなミだをおしぬぐひ〳〵）そんならちつともはやくおかへんなんし〔清〕（わかれをおしむていにてずつと立）そんならずいぶんわづらハねへやうにしてくれ（とかなんとかしやれぼんをミたやうな事をいゝながら出てゆく）〔若者〕これハおはやうと（ざうりをなをせバ清十郎ハかどを出るより早くいさミすゝんでおなつがかたへゆきそれよりおくらハもとのざしきへゆきないたかほを手ぬぐひにてふきせんのきやく人立のほうへゆかんとたちそふにすればあしもとにあやしきふみ一本おちてあるゆへ取てうハぎをミれハ清さまへるなつゟとかいてあるおくらハさう〳〵ひらいて見れバ）

其ふみに曰

返〳〵

きのふしハおもひかけなき御けんいたしいまに〳〵さりやらすたのしくそんしら〳〵まつた其ふしハむりなる御むしんもうせしに何やらあても御さるよしにてさつそく御聞すミ下され淺からぬ御しんのすゑとやま〳〵御嬉しくそんしら〳〵さためし何とや御にくしミましあらんな

れとゝこれし迚もくかいと御さつし下されかしくわしくハ御けんのふしとたんともうしのこしまつはあら〳〵めし度かしこ

これを見るよりおくらかすがたハ鬼女(きぢよ)のことくになつてさても〳〵くやしきことゝねたりおきたりしてくやめどもしやうもしやうもなくひとりなきふしていることのときまハし床の吉五郎ハまてどくらせど来ぬゆへひやうし木のかんぢやうはかりしていながらおもハすまくらばこの引出しをぬいてみればもみくちやになつたみがらはんぶんありひらいてよんでみれば

其みに曰

まつたせんしハ何やらはか〳〵にわけあひにてもありなんやうに御うたかハせのよし御おしえありしなれとももつとも吉と申きやく人それかしかたへ久かたよひ候へともいつそ〳〵うぬほれの中の字とやらんしみたれなるきやく人にてしみ〳〵しれつたくくかいなれハこそとまゝならすもあきらめかよへハこそよひもいたせしと申はかり中〳〵さやうなる御事ハちりほとも御さなく候かくまてもそんしおり候ににくからぬ御くませとてもなくそれを御まへゐ=ハとやかくと御うたかハせありしハひつきやうわからぬ御しんかとしみ〳〵おんうらめしく

などゝかいてあるゆへましてこよひのきやく人へがてんがゆかぬとおもふところへかのふみのやうすことに日ころから中の字の吉五郎なれハ大きにかんしやくをおこしいまにくるか〳〵とおもひすましているおりから上ぞうりのおとばた〳〵しやうじをあけしやかれこゑにて

【くら】吉さんなぜさつしてゐるなんすと じやうぶをあけてはいる 【吉】おくらがかほをつく〳〵みるにふだんのがんしよくとハ大きにちがつてなきがほをしている故 【吉】

ようがあるからそこへすわりやそしてまあうぬがつらァなんといふ面だそんなつらあいくらはつても一しやうけるきづかひハねへけれどもと（その中でもしやれをまぜて中の字をいへハおくらハこれハしたりがんづかれたとハおもひながらなにくわぬかほにて）【くら】吉さん何がそんなにはらが立やすへと（そばへよれバ）【吉】（いきなりにおくらがたぶさをとつて）なんではらが立やすもすさまじいわへよくうぬァ人をふミつけにしやあがつたなこのふんばりめへ大かた今宵のきやくもあのやらうだろうおれもさうとハかねてしつてハいたが此ふミにこんな事が書てなけりやあやぼにまみへゝつまをとるはなしもねへがうぬが色事をしやがるに人まで手ならひ子のかへりを見るやうにつらをよごしやあがることァねへハへ此おたふくめおれがまだこんななミだもろいものだからうぬがやうなばゝァでも來てやるといふもんだハへうぬがつらァミやあがれ引まハしののぼりじやァねへがしわだらけだハへト（まくらを取てあたまをしたたかくらハせれバいまハおくらも一りつまらぬ身となり清十郎がしうちをおもひ出せバなか〳〵吉五郎かきげんを直してのとふしてのといふところでハなけれどもこれもくがいなれバしかたもなく）【くら】（なきながら）おまへのはらをたちなんすハ少しもむりとハおもひやせんがこれにハふかいやうすもござりやすと（ぬけさうにすれどもなか〳〵吉五郎がりやうけんする所へハゆかずこくふにけたりふんだりするところへあさからのゐつゞけ【金十郎】【要介】ハ小ようにゆかんと吉五郎がざしきのまへをとふれバおくらがたきこゑのするゆへたちとまつてきいていれバ）【吉】何ふかい様子があるくそがあきれらァまぶだのあぶだのとあのやらうもさうべつ氣にくわねへやろうだあいつもたしかぶざだろうわけがいろ事をするにやァてうどやしきものがさうおうだと（いへバ金十郎ハわがことおもひ大きにあつくなり）【金】要助さまおきゝなされ何も

のかれしらぬがあのとふりで御ざるなんにしてもにくいやつが有ものでハ御座らぬかそれに付てもおくらめハかあいそうにワしじゆへにこそはんざいたすといふものじやと大きにりやうけんちがひをしてほろ／＼となみだをこぼせバ【要】何ンにしてもきのどくな義で御ざると二タ人ハいろ／＼ひやうぎをしていろしやうじのうちでハ【吉】うぬもしじうハおとつさんごはんといふもので一ッしやううしろ帯でくらすふうだとこくうに金十郎がきにあたる事ばかりいふゆへ金十郎もこらへかねて【金】もうりやうけんハ相なりますまい身どもも一合とつてもさむらひじやとあわのなるとのもん句をいゝ出しすでにしやうじのうちへはいらんとするところへ吉五郎がとなりざしきより出てくるきやく人ハ作者の【水吉】けさから來てまへしをくつているのをならすよいからのさわぎにてまんぢりともせずだん／＼やうすをきくところがみなものかまちがひにてことに金十郎が中へはいるとはなはだ事かむつかしくなるゆへさう／＼とび出しまづ金十郎にむかひ【水】まづ／＼御りやうけんなさいましおはらたちの所ハ御もつともにこざりますが今おまへが古人團十郎をおこすとなを／＼あの子がつまらなくなりますとおくらが身がたになつてだませば【金】なるほどさやうおつしやればさうでござる【要】なるほどひざともだんこうでござるいま貴公がかゝこれいわつしやるとなをもつてあのものゝなん義これハかたじけなうござる【水】なにさおめへさかうらい屋きどりにてようやく二タ人をとこへおさめるそれより吉五郎がかたへゆきしやうじをあけてエヘンごめんなせへ吉五郎がかほをこれべまんざらしらぬものでもなきゆへたがひにきのどくになつて吉五郎もよんどころなくだまる【水】だれたとおもつたら吉さんかおらァおめへのおかげでよいからさつばりねやァしねへわななんだかやうすハしらねへがもういゝかげんにしなせへはらもたとうがそのところハわたしが手をついてたのむからいわれてよんところなく【吉】なにおめへがそんな

にいつてくんなさるものをなによをいふものかな【くら】これハおまへにまできゝかせもうしておきのどくで御座ります【水】そんならこれでひとつのんでくんなせへ ト 三人よつて中(なか)なをりすりや明(あけ)のかね 【くら】日後へんにおほへていなんし

跋

此二ツ蒲團の絨たてはなまよみの甲斐の驛路の馬のうへに數枕の定紋ハ荷印に付床入のかね言ハ猶二寶荒神にひとし妓妓の口輕しといへ共おもひ顏なる新造を下荷につけ本間の遊ひとならは豈四十八貫目を厭ふ事なからんやこむろふしうたふ馬士の口取肴もあらむまと云へは心の駒の手綱容さす一坐趣向ははねるとも實くら替する事なかれうてる轡屋に斷聲のひむ家なくいさみの客もやれらけてよふ天津女ハ初衣裳の仕付よきにこそあれ深きなしこの長持通ふれハ酒宴齋のしやれ夫よく宿次の衜法を覺へはな捧へ回れは予跡ほうを利肩にうけから尻を引から

けて云ふ

蘭奢亭香保留誌

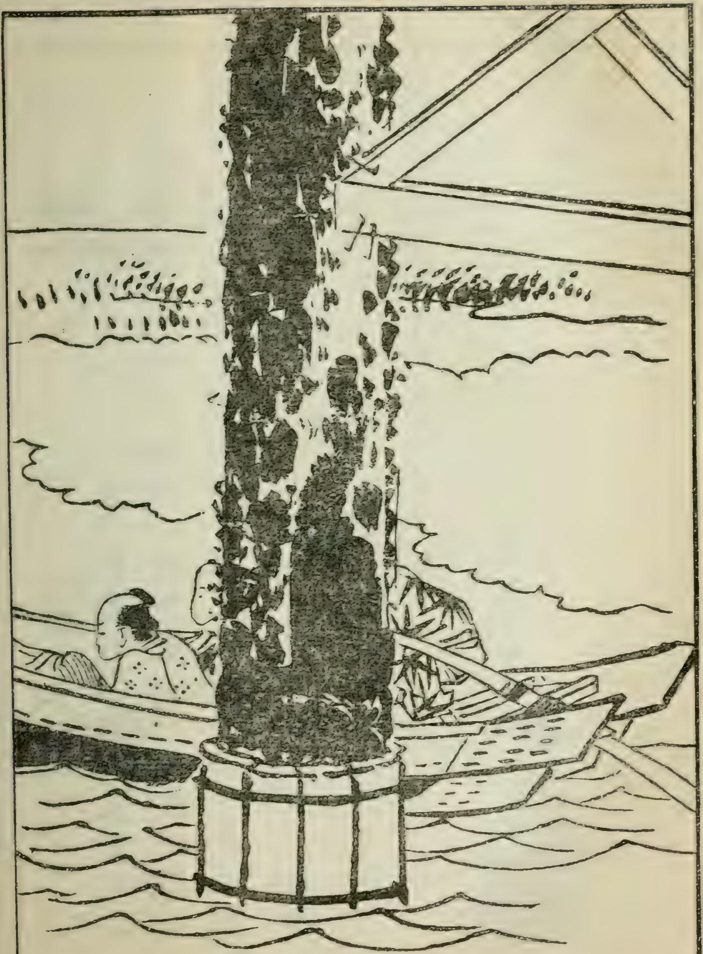
三千の紙屑

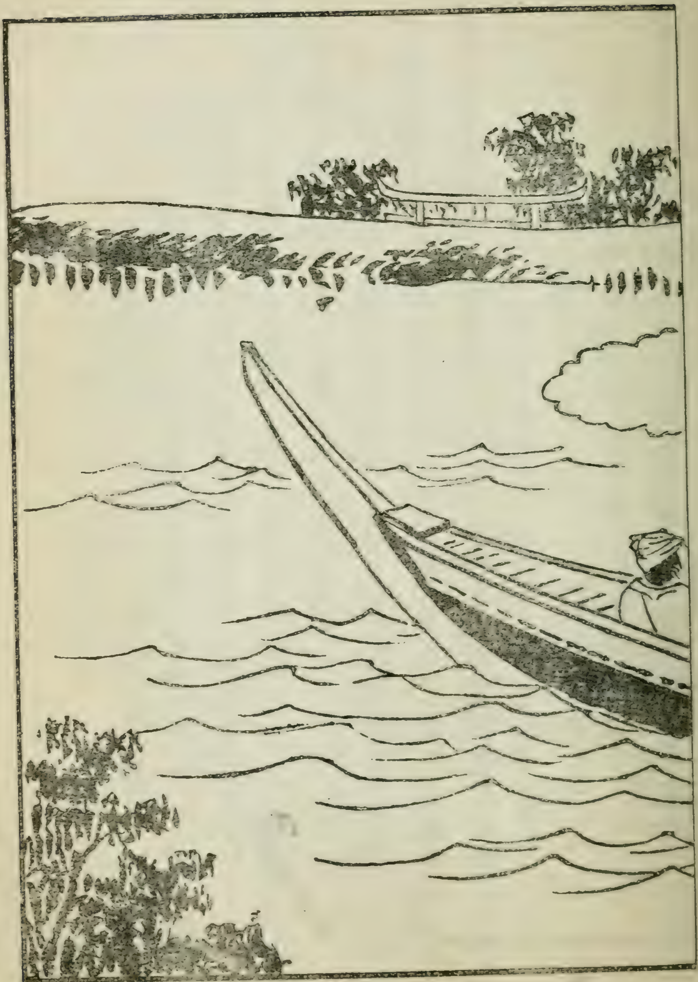
道之紙屑自叙

三千人の遊女を集とれ。常盤津戯曲の舊文章にして。三挺建の猪牙水撃三千里の山谷を遠とせす。三枚の罾垂天雲を切て。直に書三の三蒲團に登り。三人一坐の三會目に。鄽三絃をかり筆の。かき集たる三千の紙屑。洒落本頗早速の間にあひ返しの三紋羽織。古手な趣向を新宅にけふ突出しの新作としかいふ

ねかふ御けんを
かのとのとりとし
格子あらひの日

うらひと 忠眼





初　帖

樓門高臺皆充滿男女老若喜樂攸と三階の棟札の通り名にあふ戯場もさかひ町外ハゆきこふ人の山新狂言ハ作者の山客留大入の札を飜し仕切場の青簾ハ仲の町の俤ありて木戸番の聲ハ褒持のごとく二階の階子ハ齋日の山門に異ず東西の桟敷ハ毛氈に甲乙を爭ひ切落しの人いきればば煙艸の烟りと共に雲を起す内格子のうそ暗にハ親馴の役者を請し末室の小便臭にハ手前當の結びを甘ンず前臺ハ正面を稱して聞へざるをうらミず後堂ハ聞ゆるを貴んで尻を見るをいやします本ン舞台まで見物を押出して國大夫か聲すゞしく東壽府川撥音さへ渡る若手三枚（高麗藏 粂三郎）三津五郎の大當り隱居の感涙を流させ生娘の笑壺に入らしむはやデンガラの打出しに崩のやふに崩れ立貧福得失目前に茶屋付のお客ハ挑灯に先キを拂ひ追込の一幕限ハ尻をはしよつて飛ブ桟敷番に大小をせり立て門限を案じるお屋敷あれハ腰の廻りをねらふ惡玉ありき〱評判の聲につれて【くま】（手ぬぐひを一ツはたひこほうかふりをしながら）八やァ手めへてんふいそぐもんだぜエこれからすぐ新道イいくか【八】ムンニヤ是から乗込買つてけヱらァてめへあしたァどこた【くま】あさァいせ屋の藏の建めへヨ【八】夫じやァけいられるな（酒かのめるといふと）【くま】あすこもけちなうちヨまた〳〵

ニ水をわつてくられせるだらう【八】くそがあきれらァト（高聲で肩をすりつけあつて行）その跡から（よねの字引を出すにもふ四五年といふ年頃のばアさま）孫娘を娘とふたりして手を引あとに十四五の調布に辨當の包をもたせて【ばアさま】コレサおちや（此子の名はおちよとかおちへとかいふとみへたり）あぶのふごさるャレ〳〵三田八れ（三津五郎が幼名）見ちがへましたせんの三津五郎が若ィ時に其まゝで厶ルァ、なんぞまだ〳〵【まご娘】おはァさんさつきのものをおとしておくれてないよおつかさん越前屋のうちれこゝからまかつたけねへ【よめ】ナニもふひとつさつきの路次さ【娘】ナァニこゝだものを【娘】さつきれ爰からまがつたが人がこむからさきいろじかよかろうノゥ文吉【でつち】アイ玉川鮎のろじかよふごさり舛ス（人がをして來る）【娘】ア、モシおはァさんおあぶのふ厶リ舛スコレおちやおめへれ文吉におぶさりな文吉その包をこつちへよこしての此子をおぶつてくりやョ【でつち】アイさあおぢさんおんぶなせへ（ト行その次キへきんはんのおやしき向しく御上のむすこ）【好】コレ丹公足下ァ何ニかはねかしたせェ犬糞しやァねへか怖れるせェ【丹下】ァニされれヨ犬のゥ尿たァまらなさろ（トふところのおくらはんしを出してふくところを人かおすゆへ）サテ〳〵げへに群集たァコレおしくさるなへしやけるわい【好】斗筲之人數不遑さ今日ッた大キにはやそこ元ノゥお蔭でノゥ遊山ノゥ仕ッた去ながら岩井ノゥ粂三郎にれうかれ申たァ若旦那と褒美したァカ高麗藏たァノもし【好】そうさあの三人れ當時是三戲場のほり出しさにひも玄治店も（にいれ御存じこま藏の事玄治店れ粂三郎か居所）おしつけ一大

名妓になりやしよふよ時に公是から乗舟の東深におらずんハ寓宅ハとふてこぜへすどうか不可といゝそふな顔色たの【丹】アニふかとハ國元ノウテ取れる魚の事か【好】コリヤア丹公前後の名言た深川か假宅へ氣ハありやなしやの都鳥さ【丹】にこついて ソレハはや一段の義たかトいつこす 持チ合セの所が【好】ソリヤア嚢中自錢ありさしたがおめへ公門を入ル時も窮屈如こしこまつたふうする たりじやァねへか【丹】御門ノウ義ナかねて定七め絡ひせろと申付置申たァて 定七は丹下がけらいとミへたり

【好】妙〳〵魚神不識の謀策た 卜田舍芝居と通俗ものをよミあわするやうにはなしつゝ行 おのがさま〳〵いろ〳〵に歸る中にもふき屋町の木戸際玉木屋を出る客人三人【巴丈】 年の頃廿四五なれハまだむすこ株にていつたいしづかなる生れ萬事せうちなれども知らぬかほをしているふう 利辨さん嘉六か調子ハむまいものだ子【利辨】 いつたいふか川したてそして年ハ巴丈より一ツ二ツわかけれどしよじしらねへといふがきらいのやうす ソウサすごひもんだそふいつてもあひッァ先ンの瀧野屋か日にやけたといふ男ふりたなせか見キけふハてへぶふただャ 深川とハふきひたといふ事 文公いまつから假宅ハとふだけふハおらァ點ハやめておめへがたへつきあゝといふはらだ【文州】 是も利辨と年ハおつゝかつゝなれといつたいさばけた生れつきよし原でハべつして女郎におもしろかられるふう也 夫もよかろうが巴丈さん内かたのおしゆびかあんしられるでョ【巴】ナニサそりやァどふてもはかり事が有リやすが利辨さんか例の團子さ【利】ホンニ實の事ョ是からそれくひ乗とやらかしやセう若旦那それせんとちうと閊ッかぢつた所へいきねハ文公ゐゝいなせへ【文】ソリヤア大變な理屈たあそこハ巴丈さ

んかいかつしてハわるいて子それともお胸にありやセう【巴】ソウサあそこハもふおもしろくねへから利辨さんの氣にいつた内へ上ろうハな【利】ソリヤァこけなセんぎたセおらァなんでも儞玉てなくつちやァいやだ【文】コレサ夫しやァおれがそこらぢうてせめられるハな巴丈さんも行ても見なさりてへたらうが今ゆきなさつちやァ甚たむつかしい事になりやせうおらァすゝめてにハならねへ【利】ナニきつい事ァねへなんのかのとぢくねだからけんのミョウくらわすはかりさ兄キぶんキつて行なセへし【巴】ナニモむつかしくいわれる事ハねへか子こつちからいふはかりさしかしぶくりにいくもおもしろくねへからいつそだまつてのつひやろうになつて利辨さんにつきやいやセう【利】ソシテきまりといふもん日文公とふだ【文】巴夫の此間のやうすがてんゆかずと思ふゆへむつとむつかしひわけにてもあらふかとあんじてどふもけふハあんじられるが巴丈さんおめへきげんよくして歸りなさるなら御同道た【巴】ヨシサしやうちさだまつてのつひ面をしてかへりやすよ【文】ソレそれかわりいよとふかまたに落付ねへか【利】なんのこつたお袋かへそくり金をかしたやふにそんなにあんじる事ァれへとはなしながらに歩行内心の胸にひかされていつの間にやなきはらのふなやどむさしやのまへ上り口にこしをかけていた【せんどう】下女旦那ちつとおよりなせへし【利】ふるなとつてもよらァとこしをかける【巴】【文】もおなしく【女房】おくから茶を三ツぼんへのせてきて利辨さんやうおいでなさりました二人へ向かひあなたかたちつとお上りなさり舛シ【巴文】アイ【利】おばさんお久サしぶり【女】

此頃ハとんとお出なさり舛シン【利】モウいけやせんのさすへものひりたしかゝつていやすそれて出かけやす【女】ハヽヽそりやアおめでとうムリ升スけふ大ぶおそくお出なさり升子【利】いきやアいくがけふハうハ手さ【安】假宅かへ【利】キリといふもんだ【安】コイツアどふいんもんだかわかりやせん子モシ旦那かた新地もすゞしくつてよふこぜへ升ス【文】ソウサ夏ハいゝ所たの【利】新地が明たらいかさアなるめへ万吉ハおしい事をしたの【女】さやうさかわひい事をいたし升たホンニ尾花屋からおふミか【利】久サしいもんたりんとうてもふひてくんねへ【文】時にモウよかろう【安】舟ハ出來ていやす【利】サアいきやせう【巴】アイおせわと　三人かふねへのる

【女】もやいなつかまへて　さやうなら御きげんよふ安どん火繩ハいゝか【安】カチヽがありやすと　こぎ出すふね

に著くふねのさしもに大川も陸と變じ橋の上への人にハ清き月かけくもたらん

【巴】橋の上へに鑓かたへぬとハむかしからのせりふだか橋ぐひに舟のかゝらぬ所もねへとハ蚊をきつうして五百兩だねへ文さん【文】サヤウサせんとおめへの所て見た更科の記とやらにかいた時分ハ馬の上に弓をかづいても夫が見へぬほどの草だらけの所たとかいふ事だつけよ【利】ソウイツア打毬けへりといふもんたゞの　コレ安ヤア手めへ鳥羽瀬のおときといふ新子を見たか【安】イヽエまだ見やせんおそこでも京たんおふミ又おしななんそといふ子アいゝ玉さ【利】アノおふミャア去年坂町にいた子たツレ文公おめへかかきこ

おちばしたやつョ【文】フゥそれ〳〵去年の秋おめへにつきやつた時のかあひッァ大わらひたッけ【巴】京たんのかけ合とやらかあつた時のか【利】ソゥサ文公か京たんれこふせいさ【文】あの時れぶつづけたてると漕行舟のさま〳〵に小樓の家臺囃子れ三弦の屋根舟を驚かし猪牙舟の囃子町れ知つたお客の舟を見だすひつそりかんの納涼ふねれ羅漢のやうな誹諧連帯を打ふねのひだるそうにうろ〳〵舟の事足りて行ちがふ舟の中に【げいしやとめ】 是れさる店もの客人か宿つたやの芸やもち女郎をつれ両國へすゞミに出たの也芸客人と相方妓しや芸やの女若イ者廿六人一座の下直あかりの屋根ふねかれ宅のうちは部や持チくらいにてれ新造したいにてつれ立とゐすむ也 ヲヤ文さんだョ トすだれた上レバ多町きりやの女房【おつた】トレヲヤ〳〵巴丈さん文さんお久サしうムリ升ス子 二三日もとふさかろとお久サしいといふかくセ也 【女郎初里】 わらいながら うらさんか待ッていなんす 此せりふ小聲にてきこへす 【初星】 ぶつまねをする 【おつた】 甚平を内におきました【巴】【文】 うなづく 【おつま】 サヤウナラ後程 此うちふねよほととふくなる 【つた】【若者】【とめ】【女】 ミな〳〵おぢぎをするうちにしだいに舟れとふさかりいつあづまの橋をこへて駒留石を右に見て花川戸のうらきり屋のまへ 【舟頭安】ヲイきりや〳〵【若者甚平】 かけて来てみよしをつかまへて ヨゥいらつしやりいらつしやり升シたすぐにあちらへいらつしやり升スカ【巴】ソレカよかろう【甚平】サヤウナラとおかをかけ【安】 舟をもどして とけへつけやす【利辨】彌玉のかしへやらかしとふねれまた上手の方へ櫓の音がギッチコ〳〵客人の胸がどき〳〵

二帖

眞乳山夕こへ來れハ庭崎屋隅田河原と詠いけんむかしに今ハ引かへて二上り潮來の文句さへ へほんに苦界の流れの此身すまぬ浮世に墨田川馴し廓の假住居ハ山の宿から聖天町馬道今戸堀かけて建つられたる寓宅の往來の通ひ舟茶屋の枕に假寐して歸るふねあり行ふねハ二人舟頭取付艫のキチヨ〳〵ハ乙女か梭織かと怪しまれザハリ〳〵の水音ハ麻上下の大連よりもすさまじく飛白浪のありさまハシヤホンの玉より細工よく灯しつれたる挑灯ハ秋夜の蘭燈几徹中洲のむかしもおろか也〇三人一座の座敷も床におさまれハ【利辨】ハ一ツはし仕こなした氣取に二座敷のうちからひとり深川てんの未至通をならべたてゝ廊下座敷の床のうへに大胡床のあげぎせるているところへ【相方卷絹】年ハ廿二三一ツたいつんしよてあかかほんにいわれた事のねへかわり内由でもかわいがられぬふう也ナンダヨ此子ハヨさつきの事をわすれめへにヨト禿をしかりなから來るとむかふ座敷へはいりかゝる新造を呼かけるコレさんやよひさん新ハ聞付すにはいつてしまふすかねへ引トひとり小言をいひなからからかこをあけてから紙がはつたりとたをれるエヽモウすかねへとはつれたから紙をはめ二跡を引ケかけておくハわけある事也假宅すべていろ〳〵のふうふすまなどをきうにこざをつけて敷居かもいへはめるゆへいづれも具くらいな事也其家〳〵の容のほかハ屏風がかも居よりとんだ高かつたり又らうかを通るにも屏風の内のむつ言かきこへるほどひくかつたりする也是諸通子の御存じの事也【利】ふりむきなからヲツトしづかにしてやりねヱ牛部屋の吹矢といふもんだ【卷絹】ムウトにがわらいふとんの外へたんまりてすはる【利】きついおかてへ爰へお出なせへ【卷】アイサといつたはかり【利】へたはこをつけてくれそふなものたと思へともそらもせぬゆへ自身すいつけかゝる火かきへてたしなめらさんほうきへ

たそうた【巻】いゝ立しほとおもひ出しなんし取てきィせうと手を出す【利】もしやうちにてどつこひいまからやつてハならぬとその手をかまへマア
いゝ田丁さ火を入るよりやァおめへを入てへと味の上へ引上る【巻】ヲ、いたヲ、いつそいてへョア
、トいたくもねへ手をむせうにさすりちらかしてむせう〱いてヱ〱とかほを赤くして大そうらしくつんとする【利】もなむさんしくじつたとおもへと引ぬ氣てナンダいてへ〱と爰にい
るからいゝしやァねへかごてへそうな引はつたとッても白玉ねりの飴じやァあんめへしのびち
すめへおらかのびたから手出しをしたからいゝしやねへか【巻】ムゥそういふふうでもさん
すめへ【利】もちつとむつとして長雨の雪隠しやァあんめへしそんなにはねる事ハねへハナ【まき】ヲャ
ぬしやァきたねへ事をいゝなんすねぬしのうちハ水氣とやらのある所てさんすかさぞしめつに
うさんしやう子ゥしミつたれといわぬ斗りにすこしあそびかける【利】ムゥ川端の假宅たからさ【まき】アイサぬしハよ
くまハる口てさんす子【利】燒のわるひ土瓶じやァあんめへしといつてハ見たれとこいつひとりて寐るハおしいものたとふそかぢを取直してくれんト
くつとおとなしい氣てソゥいつてもぬしたチャアうらやましい世界たといふハなぜゑといわせんまくらことばそれに取かへてはなそふといふはら也【まき】
もそのくらいの事ハせうちたとわざとはくらしてだまつている所へかねて相圖のと見へてから[illegible]の外から【ふりしん】【花の井】モシヘおいらんヱ【まき】なんさんすェといふなき
つかけに出て行【利】ハいま〱しいせつかくやハらかに出て乗しづまやうとおもつたにとたばこをのんたり鼻をかむだり寐て見たり起て見たりあぐらをかいて見たり立ひざしたり煙のきつれ付のやふになつて退屈まぎれにつまつたきせるを通しかゝると足音
おするゆへきうにこよりをれんじからすてれハとなり座敷へはいる出もせぬ小便にいつて見なからあくしんおこりさだめて今ころは巴丈キ文かうまいさいちうならんとさらへおれひとりつまらぬめにあふもごうはらたつれの手やいへも糸をさし一やらんとぶら〱廊
下をうろつく【文】ハさしきの酒にゑいきつてたわいなく寐ている【相方水濱】年ハ十八九まだ内證の世話になり居るふういつたいあどけなくにうハなる生れてらずから外ざしきてゆつくりとはなして

（きて見ても又文か寐ているふとんの上へあがり片手でうちはをつかひながら）モシヘ／＼と（ゆりおこす）「文」ハウント寐がへり「水はま」（わらいながらちへで文がかほ）（たあたぎながら）「はま」モシヘぬしもいゝかげんにおよりイしな宵からばからしうさんす「文」（おきかへつてめをすりながら）ア、引いゝおもしれいヱ夢を見たものを「はま」（一ツふく吸付て出し）ソレハおきのどくさんす子夫ほど寐なんしてハサアまつとねなんし「文」（すいからをはたいて）どふして夢の継たしかできるものかァ、茶でも水でも一ツはひといふ所だ「はま」今取よせやしやうと（手をたゝく）「ふりしん」（とふりかゝる）「はま」コレさんさつききさんへぬしに茶を一ッくんで上ヶておくんなんし「文」先生ねがわくハ水にしてヱ「はま」およしなんし丁とちがつて爰の水ハいつそわるふさんすよ「文」ナニよしさ「ふりしん」アイト立ッ「はま」（火入をみて）ホンニ火もきへイしたと（又手をたゝく）「禿」お手のなりましたハどちらてムリ升スト（いゝながら来るかりたくのはやりうちなそはまへしかふろたつぬる也）「はま」アレサあの子や「禿」アイト這入「はま」是への火をよく入れてくりやとそしての今さつきにたのんだ水をはやくもつてきて上ヶや「禿」アイト行あとへ「利」（ハふら／＼一ツ提のたは二人ときせるたかた手にさけて片手でから紙をあけなから）文さんのおやとハこゝかへトへへつてもよしかね「はま」アトサおはいりなんし「文」インホヤよくハねヱがマアはいりなセへ「はま」（わらいながら）アレサうそさんすおはいりなんしよ「利」（すつとはいつてまくらもとにあぐらをかきふところ手て）ナンダカ　おうらやましいこつたのいま二丁めかすんだといふ御やうすた子「文」それたから御無用といつたのさ

（わざとしらふ〱しくい）【はま】（きせろでぶつまねをして）アレはからしうさんすョモシへきいておくんなんしぬしハ宵ッか
ら寐てはつかりいなんして今わつちがむりにおこしいしたのさチット目ざとくならつしやるや
うにいけんをしておくんなんし【文】アレきゝなせへおふくろかァノとふりやかましくつてな
りやセん【はま】ちよいとこやェ、わつちやァぬしのやうな子をもつたらさぞせわがやけいし
やうと（一ツふくすいつけて利辨にやる）【文】とかく朝寐をすると內の首尾甚だわるしさ【はま】ナニぬしハあさ
寐しやァさんせん宵寐てさんすァ【文】おれハよひ寐かそつちハ狐どふりてはかされたはづた
【はま】しつたかェョモウ〱おだまりなんしぬしハいつでも茶ばつかりいつていなんすョ【文】
そのはづよ千家だものをヲ【はま】ナントへせんきだとかへ【利】コイツァいゝ花月がまける
の（此しやれ一ツ向おちず）【文】フント（わらひながら）利辨さんだいぶおつかれのおすかた子【利】ナニサそんな
こたァねへてんさしよじそれきらひ事さと（うぬがつまらぬめにあつていたをさとられぬやふにいふ）【はま】（たいかい知つているゆへわざと）卷絹さ
んハどふ〱なんしたへ【利】今火を入レにやりやした留守をあけて來たのさ【文】（もおかしく氣のど
くゆへに外の噺しへ）時に巴丈さんハどふさつしつたの【利】ソウサわつちも是から見まつて來るつもりだ
【文】そんなら御同道といふ所だと（立かゝるを）【はま】引とめもしおよしなんしいま行なんしてハ
わるうさんすョト（文に目でしらせ）ぬしもマアこゝでおはなしなんし【文】ハテ子わるひか子そんなら

マァ先生おめへもこゝではなしなせへ「利」（もさつきからひさしく爰にいたがもしや巻きぬがあとへ来ているかしれずとまたも心のまよひゆへわが床へ帰らふとも思ひ水はまがじろ〳〵ねめてモウあつちへいけバいゝがといはぬばかりのやうすゆへ）インヱもふおちも内へ引取やせうヨホンニ長〳〵おじやまとやらだけ子ト（いやミをいひながら立かゝる）「はま」（へやれうれしやもふ出てゆくかとおもひながら）まだやうさんすれ子「文」モウちつとはなしなせへ「利」きついせじたせと（いひはなしにして出てゆく）「はま」アノ連しやハやつはりぬしのほうかへそうじやァさんすめへ「文」芝の湯しまさ「はま」モウ又茶をいゝなんすホンニどこさんすへコウト八町堀とやらかへ「文」インニヤ「はま」そんなら小あめ町とやらかへ「文」インニヤ「はま」あてゝお目にかけいセうなんでもおやしきてれさんすめへ「文」インニヤ「はま」お組の衆かへ「文」インニヤ「はま」町かへ「文」インニヤ「はま」（しばらくかんかへて）そんならやつはりお方本衆のおやしきでざんせう「文」（ウヽヱ引ト大きな聲をする此うちしじう謂比恭の氣取りでする）「はま」おやひつくりしいしたばからしいぬしれなぜそんなにふじやれなんすヨモウ〳〵しづかにして寐なんし「文」寐てもいゝ事か子さつきおめへ寐るなといつたじやァねへか「はま」アイサひとりじやァなりいセんあつくとこうして寐なんしと（まくらの下へ左りをさす）「文」とんだすゞしい子「はま」（小聲にて）ホンニぬしやァこわい口だヨウ（トほうへたへくひつく）是から跡ハ作者も耳をふさいで聞す一覧の通君子御すいもじ有べし。「利辨」ハ文が所を追出されて巳夫か所へハ水はまかゆくなといつたハなんでもむねのわるいせんぎことといぢわるく巳夫がねやをのぞかんと又らうかを行所を巻きぬがかふらが「ふたば」（利辨を見つけとつかまへて）ぬしやァなん

さんすへさつきからさがしておりいしたサァおいらんの所へおいてなんしとひつはる【利】も握ハまき絹か
まつていろかとうくれしけれどマァまてへ今ちよつと今染梅さんの所ヱ行てくらァ【ふたべ】トひつはられるに心をなたして是から行て一ト狂言かいでやらうと心てうなつきかむろに手をひ
んかまつておいでなんすつれ申さないとしかられィすれ子
かれて來て見れハまだまき絹へいず【利】むつとしてナンタこひ八が品玉を見るやふた【ふたべ】アレサ今までおいらんハ
いさつしたにぬしがあんまり長あるきをさつしやるからてさんすトいゝなしにして出て行【利】ハ万事きつかけかありやこりやにな
つて大きにあつくなりきたらどふいわうかあしたかへつたらおもいれわるくいつてやろうかかへりかけになんてもいたつらをしてやろふかといろ／＼とくふをしているやゝ時うつつて【まきぬ】しばらくの切ゝ幕。お出るよふに貞ゑぐつとふところへ入て
酔きつたやふすでエ、ゝア、いつそせつねへといゝながら床のうへへはらばいになつて枕もとのひへきつた茶
を目をねむつてのむ【利】ハもつていたきせるをまくら元へほふり出してふところ手しててへぶ貞ゐふとつて來たの夫で大嶋のどてら
アきて大盃をひつかゝへりやァ貞見世の序ひらきにハ出られるセへ【まき】フンぬしやァとん
だ芝居通さんすョちつとはなしてお聞せなんし【利】ヲキャァがれしらァきるなへ今迄あき座し
さてゐいさかなの盗ミくひをして貞までか海老になつたのだハ生得信濃國に相違御座なく候だ
【まき】アイサ宵から連衆の所やほう／＼で追出されいして蚊にくわれてまご／＼らうかとん
びをして子供に引ッはられてやう／＼今きいしたのさとうりことばにかいことば【利】ナンダこけが馬のこ
ハいろを遣ャァしめへしひん／＼する事だねへハヱ夫よりやとてもおらァがやふな鬭取とハ取

組か出來ねへから投ころされゝさきに立合ひをゆるしてくれろと勸進元へ詫言をいつてしまへ【まき】ナニモそんなに腹を立んす事ハさんせん文さんや巴丈さんの一座のまへもさんすいふ事かあられ靜においゝなんしはからしうさんす【利】ハたんたん聲かたかくなつて此マアあまア口こうしやなとをぬかしやァかるゼ一座めへよりごさのめへか聞てあきれらァ産敷持たの疝氣持たのと高くとまつてもあたまで此利辨さんなんそに返哥をしよふと思ふがお慮外たとんなに振ョゥ付ても猿の狂言といふもんた折りふしきいろナ音を出すかモゥ一枚たかせたら叉白狀のさせよふも知ツていらァ【まき】もニウやぶれかぶれとよしておくんなんしわつちらがやうなものでも出世をする身でさんす岡場所の女郎衆ハ知らす初會からあまだの石をたかせるのといわれる罪ハさんせんニへ【利】コイツァ大わらひだにあまとといわれたがきつくわいかコレ耳を掘拔にして聽聞しろ高麗屋かせりふといふもんて玉川の水を産湯にして簪て腰骨を固め猪牙の枕木に尻だこの入ッたお客た大黑舞の舞臺開キから餅搗の音かてめへたちの胸にひゞく師走まて朝ッはらの鹵取夕仕舞の雪駄直しも良を知らねへやつハねへハそふさいの茄子とちかつてあてぬけのした男たァこふいつちやァ立引餅のやふたか江戸ッ子の利辨さんを旅猿や淺黄らしきあつかふとハチット正本の筋かちがふセ【まき】わつちやァナニモぬしをあつかいした覺へハさんせん【利】アットまつても

らをふ覺へがねへモ氣がつゐゝせとふつけの小買ひを一度に喰たやうにくさひおくびをはきやァかるなだまつていりやァいゝかとおもつて護國寺の開帳巡りしやァあんめへし宵ッからぶらつつきやァかつておりよゥハ利生のねへ撫牛を見たやうにしやァがつたじやァねへかこふかんにん袋の緒が切ッちやァ九郎助稲荷か七化を踊つて朝日如來が面蠟燭を出して御きげんを取つてもモゥおとり上ヶハねへハエト いよ〳〵大ごへになつてあら事をはじめかけるとまき絹ハあきれて出て行若イものやヤりてか連をたのミて此仕舞とふなつたものか大がい澄すいもじ有べし ○是ハ扨おき爰に氣のもめるものハおく座敷の床の中【巴丈】ハ座しきのうちハきけんよくのまぬ酒を呑ンたりいつ來ても手の足らぬ三味せんを引たり潮來をうたつたりしていつにない人がらをもせずけんきの夫と知らせぬ一ト手管床のはしの方にうしろむきになつて遣ひかけたる扇を顔へ屋根ふくそらねいり

【相方染梅】十九か廿テくらい何かふさいたやうすにてそろ〳〵床の上あかりいたつらをした子のしかられたやうにモシエ〳〵とこわ〳〵おこして見れハ巴丈ハそしらぬそら寐入りのぞひてミてハ手をもぢ〳〵かんかへる聲にふけるわたる夜もミしかき巴丈さんへと契りにておもひきつて。ひたいを巴丈が顔にあてれバ【巴丈】ァ、びつくりしたいつそ醉ッてねむくつてならねへと又よこにころり【そめ】ぬしのおはら立ハごもつともてさんすそれともあれにハだん〳〵わけの有りいすから【巴】トゥヅかんにんしてねかしてくんなせへ トぬほど取あは【そめ】とふぞマァわつちかいゝすことをも一トとふり聞ておくんなんしせんどぬしがおかへりなんすとぢきに小茶屋まて人をあけいしたけれともふおかへりなんしたとのとおつまさんの所へまいりして頼ミいしてまい日〳〵ふみを上ヶいしてもついに一度の返事もお聞セなんセんもさら〳〵むりとハおもひィせんミんなわつち

かたらハぬゆへとハ思ひすがぬしにあしく思ハれいしてハ【巴】（ハやつはり聞ぬかほで遣ひかけの扇子に書た文字をよむ）半點の朱唇萬客嘗とハ唐人の示しにして川竹の心ハ實に芭蕉の翁のいひけん浮草の岸を定ぬかごとし【そめ】（うろたへにて）何ニをたよりにくらしイせう永樂屋の客衆ハきれてしまいすし旅の客人ハさたなしに立イすし【巴】（ハ扇面のよみさしの）朝にハ楷老を契り夕にハ知らぬ顔するならひもへあさかほやきのふの花ハ今朝の塵【そめ】（なミだを袖にかくして）たよりとするハぬしはかりてさんすとふぞうたがひをはらしてかんにんしておくんなんしすこしハわつちが胸のうちをさつしておくんなんしニ【巴】おめへのむねのうちハとふにさつしているのさと（そらうそふひてうつくたはこ輪にふく烟のなをむすぼれ）【そめ】（ハしハしうつむいてたまりていたりしかすつと立にかゝるを）【巴】（ハ引とめ）是おめへどこへ行のだ【そめ】とふでおうたがひハはれいすめへかわつちかしんてへも見ておくんなんしと（立んとするを）【巴】（ハなを引とめ）コレよもやそふいふ事でもあるめへがきしやうせいしハなまほれの惚たと見る道具とハ黴のはへた本にも有ぜへ（トいわれても）【そめ】（ハ聞ぬふりてすつと立て行）【巴】（ハまたよこにひぢまくら程なく）【そめ】（ハ立歸りなミだを袖てふきながら）モシヘこつちを見ておくんなんしと（いへども巴丈ハ聞ぬかほそめむめへかまへずに髷をほごして中の所を一トつかミほどかくし持たるかミそりにてしやり〳〵とおしきり）あとをハしまだのやふにしておつつくね切ッた髪をわる紙につゝミそのうへをまたミすかみにまいて巴丈か前へさし出しモシヘ是を取ッておいておくんなんし【巴】（ハへい氣にて）コリヤアおめへなんのまねだ【そめ】（ハなミだこへにて）いりなんせすハぬしの手に

一度ふれなんしてからすてるともどうともしなんし【巴】そんたらおめへすてる氣で切ッたいかそれでもやつはりうれしいやつさと（にっこりわらふ　これもの世）【そめ】（巴丈がひざへ　しがミ付て）あんまりにぬしやァとふよくでさんす是で心底が見へィセんじやァわつちやァ死んでもむまりィせん【巴】ハテ氣のミじけへむまらぬやうにさせるものか（ト引　よせる）【そめ】（うれ　しく）そんならうたがひはれィしたかへ【巴】モヽいゝわな【そめ】嬉しうさんすとだきつく（隣り座敷ててう　しをあへせる）【三味せん】チャン〳〵

三帖

經レ之營レ之不レ日成レ之と靈臺の詩ならて爭ひ建し新樓の此里ばかり月夜かなとハ萬古不朽の金言にして屋根の天水ハ常に北斗の影を浸し紅の籬ハ暮て夕日の光を帯ブ雪踏の音しやら〳〵菅掻の音〆をうばひ猫じや〳〵の地廻り節ハ鼠とらずの新造を怒らしむ只さへ賑ふおもて座敷新に營むもの好にまた若蔦の日の出の妹妓幾千世か座敷床板の楠ハかけ香とともに薫り赤松の柱ハ立琴と同じく斜也今宵惣花の客人あつて【げいしやきん】ハイ旦那おゝさへをたべました【茶ミよ】モシコリヤァちつとあやしうこざひ升ス子臺の中か五十軒のやうにぬかつていヌせ【きん】エヽいぢのわるいおめへの知つた事か【茶ミよ】しつたか玉やになつせん松

葉ホンニ玉屋の突出しごらんなさり升シたか【客清】なんといふおいらんだ【茶や佐助】明石さんと申升ス【いよかセ】かわいらしい女郎衆でおつす子【彦兵衛】ことしの燈籠ゟ申ものさ【茶ミよ】うつくしいといふのかふるし／＼【彦】ハテいわずともの事だとかく年が寄と念が入て来るの【茶ミよ】それでもこふいふ色かありさと（そべにゐるふり新ンにたきつく）【いゝかセ】エ、すかねへヨトつきとばす【茶ミよ】すかねへはづようまい中だものを（トセたかをたゝく）【いよかセ】（きせるでくらへせなから）エ、エ、モウすかねへわ／＼とたゝく【茶ミよ】アレでも床ハ妙子【佐介】與兵衛じやァねへかたゞこつちやァねへかへハ、、【彦】時におさかづきといふものハ【げいしやもよ】ハイ上ケ升ス【彦】めつたにセ話もやけねへしかし婚禮ハ女からさしたつけの【るん】小聲にていゝむしだの【彦】何ニかなんと【るん】アイおめでたうございます【彦】旦那モシけんじ升ス【客清】チヨトおさへよう【彦】そんなら佐す公おあいとやらだ【佐助】ひつへさへませう【彦】あひにおさへが有ものか【佐助】夫でもひつへさへ／＼【茶見】そうへさんちやァひしやげだらう【彦】さやうならおいらんはゞかりながら【もよ】おいらんニへきらわれた盃てムり升スセ【いゝかセ】アイサ子ふくが有とやらでおつすが【茶ミよ】そふきいてハ呑ずんハ有べからす【彦】よくけハミだらんもねへのおちやをひいた盃がよふ／＼上つた【茶見よ】そんなら一

ツ拳いかう【彦】ゴウサイ【茶見】サンナ【雨人】ゼイスウチ【彦】リヤンデどふだ【茶見】りやんまみだぶつおいらん一昨日源さんに中の丁でお目にかゝりました【いゝかセ】アイ内證へお出なんした【彦】花笠さんハとんとお見かけ申ませぬか【茶】此間に一ッ巻お点を願ふて先生お賴ミたぜ【佐助】あした參りますと 座敷のおもむきハとんだ世におこなわるゝ酒落本に似たれハたがひにして是をなぐろわかい者ちとかた付升スよげいしやたいこへそれ〳〵に百さへづりのいとまこいつげて立歸る 〽引でねむたきたそや行燈遠方傳ふ犬の聲青柳すしの聲も按广の笛と共にかすかなる【客清】年ハ四十前後の酒ふとりにおきものゝ布袋のごとくきめづきんにばけて來れとも珠數たこの指先キにあらハれ座敷の盤若湯にゑひたたれて引キ出すやうな大いびき大の字なりにたハいなし【いゝかセ】年ハ十九かせチいつたいあいけうあつてそハつかずしつとりとしておし立よく氣せうたかく游藝ハいふに及ず軍書迄をこのミ情をふくんで人をそらさず心ざしもさしくよくさハぐゆへ内中のもちいよ〳〵いかにも中座のくらいをそなへつき出しに三年なれどもおしよくわきに上ケられ當時手取りのつハものにて此内の大こくばしらなり 清かたわいなくおこしても目がさめぬと見すましてうすに行てやうすふしぎや中庭のあたりにて姿をかくす〇人の心と飛鳥川とハいへと釣合ぬ戀路ハ遂ぬものかハと爰に下座敷の廻しの床に【巴丈】ハはちばいになつて此春の新板江戸名所を北齋が畫し本ンの狂哥をよんでいる是ハおいらんがさる客人にもらいした巴丈か風流すきゆへたいくつをまぎるゝやふに新ン造にいひつけて見セによこセしたり例の紙にて折り鶴を一ツしんふらんにけいこしているふりしん【いくセの】ヲヤかきいしたにへ此皃ハどふか平内どんに似ていひす子【巴丈】ホンニよく似ているよ此しろむくのふり袖ハおめへといふうしろ姿ヨ【いくセの】又巴丈さんの世事がはじまつたよ わきからのぞきこんで かむろ【まつぎ】ナアニこりやアおいらんでさいま

すよ【いくセの】ヲヤ〳〵ちよいと見や此子ハヨその貞ハなんだヨ若松屋の猫のやふたヨ【まつき】墨が付ていますかへかのもとんだよにくらしいヨウヨ引と（ひとり小言をいひながらつはを付てふく）【はんき】【ちとせ】巴丈さんへおさみしうおつせうにぬしやァおまんまをおあんなんせんか【巴】いかさまちつとけいてもいゝ腹になりやした【ちとせ】いくせのさんぬしにおまんまをもつて來ておあげたんし【いくセの】ァイ爰に有り升ニか子いつそそんなつめたくなつておりィすよ（トいふ所へ何二か皿を袖へかくしてふり新二）【いよかセ】巴丈さんにおいらんておつせへすこれておまんまでもあかりいしておとなしくあそんでお出なんしと（下座敷へ出たかばやきを四五本皿へ入て巴丈が好ゆへよこせし也よつぽと氣のついたもの也）【ちとせ】チヤウトいゝ所だ子今おまんまをあけもふす所でおつした（是よりめしがはじまる心やすき客ゆへちとせもおなじやふにべちやくちや〳〵はなしながら）【巴】いよかせさん座敷ハとんだにきやかだ子【ちとせ】なんだかいつそそう〳〵しいにへ【いよかセ】ナニ伊八さんかよいきつていゝす【巴】ホンニヽんながこつちへ來ていちやァわるからうセ【ちとセ】ァイサいよかせさんおめへハざしきへいつての引たらはやく知らセなんしそしてのと（何二かさゝやく是ハちとせも巴丈をいきに思ふゆへおいらんへ間を見合てかほ出しをなさいといつてやると見へたり）【いよかセ】もふおしつけさいませうと（出て行いくせのハ巴丈からおいくんできたりかた手にふとたもつてくる）【いくセの】巴丈さんへどふぞおはゞかりてさいますが此みをおとゞけなんしておくんなさいましと【巴】ァイおますさんのみたの源が所までとゞけたらよかろうヨ【ちとせ】ァイそれでよふお

つせう（トはなしている所へ心やすきおいらん）「すやま」巴丈さんよふお出なんした子と（かほを出す）「巴」お久サしうござ
いますお見かぎり子マア一ッふくおあかりなセへナ「すやま」アイト（一ツふくのみ巴丈へすいつけてやり）又いつて
まいりイセう「巴」きついおいそかしいこつた「すやま」又のち程（ト出て行入ちかつて是もこゝろやすき部（へ）やもち女郎）「わた
きく」モシヘよふお出なんしたにぬしやアよくおとゝいお出なんしておしらせなんセ子「巴」
わたぎくさんとんだかへりくじ子よひにあけたけれどもおいそがしいお身の上へなれハおたつ
ねなしに「わたきく」ヲヤほんさイますかヱとんとそんじいせなんだ子モシヘはゞかりでおさ
いますお゛子官（くわん）五郎さんかまいりイしたらとふぞ此みをやつておくんなんしヱ「巴」アイかしこ
まりました今夜ハふみすかいもよつほどしやうばいかあるこれじやアたのもしい子「ちとセ」
わるいしやれ子したか今夜ハぬしやアよくみをたのまれなんすばんだヨ「わたきく」ホンニか
へお氣のどくておつすヨだれさんかへすやまさんかへ「ちとセ」いゝヱ内證（ないしやう）からおますさんヱ
さ「わたきく」おゝかた惠比壽講（ゑびすこう）のやくそくでおつセうモシヘ又いつてまいりいセう子「巴」ま
だよかろうが子「わたきく」いつそなんだか氣かもめいすと（ゆくあとハ二かいも下（した）もしだいにさミしくだん／＼出てハちとせハ相口（あいくち）ゆへ巴丈とほつ／＼）
（はなしているほどなくばた／＼ぞふりのおと）「いよかセ」（へてうずと見せてあとさき見合すつとはいる）「ちとセ」（かほを見合せ）客人（きやくじん）ハおよりいしたかへ「い
よかセ」いつそたわいハおつセん巴丈さんへさぞさみしうおつセうごめんなんしヱちとせさん

座敷を氣をつけておくんなんし【ちとセ】アイモシヘおよりいしよやれ〳〵わつちもおちつきいした【いゝかセ】うれしうおつす【ちとセ】巴丈さんへあしたまでおいでなんすだらう子【巴】ナニサ明ケまへに歸りやすマァおはなしな【ちとセ】アイト　あとをしめあんどうの戸をして出てゆく　【いよかセ】巴丈かひざへもたれかゝつて　よふおつすかへ【巴】マァ二三日ハちつといゝようだか人參入を飲でいるよ夫にこして出てくるといふハおれがやふな不孝なものハねへ思へハ罰のはたもつてへねへ今霄ハ内てかんびやうセうと心て心をいましめても逢ぬと思へハ言ひたい事が胸にあまり逢つて見りやァ何ンにもいふ事がねへとハ我ながらあきれた人間にやァなつたと　くつとふさぎ　【いよかセ】それよ申いすもわたくしゆへとおもへハしミ〴〵苦界ほとおそろしいものハおつセん霄からちよつともお顏を見たふおつしたけれど世間の義理と勤のかなしさひつ越しといゝ今夜の惣花いやな客でも恩ハ恩それそふおうにきねバならずちよつと座敷をあけたくてもうちとの人のまへをかねひよつとおかしく目をつけられてハぬしのためにもよふおつセへとちと勢さんにいさめられ心にそまぬ座敷のつとめふびんとさつしておくんなんし　とひざにだきつきしのひ泣　【巴】ハ男氣の心の廻り　いかさま苦界の講釋もおためごかしにたしなまセるも目があかぬおれだと思ハれるも無理じやァ子名をとろ

ふより徳を取レときよさんとやら淸とやら七福神の座頭に身をまかせるがおめへのためたらぬ心のまよひからしミつたれの身をわすれて是迄セ話の薄情禮をいはふと來て見れハかへつておめへのくろうの種今までつくしたのうひ句を外の客衆にはなされて笑ハれるも自業自得サァ客人かまつていさつしやろはやく座敷へおいきなセへといわれて【いよかセ】ぐつとせき上ケせきくるなミだをのミこみながらなぜぬしやァそんな氣づよい事をおつせへすそうおつセへすハぬしもまた染梅さんに心が殘つておいでなんセうそれもさう〳〵うらミいせんが淸さんのゐりもとにつく心なら何ンしにこんなにくろう氣がねぬしも覺がありいセう文さんと連立て初にお出なんした時　折りからおく座敷の客にあへせてどくぎんの菜種

嘗のもすそ　〽わたしがすいた座敷つき物かずいわずこうとうでそこに情のあら男かわゆふなふてなんとセう　下略　さげすまれるもいとひせん心のそこをうちあけてぬしも●しやうちとおつセんして今さらわつちをうたがひなんすハ染梅さんの義理ならべなせにかう〳〵といつてきかせてハおくんなんセんみれんておつセうひきやうでさんすと　くやしなミだのむせびなき　【巴】お今さらいゝがゝり　コレ聞たくてもねへそめ梅が事二才子どもを見るやうにかもじの先がなんそのやふな髪を切ラれてのろくなるやうなおれだと思ふかそれをなんにもいわれねへで丸できるめて投られたと見せたとおめへにまよつたゆへ引越しのセ話をしたをしほに切れてしまいわきひら見ずにまよつたがうんのつき

だおれが身のうへいへバいふほど恥のうハぬりァ夢の世の夢てあつたと ふさぐことばに 【いくかセ】 ハなを取りのぼせるじびようのしやく、ウントはかりにそりかへり歯をくいしバりくるしめば 【巴】 ハおどろきいろ〳〵にかいほうすれどせんかたなく呼にもよハれずいだきあけ一こうしの酒口から口へ口うつし身うちのちからを手にいれてやう〳〵しやくをおさへわバ 【いよかセ】 ハやう〳〵氣が付目を見合せ 巴丈さんへ 【巴】 ウ、おれだよ氣がついたか 【いくかセ】 くろしいうちにニつこりと 笑ふ目元にハ含嬌含態是が爲にハ千金の城も一時に傾くへし 【兩人】 ホツトため息をつけバ 【作者】 もおなじくホツトためいきをつく所へ 【本ン屋】 此間の小册ハどうてムり升ス 【作者】 やうやく今佳境に入る所だ 【本屋】 コリヤアけしからず蝶かすかふへましたマア是で出し升せう 【作者】 ソレじやァまだ筋が通らねへゼ 【本屋】 それまだ來陽目出度 【作者】 後編にながしておこふか 【本屋】 左様ならハ先生さま 【作者】 本ン湍さん 【兩人】 おさらバ引 白眼かと内の時計六ツ チヤン〳〵〳〵

道之紙屑二篇　花王の朝酒

通道講釋　總新抄

東園南樓北廓　手管三國志

青樓奇談　水雜粹

廓中承知

野郎玉子

埜良たまご叙

滑稽詞曰。かへる〳〵と。　野郎の鷄卵じやァ有めへし云云。其名を擧て。標題に蒙しむる叓。娼妓客を暖て歸すを以て。如是命たるものなり。夫牛の刀を用ても。衣〳〵の鷄。引割て玉子辻にせんと欲し。籪の鼈。正旦の刻れつくらざれ共。是も山椒醤油に煎附られて。寓坐の嗔物食となること。擧女郎の好意に鷄卵の於客。其精分を補んが爲なり。苦界のつとめ。恰鷄の如く。傾城則鷄情なり。是を以て。悋氣の燒玉子あれバ。志操に彫る。うで玉子あり。煮拔の鷄玉の頬輔に。自慢をつけてあがりませと。並べたてたる家臺廓　熟れ玉子の君が爲にハ。

野良の玉子　二

寒鶏卵農尊きも。鵞の玉子の卑も。倶に望ふ。雛の鳥と契らん事を。これその。くだかけを以て。天を窮ふの類ひならずや

十偏舎一九誌

于時
かのとの
酉はつ春

附標簽詞

唐詩稱遊治郎謂少年俠客也

今題李良玉子者強罔依歸去

俚言矣飛兮剗兮轉兮余意々

々拍掌則為使金錢交于滑

稽本也

青樓曲

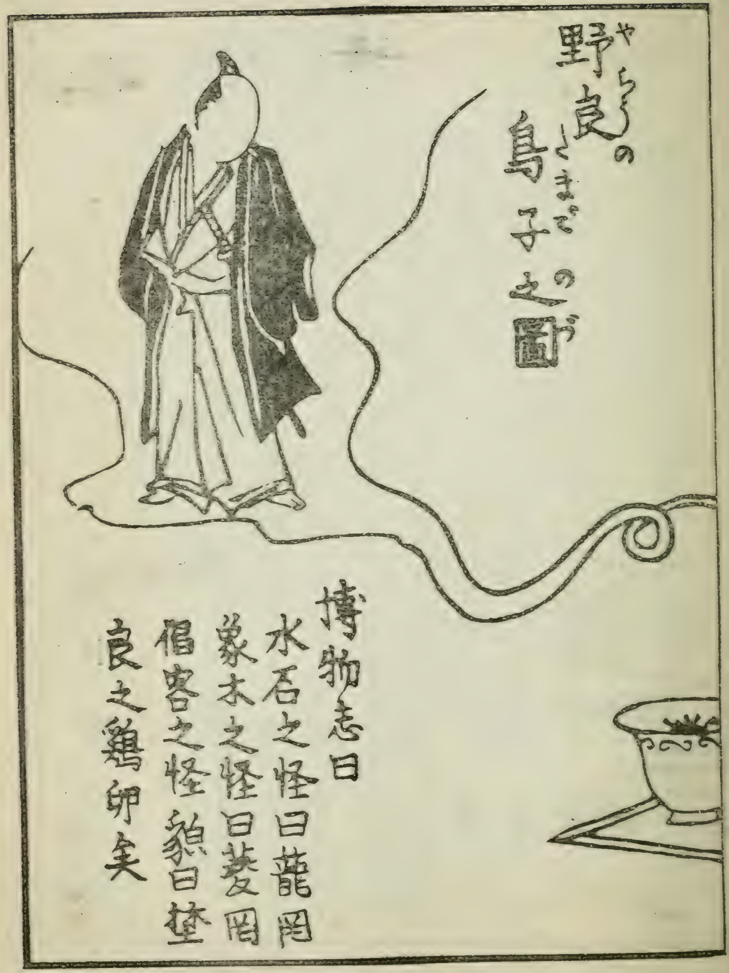
對雪青樓越女幽
晩風吹來多貴遊
已看今年曩春色
萬戸珠簾捲上鈎

靏鳴樓主人

○知つた風の不問物がたりハ
初會の一口物に思ハず頬を燒玉子

○おとなし風の寐物語に
うかれて迷ふ傾城の夜をふかし玉子

○聞いた風の百ものがたりに
丑ミつ頃からけへる〳〵と野良の玉子


野良の鳥子之図
博物志曰
水石之怪曰龍罔
象木之怪曰夔罔
倡客之怪貌曰堂
良之鷄卵矣

野良の玉子

十偏舎著

第一章

大通直うして髪の如く。野暮曲つて鬢張の如し。娼妓ハびんつけ油のごとく。於客ハすべて天窓の如し。夫あふらをいふとハ。京の島原浪花新町の通言にして。吉原にも又。百助が拘把の匂ひをときめかせ。梅花の艶をいつてハ。朝歸りのおくれ毛をなでつけ。或ハ。べたついてうしろ髪をひくあり床がけよりハはすがけの。あたまかくして尻かくさぬ。客の油斷に毛氈を。かぶつたせうこの赤がしら。誰取あげるものもなく。あたまがちに遣ひし身の終に天窓ごなしとなるハ。皆あたまから。しれたことなり。爰に月代の青黛と狂名をついた男。年の頃ハ廿八九。ちとおそまきながら。藍上田の小そで。おなじ羽折。連ハ定次郎廿二三。黒紬の小袖ハいやミなれ共。京染の新しきにかへつて顏の色をしろくし。格別の人がら。羽折ハねごやちゝぶに。染ちんばかりも。廿匁から出したといふ。ミぢんあられ。今ひとりハ太助。さんとめの三すじだちに。紺の和どろめんの羽折。いづれもあきんど風なり。巴屋の太ゝ講より無分別を出

しぶら〳〵と出かけ。まだ日ハ高しと。青黛がなじミの田町あたりの水ちや屋に。こしをかける【青】もふ七ッだろふね【茶や女房】イヱもふよほどまハりやした【太】そふだろふ。巴屋へ参つたハてうど晝時分。それからお梅がおどりを三ばん見ますし。さくら川がはなしをきいたり。そふして。こんなにのたまくになるまで。たべたことだから。てへ〳〵。ひさしいあいだじやァござりやせぬ【青】それでもまだはやい。ちつとのことで晝夜をくらつちやァあやまるぜ。ノゥ定公【定】ナニぶら〳〵めへつて。中の町でたべやしやう【青】それがいやだよ。みす〳〵こけをおしむよふで。日のくれるまで。茶やの内にもいられねへハな。わつちらァこれまで。茶やにながく居たこたァなしさ。ハテむかふへ行きやァ。じきにのむものを。茶やでなまよいになるも。こけのせんざさ。又それも。そこの内のミへに。げいしやでもよんで。遊んでやることもありやすが。マァおなじくは百疋たゞやると てへ〳〵嬉しがる事じやァねへ。こういつちやァばか〳〵しいが。わつちら程遊ひに。ほねをおつたものァなしさ。そのかハり。こつちの名がうれているといふもんだから。トそばにのミかけたちヤをひつくりかへして どけへいつてもアッ、、、。是ハ〳〵 トたつてはをりのすそをやたらふるふ【女房】ヲヤおあつかァござりませぬか トそこにあつたのりいれすりの引札にてきやくのはをりをふくこの折ふしむかふのかたを大いさミにいさんではしるかご エイかごコリヤサイヤッチャイコレハサイ トこゝにいきづへをしてあせをふき【跡ぼう】モシ旦那。こ

ふてきにいそぎましたぜ【客】承知〳〵【ききにはう】だれなれ承知大じんさまだと【跡】そこて鬼ころしを。のましてやろふといわつしやるか【客】おきやァおれ【かご一人】ヤツテヤイコレハサイヨツテウエイかごソリヤサイ〳〵（トちうをとんではるかに行過る）【青】コウ定さん見ねへ。昼日中かごのたれを。あげていくやつれ。まなけつの毛まで。ぬかれる手やいだ。しかしわつちらも青いうちハ。見へに乗るもんだから。あのてんもありやしたが。今じやァつらがはづかしいね（ト此はなしの内すまだへらをつんだる車の言）【車力】ア、ウ、そこだァノ〵。お茶やに。そこだに。お客が。いるぞや。うへだのおきやくれ。のろまな。かほだぞ。かうまん。くさいれァ、ウ、ヲウタカ〳〵（ト行過る・青たひれうぬが事をわるくいわれたもしらず）【青】アノ炭もみんな客のとこからいくのだわな。今じやァ客もこすくなつて。なじみの女郎や。茶やの歳暮をかねじやァやらねへ。イヤするが炭のいゝのを買こんでおいたから。よこそふの何のと。わづか三兩か五兩がもんで。事につんでひつこませるから。とんたてへそふに見へる。かねでやつちやァ。なんだか人が。しらねへからのことよ又米でもやると。茶屋でも貰ふが又あつちのみへだから。人の目にかゝるよふに。わざ〳〵じやまなとけへ出してつんでおくもんだから。コリヤアどこそこの客が。よこしたといふこたァ。自然と人にも。しれるといふもんだによつて。とかくかねを遣わずに。おちを取ことをする客があるから。又その上をい

かにやァならねへといふもので。女郎も茶屋も。いまじやァほねがおれるのさ【定】なるほどさよふさ【青】しかし。わつちらァ又。そふいふてんれしたくてもできやセん。なぜといゝなせへ何でも大門をへゑると。雨かれきつて。しらねへちや屋ァねへもんだから。一けんの内へ。人のめにたつよふなことをすると。そこら中へ。しにやァならねへといふもんだから。おやつぱりかねれかねで。こつそりとやるがいゝのさ【定】さやう〳〵。なるほどあなたれ。お近付が多いが。いがやの九平次なども。さだめて御ぞんじでござりませうね【青】ずいぶんしつてゐやすあそこでもでへぶ遣ひやした【定】私もたつたいちど。あそこのうちへれめへりやした（トうれさをいへれかげがさす。向ふとをるれいかや）【女にょう】ちとおよりなされませ【九平次】ハイおさむうござりやす【女】もしおめへさんいおうわさがござりやすよ【九】ハァそれれ（トたちもどり）御めんなさいませ（トこのてやいがまへをとふり女ほうのわきへこしをかける）【女】今あなたた方が。おめへさんのとこのおはなしさ【九】ヘイそれれ（トいつてこれども。ちかづきのきやくでなし。よく〳〵見れハわかいほうのきやくれ。たしかにそれだと少しおぼへあれれ）ちと御めんなさりませと（定次郎がわきにあるたへこほんにてすひつけ）モシぶしつけながら。あなたれどふか。おそうけ申たよふでござります（トきんなのかほを見る）【太】ハテどこぞでおめにぶらさがつたてもあらう【女】ヲヤぶらさがるたァへ【太】おめにかゝるも。ぶらさがるも同じことだハヽヽ【青】わつちらァ年中。へへりこんでいるもんだから。見たこともありやせ

う ドいき過る・いかやハナニきさまのことじやアねへと・心に思ひながら【九】あなたもさよふだか。こちらの旦那ハ。たしか此夏燈籠の時分に【定】傳馬町の盈行さんと。おめへのとけへいつたことがありやした【九】さよふ〳〵 こいつハはなせるきやくゆへ・九平次ハじきに・定次郎かむかふのかたへこしをかける・せいたいハちかづきだと・でほうだいをいつただけ・めんぼくなくしよげる【九】盈行さんハ折ふし入らつしやりますが。あなたハそれぎりで定めて外に。おなじミの世界もござりませうが。ちと私かたへもいらつしやりませ【定】ナニサわつちもひさしくあんばへがわるくつて。それからこつちのほうへハ。大きにぶさたをしやしたのさ【九】ヘイそれハ。時に今晩のお世界ハ【定】ねつからあてなしさ【九】さよふでもござりますめへ【青】コウ定さん。ぬしに逢つて外へ行でもねへの【定】なるほどさよふさ【九】お供いたしやせう トいふハ定次郎ハずいぶんたしかたきやくゆへこれをめあてにして サアいらつしやりませもしへ道中ハいゝが。此宿引がうるさうござりやすね【三人】アイかミさんおせハ【女】さやうなら。又おけへりに【九】わつちもけへりによりやせう ハヽヽヽトわらつて・つれだち出かけるはヤ大門をへゐると火ともしごろ・中の丁のけしき・又すかゝきの音【浄瑠理】新島原郭大全三だん目の口まく くるハぞめきの鴈乙鳥。柳わがねて行違ふ。風の手拭ほうかふり。或ハ霞の袖頭巾。よるの梅がゝしたひくる。客ハ格子の垣のぞき【地廻り傳吉】中の丁のかたよりすてぜりふにて エヽおきやァがれ。こつちやァ三里からさきやァ。おとりあぎやァねへのだァ。さる松めが。エヽけつがかいゝわへ【同辰】傳。なんだ。熊のやろふか。くひ殺してしまやな【同八】ツヽ

あの精靈様のあんどんを見るよふに。四角なつらへびんぎれをしたやらうか。どつちへ行きやァがつた【傳】河岸のほうへ【八】サアはやくきやな トきほひかゝつて行過る。又書生とミへたる二人づれ。おの〳〵手ぬぐひにて。あたまへつゝめど。一人ハうしろにかどなくして。ぼうずと見へ。老人ハうしろとがりて穴たぶさのいてうとミへたり【玄黄】貞藏子見さつし。向ふにふミをかいているのが。順積をつきだした女郎だ【貞藏】ハヽア美傾〳〵。願くハ輕羅となつて。細腰につかん【玄】あがりたくても。嚢中おのづから錢なしだ【貞】そこが所謂。君子ハ危きにちかよらずだ。恐るべし〳〵【玄】爰でこんなことをいつても。俗物にやァ解せねへから大わらひだ。サアとなりへ行かふ トこうしのごやうへ。くろちりめんのはをりをひつかけて。ばり〳〵と引さき ホイこれハ。なさけない【貞】倣たる褞袍をきて。狐貉とぎける者もたつて。恥ざるものハソレ【玄】つらのかハのあついがきいてあきれる 此内又すけんの徒二人いづれもはなのさきに。ほうかふりをして【吉】ヲヤ〳〵。こゝのうちやァ。ごうてきにひろい内だ。松さん見ねへ。おそろしくあかりがともしてあらァ。いくつある。一ッ二ッ三ッ四ッ五ッ【ツレ松】コウ吉なんだな。皿やしきの化ものが出やァしめへし。そんなばかァいわずと。アノ壁をしよつている。たまァ見ろへ【吉】ほんにあだゞぜ。あの又しんぞうを見ねへ。氣のちがつた節季候を見るよふに。あたまへいろ〳〵なものを。くつつけていらァ トとなりのミせにしきぞめのかざつてあるをミて【吉】松さんありやァなんだ【松】コリヤァこゝの内に。敷初があるのだハ【吉】おらァ又うり物にしちやァ。札がさ

げてねへとおもつた【松】あんなてへそふなものを。こしらへてよこす客があるから。そふいつてもこうセヘだぜ【吉】ナニこれをこしらへてよこした客も。きのしれたあたじけなすびだ【松】なぜ【吉】見ねへふとんばつかり五ッあつて。夜着ァたつた一ッだァな【松】べらぼういふぜ トヌとなりのミせをのぞき ヨャ爰にしよふ手めへも見たてろへ【吉】有がてへ〳〵【松】アノお影講のおもりものといふ模様のきものをきているやつだどふだ【吉】アリヤァとふか下手な佛師屋がこさいた。佛さまァそる様にごうてきにふとつていらァ。あれよりかァ。其となりの。むらさきときめよふ【松】アリヤァおれがのだ【吉】ナニおれかのだ。おちよぼのちんぐるまがあきれらァ【松】しやれずとはやくきめてしまやな【吉】すそつこのあさぎにしよふ。ヨャありやァたつでいかァ【松】なむさん。むらさきもいつてしまつた。吉きやな。もつとひやかしてやらふ ト此内せいたい・定二郎・太すけ・いかやの男にてうちんをともさせ 【九平次】モシ定さん。こゝがかのところでござりやすぜ【定】ほんに。さつきのはなしれどふだつけ【九】モシ隠便でござりますよ。 ト少しあとへさがり さつき。わたくしがとこに。いらしつたときちよつと腰をかけた。おいらんの事さ【定】アリヤァだれだへ【九】玉川さまといふこゝの内の一まいい看板でござりますてときにモシ妙なことがござります。アノ玉川さまが子。あなたをよく御存で。わたくしらが内のやつに何かおはなしがありやした

が。くハしいことハ私もうけたまハりませなんだが。何にしろ。今宵ハアノおいらんになされませぬか【定】そふさ〳〵【九】そんならサアおいでなされませ【定】青黛さんこゝにいたしやせう【青】どこでもよし〳〵【九】サア入らつしやりませト【淨留理】夜るを晝とや万燈の。花も紅葉も色あせぬ。くるわハげにもかんたんの。枕時計が一ッ時の榮花にちとせヤのぶるらん

第二章

遊遊ハごうぎなやたいぼねと言ひ。通ハがけへひろしといふ。鶏舌樓の一トかまへミセにハ染井の花壇をうつし。内にハ万燈星のことく。ふきいれたる板の間にかゞやき。大こく柱を礎として貨悖つて入るものハ。又悖つて出る諸人のいりこミまことに。千兩の小判。ミだけているが如くにしていにしへの三浦山口が富にもおとらぬ家の賑一二階の梯子ハ横にひろく廊下ハたてに長くしてあたかも。手長嶋の揚弓ミせにことならず おもてざしき二けんめのへやから出かける 【禿廻し】アイタ、、エヽいめへましい。がきどもが。こんなものをおつことしておきやァがつて。コレみどりやァ。きしやごをおとしたァ手めへか【ミとり】イ、エ【禿廻】いゝへじやァあるめへ。いつ

ちう大きなざまァして。手めへより外にやァこんなものを。もちやァそびにするものァねへいつても／＼きかねへ。ずぶてへがきだ。ソレやくわんのくちから何かこぼれらァエ、こぼれるといふに。コノのろまは（トひとつくらわしにかゝるかふろにげるひやうしにやくわんをおしにつゆをこぼす）【禿廻】ソレ見やァがれ（トこぼれたゆのなかへふんごミ）アッ、、、。エ、いめへましいアッ、、、、。長八とん／＼ぞうきんをちよつとよこしてくだせへ。このがきやァ。きり／＼はやくとつてきや。エ、いくじのねへあまつ子だ（とこゞとをいゝながら・よこちよのらうかへつんまがる・此内ふいてしまふ）【禿】すかねへごてよヲ（トこゞへにいつてかけ行おくのかたより・へヤもちしげ山・おやゆびのつめをくわへかたてにつまをとり・らうかのかたはしのほうへよつて・そろ／＼あゆむ・あとよりふりしん）【新造】しげ山さん／＼【しげ山】しづかにしなんしな【新】そふ申いしたっ今にお出なんす（おくざしきより・これもへやもち）【竹川】コウ重山さんはどこざんす【しげ】こんな／＼（トざしきのはいりくちに・ふたりながらつくばひ・ひそ／＼ばなしの内よこ丁のらうかなのたまくになつた客・かふろにそでをひつはられ眉さきぬけかゝりいくじもないなりに）【客笑止】エ、フウ。だれだ。そこにいらァ。へ、アあねごたちっ又どじやう計だな【竹】さゝやき牛房はもふきゝあきいした【しげ】ぬしやァよく。廊下鳶をおかせぎなんすの【笑】そふさ。それだから夕べも。廻し座敷で。あぶらげのよふな。ふとんでねやした【禿】サァお出なんし（とひつはるはづミによろついて竹川にだきつく）【竹】ァ笑止さんいとふすよ。エ、もうこれへ髭だよ【笑】ひげはこわくても。ふつくりとやわらけへものをもつていやす【しげ】ソリヤァわつちらにもありいす【笑】ドレあるか見てやらう【しげ】アレおよしなん

し。花さとさんにいつつけいすョェ、うるセへセうしさんたよヲ　トつきはなして二人ながらにけ行【笑】コリャまちやァがれ　トよろつきながらかけだすひやうしにあとからくるわかいものにつきあたり【笑】ァ、いてへだれだ【若者】コレハ笑止さん。どけへ入らつしやる【笑】喜助か。うめへものならちつとくれろへ【若】さしあげませう【笑】けんなまでやるれ。そのかれり。廻しものれあやまるゼ【若】へゝ久しいものさハ、、、、【笑】しげやまづらァどけへいつた。ゥ、こゝだな〳〵【かふろ】こかァ青柳さんのとこざんす【笑】ばかァいへ。しげやまのじやうなしあまァどふしている　トよそのざしきへすつとはへれは客も女郎もしらねかほ【客】どなた【笑】ハィこれれ御めんなさい　トかふろに引ぱられて行　○既に其夜も引四ッのしらセに。藝者の三味もちやんときりあげ。牽頭もどんと。打おさめて立あがれバ。上り下りの梯子れ盆山のごとく。おさまりやした座敷〳〵の床の内　おもてざしき【定次郎】はや本間のとこへまへり。五ツふとんのうへに。下ぎのまゝねころんでいると。おいらん【玉川】としの頃廿三四。せいかつこうすつかりとして。きりやういたつてよし。いしやうにはでなこのます。おくゆかしくミせて大の手とり也。きやくのぬぎすてたる。はをりを。手づからたゝミながら。もんどころを。じつと見てにつこりとわらひ。たんすへいれうちかけをとつて。ふとんの上へすわり【玉】もしへ。なゼだまつておいでなんす【定】どふもなにもいふことがねへからさ【玉】外へおいでなんしちやァ。そふでもおざんすめへが。わたくしらがとけへお出なんしたもんでざんすから。そのはづでざんすよ【定】ナニどこも。外にいゝところれなしさ【玉】うそをおつきなんし。もしへそりやァそふと。さつき九平次さんに。私が申いした事を。おきゝ

なんしたかへ【定】イヽヱ九平次がなんともいゝやせん【玉】（フハントわらひながらたばこをつけていだし）おめへさんの所ハどこでざんす【定】さればどこだつけか【玉】おじらしなんすなよ。わたくしがあてゝお目にかけいしやう。南國のほうでざんせうね【定】アイヤア そんなものさ【玉】わたくしやア。おめへさんのとこをよくしつておりいすよ【定】どふして【玉】ぬしのまへ髪があんなんすじふんにやァわたくしらが叔母さんのとけへも。よくおいでなんしたから【定】そふさ。それでしれたおいらもぜんてへ。見たよふだとおもつたから。いろ〳〵さつきからかんけへていたのさ。なるほど。おめへのおばさんのとけへもいきやした。其じぶんハたしかおめへの名ハ。おとらさんとか。いつたつけの【玉】よくおぼへてお出なんすよヲホヽヽヽヽ（此おいらん已前ハそうおふにくらしたものゝむすめにてふた親にわかれておばのかたにてそだてられし也おばといふハこの定二郎がきんじよにいて折ふしハ定二郎かたへもおはつなどにやとハれしものなりこのおいらんそのおばの方にてそだちゆへ定二郎を見しつている也）【定】こいつァ妙〳〵。おめへがこゝに居よふとハ。おもひもつかねへこつた。さだめしこれも。おめへのこゝろがらだろふさ【玉】ほんにこういふ身になりいしたも。だん〳〵わけ合のあることざんす。よんどころねへことで。わづかのねんで。こゝへめへりいしたからもふ來年の七月ハ。ねんがあきいす（こいつハうそ也また三ねんばかりひつかゝつてあれどもわざとねんをミじかくいふハこれ手とり也）【定】ソリヤァおたのしミだ。さだめてどこぞの色男のところへ。お出だろふ【玉】ナニわつちらがよふなものが。とけへいかれいすものか。ほんに夢にも

しらねへ。くげいとやらで。どふいゝしたら。客人のきに入いす事やらっなんにもしりいせんもんでおざんすから。ちからになつておくんなんす人もおざりいせん。ひとりのおばさんはおとゝしなくなりなんして。ほんにたよりすくねへ。身の上でおざりいす とツしふさぎて それにうつむく〔定〕おばさんは本所のほうへ。引ッこしなすつたつけが。なくなりなすつたかきのどくな〔玉〕もしへ。おめへさんのおとなりの。針屋のおミすさんはどふなんした〔定〕はりやか。今は棒屋へ嫁入をして。てへそふにくらしている。そしておめへもしつてる。ソレ合羽屋の太郎よ。ひところは。かげまやへ聟にへゐつたつけが。今じやァ井土ほりになつていらァな〔玉〕ムゥそふして。わつちらがうらにゐなんした。ソレ犬市さんはへ〔定〕ム、あの。つむりのまん中に大きな痰瘤のある。陀鳥といふかほの按摩か。アリャア去年。堀の内さまへ願をかけて。目があいたつけが。それからつまらねへかして。今じやァ乞食になつているといふことだ〔玉〕誹諧師の西行さんは〔定〕アリャア今戸の。あねさまのとけへいつている。おめへのとなりの豆屋は。鳩ヶ谷のほうへひつこむし。こんにやく屋は。ゆふれいばしのほうへ。ひつこしたといふことだ〔玉〕ヲヤ〳〵わつちらァ。今おめへさんがたのほうへめへりいしても。しつた人ァおざんすめへのふ〔定〕ナニサそふでもねへのさ〔玉〕アノね。どふぞねんがあけいしたら。お

めへさんがたのほうへ。めへりいすから。せわをしておくんなんし【定】ソリヤアおいらがとけへ。きなさるがいゝ【玉】おありがたうおざりいす。おめへさんのとこの。おまんまでもたきいしやうから。どふぞそふしておくんなんし【定】もつてへねへ。ナニそんなことをさせるもんだ【玉】それだとつて。何もせずにいゝしちやア。おめへさんの。おかミさんにしかられいしやう【定】ナニおいらァまだ。そんなものはなしさ。それだから。おめへさへ承知(しやうち)なら。女房にと。いふもあんまりむしがいゝの（ト此せりふは思ひきつていふとしまだけじきにつけこミぐつとすりよつて）【玉】コンナ。くちさきで人をうれしがらせなんすね。客人のくせでおざりいすが。ほれていゝすものを。おだましなんすね。ほんに罪(つミ)でおざりいす【定】ナニわつちらァおめへがたをだますよふな。はたらきはござりやせん【玉】おめへさんも。とんだ手があんなんすよ。なんぼおさななじミでも。ひさしぶりで。今宵(こよひ)おめにかゝりいしたもんでおざんすものを。おめへさんの。おこゝろもしらずに。めつたなこたァいわれいせんが。ほんとうに又。そふおもつておくんなんすなら。今からおめへさんの。女房(にようぼう)でざんすから。もふ。外へおいでなんすと。きゝいせんにへ【定】ソリヤアおたげへよ。これからはおめへの色男をも。せかにやァならねへがかつてんかへ【玉】ナニわたくしらァ。そんなものはおざりいせん。エヽなぜそつちへおよんなんす。そして帯をおとき□□□□□□

なんしな。こかァおめへさんの女房の内でおざりいす。ゑんりよぶけへ　ト いちもくさんにきやくのおび□□□□をときまふとんのそとへほうりだし　□しもしへ。わつちやァほれた男にやァ。ちとひつつこへから。かんにしておくんなんし　ト□□□□□□□□　ちからありた□□□□□□□□りメつける　ほんにおめへさんが。前髪のあんなんした時分にやァ。とんだかわいらしくつて。其時分から。思つておりいしたものを。もふこうなつちやァはなれいすことじやァおざんせんから。わりい物に見こまれたと。かくごしてお出なんし【定】おめへも其時分にやァ。でへぶかせぎなすつたが。ぜんてへ。振廻ずきのほうだから。なんぼそんなにいゝなすつても。ねつから信仰がうすいよふだ【玉】ヲャわつちやァ。そんな氣じやァおざりいせん。それともうたぐりなんすなら。どんなことでもいたしいす。命でもあげいすから。いつそころしておくんなんし。ヨヨ　ト かぶりついてくびすじをく□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□　つとメ□□肩をふるはせて　なぜこんなに。まとよわせなんした。エ、もふかわいゝのふ　ト ずつとはいり。ふたりがよぎ□□□□□□□□□□□□□□□□□　のゑ□かゝ。知たま□□□ゆるを　ハ、アそふした　ト よぎをひつかぶる、此内いちざのせいたい□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□　ひと□ねのさみ□□□□□□□に。座□□□□□□【青】定さんどふだに　ト 枕えにすわるゑ□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□二わおきよふとす　所わ。年代記にある。山城のくにで頭ふたつ有子をうんだといふものだハ、、、　るを、おいらん、おきるなとメつけている□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□　これが女郎の方からほれているせうこで、人がきても客のみへ又その身のながめ□□□□□□□□□□□□□□□　に□□・やつ□□□□□□□□ついてねている、一ト□とも中へ□たとへずいつきやつてねていても、人がくると、じきにわきへはなれている、これ□□・　人の見るめをはづるきゝにて。おもへぬ男と。うきなのたつをいとふなるべし。ほれたどふしへ。けつくなのたつを。うれしくおもふものなるゆへ。わざとひつこくして。人にミせるハ此道のならひつとめのうへにても。こゝにかわることわなし　【玉】もしおゆるしなんし　ト あたまをあげて。ふとんの上におちこあつたしのきをさす　【定】青たいさん一ッふくおかりなせへ　ト これもうつふけになりきせるをとる

【青】時に定さん。きいてくんねへ。破軍の劍さきにでも向つたとミへて。こんやのよふなァ目にあつたこたァねへよ【定】どふなさつた【青】霄からふとんの上に。たつたひとりさ。野郎の木魚じやァあるめへし【玉】其菊さんれどふなんした【青】色男が來たと見へて。からつきり。きついものさ。しかし。わつちらも。人をこういふめにあハしたこたァいくらもあるから。そのむくひだとおもやァ。はらァたゝねへが。おつなもんで。どふか壁の下張に。道具立を書たうちへでもへへつているよふなもんで。ねつからつまらねへの【玉】ソリヤァそのぎくさんも。今霄れいつそ。あんばへがわるいといゝなんしたつけが。どふなんしたやら。ぬしやァおさミしくつて。おきのどくだね【青】ナニサそれだとつて。野暮に腹をたてる。わつちでもないから。こんなめにあハせるのハ。わつちの目がきかねへといふものさ。ほんのこつたがわつちらァ。幕のうちの煮メじやァねへが。かミメて見ねへけりやァ味へのしれねへといふ男だから常住ひねりばなしにされている。女郎衆の眼にやァわからねへはづよ。野良ハふけいきでも。小判のひかりで。色男からつりをとつて。あそんだかハりにやァ。是まで新造のしきせなんざァ。絹ちゝミを昆布のよふな。ちりめんで。してやつたもんだから。蒔ておいた種ハ有がてへもので。今でもへりとりむくの下着ハ。毎としたゞでも着て見せやす（このしんぞうのしきせをもらうには。十夂と十五）

匂いろとゆへ・それてこの せりふを・ミへにいふか　今じやァそふでもねへが。二三ねんあとまじやァ。ほんに一日でも。五分縁の畳を、ふまねへけりやァ。ねたことのねへ男よ　トむしやうにはしやぐ・ふたりもこゝのやくにきいていれべ・ やかましいほどしやべるゆへおいらんたばこをすいつけこせい たいがかたへたしながら・わきのほうをむいて・定　郎とかほを見やわせ・わらつころ・せいたいれ・むちうに なつて・おいらんがきせるのあとさきをまちがへて・かんくびのほうをたしたともしらず・口もとへあてがい　といふもんだから

アッ、、、ヽ【玉】ヲヤどふなんした　トロに手をあ てゝわらふ　【青】おいらんうらこそだぜ。ごうぎにやけどをさせた。ア、まだひりつくわ【定】めつそふな【玉】かんにんしておくんなんし【青】コリヤァこんやァどけへまわつても。ろくじやァねへ。もふいつてふせりやしやう【玉】もつとおはなしなんしな【青】イヤおじやまになるもきのどくだ　ト立出あしにて何か べつたりふんづけ　ヲヤきミのわりい。思灯をふんづけた　トたもとからはなをかんだか ミを出しふきすてゝでゝ行　【定】かんじんのとけへ邪魔がいつた。サァおとらさんもつとこつちへよんなせへ【玉】おとらじやァあやまりいす【定】なぜいゝなだぜ【玉】にくらしいのふ　トよぎをすつぽ □□□□□□ □□□□□□ りかぶつてねる

評ニ曰巧言令色にして人を惑す傾城の心にハ鮮哉仁。終に客の懐に是も鮮かな金、されど次第に高慢の鼻ハ。高いも低いも色男の氣取になつて尻のしまいハ。身の仕舞をまけた〳〵と観音の市にハあらで一命を安賣に賣はたすハ。此せちがしこき世の中に。似合ぬ人の心ならずや

第三章

【客青黛】ひとりざしきに。ばんをしていてもつまらず。目はさへてくるさみしさのあまりに。火ばちの火をかきさがして。てうしをあけているところへこれもおなじくやくしやにて

【太助】ひとりねのさみしさこゝにきたりて。たがいにてらされた。しゆつくはいをいつているト此内しんぞうあはたゞしくはいり

【新野かぜ】おゆるしなんしトあんどうの引だしより。らうそくのともしさしをいだしともしてふくろとだなをなにかさがす【青】あの子が。らうそくをさし上ヶてまごつく所は。うしの時まいりが。かなづちのあたまでも。おつことしたといふもんだ【太】イヤうけ合仕事の壁がひねへで。左官がよなべをするといふ。手つきもある【野】コンナみどりャ手めへ。さつきのものはよ【禿】そけへおきいした。【野】それでもしれねへ。じれつてへ子だのふトこゞとをいゝながら出て行【青】コウあの子。いゝ子だ。どふぞ若衆をちよつとよんできてくんな【禿】アイ引トへんじもおもくでゝ行【太】ちつとわけへものをよびつけて。いつておやりなさるがいゝ。あんまり人をばかにしたことだ【青】インニヤヨ女郎買はこゝだの。こつちやアだまつてゐても。今にあつちから。あやまつてくるよふにしてみせよふ。こゝが所謂。兵をよく仕ふものは。赫々の功なしといふ所だつ。此孔明がはかりことを見てゐさつし。妙だによ【太】はてなト此内わかい者そつとはいり【若】およびなすつたア。あなたでござりやすか【青】こゝだ〳〵コウおじ

やまだろふが。ちつとおたのミのすじだ。今一ばいのまうとおもつた所が。何も肴がねへ。どふぞ。なんぞちよびとしたやつが。たつたひといろでいゝから。はたらひてくんねへ（トふところから一ふくほうりだす・わかいものハ又こごとだろふと思ひの外少しへかすりのあることゆへまんざらでもないかほつきなり）【若】かしこまりやした。おてうしハへ【太】コリヤアありやす【若】只今火もあげやせうコリヤア時に。おいらんハどけへいかしつたやら。おさミしうござりませうにハ、、、（トねつからおかしくもねへことわらつて出てゆく）【青】コゥ太助。見さつし。わけへものへあゝすると。とふしても南一ハかすりのある事だから。ソレもふ。ぜひきやつが。だまつちやァいやせん。今に女郎がくるよふにやァいわずとも。あつちではたらきやすハ【太】なるほど。コリヤア女郎けへ極祕のところだ（ト此内わかいもの・だいじうのふに・火をはこび又ちいさなどんぶりに・うどのさきつほをせんにしたやつと・山ヤのきんかんに・なまがいのすびたし・わさびといふやつをぞくにだいこおろしとひねつて・たつふりとかけ・ひとつのはちにハ玉子のやきたて・おさだまりのとりあつめもの・長すゞりぶたにのせて・もちいでまんなかへすへる）【青】これハ大きにおせハだ。ナニこんなになくてもいゝものを【若】もふあがりますよふなものもござりませぬ。おいらんも今にお出なされます【青】ナニ是でのミやァ。もふおいらんハ入やせん【太】あがつたらなを。入用になりそふなこつたハ、、、、【若】ハ、、、、（おなじよふにわらつて出て行）【青】太すどふだ【太】妙でござりやすサァおはじめなせへ【青】コゥ見さつし。其かハり。一分で是斗りだ焼玉子に。甲州とうがらし。くわゐもまん中が。くさつてあらァ。おらが新道のいせ吉で。貳百が物だ【太】

さやう／＼。こつちらのどんぶりが。百五十にして。三百五十ばかりのだしもので。一分たァあまり。利のとりよふがすくねへわへ。へ、、、、時に。青黛さん。其かハりかの例國ができたら。又まんなをしに。どけへぞめへりやせう【青】れいこくたァなんだ【太】ソレサ先頃あなたへ。おたのミ申た大ふく町の角やしき。沽券千五百兩惣地代といふやつが出來ると。しつかりはなし合がわかりやすハ　ト此内せいたいが相方【其ざく】ミすがミにて。はなをかくし。今おこされたといふかほつきにて　ヲヤ　まだ。およんなんせんかへ【青】ナニひとりでねられるもんか【太】おいらん。ひとつおあがんなせへ【其】わたくしやァもふ。こよひハ。しやくがおこりいして。いつそせつなくてなりいせん。さけハもふおゆるしなんし【青】ナァニどこぞで。おもいれのんできたのさ【其】どこでも。たべやァいたしいせん【青】たべねへもすさまじい。かけゐんセうか。ウスドロ／＼で。出よふといふふうをして。今ごろのさりと。出てくる化ものだものを。どふセ。きのきいたのじやァあんめへ。ノゥ太す【太】ナニサそふでもござりやすめへ。マァおいらん。すハりなセへ。青いきものをきて。そふしてゐなさると。どふか。さぼてんのはちうへを、ミるよふてわりい　ト此内定二郎ねまきのなりぶら／＼でかけ【定】ヲヤおにぎやかだ【太】イヤおめへも。今のばけものぐミだ【定】さつきのいしゆげへしに青たいさんのおじやまをしよふとおもつてさ　ト火ばちのそばへすハると。そのきくも。定二郎がわきへすハり【其】玉川

さんれへ【定】ふんぞりけへつて。今いびきさいちう【其】うそをおつきなんし【定】うそじやァねへ宵からわつちやァけちらかされて。いくたび。ふとんからおつこちたか。しれやせん（トはなしのうちに。立ぎゝしていたりし玉川ずつとはいつて定二郎をひつころし）【玉】よくいろ〳〵なことをおつせへしたの【定】コレくすくつてへ【玉】あやまりなんしたか〳〵【青】おいらん。でへぶおむつまじいの【太】あやかるよふに定さん。一ッあげよふ【定】酒ハ御めん【太】テモひとつ（トむりにつく定二郎かほをしかめて。一トロのむ。玉川さかづきをとつてぐつと）ほす【其】もしへ今宵ハ。玉川さんが。いつそおうれしうざんすとき【定】なぜへ【其】おめへさんハひさしい。おなじミざんすものを（トかねてのよふすを。玉川がはなして。せんこくせうちのことゆへかくいふなり）【青】ヲヤなじミだ。おいらにやァだんまりで（ト大きにきもをつぶす）【定】ナニなじミといふハ（トいゝそふにするを玉川きやくのほうべたをつめつていわせず）【定】コウいてへ〳〵【玉】いたくつてもわつちが身じやァなし。かまいゝすものか（トのつかゝつてつめるやら。たゝくやら。いちやつくたせいたいと太すけハ。ましくしとしりめに見ていながら）【青】もふさけものめぬ【太】ヱ、いま〳〵しい（くちこゞとをいふ）【青】時にもふ七ッだろふ。たすけへろふじやァねへか【太】けへりやせう。定さんハどふなさる【玉】定さんハ。とうりうをしなんすとき【青】かつてにするがいゝ【定】ナニ御いつしよにけへりやしやう【玉】ヲヤおめへさんハ。さつきあすもいよふと。おつせへしたじやァおざんせんかへ。おけへし申こたァなりいせん【青】定公ハいるがいゝ。おいらァけへる【定】それでもいかやが

めへるまで。お出なされべいゝ【其】まだよふおざんす【青】よくてもわるくても。やがて夜があけらァ。はをりを出してくんねへ（ト此うちはやたすけへはをりをひつかけてきたり）【太】サア〱出立〱【玉】ヲヤほんとうに。もふおけへりなんすかへ【定】どふでもおいらひとり。殘つちやァわりい【玉】わるくつても。わつちがいゝよふにして上いす【定】おほきにおせわだ【玉】おせわじやァおざんせん。わつちが客人ざんすものをつどふともわつちがしてへよふにいたしいすから。そふおもつてお出なんし（トそのぎくもろとも。ふたりをおくつこいづる。ふたりへふくれけへつて。はしごをばた〱おりると）【玉】【其】よふお出なんし【若もの】これはお早うございます【二人】アイ（トいつた斗。くゞりをあけてもらい。そとへすつといで。四五けんほどゆきすぎて）【青】是はしたり【太】どふなすつた【雪】ふとんの下へ。忘つちやうふんどしを。わすれて來た（ト云〱）

評に曰。褌を忘るゝものは。恥を恥として再び行ず。魂を忘るゝ客人は。是を取返さんとして又行もの。契情が臍の下の夜光の魂に蕩れ。秦王十五城をまもる。劔のたましゐまで若ものにセしめらるべし。此内主鼻のさきへ宿がへするに至つて。心の臓の家主。本然の店賃を失ひ。肝心の屑が惘ることを恐る。たな受の膽をつぶして芋を食ひ。屁をひつて尻のすへらぬ魂は。総に膝と談合して。足をはかりに駈出すべし。一寸の虫にも五分の魂。五尺のからだは魂も二尺五寸。手拭をもて。あらひそがゝば。みがいただけに光るべし。性根玉

でも。なんの玉でも

野良の玉子

二九

夢の盗汗

序

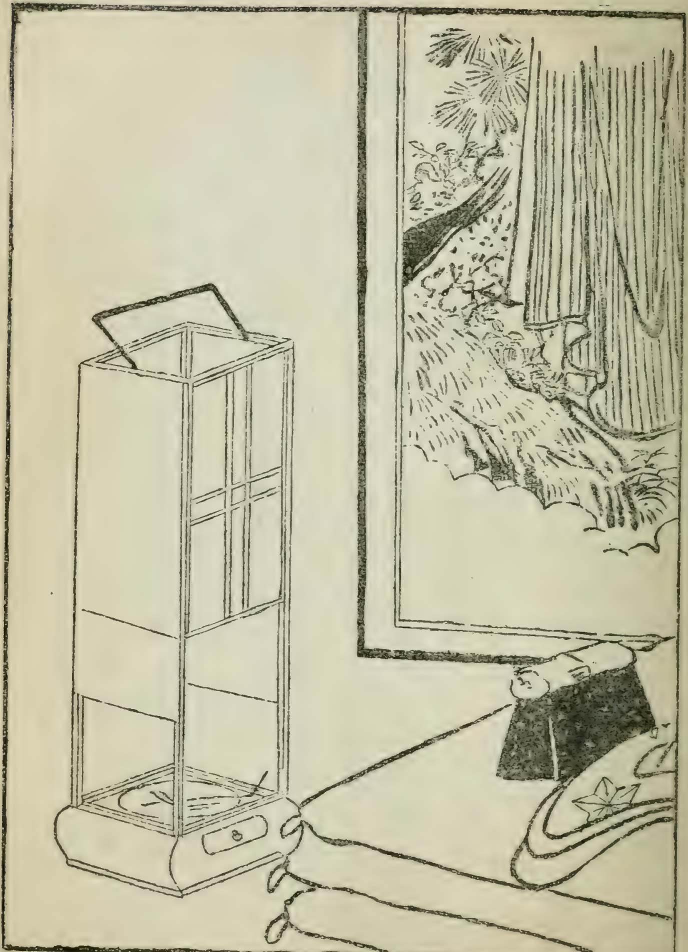
勝己者必惡故其長をとらず其短を拾ふハ小人の習也不佞谷峩今我國より二十里の波濤を隔山家に住居寂寞として猿狙を友とし猿のために猿とされん事を恐といえども彼一ッ長屋の佐次兵衞ハ四國を廻りてさへ猿となるに況三とせの星霜を經る山家にゐてをやされバ猿が似たる歟また三毛の多きゆへにや年〳〵書肆の小冊を請こと頻なれども錯管魚魯既多きを慚而辭れども固請て不置校合の行届かざるを茅屋より聲をからす而已

酉の
初春

梅暮里谷峩述

夢之盗汗

二



目録

○第一回　爽約をせめて再會を約す
○第二回　謀をうけて密書を奪ふ
○第三回　夢になぞらへて管を送る
○第四回　意をさぐりて疑を晴す

終

夢之盜汗

梅暮里谷峨著

〇第一回

大江戸の眞中から四五町脇富榮町の朝市には綾羅錦繡より襤褸たる布子まで左右にならべ騎馬の勇士も眼をよこたへ江戸見物の田舍者もまづ膽の決しはじめぞかし爰に軒をならぶる古着屋の其中に質と古着にしつかりと人にしられた古手屋八郎兵衛が見世には遊びも渡世も同じ仲間の【乾七】旦那此間のを賣て下さりやし【八郎兵衛】どうして大ちがひ〳〵【けん七】ハテこまつたものね　トあたまをかく　【八郎兵衛】そんなにもうけたがらずとマァはなさつせへな三吉よお茶をくめ【けん七】此頃は大はづれさ　トあたりをみて　ナゼ見世の衆はへ【八郎兵衛】干物の仕廻いこりで藏へいつたのさ差合なしだおもしろひ咄をしねへかへ【けん七】おめへさんこそ貳丁目がおもしろひ世界だらうけたまわりたい【八郎兵衛】どうしてきいた【けん七】そりやあ蛇のミちは蛇さ【八郎兵衛】まだやう〳〵四五度だが氣をつけてミれば遊辜といふとしひさしくほりもの

までさせてくるやつがある「けん七」今さかんかへ「八郎兵衛」今ハこねへといふがどふだかおぼつかねへものよ「けん七」よくせんなくをきゝてへね「八郎兵衛」されバさおれもちつとまよつたほうだからなを我慢でよく／＼根をほつていかうと工夫最中よ一度つきやはねへか「けん七」とうもあすこの内にハいゝ新がねへ「八郎兵衛」とんだ事をいふ壁のほうの中ごろのをミたか「けん七」ありやァ十とふめねへ「八郎兵衛」其そばの顔のほそおもてな裏町の大屋の娘といふかほよ「けん七」ムヽほんにあいつハいゝあれならずいぶん六十からの代物だ（これハ晩日にて八十五匁一両のわりなりおりから石町の鐘が鳴）ありやァ九つだそうだそれじやァこうしてハいられぬ「八郎兵衛」ナゼ「けん七」福徳屋の流を一トロ買やくそくさァ旦那こふしておくんなさりやし（トそろばんをよこしてぱち／＼いはせる）「八郎兵衛」今の所へつきやうならまけてやろう「けん七」そりやァ責てせへおくんなさりやァどふとも「八郎兵衛」啌をつくとまざれになつてはづしハならんぜ「けん七」こんだハきつといきやす「八郎兵衛」エヽうるさい男だまけてやれ「雨人」（手をうつ音チヨン／＼）

○第二回

雛妓買ハ楼上の鬟をミざれバ打絃の嘱を聞て情をうごかすのミ我も淋しく人もさミしく音

信るものにハ油をつぐ若者【新造妻ど】コレ喜介どんおゐらんハ座敷にいさつしたかへ【喜介】今科戸さんと一所ニ下へおりなさつたつけ【客氣樂】妻琴さんにいさゐを咄してくれたらうい【妻戸】さうもふしいしたが客人だから今にお出なんせう【氣樂】なんせうを大盃でなくつてもいゝ一ッつぎや【つまど】アレサわるひいたづらをなんすなこぼしひすにへ【氣樂】これでもその哥のつゞきハこれだものを【つまど】アレサいやだよ【氣樂】いやだのすしなら酒の肴にいゝの【つまど】アレよしなんし【氣樂】よしのきせうかちわるそべいハいゝはづだが【つまど】しりいせんよマァ口がすかァざんせんかへモチットだまつて酒をのミなんし【氣樂】すい口なら火を入レてなをしやせふと（たばこをつぐ）コリヤア、火がねえとりかへなをしだ【つまど】アレこれほどざんすものを（折から妻琴科戸つれだつてくる）【つま琴】ヲヤごめんなんし【氣樂】ヤァおゐらんじやァ起ざァなるめへ【つま琴】アレサよふざんすわな【氣樂】武士ハかたふござへす客人だそうにマアよく來てくんなさつた肝心のおめえにあわねへでかへつちやァとんだちまらぬゑんこう【つまど】なんだとへ【氣樂】猿さてがねへにやァおとる【つま琴】（わらひながら）ホンニおめへさんは遊華さんの友達でざんすそうだね【しなど】マァゆふこさんハどうなんしたへ（これハつま琴がばんとうしんぞうらせ）【氣樂】イヤモウうつり替ハ世のならひとハいゝながらむかしのぱつぱとした全盛寐ぼけたのが目が

さめて今じやァ大しんぼうでまづ内へかいりやした【つま琴】そりやァようざんすね【しなど】どうぞつれもふして來てあげておくんなんし【氣樂】わつちもその理屈でばかりできやしたトつまどがかほをミて ホイあんまり情かねへの此子もあけつぱなしの色事がすきだからいゝのふ【つまと】しりいせん【氣樂】それはともかくも遊薹もしんぼうしたもせうが早く内へかへりおめへのところへきてへといふが山さ【科戸】そんならチヨはやくつれもふしてきてお上ヶなんせんヱ【氣樂】されぱさこゝにへんな事かござへす此間商賣づくで寄合て咄た所が古手屋八郎衛がおめえのとけへなじんでくるそうだそりやうをきくと遊薹も大氣がもめで私を呼によこしてコウ〳〵いふはなしをきいたうかつにれ立戻られねへマァどふしたらよかろうとそうだんさマァそんな事をたがいゝやしたときいたらば八郎兵衛が口からいふようすかなんでもたゝゆくやうすじやァねへそれからわたしがいふにやあおめえもまんざらでもなくいつたものなりィ、ハおれがおいらんにあつていつれとも心のはれるやうにしてやらうといつてきやしたおめへもめんとむかつてれいゝにくる事もあるもんだから何もわたしにゑんりよれねへかけごのねへところをいゝなせへはるいようにははからうめへはな【つまと】八郎兵衛さんと云がきんすが此ごろの客人でざんすものを【氣樂】そんならゆふこをつれてこいさへすればしつたどふしの事なれバ一方

ゞわかれねへけりやァならねへがせうちかへ【科戸】ナニそりやァおめへさん八さんハやうやうこのごろの客人なりせ話になりなんした遊莘さんがたちもどりなんすなら八さんのほうハどうともされへすはな【氣樂】なんぼおめへばかりのミこんでもかんじんのおゐらんがふせふちでは【しなと】何もつまことさんのふせうちのことハざんせんそして八さんゆへ遊こさんをよびなんせんでハ内所のめへもすミいせんわな【氣樂】そういふことなら口でばかりのはなし合でハわからねへわたしもあとで彼是があつちやァ云ひ譯がねへちよつと一筆かいてやつてくんなせへ【しなと】そんならみにいさゐを書てお上ヶなんし【妻琴】おめへもばからしひそんな事がふミにかゝれるものかな【氣樂】そんならふみハやられねへのかへ【つまと】みはあげもふしいすかいさゐハおめにかゝつてもふしひせうとお世話ながらよくもふしておくんなんしみハのちにもたせてあけへすにへお休なんしトゆく【科と】モシヱつまとさんがいつそほれていなんすにへ【氣樂】ほんにか【科と】ほんでざんすトいゝすてゝゆく【つまと】アレあんな事をいゝなんすトほんなれハあとをいはず【氣樂】ほんだりやしや明王でハかなしばりにしてどつちへも身うごかしハさせねへといふ口の下からモウ寐よふとおもつて身ずくろひをする【つまと】ヱ、よしておくんなんしおめへさんてハあるめへし【氣樂】そんならこふしやうなんでもねたものハ尻をま

くつてたゝきつこにしよう「つま戸」それよりか鼻へこよりがよふざんす「氣樂」ツレ〳〵もふよ
ハ虫ころ〳〵をいふ「つまと」それでもばからしいそんなことハいや「氣樂」そんなら大丈ぶに寐
る氣だの「つまと」そうじやァさんせんけれどおめへさんも遊喜さんばかりの用でおいてなん
したものをかはひそうにねせもふしひせふね「氣樂」ハテア、いはねへけりやァ手なし上總の
市味雛だわこせうハあいたい見たひと日頃から思ひ思つたおめへだものを寐ろといつたとてど
ふまあねられるものかと 背中をたゝく 「つまと」どふしてそれをわたくしがしるものでざんす「氣樂」
そういつてハ恨が浦首引ではてしがねへモチットこつちへ三介よつたり〳〵しよ「つまと」い
つそ茶たね「氣樂」茶たねてよく口をきくものと思おふがこれでもよつぽど實があるぜこんど
きたときでめへといふめへぜ「つまと」それよりおめへさん外の女郎衆ととりかへねへよふに
なんし「氣樂」そりあないとこつもりに一盃呑でぐつとねようホイ「つまと」それミなんし
北斎へ禿ふともちきたる 「禿」おいらんのおいゝなんすはそんならおせはながらとゞけておくんなんしと ふところいだす
「氣樂」よし〳〵おいらんにつま戸さんがいつそわるくしますからむりに酒でもまいらすハこんや
一夜がすぐされませんなんぞむまいものを下さりましといつてくりや「禿」あい 引トゆく 「つま
と」だまつていやよコレ〳〵そこへいかう ト立出て何かさゝやくハほうづきのりくつなるべしすぐさまきて あんまり口をきゝくたひれな

んしたそうでもふ寐なんした（トコへ〳〵くすくる）【氣樂】ム、コレねヤアしねへ〳〵

○第　三　回

廓の日晝ハ世事のうるさき眼にさへぎりヲキヤア〳〵の聲四方にきこへ仲の町に男きれ少ければ揚屋町に女藝者の晝寢多したそや行燈のくびとつときにさるれバ首斗化粧た禿表へいづる女郎屋の暖簾捲上て家名をかくせバ暑を凌んと手まくりして間夫をあらはす二階の倡妓短き柄の團扇てん〳〵につかひながら【九重】妻琴さんの八さんハ頃日ハおいでなんせんね【妻こと】アイサどうしひしたか幾度みをやつても返事もよこしひせんはやく逢ねへけりやアなりひせんけれどいつそ人にばかり氣をもませへすよ【九重】とかくどこのも返事をよこす事がきらいでざんすそのくせよこさずともいゝと思ふ客人ハみをやるたびに返事をよこしいすねへおめへさんハ遊辜さんの事でまちなんすのかへ【つまこと】アイサ主のきなんせんうち八郎兵衛さんかきておくんなんせばいゝ【九重】遊さんを立もどらせて八郎兵衛さんの方ハどふなんせうと思ひなんす氣の多い【つまこと】ばからしひマア八郎兵衛さんと遊辜さんとどふひとつにもふされいすものかへしりなんす通り久しくお出なんしたによつてほんの義理につまつてアア

してよびいしたからくるなともいはれずそしてあの科戸さんが例の意地わるをいゝすゆへみもやりひしたがマァどふしたらようざんせうね　ト うはさ中ばえ〔禿〕するがやの人がいまもつてめへりひした　ト ふミを出ス〔つまと〕ヲャ八郎兵衛さんのとこから返事がめへりひしたマァなんだのうついぞ此やうに大封ハざんせん　ト いゝながらふうをきる　ヲャ〳〵ふミでハざんせんこんな本がきいした〔こゝのへ〕ぬしのこせへなんした洒落本でさんせうマァよんでごろうじいし〔つまと〕讀ませうね

殘る暑の去かねしかよふも御いとひ外ならず御うれしく候將此ふしハ御げんもたへしが日〻わすれねばおもひ出す間もなふ轉寢の非間さへゆるさで結びし夢のいとくるしく盗汗したたる事のをかしさ思ひあたればさもあらんと其儘小册に綴り御めにかけ候悪のとのミ多けれどたゞ妓身のミやすからん事をとしかとめ候かしこ

文月　はち

つま琴さまへ　より

〔こゝのへ〕その跡ハ洒落本でざんすねわたくしにおよませなんし〔つまこと〕サァおよミなんし〔こゝのへ〕サァよミんすおきゝなんしよ

今宵きたりし客ハ與次郎兵衛と同居のよしミをむすぶ八郎兵衛にてざしきもなかばすんでし

やれもとぎれ折ふし廊下のかたより新造あわたゞしくおゐらんへとよび出す【手ど】なんだへトいづる【新造】おめへさんのうれしがんなんす事がありますよ【てど】なんだばからしいはやくいひなんしな【しん】遊辜さんがきなはりました【手】うそ【しん】嘘ならどふともなはりましとあらそう中はや遊辜ハ茶屋があんないニ表座敷へ入手事ハ早〻きて【手】うわさばかりしておりひした念がとゞいたのだそうだうれしひ【遊辜】そりやァおれも同じ事だマァ〳〵後にゆるりと咄もあるがあいにくこん夜ハ客でわるひの【手】マァそりやァよふざんすがおめへさんハやつぱり品川にお出なんすのかへ

【つまと】手事とハわたくしが名でざんすかへいやな名たのう【こゝのへ】よく此やうに品川においでなんすときでしつてゞざんすね【つまと】何にもかもうち明て咄ィした【こゝのへ】そうでざんせう

品川においでなんすのかへ此間人目あればさしたるこんたんもいわれずそんなら今のうちいつてめへりひせうねと行これより八郎兵衛がほうハそこ〳〵につとめそう〳〵くる【手】さミしうざんしたらうねわるくしやれるからはらがたつてなりいせんか一座もあるゆへよふ〳〵今までおりひしたそのかはりモゥいかんようにしてめへりひした【遊】こん夜の客ハ馴

染か【手】アイ八郎兵衛さんといふ名のよふなきやく人ざんす【遊】ムヽうわさにきゐた八かどふりで手めえがきへると思つた【手】ナゼそのやうな事をいゝなんすへ【遊】いわねへでどふするものだ【手】何もいわれるおぼへはざんせん【遊】そふいふこゝろのてめへともしらずあつちにいれば今頃はどふしたかおれがことを苦にして煩ひはでもせぬかとそんな事を思ふと飯も心よく喰れねヱ
【つまど】煩ひはせぬかもつれへのふ【九重】まんざらでもねへからいゝわな【つまど】なんとでもおいゝなんし【九重】とこだつけの
こゝろよくくわれねへ人の心もおれがやうに實があると思つたはおれがやぼからおこつたことだ人に咎はねヱ【手】人の氣もしりなんせんでなぜそのよふな事をいひなんすおめへさんこそ品川へおいでなんしてから去年の春一度みをよこしなんしてそれからといふものは便音信もなんせん品川もにぎやかなとことやらおふかたあつちの女郎衆と色事をなんしておもしろへくらしなんすもしらずわたくしこそおめへさんのとばかりいつておりひすからそんなもわたくしのよふに情のある者はねへその念力で大かたおいでなんせうといわれるをちからにくらしておりひすものをそしておめへさんの御出なんす時分は丈ぶてざんしたが此ころはいつ

そ病身になりいしたこれもおめへさんゆへのことでざんすにそんなことをいゝなんすからくやしうざんす【遊】ナニくやしひもあんまりいゝあつちへいつていや【手】イヤヨ【遊】いやなものがそう足をちかくくる物か大かた馳走がいゝとミへる【手】誰がその様なとをいゝしたへ【遊】誰がいつてもいゝわなハテこうとをざかつてゐるものをばかならおとなしくしていようましてつとめの身のうへでれかわるまくらの數のうち襟元より風のはいるもいやな客丈ができねへでどふするものださら〱むりとれおもわねへ【手】ばからしいすこしれ方しろでもあるとのなんぞのやうに人もじらしなんすマァひさしぶりできなんしたからあつちの様子もきかせなんしたり私とてもつもるはなしもありひすにちつとれやさしくいゝなんしてもばちもあたりひすめへにほんにそう思ひなんすなら義理も人前もいりんせん突出しておめにかけへす

【つまと】エヽモいやだよ〱【九重】マァだまつておきゝなんしな突出しておめにかけへす【遊】ナンノてめへがつき出しゐゝるものかトこんたん最中ざしきの客八郎兵衛れあまりまちあかしてもこぬゆへ大きにいれがきて深夜もかまはず若者〱と手をたゝくゆへもはやゆくまじと思ひしにあまりあたり内所の前を氣の毒に思ひふせう〱

に行て【手】モシヱなんざんすへばからしひ用があるならしづかにおいゝなんし【八】ナニしづかにしもうせコフ手をうつばたいてさへたれもでやひもふさぬに遠慮してだれがうつかまいもうすべい【手】わたしが様なものでも客人の落合時もありひすすこしハふせうなんすがいゝ【八】何もきゝ申さぬまたるゝたけれまち申たわれどもハかへりもうすからとめまいぞや〳〵【手】ナニとめハしひせんがねマア下においでなんしもふしひすとかありいすム、ト八郎兵衛ハ下に居る定めてむりむたいにとめるだろうと思ひの外【手】おめへさんハしりなんすめへが今夜の客人ハ久しく〳〵る人でざんすもつともひとゝをりならず世話にもなりひすのさ今きゝいすればおめへさんをよくしつておりひしておめへさんがきなんしてハきにくひといゝすかどふもいつたんせ話になつた客人を突出しておめへさんをよび申てハ義理も立ず内証所のてめへもすミひせんから氣のどくでざんすがおめへさんをバこれからハマアどふもよび申にくうざんす【八】ヤ、、その人をよんでくれめせあふての上でかたをつけもふさう【手】なにもう歸りひしたわなそのかわり外の女郎しゆの見たてゝかいなんせうともおめへさんのこゝろまかせになんしといわれハツト思ふと一度に目がさめたる處盗汗ぴつしよりヤレ夢であつたか獲喰〳〵

【つまヿ】ナゼ此ようなヿをかいてよこしいしたのういつぞ氣にかゝりひすれ【九重】夕部の事がしれへしたかね【つまヿ】どふでざんすかしれもしいすめへが手をくれにならぬうちはやくはなしておきとふざんすもしほかからしれでもすると氣をわるくなんすマァこんやらきいせうかね トいろ〳〵きをもみ愚ざんなどする所へ【禿】おゐらんへ占の坊さんがめいりいした

○第四回

倡家の万燈茶屋の挑灯ハ客の光をあらわし階子ドン〳〵出し物ガタ〳〵まづ一ばんに樓へ燈るハ【氣楽】マァおいらんハきやく人でなくつて恐悦〳〵【つまヿ】よくはやくお出なんしたね【氣楽】遊亭をつれてめへりやしたが用があるとつて道へよりやしたからそこでごさかんのおいらんのことだからとちつとも早くとおふきにいそぎやした 逢かたのしんぞうのくるをミて ヤァ色事おいで〳〵【つまヿ】アレトにッこり笑ふ【氣楽】モシヘおいらん夕部も寐惚捨にしてねてしまひやした【つまヿ】アレあんなうそばかりおめへさんこそよくねなんしたものを【つまヿ】そりやァ情のあるこつてざんすね【氣楽】そのくせ情あり大根をミるよふな足でいつそけだしやしたァナ【つまヿ】おめへさんのよふにわる口ばかりきゝとをしなんすちつと淺黄になんし【氣楽】淺黄の利通たァ

ツトだんまり／＼【つまこと】おいらんちつと酒でもおあがんなんしてごろうしいしそうしたら氣がはれへせう【氣樂】ふさぎかへ【つまこと】アイ【氣樂】ふさぎ／＼ハ遊辜か追付來ルをミて晴やせう間違なくきつときやすあんじなさんな【つまこと】おいらんのふさぎハそのことでハさんせんわなよくいきすぎなんす【氣樂】コレへけしからぬ事のおらあこつちのつれのこつたと思つたいきすぎだら足休に小便でもしてまちやせう　ト小便所へゆく　【つまこと】ちどりやてめへ今仲の町から歸るとき四ッハうつたようすか【千どり】アイうちいしたそうで土屋の鄽が引たようすでありました【つまこと】あんなことをいつてよこしなんしたからこんやハおいでなんせうと心持にまちいしたがもふきなんすめへいつそじれつたふざんすさつしておくんなんし【つまこと】とふなんすとかといつそあんじられへす　うへさをいへばかげとやら八郎兵衞ハ茶屋を先立二かいへ上る　【若イ者】お客がござりますからこゝへいれ申そう　ト表ざしきへ入るそうそうしんぞうが知せニ來り　【つまこと】もう／＼はなしがあるから呼にあげへしたにナゼ來ておくんなんせんへてへ／＼まつたことでハざんせん【八郎兵衞】ナンダトまつておりイしたを板彫にしておけべいゝ【九重】らうかのかたよりばた／＼きて　八さんかへつまことさんがいつそまつておいでなんしたマアよくおいでなんしたねそしてわたくしのハへ旅か煩うのへ【八郎兵衞】こんやもこよふといふのをとめてよう／＼ひとりきた【九重】いゝむしだつけへね【八郎

兵衞】こんや一所にきてはおめへのところへくるじやまにでもなつてはわるひから【九重】ナゼへ【八郎兵衞】今にわからァミなせへ【うはかぜ】（八郎兵衞とミるとざしきへ入）八さんいつそ洒落本ンがよくできひしたね【つまこと】マァなんでざんすへ【うは風】ナゼおめへさんがたはそんなにおつだへ【つまこと】なんだかいつそ茶にかゝりひすことをいゝなんすわな【八郎兵衞】マァおめへがたきひてくんなせへ此間のばんあんまりながひ夢だから書てよこしたァ、いふ夢はよくあたるものだとおもふやさきこんなものをひろいやしたと（くはいちうよりふミをいだし）遊女琴よりとの此ふミ手もよく似ているからもつてきたおふかたてめへのだろう（ト何くわぬかほでつまことがまへゝおくあたりもぢつくりする）【つまこと】此ことであいたくつて度〳〵よびにあげへしてもへんじさへよこしなんせんであげくのはてにはあのやうなばからしいことをかいてよこしなんしたミんなもおかしがつてわらいひしたけれどわたくしは大かたこれにはなんぞおめへさんのたくミのあることゝ氣が氣ではさんせんと（いゝわけがましく氣をもむところへ）【氣樂】ヤァだんなあいつの鈴ともろともに月をあざむく此家の灯まづ一ばんにざきがけしてざしきはまんまとのつとりましたまづ〳〵あれへ【八重】ヲヤおめへさんは八郎兵衞さんの連衆かへ【うは風】そんならミんなこしらへごとでさんしたか【つまこと】アノしら〴〵しい顔でよく嘘をおつきなんしたね【氣樂】マァおろか〳〵役はらひではなけれども何もだん

なのいゝつけにて犬に這入た此おとこ證處の一通手にいるからハもふかなわぬと覺悟して淺黄の頭巾をぬいだ〳〵かくいふわれハ親もなければ女房もなし女ぼがなけりや子ハなをなしたつたひとりで浮世をわたる不喰貧樂のたのしみからおもひついたる氣樂の乾七といふ中くらいの男なるハサア〳〵じんじやうにいろおとこのいくたてをガタ〳〵なのハエ、ヨなんとにせ上使ハきつうごせへせう「つまこと」ナニモそのやうにに〳〵んできれようとなんす事ハさんせん泣出ス「八郎兵衛」おきやァがれくやしんぼうでなくことハねへ「氣樂」マァ〳〵床もとらせておいたから床でのことがようごぜへせう「八郎兵衛」ナニこゝでもいゝ云ふことをいつてしまやァかへらァ「九重」それにハわけのあることでさんすれな「うハ風」そのことをいつそもうくらうになんしたマァよく〳〵わけてこらうじひしな「八郎兵衛」よく〳〵わけがわかつたからコウ化があらわれたといふものさ「九重」そりやァおめへさんのいゝなんすことだがそれしやァうハべのはらたちでしんそこハつまことさんがどふいふ氣だかしれへすめへ「妻琴」なみたなから　うつちやつておいておくんなんしいやになつたからそれて此ようなことをなんすのでざんす「氣樂」モシエおいらんかたも心ありげにいゝなさるからマァこゝろしづかにあらつてごらうしやし「八郎兵衛」なんだなこんたの着物でハあるめへしいく度あらわれるものか「氣樂」ナンノそりよをいつてはじを

かゝせすともいゝことさそれじやァワたしばかりわるものになるあんまり「八郎兵衛」ナンで「氣樂」ハテ短氣此度ハ泊りの天神さまがよからう「八郎兵衛」土神のおした糊飯を見るよふによくそこらぢうへくつゝく男だ「氣樂」それでもあんまりおひらんのこゝろいきが「八郎兵衛」どふするものかへ「氣樂」（口合にて新内をいふ）お天滿ものとおもわんしよがおまへにミすてられるなら太宰所からとんで死ぬ北野いこゝろがあるならバ湯島であらへといわしやんせぬ竹いの梅を松ふたつに割てあらわす實くらべきこへぬおとことすがりつき前後不覺になきしづむテン／＼「八郎兵衛」ナンダ洒落か寄りによつてそのよふなわりびしやれをきくもせつねへよさつせへおもしろくもねへ「氣樂」ホイしくじつた「つまと」マァおめへさんハちつとだまつておいでなんしな「氣樂」ハイ／＼「九重」そう思ひつめなんしたもむりでハさんせんがちつとハさつしてもいなんせうが妻琴さんの氣から出てやつたふミでもざんせんのさ「うハ風」アイサワたくしどもが能しつてることでざんすからとふそ氣をミしかくなんせずにつまことさんの心いきをたゞしてもしまたおめへさんのたちなんせんよふなことがざんすならわたくしどもがとうどもなりいせう「氣樂」あのよふにせわをやきなさるしつまことさんも實をあらわして泣なさるワたしもよしねへ敵役をしたと今更氣の毒でござりやす骨をおらせたほうびにこんやハとまつ

てくんなせへし子ヱおいらんがた「うの風」アイサそれがようざんすマァあつちへ入レもふすがいゝ　△ミなゝ／＼にいざなわれふせう／＼にとこへゆきこのうちいろ／＼すてことハありてミなたいさんするあとにハたつたさしむかい　「つまこと」うらミらしくやつと　此ふミをミなんしたろうね「八郎兵衞」ナニ人のこんなんのみをばかな見るものか「つまこと」とてもものことに見ておくんなんせバいゝ「八郎兵衞」わからぬうちハいろ／＼手をまわしてこゝろも引てミるやうなものゝコゥわかつたうへハ何があつたとてかもふものか「つまこと」かまひなんせんつもりでそれでそのよふに狂言をしてきれなんすのかへ「八郎兵衞」きれるのきれねへのと非人敵打の土手場じやァあるめへしそんなせりふハこつちの樂屋にハねへたとひ色男でねへとても二月と三月もきたくらゐならうぬがよふなふとひあまをバ息の根のとまるほどぶちのめさァ「つまこと」そりやァうたくりせへはれるくらゐならどふされてもいとひハしいせん　トふミをひらき　此とをりなんでもいやらしひことハざんせんどふでおめへさんの手にやあかないゝせんけれど氣樂さんとやらなことハざんせんわたくしハ遊琴さんのつれ衆とほんにぞんじいしたによつてゆふこさんのことにハたくしがなんといゝしてどんなやうすかきゝなんしたろう何もすこしもうたぐらるゝよふとだからおめへさんを突出してもよばねへけりやァ内所の前もすまぬのなんのと科戸さんがいゝすからおめへさんをよぶさわりになつてハわるひとおもいゝしたゆへほんの申訳のために書

いゝしたみでざんす遊こさんのわけもおはなしもふしいして知ておいでなんしながらむりにふしをおつけなんす「八郎兵衛」おれがまわしものとあらわれたればこそそのやうなきれ口をきくがほんとうに遊蕩が立戻らべい、をれに恥をかゝせようといゝかげんに口を開「つまこと」手をくれになるが殘念でざんすゆへたび〳〵よびにあげへしたもきゝなんせんであたまでゆふこさんと見かへるくらいなら何も氣〻もこいせんけれとしるてゆふこさんを呼めへといゝすと意地の悪ひ科戸さんでざんすからなんのかのとおめへさんの物入りもあらうかと相談のうへでいづれともおめへさんの心のすこいすよふにとまつておりいしたにそういふ事なら遊こさんお出なんすかほんとうでうたくりのはれるやうにしてこせとうざんす「八郎兵衛」人がきかねへといつて其様なことをいわぬものだ天知る地知る手前の腕の名がしるぜ「つまこと」これでざんすかへ「八郎兵衛」こりやなんだ「つまこと」富榮町古手屋八郎兵衛二世の妻さ かねてよりほりたく「八郎兵衛」ヲャ〳〵氣がちがつたさうさ「つまこと」誰もたのこもしいせんにこんなことをしいしたものをあんなことをてにしてきれられて〻氣もちがいゝすのさ「八郎兵衛」そんならてめへ〻をれがかゝあか「つまこと」ふせうしてそうおもつておくんなんし「八郎兵衛」ム、そんなら間夫をざんこするぞよ「つまこと」これでざんすかへ 遊ことあるほりものをこせる こりやァはづかしいことでざんす

が夜具のときそれもしなとさんが無理にすゝめてはらせへした氣にいらざアどふともなんし
ト手をつきつける【八郎兵衛】間夫の仕置にはこれがいゝと　しかも火たまのがんくびをゆふこといふはりものゝうへゝあてずつぱ／＼とたはこの火にてやき切ル　なんと
あつかろふが【つまこと】かほをしかめもせつして　しれた事さ【八郎兵衛】おもしろいことをした跡はいつ
でもこふしたものさ【つまこと】ごせうざんすにへ

地廻り客惡口にや

色用心さつしやりましよ　ト　ながくいゝ

色用心さつしやりましよ　ト　みじかくいふ

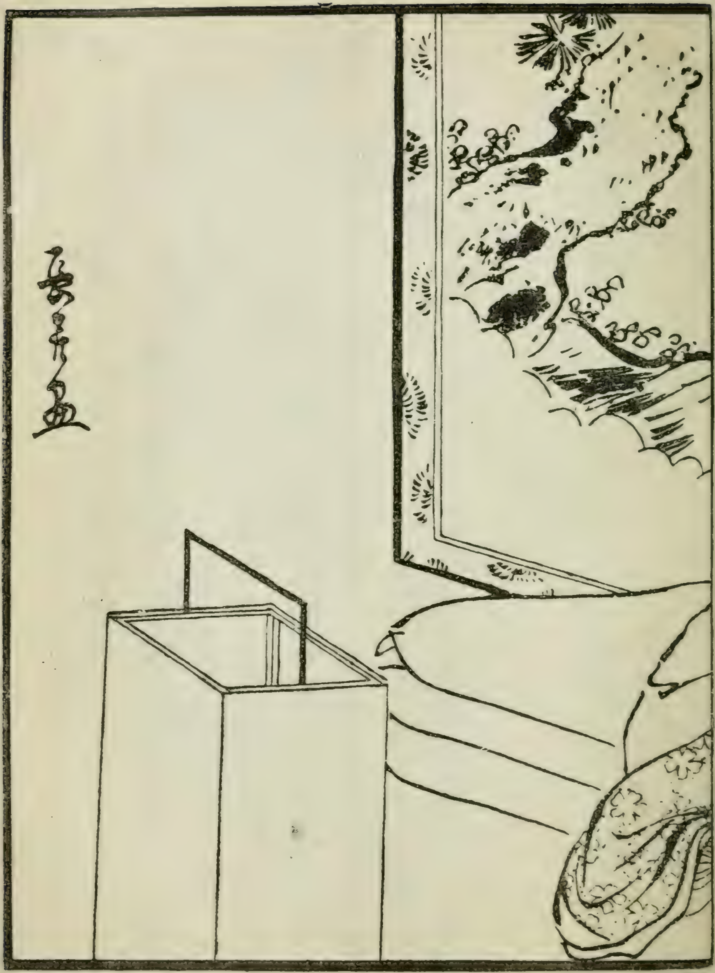
叱意妃思

序

花無百日紅人無シ千日好といへとも青樓の事にあらざるなり入相の鐘の愁もなく四季打〻に咲かへて盛り久しき華の廓孤老降れて照さるれバ寒奈れ天氣て濡るほど染込深き色合にハ紺屋の明後日の悖冠もなく筆にまかせて書起請の九百九十九枚ハ銀代にて消るとも只無文の心固こそ洗濯にも替らぬ色もの嗚呼いろこそ色の手とりなれと懔〻として誂五談之内まづ三談染直すことしかり

戊の初春

梅暮里谷峨述



おぼへ

一壹たんれ　哥好が人のわるい羅甎紋

一二たんれ　市右ヱ門が念に念を押紅花染

一三だんれ　角左ヱ門がきいた風俗の武士鼠

一四たんれ　伊平次が情に涙程な霰小紋

終

甲子夜話 後編姫意怛思

梅暮里谷峩著

○羅甑絞

鈴の音ガラ〳〵に席をたゞせバ行燈パットあかるくぞめきの首ハ櫓下の番附のごとく嚢中錢なきものハ涎を籬にのこしてむなしく退き見たての欲深ハかえつて撰がらしとなる惚られたがる地廻りあれバかすかにまわる仲人あり千差万別其中をおしわけあがる其客ハ雷の庄九郎【若者】今宵ハおわるうござります【庄】客か【若者】ハイ初會のお客でござりますがよんどころなく茶屋からたのまれなさつたから如才にならぬすじでござります【茶や藤吉】そりやァともかくも座敷へ入レもうさつせへな【若者】ハイ〳〵まあ此座敷へでも入レ申やせう【庄】ざしきハどこでも酒をはやくもつてきさつせへ【若者】ハイ〳〵 いそがしそうにゆく立かへつて【玉葛】庄さんなぜ二三日ハおいでなんせんへまたなんぞできひしたかへ藤吉どんせへよびにやらねへけりやァきいせん【藤】一日あハねへともふそんなことをいひなさる【玉】それでもあいてへ〳〵と思つてるゆへか久しくあわぬよふでおすハ【藤】つめる【玉】あれさ何をなんす【藤】あいてへとハ其事で

ごぜへしやう【玉】ヱヽモこんたにあいたくハおつせんがぬしのことをきゝてへから【藤】けしからぬあいそづかしさ坊主(ばうず)がにくけりやァけさまでにくるをひきくらべてミれバかわひゝはづでごぜへす【玉】かんにんなんしうそだよ【藤】なんぼいひかへてももふしやうちさこりやァ根(ね)にもたねへけりやァならねへ子ヱ庄さんなんでも今夜(こんや)の客もあやしゝ男之介だ【庄】そりァおれか心とあいかうだがあやしくハあんまりふるいぜ【藤】ヘヽヽヽ【庄】そして大ぶんきらびやかだぜどうしても見こまれた客ハちがつたものだ【玉】ばからしいよしておくんなんしどんな客人かまだミもしひせんに【庄】ごうぎに心まちだの【玉】あいさそうでおす【庄】どうでいねへものだからサァ／＼はやくいけ／＼【玉】じやまでもおひておくんなんし【庄】おかれねへ／＼【藤】あんなものハおひ出して跡(あと)でゆるりと呑(のミ)やせうねへ【庄】ヲヽヨ人のあげた女郎なぞハけがられしい【玉】たれがあげでもいこうじやァあるめへしそんなにうるさがつておくんなんすな【庄】名代(みやうだい)がでれバいゝからこしかけにはなしてくれてもあんまりうれしくもねへ【玉】藤吉どんのめへておすがもらわんにもわけのあることでおすそんなおかしらしいことをおいゝなんすなら初會(しよくわい)でハあるし直(ぢき)にもらつてきいしやう【庄】うぬがなんのもらつてきへゐるものか【玉】ワたくしのやうなはたらきのねへものでも共くらゐなことハしかねハしいせん

きつそうかへて行た　【藤】おつとそうハなりやせんワたしやァじやうだんかと思つたおめへさんがたハなんのことでござりやす一トとふりのいろごとゝいふ中じやァあるめへしミへもいらねへじやねへかへおめへさんハとふせうとおもひなせへす【玉】あんなことをいわれてハ心がすミいせんからあつちの客ハどふともしいす【藤】わたしも茶屋に居るものだがおめへさんが庄さんとわけのあらつしやるといふとハ仲ノ町中でだれしらぬものもごせへせんにそれをしりつゝわざ〳〵おめへさんにおたのミ申にハなんぞあつちに譯(わけ)のあることでごぜへしやうからまあそんなとハいわずに出ておやんなせへし【玉】それでもミくびんなんすものを【藤】ハテミくびつてもミくびられてもいゝじやァごぜへせんかへ何もむだなしんぞうしゆを上けて壹分なれ貳分なりつかふとハありそうもねへとさサァなんでもいゝからワたしにまかせなせへしヱ、まだわかひねへサァ中直(なを)りに酒ハどふだねトいふ所へ【若者】客人がお出なさいましたトいゝすてゆく【藤】サア〳〵いつてお出なせへしトむりにやる【玉】ヱ、モじれつてへねトゆく此所名代しんぞうもやう〳〵きたりさけ事ありて床になり茶やもかへる【新造玉芝】庄さんこんどお出なんすときてでしかたをしてこれほどなぼうずの人形(にんぎやう)をもつてきておくんなんしごせうでをす【庄】人形(にんぎやう)をもつてあそぶとしか【玉芝】それでもかわゆうおすものを【庄】人形でもぼうずがすきか【芝】ぼうずつくりがきれいでおす【庄】そう坊主(ぼうず)にしミてハむづかしひ心中で

もしめへぞよ【芝】人形とかへばからしひ【庄】イヽャかの人とよ【芝】此ごろハ内がわるひかしてねつからめへりひせん【庄】めへりいせんですましているのか【芝】こつちばかり思つてもしかたがおつせん【庄】かけながしのいろごとハうら山しい（玉かつらきたる）【玉】玉芝さんあつちをきをつけてくんな【芝】（あいとゆく）【庄】何しに來た【玉】うるさがられにきひした【庄】よいのうちいつてくるや何やかをいつてきたのか【玉】よくしつておいでなんす【庄】そりやァ哥好(こう)さんのことだからおれもかくごのうへだ【玉】あんまりかくごがはやくつて義理(ぎり)づめてやろうと思ひなんしてもそうハまいりひせん【庄】おらァ人のおしたハきついきらひだよるめへ〳〵一トねいりして夢(ゆめ)でもミるほうがはるかましだ（トうしろをむく）【玉】寐(ね)るならかつてになんし【庄】ァイ〳〵かつてにしやすうつちやつておくれ【玉】そんならわたくしにかまひなんせんのかへどんなとがあつても【庄】ァイかまひやすめへおれひとりの女郎でハあるめへしどふするもんだあんまりまい置(おき)をいハずとすきなことをしなせへとかくねるがごくらくだ【玉】ヱヽモそんなにじらさずともうつとこつちをおむきなんしあやまりひした【庄】（むきかへて）それミろわかミつめつて人のいたきをしれとハそのことだあんまりてめへがねへもしねへことをやかましくうるさくいゝたがるからこんやハ一はんこつちからせんをこしたのだそれでおれがうるさいをおもひあたりや

「玉」そりやァおめへさんとハちがうのさ「庄」ナセ「玉」わたくしハあけてもくれてもおめへさんのことばかり外の心ハすこしもおつせんそれにおめへさんハそこらぢうをくひたらかしてしんぞうしゆのわるひ女郎のといふわかちもなくほれられせへするとしやうちなんすもいをいわねへでどふするものでおす「庄」外分のわるい事をいつてくれるな「玉」それでもそうでおすものをほんにはやく年季が明て此くるしみをのけたふおす「庄」ねんが明レバなぜ共くるしみがねへ「玉」そふすりやァどこへもださねへで内にばかりおきひすどこへぞ行ときにハついてまいりひす「庄」おきやァがれ何をいふかと思やあ「玉」それだからもふすこしだとおもへバなをまちどをいようでおすハよくはるさんや奥劾さんハまだよつぽどあるからてへ／＼じやァおつせん「庄」ほんにァノ子たちハどふした「玉」ふたりながら見世を引ておいでなんす「庄」ナゼ「玉」お聞なんせんか平さんや千さんのわけで「庄」ァヽおらたちの組の色ごとハでへぶふうぎがワかくなつてきた「玉」アイサおめへさんがただから内證でもきつひとも申ひせんがまづ闘かたちでおすそのふても一ツハおすのさ「庄」ばか／＼しいそろいもそろつてこヽの内へばかりかたまつた内證でもきハ心でハ有るめへよ「玉」それでもワたくしにばかりハいやそらしい事ハちつともおいひなんせん「庄」そりやァ折節ふるもふだらう「玉」うハきのさん

であるめへし平さんや千さんもらい年あたりはあふかた谷峨さんの筆のさきへのりなんすでおつしやう當時むづかしいは淸川さんの身のうへでおす【庄】文七がことははじめからむづかしいが市がのはどふした【玉】九重さんも市さんの所へいかう〳〵と思ひおもひていたのに年季のあける間際になつて伯父さんが迎にくるとやら田舍からいつてよこしなんしたそうでおすから大かた一日二日のうちにはめへりひせうほんにく勞のたへぬ事でおすのさ【庄】どふしてもいきやァしめへからいひそりやァそうとちつといかねへかへやかましをいおふぜ【玉】うるそうおすのかへ【庄】またはじまつたチツトだまつていやたしかてめへの客だぜ何かいふぜ【玉】アイたしか私が客人でおす【庄】それそたこそ茶屋をよびにやるぜちよつといきやナ【玉】今いつてはけつくわるうおすうつちやつておきなんし トいふところへ【新造玉芝】茶屋をよびにやれとおいゝなんすがどふいたしひせうへ【玉】大かたかへる氣でおつしやうよびにやんなんし【芝】アイト行【庄】てめへもふとひものだ心やすひ茶やからたのまれてよんだ客じやァねへかそれをさうそまつにしてあつたときなんといふつもりだ【玉】それだとつてどふするものでおす一生つきやゝァしめへしなんと思つてもようおすたかがおめへさんゆへわるくいわれるぶんのこと【庄】てめへもとんだ人がわるくなつたそんなおいらんがあるものか【玉】そりやァ

たれがわるくしたのだへ【庄】占者ではあるめえしそれをおれがしるものか【玉】にくゐ口でおすねへそのおめへさんになぜそんな口がついてるとだぞ【庄】茶屋がきたそうでまた何かいふぜ 耳をすまして

【茶や】ハイ何の御用でござります【客哥好】モウかへろうと思つて【茶】そりやァとんだおはようござりますまあなぜへ【哥好】マアきかつせへな此子もしつているが相かたの女郎衆が宵に盃のときちよつと顔をミせたがあまか岩戸か納戸かしらねへが引こんでからかたきし床はやミだ【茶】そりやァとんだことだおいらんがわるひ【哥】□□□寐る氣なら内のほうがしづかでいゝわざ〳〵こんなさう〴〵しい所へねにはこねへあすびにきたのだおめへのおゐらんかしらねへが玉かづらとやらすいかづらとやら細見にもうや〳〵しくぼう〴〵まひをみるよふなものをつけてりつぱな女郎衆にもにやわねへわつちもたま〳〵女郎かいにきたものだから如在のねへ身のうへからはそうわふにあそばせてくれたがいゝわさ【茶】玉しばさん客人でもききつしつたのかへ【哥】はておれがかいきりの女郎ではあるめへし外に客があるならあるやうにあかしづくでいけばなんぼたま〳〵女郎かいにきたおれだとてどふするものかなきねいりにひとりねるはなんぞあたりでもあるように骸をすへられてはおれもむま

らねへなんのうまくもねへつめてへ料理(りやうり)をくつて一人りねるくらゐなら嶋の橘屋へいつて五分だしやあくひきられねへ　「玉」てめへ一言(ごん)もねへ「玉」嶋とは何のとですへ「庄」ありやァ江の嶋の茶屋なりはたごやなりのところさ「玉」よく／＼うまかつたそうでわすれへェせんいぢのきたねへ客人だのふ「茶」マァともかくおいらんをよび申ておくんなせへ「哥」うつちやつておかつせへ「芝」

アイト行

「芝」おいらん客人がいつそこいとをいつてなりいせんから一寸(ちよつ)とよび申てくれと茶屋の人が申いす「玉」イ、ヨ何もかもしつてるはな「庄」マァちよつといきやな「玉」どふするかうつちやつておいてごろうじいし「庄」てめへといふものはわからねへものだどふともかたをつけてくるがいゝあたりへきわへても外分(くわいぶん)がわるひおれがきたばんぢやァとゞのつまりはふたりが身のさわりになるいゝかげんに人のいふとをきくものだそれともぢよさいのねへこゞとだからこわひか「玉」いつそこをふおすよ玉芝さんいつてくるうちこゝにいな（へいきにていでゆく）「庄」いぢのつよひ女だてめへもおいらんのまねをするとろくなものにはならねへぜ「芝」やうおすはたれしも一人りやふたりの客人にこごとをいわせるはぢでおすがそれもいとひなんせんはおめへ

さんゆへのことでおすそれに其やうにわるくおいひなんすとおゐらんにいつゝけへすにへ【庄】手めへもモゥ其やうになつたかすミにハおかれぬ二代目の玉葛だ其時ハまた手めへの所へくるぜまんざらなこともしめへな【芝】それこそおいらんが大事でおつせうアレ又何か申いす【庄】ドレ

【哥】おめへハあいかたの女郎衆か【茶】左やうでござります【哥】まだろく〳〵ミねへから顔さへしらねへまあ一ふくのみなせへ【玉】ンわたくしハたばこハきらいでおす【哥】はつの女郎といふものハ酒ばかりきらひかと思つたらたばこもきらひか【茶】おめへさんもあれ程おたのミ申ましたものあんまりでござへますぜさだめて客人で御ざりませうね【玉】アイサ客人もきておりいすかさつきもきてミいしたらよく寐ておいでなんしたからそれでほかへめえりいした【哥】おつとそりやアいゝなさんなるほどさきちよつときてまご〳〵して直にいつたがおらアばつちりとめをあいてミていた【玉】それでもわたくしハねておいでなんすと思つたからさ【哥】ハテそんならソレねなんしたかへとかなんとかたばこの一ふくもすいつけてだしてそれでだまつていればいかにもおめへのいふとふりねたのだなんぼこゝへおきてへとつておらアねやアしねへぜともいわれめへそんなやぼないゝわけをしなさんなら

よせへのねへ女郎のやうにきひたが如才だらけだ【玉】そりやァしれたとでおすが何もおめへさんのせわにやなりいせん【哥】せわにしてくれろといつでもいやだ荒神さまへはつてあろうといふ三めんの大こくをミるやうにつらばかりおふきくすればおいらんだと思つても四季のうつりかへのきんだんもやりてがうけこミのごふくやを引ミんたんがかさなればとゞのつまりハねん季でもいれやうといふはたらきのねへのでいながら口にぜにがいらねへと思つていゝてへことをいつたりかんなのだいをこしらへる錐じやァあるめへしおつに捫をすげて山椒虫をミるやうにやたらにすますことハねへこういちやァおかしいが廿四文の夜發から一兩壹分の呼出しまで苦界の情ハはらの中へたゝミこミ右の手ではらをおすときにはこいつ陰腹虫がかぶるなまた左りの手でつかへをおせば男のためにふくめんだなハァ、あたまのうへもすて利それだちやァせつなからうおとこゆへときいちやァかわいそうとゐんもねへ女郎にも五兩や十兩ハもらハれる女郎にてを付てやるのたおそらく此廓のをならてめへたちのふんどしのながれのすへハ黒くして頭巾にするの山下のしんミせのしがらきハするがや新介がかげミせで四角な竹がうへてあるといふこと迄哥好ハいながら一分一りんすき間のねへのだ何にもしらざァしらミをうつつぶそうといふしミつたれなら其やうにしているがいゝめにくそをぬ

つた女郎を大かたふんばりといふがてめへのとだろうサァ〳〵いかう〳〵なんぼうおおふくつても心いきをいわばおらがやうなものがきてハはきだめへ鶴(つる)だ「玉」なんぼわたくしがわるひにもせよアノやうに口ぎたなくいわせ申すことハおつせんかへろうとおいゝなんすこそきいわいだはやくつれ申ていかつせへおよさいもねへぬしだそうだからどこへいつても花(はな)がふけてもあげ申そう「哥」こんな所へいてくれろといつてもいるものかへ「玉」それだからいておくんなんしとも申いせん此ひたァうおく〳〵せずとはやくつれ申ていかつせへ（トいゝはなして庄九郎が所へ行）「庄」ごうぎにおろされたのかげでぎり〳〵してゐた「玉」あんなものにからかうハ口づうへでおすそれよりかはやくかへるやうにするがやうおす今に座しきかあきひす共かわりに「庄」はじめのうちハ賞めかして如在(ぢよさい)のねへ客のやうたがしめへの大平楽が心ほどにやァ口がまハらなんだりするからうつぜ「玉」アイサねへわるくすると女郎衆がみかけでだまされへす玉しばさんいつて寐なんし「芝」そんならおやすミなんし「庄」コレ〳〵日にくそをぬるとふんばりになるぜしかしこいつハよつぽといゝ「芝」ヱヽモいやだのふトゆく「玉」おめへさんのお出なんしたときにやァいつでもこつちの身がくらゐからァノくらひなことハこつちの耳(みゝ)からこつちへぬけてしまいゝす「庄」なるほどふてへ女だ「玉」かんにんなんし

○べに花染

「ほてい市右ヱ門」てめへもうねん季といつても指をおつてかぞほへるどになつたが一端ハこういひかわして來たが一ッハてめへも勤のうさはらしおれとてもあそびの花これから緣づくハ一生のこと外にいきてへ處があるの親類中へいかねバならぬといふやうな事ならかくしだてをせずと相談づくにするがいゝゑんりよハねへぜ「九重」ナゼ其やうな事をおいゝなんすェ「市」ヘテはじめいゝかわしたからいかねバなるめへと義理つくて夫婦になつた所が末がとげぬすりやァたがひのためにならぬじやァねへか「九」ヱヽモおめへさんハわたくしがこういふ勤の身のうへゆへうたぐつて心をひいてごろうじいすのかへ「市」意馬心猿をかいたのじやァあるめへし何も心をひくのでもねへがこれまで心やすくした事だからどこへいつても心やすくせうと思つて「九」そうしたらおめへさんの方でハやふおつしやうが永ひ年季の其内も人えの氣がねへ内證への心づかひもすへハおめへさんの世話になるのをたのしミにしておりひしたに今になつてそのやうな事をおいゝなんすハわたくしのやうなものだからめいわくになりなんしてそれで其様なことをおいゝなんすのかへたとへ親たちが不承知でも外へ行心はおつせんにほんの廓の内ば

かりの情いわぬ斗りのおめへさんの詞のはしぐ〵そんならおなさけねへおなさけをうけたとでおすねへトわつとなく【市】泣事ハねへいよ〵そういふ心なら夫婦にならふがおらァ外でおかしな事を聞たからこういふ譯で來てそれバ間際になつて外へ行やうなことでハ男がたゝねへそれがいやさに相談づくでまるくしてへ【九】マァどんなとをお聞なんしたへ【市】田舍の伯父さまが來たじやァねへかえ【九】アイそりよふとふしてお聞なんした【市】縁てがなおれが心安ひ内へ宿をとりてめへを迎にきたといふとだ【九】エヽモいやだねへうそをおつきなんしとゝさんやかゝさんハそういふきでハねへもおつせんものを【市】てめへにハまだあいにこねへか【九】アイサ此中人をよこしひして二三日のうちゆくといつてよこしひしたそんならそんなとでもいふ氣がねへ【しんぞう琴折】おいらんへちよつとお出なんし【九】なんだなお云なんし【と折】アノ子田舍の伯父さんだとつて內證へ來てお出なんす【市】そりや來たハ【九】なんのひまの時くればいゝ【市】そんなとをいわねへでいつてきや【九】マァモじやまの入ル事だぞトル重ハ下へ行バおぢ儀兵衛につくねんとして表をしきにいる【九】伯父さんお久しうおすどなたもおかわんなんす事はおつせんかへ【權兵衛】たゞァの所にもかあることもねへわりやァうすがく見事になつたァナゼへのうといふにあたるこゝろにあんたァとておのかわねへおふきとぶさたァしもふした【こと折】おかまさんのおつせへ

すおいらんに伯父さんがお出なんしてさぞうれしうおつせうゆるりと留申てさゝでもお上ヶなんしと（此所へ覗ぶたてうノ持きたる）【九】おかミさんに琴折さんにおことづてをしておくんなんす今参りいしておれへを申いせうといつてくんな【琴】アイト（ゆくを）【權】いきそ〳〵。（ゆくなといふこと）【琴】（九重のかほをミて）何のことでおすへ【九】なんぞ用でもおすかへ【權】此おんな子も久しくゐもふしてうんしらがづなくせ話に成りもふすべいナセヘめんとふミてくれられろ【琴】（なんだかわかりかねわらひながら）アイ〳〵【九】其やうなことハァノ子たちにハわかりひせんィからお出なんし（此所また暇物出ル）【權】コリヤァあんちうこんだか天井へふちあがれ〳〵とこゝなァうちでせわなれるあがり申たらづなくめいあくだァそしてまああんちう手皆代だかァうすがへ見事だァ此くらいにされるくらへで箸のう一本つけて出し申たそうもあんべいかいあのわかいのたちハこわへ（大義といふ也）働だァ【九】そりやァ二ッにわるのでおす【權】あによういふこんだァかョゥ〳〵二ッにあかつたァ（此うち少く酒事あり）【九】マァおめへさんハ何の用でお出なんしたへ【權】しからバほかのことじやァねへさァわれかァことだァ【九】わたくしがなんといたしひしたへ【權】われがァたゞあに聞たらもふねん季も明るそうだァおらァ息子にもまだ娵のョとらねへさァまたおだい官さまもわれがァところへござつたァことがあるけなァどのミちおらァ一所にいなかへきせへ【九】なんの事かと思つたらもふそ

んな噺しれよしておくんなんしばからしい田舎へれ歸りひせん「權」やだァといつて事がすんべいとおもやるかかんがへてミせへ御當地でれやさしいとでれくらせァさぬつなくこわい仕事をしもふさねへきやァいきもふさぬさァナセヘ田舎じやァ粟や麥をくんべいとせへおもやァひたるひめはしねへナセヘ「九」どふしてばからしい今更そんな物がたべられへすものかなそりやァマァ生れた國だからどんな山奧へもいきひせうがせんどかゝさんにもはなしたとふりわたくしれこつちにいゝかわした男がありいすからそのほうへまいりひすつもりさ「權」あんだァとそりやァならねへさァ此女子もわりいがつてんだァ共わかへものも五人男とやらろくなァものじやァあんめへさァのちやァ一家親類の首さァへ繩のふつけべい「九」そんな人じやァおつせんとんだたのもしい人でおす「權」あんのたのもしいとがあんべいわれがァ皮をはがれたんべいそんな事さァしつてるさァ御代官樣のとこへいきやァ玉のこしだァ公事にやァうら達までが利方だァとしよりのいふこたァきくもんだアナセヘ「九」おめへさんの都合はよかろふかそうはなりいすめへ「權」此おんなこれふてへとのふほだき出したァだだァかゆるして男のふこせへもふした「九」はからしいこふいふつとめをしておりいすから人賴をせずともやうおすそしてとゝきんかゝさんもせうちいうへでおす「權」うらァなゝァれあしようにもかしよふにもす

きになるさァナセ〳〵たとへたァまがゥ、とおいやつてもうらがならねへさァ「九」伯父さんと思つてひかへていゝすればすきなことをおいゝなんすどふあつてもゆくことはいやでおす其くらゐおちさんがほをなんすなら此やうな身になるときくらされぬ人かなんそではあるめへし多勢人もつかふくらゐな身代でいながらどふかしやうもありそうなものでおす其時はしらぬかほをして今になつて何も其様なことをおいひなんすことはありそうもねへものでおすはたくしがしんるいかあつてもとゝさんの十死一生のときせへかまいなんせんしつのねへしんるいはしんるいともおもひせん「權」このおんなのこは伯父にむかつてそんなァとぬかひてもいゝのかァ「九」よくつてもはるくつても田舍へはいきせん「權」やたァといふともうらか伯父のいかうてつれていかァ今にみせへこゝなァ旦那に斷てとんなァ所へもはたしてくれるなと詞をつけへるあんたほていの市右ェ門とやらいふゐさばの業をはあけるからふとかはるくならァ「九」しりもなんせんでほていのゐされのと魚賈しやァおつせん「權」そしてあんたァ「九」雁金組とて男をみかく人達でおす「權」それみろさァ名せへ雁金たァろくなァやつらしやァあんめへやたァといはふかあんといはふかいきのあるうちさァうらァかつれてゆくさァかくこのうしていせへ「九」行ものかいかぬものかとふともなんしはからしい　（トはらたちまぎれにいとまごもせす二かひへ行）　△「市」なんとい

つた【九】むつかしい事をいゝしたたとへどふいつても私ハ外へ行きハおつせん【市】そんならいよく／＼むつかしいな【九】そんな事を手にしてまたわかれやうハなりいせんに 市右衛門へくわしく出さバいかゞ心がならんかとあらましいへともそく／＼くしりしにや何もいおにかんがへるをきをもとて なぜ其様にだまつてお出なんすどふぞなんしたのかへ ヱ、モ人にばかり口をきかせなんすなんのこずともいゝとに來ていろ／＼氣をもませるこつたぞ市さんどふぞ物をいつておくんなんし【市】ァ、こういふことにならうと思つた何をかくそうくハしい噺ハ伯父さまの宿できゐてきた【九】ほんでおすかへ【市】伯父さまもてめへのめへだが一通りのものでねへよくばつたむづかしやだそうだからわるくするとわかれるやうになろうと思つた【九】ヱ、モうそにもそんな事をおいゝなんすな氣にかゝりいす【市】わけなく裂てハ雁金組の名がすたるし夫婦になれバぬきあしをする口がけものすりやとゞのつまりハ二人が身の上【九】たとへ死ぬともわかるゝ氣ハおつせんにへ【市】ハテこまつたものだ

○武士鼠

【寄田角左ヱ門】【たいこ持拳吉】はらつて【角左ヱ門】ゴウサイ／＼【拳吉】リウデヱ【角】どふじや／＼【拳】イヤモ旦那にハよハり切りますどうしてもかなひませんハテどこのかげんだかさ わざとまけるもしらずのりがきて【角】イヤモども拳にハ

よつぽどほねをおつたものしや拳吉お身たちハ手のじゆんが定ておるゆへ功者なものにハ手をミられるしかし大分よくするもちつとじやく【拳】これからけいことでかけませうおめへさんをおたのミ申ます【角】ハヽヽ（わらふうちに思ひたして）アノ清川ハどふしたさきからおらぬがくせのわるい女郎だへんしもおちつきおらぬがてんがゆかぬぞよ【拳】だんなのまわり氣も久しいものさあれまりおよさいかなくつて女郎衆も大てとりさ【角】身どももたいまいの金をだしてうけいだそうと思ふものゝやかましくもいハひてどふせう【拳】舩頭の子じやものサッサおせくも久しいものね【しんぞう菊川】アノおいらんをかへ【角】しれたことさしかし手前にでもしようか【菊川】しりいせんヲヤばからしい【角】何がばからしいそれをきこう【菊】しれたことでおすそりやアね【拳】ヲット だんまりだんごを三ッくへくそたんきにすつぱりおめへの心いきをハたしがときやせうたんなマアこうでごぜへます今まで世話になつたおいらんのことだから今おめへさんの所へ御相談が出來れバたのミすくない身にもなることなりあのとふりのおいらん故此上どの樣なおいらんをとるかしれねへからかたミがせまくなるや何やかを思つててめへがつてなことではらをたつうちがなんとたのもしいじやアこざりませんかなんと菊川さんさうでごぜへしやうほんにおいらんがきかしつたらさぞうれしがらつしやるだらうのふ【大ぜい】そうさ

ねへ【菊】ばからしい何がへ【拳】おめえがたハわかれるがかなしくつてはらもたとふし又おいらんだつてもたのミたのまれたおめへがたにわかれるハいやだろうがハテいつ迠くるハのうちにいなさるも本道でもねへスリヤ苦界をはなれなさるがてへ〳〵うれしいとじやァねへ【角】イヤ拳吉ハ中〳〵はつめいものだよく道理がわかる身どもが下やくにしてミたい【喜代川】かゝさんがきいしてついおそくなりいした【角】ア、おしいことをした近付になればよかつたそれにつけてハうれしがらせるとがあるマァ前いわひに一ッのまぬか【喜代】私ハ酒をたちいした【角】ナゼ【喜代】たれかのために【拳】イヤきまりめ【角】ハ、、、ァ【喜代】まあなんでおすへ【菊】ヱ、モ【拳】よくさしでたがんなさる【角】マァあてゝ見や【喜代】なんだのうきミのわるい【角】なんでもあんじる事でハない【喜代】菊川さんおめへしつていなさるか【菊】アイアノ子ばからしい【角】おつとだまつた〳〵それほどきゝたくハいつてきかさんよつくきけハ、、、ァ【大ぜい】おかしくもなけれども ハ、、、、【角】アノこうながいねんきをつとめるもせつなからうと思つての【喜代】どふしひしたへ【角】てまへその【喜代】わたくしを【角】ねびきしておれがつれてゆくがなんとうれしかろふハ、、、、ァ【喜代】そりやヤほんでおすかへ【角】よつぽとうれしいな【喜代】ヱ、わたしにハ【角】間夫があるなら

それせてやろ隙がほしくハひまやろうさむらい名利三日なりともかこうた上ハそれからハか
つて次第といふ様な實のねへ角左ヱ門でハないあんじやんな四五日のうちに金わたし今のあ
いだにらちあきやう【拳】（うた）へ世にもいんくわなわしが身じやかわひ男をいくせの思ひヱ
、なんじやいなおかしやんせしのびねになくさよ千鳥（チヤン引廻）【角】ア、こりやできたく
【喜代】こりやこふしてハいられへせん（ゆくを引とめ）【角】うれしいハとわりなれどマアしづかにし
やく〳〵どこへもやらぬ〳〵【喜代】ヱ、モそうじやァおつせんマァちよつとやつておくんな
し【角】何もいくにハおよぶまいヱ、わたしにハの一言で親達のともの〻こんだまさかの時
ハ引とろうよ安どしやく〳〵【喜代】ヱ、モおそくなる菊川さんちよつと耳をだしな【菊】ア
イ（呫の句二日）【喜】アノ文七さんがまだいなんせうからきう用がありいすによつて待ていておくん
なんすとも今こうし迠お出なんすともしておくんなんしとほかのものじやァまちがつてハわる
うおすからちよつとおめへいつてくんな【菊】今夜きてお出なんすかへ【喜代】ヱ、モおふか
た茶屋にお出なんせう【菊】アイト（ト行）【喜代】じれつてへ子だのう（喜代川が心をさつしてたれもしやれず）【角】ハ、アお
袋をミせにやるのかもふかえつてしまつたらう【喜代】わたくしにもいわずにマァいつそんな
ことをおきめなんしたへ【角】イヤかねてうす〳〵ハはなしたがこんやこうこつそりかけ合た

かならず氣づかひをしやんな間違ないおれも此里へながのこるし喜代川が爲には猶よし親方もよろこぶよふすだ三方四方のよろこびはおふきな善こんだろうおミたちは何と思ふ【大ぜい】喜代川をかねて ハイさやうでござりませう【角】そうすればやしきへじきにいれてハ人の口があるゆへまづ別荘へおいて日々つとめのひまにゆくだおミたちも相かはらずきやれ【大ぜい】ハイ〳〵トばかり【角】そこでミどもが思ひつきがあるだて居間なり座しきなりに喜代川もすきなこと故四疊半に爐をきつてふたりがたのしむだしかしせまくて七事は出來ぬかてがるく奇麗な事がよいまたこゝにぬからぬことがあるてさミどもをそたてた婆々があるこれをとりしまりにおくだこいつ男まさりであまい酢ていかぬやつゆへ下々がずるけることも出來ずまた他所からもし喜代川をたづねてこまいものでもない其時ハ此ばゞがひりゝとあいさつすればたれもおちついてゐるものがない妙計か〳〵茶の湯のときも女を寄て男といふては身共ばかりハどうじや【拳】それじやァ兩方の手にうまいものがもちきれぬりくつでござりますね【角】それともにおミたちはべつだんの事ゆへ席をおなじうさせるモゥ此とふり何もかも仕組がとゝのつてをる氏はなふして玉の輿とハよふいつたものだ爰にいればとんないやしいまたいやなものでも金さへもつてくれば一ト寐をせねばならぬ身ともがところへきてはかるいものは日どふりへもでぬまことおくさま

あつかいだ【拳】子ェおいらんおしあわせでござりますす【喜代】アイサ（トにがわらい）【角】しかし是からおまへたちやァしんぞうどもを相手にさわひで酒がのまれぬが名残おしい【拳】折ふしおいでなさりましな【角】喜代川かやかましくいふであらうよ【拳】（おかしさをこらへて）いかさま【角】お身たちもしるとふり外にしまへ／＼としたきやくもない貝伊平治めが盲蛇でおれとはり合ふたもよいかんじんの喜代川がふせうちだろうこいつれ鼻をあかせるがよいきみだしかし男がたつまいの【拳】さよふさてへ／＼やきもきしますのさ（せうちきよ川ふさぎものいへず角川の騒りしをみてにこ／＼し）【喜代】どふだへ【用】（耳へ口をつけて）とふにおかいんなんしたとき【喜代】（大きなこへて）じれつてへのふ【角】なんだ【喜代】おめへさんのしりなんすことでれおつせん【拳】こふなるからハ何もおれにかくすことハありそふもないことだア、きこへた伊平治に心がのこつてでもいるか【喜代】そりやァしれたことでおすあんなぢいさんでも假初にも三四ねんきいすものをいよ／＼おめへさんのほうへ行やうになればすこしハいつておく事もおすのさ【角】（きつそうかへて）受出せバ身共がつまほかのものにおふたいさせることハならぬ【喜代】おめへさんのほうへいつたうへじやァどふともなんしくるハにいるうちハそふハなりいせん伊平次さんも身受のはなしもしなんしたともありいしたからうらみをいわれぬやうにとかくどこもかしこも丸ふゆくのがよふおす【大ぜい】コリヤアおいらんのが御尤だ

【角】いかさまそこもあるそんなら伊平次も身うけする氣だなおやじのくせによせばよいにあぶなし〳〵何事もこうつ合よくいくもミなゑんのあるのだやサァ〳〵めでた酒をのもふようまれ人も御らんずらん（手ひやゝしを打はやす）【喜代】ヱヽモおまちなんしどこでかいゝこゑで何かうたいゝす【峯】どこのお座しきだね客人とミへる【喜代】マァちつとだまつていなんし〽（うた）おもふにそわでおもわぬにそうもえんならしよことがないぞへ【喜代】ヱヽモいやだのふ【角】（おさきまつくらで）なるほど（トほんのわらひ）へヽヽヽヽヽヽ【大ぜい】（うそのわらひ）ハヽヽヽヽヽ

○霰（あられ）小（こ）紋（もん）

（伊平二が右どなり九重がざしきにて）【玉葛】市さんねなんしたかへ【市左ヱ門】マタ〳〵庄ハどふした【玉】なんだか氣ばかりもませへす【市】あんまりきをもミやつて内證（ないしやう）でハるくおもハれねへやうにするがいゝ【玉】文さんといゝおめへさんなり其外もむづかしうなりいしたね【市】盛（さか）りがあれば必跡（あと）でハおとろへると下（くだ）りさかになつちやァたまらぬそれでもまだたれもせかれぬからふしぎだ其かわりせかれるくらいじやァミんな一所だ覺悟（かくご）しているがいゝ【玉】ほんに九重さんハ伯父さんがきてひよんなとになりいしたねへ【市】ぜひつれてゆくそうだのう【玉】はやくお聞なん

したね【市】それで此ごろこねへでいたが今夜はいとまごひにきた【玉】それで九重さんもないてばかりおいでなんすがほんに余以外のやうにはおもいゝせん殊には人もしつたる雁金組とまでよばれなんしたおめえさん方その逢方になればなんぼわからぬ私共でも人にゆびをさゝれるやうなことをしてはおめへさんなりわたくし共なりはづかしうおす今更どんなめにあふとてもそんなかくごのうへでおすおめ、さんもさぞ心づかひでおつせうにマァどふなんせうと思ひなんす【市】ハテどふするものか縁のねへのだかれこれなしにゆくがいゝそれでおれも身輕るになる【玉】ナゼ其様な事をおいゝなんすへ【市】ハテおめへのめへだが廓にいればこそおもしろいこともありおかしいこともあるが素人になつてはあいぞづかしだ女郎あがりといふものは髪はろくにいゝふず仕事はできずおらがやうな貧乏ものゝ女ぼうにはごめんだ【玉】あきれてかほどこて マァほんのことでおすかへ【市】しれたことさ【玉】九重さんがおきゝなんしたら大事でおつせう【市】そりやァまつすぐな所だ誰がきいてもいゝそして兩爲だおれも實はあきゝつているおめへいゝやうにいつて田舎へやつてくんな一生おんにきる【玉】そんなことをきくと私達はらがたちいす【市】人のこと達氣をもますと澤山でありそうなものだみねへこんやはまだかたきし顔出しをしねへがこれらはきれるにはいゝしほた【玉】庄さんがおめへさんのことにつき咄があ

るといゝなんしたつけおふかた私共の座しきでおつせふ【市】とかくいろけよりくひけたトやたらに酒をのむ【玉】ナゼそのやうに酒をのミなんすへ【市】なんぼ思ひやつた中でもあきねへうちハ少しハミへもあるが此ごろハあいつがいても此とふりさどこぞのはしにハきれて巣をかへやうとおもやァあんどなものよこういふ氣になつていながらくるたびにほれたかほをするも客にも苦界があるこれがおれひとりでくるうちならこんな世事もいらねへかおれが武左をはたらいたら友達のさわりになろうと思つてしんぼうしてゐるのよとかくおめへをたのむからわかれるやうにしてくんなひよつと田舎へいかねへや何やかやがあつちやァ大こまりだ其時ハもふミれんミしやくれねへつき出してしもうぜとかくまた來る春のあたらしい花かミてへ【玉】ほんにおめへさんハそんな氣まづいきになりなんしたかえ【市】おめへにたのむくらひだものをよく〳〵ともミわけておれにするとおもやァはらがたとふから庄にすると思つてさばいてくんな【玉】あきれたともふしいせうかばからしいともふしいせうかはらもたゝれへせんどこそへもつてつておたのミなんし△庄九郎が所にハ【九重】一生のおねがいがおすがきいておくんなんすかへ【庄】きいていゝすじならきかうがおれもはなしてへといふハこんどのことマァどふする【九】アイサその事でおす市さんもァ、いふわけでこれまでよび申いしたとなり一トかたならぬおめへさんがた

の身ぶんゆへどふぞかほのたつやうにと一ッ端ハ田舎へゆくめへようにもいゝしたが實ハ私も生れ古郷でおすし伯父さんの所の伊のさんといふハ私と從弟どふしなりちいさい時から子ども心にもとふぞ夫婦になりてへ〳〵とたがいに思ひおもハれてたれへもかくしてハおりいしたがこれまでふミのつうろハしておりいしたくらひのとでおすにそれをおめえさんかたの一坐でミんながつくいふわけになりいしたから何心なく市さんをよび申いしたが今となつてハこう悔でおすひよつといやと思ひだしてハモゥしなんすほどのことがはらがたちいす人そめきながゝ今迄のことを思ひたすとナセあんな氣であつたとおかしくつてなりいせんまさかいゝにくうおすからこれまでハのはしいしたかおめへさんのはなしかでたからいさゐくわしく申いすとうそきれるやうにしておくんなんしおたのミ申いす【庄】岩よりかたいやくそくも【九】くだけてミればもとの土【庄】そりやァ手めへの閨のいわたろうそんなわからねへ岩かあつてたまるものかそんなら市左ヱ門が手をきつてくれろといふのか【九】アイ【庄】一つな氣の市左ヱ門耳へいつたらあんのんにハすむめへぞよ【九】ナァニそりやァおつせんあのやうにりきんだ口をおきゝなんしてもらちのあくじやァおつせんそんな氣たとまたすこしハはりやいかありいすけれととかくおめへさんかたのさハりにならぬやうにはからつておくんなんしあきた心をうち明ヶ

てあいそつかしできれやうならなんのそうさもおつせんかおめへさんかたへたいしてもこれまで心やすくしたかひかおつせんならハすべよくきれたうおす【庄】いよ〳〵ほんきできれるのか【九】ばからしいほん〳〵 カたいわて ほんとうにおたのミ申います【庄】いやた【九】なせへ【庄】ヱ、こゝな四ッ足めものをいふもけからわしいたのまれる所へいつてたのミやかれ【九】それてハやうおすこんやきれておめへさんがたへの世事もいりいせんァ、今迄むたほれをおりいしたばからしい トふりきりゆく入かはりて【玉】モゥ見かけにハよらぬものたあきれかへるよ トいゝながら下にゐて おめえさんハなぜ其やうにかんかへておいでなんす【庄】ァ、いふきてハなかつたかあいそのつきたちくせうか【玉】たれかことておすへ【庄】ァノ九重のふんばりめ市が恥ハ四人のはぢうつちやつてハおきにくいとおれもいろ〳〵思あんのたゞなか【玉】どんなことをいゝしたへ【庄】ぴつつまんでいわふなら田舎にいゝかわした男があるから市をつき出して其男の所へいきてへとよ【玉】ほんのことでおすかへ【庄】ほんもほんつらのかわのあつい人もあろうによりもよつておれに市がてをきつてくれろとハあんまりあきれてゐてのはり込もひつこんだ【玉】どふもがてんがいきいせん思ひおもわれた中が市さんもいつそあきなんしたからこんどのことをさいわいにきれるやうにしてくれろ

とたのミなんしたから大きにけんくわをしてめへりいした【庄】そんなら市もわかれてへ様子か【玉】アイそうでおすとさ【庄】シテいなかの伯父のはうハ【玉】どふしてもつれてお出なんすとさ【庄】どのミちいかねバならぬやうになつたも伯父の片意地そんならもしや【玉】おもひあふたる二タ人の悪口【庄】きられて死のをまつ心か【玉】せまつて身にあやまちのねへやうに【庄】氣をかわらせん市がてだてか【玉】そんならやつぱり實氣とじつぎ【庄】名殘をおしむ共口で【玉】あいそづかしハよく／＼に【庄】せまつたうへの事であつたか（左右のからかミ一どにあけ）【市左エ門 九重】ヱ、【庄 玉】市左エ門 九重さんか（トからかミぴつしやり）【庄】コイ。チヨン／＼キリ／＼／＼（ト廻れハ喜代川が名代ざしき）【文七】ウナアく／＼よく角左エ門にうけだされるそうだなそんなんそうとナゼあかさねへおれにかくしてはじをかゝせるかこれがいゝか（トしのぎもゝほき／＼へし折ふんつたゝきつすれどもこへをあげずなきいたる）【喜代】たゝかれるハいといゝせんがしづかにしておくんなんし【文】たれがこわくつてしづかにするものだふてへあまめだタア格(かく)子(し)であつてより心のこれど歸らふと土手迄ハ出てミたが虫がしらせる引かへして來てミればたれともしれねど辻占が女のこゑでいふのをきけバ喜代川さんハ角さんに身受の事も極(きハ)まつたが文七さんの耳(ミヽ)へいらバさぞはらがたゝつしやるだらうとかけかまいのねへ物までがおれが心をさつしてくれるにかくして乗るきの玉の輿實否(こしじつぷ)たゞして踏込ふとハ思ひしが短氣(たんき)をして恥(はぢ)の

はおとこらへにくいをけふまでやつとこらへてきた知めへとおもやァがつてうか〳〵出たおうんのつき今夜の客角左衛門かのぞむ所だかたしつぱし覺悟をしてけつかれ【喜代】マァどうなんすともしづかになんし二階さみしき廓明けなれバたれもきゝてもありいすめへが遣り手衆やわかい衆の耳へでも入ッてハおめへさんの思ひなんすこともむそくになりいす【文】それをうぬにならふものか身をつき出すにじよふすでいろふか【喜代】泣ながら そのやうにはらをたてゝおくんなんすハ私が身にとつてハてへ〳〵うれしいとでハおつせんはたのもしい心でハ来るほどほかゝらきゝなんしたら腹もたちいしやう無理でハおつせん云譯もありいすが今たゝかれるがせつなさにいゝわけするかと思われてハはづかしうおすそれゆへなんにも申いせんたゝくなりとぶつなりと心まかせにしなんしてどふそはらをたてゝおくんなんすな其やうに久しく煩つておいでなんす日にハ一はんどくだと申いすそれゆへこう酒だちやら塩だちやらみんなおめえさんにへのことでおす日がわるくでもなりなんしたらてへ〳〵ふじゆふなとでハおすせん私でもそばについておりいすなら思ひなんす十分一にもしいせうがてへ〳〵氣のもめる物でハおつせんときよう生第一でおすしそして湯嶋の切通しの金正寺の藥師さんが奇妙に目をよくしておくんなんすそうでおすおしことをせずとしん〴〵してはやくよくしておもらいなんしとかくまめでお出

なんすを風のたよりにきくのがたのしみ【文】死のふと生やうとすてことばれきゝたくねへ（涙とともに）生恥より死はおつと人も知つたる五人の仲間モウ了簡のつけしまいだ【喜代】そんならおめへさんも【文】やかましいわへ（トけとばす様子に喜代川がくれい中よりとりとりネとすみ文七とり上げ）【喜代】そりやァ【文】手もつけるな（トひつたくるおりふし伊平二がこゑにて喜代川〳〵とあわたゞしくよぶゆへ喜代川ハことばのこして出て行跡にて）【文】ナニ書置の事ヘテナア

ナニ〳〵千代までとかけしちかいも皆むだことゝなりきのふ迄もけふ迄もさらしらぬ我身のうへ思わぬかたへ受出され候こときくと共まゝ御まへ㐂の御行衛をたづねさせ候へ共はや御かへらせとの御事今たのまんかたもなくいかゝせんとおろかな心にもいろ〳〵かんがへ候てもなき知恵なればいとゞ苦しく我身でわか身のまゝならぬをうらみ候のみたとへ内證へいか程申候ともきゝいれもあるまじくとたゞ先だつものは涙にて候どふで此上御げんならぬものならば死ぬ外はなくとあきらめ候うちよりも御げんにくわしく申上たく候へ共それにては猶心のこりもなく〳〵うかみ候ともなるまじくと何事も餘慶なき心ひとつに納候ことふびんと御くませ下されかし只このうへは御養生専一に御眼病もはや〳〵御こゝろよくとのみ草葉のかげよりきかまほしく候それのみたのしみに此世をわかれ行〳〵ぐちなる事ながら引手あまたの大幣の御身に候まゝさだめてこなたとは直に御わすれもあらんかと万に一ッもおぼしめし

出されし候折からはたゞ一ぺん御ゑこうをうけたく候たが千べんよりはるかまさり候事にて候巾殘したき事はどふでつきぬことゝおしき鹿とめらくかしく

喜代川

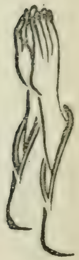
文七

こふいふ心であつたかぶちたゝいたがめんぼくないなんのひとりころそうおれも一所に死ぬト（心ならればかけ出し伊平治となりたちぎゝ）△（喜代川と九重を右左において）九重さんおまへもお客があるそうじやにそれをよびつけたはひよんなものと客人のはらたちもいかゞじやがそのおきやくは近付にはならねども喜代川とおまへとはとなりづからすればおまへにつながるおきやくもまんざら他人でもないことには向ふ三間兩どなりといづれにてもかゝりやひじやがこういふ場所にはそういふこともあるまいがわしが氣性で何ごとも見捨閉ずてにならぬがやまひマァそれはうちすてゝおまへもこんやの客人はすへは世話にもならふとたがひにこれまで實をつくさんした△うじやいふてきかせてはなけれども共くらいなことはしつてるじや喜代川もてまへの身には曇かゝりはあるまいなれどふたりながらゑろふ相がわるひもしや劔難の【兩人】エ、【伊】イヤ相といふではあるまいがひよつと了簡がちがふとひよんな事になるものじやおまへも伯父様のせわで是非つれていかしやるげなが尤

親御達へも相談の上の事かなんにしても一寸ときいてハ伯父様が無理じやナぞといわんせ親達のために身をうるおまへハ孝行もの身代もよいそうじやに其時ハしらぬかほして今になつて引とろうとはあんまり手前勝手じやそのうへ手前でもおく事か代官とやらへやつて公事のときのたしや平ぜい威をふるおふといふ心じやあろうが道がちがふておるとんとむちやじやしかし何をいふにも目上の人さからふともならねばぜひゆかねバならぬおまへもゆく氣じやそうで先も聞バつれ楽への詞のはし〳〵また向ふでも手をきりたいが同したのミなんぼ身をなげ出しても神〳〵のミはなさぬうちハじゆふにならぬ成るほど切ルかよい行がよいがサいつか一度ハゆかねバならぬめん〳〵の行末老少不定もあるならゐでぜひ此人でなけりや男ハないと外へきのちらぬハ女子のミちよいこつちや〳〵成るほどそいたい〳〵とながいねん季を指おりかぞへいかなるしんくもいとわいでそれをちからにしたものお身まゝになろうといふはなでノゥ喜代川うけだされたり九重さん引裂たりしてハ死ぬ氣にもなろう尤じや更〳〵むりとハおもハぬが其人達につらあてにハなろうが跡にのこつた親たちのなげき　わつとなきいだす　すりや孝行にうられた事も水となり其人達もきいているかいぬかハしらねどもなんぼりつぱな男でも戀ハ思案の外なれバりるうすると了簡ちがひもありたがるものじやふたりいゝ合て死ねバ小哥浄るりにうたわれ

うわ氣なもの ハうらやんではでのやうじや がまんそくに死でも 死そこなふても三日つゝハさらされて人の見ものになるはぢハこれまでたてた五人ィャ五人十人の人でハない多くの人のわらひぐさおちよさいのないおまへがたにこのやうなことといふもりよくハひなれど同じ男をすてまたふ孝をするならハなんとしなすにいきていてしやうハあるまいかすりやながいうちにハ親たちえ のわびもかな ひ道もあか るくする 法もあらふ共ときこそしばしの不孝の名を害やうに孝行をするがよいが何をいふにも雨ほうまぎわとかくそうわうな縁でなければすへがとげぬさかいにはづすがよい〔兩人〕ヱ、〔伊〕サァこれまでの恩のある親かたへそんかけず廓をでるを相圖にしてたのもし中の雁金組利足にかまわぬことならばかしてもこゝらにあるなれど〔兩人〕なんとへ〔伊〕何をいふにもしらぬが佛極樂淨土のたのしミをうらやんですきミするのがけたいのわるい ト左右のとなりへかねつぶて 〔文七〕〔市左エ門〕ャァこりやかね何 九重との喜代川 へろようの百金〔伊〕ャレころがたかいも捨金の正味ハヒイフウミイヨツイ ツかずもすなハち五人の樂あとの一ッのうち切ハ廓の名ごりのわしがかずあわせて六ッと無びやうにてくらすをかげでよろこびましよ〔兩人〕いのちのおやの伊平次さん今の御おんハいつの世に〔伊〕おくらずともよいわしや歸る〔兩人〕そんならモゥ〔伊〕短氣をかならずせまいぞやいづれもとんでいで

文七	喜代川	
市左ヱ門	九重	
庄九郎	玉葛	



ア、忝(かたじけ)ない

婭意忙思 大尾

戌新版

夢汗二編　全一冊　梅暮里先生作

此書ハけいせいのしん手きやくの心いれ其外廓中のいミを記ス

甲子夜話二編　全一冊　同　作

けいせいかいのこんたんあるひハ客の見わけ其外こゝんおもしろき小さつ也

商丹神

商内神序

賣物に飾れる。花のさくら鯛。中の町にひらきしより。三枚の鶴を飛すあれバ。尾鰭をふる猪牙舟あり。孰れ汐さきにむかひし。黒鯛の齒の白こそに。こつてりとした甘味を喰セ。潮じたてにちよいとした。氣どりを見セて。客を呼ぶ。是商賣のかゞみ鯛。君が目もとの塩鯛に。甘ひと見らるゝあま鯛の。干鯛工面をするもあり。客の數〳〵濱燒の。たい不樂を亦しても。揚詰にして奥津鯛。たいの道具のこつ〳〵噺すいろ客あれバ。かすこ鯛程やすくされ。小鯛かねては若ゑひす。よんで小言を夕がしの。鯛のあらを言ちらし。結句基直にならぬもあり。賣

商内神

二

るも色。買うも色。時の相場の錢次第。小判のいびつ三郎か三分の蛭子仁米の宮。商内神と題したる。十偏舍主人か。買出しの手帳のはじめに。矢立の筆をとつて

霍鳴樓のあるじ述

自序

今年。差禮の骨肆を出して。少しく下情を賣るに至る。されど。いまだ取付身上のしこつたれにして。代呂ものいたつて麁末なるも。胸中の基手乏しき故なり。しかれども。他力をもとめて。ちくとんばかり。其滑稽を仕迄たれバ。若九牛が一毛も。好士これを得る事あらば。それこそ作者の海老をもつて。鯛をつるにひとしからんと。取あへず商內神と表題して。この冊子の見世をひらき。則賣帳のはじめにしるす。

享和二壬戌孟春

十偏舎一九

十偏舎

當座帳

の尻のつまりハにつちがさつちもいかぬそろばんのたま〳〵客ねからさん用のあはぬ夜ハ目斗ぱち〳〵

大福帳

の〆てぬるよハねうちのしれぬ傾城のまことかうがとくゐのほりだし物ハ極上〻むるいとびきりの大手ごと

金銀出入帳

の〆くゝりハ目にミへぬふところのむなさん用たがひのこゝろの店おろしハのびるはなげのかんぢやうあつて銭たらず

○發端

盛飾花揚の如く。濃粧雪月を欺く。妓女が風姿にハ。千載の恨を散じ。万緒の欝をひらくといふ。李緻が詞さる事ながら酒ハ微酔にのミ。花ハ半開に見るを以却て。不了の機縁を思ふ。見返りの柳に。遺憾の情を殘し。衣紋阪のつま上りに。着想の袂をひかる。今戸の烟にハ。胸の火をくらべ。中田甫の蛙に。腸を斷の思ひをなす共充ざるをこそ。風雅の感情とハ云べけれ。されバ。賣物に飾れる花のよし原に。金の得意ハ。筭盤のけたをはづし。帳面の尻も結ハで。買かぶるあれバ。ほり出しあり色と情のおろし賣。小買にせんと。細元手の。小倉の紙入をひねくり廻す三人連。一本きめて。晝見世を覗きあるくハ。吊歸りと見へもなくひる斗だが承知かと。あたまからきめてあがる。

○せかいハまじりミせながら。しろもの丶仕入手あつくミへて。大ミせにおとらぬあきなひ。かの三人ハ一ツかくツ丶のとくゐにして。ざしきハおさだまりのうりことバにかいことバさかづきのとりやりに。打ておけしやん〳〵とねができてとこへまハる。初くわいきやくハ【太九郎】四十ぐらいにて。すこしやつこがゝりしあたまつきめんちりのあわセばおり。枕元にぬぎすて。あいびろふとのつむぎのこそでふとんの上にはらばつている。あいかたハ【道しの】としのころ廿二三。中じゝにてきりやう十人なミ。いしやうにはでをこのます。あたまのわけを。あさぎちりめんにてくゝりしハ。これ手とりのかんばんなり

【道しの】ぬしたちやァけふハどけへいかしつたへ【太九郎】寺参りにさ【道】そりやァおきどくさんすね。いつそ。うそをおつきなんす【太】しれた事さ。おいらァふか川のうそつきだ【道】深川のうそつきたァ。わつちらにやァわかりいせん【太】わかりんせんどうおちの人か【道】ヲヤ〳〵ぬしやァよく。いろ〳〵なことをいわつしやるよ。ほんにけふのお一座ハ。みんなきのかるいお方斗でおすよ【太】其中でおれがいつちおもい。このがけへだから【道】ナァニぬしがいつちかるくみへいす。どふでもとしのこうだね【太】ヲヤ此わけへものをおやぢにしたの【道】そんでも。あの中でおめへさんが。いつち分別らしくみへいすハな【太】とんだことを。おらァいくつだとおもひなさる【道】ぬしかへ。こふと。もふわつちらよりやァ廿四五もうへでおつしやうね【太】そりやァおいらがほうが。うへにならァあたりめへだが。こゝしやァいちばんちやうすにして。おめへのほうがうへだろふ【道】ヲヤかんにんしておくんなんし。よか世ならわつちらァ。まだきむすめでおさァな【太】エ、きのつゑへ（トやきぎせるをあてるまねをする・はやおのれへ十ぶんもてる心もち也）【ごん七】（いちざなりせうじのそとから）どふだ太九郎さんもふけへりやせう【太】ごんさんかコレへゝらつし【ごん】おらァけへるよ【太】マァきさつし。入口にたつて居すと。花やの柳じやァあんめへし。（ごん七うちへはいる）【道】もしへ。おめへさんハなぜけへるとおつせへすへ【太】まだよかろ

ふ【ごん】おらァ晝斗遊んでけへるつもりだ。もふ追付くれるれな【太】くれてもいゝじやァねへかへ【ごん】ナニ實れ。おられ火のばんだァな【道】火のはんたァ。あのたけへ。ひのミやぐらとやらへあがつてるなんすのかへ【太】ナァニありやァお屋敷で鑓もちの雪隠だ。權さんわりいことをいふぜへ トにがわらひする【道】奴したらやァたつた今來なんして。日がくれてもちよふすれな。すぐにおいでなんしな【太】ごんさんおれがのミこミだ。すぐにゐつゞけさら〳〵としなせへ トいふところへ今ひとりのつれも來り【里三郎】露情さん。ちよつとおめに トかたすミのほうでまねく【太】なんだ諢名をいふこたァ御めんだ。やりてがいやがる。何だこけへきな【里】そこしやァわりい。ちよつとこけへ【太】きびのわりい。ざしきからはすに呼出されるやつれ。どふでろくなはなしじやァねへ トいゝながら。かたすミのほうへよつて何かべちやくちやいふ。これれひる斗遊んでかへるつもりのところ。ちうやにたつてれめん〳〵のふところのきんだんだんがちがうゆへ。そのそうだん也。あらかたきまつたとミへて【太】もふ〳〵それでよかろふ トもとの所へすわる【ごん】里三こうどふする【里】どふするものか。いるのたれなそして太九郎さんの邪魔にならァ。はなしがあるからこつちへきねへ【道】ナニよふすれな。もつとおはなしなんし【ごん】マァいつてきやしやう とふたりながらつれだち出て行 しんぞうしのざき。あれたゞしくかけてきたり。ずつとはいり。ヲヤといつて。びやうぶのそとへ出【しのざき】おいらんへちよつと【道】なんさんすへそう〳〵しい トいゝながらうかへ出何かはなして又ざしきへかへる【太】コウおめへ、いく所があるならいつてきねへ。こつちれいゝから トわざとゝたつたことをいふ【道】なぜへ【太】な

ぜじやァねへ。色男がきたろふから。それで今のひそ〳〵ものだろふ【道】ソリヤァお有がたふすよ。そんならいつてきいしやうと。巾たらよふざんしやうが。マァやつぱりおきらひなんす。ぬしの所におりいせう（トよきのそでのうへゝねころぶ）【太】ヲヤそんなら。祭りの牛を見るよふに。しかたなしにねるといふもんだの【道】よくいわつしやるよ、そんでもぬしのよふに。そんなにいつておくんなんす客人れ。こつちもけつくでしにくふおすれな。ソリヤァ苦界といふもんでざんすからいくらも客人のさしやう事もおすか。そんなときやァ。もふ〳〵氣苦勞でなりいせん【太】氣のきいた客れ。あんまりやァねへものよ。おいられ。又ほんのこつたが。爰へこそ初てきたがいつでもきんかんどふふと。肴の市を。見ずにけへつた事のねへ男よ（これハほうこう人か。きなすこのよふに。あさもとつれかれして。くらい内からけへらず。よがあけて。ゆふ〳〵とけへるといふを。こへにいふせりふ也。山ヤのきんかんどふふ。あつ〻けのちやづけによくでるやつにて。さかな市ハ。中の丁の。さかなの市也）そして細見の鬼門に。直つている。やり手ばあさんにまで。可愛がられ。わけへしゆにもついど。わらァれたこたァねへから。そのおかげにやァ。どけへいつても。すいふろの。しろくならねへうちに。へゝるといふもんだ（わらをたくといふへ。わるくいふことをいふなり。また水ふろの白くなるとハ女郎よりさきへはいるといふこと也）といふもんだから。おめへかたのくげへといふことものミこときつているれな。それだから。座敷をあけたの。何のかのと。いさくさをいふ客を見ると。こいつァいたらねへやつだと。おかしく思つてるくらへだから。どこの内でも。あん

まりかミがられたこともねへのさ【道】ソリャァそふでざんすよ。ぬしのよふな客人斗でおすと。てへ〳〵いゝこつちやァおざんせんが。此間もきいておくんなんし。これも初會の客人でおすが。そのばんに馴染の客人が来なんしたゆへ。ざしきをむりにあけて。もらいゝしたが。もつともわつちも。わるふおざんした。どふも。なじミの客人が。はなしなんせんから。初會の客人のとけへ。いかずにいんしたら。わけへしゆをよんで。いつそこゞとをいゝなんして。おけへりなんしたが。大かた道でハ犬にでもくいつかれなんしたろふ。ちつとの間ざしきをあけたとつて。そのくらへの事ハ。だまつてゐておくんなんすとそこじやァ。魚心あれバ。水心あるとやらでおざんすものを。そのときなんざァ。いつそ苦勞をいたしいした。○トいふハなじミのきやくが・中のてうにきていろことを。さきほとしんぞうがしらしてきたゆへ・そろ〳〵と・あミだかけておくせりふ也【太】ソリヤァはじめて。遊びにきた客だろふ。おいらがはたけにやァ。藥にしたくても。そんなやぼてんハねへよ ト比内たばこをのんでハはたきついでへのこはいふきにすいから山のごとくにたまる【道】ほんにぬしのよふに。さばけてゐなんす客人にやァ。めつたなこたァいわれんせんが。わつちやァ。いつそくらうになる事がおざんすが。どふも。いゝにくうおさァな【太】言にくいといふハ。何か今夜も。なじミがきたといゝなさるのか【道】ナァニそふじやァおつせんがね。ことによると。きなんす客人がおざんす。もつとも。ふけへなじミといふでもおざんせんが。よんどころ

ねへきやく人で。わつちやァもふ。いやでおすけれども。どふもしかたがおざんセん。せんどもあしくして。けへし申んしたから。よもやもふ　きやァしなんすめへとおもいゝすが。ひよつと。今にでもきなんしたら。どふしんセうと。いつそ。それがくらうでなりいせん　トよぎの上へもたれてうつふく【太】いゝハなきたらきたように。其時の相談さ【道】ぬしがもふ。そんなにいつておくんなんすが。うれしくてなりいせんよ　トいふ内にらうかより【ふり新】おいらん。ちよつとお出なんし【太】ツリヤもふきたぜ【道】じれつてへのふ　このなじミの客といふハ・こよい二かいめのきやくにて・ちとあんばいしきのある客にて・せんこくより・おいらんが心の内にハまちたいくつしていたるとなれへ・ざしきをでるにハ・さもいやそふにふせう／＼に立出しが・らうかへでるとすぐに・うハざうりを・よこちよにはいこかけだす【太】いめへましい　ト硯ぶたなどをつまミぐひしていると　こうへおいらんしばらくして来り【道】もしへどふしんしやうね今の客人がきなんしたとき、そのくせむつかしいきやく人で、ざしき迄。貰にやァ合点しなんせん。ぬしが初會だとつて。いゝよふにすると思ひなんせうが。くげへのことを汲分てゐなんす。ぬしのことでおすから。こんなこわがまゝな事を。おねげへ申んす。もふどふも。おきのどくざんすねへ　きやくもすこしハかほいろがちがつてきたれどもせんこくいつぱいにいつておいた口があるゆへいやだともいわれずしかたなし【太】どふせこんやァ。こんなめにあハふとおもつた。しかたかねへハどふとも／＼【道】かんにしておくんなんし。わつちが直にいきいすから。ちつとの間名代をとつておくんなんしョ、もふこよいにかぎつて。じれつてへのふ　トかんさしにてつふりのうしろをかく此うちわかいもの そつと入【若者】おいらん今のことハ【道】もふ

よふすよ【若】コリヤァあなた。いろ〳〵なことをおねげへ申て。おきのどくでござります
【太】これも時の廻り合せだ　ト突内しんぞうしのざききたる【道】しのざきさん。ぬしをあつちらへお連申ておく
んなんし【しの】もしお出なんし　トきやくのはをりかミ入をもつてたてべ。きやくきせるたばこ入をもつてまご〳〵する【若】サアこふいらつしやい
ませ　となりざしきのうた　すきのぬこゝろの中にもしばしすむへゆかりの月の顔
(　)かのなじミのきやくといふハ　【吉三郎】まだとしハ廿一二中くらゐのところのむすこかぶと見へてまんざらでもなきゆうき仕立。せんこくより外のざしきにちや屋げいしやをあい
てにして。□のミかけ。かほハ少しさくらいろのほろよいきげん。おいらんはをりのそでをひきて。さしきへつれきたる。尤こよひ二かいめのきやくなり
【道】すぐにこけへお出なんし　トふとんの上へつれ行　【吉】よしねへいろ男のねた跡の。まだ毒氣もさめぬ
所へ。きミのわりい。そして紙屑がでへぶあるの。　トわさとよつたふりをしてよろ〳〵するつきたをすようにふとんの上に引すへ　【道】人の心
もしりなんせんで。いろ〳〵のことをおつせへす。ぬしのきなんしたことをきゝいすと。もふ
嬉しくつて。とひたつようにおもいゝしたが。折わるく。晝からの客人で。やう〳〵のことで
もらいゝした。ほんにぬしゆへ。てへ〳〵の心づけへを。したことじやァおざんせん　トたばこをすひつけ出し客
のかほを見てにつこりと笑ひ　ほんにぬしやァ。此あいた神田とやらだとおつせへしたが。ほんとうざんすかへ
【吉】そふさ【道】そんなら神田に。ァ、なんとかいゝなんした。ソレつふりのはげた。いつそ
よく。咄しをしなんす。おぢいさんがありいすが。しつてゐなんすかへ【吉】ソリヤァ神田に

も。ぢいさまァいくらもある【道】ァノなにさ可幸さんとかいゝなんした【吉】ヲ、そりやァしつてゐやす【道】そして此あいだぬしやァ。兄さんが有とおつせへしたが。その兄ごハ。どんなおかたでおすへ【吉】おめへいろ〳〵のことをいふそれを聞てとふしなさる【道】わつちやァねとんだ心安くしたお方が。其神田とやらにゐなんしたが。そのお方に。もふ〳〵ぬしがいつそよく似てゐなんす。兄弟といつても。ちげへねへよふでおすからそれでお聞申んす【吉】おいらが兄きなんざァ。遊びにやァきたこともねへが。わつちが似てゐるといふハ。ソリヤァおめへの色男か【道】ナニそふじやァおざんせんけれど 似ているといふハじつへ比おいらんがふかくいゝかハせし客なれ共今ハとをざかりて來す。あさはふこひしくおもつているゆへ。そのきやくに似たるをうれしく。いつそそハ〳〵していてうつりやすきハこの道にして。あはぬおとこをおもふあまりに。せかこもといふ。うハきがかへつてこくなるものなり【吉】そふしてその人ハどふしたへ【道】そりやァわつちが兄弟のよふにした。傍輩衆の客人で これハうそ也わざとこのきやくとハいへず とんだ心いきのたのもしい。おかたでおさんしたが。今ハいなかのほうへ。いきなんしたといふことでおさァ。私もおせハになりいした客人ておすが。てうどぬしのよふな。可愛らしい目つきで。わらひなんすときなんざァ。いつそよく似てゐなんすから。もふ〳〵うれしくつてなりいせんよ【吉】ソリヤァいゝ人に似てゐて。大きにわつちが仕合だ【道】もしへ是から見捨ずにきておくんなんし【吉】しれたことさ【道】ほんにかへ【吉】おめへがたに噓をつくと罰があたら

ア【道】にくらしいのふ トつる。此うちたがひに。くす〳〵わらひながら。しつつこく。つめりやいしたいにハ客のてへくいつく【吉】アイタ、、【道】ソレ見なんし女にやァまけてゐなんすといゝものを トいゝながらまくらもとのてうしさかづきをひきよせ ひとつおあがりなんせんか【吉】もふ御めんだに【道】わつちやァ。たべゝせんけりやァ。ならねへことがおすれな トなこ〳〵とついではんぶんほどのこと下におく【吉】宜しくお上りなせへ【道】アイサわつちやァぬしにいゝてへことがおすがね。とふもいゝにくふおざんすから、おもいれよつて申いしやう【吉】何ンだよハずといゝねへ。サァきかふ【道】アノね。是からほんに來ておくんなんすかへ【吉】くるたんか【道】そんならアノね。はらをおたちなんすなへ【吉】何を【道】いまわつちが申しいすことを。こういつちやァどふか。ぬしを見くびるよふざんすが。わつちやァいちづにお呼申たふすから。ちつともぬしの心遣ひのねへよふにと。おもいゝすから。打明ておはなし申んすにへ。ぬしこそなんとも。おもつてハいなんすめへが。わつちやァもふ。ふけへなじミの客人のよふに、思つておりいスから。言にくいことを申んす。かならず腹をおたちなんすなへソリヤァぬしだとつてはじめてこけへきもしなんすめへし。初會ハこう。二度めハこうだといふこともいわずともしれたことでおすが。爰をよく聞分けておくんなんし。ぬしをあなどるじやァおざんせんが。いつまでも末永く。きておくんなんすよふに。そんな事も。何もかも、相談づくにしておくんなんし。コリヤァわ

つちが。おたのミざんすよ【吉】そりやァ有がてへお心ざしだねしかし又なんぼわつちらがよふなしミつたれでも。そふ又。見くびつてくんなさるこたァねへよ（心の内にハうれしさ山〳〵なれ共わざとひそつたことをいふたとへきん〳〵にふそくなき•万両ぶげんのだんなかぶでもこゝハ人じやう•かねづくでなけれバ•人の心いきハわからぬものよくおすてゝかゝろけいせいこれよりうへのまことハなし•此おいらんまつたくこのきやくをあなどろにあらずほれたミからハとんだあどけなくミへてまだかねのさいかく何かのやりくりおぼつかなくむゝな金のさんだんをさゝてえんのきれるもといととんだふかいところまでおもいすごしてかくハいふなるべし）【道】ソレそんなに。わるく聞なんすからいつそじれつたふすハなどふしたらわつちが心いきがしれいセう。是ほどまでに思つておりいすものを（ふとんにかほをおしあてゝ•はつたりとくしをおとす•客ハかんざしに目をあぶながつて•かほをそむけて）【吉】おめへハでへぶ商ひが上手だ。是でハ買にござァなるめへわへ（トわざとひぞろ•おいらんだんまりにてかミつく）【吉】いてへわな【道】それたとつて。はらがたちいす。なぜそんなにうたぐりなんす。ソリヤァ指を切の髪を切のと。よく人のいふことでおすが。そんなことよりわつちやァ。ぬしがこふだと。いゝなんすこたァ。今でもどふともしいす心でおすから。欲をすてゝ。ぬしを呼てへ心いきハ。しれきつておりいすものをじれつてへのふ（トさかつきをとりし）おくんなんし（お又下において手をたゝく）【若者】およびなすつたァあなたかへ【道】喜助どんどふぞ火をちつとおくんなんし（此内おいらん•小だんすよりなにか紙につゝんだものをとりいだし•火ばちの火をかきさがして。こうしをかける•折からわかいもの•火をもちきたるを。すぐにひばちへいれさせ）【道】きすけどん。なん時だへ【若】ひけすぎでござりやす【道】まだ用がありいすによ。もしへひとつおふがんなんし（ト盃へついで）喜助どん。ぬしが今宵ハ近付にならふと。おつせへしたが。さつきのとりこミで忘んした。も

しその盃をあの人へさしておくんなんし　トそでからそでへ・紙につゝんだものを・そつと客の手へわたす。客もいぶかしながら・たもとにて・ひねくり廻してみれ、南りやう二ツ・さてこそとしやうちして【吉】あげやしやう【若】おいたゝき申やせう　ト盃をてにもちながら・ひたいできやくのてもとをみている【吉】ヲイおさかなトべつにふところのかみ入より壱分だしてやる【若】コレハお有かたふこさいやす。おいらん宜しう　トでゝ行ちかごろ床へいつて・わかいものへはなをやることがはやりもの也・わかいものもざしきとちがつて・とこでもらへる臺のものといふところを・ちよつとした・ちよづりのさいぐらいにこすますゆへ・少しでもわかいものゝふところへ・はいりのよいよふにとの心づかい也【吉】コゥしまつておきな　トおいらんがよこした・一分をほうりだす　おいらん・あいさつもせず・うつむいてゐる【吉】おめへなぜだまつていなさる、たかゞあれしきのかねがねへかとおもつて。いゝかげんに人をやすくしなさるがいゝよ　トはいふきとん／＼・おいらんなをもだんまりにて・少し目もとうるみてうつむく・此うちわかいもの・ちよびとしたうすでのはちに・あり合せのやき玉子と・ゑびのつけやきにはせうがどんぶりに・するがむめの青づけ・さとうたつぷりとかけて・ひろぶたにのせて【若】もふ何もござりやせん。道しのさんおてうしわへ【道】よふすよ【吉】是ハ御ちそうだ【若】ハ、、、、　おかしくもねへことをわらつて出て行・きやく手しやくにて少しのみ・はせうがたつまんではのさきにてしやり／＼とおとをさせてくふ【吉】おいらんひとつのみなせへ【道】マァおあかんなんし【吉】おめへどふした【道】どふもしいせんが腹がたつてなりいせん【吉】なぜだ【道】ぬしのこゝろいきを。そふとハしらずに。わづかなかねをだして。わつちが心をさげしまれるが。くやしくつてなりいせん。ほんとうに又。實がありいすならバ。ちつとハくみわけておくんなんし。いち度や二どお出なんした客人に。あつかましくこんなことがしられるもんじやァおつせん。かねハわづかでもぬしを呼てへ心いきが。あまつてのことでおざんすものを。ぬしをみく

びるといふ。わけじやァおつせんけれどゝあてつけて。あゝしなんしたハ。わつちが心をしりなんせぬゆへ。むそくにしられたと。おもいゝすりやァ腹がたちいす。あれもおめへさんに。だしてやつておくんなんしたァいわれず。わつちが手からやつちやァわるしなぜ又。今宵あゝすると思ひなんせうが。あれもあゝしておきいすと。あしたからでもぬしのとけへ。みがやられんすといふものでおすからさ。もふ〳〵てへ〳〵のおもひじやァおつせんよ【吉】もふ〳〵わつちがわるかつた。かんにしなせへヨヨ（トきせるでわきの下をつゝく。につこりとしておき上り）【道】なぜこんなきになつたろふ（トいやといふほどきやくをつめる）【吉】コウそれをおいらがしつた事か（トよぎのゑりを引かぶる）【道】しつたことでおすよ（トよぎをぐつとまくつてぶつつかるよふに客のはだへひつたりと）

聲ハ冥涬夜着の内。鼎にあらで。兼好が。筆も及ぬ好意の情。家を忘れ。身を忘るゝ。私色の道にハ。功拙も論ずべからずと。作者も須臾筆を休ぬ

○こゝにかのねごかしにあいたる客【太九郎】廻しざしきの。うすぐらきあんどうに。厂首のくすぶるばかり。たばこ入のそこをはたき。よの。あけるをまちかね。一座のざしきをさがしあるき。まこ〳〵してとりちがへ。よそのざしきへずつとはいり

【太】權さん。どふだもふけへろふか（トいふこへに。くつつきやつてねていたりし客目をさまし）【客】だれだ〳〵（トいふかほをミて）【太】これハそゝう。御めんなせへ【此ざしきの相方】だれだのふふけいきな（トきやく。ふとんのわきにある。かミ入をかたよせ）【客】

おへねへよい〳〵だ 此内太九郎・こそ〳〵とにげだし・やう〳〵つれのさしきへさがしあたり・のぞきこ「太」權さんハ爰かな「ごん」太九印かへゝんなんし「太」今門違をして大きにしかられた ト枕元にすわる「ごん」太九さんさぞちぞつたろふ「太」ナァニ聞てくんねへ。店たてをくつてとんだめにあつたハな。馴染の客がきたのなんのと。おつうからくつて。むしやうに人を團子にしやァがつて。そして風の神でもおくりだしたよふに跡にやァかまいつけもしねへ。りくつをいふもしつているが。たかゞあへつらァ。くぼへやつらだと。こつちで了簡つけているも。こゝハふんどしのしろくなつたおかげたハな「ごん」ぜんてへ。いめへましいやてへばねよ。おいらもてへげへ。ひやめしをもつた。金杓子のやふに。のろまにされてしまつたハな トむしやうにはなすこへに相方目をさまし「相方」もしおゆるしなんし トてうづにてゝ行「ごん」ざまァみな トわるくいふ此内今ひとりのつれか來り「里三郎」サァ出立の支度にしよふ「太」足元のあかるいうち出かけるがよかろう。したがりさこうばかり。地にしたといふかほだ「里」ナニ中ぐらゐよおめへたちやァどふだ「太」おいらァもふいのちに別条がねへといふばかりで。とんだめにあつたァな。ぜんてへおらァ。晝斗あそんでけへらふといつたに。里三公がいたがるから。付やつていたゞけむだをした。此わりハ。きこうにもふりかけにやァうまらねへ「里」とんだことをいふわなおめへがなをしてゐるよふといゝだしたハ。そして權さんの勤ハおれが出しているかどふする

【ごん】コレきさまもきたねへことをいふもんだ。そりやァ跡てとふともすらァな。おいらなんざァ。きのふもこまかたまでの舟ちんと。土手のちやだいをだしておいた【里】そりやァおたげへよ。田丁でくつた團子のぜにハ。そんなおれがはらつたハな【太】コゥぬしたちやァ爰でそんなしミつたれなことをいふもんじやァねへ。人がきいたら外聞がわりい。そりやそふと。里さこうそこに。はした錢があらハ十六もんばかりかさつし【里】なんにする【太】けへりにたばこをかうハな（これもきのふこゝへくるときハ六十四のこくぶを・五匁かつて・いれてきたりしが・かへりにハ十六文の五匁なり）【ごん】サァでかけよふ〳〵（北内里三郎が相方はをりをもち來り・きせる・外のてやいもてんでにひつかけ・はた〳〵とでかける）【里三郎があいかた】モシよふおいでなんしよ【若もの】又いらつしやいまセ（三人ろく〳〵あいさつもせず立出るくゞり戸ぐハらりにのき下の犬が目をさまし）【犬】わん〳〵わァんわァイ〳〵〳〵〳〵

○既に。雞犬の聲万戸に響き。紫雲東によこたふ。撞だす鐘ハ。湯とならで。人の眼をさまし。告ハたる鳥の聲ハ。廓下鳶と倶に起て。二三寸連子を開。たばこの火を運ぶ。振新が足おと喧すく。小便所の下駄の音最繁し

（はやがへりの客ねとぼけごへにて）【唄】おとつさんや。おつかさんにしかられて。そんなよハいきでつまるものかへ（道しのがきやく）【吉】ごふぜいにつまつた（トきせろを灰吹にてむせうにたゝく）【道】とふして上ヶいゝしやう（トかんざしにてほじりほん〳〵とふいて・すいつけさしいだし・きやくのひざにもたれて・いつぺん・かまで・ゆでられた・といふかほつき・大たふさのかつ山・うしろへあふのき・まへがミ・ふたかハ目の上にかゝるを・かんざしにてかきあげ〳〵たゝうつとりとしたるかほにて）【道】もしへ。な

ぜわつちやァ。こんなになりいしたね【吉】どふしなさつた【道】もふ〳〵。なんだかっ氣がおかしくなつて。いつそものをいふちからもおざりいせんよ。なぜこんなにしておくんなんした【吉】おいらわしらねへわな【道】ナァニ。ぬしがこんなになさりいしたわな。ゆふべからの嬉しいに引かへて。けさわお歸りなんすだろふとおもいゝすりやァ。悲しくつて〳〵なりいせん。どうしんしやうね【吉】おめへがそんなにいつてくんなさると。千年もなじんだよふな氣になつて。いつそ歸りたくねへ氣になつたが。これでもつまらぬものだ【道】それだから。すぐにお出なんしといふこともいわれいせん。もふ〳〵いゝ苦勞をもとめんしたよ（トかじりついて●客のはなのさきへ●かつ山をこすりつける●はいくへのにほひにたまらずぐつとしめつけて）【吉】いつそのくされに。けふわいよふか【道】ソリャほんとうにかへ。したがっゐなんしてもよふすかね【吉】いゝ事わねへが。幸ひ親仁わ。田舎へいつて留守だから。けふわながしときめてしまいやセう【道】ほんに今度からわ。お留申いすめへが。けふばかりわそふしておくんなんし。其かわり御ちそうをいたしいしやう【吉】そりやァ有がてへね。時にけふゐるにしちやァ。遣り手や何かにやるものわ。ミなやらざァなるめへ。金わいくらでも爰にあるから。いゝよふにしてくんなせへよ【道】ソリャのちにいゝよふにいたしいす【吉】ほんにコレミな。ゆふべの一分が。まじ〳〵と爰にいるわな（トわらひながらたばこぼんの引だしへ入んとしてかの引だしにかミにておりし紙のあるをちらと見つけ）

こ【吉】ヲヤなんだへ おいらんはつとおもつて取にかゝるをふりはなし 蛙のせなかに。與七とかいてあるハ。コリヤア待人のまじなゐだね 此さとにてきやくをよぶまじないに。紙にてかいるをおり。それに客の名を書て。これへ針をさして置客のきたることをちかつて。其客きたる時ハこのはりをぬいて。かいるをながす。とりどころもなきわざくれながら。こゝがいろざとの情なるべしおいらんハかほをあかめてうつむく 【吉】ゆふべからそんな。おめへがいゝなすつたこたァ。噓といふことが是でしれた。おそろしい心いきたね トかのかいるを。道しのゝふところへいれ。きせるたばこ入をしまい帯をメル 【道】ぬしやァどけへおいでなんす【吉】どけへいくもんだ。けへるハな【道】なぜへ ト少しなミだぐむ 【吉】けへりたくなつたからさ トずつと行にかゝるとびついてだきとめ 【道】マァお待なんしな。下にいて私が申いすことを聞ておくんなんし【吉】ナニサこんなに。まじないをしてよびてへ客があるものを。何おいらがよふな者に【道】そりやァ此譯をおしりなんセんから。そふおもひなんすハ。むりじやァおざんせんが。此客人に私がほれてゐるのっ何のといふわけじやァおざんせん。コリヤアてへ／＼。せわになりいす客人でおざんすからさ。それともぬしのお氣がすミいセずハ。此客人をきれいゝセうから。どふぞ。きげんをなをしておくんなんし【吉】きれるとつて。おいらがついてゐやァしめへし。それが。あてになるものかへ【道】そりやァこうしておくんなんし。今度其客人がきなんした時。ぬしのとけへ。おしらせ申いすから。どふぞきておくんなんし。そふしいすと。其客人を翌日までもとめておきいして。つきだすところをじきに。お目にかけいしやうハな【吉】ソリヤア大かた。

外のよい〱客をその客だといつてか【道】ヲヤごしやうざんす。ぬしやァどふいへばこういふと。よくじらしなんす。くらァしいすによ（トたゝくまねをして・ずつとたち・小だんすより・かんさしを二本いだし）もしへ。こりやァ其客人がもつて來て。おくんなんしたのでおざりいすから。お見なんし。與の字と。こつちらに道といふ字がほりつけておざんすにへ。それだからこういたしいすれ（ト火ばちの火の中へいれ・かんさしの文字のところをやき・へしおりまげ）コリヤァぬしに上ヶ申しいしやう。きせるにでもうたせなんし（トほうりだす客も心とけて）【吉】おめへ。そふいつても可愛心いきだね。もふ一言もねへ。かんにしなせへ。其客人も爲になる人なら。つきださずともいゝわな。あんまりうたぐり過して。おきのどくなことをした。其代り。簪れおいらが施主につきやしやう【道】ナニよふすれな。ぬしのお心さへすミいすりやァ。なんにもいりいせん。もふ〱わつちが心にやァ如才れおざんせんから。かならず。うたぐつておくんなんすなへ【吉】ハイかしこまりました【道】いろ〱なことで。氣をもませなんすから。いつそくたびれいした（トよこになり・よぎをはなの上までかぶつてきやくのかほをじろ〱見ている）【吉】なんだな。きミのわりい【道】ぬしやァもふおかミさんがおざんしやうね【吉】ナァニまだなしさ【道】ほんとうにかへ。ァノね。わつちやァとんだばからしい。ねがひがおざんす【吉】なんの願ひだ【道】わらひなんすなへァノひよつと。ぬしのよふなほれている亭主をもちゐしたら。ね。おもいれ夫婦げんくれをして。見た

ふすわな。わつちらがとこの内證でおかみさんがいつそっりんきふかくて。よく夫婦げんくわをしなんすが。わつちもあんなにして見てへと。うらやましくつてなりいせんよ【吉】おめへもへんちきな事をいふ。なにけんくわがおもしろへものか【道】けんくわわ。おもしろくもおざりいすめへが。そのあとで。又いつしよにねて。中なをりのときわ。さぞたのしみでおつしやうね（トかほにそでをあてる）【吉】そんなら。是からけんくわを仕よふか【道】サアいたしいしやう（ト引よせてほそき手もおるゝばかりたきしめる。この道しの。いたつてはつめいにて。ばんじにしよさいなきしろものなれ共又こゝらのあどけなきことをいふ。こゝがけいせいのじやうにてせんりやうのねうちの所也一座のきやく）【風水】どふだ吉さんもふけへりやしやうか（トはいり枕元にすわる）【道】けふわ逗留をしなんすとさ【風】吉さんほんにか【吉】おいらんが御馳走をするから。いろとつてさ【風】ソリヤア大かたっ御ちそふわしよう。錢わそつちで出せといゝなさるのだろふから。こうしやセうおめへとたつた二人で。生簀へてもめへりやしやう【道】ヲヤにくらしいのふ（ト此大風水か相方）【とこ夏】ぬしやァばからしい。そこらちうをたづねいしたわな（トはいつて吉にむかひ）けふわ御とうりうざんすかね（トいゝながら吉がかほをてわらひ）道しのさんそふでざんすよ【道】モゥそれだからうれしうおざんすよ（トかほをかくし一わらふこれハこの吉がいぜんのきやくによくにていることをゆふべよりはなしやいたる事なればなり）【風】何がうれしいかわからねへ【とこ】ぬしたちのよふな。いゝ男がきておくんなんしたから。それで道しのさんも。わつちもうれしいといふことざんす【風】おきやァがれ。ソリヤアゆふべの

客の事か。コゥ道しのさん聞てくんねへゆふべ東水さんとやらいふ色男がきて。大されざよ（東すいといふハこのとこなつかきやくにておやぢ也わざとからかつていろおとこといふ）「とこ」アイそふさ。ソリヤアおめへさんよりか東すいさんがよつぽどいゝ男さんすものを。そのはづの事でおざんす（女郎もわざとからかつていふ）「風」ほんにそふよ。どんないゝ男だか見てやろふとおもつて。ふすまの間から覗ひて見たら。とこ夏さんかほれたもつむりハねへ男よ。なんのこたァねへ。蔵の壁にかいてある。親玉がよこむきのにつらといふ。やせこけた親仁よ。なにが。常夏さんが其親仁のひざへ。いきなりにもたれると。道中すご六の虎が石をだかへたよふに此ぢうてへを。しなびた腕で。トやつていたれな「道」よくいわつしやるよ「とこ」ナァニありやァ嘘ざんすれな。東水さんハてへ〳〵いゝ男じやァおざんせん。それだから。そのほうへ斗いつておりいして。ぬしひとりを。ねごかしにしておきいしたいゝきそざんす。そふしたらお聞なんし。いつそはらをたつて。酒をむしやうにおあがんなんして。しめへにやァ。らうかへ大のしなりになつて。ねていなんしたわな「風」ナニ大のじなりになるもんた。太のじなりだ「とこ」太のしなりたァへ「風」ハテこう手足をおつぴろげると。大のじたが。其したに。コレ見なちよつぽりと。こゝに点があるから。太の字なりだ。それも此点がどふかすると。ぐつとながくのびることがある。そふすると木のじなりよ。そこで。木の

よふになつたといゝやす。なんといへれをきけバ。ありがたかろふ【道とこ】ヲホ、、、【風】まづおいとまいたしやしやう【道】もつとおはなしなんしな【風】イヤ揚や町の湯にでもへゝつてこよふ。【とこ】うちでおへゝりなんしな【風】イヤ生鮑を塩でもむよふに。れいこくをごし／＼とやつた湯ハおそれやすよ【とこ】にくらしいのふ（トつれたちて出て行）

諺曰。契情の寔ハ。食言の皮。嘘ハ寔の骨。万客嘗る口紅粉の。濃もあり。薄もあり。一槩にハ論ずべからず。さきに呪の蛙ハ。賓人を待の結構なりと。是異邦の侯先生が蝦となて。閭門に馬元を待たる例にもあらず。又比翼紋の簪を取其志操をあらわす事。姜皇后が衣裳を謝し。簪を脱て。宣王に報ずる。其至誠をならへるにもあらさるべけれど。おのづから其影迹に預ること實に一笑するに堪たり。猶帖數を累るに。いとまなければ。余ハ後編にゆづりて。相戀此兩子の行末をしらせまいらせんことを希ふ而已

穴可至子

自序

算術の徳たるや光由ハ八さん見一の新手を出し癡夫愚鹵に是をしめす今や不佞青樓のいつゞけかゑり傾城買の早さんを著述なす蓋娼妓買ハかくかゝれんの胸算用虚と實の極意を悟るハ聊開立開平の算術にして愚意客豈此境をしらんや夜廓に並ぶまゝ子だてあれバ友呼禿ハ鼠さんにひとしく土用とかんの九進が一心迷ふながみに客の心ハ無勘定引にひかれぬ義理詰の紋日ハ胸に九々の數色事の座鋪へ飛桁あれバきつかけられし鋪初ハ是銀遣のはや割か口舌の床のきぬ／＼に抱れたのハ改算記苦に成る茶肆の掛算にむねを割算かんがへてもがくりとちがふ内の首

穴可至子　　　　　　　二

尾一角花貫若イ衆の工面ハ水臺龜井算一度讀で大象の押のおもさを知給へ猶二一天作意の引殘もおゝからんそこらハナソレ番頭新造の十露盤違ひでおざりいすとしか云

于時享和二ッの年

なんでも正月

初買の日

於文字樓上

江戸ッ子述

穴可至子

四

目録

【新】初心の口舌
【藤】廓なれし辨
【鉄】聞たふう振らるゝの穴

手管早算 獨稽古

富久亭著

【昏鐘】ホヲウン〳〵へ土手の人足しげきころ三分なくなる智惠をだす三人つれの放蕩家【新】【藤】【鉄】（いしようづけへいまゝでありきたりの通書にゆずりこゝに略すむだ口をきくゑもん坂をおりながら）【鉄】ちつと休まねへかくたびれた【新】すぐ行がよかろうモウとぼるだらう【藤】下の方ハおそいが江戸町をひやかす内にやァ出揃ふから圖ほしといふ刻限だト（大門へはいる）【鉄】（袂をさがして）ホイ是ハしたり。手ぬぐひをわすれた【新】かぶる氣か【鉄】ム、、むき出しぢやァ通られねへさしがあるから【藤】大わらひだかりが有が聞てあきれらァ【鉄】それでも井筒屋のゑんに居るハあふミやの阿古女に角町のふき岡じやァねへか【新】かりでも有ルのか【鉄】馬鹿アいふな【新】アレミヤ京庫屋の二かいがでへぶにぎやかだが尾張町の出番かの【藤】どふりで金春清吉や仙吉が聲がすることゝへも聟がはいつたそうだがミの町も五瀧を見捨て牛に馬を乗かへた（トはなしながら行うしろへ銚子やの禿がきてたもとにとりつき）【禿】モシヱおいらんで申んす此夜ハお目にかゝりいせんどふなんしたきのふふしミ町へみを出して置んしたがとゞきいしたかどふぞ榮さんをつれ申てちつとあそびにお出なんしとさッシテ主の女郎衆もよろしくとさ

【藤】どこに出てだ【禿】角玉口(かどたまくち)に【藤】おいらんにそふ申てくりや大キにおミそれ申ました此中ハおやかましう御座りやしたろう今夜(こよい)ハ付合(つきあい)できたからいづれ二三日の内にお目にかゝりやせうとミんなにもよくいつてくりやヨ【禿】アイトかへる【新】どこの子どもだ【東】鶏舌樓(けいぜつろう)のよ

ト云なからスルカヤの角から江戸丁へ入 【新】モゥひやかしなしに宿をきめようぜがうきにくたびれたゼ【東】河岸をまわつて京町を見やうか【鉄】そふするとみんなに逢(あつ)てめんどうたから中の町を行ふと 立もどる

いの字にい七屋を見て 【新】アノ女房ハ見たやうな顔たか【東】そうたらう喜古蛸(きこたこ)が姉よ【新】ゥ本膳かでへぶじミだの むかふより銅吉我六きたる 【銅】イヤこれハ新さんおめつらしい此間は【新】座鋪へか【銅】ハイ中の郷の旦那ハへ【新】是もさん〳〵さ【我】ヱ、引そうかしてすきとお出も御座りません憚なから御序によろしくトキニ今晩の御世界ハ何れた子【新】いまた三界無庵(かいむあん)さ【我】おかくしなさる事ハアねヘツリヤア御うらみだいつれ後ほどとなたもさよじや ト半八か身ぶりをしてわかれる 【新】わりゐるものにあつた【東】こられちやァ恐れるの【新】それたからたんまりで居たトキニ鉄ハどふしたの【鉄】爰に居らァ【新】ナゼたまつて居るひもじいか【鉄】おきやァがれ【東】おくり狼(おほかめ)を見るやうにたまつて付てこすとちつとしやれさつしなさつきほうかむりをしてへと云ッたかよくしつたものにあわねへの【鉄】けふハ間かいひから【文】あきれらァ 向より茶やの女大てう

ちんを両方の手に提て來ルと【鉄】アレミヤよくのふけへ女た水を汲きになつて両方へさけてくラア【新】イヽくときわやの前に有る二かい菱と五枚梶の葉を付た大てうちんハ誰れた【鉄】アレハ外さくらたの小笠原と下谷の松浦だ【新】聞たふうな主に聞アしねへヨたまつてイヤナげいぶんのわりい下座見しや有めへしよく馬に出るぜ【鉄】ヲラア武鑑の事かと思つた向から來る赤イ二升の烑燈は團十良う茶やても出たのか【新】恐レた事をいふぜアリヤア堀のてうちんたよ【鉄】そふかの　トましめで居るあけや丁の方から蔦と云字の付た小田原でうちんをさげてみつかいの平兵衛來る　【 】鉄ゟン此間ハ【鉄】平公かどこへ【平】二丁めまで参ります先日ちよつとかのへ参りましたが先達ての御使ちんをどふぞ御願申ます【願】ソレハおれにいわづとあつちからとらつせへ【平】左様申ましたら清花さんのおつしやるにハおれが方から代をやるから日みのやうによこしてくれろとあなたが御頼なさつたゆへしらぬとおつしやてゞ御座ります【鉄】何うすのろいそんな事をだれかいふものか【平】そうおつしやたハ清花ゟもしらがへに出る仕合だから三文もねへハ知レて居るし私はかり迷惑いたします【鉄】御きげんがいひかね【鉄】ハイかわる事も御座りません【女】モシしんばの富ゟハ久敷御出もふされませんか御きげんいゝかねおうかゞひに上ケてへにも御ゑんりよ申ておりますがおのぼりでもなさつたかね【鉄】イヽエまだこちらにお出なされますが慥先月湯治にお出なされまし

た【女】夫レハ本に御人も上ヶねへでなんとかおぼしめしたろうに　ト一チこうしあげて　喜助や富さハ湯(とう)治(じ)にお出なすつたとよ　喜助はたすきかわりに手ぬぐひをかたですじかいにいわへおく物をこしらへて居しが庖丁(ほうてう)を持た手のひらではなをこすりながらおくより出て　【キ】ソリヤアとんだ事だおとゝひも江戸橋の高嶋できいたら。ていしゆハ舩へ出てかミさんでハわからねへからおみばかり置てきましたが角町へ言譯(いゝわけ)かねへ　是いたつて篤になるきやく人ゆへなり　【女】マタ高嶋も高(たか)しまだのう御立なさるもしらねへとハあんまりな舩宿だぞ【キ】マアあなたちとお上りなされませ【女】是ハしたり御茶も上ヶなんだ松ハどこへいつたお茶をくんで【鉄】イヽエおかまいなされますな【女】お一ッ上ヶませうからマア御上りなされませ【鉄】ありがたう御座りますがつれもおりますから又此間に【女】コレハあまりお早くで御座り舛さよふなら御きげんよふ【鉄】ハイ　と出てくる二人ハ水戸しりに待て居る所へ鉄くる　【二人】鉄がとんだなかはなしだつけの【鉄】すでに咄(はなし)でもねへが又せわがふへた【二人】どうしたのだ【鉄】だれだかしれねへがあすのばん揚屋(あげや)町まで來てくれろと長瀧屋の女房に今たのまれたがあへべしれると言(いつ)て施主(せしゆ)の名ハいわねへか大かた霍樓(くわくろう)に文樓(ぶんろう)の佛だろうよ　ト二人がまへへわるミへをいふ　【新】何かおうら山吹だの【鉄】かどがおゝひから手がまわらねへでこまりやす【新】時坊主を見るやうにフゥ方(ほう)〳〵を喰(くら)ちらかしてもいひかへ清花がしつたら只(たゞ)アすむめへぜ【鉄】ソリヤア生(いき)ちやアかへられねへのさ【新】あんまりかく〳〵な女ミやうりがつきるぜ【鉄】夫レても

向からすへ膳で逃ても逃さねへ物を【二人】ごうせい〳〵（ト京町へはいり）おが本ハどふだ目白を見るやうにでへぶならんでいるぜ【鉄】こゝハつなてるで上られねへし向の治文字ハ八重久米が理くつで二かいをせかれて居るし【二人】色男と一しよにくると連までろとうに迷ぜ定めし松海老角たわらもわるかろう【鉄】もちろんの事さ【二人】若桝ハどふだ【鉄】こゝもわるい今地内の。日應院の裏に居る名ふきが時分にさうどうを出かして二かいをおろされたまだ其時のやり手のおはちやまハしかたが居るからこゝハ一生ふさかりさ【新】こまつた男たぜ年代記のいるはなしをせすと早くきめねへかでへぶ腹が來たぜト（云なから交しゆ舛やのかうしへ來て）爰はとふだゑて吉かとこだぜ鉄か（あいかたハ客か有と見へて見せにハ見へねとも首たけほれているゆへ名代をせうちにて）【鉄】おめへかたハいゝか【東】おいらにいさくさアねへ【鉄】そんなら（トマカキへまへり）コヲ若衆や西河岸から來た清花といふ女郎衆ハ居るか【若】ハイこちらでハ腹立花㒵とおつしやりますがおなしミて御座りますか【鉄】ムンニヤ客人か【若】ハイいつも早歸りのお客㒵て御座りますからマア御上リ被成ませ【鉄】そんなら正面にいる跡しりから二はんめの紫を着て本を見て居る女郎衆となし地のたはこ盆をひかへて猫をぢやらしてる女郎衆を上ケてくんな【若】愁野㒵ニ笑顔㒵御三人一座てこさりますか【てつ】ム、、【若】さやうならこちらへと（のれんをあげる三人ハ二かいへ上り表のすミの座敷へはいるいづれも一分女郎也ざしきのかざりつけいせうのこのミその氣位におうじさま〳〵あれでも事多けれバこゝに略す例の通りたばこぼん出し物をならべて）

【若】御壹ッ上りませ【鉄】アイと 盃を取てひとつうけ そうしておかつせへ【若】さよふならト行【藤】どふ狂言を書た【鉄】初の顔さ【二人】いひかへ【鉄】是も一分のかすりだァなミそじやァねへが仕上ヶを見なせへ【藤】手に入た物だの【新】此座敷の女郎ハたれだ【鉄】愁野といつて藤公が相方よ主のハ笑顔といつておく座敷だそうな【新】ナンダト うれへのにゑかほにはらたち花だとんだ名を付る上戸やだぜ【鉄】上戸屋ハ出來やしたまた三人一座で文珠丱やもへんちきだせさぞいひちへが出るだらう【藤】定めしさ トはなしてゐるわかいものかん兵衞らうそくのしんをきりながらどなたもといつてすわるつゞひてうれいのゑがほちへ里じゆんにならぶわかいものさかづきだいをまゑへだして【若】チトおはじめなされませ【新】アイト トかつちりにて盃臺へをく【若】お順に致しませうか【鉄】そふさ それ／＼に盃もすゝ若者立つてゆく【新】鉄一ッ呑ねへ【鉄】ヲラァまだ酒がさめねへ ト云ながら一ツうけて藤にさす【藤】チヨツトおさへよふ【新】憚ながらおいらんお合を【ゑ】アイト 盃をとる禿さゝのつぐ又藤にさす【藤】是ァ御めんどうだつけ トちへ里にさす是ハはら橘の名代ふり一ツうけるうれいの禿ふとだたばこをつけて新へ出す呑ながら【新】でへぶおとがするが雨しやァねへか【鉄】ぬれるもいひが ト云て跡をいわず【新】ナゼ【鉄】チツト譯ありさ 是ハ此手やい。みなひつてんにて七ツやの入かへ牀ゆへなり【新】うつちやつてをくがいゝどふするもんだこれからが酒だ トすい物わんのふたではじめるうれいのへつんとして立て行【新】藤公ちつとおどらねへか【藤】おたすけを見るように無三味せんでおどられもしめへ【新】銅吉でも呼にやらうか【藤】出たのがねへとうらつせへ【新】ホンニ唐人のおいどだつけの

是れからつけつといふ事也【鉄】主もきさな事を云てふさかせるぜわるいもんた【新】此中柳橋の河内屋で源四郎か會をしたか行ッたか高砂町のおふしかいちまきでおとつたそうたか面白かつたそうな【東】おれも行ふと思て居たか其日れあへにく用か有て行かなんだいつか住吉町のお清かおとり初にいつたら諏訪丁の堺屋に龜井町のお花坊と二人かうたで三味せんれかきりやミんこうに人形丁の丸一よミんなしろうとで下かた斗二町まちの手合だからつぶか揃ッてトンダ面白かつた【しん】本所の手合や淺艸の手合や板東お梅行たつけかあれねへか【東】ムンニヤあんまり人通てこんさつしたから相生獅子の亂を打込とすくに歸つて來た【しん】ホンニ傳吉もあすこを仕廻てこつちへ出ると聞たッけあんなからせんがけんはんへまじるから吉原藝者の評判がわいりい五六年跡の燈籠に揚屋町て清久か娘のお粂が河東ぶしてあミ笠や松の内を踊た時分れ俄たつけ【東】そふ〳〵しかも三軒町の八百屋にたのまれて駒かたからすれ町のむすこ達か俄のすけにでた年たッけ【新】ヤホンニおもしろくもねへ昔咄コウおめへがたれ着かへて來ねへか【う】マァよふさんすからおはなしなんし【ゑ】いつそ面白ふおすよ【東】あじな事がお氣にかなつたね【ゑ】それともおじやまなら　ト立そふにするすそとらまへて【新】もつてへねへ何じやまなものか【う】そんならもつとお咄しなんし【東】咄坊主の宗寂

じやァ有めへし何をおれがしるもんたナ【ゐ】なんてもいゝからをはなしなんし【東】コレナなんきな事ァねへそんなら一ッ咄そふかコウトそれ／＼此間だいぶ鮫があたるといふにつけてできた咄しが有のさマダ是かいつちあたらしい【う】【ゐ】【ち】サア／＼夫をおきかせなんし【東】エヘン／＼すさまじいトキニある雪の日居つゞけにながして居ると茶屋かきてトキニ旦那まんざらでねへ雪で御座りますねチト御見物なから中の町へいらつしやりませんか鉄炮でもさしあけませうというから相かたのおゐらんをつれて行と程なく吸物も出來すらりつと膳かならふと女郎斗り箸をとらずにいるゆへナゼたぺねへと聞たらわつちやアイヤあたるといふからたぺんせんナンタくわねへ今時鮫をくわねへよふなやほな事が有物かあたらねへ唱言があるからたぺなせへといふとヲヤどうしんすへおしへておくんなんしといふからツンナラ先てめへが膳へすわつてふく汁のふたを取ながら〽我がおれかヲレが我か【う】ヲヤにくらしいのふよくわるくおつせへしたねへ トわらいながらきせるてふつたりつねつたりする【鉄】ト二人斗りおちかきててめへ斗ねつからつまらぬゆへおれもはなしをしておちをとらんと口をむすく／＼している【東】モウあやまつたからかんにんしねへかうきなあさができた【う】あんまり腹かたちんすからさトミなく／＼わらふ【鉄】おめへがたハいゝこきげんだおれにもちつとはなさせねかへ【ゐ】ヲヤきのどくらしいどうせふのふ主のかつてにお咄しなんしナ【鉄】マスおいらがおぼへて名ハかわらねへても顔がかわつたりし

て中の町をはつて見しつた女郎衆斗りもいけへこと見へねへ先てうしやのせんのミな靏か山の宿にいれバつり屋からすミ丁へくらがへヲした手ヲ書たしのわなハ儒者の女房になつて木挽丁邊にいるしこゝのへも五龍と別れて是も四ッ谷へ出るといふ事たゑんといふものはおつなものであらほど男ゑらミをしてあだな京庫屋の七松もめつかちに心中を立て夫婦ながら浦賀へ行たそうなそうかとおもへハ木像を見るやうな手のねへ三ッたまハ田舎大臣がせわをしてきつとしたかこゐものに成ているし心からとはいゝながらおが本の岩としハ田中にいるといふうハさ斗りでいところもしれすかわいゝ事をしたハ太助まんぢやのおゝしほよ親孝ミな女郎でやう〳〵年ゝが明たとおもへバ病氣ついてしんだそうながおいらが盛の時分ハマタ禿でいたをおもへバ年もよらねへで今に迷でくるも出來たさたてもねへ此中も二丁目の戸世佳がとこから來たみに主もさぞ年がよりなんしたろうねわつちも齒のぬけた斗りでおすト松花堂て書てよこしたみからといひその手跡の見事さあれでこそほんの傾城だ　トむしやうにやへつているいち座もあくひたら〳〵　【東】そんな常盤な咄をせずとたばこても呑ねへ　ときわの洲にてあてなきうそと云事也　【ち】そのはなしハよしになんして外の事ヲいひなんし

【鉄】さよふなら賣卜先生のぬか俵に客のこもをかふつてねていたのハあまた見かけたが女良の古ィのとて古道具やに出て居た事も聞かねへとかゝれたから河岸をかへて是から客人ゝの落

城(しやう)をはなそうヱヘン〳〵　トせきはらいをすれバ作者うしろで鉄か胸を挽てコレサやぼな事をいふぜ客のおちゐをはなされてトふして爰にいた〻まれるものかくらやミのはしを月夜だモウよしなぎりにもおれにやアか〻れぬと作者筆をなげだす　【鉄】是ハ成程　尤(もつとも)な筋だそんならもふちつとけいせいのはなしをしよふか【新】モウちつとやすんで又はなすがいひおもしろくもねへ　うれいの〻がほ耳(みゝ)こすりをしてわらふ　【鉄】おめへたちやァかつはに引れやうといふかほをして何をにこ〳〵わろうなおかしくもねへ事を【う】ナニそうじやァおつせんけれどね主ァあんまり女郎衆の事がくわしいから女郎衆の肝入(きもいり)とやらでもなんすかとおもつてさ【鉄】すこしむつとして口をとがらかす【う】〻がほさんぬしのかほをちよつとみなんし初午に九郎介さんへ上けたがくによくにて居なんすね【〻】ほんにいつそよくにさしつたよ　トミな〳〵わらふ　【鉄】またわらやァがるいめへましひ似よふがにまひが料理番(りやうりばん)のむねに有からうつちやつておきな大きにおせわだ【藤】イヽサはなしハおれにあづけてマァ一ッ呑(のむ)がいひ【鉄】ナントめしにして跡でまたのまふ【新】それもよかろう【ち】さ〻のおまんまを上ケや　トうれいの〻かほ立て行ちへ里三人のはなりをた〻ミさ〻のきうじをする此内わる口ぢ〳〵あれどもうるさければこ〻に略すぜんをさげる入ちがつて若者きたる　【若】御かたつけ申ませうチトあちらへおつれ申しや【鉄】何時だの【若】かねすぎで御座ります【ち】コレサどこだよ【若】十二畳の次の間だ【ち】こつちへ御出なんし　ト三人を奥ざしきへつれてゆく　【藤】こ〻がとんだせめへの松嶋丁の孫店へはいつたやうだ【ち】かんになんしおきのどくだよ【藤】〻がほさんの座しきハとなりか【ち】アイ【藤】新公とハねて居では

なされるのおれ一人ははなれて俊寛といふ物だ【鉄】できずとも無事だあれがくるととん、はなしが有からぢやまになる【ち】きつい圓治郎だねおいらんが聞かしつたらさぞよろこばつしやるだろうヲヤゑがほさんの客人はねなんしたそうなモシエとうなんしたお休なんせんか【新】ムヽあんまり食すぎたせいか氣引入レるやうになつてきしよくがわりい【東】ハヽ久しふりでのびしよくだから腹かきもをつふして虫かおとろいたものだ【新】ぺらほうめてめへしやァ有めへし【東】薬でもやろうか【新】ムンニャいひ　ゑがほか禿さ、のむかへに來る　【禿】座しきへおいでなんし【新】そんなら先へねるせ又のちに　ト出て行はらたち花かむろ来を待て來ルちへ里はあんまり鉄がうぬぼれゆへ水をむけてあすばんとかんがへている　【東】先生はさつきいつたまゝだがでへぶ墨付があじだせ【鉄】アノおもわせぶりが病さちへ里さんアリヤアいつころこつちへ來へ【ち】跡の月お出なんしたか主もあざぶとやらにかわいゝ客人がありなんすといつて待ていなんしたけがこつちへ御出なんしたも其客人ゆへたトサ【鉄】ハクシヨ【ち】風でもお引なんしたかへ【鉄】ナニたれかおれがうわさをするさうな【東】鉄公主の手並におそれたゼ以來きつとへいからだ【鉄】ナニまゝ有事さ　トひげをなてる　【ち】おめへさんは初て御出なんしても座敷では主を見申といつそそれ〱斗りしてなんにも手につきんせんよおうら山しい事たね【鉄】ァ我はつゝむとおもへ共ほにあらはれしかァヽいたらねへ女郎だト　蛇をかつ

そしるおもてを鉄棒
引拍子木をうつ　【東】モウひけだおれも陣を引ゥと出て行

是ヨリ傾城買三人生酔

はじまり
さよふに

客人【東吉】　あいかたられいのとしは二十三四にてはへきはうすくかミはさらいにむすひしのき一本に石持の笄を三本さし色巾白にて目のわたりながくたずねるやうなちいさな口にて衿にはすつかりと足が二本はへ宗傳茶七ツ子の裾まはしにひかのこの胴をつけたねまき姿にうきおりの男帯をしめふりも見立もあろといふ面よき佻ものなり初會なれと大きにのほせそこ〳〵に仕度をして床

あいかた【愁野】にまつて居る

【東】（は小べんじよよりかへりしやうじをあけはいる）【う】どこに居なんした【東】小便に【う】ばからしい今迄かへなが
いてうづだのふ【東】痳病かいたくつてならねへ【う】いひ薬をあげんせうか【東】サァくんな
【う】今はおつせん拵ておきんスからこんど【東】またこひとかそれではたかい薬につくぜ
来るかこねへかしれねへ物を（うれいの東がかほを見つめてほろりとなミたをこぼす）【東】とふしたしやくでもおこつたのか【う】
イ、エどふもしんせんが今主のいひなんすを聞はどうせモウ御出もなんすめへとおもへは夫レ
がかなしうおすと泣【東】是ァ大笑だそれになく事が有物かとふりてあやしい名だとおもつた
ナニそふいふ事しやァねへから氣にさわつたらりやうけんしねへ（うれいのは泪こへにて）【う】わつちだつて
も新造衆か子供じやァおつすめへしそうおうに年もとつて二階ではおよばづならとうかうと譯

道も立あひさつもしんす物をなんぼ主の氣にいらぬわつちだとて心一ッはいな事を云なんせすと少しハ花を持せていつておくんなんしたがいゝト（へそをかきながら）今も今とてゐかほさんと二人で主の噂はつかりしきつて着物を着替へる内も氣がせきどこがどうおまんまをたべて居んしたから腹橋さんが來ていゝなんすにハ今夜にかきつて愁野さんハいつにねへ早ィおまんまのたべやうだ子いつそおうら山しいおたのしミさんすとついそねへァノ子達の目つきにもかゝる程にとうした事やら座敷の内から主にハ（ト跡をいひかねしやくりをして）一チ座の女良衆にもかまハず人より先へ來て見れハ床にお出もなんせずト（わる紙で泪をおさへ）呼甲さうにも主の心いきもわからずまた傍輩の女郎衆に年げゐもねへとつもられるも恥かしくおもへバまゝならぬ浮世とあきらめて見れバミる程くるしさのまゝ一ト人で酒を呑でいゝしたが呑ばのむ程おもひ出されてかなしうおすト（泪をおさへ紙ではなをかミながらうつむく東はせなかをさすつてゐる）夫からやう〳〵お出なんしたとおもへハ病氣たのモウこねへのと人のおもうやうにもねへむねのふさかる事斗ッかり云なんすものをとうして泣すに居られる物かト（かほに・をあてホヽイ〳〵となく東きもたつぶして）【東】コヲそう泣てくれちやァきのどくで悔の言よふもねへチットマァおれが言事も聞がいひ段〳〵おめへの言事だがいやだとおもう女郎をハ先に見立て上ガろうか是程わかつた理屈ハねへよしんハこちとがおめへにほれてあせつたつてはぜつりで鯛を釣た例もなけりやァしよ

せんおいらがゑさにかゝるおめへでもねへからゑんかうが月で手のとゝく瀬も有めへと愛では往生せさァなるめへ【う】何ンだとへ是程にもおもふのをまだうたくつてそんな事をさりとはおもひげへのねへ事だぞくやしくつてなりんせんと（東がひざへくひつく）【東】是サよしねへいてへわ（トひさをさすりながら）うそにもおもつてくんなさる心いきは嬉しいかよくくミわけても見なせへよはなそうにもかたろふにも初たいめんから顔を見るとわからぬ事を言ならべて泣てはつかゝり居る物をうたぐるめへ物でもねへなんぼおめへか酒きげんで泣ながら喰付ても本名をあかしたり頭巾を脱て見せらりやうかむだナせりふに氣をもまずとあへねへ湯でも呑なせへ【う】成程よいから酒きげんで言かとおもひなんせうが初や初會の客人ンをたとへしぬほどにおもひたれはとて見さげられるもいとわずにましめで是が言れた事かへそりやァ主でもおつすめへあんまりきつよいト（すゝり泣をする）【東】そこも有レはふたもあるとなれなじミもねへ内にミつともねへ泣上戸はよもやとおれもにらんだがわかつた所が身のはぢだからいつそみれんをのこさうよりとあきらめるより外仕方がねへわな【う】仕かたが有ッたらとふなんすへ【東】ソリヤア聞がものはねへあきたらいつでもけへしなせへとからだをおめへに仕せるのさ【う】かならずその口をお忘なんすな【東】人のていじせうごへしよふよりそつちの土臺から直すがいひ【う】まだうたくつていな

んすかへ實にそうなら居て見なんし【東】居よふと言ッたら其時ハ生醉本生たがへるつもりか【う】しつたかはづかしいなんほしかねへわつちでも主に苦勞もかけいすめへから來なんす氣なら隱さすにとふぞあかして御聞せなんし【東】なんだと天文臺のこんてん木を見るやうにあじにくゝつて迷せるの見へにもおつう挨拶してへか臍のおきつてこのかた脊中にゐんハ有たけれどたぺつけねへ事だからとふも言がいゝ事だから不案内で知れねへからおめへの胸に聞てくんねへ【う】とういへハかう言とッリヤア人にもよりいすハな苦界の道も立引もわからぬやほな事とおもへハ是程くろうハ致しいせんと（ふるい聲になる）年にもめんじてなふらすに少しハあんどさせたつてまさかつミにもなりいすめへにむだ斗り言ておらさすにてへげへにさつしなんすがいひ（ト又さめ／＼となく）【東】泣子と地頭にハかたれねへとこんなこまつた事アねへそんならおれがわるかつたもちつとせかずに落付て言とミんなこつちからいおふとおもつたせりふだものをマア顏でもふくがいひはな紙もたまるもんじやァねへきつゐしやくりたさゆてもやろうか（トたきおこして手ぬぐひでかほを試てやる）【う】モウかまつておくんなんすなお有がたうおすそふいうやさしい主の氣で有ながらなせ是程にも氣をもませなんしたへコウ申しんすうへからハたとへ外に面白深しいわけの色事かあろうともとふぞ見すてゝおくんなんすな【東】もつてへねへ事ヲいふぜよしや外にあつたれ

ぺとておめへの實に見かへさァ女ミやうりがつきるだろう【う】またまよわす事をいひなんす主ァまあナゼそんなだのう【東】おめへかうそにもまようといへべおれも血道をふちあけて居るから恩にきるわけもねへソリヤァおたけ長左ヱ門だ【う】モシヱあしたもあさつてもけへしや申さねへがようおすかへ【東】其場におよんでみれんハねへがそこが覺悟の前乘の紐でおめへの腰にも有事だ【う】ハかつて居るからマァねなんし ト屏風を引 【東】ナゼくらくしたきせるがしれねへ【う】のますとよふおす咄しか有から【東】たつた一ツふく【う】そんならとふとも勝手になんし トつんとうしろをむく 【東】ヤレきのミしけへおかしなねやうたの枕がつてコレなぜ物をいわねへなァ、聞へた五臟六臟を見ぬいたとおもつてモウふくるのかチツト早ィの碁にまけたから將棊でかつ氣かソリヤァおめへの點にやァねへ句だろうマァこつちらをむきな トうれいの肩へ手をかける 【う】ふるへこゑにて ヱ、モウいつそくやしいぞよはらの立よくもいわれた事だのふほれたがわるいとがまんしてだまつて聞て居んすりやァあんまりしねへ事ばつかりちつとハ私が自由にも成ておくんなんしたとておめへの恥にもなるめへに人の氣もしりながらふげへねへ女郎だとおもひなんしてばかになんすかそれほとにもいやならハあれぬむかしとあきらめてたとへおもつてしねハとて呼申さすとよふおすから心まかせせる一ツはい言ィてへ事をいひなんし トまたさめ〴〵となく【東】また

泣か氣のせめへとなりのきやくに聞へても外聞がわりいわな新造子供しやァ有めへし畢竟氣づよくいつたのもきを引て見よふとおもつたからさ何もわる氣でいやァしねへおめへかあじにかんを付るとおらァ山へものほりてへからモウかんにんして泣止な【う】そういふ口の下からもはたらきのねへわつちだとさげすんで居なんすから又もおぢらしなんせうと夫レが苦勞でなりんせんト泣【藤】何ばかなおれだつて氣違じやァ有めへしおめへにいしゆでも有ようにいつまでむだをいつてるもんだあんじられるとれそつちの事だ【う】ヲヤけしからねへ　あれほどいつておきかせもふしんしたにまだうたぐつてかやるせがねへと よひにつがらせし物をまくらはこの引出しより出して藤がたもとへ入るさぐつてこれハ金ゆへびつくりして【藤】うれ氣れ廓のならひといひうそをまことゝみせかけていとしかわいのあだぼれも酒が物いふ世せかいとおもひの外ふ深切れ身のつまりともしりながらどふいふ譯で是程にも【う】たのもしらしいと目についたがかふなるゑんのはしかして親兄弟にも見かへる程にさ【藤】そふいふおめへの心とれしらぬ事とてかんにんしなせへ【う】いつか身儘に夜もすがら枕の上のはなしにて主の爲になる事ならまたの苦界にしずめがとていとう私でおつせんからかならず見すてゝト跡ハロごもりてなく【藤】齒と齒をつげへた中だ物をあんじる筋でも有めとぞへそつちに根がありやァこつちも男だ【う】ほんざんすかへ嬉しいのふトにつこりとわらふ【藤】二三日降てもいひあめがあ

へにく日和に成そうだ【う】ごしやうでおすからもふいひなんすな【藤】コウくすぐつてへどうするのだ【う】きうくつらしい此帯わへ【藤】とかずともなる事だろう【う】マアちつとしてお出なんし【藤】モウなん時だ八ツ過かの【う】アレにハ鳥がいつそ寒いよ【藤】ドレモウひとなきなかそうか

サラリンチヤント鼻筋とふりあつらへたよふなもゝあけにてかりがねびたい髪ハ兵庫にむすひかにの足ほどかんさしをさしまだ内證のせわと見へて緋ちりめんの胴に白しゆすの額へ萩のもようをすり込せ白ちりめんのしごきを〆いたつてあいきやうもの也年わかのおほこ氣ゆへまんざらにもおもわねとさしたる譯もなくかべにもたれながら中腰になつて琴をひく

琴哥

我せこのくべき宵なりさゝかにの蜘のふるまひ見るにつけいとしおとこをいつしかにわすれねハこそおもひ出さす候ゝと神かけて〳〵神にうそなきひよく紋連理とちぎる笄をせめて袂にうらかたのうらみのくずの葉風よりふけ行空のつゆさむし月ハさへても床のやミ〳〵シウコ

コリン
チンチヤント

弾仕舞

【ゑ】ヲヤどうせうぬけねへハ　ト一人わらつているちへさとらうかをとふる　【ゑ】たれた笹野か【ち】イヽエ【ゑ】ちへ里さんかちよつと手をおかしなんし【ち】なんさんす用かへ【ゑ】これミなんし【ち】ヲヤけしからねへゆびのもと迄來ていしさあナ是でよくマアおしらべなんしたね【ゑ】アイサわつちもしりいせんなんだかこんなになりゐしたおかしいのう　トわらひながら中ゆびをおしてミせる　【ち】ヲヤ〳〵いたかァおつせんかへおめへさんもあきれけへッたもんたねつめのこんなになつたもしらすにおいでなんして夫かおかしうおすかへまたおあがりなんしたね【ゑ】さつきしがたます村さんの座敷で【ち】

こまつた物だぞマァちつとしてお出なんしと（よふ〳〵つめをぬきゆびをいわへてやり）【ゑ】おありがとふおす【ち】是りやァ主のつめしやァおつせん違つていんす慥か越原の歸鴈さんのでおすいつかつめとばちを置て御出なんしたつけ【ゑ】そうかねとうりで大きゐとおもゐしたつけ嬉しいのう【ち】何を言なんすやらチットおたしなミなんし人も聞ていゝさァなモシ今おひきなんしたのハ京橋の豊高さんが手をおつけなんした身上りとやらでおつすかへ【ゑ】ソレサ藏まへの粂がお作りなんしたそうながいつそひんかようおすね【ち】ホンニ此中桐屋で豊高さんかお見せなんした夕化粧といふめりやすを御聞なんしたか【ゑ】イヽニ紙子さんもそんな咄しを枯木桝屋でなんしたけが夫レハ村さんがおかきなんしたときおほへてならちつとお引なんし（トいふ所へうれいのが禿なミだちやわんをもつて來る）【禿】おゐらんに御無しんなから新茶ができたらちつとおくんなんし【ゑ】そのどびんこと持てゆきやそしてなそつちの床に三味線があろうからかりてくりや【禿】わつちらがのは此中客人がおやふきなんしたから張替に遣しんしたがまた持てきいせなんだ【ゑ】そんならあさミにあつて床の間のすミに三味線が有から持ッてこひとそういつてくりやよ【禿】アイ（トどびんをさげて行）【ち】おまへさんの客人ハよくお休なんすがどふぞなんしたかへちつとおこし申さうかね【ゑ】ナニサあんまり宵におまんまをたんとたべて心持がわるいと言なんしたからモウちつとねさせ

申がよふおす【ち】ばからしい食亂なこつたのう【ゐ】主の客人ハへ【より】聞ておくんなんし宵からちつともねもなんせんでおゐらんをよび申てくれろとやかましくつてなりませんからそう申しんしたらうつちやておき申せとさ座敷でもこんやハカノニガお出なんしたからのぼせけへつていさつしやる物をどふして來やァなんせんのさト はなしている所へあさぎしやうじをあけて 【あ】方〴〵さがしんしたがおつせん【ゐ】ヲヤうすとんながれつてへ子だのうさつきしがた床の間に置たものを【あ】夫レでも座敷にハおつせん物をたれぞ持ていきんしたろう【ゐ】またかきついぶじやれようだのうぶしつけらしいそんなら花川さんにそういつて見せ三味線でもかりてきなんし【あ】アイト行【ち】そしてわつちがそはに居んすりやァさま〴〵な事を言なんしてしつゝこくつて成りんせんから出て來いしたおへねへ助兵衛な客人でおさんさァナ【ゐ】ヲヤばかげたひつふかな客衆だのうト わらふあさぎ見せ三味せんを置て行そうにする 【ゐ】コレサまだ用が有ルよおれに頼れてくりやそつちハねさしつたか【あ】イ、エまだおきて【ゐ】そんならそこのふた物を持ッて行て今程ハお有がたふおすと歸し申てくりや【あ】アイト 持てゆく 【ち】すかねへ三味せんだのう トてうしをあはせる

めりやす

夕化粧

〽ねミだれし寐着のまゝの身じまひハかわい男のうつり香とうつすかゝみになぞかけてとくおしろいもあだ人のよすがをまちてまゝに身をふりわけ髪ハおのずからわけときくしに二世までとゆふて三浦のかたはづしベカチヤン
【ゐ】いつそおもしろうおすかその三味せんハ何ッといふ引よふだ子【ち】これかへ哥の文句と三味線とミりつちつとやらでつゝかつて居んさァな【ゐ】おやうだん言ッにおしへておくんなんし【ち】一寸といつて來んすからお休なんし【ゐ】そんなら後に【ち】アイ　ト出行ゐかほの禿笹のきたる【ゐ】座ヲヤめづらしい今迄とこに居たこつたの【筈】ます村さァのつかひにかとの海老屋まで【ゐ】座しきの用もたさねへでいひ氣だつけのう　トわらひながら　そこいらをかた付たら火を入て水を一ッ持て來や【笹】アイ　ト笹の琴三味せんをかた付ケもじとだなよりにしきでの水のミ茶わんを出して行ゐかほへ床へは入ツてたゞにこ〳〵わらつて居る笹の火入レと水を持つて來て枕元へ置【ゐ】行て寐や【笹】アイト　出てゆく【ゐ】コレサてめへの袖を見やまたくるいなんしたの【笹】今いさめとんが【ゐ】久しいもんだよ下へ行つたらお針さんにぬつてもらつや　トたはこをのミつけ　モシヱのミなんせんかチットⅡをさまして咄てもなんしよく寐さつしやるのう　トゆりおこす新交ハがウ〳〵フウン〳〵とねうなをして　ア、またおれが所かヲットコレハふさりのむきミやかいの柱でハのめん〳〵のめんをかうむりまして一ッけんじ物語ハとうでこぜへす新らしいか〳〵ゴッ〳〵【ゐ】ヲヤいつそいやたよきミのわりひねことをいわッしやるそふなおかしいのうちつと聞ふハ　トよきのそでへかほを入レル此とふりにしてあいさつをすれへいつまでもねごとをいふ也新ハまた口なめすりをして此所かけ合ねごのしやれ紙かず一丁半御座候得共丁數のおゝくならん事をいとゐてこゝに畧すおつて後へんに御目に掛可申候【新】ムチヤ〳〵〳〵とねがへりをするはずミにゐがほがゆひたけるよぎの袖よりかほゝだすひやうしにまくら元の水をこぼす【ゐ】アイ

タ：：痛(いて)へのひをいためさつしたよァハ〳〵〳〵ト わろふこへに新へめをさまし 【新】ごつしよりあせになつたト からだをふきながら おゐらんでへぶ御きげんたの【ゐ】ヲャ御きげんもよふさんすね人のゆひをいためながら【新】ナニうそをわつちがかへ夫レてもおめへ笑(わらつ)て居る物を【ゐ】おかしくなつくてとうするもんだへもちつとお言ィなんし寐言(ねごと)ヲサ【しん】おらァ大きにうなされたよしつたらナセお起(こし)てくれねへ【ゐ】夫レても何かおもしろそうでおつしたから夜着(よぎ)の袖へかほゝ入てあいさつをして居んした【新】なるほど嬉しい心いきだおこそうとハおもわねへてあんまりしねへうらみな物だせ トまくら元を見て ヲャ〳〵枕元か海のよふニなつて居る是ァ水か【ゐ】せつかく呑(のむ)ふと思ものを ト枕元を見て ヲャおつだのう【新】おめへもふかうとハしねへでいひ氣な物だせアノまん中にある黒(くろ)ィ物ハなんだ【ゐ】あれかへ主の頭巾さ【新】ナニそりやァとんだ事だ トとりそうニスル手をおさへ【ゐ】マァうつちやつて置てミなんし鯨(くじら)のよふで面白(おもしろ)うおすハな【新】コリャアそれさせるぜおれか身にも成てミねへつきんを一ツぽうにふつたそしてこんなちいさな鯨(くじら)かどこに有物だ【ゐ】夫レてもねてんぢよこから品川をのそいてミいしたらこんなにちいそうおつせうよ【新】有かてへ事をいふもんだ古金買(かい)に見せても禿立か物ハあらァまだおめへ鯨ハとんな物かミた事も有めへに【ゐ】何わつちやァ持つて居んすかよく風をふきんす【新】おめへも何をいふやら

汐こそふけナニ風をふくもんだ【ゑ】夫レてもよくふきんす物を【新】そんなら見せな【ゑ】篋のに遣しんした【新】ソリヤア團扇しやァねへか【ゑ】アイサ其鯨がよく風を吹んす【新】いゝさおめへのが尤だからかんにんしねへいめへましく人ぢらしな子たぜ トわらひながらたばこを付てだす【新】コリヤアいひたばこだ貰たのか櫻丸か【ゑ】櫻丸といへ【新】自腹を切つて買たのか【ゑ】馬鹿らしいわつちたとて多葉粉まて貰いす物かへ【新】そんなら久松だろう【ゑ】わかりんせん何の事だへ【新】小買だろうといふ事よ【ゑ】おがそんすよくぶじやれさつしやるの 新交をわらいながらせなかを二三ツたゝき チツト日ヲおふきなんし【新】また何かいひ出したせ時ならねへ時分に目をふかして路で又わらうのか感應寺の櫻しやァ有ルめへしめをふいたがとうした【ゑ】目やにが付ていたからさ【新】おめへ酒を呑だの【ゑ】匂ひんすか【新】顔をミな赤またらでぶちになつた【ゑ】ほんにかへ嬉しいのう【新】とんだ事を何かうれしいの【ゑ】ぶちになりんしたから【新】ゑゝかげんにばかをいつてわらいねへ泣よりましだけれと勝負が有せ とおきろ【ゑ】とこへおいてなんす小便にかへ【新】ム、、【ゑ】そこの上ぞうりをはいて行なんし【新】ナニいひ【ゑ】ぜうのこゑゝ足が穢れんすから【新】めんどうだ ト出そうにして エ、いめへましい付た【ゑ】どうしなんした【新】つきんを踏だ【ゑ】それ見なんしいわねへ事かへ トふつと吹だすトはちの灰がそこらぢうへふきちるゑがほ袖

であたくひやうしにあんとうの火かきへるとたに【新】ハわりこむとヲヽあついのこへ斗り諸君子ソレ御さつし夫レに引かへ鉄が床ハへわらつてつゝき日もあれハ泣て嬉しき夜半も有蚊やより外に紙ひとへまかせぬ身とて胸の苦を合いふにいわれずぐる〳〵まきの夫レそのみのかずト

鉄ハまちかねて枕ふきせるでたゝきながら上るりをかたつて居るあいテの女郎腹橘としハ廿がのぼつて一ツくらい洗つたまゝの髪をわらでいわへみす紙で露止をして二枚ばの櫛を耳の方へちよいとさし横に目の切た如在のなきかほつきにて男ほれするうわきな風ナリ茶かへしちりめんぶんごあられ黒七ゝこのはんゑりをかけ客にもらつた花色しゆすの男帯を〆わる紙を持た手づまを呉やうしをつかひながら茶てぐわらりと足でせうじあけ

【は】馬鹿〳〵しいまだ寐なんせずによる夜中何を口こゞとを云なんすのだ【鉄】こゞとしやアねへ手めへとおれが心いきをかたるのだ【は】おゆるしなんしごせうだから今も廊下へ新造衆かあつまつて言なんすにハ腹橘さんの客人ハ何かぼく〳〵たゝきながらうなつていなんすがヲンアブキキアがきたよふだとみんながわらつていゝさァな外聞のわりいてへげへにして寐なんしそしてマァ何いふ氣てきさつしたのう【鉄】どういふ氣といつて手めへもうらミなもんたぜこつちへくらげへもする程の譯なら咄も有たらうに一寸と一筆しらせたつて腹か立かおれかちつととうざかつたとてそう氣をもんでてねる事ァねへマァ下にいやな【は】ヲャ人間のいひ事をいわつしやるおいておくんなんし御禮から先へ申んせうつれへこつたぞよ【鉄】コレわるく我慢をいつてぢらさすと久しぶりだきげんをなをしてちつとわらい顔をミせやな【は】

おきのどくだつけねそう主に主がほれて居なんから了簡が違いんさァなわつちがほれたのはれたのとでも言やァしんすめへしひつきやう河岸に居る内呼申たも一座も大勢御出なんすから主斗り來んせさァ友達衆へ外聞もわるかろうといらざるわつちがごせう心が有ただけ恥もかゝせ申さずにくけいな事とあきらめて呼申てあけんしたがこつちへきてハぎりもへちまも入りんせんからかならず來ておくんなんすなさら／＼御如在とハおもわねへからかつてな所へ御出なんし今夜だつてもそうさうす外聞のわるいなんぼ初の顏で居さしつてもみんなァ横に目か切レておめへのよふにうすのろかァおつせんよほうばい女郎衆いまへといひわずかな事をかなしんで近付にならねへと若ィ衆につもられるとこも恥かしうおつさァ成程夫ァもかわるゝと思ふ男なら三分四分の都合もして顏の立やうにしんせうが何ゝのよしミか有て主に立引をするもんだへあつかましいよくもお上りなんしたね【鉄】そふ何も今夜にかぎつてあいそつかしを言はづれねへがおゝかた外に色でも出きたかと京の大佛しやァねへがやけてふてるかそふいふ無情なおれでもねへ咄せバわかるからチット寐さつし【は】かんにんなんしねるとがハしんせん【鉄】むせうにふくれてはらを立がまた酒をのんだか【は】呑ミやァどふするへきついくろうせうたつけね今琴浦さんのとこで座せん豆をになんすとつてふた茶わんに酒か一はい有たからそつとか

くしてのんで來たのさ主ものミたかァこんとにる時お出なんし【鉄】なんだとあしにはぐらかすの手めへもわるひ酒だぞほれていゐならほれてるやうにだまつてねやな跡で又あやまろとおもつて【は】エヽおいてもおくんなんしいつそ聞たふうたよなんぼ酒によつたとても心におもハねへことをいふ物かへそりゃァ女郎が違んす（トいふ所へちへさときた）【ち】おいらんあざミハ参りんせんか【は】いゝへ【ち】客人か何かたの頼ましつたそうなが馬鹿な子だどこへいつたのふ（鉄へきせるの雁首で多葉粉ぼんをひきよせながら）【鉄】あさミの馬鹿ハ今そこに（トすいつける）【ち】平氣でおしやれなんすハ主に似てさ氣しよく玉たよ（ト廊下をはた／＼かけて行夜鷹もゆかうとするすそをとらまへて）【鉄】ナゼゆくのだ【は】ぬし達のやうな客人にかまつて居るひまはおつせんハな用か有からおはなしなんし【鉄】そうあるそづかしを云事ァねへしんな咄が有からマァすわりやナ【は】聞すとよふおす今云ゥ通りの譯だから早くおかへりなんしじやなほかの客人が大事だハ【鉄】でへふわりやァ欲氣がでたら主おもひになつたの夫レ程いやたとおもならなぜ又こゝへうしやァがつた【は】いつまて主をまよわせてもわつちが後生のしやまに成ろうとおもひすからいんぐわをふくめにちよつと來たのさ【鉄】いまさら何ンたとはつつけべへためそういふくさつたこんぜうたらすへハ女房とぬかしたも【は】夫レハつとめのすて言葉さ玉子の四角と傾城の【鉄】誠からでたうそで有たか【は】アレまだの

ろい其かほへぐちな事をいひなんすな【鉄】いかに商賣がら見れバとてあれれぬようにもなつたられしねしのふと迄ぬかぬしやアかつたを【は】わつちもその氣で唇を見たら目がわるひからおとゝい來なんし【鉄】モウ了簡が（たはこほんをふりあけるをきせるですそをはらわれて鉄ハとつさり尻もちをつく腹極ハろうかへ出てせうしをたてきり）【は】おさらバよ【鉄】ホイ〳〵チヨンチヨ〳〵〳〵柏子幕

跋

誠と云字ハ言扁に書ス。嘘といふ字は。口扁に書。されば嘘と。誠も口と言より出て。腹の中にハ。無きものと知れど。富久亭が腹中は。娼妓家の樂屋にて。野暮も醉に早替。魂膽の廻仕掛。やりくりの引道具。口舌の仕組まで。部屋の玉帳に〆上たる。獨稽古といふ小冊を綴られしに。予も。葭の管から天井を見んより。此。江戸ッ子の穴門を覗て。胸算の置所を知り。惡玉の桁をはらつて。善玉を加へる手管算用の。差引殘て割あまりし。壹枚半の白紙を貸　勘定合て足らぬ智恵で

如柳コヽニしるす

後編 跡著錦(あとのにしき) 全

三笑作

小本一冊近刻

辰巳妓張(しんしきほり) 全

同作

小本一冊

珍らしき新板諸品追〻出來申候御求御覽可被下候

祇園祭姚銳藏

南驛祇園會 桃燈藏序

南天低が故に南斗の辰不見とも。南驛の七曜九曜眞向の柱に顯。一名を大小と唱ふれバ。芝の舘の新五左衛門腰を離さす。將此〻百萬篇の形に等しけれバ。山友法僧金をならして花を散し。供養の施を採て九曜に送り典家を口說て七曜に通ふも宜なる哉。大師歸りの客へ忠臣藏とともに見附られたが百年め。紋日の痛事をくらひしも當時自腹を切せし敵ならん歟。矛此驛の闇が故に天王夜宮の桃燈藏と号其明りをかりて云ふ事しかり

きやう和二階の

見通しをこづのえに

いぬの春

蘭奢亭香保留述

序幕　館の奥向

二立目　鶴ヶ岡馴染

三立目　裏家堪難

大詰　遊里の出會

祇園祭挑燈藏

蘭奢亭主人著

初幕

太平記の其むかし鎌倉扇ケ谷に名にしふき鹽谷判官高定の奥方かほよ御前の御舘にハ局中老針妙腰元トお末御中居たもんまでミなそれ〳〵のミやづかへひまのおりには打よりてはなす咄しハいつとても寐起から芝居ばなしの長局 といひしもことハりなり五六人あつまりて評判記の封きりをして

【いろは】ちりぬさんちよつと御らん中車ハね大上〻吉の上に至といふじが付ました【ちりぬ】ホンニ只今でハ訥子ハなくなりましたからもふ橘屋よりほかに役者ハござりません去年梅の由兵衛などハ宗十郎よりやァかへつてよふござりましたよ　トいふハ宗十郎びいきがちからをおとしたのへわざとあてゝいふ　【やまけ】なんとでもおつしやいあとつぎに源之助といふがあるからようござります　至てひいきにて宗十郎病氣ときいて塀のうちへ百度参りをし死だと聞て精進を廿日ばかりせしへおかし　【らむうゐ】わたくしやァ路考がすいておりますおとゝし迠勤ましたおやしきのおくさまハきつひ御ひゐきで召物にもお道具にもいつそ氣ばかりお付あそべしたそしてよく似ていらつしやひましたョ【あさき】ほんにかへらむうゐさんわつちやァ粂三がやうござりますよァノ粂三とのぼつている米三とハどつちがよふござりませうね【ら】されバねへ【あ】

祇園祭烑燈蔵

四

祇園祭挑燈藏

五

そんなら粂三と富三たァどちらがうへでござりましやう【やまけ】そりやァしれたことでござりまさァ富三がうへさ【あ】それでも粂三も今じやァきくものでござりますよ　此ときしりおしがあるとまつ黒になつてあらそふたちなり　【や】これ〳〵ごらん女形の巻軸ハ巨撰でくにやハ路考がつぎにゐます　評ばんき三さつあるたまんがちに上中ととつてミると京大坂にて一向知らぬやくしやゆへ江戸の部ばかり蝿のたかつたやうになりて見る　【ら】ほんにねへいまハよくなりました　トはなすところへワりこミて　【ゐひも】わつちらがほうの太夫さんかへよくなるはづでございます第一親孝行でそして信心者さわつちどもの隣うらだから朝晩ミやすがとんと女のやうでござへます　トいふハ墨吉町へんに近ごろ住しおはしたの新参なりけるがいつでも芝居のはなしといへバたんどとりになりたれバどこにいて實名と家名ハなんといふあれハどこにいて女ぼうハたれがむすめで子がいくたりあるなどゝいふことをくハしくはなすなれど町ことバなたらぬ故かげでハ大にわらくいハれるなりたり　ふしこしもとのおかるらうかを通りした　【山】おかるさん〳〵ちよつといらつしやいまし【おかる】何でござりますへ【山】おまへさんの御ひゐきの瀧野屋をごらんじゆひくだつたじぶんなぞハ三座でひつぱりだこでござりましたヨ【ゐひも】ヲヤおまへハ大口ばかりおきくこだよ【山】なにをわたくしが【ゐ】それでもひつぱりだことい丶なすつたもの【山】ヲヤけしからねへこの子ハすけべいなこだ人の氣のつきもせんことを【い】ちつとよんで見ませうこれごらん褒美が付ております【頭取】白猿丈の御お勤珍らし丶しバらくのお立かくへつ花やかにてよしのちに六部にてせり出しのところ大當りヲヤこ丶に三かくなものと升といふじがあるがなんとよミますね【ゐ】　さし出て　そりやァ評判記にや

ァいつでもある字でね御座りますといふときに△なものと升といふ字をかきますこりやァ休の作者のつくるものだからやつぱり大帳にあるとふりの字でございますまへ方とちがつてわる口がねへから面白くござりやせん此繪のところが本のとほりでかうだかわれごと立ものゝ役者ハやかましうござりますとさそれだから作者も骨が折やす私が宿へまいつたらつくりの所で（作者の事也）正本をかりて來ておめにかけやしやう正面ハ本舞臺三間に二重ぶたいといふハ一だん高くなるところさ（こんなまじめできいてゐるによつてしれたことをくハしく出ス）兩脇の柱が大じん柱らかんの下がおく病口ァノぶん廻しといふハ十四五ねんも以前ハあゝでハなかつたが廻す時しくじり〳〵して首にされるものができ〳〵したから（ひやあしといふこと也）今じやァ下を丸く切ぬいてまハしやす唄やはやしをつけることを下座へとると申ます今じやァ市紅さんがとんだ舞臺がやかましいそれでも訥子さんほどでハねへ（二丁町ハ座頭のことゝかげでもさまづけにいふ口くせになりてはなしにのつていふ青樓二字をさまづけにいふに同じ）【ら】久しいものさ御丁寧に様づけにいひなさるよ（トのまになつてきているうしろからふとつたかこだをおぶさつたよふにしてきているゆへ下にいるいろはおもたきゆへいきんだこへで）【い】ヲヽおもひわなどなただヲヤあさきさんか此間へはいつて御らん（トあいだへいれる）【よたれ】いろはさんわたくしやァモウ〳〵此やうなうれしいことハござりませんよァノふん結びをいたしたら荒五郎とむすばりましたわたくしやァ守り袋へ入レてしまつておきますヨ【い】ヲヤおまへ三津五郎がひゐきでいながら性わるだよ【よ】イヽエ

わたくしやァ荒五郎にいたします【ら】ワたくしどもハそんな性わるじやァないよ雛介がしんだから此ごらァひゐきなしさおし付團十郎にいたします【よ】ヲャとんだ年のちがつたそれじやァお半長右ヱ門じやないおてう半右ヱ門だヲ、、、、（トつまらぬことをいふとかくワがていしゆかなんぞにいふもおかし）【い】ワたくしが大切なものをおめにかけよふか【ら】なんでござりますへ【い】これごらん下に中車とよ（トいふへ中車がちよつとやつた口上書也）【ら】ちつとおミせ（トとりにかゝると）【い】アレかミがもめているから。いたミますよ（ト大事にたゝんでしまふ）こりやァわたくしやァいのちにかへて大事でござりますよ【ゐ】おかるさんハ瀧の屋の處ばかりごらんだよもし此役者にお表のおかたをひきあわせたら新車ハどなたでございませう子【あ】マァお中小性の勘平さんさ【ゐ】さやう／＼御家老様の御子息さんハよく團三郎に似ております【あ】かあいらしいおワかいしゆさんだねおし付桃井様の御家中から御新造がござると申ことだね【よ】さぞうつくしうござりましやう【山】彌五郎さまもよふござります【ら】アノ郷右ヱ門様ハきつひ山科さおやゝちでもお氣がよいからよひが九太夫様ハにくらしいおやぢだねマァ役者でいはふなら三八か友藏といふもんでござります【あ】親に似ぬ子は鬼子とやらで定九郎さんもいつそ胸わるでござりますよたれでよろしうござりませう【よ】さしづめ高麗藏でござります【ちりぬ】（かたワきにいたりしおこまぞうだいきゆへさし出て）イエ／＼とんだことをおつしやりますこま

藏はあのやうじやァござりませんものをさしづめ勘平さんさ【ゐ】イヽエ勘平さんにやあ男女藏とあてゝおきましたものウ子エおかるさん【か】にっこりわらつたばかりだまつてゐる【ち】イヽエなんでもかうらい屋さ トあらそう【ゐ】イヽエ勘平さんは氣性迠似てお出なさります私どもは瀧野やかやうな男をもつと一生手鍋を下けても水をくんでもいとひませんヨ【ち】わたくし共はこまがやうな夫なら三度の御ぜんを二度だべてもよろしうござります【ゐ】おめ藏なら一度でもよふございます 何かたわひもなきあらそひをしているおかるはきむすめゆへおめ藏がひゐきなれども勘平ににているといふによつてはづかしがつてだまつてゐる【ゐ】おかるさんおまへさんは御ひゐきでお出なさりながらだまつてお出なさるとはござりませんはな トいふうち何か用があつて立拍子にちらぬがかゝへ袖がさはる【ち】ヲヤけしからねへ【ゐ】ホイ御免ヨ トいつたばかりでゆくさしたることもなけれどもあらそいの跡故はらを立【ち】ふけへきなつとをいつそだいなしにしたぞんざいな トなをす【ゑ】へせうじの外にてこれを聞【ゐ】そさうだから御免といふのに其様に腹を立チなさるとはないわな【ち】おまへはいつでもそうだ夕部も私のまへにあるむべ山をまんがちにとんなすつて手をひつかきなすつた【ゐ】それでもおまへのやうにすご六のとまりのところへあたると飛越ておいたり何やかやはわたくしどもはしませんよ【ち】いつわたしが トかにをあかめていふ【い】モウよいわなゐひもさんもだまつてお出な【ゑ】へしんざんだにちとおしやべりにてにくまれるゆへいつでもへこまされる也【よ】わたくしどもの宿から參りました トいふはやどからさつまいもとうなすのきたのなり【い】ヲヤこりやァおいしそうだ菊座とやらでご

ざいますね【あ】コレハ晩のおよながのおかづにおかゝをたんといれて旦那さんへ差上ルがよふござりませう【い】おさつハおしたじよりおむしで煮るがよろしうござりますョ【ゑ】ヲヤ大きなのがございますよく龜の子のくびに似ておりますト　トいふきゝにもつている【い】ヲヤとんだことばかりたべものをそんなとをなさりますな【ゑ】わたくしやァおとうなすがいつそすきでござりますョ【あ】お唐なすをたんとたべるとよい〳〵をわつらいますと【山】わたくしどものだんなさんハ明後日おやど入だとおつしやりました【ゑ】そりやァおたのしミでございますねお宿ハどこでございす【山】私共の旦那さんにお宿といふはござりませんおしたでござりますおまへハいつでもお宿といひなさる　いはれて【ゑ】ハだまつている【い】いく日のお暇でござりますへ【山】たつた四日さ一日は堀の内さまへ一日ハお船また一日ハさかい町あくる日が羽左ヱ門其翌日ハ木挽町ヲヤそれでハ一日日がたりませんどふせふ　トあんしるやゝあつておくよりだんなさまお歸りにゝなてん〳〵の部やへゆく

二立目

ある日おかるハ中老やく病氣故つるが岡八まんへ代參として【ゑ】【あ】をつれて革ぶくろをかけたり札にもへぎのわたうちひもをつりたるおやじふろしきづゝミをよこにかたげはるか跡へさがり雪の下の廣小路をとふりしが折しも彌生の中の五日八まんゑん日のことなれバ往き來るさの人繁く中にも

鷺坂伴内の伴廻りなまこゑりの合羽の袖の長きかんばん着たるもの四五人いづれも供まちにくたびれて居酒屋のたちのミにまハらぬ舌もまハり過たる酔きげんにて向ふよりきかゝり

【熊】とらや見やむかふへどうけつな椎茸たぼがくるぜ【虎】さきのしんざうハごうぎだ身くるミ賣たらしつかりあつたまるべい【丑】年一ッぱいじばづめぐらいきくへい（二十兩づゝといふ事也）【馬】今どきそなへにいくもんか　れこけんぐらゐがいつへへだ（十五兩づゝのことなり）【熊】あんなやつァ玉にきずで刀豆枳のおそれでもあるもんだ（女郎やのかゝへる時てんかんの病をミる事也）【馬】コゥあとの女ハすてきにふとつているぜあんなやつに辻ですべられると立場まじやァのつきれねへ【丑】うさァねへアノおはしたの名ハたしかに。みやしげともいふだらう【馬】ナゼ【丑】足をミやな尾ハり大根のやうだ【馬】おきやァがれてめへ聞てミや【馬】おれがきいてみべいト

よほど行過けるが立かへりこミあふ巾をおしわけて供の女の尻をたゝけバわつといふてあはてゝミな〳〵ちり〴〵ににけ走ルもとわりなれふてきなるかなおかるをとらへなふりしが今はにぐるもあとさきしれぬとうわくに思ひがけなきふかあミ笠のさむらゐかの悪とうのきくうでしつかととらゆれバそれをミるよりみな一同にとつてかゝるをうけつはづしつかひくゞり左右にかゝる兩人を三間ばかりもなげけるハ心地よくこそ見へにける此手なミにやおそれけんミな〳〵ちり〴〵ににげさりておかるハほつとためいきつきよく〳〵ミれバ

【かる】あなたハ早野勘平様【勘】これハおこし元のおかるどの見れバお供もなしいかゞのことでな【か】いまのさハぎでミなとこへかにげました　トいふうちともの三人はおかるをうしない中丁のほうより欠くる　【ゐ】ホおかるさまこゝにいらつしやりますか　トかけよろ　ヲヤ勘平さんあなたハどふいたしてこゝに【か】今のなんぎをあなたのお影でやう〳〵とのがれたによつてよくお禮申てくんな【ゐ】それハ有がたふそんじます。まづおけがもあそばされずおめでたうござります【勘】サはやうお歸りがしかるべし拙者御同道にてハかへつてよろしからずはるか跡より見おくり申べしまづ〳〵おさきへ　トいふに【か】ハさきにたつてふたりの女ハ左右をかこミ跡にハ男一人さもこわそふにかたまつて行【勘】ハ一丁ほどあとよりゆく道の四五丁ほども行うちふりかへり〳〵見るふたりの女ハこわきこともだん〳〵わすれ

【ゐ】今おまへさんハどうして勘平さんにおあいなさいましたへ【か】どうしてあそこにお出なされたか。あなた御りきりやうを見てわるものハ早〻にげたわいの【ゐ】其時を見たうござりましたね芝居のやうでございましたろふ【か】イヤモウわたしやこわくて〳〵それどころでハなかつた【ゐ】またふりかへり　あれごらんとんとあるきふりならかたちならとんと瀧の屋に其儘でございます【あ】ほんにいきうつしだね【ゐ】モシおまへさんも日頃ハお心で思つてお出なさるお方に難義をすくつておもらい遊バすといふもゐんとやらでござりませふこふいふ時でなければ勘

平さんにとつくりとおあひなさることハなりませぬいつそ此さきにお出入の小間物やの所でまつてお出なすつて今の御禮をなァとつくりとおつしやりませ　トにつこりしながらいふ　【あ】こりやようござりませう　トそばからこやす　【か】それだとてわたしがどふして　トはいへど少し思案　【ゑ】ハそことハ　まことに八まんゑのお引合こふいふ首尾があるものじやござりやせん　【あ】ほんにまたとハござりませんあとでこうくわいいたすものよのふゑひもさん　【か】それでもわたしが口からャァ　トいゝきらぬうち　【あ】そこはわたくしどもにおまかせなされませ　【か】ああいふおかたいおかたひよつととくしんなさらぬときにハ　【あ】はてさあなたもまだおひとり身のなんにいやとおつしやりませう　トむりにすゝめううち小間物やのまへゝくるいつもよううちなれバ　【亭】かどへ出て　おめへさんがたハ御代参にいらつしやいましたかおはやいお歸りでござへますマァお上りなせへまし　おかるハ二かいへ上る【ゑ】ハ小用がしたいをやつとこらへてきたるゆへいさゝかかまへず手水場へゆきはしらかすことあたかも瀧水のごとし【あ】ハ門口にたつこいて【勘】かくるをみてよびこみ勘平至てかたい生れゆへゑんりよしてゐるをむりむたいに手をとり二かいへ上ル【か】かべのほうをむいてくわいちうかゞみを出し口べにをさしてゐる勘平をみてはづかしき思入【勘】ハにこにこと手すりのきわにじきすわる　【あ】勘平さんあなたにちとおねがひがござりますどうぞこちらへいらしつて下さりませ　【勘】イヤこれにてくるしうござらぬしてねがひといふハ　【あ】ハイトいゝかねてゐる　あのゑひもさんハ何をしていなさる　ト下をのぞく思いれある　【勘】サァ其ねがひの筋ハな　トつめかけられ　【あ】ハイアノウ　おかるさんが只今の御禮を申上たいとおつしやります　【勘】イャ禮いはるゝにおよバぬさしたるぎでもござらぬに其用向ばかり

なら拙者お暇もうす　ト立んとする所を袂をおさへ【あ】マァお待遊ばして下さりませまだ外に用事がノゥおかる
さんおまへさんハそちらばかりおむきなすつてゐてハすミませんマァこちらへお出なさりませ
トむりやりに【勘】がそばにすへる　【勘】外の御用談の義ハな　トかたくいはれて二人いゝかねてうち〳〵する【勘】へむつとせし顔色にて　イヤそこ元方ハ我〳〵を
てうろうなさるの事によれバ女義とハいはせぬ其ぶんにハなりませぬぞ　トしかられて二人ハきよろ〳〵とんだ事をいゝたしてあとへも
さきへもゆかぬところへはしごばた〳〵【ゑ】ハはすはな生れゆへずつと出て　もし勘平さんあなたハ其やうにおかたひ事ばかりおつしやります
此お子さんハおまへさんにこがれて此ごろハしよくじもろく〳〵あがらずどふぞよい折をミて
ふミなどあげたいとおつしやりましたがおかたいおやしきゆへ夫もならずけふこそ神の手びき
の縁の糸どふぞほどけてやさしいお言葉なりとかけてお上ケなされバ薬よりはやいきゝ道のよ
い御情アノお子さんをたすけるもころすもおまへさんのお心ひとつ　トいわれてすこしやハらぎ　【勘】そりやな
るほど色慾に心なき者ハなけれども奥がたのお側近きおかるどの市中において勘平と蜜通いた
せしと人のとりさたもはづかしさすれバおかるどのとてもわれ〳〵とても事済ぬぎなれバ御し
んせつハ過分にぞんすれど此義斗ハ御免下されい【ゑ】かうしてわたくしどもより外に知る人
もなければ人にもれることもござりませぬ　少しやわらかこゝへ付込て　もし又いやとおつしやれハわたくしども
二人ともにお屋敷へハかへられませぬおかるさんとても生てハお出なさられませぬ此三人をお

すくゐと思しめしどふぞ御返事ばかりもおねがひ申ます【勘】これハめいわくなさいぜんのやうなる狼藉を追拂ひくれよなどゝのおたのミハいかゞにもいたすへきに色道にふけるとみだりにあいさつもいかゞなれどもそこ元ト方申出してひくに引れぬことなれバ是非におよバぬ返事ばかりハ兎も角もいたすべし トいふちはやくおかるたそバへよせ【るゐ】エヽやぼなお子さんだ トいゝすてゝ二人りハ下へおりる

さすが岩木ならざる勘平おかるが容色うるハしければむげにもならずなれどもちかひのことばを聞生てハ室を同し死てハ穴を同うすときせうさいしよりかたきちぎりぞこめにける【か】ハ帶をとき二かいの上り口の手すりへかけるこれハ下より人のめつたにあがつてこぬやうにしらせのためなり出合をするときのあなと見へたり評をしてミればこゝいらハおぼこむすめ敵しりそうもないものなれど部屋がたにて聞て知つているところハよつぽとちよさいなしやゝあつて入相のかねも間ちかきにおどろきくれ六ツのかね打きりてハ門内へはいられぬ身なれバ早々にしたくして勘平もろとも小間物屋を出けるがいぜんの伴内が供廻りおつちらされしをいこんに思ひ日のくるゝをまちてゐる所なれバ十四五人一同に打てかゝるうけつはづしつはたらけどもおかるをいとふひまをミてうしろより三四人とびかゝる中にもめつぼう彌八たねがしまの六狸の角とミへさきにすゝんで打てかゝれバ多勢に無勢ふせぎかねたる其ひまにおかるをとらへ彌八が内へつれゆきける

三立目

ながの病のひろき住居にひきかへて町の名さへも高砂のうらの長屋もむねわりに一間せはやとそんじも

よらぬおかるがなんぎ勘平がことのミ思ひしらん〳〵ふれる涙あめ彌八ハうりしろなさんといろ〳〵だませどなく斗にて中〳〵とくしんせざりければ手なれぬ水をくませめしをたかせしゆへ手足あれてうきなんきこそ哀也ある日彌八が留主になりしかおにの女房に鬼神の

【おきつ】このあまアなんだ此飯のざまアそろかたつきしなま米だこねへな飯がくらァれるもんかきのふといへばづぶ粥のやうにたきやァがるしコレなぜこねへに高へ薪をなぜしこたま〳〵くべやァがるアレそふいふのにまだ（トふき竹をふんとけせなかを二ツ三ツつゞけこたゝきければ）【か】（わつと泣ふし）御めん遊ばせ（トにげだす足にからまりてそれにあふちやわんをわりければなを〳〵はらをたちおつかけ出しがおかるハはだしのまゝとなりのうちへにげゆきけるとなり女ぼう）【おたね】ヲヤまたおかるさんをせつかんかマァ足をあらひておあがんなせへ【か】どふぞおばさんおわびを遊ばして下さりませ（トなき〳〵いふ）【き】（ハすましたかほにて来り）此かァどふしたもんだわつちがわりひことでもいつてきかしやァしめへし内へけへシなよおばさんおやかましうござへやせう【た】なァんにおたげへだものを（児女ぼうちよろ〳〵と夫にけんくわをして近所へせわをかけるゆへなり）もふ堪忍してあげておくんなせへわたしがおわびだおめへよく氣をつけなすつて姉さんのいゝなさるとをきゝなせへマァきゝへけへんなすつておまんまの支度でもしなせへ【か】ありがたふござりますト（先へかへる）【き】（あとにて）おばさん聞てくんなせへわつちやァもふせはがやけて〳〵なりやせん（ト口にはたしかめていふ）あれハちつとはけのある妹だから（トハはらかはりのいもうとにしておく也）どふぞ仕つけでもしてやら

うとおもやァてへ〳〵じやァございやせん【た】こんだうのはなしじやァそうでございやせうしかしあの子ハきりやうハよし人がらといひとんだェ、子だ末始終ハおたのしみだ【き】なァにおめへ去年も伯父御のほうから奉公に出したがいゝへねへで出てきやしたそれから内のめへもきのどくさ　トはなしのうち【た】ながいきせるへたばこをすひ付て出す【き】ひいて鼻から出しながら　きのどくといへバ表の合羽屋のかミさんねむせうに人を引こんで楽ミかけたがとふ〳〵亭主にとゝまつたそうだがェ、見世物だわ　トはなしているところへとなりの女ぼうはり物をしていたりしが此噺ごゑをきいてきたる【おむし】おきつさんよく似た噺があるものだ新屋の雪踏やのそれひきずりかゝァね桐屋の政さんにくつゝいて此間うゝられたそうだがかねをおとして志んぞうで出るとさよつぽど皮があつひね【き】ほんにかへどけへ売れたね【む】新丁へ出るとき直しやの大さんがきのふいつたそうだがうらをつけていつてくれろといつたとよ　またむかふの女ぼうこたつへ首たけはいつていたりしが此こへを聞てくる【おそけ】おばさんの所らァあつたけへねへ　トこしをかける　夕部向ふの[大]やのおすミさんが大さわぎさ御亭主がやき餅をやくとつて火ばしでくらわせると真黒になつて腹を立やしたそふするとそばからたき付てがあるもんだから大おこりでまつかになりやした御ていしゆもそれにかまつて度ゝ手をやいたもんだからとうくへのいて居るとしめへハ水かけ論さなんだかけふハ火のきへたやうでござへす　ト人のうハさはかりべちやくちやとはなしている所へ五分ざかやきにひとへおびさらしの手ぬぐいかたにかけ来るハたねがしまの【六】ごうぎにおそろいた

ね【み】六さん夕部どけへいつた　トいふハ六にちときのある故やく心持にていふ　【六】ナニ夕ァハひやかしにばかりいつたが女が立引をしやうといふからぶつゝかつたのさ【み】いろ男だねェ【六】ナァニゑゝちく生だァなよつぴてへしやくがいてへのけつがかいゝのとつてしかミ火鉢をいびつな鏡へうつしたといふつらをしていたァな【み】それでもおめへハ目がくぼんだ【六】とんだことをいふこれ見ねへな　トはだをぬいてこせるとうでにハへたにほりもの　おとてへ吉にかいてもらつて鉄にほらせたがまだふられていらァなあやかるといふからがまんしてけへつた【き】ヲヤいたかァねへかへ【六】なあにいてへもんか酒を壹升ひとりでかつろうつて夢中でほつてもらつたいせひがェヽじやァねへか　トはだをぬいだこしのあたりをミせて【み】六さんいやミな非だりのいもじだの【六】これかこりやァ去年しやがのさかへめへつたときのさモゥあさか山でなげやうといふいろになつた【み】うさァねへわつちにくんなおめへのいもじならそめて頭巾にすらァ【六】ェヽむしだ【み】六さんわつちが内へもきねへな　トつれていきたかるハていしゆが仕事に出てるすゆへ五文三文のうす手ぜにで酒でものませる也ていしゆがかへると【六】がおごつたふうにして親をいわせるたちにていしゆこそいんぐわでほねをおつてかへるやいなあしつひでに水をくめの明店のからの物をだせのとおいつかれろ也　【み】おきつさんけふハいつそさみしいまめいりでもせうじやあねへかさとうの錢を八文出しなさんねへかわたしが豆をかひやせう【き】そりやァよかろうね　ト出し合つてまめいりなどし思入人のうハさ咄しをしやゝあつて内へかへり夕方なれバ【か】へあんどうへ火をともしている　【た】コレこのあんどうハ何のこただ百物語のどうもとをしやァしめへ

しとうすこやァやすくつてもあふられたけへハべらぼうづくめさつきもさつきとて隣(となり)あたりへ
ゆきやァがつておれが(壁心)とをわるくいわふとおもやあがつてふてへあまだこんやァおれがしかた
がある（トいふにおそれてあんどんのとうしんをへらさんとせしにあやまちてあかりをけす）【さ】此あまァ何をしやァがる（トあかりハきゆれど引まどより月のあかりのもれ入ておふろのかげをさい
わいとてぬぐひのさるぐつわをはめあらなわにてくゝしあげよ寒もつよき折からに丸はだかにして小刀ぱかりのいましめハ雪常前へ出るじぶんにげそこなつてしがきにあひしごとくにうろうろむごいとといふばかりなしおかるハなくもなかれぬいましめ雪のはだも風にこゞへて小刀
ばかりハ身にたちてくろ血(ち)あしにながれて今もいきのたへなんこそあだちがはらのおにならめたゝひい〳〵といふこへ口ごもりてきこゆれバ門の戸けはなしかけ入ル）【斧定九郎】（かほたよく〳〵みて）これハおこし元
のおかるどの此ていハどふしたとじやこふいふ難義(なんぎ)にあはるゝといふはまづ〳〵（トふしんがほにて縄をときさるぐつわをとりおきつをとらへ）ヤイ女め大切(たいせつ)なる人の娘(むすめ)をかどわかしハゝァきこへたわが夫(おっと)はかのぜげんとやらだ
な何にもせよにッくい女だ（トおかるをいましめしごとくにしバり上ル）サァおかる殿そう〳〵やしきへ送(おく)り申さん（おかるハちごくで佛に
あひし思ひにて）【か】これハありがたうそんじます（トよろこぶ）【定】お禮におよばぬ一刻(こく)もはやく〳〵（いつの間にキ
円口にきたりしかごにのせやしきへおくるハいつわりにてこな悪とうのなれやひにてはころ〳〵とをき祇園町 文字屋才兵衛がかたへ百両にうりけるかこちにて勘平にあひ五十両はとりかへされし處もあれどこゝにりやくすよつぼど五だんめを用ひたの也）

大結

【斧九太夫】年ごろ五十余色あかくでつふりとふとりしらがを黒あぶらにてぺつたりといはせ黒呂の羽織大かたのゆかたすんどじやくはいなり今壹人ハ高師丞が國侍【鷺伴坂内】年頃二十七八中肉に

てばちびんあたまそり立いたつて着しとびいろちりめんの羽おりにさつまの上布の帷子はないろはかたのおび長門印籠を下げ長き大小をさしちらしのたびなかぬきぞうりちん／＼ばしよりあせ手拭二ツ折にしてあたまのうへへおき今壹人ハ町人にて【寺岡や平へ門】としごろ三十二三風俗ハはでならずして又やぼならずいしやう付ハ諸君の御すいもじぐつと如才のないきをんつうなれバ伴内が頼みのすじあるゆへつれだちきたりしなり折しも六月ハ七日より十九日迄祇園會にてとうろう雨かハにみちて晝のごとし竹縄のすゞミ茶見世殊のほかにきやかなり

【伴】斧氏當所ハきつひ繁花な地じやてなわいども國元トなどにも遊所場ござれど中／＼及ひもない事じやてな【九】そこハさすが都だけだねへ【伴】館着のみぎり見請た橋むかひのめろハとつとそさうな【九】其はづさ四六だもの【伴】ホヽウ四六の數やをつりおるかな【平】ナアニおめへさん晝六百夜四百だといふことさアリヤどこの内でも三人宛お定りで見世へ出やすがあれをミせ番といゝやすが今ハ昔とちがつて黒ひもめんの布子などをわさときていやす【伴】なぜにじやの【平】そこが飯盛名代でござゐやす五ツに簪が正めんをはるなアミんながいやがりやす【九】見立ルときハソレかざり見せだハな（伴内袖をたゝいていふ）兩腋がいつでも大だよ【伴】かの九星じやの【平】さよふさこゝにめへ方ハ藝者があつたが今ハきつハりたれ【伴】海邊の茶店ハずんど涼しさふじや（へんなこへにて）うなべらに吹くる風の蟹衣トうたふ【平】（おかしさをまぎらわしながら）平野屋で一

ッふくのミれとうだろうね【九】作さんがいそぎだからァいくがいゝわたら近頃ハおいらァおいこんでとんとうちたへたる前方ハ常盤屋で松がハ初ㇾ松坂でじまいせうた津の國でなにはおしてる三ッ濱なとがごふせいだつたが今ハどふだの【平】そりやァむかしのことでござへしやう三ッ花といふハ新叶にござへしたが三ッ濱といふハきかねへねなにハといふも津の國じやァござへしねへ ふつと思ひ出したよふに 此宿へきつけねへてやいお引手をかすらふと思つてゐるであがるが大キなこけさやつハり茶屋から行ほうが勘定じやァ徳さひき手を拂ても此ごろい錢相場じやァまだとくでござへさァ トこゝぞなどをいつてきかせるへわけあることなるべし大かた茶屋に引手をつけてちや屋のかんじやうをさせて上れを「九」がもふけうといふことをしつているとミへたり【九】そらつたばけて そふ云ふとれ一向しらなんだ【平】お人がいゝ子 トこする まだ大わらごなことがござへすわたしどもい近所のものか大師河原の歸りに清水のくわんおん前からさる大見世へ送られた所がとんだことさ出しものゝ大びらへ蛤のむしたのや牛房い煮付さ夜具もミんなまハし夜具だから大變だね【九】そりやどふしたものだろうね【平】ナニ旅人にあつかわれたからうまらねへね【九】コリヤ茶屋がわりひよく心得ている事だ【件】是ハゑらい燈灯じや はや茶やしん中杉へ來た女ぼう一文字やへ送る「件」ハ「おかる」に女のぼせに一六七舍あながまんとあるゆへ寝ずまでもこしらへてやれどおかる、中居之介がおるゆへあすのあさつてのとふ由だてた見せに ゆへ今宵平右エ門た頼とが承知[illegible]たのミてもらハんとつれ來りしなり扨しミ天王時分なれば昔夜しん道一人つき[illegible]見せに【件内様御仕廻かる】ト[illegible]にてあるたけ内ハ穴のあくほどミておくへ行「九」ハ二舍あくらハ「平」ハちよいと[illegible]んだらうたあ[illegible]二[illegible]いたつてにさや[illegible]屋の[illegible]に花をちらし[illegible]の[illegible]ハいつも[illegible]道々故[illegible]進けいしやも[illegible]そして[illegible]てん[illegible]の[illegible]やへ[illegible]

【伴】此屋敷ハ藏じやナ【平】火事い用心にみんな濱ハ土藏つくりになりやした【九】時に平公今夜ハぜひ〳〵伴さんの氣のすむやうにすつかりしてあげねへ【伴】わぴ共かれに至る執心じやてな何分〳〵（ト手をあハせる）【平】承知てございますわたしが呑込だハな（トいゝすてゝ小用所へゆきけるが何かしばらく手間をとつて來り）（わざと【平】が床と【伴】が床といりかわつているとすこし過て【おかる】來）伴さん寐なんしたかへ（ト顔をみればちがつているゆへ）ヲヤばからしいもし床がちがいゝしたよ【平】（ふつとおきかへり）ホイこれハごめんなせへ【か】ヲヤ平さんかよくそこらちうをくいちらしなんすが知れたらわるかろうよ【平】ナァニわりひともねへのさそれハそふとおめへに今夜ハよろこばせやうと思つてわざ〳〵きたわな【か】そりやァまあうれしいねはやく聞せてくんなんし【平】（まじめにかしこまり）外の事でもねへが（ト少しちいさなこへで）アノ伴内さんハ高様の國家老で金ハまんとあるしそして通で男氣で御ぢよさいのねへがおめへにやァとふかなすつてごうせいのぼせて御出なさるがおめへが胸中がしれねへからとつくり聞てくれろとおつしやるがおめえどうだおきにさへ入ればすへ始終わるかァねへぜ（此うち【伴】【九】となりざしきにて聞てゐる）それにおめえの所へきなさる由良大盡とやらといきはりづくになつたによつてぜひ指がほりもので由良大じんの顔をふまねへけりやァならねへといゝなさるからぜひ〳〵今夜とり極てもらいてへ趣さ（トいはれて平ヱ門だけせんかたなく）【か】ヲヤ平さんが同じやうに伴さんにならんで人をあやなすやつさ【平】あやなすのあやな

さねへのとそんなちやなこつちやあねへそりやァおめへおりよゥはどらおすといふもんだきまた由良大盡と切れることがいやならいやとしらでいゝなせへ【か】何わたしお元からの客人といふでれなし由良さんもこつてきなんすといふでもなしどふともしいすけれど（トかんざしを抜き荊棘をかきなでゝいゝかねて居る）【平】かわいゝから思ひきつてつきだされもせずといふのかへ【か】そりやァきれいにつき出しておめにかけへしやうがらつトなりかりてあるともあるから【平】フゥいくらほど【か】二十枚ほど【伴】（から紙少しあけ）其金だに濟せれよいか【平】マァおめへさんれしらねへふりでお出なせへ（トちいさなこへでいふ）其位な事ハ伴さんが立引なさらあな其あんじなしにはやく返答しな川そたちあんまりやぼでもあるめへ（トいへども【か】うつむいてだんまりでいる）これさ考へる事ハねへはやくどふともいゝなせへ（トせき立られ）【か】由良さんの事ハどふにもなるけれどわたしや云かハした夫があれバどふも【平】おつう切りぬけやうと思ふのかさふハいはせねへそれじや人をあそぶやうなものたたとへ間夫があろうがあるめへが得心させねへけりやァ寺平が男がたゝねへ（トつよく出る）コゥロひろい申分だが此宿のうちにやァ何屋に何といふ女郎があつて氣ぐれへがよくつて此ごろハどふいふ客がきてどふいふ立引をするといふ事ァコゥ籠屋の横目よりやァあかるひもんだあんまり人をすつぼかしにしねへもんだよそれ共其男といふハ客にやァねへはづだか地色か【か】（もぢつときづよく）アイ勘平

といふれつきとした夫があればめつたに人の自由もなりんせん　「伴」「か」これをきゝすつくりする　「平」ゐびつゝりせしをおしかくし
フッ勘平へ「か」アイ「平」そりや早野かん平さんかへ「か」さやうさいやしい勤に身ハけが
しても心までハけがしいせん「平」こりやおかしい　ハヽヽヽアハヽヽヽトむせうに笑ふ「か」勘平さんをお
めへしつていなんすかへ「平」わつちやァしらねへでどふするものかおめへこそなんにもしら
ねへ子ハヽヽヽァ「か」そんなら勘平さんハどふぞしなんしたかへ　トひざたて直し聞たがる「平」こいつァ
大わらいだハヽヽヽァ「か」どふしなんした煩つてゞもいるのかへ「平」そんなとじやァねへ
こりや氣のどくなハヽヽヽァ　トいはれて「か」ハおんしよくをかへ「か」氣のどくとハもしや死にもしたといふのか
へ「平」なんにおめへしんなさらねへが女房をもつたわな「か」ぐつとおちつきせゝら笑い　平さんが手にはを
あはせて人をしやくりなんすのかマァそのづにハのりハすめへ　トとんじやくせぬを「伴」へとなりざしきにて「九」トはなすにハきすがへ平右二門な
り面白きはかりことをそくせきにこしらへくどきおとすおくの手と大きにゑつぼにてゐたりしがおかるがおちついたる此一言にてむねときく　「平」そんならよしさ「か」そしておめへが
かん平さんのことをくわしく知らうはづがねへ「平」知らう筈がねへがおかしい先おやしきへ
歸参をなされて同家中の與市兵衛樣の處へ養子にいかれておいらさんといふ美しいお娘子をだ
いてねなさるのさ共與市兵衛樣へハわしが伯父が御出入で今月の何日でかあつたがわしがいつ
た日だつけ御祝義にいつたといゝやしたそれで知ッてゐるのさ　トいはれて「か」ハむねにぎつくり與市兵衛が娘と云なづけあることさ知つていれバ

〳〵しつとの顔あらはれて 【か】そりやァほんの事かへ【平】大事のことをうそをついてなるもんかな【か】勘平さんにかぎつてそふいふことはねへはづだが久しく便りもしてくんなさらんがもしやそふいふとであつたかうらめしい トいかりのすがたへつけこみ 【平】おめへがたは利口らしい顔をしても男にやァ叶はねへ勘平さんが女房をもつたかわりにこつちでも其つらあてに伴さんに身をまかせお氣にさへ入レバ奥様だ又伴さんも由良大盡へのいきはりおめへは勘平さんへつらあて兩天秤の戀の重荷返答ざァなりやすめへ トきせるをやに下り 【か】はしばらく考へしあんし直し そういふことならわたしも意氣地だ伴さんに身を任せ思ひのまゝに生悪男の顔をふんでやりいしやう【平】そふあるべきとだよ【か】ぜんたいわたしが氣は一ッチづに思ふ性でほれたがしやうがにやァ命にかけても先に實があればしたふす氣だがさきがまづけりやうらみがつよくなりんす男といふものは氣のおほひもんだから伴さんにもめつたにうかとはのられんせん 〔伴〕は大よろこびにて唐紙をたゝく 【平】そんなら伴さんにさへ實があればおめへは急度した證據を見せるか【か】そりやァいふはくどふおざんす【平】サァ伴さんの御氣性はおふしやうながら此寺平が首にかけて請合たおめへは事毎にかわる枕だちといたからうが指をきつてくんなせへとはいえど是にやァへきるきだらう【か】そんなひけうな女郎だと思ひなんすかこの場に及んじやァなんでもするけれど急度今夜はゆらさんがきなんすと

すぐにつき出さねへけりやァなりんせんがいまはなしたものを返さねへけりやァ金をとつて突出したといわれちやァわたしも名がすたりんす【平】そこれのみこんでいらァな今夜その先生がくるはづかな【か】あいさ【平】きてすつわりと目の前でつき出させて作さんの心もちのゐゝやうにしてあげてへもんだ【か】今にきやしやうよ【平】サァうづ／＼せずと切ルならきんねへな【か】そんならわつちやァ仕度しやしやう　トかみそりをとつてくる【平】サァあかるミへもつてきてたつふりときんなせへ【か】平さん御苦勞ながら切てくんなんし　トてぬぐいを口にくわへゆびを少しすじかひに出す【伴】【九】からかミの間よりすきみする【平】サァよしか　トてうしをふり上げ力まかせにぼつたり【か】切り口おさへうんといふて持病のしやくさし込うしろへふちかへる【平】あれ／＼これ氣のよわへどふしたもんだのつちやァわりひ／＼ヱ、やくにたゝねへ　トまへゝこゞませおしすくめちどめを付布をまく【伴】たまりかねてとんで出いぢらしいこふじやあろうと思ふたかわいさうに藥やろか／＼　トりんろうのきつけを出し口にうつしにのませるやう／＼氣がつき顔を上げ苦しきこへにて【か】伴さんしん實見捨ておくんなんすな【伴】よいてや／＼おかる心庭ミへてうれしい／＼平公かれハ由良之介に借用もあるじやそふなはやふかへさせてたも　ト二十両なげ出す【九】これを見ると　これさ伴公なんの事だな指を切たくらいきついとわねへうつちやつておかつせへ【伴】じやといふてもけしゆへにせつない思ひもしおるといふもんじやかあいそふに【九】マァはやまつすと酒でものいまつしやいな　ト引とむる折ふしらうかをばた／＼いそぎきたるれ【茶や】モシだんなお屋敷から急御用事とてお人が

参りましたそして門限もきれますによつてお駕籠を三まいで入いて置ましたサア〳〵おはやく〳〵 トせり立る△用心きびしき師直がやしきもんげんのきれるといふにあハてゝ 【伴】サアそれハこまつたものじや扨みぢかい夜じやどふいたいたものじや【九】わし共とハちごふはやくけへらざァなるめへわたしもすぐに歸らう【伴】それでも貴公ハ居給へ平公わいどもハきうに屋敷へかへらにやならぬによつて足下跡にのこり給ひてよくかいほうして遣されい溫氣の時分疵とがめせぬやうにし給へイヤ其切た指をわいども肌身はなさず持參いたすによつてこれへくれ給へ【平】ひつくりしてホおかるさんにばつかり氣をとられて肝心のゆびをあげなんだ そこらを見る あんまりひどく打ッたからどこへかとんだそふだ トほう〴〵をさがすうち又となりざしきから 【由良の介】からかみ少しあけ今きたといふ頭巾のなりにて鼻紙をおし落たかの指をひろい 其指由良の介が申請たおかる過分だ其かわりさきから貳十兩たすならこちらからハ三十兩それ トなげだす 合て五十兩申請ておきやれ トいゝすてから紙ぴつしやり【平】【伴】思ひがけなき由良の介が仕打あきれて見ている 【茶や】サア〳〵おやしきの時もきれますはやく〳〵 トたてざいそくによんどころなく 【伴】平右どふしたらよかろう【平】ようござりますわたくしにおまかせなせへまし立引づくの指おめへさんに引ハとらせやせんマァおかへりなされやし【九】平公これハぬしが急度わかちを付ずハなるまい【平】そこハのみこんでおります トいふをきつかけに二人ハ下へおりるはしごの下にて 【九】耳に口にて うすッくらへ所から出た由良之介どふも合点がいかぬわたしやァかへつたふりで下座敷でやらかす

を見るによつて公ハいそひでかへりなせへ【伴】しかるべく、はからひくれ給へ（トいそぎてかへりける）△平右ヱ門トを見送り立かへり　おかるさんもふるゝよ【か】ほんにかへ（トほつといきをつく）わたしやはじめて此やうなせつねへ思ひをしいしたどうもわらい出しそうでならなんだ【平】おめへの指をきつたふりでめを廻した身ぶりハ妙だつた【か】おめへが脊中をなでるのがくすぐつたくつてならなんだそれだが指をミせるといゝなんしたらどふせふとおもいゝした【平】なァにそこハ國ざるだもの疵とがめをせぬかゝりもすさまじい大わらひだ△（かのとなりざしきから紙をあけ出しハげいしやの）【猪十】ナントト似せ由良之介ハきつからうね羽織へ二ッ巴をかミで切りぬいてはつて出たなざァあんじでござへしやう伴内ハ由良さんをしらねへからふるゝが九太先生ハ知つているといふもんだから大きにこわいろにほねをおつたまだからかミひとへ隣りだけよかつた【平】由良さんの身ぶりこわいろハ妙だなげ出した金ハ荒神だなの延喜のかねかゝと三十兩にやァ大きかつたな【猪】なんにもねへ所を紙を出して指をとるミへなざァきまつたもんたらうね【平】さつき來たときちよつと三人してはなしやつたがよくうまくいつたのう【か】わたしやァこわかつたよ【猪】きつい茶ばんだときに茶屋の男にもいつぺい吞せすハなるめへさつきから呼でおきやしたまだひどく安事やした跡でもつかしのねへやふに迎の似手紙を茶屋へおきやした仕組もこういけバおもしれへ今の貳十兩ハ

あすハ勘平さんのとけへおくりの判官(はんぐはん)だらうね【か】だまつていなんしたがこんどきたらどうせうね【平】こんどハこんどさ其時ハ作者(さくしや)が後篇(こうへん)におもしろく書(かく)だらううつちやつておきねへマァひとつしめやしやうシャン〳〵

九太夫が心てい善か惡かいつこうわからず下座敷でやうすを聞てあとハ後へんにあらハすべし

祇園會灯燈藏　終

祇園祭挑燈藏

忠とは太平樂の中にして臣とは振袖の新なり寢所の咄しの鉄砲場ハ娼女と若婦の二ツ玉横にそげ行猪ハ下腹に毛もあるまじ色男の來た夜の都合惡に合言の天よばはりすれば川と名をとる惡女ありどふで副れぬ六だんめだん〳〵風流に錢金も遣ひし伊吾ハ馬鹿らしき客に制する戯言の書を蘭奢亭の主人綴の錦其後に一枚しきしをあてゝいふ

酒宴齋水吉

抜

心から哀仇なる契かなと詠ぜしもこれや色の大湊行こう
船ハ磁石を用ひず此九曜を目當に乘込七曜破軍のけんし
き高くとも適〻の二星客ハ天の川に若衆がヤレ〳〵といふ
新造のしやくこの星にハ銀河一片費し不好客には箒木星
も立よきぬ〴〵の六ツらの星の光ほんのふの犬飼星もお
どらさらんかくかま倉ならぬ星月夜蘭奢亭の主人明るき
ことを好灯燈ぐら巻掛の燭をともす予も抜に一丁繼たす
ことしかり

水遊亭船主

青樓娭言解

蘭奢亭主人作

出來

いろ〳〵の客によりてけいせいの喜怒哀楽をくハしくしるす

祇園會桃燈藏

同作

品川客の新吾左に忠臣ぐらをとりまじゑしおかしき本なり

茶店の娼妓

同作

來春出來

てれん茶やにて客に逢ふけいせいの極秘をあらハす

起承轉合

題起承轉合

楚書曰御客無以爲寶惟錢以爲寶故傾城自無寔客食言猶酷哉是以于實有於太郎兵衛駕于虛有於御互長左工門今十篇舍據其實虛而編之者也與

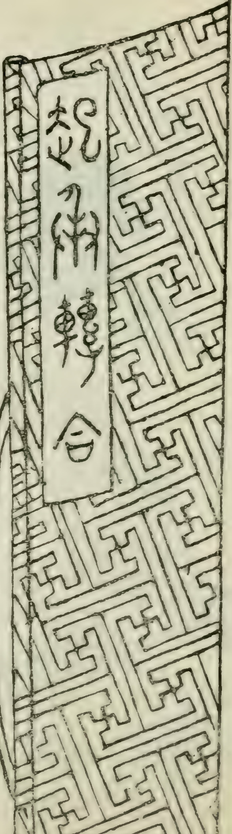
玉亭主人

自序

聞說起承轉合とハ。詩を賦の全體なりと。予青樓の曲篇を賦て。此に其言有を思ふ。娼妓俠客を拋んとするに。食言か好意か何にも爲矣。惚たといふを起句にして互に欵待仇惚に。懐のたけを懸泉。是則承句なり。其附會の懸想か。口舌の上の斷操ハ。顚倒轉句にして。又配偶の合句あり。各床に淫事を押。淫事のなきハ押落し。振られし客ハ即起る。是即起と謂べし。雙の枕の對句にハ。殺文句の熟字有。後合の寢たふりハ、語言絕句の默然房。

故事を引て。理屈をいふ。侯舘者にハ娼妓も。理を非に曲る七言律。是美男の體裁を。克せんとの爲なるべし。亦平仄といふ支有。〇白圏の印ハ附廻し。●黒圏ハ三歩の證なり。◐不同下三連。娼家の風體各自あり。客も一座の連句にハ。初盛唐の沈愼風。晩唐の似た山。宋朝の惡戯氣。賦すれ則閨中に。臥て淫を探るをもつて。俠客行ハ詩を作るにひとしからんと。其言をして標題に命たるも。頗書生の予が管見ならん。希ハ四方の大通先生達。宜く点削を施給へ。茲歳壬戌孟春吉旦

十偏舍一九題



婉曲歌　集義和書

百花爛案上文獻輻紙紈妓女
風流恒如友誘畫圖也

一九画

平仄

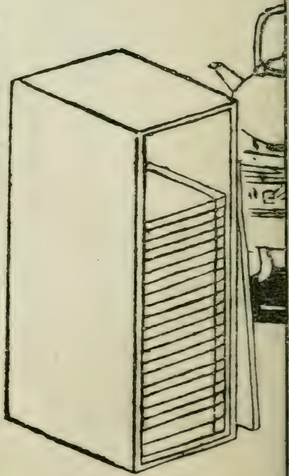
起 ◐（束）○（時巳ニ）○ ●（チウセン）●（一句ノ下三字用ナスヲアヤニウテ丸クカキタリ）

承 ◐ ● ● ○ ○ 淫

轉 ◐ ● ○ ○ ●

合 ◐ ○ ◐ ● ○ 淫

合ヲ買人ヲ平起ト云合ヲ揚テアソブヲ（ヲゴリ）
仄ヲゴリト云淫ハ其宵ニ一度夜明ニ
一度合テ二トコロニテ押ナリ



起

杜子美が春江のながめよりもまされる里の
花ぞうつる月うつりのまる佗なれ賓

承

李白が酒の一斗は樹蜜もなかり酔ふ
ならぬあそびは香にこそ女の悪しかれ人

轉

楽天が白衣の帯よけりる雪のそぞろの
いろしげりとれよこあひの丈なる吉突

合

橘潭が竹のうけなしようりきつのつきま
とざへのいきちが容はひくりまふくりの真

起承轉合

十偏舍一九賦

○起　句

櫻桃花樹の下に遊んで。春ハ鎖窓の深きに。あることをしらずとハ。色男の已惚が髭を撫て吟たりけん。此に青樓五つの街其中の町の花ざかりにハ。西行法師も北へ走り。長明が尻あけざるも。居續したき心地ぞせん。花を床にうつし植るハ。野郎の上東門院にして。おぶさつてくる忠度も。花をあるじの廻し部屋。大盡の鼻ハ高く。娼妓の花ハ。賣物に飾つてうつくし。若ものこの花をいたゞけバ。禿共はなをすゝつて呵らる。たいこ持ハ客と倶に鼻をひこつかせ。げいしやハ。新造とならんではなを覆ふ。おいらん客の鼻毛をよんでハ。あるひハ鼻のさきにあしらひ。あるひハ鼻息をあげてもてなす。獅々鼻の客。牡丹がらくさの夜着にくるひ。柘榴はなの客。あつくなつて炎をはく。鼻のひしやげし似た山も。金の威光にはなを高くし。鼻すじのとをりものも。是を地につけて借金を斷る。いづれ花の名どころにして。さかりひさしき

よし原の。彌生ハ殊に賑ハしく。夜を晝とや火ともしごろ。茶屋がはしゐの花ござに。はなたかく\と座したるハ腹ふくれの旦那株

【夜與】　五十余のとしばい。つやなしうへだの小そで。あいのはかたの帶。くろりうもんのはをり。中ぐらいの人がら。尤でつふりとして大男也。かミ入たばこ入にまでもへぎらしやをこのミてもちゆ

【仁三郎】　廿ばかりの。ひんなりとしたるむすこかぶ。ゆうきつむぎの小そて。くろなゝこの帶。これもはをりハくろ八丈。いたつておとなしきふうぞくにて。女のおもいつくいろおとこなり

【やきやう】仁三こうひとつのミねへ【仁三郎】わたくしハ大きによいました【茶や女房】あなたハねつからあがりませんね【夜】おれとおなじことだ【けいしや】おきのつゐゝ【仁】ほんに夜きやうさんハ。きん酒をなさつたよふに。うけたまハりましたが。やつぱりあがりますね【夜】イヤそれがね、大わらひなことよ。去年子僧が病氣の時。なにが盃へぴんと錠をおろして。堀の內さまへめへりやした。重てからさかづきハ。手にもとりますめへ。何とも悴が病氣本腹いたすよふにと。願つた所が。病氣ハたちまちよくなつたが。サァ呑たくてならねへとおもいなセへ。そこで。かんげへて見たところが。さかづきを。手にも取ますめへといつた

斗で。酒をたべますめへといふこたァいれなんだから。そこで盃さへ。手にとらにやァいゝとおもつて。今じやァ。猪口かこの吸もののわんのふたでやらかしやす。なんのこたァねへ。お祖師さまを。一ばんかきのめしたといふもんだ。【げい】おそしさまをさへおかきなさるもの〻を。おいらんたちも。おめへさんにやァかゝれうちさ。ときに。お此さん。このおさかづきいどふいたしやせう【女房】おもひざしさ【夜】おもいざしならおいらだろふぜ【げい】イ、エあなた（ト仁三郎がかたへさす）【仁】コリヤあげよふ【げい】おめへさんも嫁のほうからさしたものを。おけへしなさるもんじやァござりやせん【夜】どふでもわけへしゆにやァおちをとられる【女房】モシおゆだんなさりやすな。おたえさんれ。このあいだァ。さかりがついて大さわぎさ【夜】そんならおいらが。尻尾をもちやァげて上ヶよふから。仁三こう。うしろからのりれどふだ【げい】ヲャにくらしいのふ（トばちにてたゝくまねをする此うちわかいもの立かへり）【茶や男】只今唐松さまれお出でござります。あやぎぬさんれ。御病氣でござるそふで。今におへんじが。あるはづでござりやす（此からまつといふれ・やきやうが相方・あやぎぬといふれ・仁三郎が相方丈などゝ）【夜】御くろう〱。ときにそりやァ。仁三こうこまつたもんだ【仁】ナニ病氣だといふこたァきいていやしたが。さしたることでもねへそふさ。今になんとぞいつてめへりやせう【げいしやうた】まつまもとけし長ぎセる。むねのおもいをくゆらせて。しんきそふ

に見へるぞへ【皆〻】アレ〳〵向ふへ太夫さまが。ミへるぞ〳〵（なげぶしうた）なれしくるわのうきふしや。よごとにかわるまくらのちりも。はらふわきミにあふ夜半の。床につもりしさゝめごと【唐松】夜興さんよくお出なんした。ヲヤ仁三さんかへ。おひさしうおざりいす【女房】おいらんこちらへ（トたはこぼんをかたよせてこしをかけさせ）ほんに。あやぎぬさんわ。どふでござります【番新】いつそおあんばへがわるいとつて。およつてばかりおいでなんす。巻衣さん。おことづけをそふおつせへしな（仁三郎がまへゝきて）【巻ぎぬ】アノね。おめへさんに。あやぎぬさんがそふおつせへす。こよひわよくきておくんなんした。おありがたうおざりいす。私もあんばへがわるふおざりいすが。おめにかゝりたふすから。おまち申ておりいすとき【夜】御くろう。お茶でもあがれ。ごうぎにセつなそふだ【皆〻】ヲホヽヽヽ【けいしやうた】すけんぞめきわむく鳥のなれつゝきつゝきかうしさき（ツテチリ）〳〵（大門のかたよりほうかふりをしたるふたりづれ。火をけしたてうちんをもち）【左兵へ】コウ吉さん。さくらの花よりかァあのこしをかけている。おいらんをミな。あれがほんとうのいきた女だ【吉】いゝ〳〵。アノ又しんぞうもあだゞぜ【左】ヲヤかふろのあたまァなんだ。おさまりやすぞ。はつ山〳〵といゝそふなあたまだ【吉】それよりかァ。あのばちで尻をかいている。げいを見さつし。ゐて吉によく似ているぜ【左】アノ又うつむいているやつが客とミへるがなんのこたァねへ。蚯蚓に小

へんをしかけたちんぼことといふもので。ふくれけへつたつらの親仁だ　此内うしろからおされて。こしかけているしんぞうのあしをふむ
【左】是ハごめんなさい【夜】左兵へじやァねへか　といわれて。うろたへまわりほうかふりを取　【左】ハイ是ハ旦那さま
ト爰んさきへかゞむ。吉ハさきへ行こし。左兵へがあしをふんだるをわびるとおもい　【吉】コウ左しうや〳〵。べらぼうめ何をあやまつているのだ
【左】ヲイ吉さん〳〵【吉】なんだ。やかましい　トたちもどる　【夜】吉でうか【吉】ハイこれハ【夜】何
しにきた【左】ハイ　トふところより手がミをいだして　ばんとうさまから遣ハされました　トさしだして大あせをふく。そなく〳〵おかしさをかくしている。仁三郎とか
らまつ。かほを見やわせて。おもわずふつとふきだしてわらふ。これをしほに。此おいらん仁三郎がわきへすわり。わらひながらもたれかゝろきとあり。かねてこの仁三郎にハ。ほれているといふめつきかほつき。おかどからよくミへるくらい。夜きやうハ手がミをよんでいる
ゆへなにもしらず。つかいのものハわらわれながら大のきまじめ也　【夜】ときに大變だ【仁】何ぞきうな御用かね【夜】おめへもしつてい
なさる。かの出ミせのりくつよ。コリヤアちよつといつて來やせう【女房】ヲヤ〳〵【唐】おめ
へさんおけへりなんすかへ【夜】ナニくらまへまで。いけバいゝのだから。じきさまこけへ
【唐】おだましなんすなへ【夜】ナニきつとくるのさ。それまで。仁三こうをきさまのとけへ
つれていきねへ【女ほう】お駕を申てやりませふか【夜】ナアニよし〳〵。左兵へてうちんを
つけやよ　トたばこいれきせるをしまふ。ちや屋の女房。わきざしをさしいだし　【女ほう】さ様ならおまち申ておりますにへ【皆〻】さやう
ならおはよふ【夜】しやうち〳〵　トそう〳〵にいそいでかへる　【唐】そんなら仁三さんサァおいでなんし
作者曰。この息子ハ。元より鼠とらずといへ共。おいらんハ又。鼠とる猫爪をかくすと。大

様にミセて。客をかく手取なり。此ふたりを。おなじ巨燵の上に寐かさバ。ちよつかいがさハり。足がさハり。つい猫の目のかハりやすきハ。仇惚のうハきよりして。ふと猫じやらしに。むすぶえにしの喰つきとなるべし。兎角猫に鰹節ハさてこそ。油断がならぬ〳〵

○承　句

からまつがざしきにハ客まつ火ばちにふきおこす。ひぢりめんのふりそでしんぞう。かふろまじりに仁三郎も。しやべりくたびれ。ひぢをまげて。まくらとなしたるたのしミに。はやとろ〳〵目のたハいなし。おいらんずつとはいりて

【唐松】ヲヤそんなに。よく火がおこつておりいすに。なぜ煮花でもして。仁三さんにあげなんせんへ【新唐糸】仁三さんハこけへおよりいした【唐】けしからねへ。蒲團でもかけてあげ申な。ミどり。枕をとつてきや（トまくらをとりよせ。ミすがミをかさねてあてがひ。仁三郎にさせる。此内しんぞうふとんかける）【仁】コリヤアありがてへ

【唐】今あやぎぬさんにおめにかゝりいした。今霄ハ是非おめへさんに。あひなんせんけりやアならねへことがおざりいすとさ。もふちつとまつてお出なんし【仁】アイ〳〵（トいふもゆめごゝろたハいなくねふる）

【唐】唐糸さん。硯ばこと。さつきの卷がミをもつてきておくんなんし【いと】ほんにさつき。おめへさんの筆をおかり申いした（トとこの間に。ころがつてゐるふでをとりそへ。すゞり箱を持てくる）【唐】くらへ火だのふと（あんどうをかきたて。ふと）

をかきにかゝる。トうへだの小そで。ひろすぎたるをきて。手にきせるたばこ入を。もちたるおとこはいり【流行】ヲヤこの土左ヱ門ハだれだ ト仁三郎たのぞく【唐】およしなんし。夜興さんのおつれざんす。【流】夜けうさんハどふした 此りうこうやけうとハこゝにて出合ちかづき也【唐】今にお出なんす【流】かくもんだね トふミをかくむかふへすわり ハヽアなんだ。ゆふしハよふぞや御こし下され。ぐれいぶんかたぐ〱。イヤこいつ三會目をセしめたな。いくらだ。さんまいか五まいハくれめへ【唐】おぶしやれなんすな【流】いつ〱までも御かぶらせなふ。御かよひ下されたァ。手めへがつてな文句だぜ【唐】どこにそんなことをかきいした。そつちらァむいてお出なんし【流】ヒヤァおつうかくぜ。ほんにあわびのかたおもひ。御うらめしく存〱かコリヤァ衣がへのむしんにやァまだはやいぜ【唐】ごしやうでおざりいす。だまつてゝおくんなんし。そして衣がへのむしんたァ。そんなこたァかきやァいたしいせん【流】そんでも見ねへ。ほんにあわセのかたおもて。御うらほしく存じ〱ときこへる【唐】ヲヤかんにんしておくしなんし【流】そのつぎハなんだ。ヤ此身たらわぬものに候へバ。ふびんとおぼしめしたァ。こいつ年寄ぎやくと見へるわへ【唐】なぜへ【流】ハテ此身たれこむものに候へバ。しびんとおぼしめし下さるべく候【唐】ヲヤ〱ばからしいのふ。わりいりうこうさんだよヲ トあんどうのかげへむいてかく【いと】そばでおしやべりなんすから。いつそおいらんが。かきにくがりいすハな【流】ナニまごの手

と。すりこ木を取ちがやァしめへし。かきにくいといふことがあるものかへ ト たばこをつぎにかゝり ヲヤあの子ャ。ちよつとたのまれてくんねへ。竹里さんに。たばこをちつと。もらつてきてくんな【唐】唐琴さん。いれてあげ申な【流】そりやァありがてへが。しかしいた〳〵しいの【唐こと】おそくぶりなんすな。おめへさんなんざァ。こんなたばこをあがりいしたら。ほうがはれいす ト小だんすの引だしより たばこを出していれてやる【流】ドレ〳〵 コリヤァなるほど。さつまだわへ【こと】ちがいゝすよ【流】此たばこのしをくりをする客人にやァ。おいらんもさぞ。まことをつくすだろふぜ【唐】なぜざんすへ【流】ハテ女郎のまことに。たばこのおきやく。あれバ晦日が安樂セかいだ【唐】よくおつせへすもんだね【こと】りうこうさんのおしやべりなんす。顔を見ておりいすと。おかしくつてなりいセんヲホ、、、【流】なにがおかしい【こと】アレひげのあいだからものをおつせへすれなヲホ、、、【流】おめへたちの。下くちがものをいつたら。てうどこんなもんだろふ。ハ、、、、 ト光内しんぞううた川。あへたゞしくかけてはいり【うた川】もしおいらんで。わつちが客人のとこから。此ふミがきいしたが。見ておくんなんし。いつそよめへセんわな【唐】ほんにコリヤァ男のとけへやるよふに。むつかしい字ばかりでおざんすよ。【流】ドレ〳〵 よんでやろふ。ヲヤ〳〵 こりやァおつだ。任幸便以手紙申入候と。先こゝられよし然れ先達而。彌太郎參候節。金子之

事御申越下拙も甚難澁にて。只今ハ壹錢之才覺も出來不申候。彌太郎衣類之事も御申越。是ハ彼もの雜用之代に。質物にさし入。金壹分と壹〆文借受飯米をとゝのへ。宿へ遣し申候【うた】ヲヤ〳〵なんざんすねへ【こと】彌太郎さんたァだれさんのことでおざんす【哥】わたくしやァしりいせんハな。けしからねへふミだのふ【流】コリャァふうじてきたろふが。うハがきハ。おめへの名できやしたか【うた】そふでおすハな【流】きこへた。こふだハな。この客人が田舍へやる手紙と。おめへのとけへよこすみと。いちどきに。かいたものだろふから。そこで。ふうじる時にとりちげへて。こつちへよこすみを田舍へやり。いなかへやる手紙をおめへのとけへよこしたのだ【うた】ヲヤ〳〵どふしいセうのふ【流】おもしろい〳〵。時に下拙も三月ハ給金。三分二朱取候間。其節代物遣し可申候。母さまへ御申。木綿一反つかハされ。下さるべく候。じゆばんとふんどしに。いたし申たく候【皆〻】ハヽヽヽヲホヽヽヽ【うた】りうこうさん。もふこつちへおくんなんし【流】マァまちねへ。そこでと。上の村のおばごより。麥こがし下され候。御禮宜敷たのミ入候。筆末ながら新田の長太郎どのはじめ。作野右ヱ門どの。與五左ヱ門どのへも。宜敷御申下さるべく候。おなべ事も達者にほうこういたし居候間。御心安くおぼしめし下さるべく候。イヤこいつハ妙〳〵。うた川さん。コリヤァおめへの色男か【うた】

かんにんしておくんなんし。東水さんについてきなんす人ざんす。そしてわたくしやァたつた三どしかァ出やァいたしいせん。げへふんのわりい人さんだよヲ【流】それでも。おめへも麥こがしをおもらいだろふ【うた】ごしやうでおざりいす。こつちへおくんなんし　トふミをひつたくり。まじめなかほをして出て行【流】いろ〳〵なばけものがあるものだ。時に此夜興さんハどふした。もしきさしつたら。ちよつとしらしてくんなせへ。コリヤァ長ばなしをいたしやした。ヤァゐいとこな　ト立あがり。きせるをたくハへたなりにてゝ行。ねまきのきものをきたるかふろ【禿】から松さんに。おいらんでおつせへす。アノヲ。仁三さんがお出なんして。おせハさまでおざりいす。今におめにかゝりいせうから。おたのん申いすッサ【唐】あやぎぬさんに。仁三さんハ爰に。およつておいでなんすから。かならずおあんじなんすなとよくそふ申てくりや。わすれめへよ【禿】そふ申いしやう　トかけだして行【いと】夜興さんハどふしなんすねへ【唐】もふひけ過でおざんせう。おめへさんたちやァ。かまわずといつて。お休なんし　ト此内しんぞうとこをきたるおいらん仁三郎をやりおとす【仁】コリヤァごうせいにねやした。おいらんまだかへ【唐】まだお出なんせんわな【仁】そいつァつまらねへ【唐】今あやぎぬさんの所から。又そふもふしてめへりいした。おめへさんに。もふちつと。まつてゐておくんなんしとさ　ト一ふくすいつけてさしだしかミをもつててうづに行【いと】こよひハ。あやぎぬさんも。でへぶおあんばへがいゝとおつせへした。どふでもおめへさん

が。おいでなんしたからのことでおざんせうね【仁】ナアニ トいつたばかりに。きセるのそうじをしている。此内しんぞうそこらとりかたづけ【いと】みどりや。もふいつてねやよ。コリヤアおさとしうおざりいせう。今にお出なんすとさ トいゝつゝあんどうの火をかきたて。火入にも火をいれてあてがひ。びやうぶをひきまハして。出てゆく

○轉　句

ウタ たばこのんでもきセるより。咽がとをらぬうすけふり 仁三郎ハひとり。ひばちのはいをかきならしているとからまつざしきへかへり。そこらを見まハし【唐】仁三さん。おまちかねでおざりいしやうね ト仁三郎とならんで火ばちのそばへつくばひ ヲヤさむくなりいした。コリヤアおたげへにまつ身でおざんすが。おめへさんのまつのと。わたしがまつのたァ。とんだちげへでおざりいすよ【仁】なぜへ【唐】なぜじやァおざんせん。おたのしミなこつたねへ トふとんの上にあがりねころんで もしへ。そこじやァ風をおひきなんセう。こけへきておはなしなんし【仁】夜けうさんに呵られよふ【夜】よふすれな。こけへお出なんしてもおなじねでおざんす。風でもおひかセ申ちやァ。あやぎぬさんへ。いゝわけがおざんせん【仁】そんならいつてもよかろふかね トしたぢハすきなりぎよいハよし。□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□おなじよぎのうちへすつぽり【唐】もつとこつちへおよんなんし【仁】アイ トこハそゝ□□□□□□□□□□に少しよる【唐】コレ見なんし。いつそこんなに。ひへきつてお出なんす。あつためて上ヶいせうこけへおいれなん

し（ト仁三郎が手をわきの下へぐつと引こみ）あや絹さんハ仕合なもんだね【仁】なぜだへ【唐】おめへさんのよふなおとこに。ほれられてゐるなんすから【仁】ナニおいらがよふなものに。見こまれたとつて仕合なものか【唐】おめへさんのよふないゝ男ハ。めつたにやァおざんせん。あや絹さんハさぞうれしくつてなりいすめへ。うら山しいのふ（トはなのうへにそでをおほひ。にこ／＼とわらつている。仁三郎ハむねへとき／＼）【仁】おらァ又。夜興さんがうらやましい。おめへのよふな人にかわいがられるから【唐】ヲヤおなぶりなんす。にくらしいのふ（トぐつとひざ出せ）あやぎぬさんハ。どのくらへ。かわいくおもつてお出なんす【仁】これほどにさ（ト思ひきつてぐつとアを〆つける）【唐】もしへ。あつかましいもんだとおもひなんせうが。かんにしておくんなんし。はじめてお出なんしたときから。わたくしやァ。おめへさんに。もふ／＼いつそね。どふも。いふにもいわれいせん。すいりやうしておくんなんし（トかほをかくす）【仁】ソリヤァほんとうにかへどふもうそらしいよ【唐】夜興さんや。あや絹さんの手めへもかまわず。こんなむりなことを申いすハ。よく／＼のことだとおもつておくんなんし。こう文申いしたとつておめへさんハあやぎぬさんに。ほれきつてお出なんすから。とてもおよびぬことたァ。あきらめてハおりいすが。もしもふびんだとおもひなんすなら。せめてぬしの。いもふとだとおもつて。かならず。見すてゝおくんなんすなへ【仁】おめへもいもふとたァむしのいゝ。おいらァおふくろ

だとおもつて大事(てへじ)にしよふ【唐】ヲヤかわへそふに【仁】姉(あね)さまにしておかう【唐】そんならぬしやァわつちが弟(おとうと)でおざんすから。姉のいふことをおきゝなんせんと。大きなめにあわせいすによ【仁】アイ〳〵【唐】ドレ弟をちつといぢめてつかわしいせう トいがみついてよぎ□□□□□□□□□□□□□□□□□□ますつぼりとかぶる【作者曰】エ、書ながら氣がもめるいめへましい

○合　句

あやぎぬハ病氣にて。やくしよをひき。内しやうに引こもる折からに。仁三郎がきたりしをよろこび。しんぞうかふろにいゝつけて。ざしきにハとこをとらせ。夜ふけてしのびあわんとの。心づかいもほれてやつているゆへなり

【番新衣里】そで治やァ。これへ〇をいれてきや。ソレくちからこぼれいす。きをつけやよ【禿】アイ トやくハんをもつて立此内肩と。いしきのほころびたる。きものをきたる。けしぼうずの禿【金次】はつ梅さん。さつきのたァなんだ【金】アノひよいと。コウぶつけへいすもんでおさァ【はつ】ヲヤなんだな此子ァ【金】ソレよい〳〵と。手をたゝきいすと。ひよいとつむりがひとつとんで。其あとに又。もふひとつつむりのある。人形(にんげう)でおさァな【はつ】ヲヤ〳〵何をいふ【金】アレサそりよヲおくんなんし【衣】やかましい。だしておやんなんしな【はつ】これかよ トたばこぼんの引だしの方とりいだして サァ

やらうからの。ぼんさまよ。大ぼんよ。ちやつちやと。めさるまいかのといふ。おどりをおど
つて見せや【衣】かれへそふに。やつてしまいなんしな【はつ】ソレもつていきや【金】ヲヤ〳〵
こゝのものがとれいした。これじやァひよいとコゥなりいせんよ トしたにおいて手をたゝき よい〳〵。アレ
みなんし。こんなに【はつ】エ、そう〳〵しい子だよ。きり〳〵あつちへ。もつてきなんし
【金】ふけいきなはつ梅さんだよヲ トぶつ〳〵こごとをいゝながら出て行【禿もじの】ヲヤ何かおとしていきいした
【はつ】ヲヤ〳〵 お守とかいてありいす。もつてへねへのふ。そしてなんだか。かてへものがつゝ
んでありいす【衣】あけなんすな。ばちがあたりいす【はつ】そんでも。なんだかおざりいす
トかんざしにてふうをきりあけてこれをかきのたね ヲヤ〳〵【衣】ばからしい子だのふヲホヽヽヽ 此内らう下ばた〳〵かけてはいるおいらん【松山】ずつとはいつてしやう
じをたて又あけてのぞく【衣】おいらんなんざんす【松】ナニ志京さんが酔いなんして。いつそふざけなんす
から トせい〳〵いつていふらう下にてきやく人【志京】迷ひ子の〳〵。松山ヤアイ チヤンチキ チヤンチキ スツ、チヤンチヤン【松】エ、
どふしいせう トびやうぶの中へはいりかくれる【若者】はつ梅さん。そこにあぶられござりやすか【はつ】今宵と
ぼすほどれありいす【若】ソリヤァおたのしみでござりやすね【松】びやうぶの中よりとんで出 喜助どん〳〵。
志京さんれ。どつちへいかしつたへ【若】今玉うらさんのとけへ。おへへりなされました トいふう
ちに又らう下にて【志京】まよひ子の松山ヤァイ【松】エ、又きなんしたれな【若】ヲヤあの客人ははだ

かでさ。醫者どのが清もりさまの。脉を見にいきやァしめへし 此内まつ川がかふろかけてくるとおいらんへちやつとかくれる 【禿】おいらんへ【衣】こゝにやァまつ山さんへ。いさつしやらねへよ【禿】どこざんす【若】狐に間ざァわかるめへ【禿】すかねへぞよゥ トつらをふくらし出てゆく【松】コンナ喜助どん。そつちへいつたらの。松の戸さんに。ちよつとこけへきなんしと。そふいつてくだせへよ。コゥそつとよ【若】ハイかしこまりました ト出て行【松】あやぎぬさんへ【衣】今宵へ仁三さんがお出なんしたから。あひなんすとつて。今にお出なんす【松】ソリヤァ此あいだから。あやぎぬさんが。いつそこがれてゐなんしたつけが。さぞおうれしうざんせうね トのこかけたたばこをはたき出て行此内かふろがやくわんにゆをいれてもつてくるを火ばちへかけて火をあをぎながら【衣】はつ梅さん。仁三さんをこけへ。おつれ申てきておくんなんし【ふりしん初梅】今そふ巾いしたが。らちのあかねへ仁三さんだよヲ トふりそでをしぼつてかけだし。ほどなく仁三郎がそでをひいてくる。仁三郎まへおびじだらくにむすびさげ【仁】おいらんへ【衣】今にお出なんす。さつき。から松さんのとけへめへりいしたが。おめへさんへよくおよつてお出なんしたつけ。夜興さんへどふしなんしたへ【仁】たつた今きなすつた【衣】マァこけへお休なんし。おいらんへ今そふ巾いす ト衣さとへ出て行。はつ梅もそこらまご／＼してかけだす。此内あやぎぬへひつつめしまだのばらづきたるかミ。白いかほへかゝりしへなをうつくしく。ことにまだ十七八のつぼミの花。くろちりめんのよほどきなれたるねまきのまゝ。そろ／＼とさしきへはいり。すぐにふとんの上にすへり【あや絹】よく来ておくんなんした。おめへさんに。あいたくつて／＼。てへ／＼もふこがれたことじやァおざんせん【仁】あんば

へがわるいときいて、おいらも大きにあんじていたが、どふもくるひまがなかつた。マアこけへへへりな。ヲ、でへぶやせなすつた。そのかハりしりがとんだちいさくなつた。「あや」ばからしいのふ（トきやくにあたかつきやくのひざをかんざしにてつゝきながら）わたくしやァなんだかもふ。おめへさんのこたァ、かた時も忘れいせん。こんなにおもつちやァいのちもつゞきいすめへ。そしてうれことにまでいゝしたとき、きぬ里さんなんざァ。いつそきのどくがつて。そんなにおもひなんしちァ、身のためにもなりいせんから、本でもよんで、氣をはらしなんしと、いけんをおつせへすくらいでおざんす、なぜこんなに。おもハせておくんなんすへ「仁」ツリヤァわつちもそのとをりだから、はやくよくなりなせへ。どふもあんじてならねへわな「あや」うそにでも。そふいつておくんなんすりやァ。それがたよりになりいすわな（トこすりついてなぞだたふく）「仁」かわへそふに（ト引よせてなでさすり此内ふりしん）（あへたゞしくは入）「あや」ヲヤびつくりさせなんしたなんざんすへ「はつ梅」アノね。今夜きやうさんが。いつそおこりなんして。唐松さんをぶつたり。たゝへたりしてゐなんすれな。それに。仁三さんをよんでこいといゝなんすけれど。唐松さんのおつせへすにやァ。仁三さんがお出たんしちやァわるふおすから。そつとそふ申ておいてくれろッサ「あや」どふしなんしたのだへ「仁」どふしたのだか「はつ」ナァニ今竹さときさんがそふおつせへしたがね。どふでも仁三さ

んと、唐まつさんが。一所にねてゐなんしたとけへ。夜興さんが。お出なんしたもんだから。そのことで。はらをおたちなんしたとき【あや】なぜ又おめへさんわ。唐まつさんと。いつしよにねていなんした【仁】ナニちよつとねころんで。はなしをしていたのだわな【はつ】うそをおつきなんし（トわらふ仁三郎いふなといふことを・めつきでしらせてゐごしやうらくにて・いつこうとんぢやくなし）【あや】はつ梅さん。どふしたのだへ【はつ】それもね。たゞねていなんすこたァ。夜興さんだとつて。はらもたちなんすめへが。唐松さんも仁三さんも。お人なじよふに帯をといてねていなんしたとき。それだから夜興さんが。おこりなんしたもむりじやァおざんせん。なんでも仁三さんが。でへぶ。ふんしがわるくなん〳〵したから。おいらんたんとしかをしておあげなんし。アヽいつそいきがきれいす。ドレ又いつてめへりいせう（ト此ことをしやべりにきたりまそう〳〵にかけだし行）【あや】そんならおめへさんわ唐まつさんと色事でおざんすね【仁】ナァニとんだことを【あや】ほんにあきれもしいせん。おめへさんもあんまりでおざんすが。又唐まつさんも。ひごろ心やすくするにもにやいゝせんから。コリヤァこのぶんじやァすミいせんにへ【仁】ナニそんなに。ひねるこたァねへわな。夜興さんのめへもあり。どふして唐松さんと。そふいふことをするもんだ。人のくちやァあてにやァならねへよ。ヲヤなに、なくことがあるもんだ。何のこともねへのに、おめへはらをたつだけがむだといふ

もんだから。マアきげんをなをしな。ドレなミだをなめてあげよふ「あや」エ、およしなんしトちからまかせにぐつとつきたおす「仁」たま〳〵きたものを。そんなに振付(ふりつけ)るこたァねへわな。サアこつちらァむいてくんなよ。ソレあんまりなくから。咳(せき)がでらァ埒(らつし)もねへ「あや」おめへさんがそふいふきに。なん〳〵しちやァしよせんわつちやァ。すてられいすもんでおざんすから。よふすれな。このことを内證(ないしやう)へそふ申いして。唐まつさんだとつてたゞれおきいせん。かわいさがあまつて。にくさが百倍(ひやくばい)とやらでおざんすものを。おめへさんも。ふたゝびこけへおいでなんすこたァ。できへせんよふにして。おめにかけいすから。そふおもつてお出なんし「仁」何のてへそうらしい。それともおめへが。そんなにおもふなら。是から唐松さんたァ。ものをもいふめへから。それでよかろふ「あや」ナニどふでもわたくしらァ。いゝよふにしられいすれ。あたりめへでおざんす。やつぱりから松つらを。可愛(かあい)がつておやんなんし「仁」おめへもきゝわけのねへもんだ。ものをいふめへといふに。これほど潔白(けつぱく)なこたァねへよ「あや」ひさしぶりでおいでなんして。あんばへのわりいうへに。こんなに氣をもませなんす。ほんにもふ〳〵。はらがたつて〳〵。いつそかなしくなりいした。エ、、、、ト仁三郎がからだぢうをむしりちらかし・うでへくいつき・しつかりと・はのあとをつける「仁」いてへわな。おへねへ氣ちげへづらだ。それだから。事をわけていふのに。聞わけのねへ。ひつ

つこくいちばると、おらァけへるゼ。エ、いめへましい。けへるべい（トずつとたつをしかゝつて引とめ）【あや】ャ
ァおまちなんし【仁】なぜとめるへ（トつよくでられてわつとばかりになきいり〱）【あや】はらたちまぎれに、あんなに巾
いしたのが氣にあたりなんしたら、かんにんしておくんなんし【仁】そふいゝなさりやァ。こ
れからでも。おめへのかほの。たゝねへよふなこたァしねへからあんじなさんな【あや】そん
なら、からまつさんと。ちよつとでものをおつせへすと。きゝいせんにへ【仁】いわねへか
ら。中なをりにサァひとつわらつてくんねへヨ（トおいらんがかほにあてゝいるそでをとりのけよふとする）【あや】アレサおまちなん
し（よこにつきたをして□□□□□□□□□□□□□□□□□うへからメつけ）おめへさんこそ、おかしくおもひなんしやうが。わつちやァ。わらふほどの
うれしいこたァおざんせん、これからおめへさんを、ころしてしまいゝすから、かくごをして
お出なんし【仁】どふしてころす【あや】こふしてさ（トほうべたにくいつく）【仁】ごふせいに氣のつよい病
人だ【あや】ほんに。あんばへのわりいことも、さつぱりわすれていゝした。かれいゝお醫者
さんだよヲ（トぐつとよぎをひつかぶる□□□□□□□□□□）
契情の好意ハ、己苦界の身を忘レ其愚痴に歸る叓甚敷。是色男の因果のつくばひ。惚られ
ぬさきが戀しや。ヤレホウ。氣違水にうかされて、榮耀に餅の川端を。ぶらつきあるく煩惱
の犬骨折て鷹の餌食と。綾衣が深切より。唐松が仇惚の。うれきばなしにおちのくる。客の

鼻毛をよミ殘して、この後篇に書顯し候間、何とぞ御よミ下さる可候めて度かしく

起承轉合

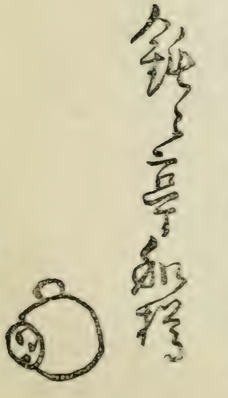
後篇遊冶郎

十偏舍著
全一冊出來

日本之通又粋唐土之遊冶郎也但
仍青樓曲又少年俠客行如是命矣

起承轉合跋

古人いふ。詩ハ無形の画。画ハ無聲の詩なりと。其無形の画と。無聲の詩を。やらず。遁さず。一座にせしハ。戯作一九十篇舍が作にして。李白一斗。詩百篇の才に異なり。遊客韻を押ば。全盛八文字を踏む。五言絶句の五町農賑ひ。詩を織る錦の夜具ハ。ひとりふす。ことを憐ミ。詩を書し廻し屛風に。蜜夫と寐んことを望ふ。處々啼鳥を恨ハ。いつ來さつしやるの鎹にして。夜來風雨を祈るハ。居續をさせんとする腹なりと。彼が爲に。眞實。晋の七賢か茶屋の二階に。寐言をしるして置ことしかり



吉原於客細見記　十偏舍著　合本全一冊

青樓大黑舞　同

右來春出板仕候御求
御覧可被下候

夢汗二編

自序

倡家昏亂さする情郎は恰韓胴が契の如し天に翔比翼の鳥れ二人が中の寐臥坐に名あり地ニ生ル連理の枝れ植込繁き中庭にあづけこの戀中の樹を薄くする氣ばさみに水をさゝせる櫪丁衾をさせんと氣を揉番新あれバ亦苦利切たる番頭の迎ひも木乃伊取の木乃伊となつて細腰に著せん事を計れども左右れいかぬと張臂に三十二孔の按摩の費もいとわず悟も夢迷ふも夢彼宋人トの樵鹿の梦も妓の情を出不佞が夢も見せるも見るも悉皆夢中の夢ならんと前置して又夢題を書ことしかり

戌のはつ春

梅暮里谷峨述

目録

○第一回　我身をかへりみて無常をおこす
○第二回　猜疑をのこして夢中ニ争ふ
○第三回　倡妓のために雉檀をやぶる
○第四回　赤心をつゝみて怨恨をうける

終

夢汗後篇 妓情返夢解

梅暮里谷峩著

○第一回

人の心と色廓のかわるならひもおり〳〵に散行も花咲も花中に實をもつ病葉にたへぬ思ひもなミ〳〵の夜どにかわる縁ならバうハべのゑんのゑんならねどつとめも戀も世の義理も吹拂ふたる木地の色こりかたまつたる腐縁【妻こと】八郎兵衛さんへモシ〳〵おきなんしなナゼ其樣にねむいことでざんすかねへたま〳〵お出なんしながらほんにワたくしのやうにくろうのたへぬものハざんせん（何かを思ひ出てしミ〴〵となひているところへびやうぶの外よりのぞひて）【氣樂】ヲヤまたこゝにも聖天さまが祭てあるどうしても爰の二階にハせうでん樣がはやるそうだ（トむだをいへどもたれもあいさつなきゆへ）ねるもよかろう（ト云すてゆくを）【妻】ナニねはしひせん【氣】おかしなこへだねなくのかへ又思ふ中の小いさかひか思ふ中になるもうつとうしいものだのまた中へ這入かのよくさバきたがるやつさ（トしたにいる）マァどんなちへじができたへコレ八さんもいゝかげんにぢらしなせへエ、おめへさんもわるいくせだねへ狸ハ通家でハいミやすぜ【妻】イ、エほんにたハひなく寝ておいでなんす【氣】それにおめへひとりでそ

のやうすハ解せぬ法師わがよふな奴のきつ身いかですむとおもつてわつちがのわどこへかいつてかたきしよりつきやせぬから今迄よふうぢくさとひとりぐちをいふなりちつとながひ下の句だか先から泣てへ所だおめへひとりでなかずともだいじのものでもわつちにも泣せてハどふだへおめへもしわい紋太郎でもひかうか　トまくらもとの三ミせんをとれども返事せぬゆへ　紋太郎がいやならばん太郎でひやうし木ヵチ〱としまいやせうか熱燗こひしや吐逆こいしとうたひてへ所だそれでもふせうちかへ【妻】そんなむだどころでハざんせんちつとわたくしが氣にもなつておくんなんしな【氣】アイ　トしべしかんがへて　なんでもおめへの氣になるとはワつちが氣があつちやイ邪間になつてなられやせんいつそのことにわつちが氣とおめえの氣といれかへハどふだろうねそうしたら八さんかいやになつてとんだ女がかわゆくなつたらおかしからう【妻】たのミに思ふおめへさんまでがそんな氣だものを【氣】そふたしなまされてハいちばんちやなしの爺㒵婆㒵でじミにきゝやせうまたあらたまつてふさぐにハなんぞ子細ぞあらんきかまほしやとすりよればベッ、ンサァこれからハしんのまじだ　トはりひじにてりきんでミせる　【妻】イ、エもふしひすめへ【氣】ナゼ【妻】いつたところがおめへさんかたにちやにされたりワらわれたりゐきもねへことてざんすわたくしばかり氣をもめべすミいす【氣】こりやァわたしがあやまりましたはつ山じや〱ホイわたしハナゼ此やうに洒落てへね

へサァすつぱりときゝやすマァどふいふわけだへだまつていてハわからねへサァおとけハ〳〵たいゝなせへ【妻】ほかの事でもざんせんが八郎兵衛さんもわたくし故に内外の都合もわるくなりなんしたそうてざんす【氣】なるほどこれでハむだもひつこんだ【妻】それゆへ今じやァひところのやうにしげ〳〵もお出なんせんこつちにゑんりよハざんせんから今までのとふりにおいでなんす事ハできいすめへかといゝしても人にくろうをかけてハ氣もすまずマァそのことハすてたところがどふもちつとしげ〳〵ハきにくるとおいゝなんすからちからにおよべずほんにおめへさんもしつておるでなんすとふりァノやうにおいでなんすときは澤山そうにじらしたりしらされたりあげくのはてはおめへさんの世話になつてなかゝ直るとモウわかるゝやうになるをひよんなことゝハ思いゝしてもまたばんにハおいでなんすと氣が丈ぶてさんすけれどもそれさへかたときもわかるゝとあじな氣になりいすほどなものが此ごろハよふ〳〵一ト月にかぞへるやうにおいでなんすも何もぬしのためだとわるどめもせずじんじやうにおかへしもふしいすわたくしが心のうちハどのやうであろうかさつしておくんなんし【氣】わつちもこんなにミへてもまたしんミの所ハしんミにせうちしてゐるよおもしろくもねへむだいふもむかしにかわる八さんの身のうへおもひまわせハむねかいつはいになつてむだ所でもねへかおめへかたか日にま

しぐちになるところえおれまでがそのけしきをミせたら涙のたへまもあるめへとせめてハおめへかたの氣をひきたてたく心に思ハぬ口むだと實のねへものとさけすんでくんなさんな【妻】それてもほんにそういつておくんなんすハうれしうさんすおめへさんせへそのやうに思つておくんなんすにマァなんにもしらすァノとふり寐て斗りおいてなんす【氣】おめへも遠慮ぶかいおこしなせへしな【妻】いろ〳〵におこしもふしいすけれどもおきなんせんあんまりおこしいすとのちにハはらをたちなんすわなひところつゝいてお出なんすときでさへめつたに寐なんしたこともありひせんに今此やうにたま〳〵おいでなんすやうになつてからお出なんす度毎に寢てはかりおいでなんすハワたくしにあいそふがつきてのことかとも思いひすすれハすへハとふなることかとかなしうざんすそしてわたくしが所へお出なんせんめへからおとミさんとやらいふふかくいゝかわしなんした藝者衆が何かあるそうさそりやァとふにきゝひしたからいろ〳〵にもふしいすけれどもモッきれたとばかりおいひなんしてくわしい事ハかくしなんすまだ中〳〵きれなんすのなんのといふところでハねへそふでざんすもと來にまさるうら木なしとやらもふしひすからみかえられハしめへかと氣が心でハざんせん【氣】見かへるのとりかへるのと士神が十九文ミせへいきやァしめへしそんなに自由こになるものかな又八郎兵衛さんも〳〵だいゝかげ

んにおきなせへやし寐るにハ内がしづかでよふござへすわざ／＼そう／＼しい所へきて寐るとハおめへさんもよつぽとな人ばなれがしていやす　サア／＼コレサ　もふ夜が明る　コツケコウソラ　鶏がなくあづま男もそふ寐むつたがつてハあひそつかしだ【妻】うつちやつておゐておあげなんしなわざ／＼寐におゐでなんしたものを【氣】フゥ／＼【八郎兵衛】ア、やかましいちつと心よく寐ると思へバ【氣】モゥそのくらいねたらよふござへしやうこれからハあすのばんのぶんをねるよりほかハござへせんぜいゝかげんにせわもやかせるものさ【八】トロ／＼トするよふにおもつたがながい夢をミたよ【氣】マアどんなゆめだへ【八】はなせバながひ事だがとりつまんだところがアノおらがほうの香具屋彌兵衛がしきりにつま琴がところへきておれを邪間にしてなんのかのといゝたてがながかつたつけがとふ／＼突出されるやうになつて氣をもむとおこされた夢といふものは思ひもつかぬ事を見るものだ【氣】夢の手ごとじやアねへかね久しいものさモゥ色あげも聞かねるね【妻】彌兵衛さんとやらハおめへさんの心やすいとおいゝなんした人ではざんせんかへ【八】ヲ、そうサひとかたならすせ話にもなるこんいの中のものだ【妻】それじやアわたくしがおとみさんの事をじやうぢう夢にミるもむりでもざんせんね【八】おとミが事も今ある事じやアなしちつとねんがいりすぎる【妻】そんなにかくさずとも白狀なんし【八】ナ

ンノばからしいおれがかくす氣じやァあるめへし白狀しろもいゝそのことにつけてハぜひはなさねへけりやァならぬすじもある「妻」ワたくしのほうをきれてくれろといふとござんすかへ「八」わるくしやれるぜマァたまつてきゝやナせんどもいふとをりてめへのところへこねへめへからわけのある女たがおとみハそんなにわるひ氣のやつともおもわれんが「妻」おめへさんの欲目てかへ「氣」いゝ所をきめなさつた「八」そりやァとふかしらねへがてめへのこぬめへハ女房に迄もしやようと思つたが此男も知つてるがお富がお袋が大あく心もので評にたへたゆへおとこにからまつていてハほか／＼へのきこへもわるいから得心させてまづきれてしまつた「妻」よくじんぢやうにきれなんしたね「八」そりやァきれねへけりやァならねへ筋があるからきれねへでどふするものだ「妻」マァなんとおいひなんしたへ「八」お富にいふにやァてめへの心いきに何もわるい事もなけれバあいそのつきるはづハねへが腹をたつかハしらねへがこゝのところをよくきいてくりやてめへもしつとるとをりこれまでだん／＼お袋のしかたがそでねへてめへも女房にしようなろうとまでいゝやくそくハしたかお袋のゐるうちハまん足にとくしんもしめへしといつて連て迯られもしねへまたなんたいをいつてミれハおふくろの手をきつたらどふともせわをしてやろうといはゞあいそをつかしてわかれるかおふくろと緣を切る二つ

よりほかハねへ万一お袋とわかれようといつたところがきけバやしない親とのミ猶さら恩もふかけれハ今人になつた迚露道にまよわせてハ第一てめへのミやうりかわるしそれをしりつゝすゝむるおれハ不義の中の不義のつミそれもいとわねどそふいふ不孝な者を内へ引いれてハおきまらず世間もすまぬすれバ末のとげぬことゝくしんつくてきれてしまへバ心がやすいお袋をからめバうらむやうなものゝそれといふかゐんのねへのだとあきらめてくれろとよく〳〵わけをいつてきかせたら何もいはずに泣てはかりかわひそうにおれも女房にまでしようと思つたをおふくろの悪心ゆへきれるのたものを泣れて見ればあんまり心もちハよくハなかつたよ【妻】そりやァそうでざんしたらうともそれからどふなりいしたへ【八】お袋の理屈ゆへ何ともいふともならずよつぽどせつなくわかれてしまつた所に手めへのところへわけがあつて來るゆへそれで狂言をかゝれてつきだされたのだとしやくるやつがあつたそうでァノ内氣な女がごうぎにおいらをうらんでゐるといふ事だ其上におふくろが金にしようと例のあく心でいろ〳〵手をつけしやくるとのうわさまた外分のわるひとでも出來ねへけりやァいゝと思ふ【氣】イヤモけしからぬことね作氣のあるおふくろもあれば有ルものだ トそでをかざして身ぶりをしながら 評だへ〳〵よろぼいながらほかへハいかじとおんもふす トツハトキヤレイケ〲ト もしこゝへふりこんできたらマァおゐら

んハどふしやうとおもひなさる〔妻〕どふいたしいすものかなおとみさんとやらがわたくしと心やすいといふでハなしたとへさうでもいまさらどふなるなるもんでざんすまたお富さんばかりほれられてほかのものにハほれられぬといふわけもありいすめへわな〔八〕その氣ならおれもあんどだがァ、いふお袋ゆへたしかにつれてきてむづかしをいふを手めえ手ごとにのせられてきれてくれてハたちがたねへから〔妻〕はからしいそりやァきづかひなんすななんぼわたくしのやうなばかでもさうもなりひすめへわな其かハりおめへさんのとだからほかにいくたりかゝり合があつてもさきをきらせてもわたくしハきれへせんからそう思つておくんなんしむりに義理づめでわかれるやうになりいすとしんでしめへす〔八〕そうことわらずともいゝわなあんまりきれ口をきいてそのとき死ぬがいやになつたらおかしかろう〔妻〕おかしかァながひめでごろうじいし〔氣〕何にしてもおゐらんがそうどきやうがすハつてハおもしろし〳〵サァ〳〵これからおらゝもいつてちんぎるべい中よくおやすミへさらばいそぎまいらうづるにて候此するハウつちがやうなどくしんにハきん句だね〔妻〕ヨゥむだばかりおいゝなんすモシユあしたハお歸へしもふしいせんでもよふざんせうね〔氣〕どふともの黒主しかし番頭さんがまた迎にきやしやうぜ〔妻〕おめへさんもながしなんしな〔氣〕ながれならどつこひとふんばる氣だがな

かすには毎度氣をもむやつさ【妻】ナゼヘ【氣】なぜへも氣がつゐゝしりきつていながらおかむ伊勢やさんを　トゆびをさしわらふ【妻】ヱ、モふざけなんすな【氣】ふざけるといへバ此屏風の畫の臥猫を見るにつけ此ぢうのミこみすがたでおかしひのがござへした【妻】またしたにお出なんすのかへ【氣】そう邪間にすることハなしむづかしをおこすと氣樂さん／＼といゝながらそんならむづかしのときばかりの氣樂かへ〽ミな人の世にあるときハ數ならで浮にハもれぬ我身なりけり【妻】ヱ、モそうではざんせんわな【氣】トいつてむりに一チばんはなしてハいかねへけりやァ氣にかゝつて寐られねへそのかわりにはなすとじきにいきやすマァきゝな此中わたくしがいる向ふのざしきでァノ竹芝さんが屏風をくるりと引まわしてはいるから晝中どうもがつてんがゆかぬがひやうきんな子だからかゝるわざのまねでも大かたするであろう今とびあがるか／＼とミてゐてもいつこうなものさハテそんなら地色のみでもかくのであろうに其様にきうくつにせずともよささうなものだと思ひながらサラハきもをつぶさせてやろうとそつと屏風のそバへいつてミると何かおとがするからいよ／＼がつてんがゆかずかんがへてゐるうち妻戸がうむならにワたしが手をひゐてゆきばからしいふざけなんすなとごうぎにしかるからマァ何をしているのだといつたらうつちやつておきなんしくらう症だとはじしめるけれども例のはやがつ

てんにもかひしきわからねへすじゆへいわざァいつてゐるといつたらヱ、モ摘草をしてゐるのでざんすばからしいときくときゝねへこゝがおかしいム、つミくさかおらァなにをしてゐるかとおもつたとまづのミこみすがたをいつてれミたががつてんがゆかぬやつさよふ〳〵かんがへつけてミた所がこいつしらみをとるのだと思つて其摘草をおらがほうでれ猪狩といふといつたら【妻】ばからしいかわいそうにそんなむしがおりいすものかへ【氣】マァまちねへそれをァノ子がほめるうちがいゝ【八】なんといつて【氣】なるほどそれもさういゝなんすれバいゝね猪とやられ草の中がすきだそうでおいらんの屏風の畫にもいろ〳〵のくさの中にかくれて寐ておりいすからくさをからねバ猪もてへすめへねそんならしゝがりのときハまづくさからさきへかりいすかへといわれてまだがつてんがいかなくなつてきたがなんのことだときくもごうはらだからやつバりきいたふうでァノよふにたてこめてせつなかろうにつミくさをせずともいゝ事にとおさきまつくらでやりやしたそうするとばからしいたれもすきでもしわしいせんたれしもつとめの身のうへじやァするとをしねへけりやァ怪我をしてれなりいせんといふからわつちがム、なるほどさうだろう塩だちとれとつちがせつねへれどうだへ【八】身をこらして神いぢりと見たな【氣】アイサどうもおかしなあいさつで氣がすまねへからよく〳〵せんさくしてミ

ると【妻】ばからしうざんす【氣】アノ竹芝さんもつミくさをするやうかね【妻】アノやうに見へてもよつぽどとしをくつておいでなんす【氣】名ハ竹芝ならあたりめへ鎌でかつきるやうかね【妻】イッソ毛深ふざんすとき【氣】そんなら女の黒髪にハ大象もつなぐといふからその毛てハ歸ふ／＼といふ土神をつなぎハとふだへそうすれハむだにならぬ理屈だせ【妻】アノばからしい【八】よふむだをいふ男だはなしにかゝると飯を食ふもわすれるぜ【氣】こんどこそほんまにいぬるしやサア中よくやすまんせ　ト京だんをつかいしキれながら行【妻】どうしたらア、いふ氣になられへせうね【八】アレモいつとくよ手めへとうぞしたか目ぶちがはれたぜ【妻】かなしいとがあつたから泣ひした【八】そんなにむだに泣たらまさかのときなミだがでめへぜ【妻】おめへさんも氣さんしなとをおいゝなんすとふりでたま／＼きなから其様によく寐てばかりおいでなんして人に氣をもませなんす【八】こういやァロ功者にいふやうたがめへどのよふに毎晩きてせへあきたらぬやつがコゥ隔てミれバ内にいるときハ猶更こつちの事をかたきしもワすれることなく寐ても寐つかず夜深くなれバあたり近所がしん／＼するにしたかつて心細くハなるし段ミ考てミるとろくな了簡ハひとつもでねへそれても神や佛も見捨きりにもしねへかしてァ、またばかな事をと思ひ直して寐つくと夜の明るかひとつ其上一ト頃のやうでもねへから世事にハ

せめられほんにあけしい間もねへ今の身の上コゥ手めへのそばにいてミれバ心もおもハすおちつくやら寐る氣てもなくッィねてしもふそれといふか苦勞するからのとだろうよ腹か立ならかんにんしてかならずワるく思つてくれるなよ【妻】ヱヽモそういふ譯を聞ひすれバうらミつらミもはれへしたモゥそんなもつてへねへとをいつておくんなんすないとゞ心が引いれへすうつりかわるハ世のならひとハ言ひながらナゼ共樣な氣になりなんしたかとおもへハうきよがうらめしうざんす【八】コレ〳〵泣きやんなもとハといへバミんなおれかふじたらくからおこつた事ゆへたれにうらみもなけれども唯氣にかゝるハ手めへのせんどはなしたにハ月の經水をミねへといつたがマアどうなつたはなしてきかしや【妻】アィ共事をもふしいしやうと思へバ胸がいつぱいになつていわれへせん【八】ムヽマア醫者にでも見せたか【妻】アィおいしやさんにもミせへしたが懷任らしくミへるとおいゝなんす心のせへかおなかゞいごくやうでざんすそしていつそなまつはばかりでへすいよ〳〵さうにきわまらバおめへさんの子とワたくしハうれしうざんすがおめへさんの子とひろうするくらひでハ何やかや物入りもひとかたならず毎度のやうならじまんしたり見せびらかし二階のものにもうら山れせうに思へバほんにふたりがなかへやどりくる親子のえんハありながらうすひ緣なる親子どしやミからやミへやることかと泣よりほ

かのことハざんせん トまたなきふす【八】そこのところハおれとてもかわらぬ愚痴ハうかめどもハテまだ海の物とも川のもの共ワからぬにばか〳〵しいさきをくゝつて泣事があるものかとハいへまん一チ子にもせようすでな生れのてめへゆへおろすのながすのと手荒事ハかならずしてくれるなうひめつらひめしやうとまゝよ命あつてのものだねだ又それまでにハいゝ了簡もでようハさ

【妻】アイ〳〵それにまあ聞ておくんなんし意地のわるい科戸さんがもふしいすにハ五ッ月になれバ鬮を引ねバなりひせん八郎兵衛さんの子なら其様にそのとき彼是があつて父なし子をうミなんしてハすミひせんと身に引かけておめへさんをあなどつてはじしめてなりいせんそれだから外の座敷のを ばんとふしんぞうたさしていふ 見るやうにしミ〳〵とした相談もならず心ぼそくつてなりひせん

またさめ〴〵となき出すを八郎兵衛もとも〴〵にくやし涙のはら〳〵〳〵こぼしながらも身を悔て

【八】ア、いつてかへらぬとだ氣なほしに酒にしやう

○第二回

【氣】サア〳〵とんだこと〳〵 トいひながらかけくる【八】なんだ此男ハ氣がちがつたか【氣】氣もちがわね

ば見ちがひもせぬ例のお富 チン〳〵チン〳〵〳〵 「八」なんだなわるく洒落るぜ「氣」うハきをいへばかけとやらほんに今こゝへおとミか大手をふつてきやす「八」ほんか「氣」此期になんのうそをいひやせう「八」ひとりかとこその茶やてもつれてきたか「氣」茶屋も居る様子だか科戸さんかつひてきやす「八」わけのわかつたとハいひなからおれかあつてハむつかしひおらァとなりさしきへ行からこんたいゝやうにしつてるとふりさはいてくたせへ「氣」せうち〳〵しやァねへせうし〳〵た

トむたをいふまもなくお富ハ茶やを引つれて科戸か案内につまことかさしきへ入ハらへを下へと八郎兵衞氣樂もろとも今更に余所のさしきへ迯込あとハつまことゝ只さしむかひ

「お富」何かおとりこミなやうすて氣のとくてこせへすね「科戸」ナニよふさんす「とミ」おめへにハおふきにおせわになりやしたこれかつま琴のお座敷かへ「科」アイそこにいなんす妻ことさんてさんす「とミ」おゐらんはしめておめにかゝりやした「妻」となたかそんしいせんかよふお出なんしたね「とミ」チットおはなし申たいことかあつてまいりやしたがマァゆるりともふしやしやうコレおめへハ新造さん方でも揚ていゝやうにしておくれ「茶や」ハイかしこまりました ト行「科」わたくしハ客人てさんすからいつてめえりいせうねゆるりとおはなしな

んし【富】そんならいつておいでなせへやしほんにマァおゐらんにハわたしがことはお聞およばれもござへしやうが富といふものでござへやすうけ給ハれバ八郎兵衛さんがおめへのところえ立ひきなすつておめへもひととふりならずかわゆがつてあげておくんなさるそうだがおふきにおかたじけなうござへすと申たいかめへわくでござへやすどふぞいつぞハお禮に參りたい〳〵と思ひ〳〵てよふ〳〵まいりやした【妻】そりやァマァよく心かけてお出なんしたねしかしさうおいゝなんすおめへさんハ八郎兵衛さんのためにハマァなんでざんすへ【とミ】アイウたしハ八郎兵衛さんの爲にハ二世も三世もかわるなかわらじといひかわしたマァ女房さ【妻】ヘヱヽ八郎兵衛さんにハおかゝさんハねへはづにうけたまハりひしたがイッ八郎兵衛さんの所へお出なんしたへそふいふことならなんぞいわつてあげればよふざんしたいつそきのどくでざんすね【富】何もそのやうにあそびなさることハござへせん八郎兵衛さんの所へいついかうともいくめへともおめへかたの世話にハなりやせんたとへ親達がふせうちでも神や佛がゆるさずともヌハどこの人が邪間をしやうとも心と心の約束をしておいたればこれにうへこす事ハござへせんきりやうがいゝと思つてあんまり大づらをせずとだますがしやうばいなら商賣のように人の男をよこどりをせずともかけかまひのねへものをだましなさるがいゝなんのあそべれるやくで

いなから人をあそぶも氣がつよい【妻】おいゝなんすとふりいやしいつとめハしておりひすがいやな客にハ身をまかせず思ふ客さへはじめのうちハ只よそ／＼しくあいそむれど後ハたがひの實くらべ死のもいとわぬやうになりいすはわたくしはかりでハざんせんどの女郎衆もおなしことでさんすなんほうそかせうはいとやらでも實をつくすことハならぬといふことでもざんすめへおめへさんと八郎兵衛さんの中かとういふふかい中かハそんじいせんかおめへさんも迚もほれなんすならほれとこのねへほとほれなんせハいゝほれなんしやうがかひねへやらわたくしのほれるすきまかさんしたからッィほれへした【とミ】なんほすきまかあらうかあるまいが男めつらしくハあるめへし何も人の男にほれすともいゝとてござへす【妻】人の男ならいゝかげんに氣をおもミなんしまた八郎兵衛さんにほれてゐるひとこれまできたもさんせなんだ其くらひ大事の男なら内へ引つけておゐてこらうしいしわたくしが所へおいてなんすれハわたくしか心で私が思ふまゝにほれへす此上も人のせ話にハなりいせんおめえさんも今しやァきれなんしたやうに聞ひしたかあんまりみれんらしうさんす【富】それんでなくてとうするものでござへすあきもあかれもせぬ中をきれるやうになつたもミんなおめへのわざでござへすから此わけをつけねへけりやァなりやせん【妻】わけをつけるといつてどうなんすのだへ【富】しれたこ

とさおめへのほうの手をもきつてワたしが連て歸りやす【妻】ヲヤこわらしひことをおいひなんす手をきられるとかたわになりひす　富．おめへのやうな顔のうつくしい心のおそろしいものハ手をきつて見せものに出したらよふござへしやう【妻】ほんにおめへさんの心いきハおそろしくざんせんね人を見せものにだそうとハ【富】なんのかのとあいた口だとつていひなさる事ハござへせん八郎兵衛さんも〳〵だ何もかくされたりかくれたりすることハござへせんなんのもつともらしく人をば義理づめにきれやうとハなさけねへとあきれて見たりはらがたつたりしやすあんまり虫がいひといふもんだおめへもかくさずともいゝかけんに八郎兵衛さんをおだしなせへしな【妻】ヲヤばからしい何がおめへさんがこわくつてかくすものでざんす【富】なんぼおめへがそうしらをきつてもァノ科戸さんとやらに何もかも聞てめへりやした【妻】たとへ八郎兵衛さんがお出なんして歸へらうとおいひなんしても私がおかへしもふすことハなりひせん何もおめえさんがおかミさんといふものか親類方といふわけでハあるめへしワたくしどもの中よりくらゐなかでいながら何もその樣にこわいことばかりおいゝなんすことハさんせんほんのそれが口づうへといふもんでざんす【富】ヱヽモどういやァ。こういふと口おしい ト齒たぎり〳〵いわしてなく 【氣】おめへがたハなんだマァおとみさんいひかげんにしなつまらねへといふもの

だおれも今迄ハといふ理屈かと出る幕にハちつとはやひト思つたからひかへていたがあんまりばからしくつてきひていられねへマァあたり近所のめへといふをしんねへなイヤごうさらしな【富】おめへも如在もなくつてそんな生のろいことではごぜへせんあたりの氣がねを思ふくらいなら內に居珠數でもつまぐつていやすよく〳〵なればこそはじをかきに來るくらゐじやァはなやかに白いとか黑いとか譯をつけねへけりやァなりやせん【氣】ハテわるひ合点だ元トがおふくろの理屈からおこつたことじやァねへかおめへもせうちのうへできれてしまつていまになつておもひ出したやうにむづかしをいつたとつてつまらぬといふものだたしかに誰にかしやくられて來たらうそれじやァあんまり智恵がねへぜ【富】おめへまでが今さらそんなことをいゝなさることハねへ知恵があれバおめへがたにこういひやうにハされぬのさ先から氣をつければァノ屛風のなかに八郎兵衛さんをおきながら

ト立あがりびやうぶがらりと引あけ八郎兵衛と見るよりひざにかつぱと泣ふして

何もそうしてくんなさることハねへはづたなんでも妻琴さんとやらをきれてくんなせへし【八】コノべらぼうかきゝわけのねへよさねへか【富】いやたいやでこせへすサァわけをつけなせへしそれもならさァいつそおめへの手にかけてころしてくんなせへしどうでいきてる內ハ

おめへかたの邪間をしねへけりやァなりやせん【妻】邪間をなんすなら心まかせになんすがいゝわたくしもつとめのいきはりてもそひとげもうされねへたちひせん【富】たつともすれるともそりやァおめへのすきにしなさるかいゝか八郎兵衛さんハわたしがつれもふしていきやすこれを緣きりと思ひなせへしサァうち〳〵せすともわたしといつしよにきなせへやし

トむりむたいに引立行と思へハ次の間のふすまをおしあけて

【氣】八さん〳〵おゐらん〳〵【兩人】そんなら夢か【氣】わたしもゆめてくるしんてふつとめさめてよふすをきけハおめへさんがたのうなり聲【妻】宵にうれさのおとみさん【八】こゝへふりこミ【氣】三ッかなわ【妻】つめむらきの其中へ【氣】わたしがいつてもやつパり濟す【妻】八郎兵衛さんを引立て【八】ゆくと思へバ氣樂子が【氣】がてんゆかずとおこすのも【妻】おこさるゝのも同じ夢【八】ハテかわつた事も【三人】あるものじやナァ

▲作者曰此おとこ何者といふ事をしらず諸君子察しを待のミ

○第三回

【妻】モシヱ秀我さんせひおめへさんにいわねバならぬことがさんすがどうもはづかしくつて

もふしにくふさんす〔秀我〕ハテたひをかさねてくるくらゐでハ善悪ともかくしてくれてハうらミだサァ〱いつて聞かしや〔妻〕ほかのとでもさんせんがヱヽどうもいゝにくうざんす〔秀〕ヘテ内氣な女だ〔妻〕そんなら思ひきつて申しいせうね〔秀〕ヲヽサ〔妻〕つとめの身の上にあるめへはづかしい事でさんすがわたくしハ身おもになりひした〔秀〕何もそりやァめづらしくもねへいくらもあることだなるほどおらがやうに遊びにきても酒ばかり呑でるもいもあればまたしつふかなものもあるゆへ思ひもよらすそうしたとにもなるも尤だがあいてハだれだ子をなすくらひでハ定めておぼへがあろう〔妻〕アノはからしいしれたとてざんす〔秀〕ムヽそんなら人の子をはなすからハおれにきてくれるなといふとか〔妻〕ヱヽモそんなとでハさんせん〔秀〕ムヽそんならどうしたわけでマァたれか子だ〔妻〕アイおめへさんのさ〔秀〕ムヽ酒ばかりのんで居るァノおれか子か〔妻〕思ひこんで アイ〔秀〕なるほどこういふつとめの其中でハ夜と日毎の客のかすいやと思へバ猶更にしたしき人を心の噂わするゝひまもないからハおもハずゆるす氣のうごきないことゝも思ハれぬが何もまたおれが子にせずともよささふなものだ

口うらきいてつまことハしバしうつむきいたりしが何思ひけんずつとたちいでゆくすそをしつかととらへ

「秀」コレきつそうかへてどこへゆく「妻」どこへゆかうとかまわづにこゝはなしておくんなんし「氣」こゝではなさぬ下たにいや名高き女郎のつま琴か父なし子を孕だと評判あられ世間へすむめへ「妻」それゆへにこそ「秀」無分別かハテ若とハ言ながら跡先しらぬ氣ごじかさ「妻」はづかしい事いひだしてせうちのないうへからハかねて覺悟の此身のうへ「秀」ハテおもひこんで手つよくも云ひにくゐのも打捨て嘘にも仮にもおれか子といゝかけられたかうれしさに相談つくならどうともしやうハさ「妻」何かのわけもたゞさすに「秀」とふするものた引受て世話をするからあんどしや「妻」うれしうざんすかさりなからひょんなとからおめへさんに物入りかけるがいつそきのとくさんす「秀」ハテのりかつゝた船ならバとうするものたマァ内證へも其譯を一ト通りはなすてもあろうかかけ合ところへかけあふもなれぬと故よい樣にしてくりや「妻」くわしいことハ科戸さんか知つてお出なんす トいふところへよく科戸來ル「科」秀我さんかへひさしふりてさんすね「秀」これからハまたつゝひて來ル「妻」今よひにあけへせうと思た所ニテ聞ておくんなんし何かのこともおはなし申ひしたらせうちなんしたおめえもとも／＼よろこんでおくんなんし「科」そりやァようさんしたね「妻」猶又くれしひことハおめへ秀我さんにはなして聞せ申でおくんなんしな「秀」そりやァゆるりときいてもいゝか世話をするくらゐてハこれ

までのことハしかたもねへ今日からハいやみらしいことか一分一点外にあつちやァきりかへさせねへけりやァならぬかせうちかへ【科】そりやァ氣つかひなんすなたとへ外に深くお出なんす客人かあつてもこうおめへさんに引受て世話をしてお上なんすからとのやうな人でもわたくしかあげさせハしいせん【秀】おめへかそう請合てハ安堵ださあこれから其口のひぬうちかたき役と出かけておれか腹心の病ひを見せようとつまとちよつと手をミせや何も其やうにいやがることハねへ見せろといへバミせろ　トむりむたいに引よせほりものを見る　コレ此ふるてや八郎兵衛とかいてある此彫ものいつそ見ずしらすなら打捨るといふこともあるがしつたどふしハ猶更にわけかたゝねバ世話もしにくしことにハ別而懇意の中かうなつてミれハえんさへあれは女房にもしめへものでもなけれハ猶さりにして置にくひ【妻】シテ八郎兵衛さんと心やすひとおいひなんすおめへさんのほんの名ハなんと申いすへ【秀】おれかおれが名ハ富栄町にかくれのねへ香具屋彌兵衛といふ男でごんすといゝてへ【妻】そんならおめへさんがあのかうく屋彌兵衛さんでさんしたか【彌】何もそのやうにきもをつふすことハねへやつハりありふれたおとこさかでんかいつたらけしてしまや【科】ソレごろうじいしとうて末ハとけぬことにうまれもつかぬからだへ疵をつけ今になつて目かさめなんしたろうそれといふが何ともわたくしへかくしなんすからろくなこ

とれさんせん何も其様に泣なんしたとてどうするものでざんすはからしいそれよりはやくけしてうたぐりをはらしなんしなたとへ八郎兵衛さんに心かのこつても内證でもやかましくいつておいてなんした故とうでとけてよぶことれできひせんし見るかけもねへいまの身の上らちのあかぬことに義りたてをせすともこういふときこういひしほにわかれなんすか身の仕合願ふてもねへことてさんすれ【妻】其ミすほらしくなりなんしたもわたくしかわざたとへいやても今になりつきだすとれあんまりなふにんじやう彌兵衛さんのさつしなんすところもはつかしうさんす【彌】なるほとさうきけバまたもつともそのいきしかあれれこそむかしよりしていま迄も此くるわのたつとささりなからけさねバ済ぬおれか心けしてれたゝぬふにんしやういらさる脇から入ぢゑせすとけすもけさぬもつま琴が心まかせにしたがいひとれいふものゝマァけすかたが互のためこのほりものさへけしてしまへバおれが心も雪解の水流にきよき胸のうちあらたに思ひをつもらせてこりかたまらせる氷橋跡でれわれて化すのがたとへしれても【妻】ヱ、【彌】ハテばかす狐に咎れなしばかさるゝ身のおろかさと我身をくやむよりほかれねへれな【科】マアどふなんす【妻】ことさん【妻】なミだとともにやう／＼と　アイけしひせう

トいふよりもはや科戸がはからひ二世までとなか／＼盟ふこゝろ根をゑやれいふきのさしもぐさゆかり

の人の名のうへにつもる思ひをもゆる火のいつかけふりときへうせるそのせつなさも男のためと心ひとつにしべども忍ぶをもるるなミだの實

【科】此とふり灸で八郎兵衛さんの名ハきえてしまいひしたからうたかひをはらしてお上げなんし【彌】なるほどこう手づよくはからハずハかたがつくめへかたがつかねバつまるところハてめへのなんぎとハいへいらざるつミをつくつたよ【科】おめでた酒をわつさりとなんとのもうじやざんせんか【彌】目出た酒やら泪のさけか酒ハうれへをはらふといへバ酒にわすれてしもふのもけつくおとこへ【妻】ヱヽ【彌】此おとこへ心の實がとゞくやらとゞかぬことかそれまでハまたバ甘露の日和を見るがマァとふせいといふものだサァハつさりと一ッのまふ若ばや藝者をよびにやりやといや【禿若ば】アイトゆく【彌】アヽきくたびれがした馬鹿な トそらへらひハヽヽヽヽヽヽヽ

○第四回

【九重】つまことさんどうでもそふいふ身でハ氣ぶんもわるふざんせうがそんなに何かをおあんじなんすことハざんせん惚たおとこのたねをもつとハ願ふてもねへ事でざんすおめへさんう

れしくれねへのかへそんなにふさがすともちつとはつきり氣をお持なんしな【妻】うれしい事ハ嬉しくつても其うれしいに百倍ましぬしの子と披露もならずそして八郎兵衛さんと秀我さんがしつたどうしといふことハ夢にもしらずせんどおいゝなんしたこともあつたから秀我さんが彌兵へといふをはやくしつたらしやうもやうもざんせうが。今となつてハこれとてもしかたがなしもしや彌兵衛さんとしりつゝよんだとおもひなんしハしめへまだ其上にしばらくもあハれぬやうにもなろうかと涙のたへまハざんせんさつしておくんなんし【九】それもやつぱり男のためおめへさんもぢよさいもなくつてうハべのことにきをもますといつ〱迄も秀我さんの其つもりに人にハいつておきなんしどんなわる氣なものがあつて秀我さんの氣をわるくさせめへもんでもざんせんたとへ秀我さんがかまひなんせん氣ても世間といふものがざんすからほんに人の氣ほどかわりやすひものハざんせん【つま】おかたじけのふざんすほんにひととふりにハきゝいせんァノ彌兵衛さんハそのよふにやかましくもおいゝなんせんかわりに科戸さんがふたりめへ八郎兵衛さんのことを彼是いつてなりひせんほんに口惜うざんすめへどのやうなら何かにつけ人の口の端にかゝりなんす事もあるめへにとおもへば歯をくひしばりなく それだとつて主の子だとおもへバむごひ事もするがいやそんなことをさうだんしてへにも硯にむかへバ涙がさきだちい

ろ〳〵に氣がくるひす【九】てうどわたくしが松架さんのときのやうだと思へバ身につまされてかなしうざんす何事も身二ッになるまでハひよんな氣をおだしなんせずにあとでハ亦おめへさんの氣にあることでざんす【つま】アイ〳〵

むかしの派手に引かへて今ハ古手屋八郎兵衛古着に紋ハかハれどもかわらぬ中をたのしみに世間へ見へもうちすてゝ只一トすじにいそ〳〵とくる顔見るよりつま琴ハ物をもいわず泣出す

【九】ヲヤ八郎兵衛さんがお出なんした（トつまことが心思ひやりともにあハれと泣出す）【茶や】コレハ〳〵おゐらんがたマアどふなさりました【八】ア、ツイわすれてきたすぐに駕籠をいれさせておいてくりや【茶や】ハイ（ト氣をとふし行）【九】ナゼデさんすへ【八】あしたハ大〻構はやく出ねへけりやァならぬ今月ハ構親だ【九】あしたはやくかいんなんしてもよふざんせうハな【八】ぜんてへこん夜ハこめへと思つたがなんだぜ【九】これもやつぱりおめへさんの事でざんせうハな【八】ぜんてへこん夜ハこめへと思つたがなんだかしきりに來たくなつたからきてミれバへんだぜ【九】これもやつぱりおめへさんの事でざんすハ妻ことさんそのやうに泣すとも八郎兵衛さんに相談していゝ知恵をおかりなんしな【つま】お出なんせんうちハ心づようぞんじひしたがをりもあらふに今も今迚うわきをして泣て斗りおりひすその中へおいてなんしたとだものをこれがなかずにいられへせ

うか【八】久しぶりできた物たからすこしかなしいことがあつても泣顔をミせすともわらひ顔をナゼミせてくれぬ　トいわれて久ふたり共しきりになく　【つま】わらつて咄すことならようざんすけれともマアどふしてもこんやハおかへし申いせんからおめへさんもおちつひておくんなんし【九】早歸りといづれおいひなんすから床でゆるりとはなしなんすがよふざんす△此うち九重がさしづにてそう／＼とこゝをとらせ其身ハ拾をバありてしりぞく跡へ出し物おくり物なとあれどことしけきをりやくす　【八】なんだかおかしな氣になつたつま戸さん銚子をもつてきな【つまと】アイトもちきたる　【八】此子もなくぜ九重さんといへバおもいれ泣たうへにまた泣顔をかくしてそう／＼行おれもわけハしれねへがあたり近所で泣立られてはつゞかねへなんでもマアいつばいのもふ【戸】ぬるうざんすがあつためてあげへせう【八】そのぬるひほうがいゝサア一ッついでくんな　トひきかけ一トロのミむせるむねをたゝきながら　モゥこゝの内の酒ものむなといふしらせか　トいふをきくとゝなたく　どふもがつてんがいかぬなんでもこれにハやうすがあろうなくすじがあるならばわらふことばかりひとつにせすとうきも倶／＼かたり合ナゼおれにもなかせてくれねへあの瞼ひ水とまりのことハどふなつた【つま】サア其事でくろうをしいす【八】そんならいよ／＼腹任にきハまつたか【つま】アイ此くる月が五ッ月なれどおなかのおびもせまひかとまよふ心を九重さんつま戸さんもとも／＼に心切にいつておくんなんすに是非なくも彌兵衛さんに世話をたのミんした【八】ッノ

彌兵衛といふハ香具屋のか【つま】そうださうでざんす【八】アノ香具屋の彌兵衛にか そりやきこへぬぞよつまとうそにも今までわけありがほでよんだでねへかいつから彌兵衛がくるかしらねへがせめてはふミのたよりにでもこふいふわけて彌兵衛かせわになるとしらせてよこしてもばちもあたるめへむしがしらせるかくれバこそうそはぢかいてしまふといふもの二階をひろた其あとへなんにもしらずにくるならばつまごとさんハ御病氣引こんでおいでなさりますとよそ〳〵しくいわれてもがてんゆかねバあひてへときをもんたとてあわせもしめへ其時のめんぼくなさハいきてもしんでもあらりようかいつてかへらぬことながらおとみがこともおふくろのわるひとおれが意地ばりも元トハといへバてめへにまよつた心からッイ手づよくもはからつたをわかれてよりハおとミめもそれをきにしてわづらひ出しとふ〳〵それがもと〻なりしんだとのほのかのうハさ　つらひ心のおれともしらずつながれてより朝夕もアノおふくろの氣がねやら世間のめへといろ〳〵にやすひ心ハなかつだらうに今ふびんぞとめがさめても何をいふにもあとのとそれゆへこそぐハんぜんにきのふのあだと思ハれしもけふハ我身へめぐりくるひづミなき世の車の輪ア、おとみがおもひばかりでもい〻ことハねへはづだ【つま】そふ思ひなんすもさら〳〵むりでハざんせんはじめから秀我さんが彌兵衛さんといふ

ことしるならばなんのこれまでよびいせうせつべつまつて名もしれる深切(しんせつ)らしいとのつたハこつちのあやまりでいゝたひとハかすぐ〵ざんすが今もふしいしてもうたぐりなんすうへからハたくミのようにきゝなんして猶更(なをさら)にくしミもつよくなりひせうと思いゝすから彌兵衛さんにまかせる其譯も身二ッになつた其上でおめへさんのとくしんのゆくやうにしておめにかけひせう何とももまゝならぬうきよゆへとかならずわるく思つておくんなんすなへ

トなミだとともにいゝわけも心ありけとおもひてもせきたつむねもあたりもあれバ

【八】ァ、愚痴(ぐち)もいふまい〳〵しねしなふかわるまいとのいゝやくそくの水になるのも人心ながれのミでハとさらにかわりやすきハめづらしからずァノたとへたれがすすめやうともたのもふともこつちの心がすわつてゐれバこふいふ身にもなるめへと思へバたれにうらミもなく人にうらみもあるよふに一づにはらがたつたゆへくたらぬこともいふてハミたが萬一おれが子にもせよこのざまでひろう所か見くびらるゝもむりでもねへたゝ此上ハ彌兵衛が氣をとりそこなわぬやうにして身二つにしてもらふがかんじんてめへ其ようにミへてもいつたいマァ氣のよわひうまれゆへきがねばかりするしんていい勤(つとめ)の身てミもちになつたをはづかしくおもひ思ひてひよつと産後(さんご)の血(ち)のくるひあるめへともいわれぬからそんなとハくにせずと心をたしかに平せいの

身もちもまめがいゝとかいふねるときもきうくつに第一ハたべものをずいぶん氣をつけ大事にして安産(あんさん)したとよそながらいゝミをせかせてくりやどふてこれからハあハれもしめへしあわれたとてこられもしねへなんぼ人の子にもせよ心づけもしたけれどまかせぬ此身ひよんな客につなかれたとあきらめてかんにんしてくりやとふでもふ此世であふこともあるめへえんがあるならミらいにて又あふこともあらふかとせめてハそれをたのしみにワかるゝが此ヾのはなコレ〳〵

其やうにないてくれてハたちはをうしなふコレサ〳〵

　ト なミだの名殘(なごり)むねをたゝひて男なきこなたもなミだにくれながら

【つま】 モウ〳〵そんなことといつておくんなんすなせつのうさんすかりそめにも其ワかるゝといふことぐさハかなしさつらさあるともあられずこういふことをみになとしらせてあげらヾもしも又はやひわかれにならふかとおそくあふのをちからにしてけふまでくらすはかなさをすこしハさつしておくんなんしミくびるのかワるのと思ふ心があるならヾ此やうにせつなくもさんすまひおめへさんハこれきりにきれやうとも思ひなんせうがきれぬ〳〵きれへせん思ひあふた中〳〵ハ世間にいくらもありながら神さんやほとけさんの何かにくうて私ともばかりおいじめなんすかたとへ此上とのやうにうきかんなんにあふともわかれることができいせうかおなかの

こともそのことも思ふこゝろハありひせん

トかくごのこともまたもとりわつとばかりになきふせバしじうを聞て九重ハとなり座しきをしあけて

【九】それでハかいつてぬしのためになりひせんもれてハことの大じでざんす今宵ハおりもてうどよくどふではなしハつきいすめへがしバしのわかれをおしミなんし【八】その心ざしハうれしいが今ワかるゝせへなミだのたねいれバゐるほどたがひのふためあんじるよりうむがやすいといゝながらうゐざんなり何かの氣がねひよつと血のミちもあらふかとあわれぬ身でハ猶さらにあんじる心もひとかたならすミれんなものとワらわいでとも〲心のおちつくよふ何から何まで心づけてやつてくんなせへいらざることだがたのんだぜ【九】氣づかひなんすな【つま】あれあのやうなことをおいゝなんすものをと　ひざにかつぱとなきふす　【若者】アイ彌兵衛さんがお出なされました

大尾

聖乎實近人

野干竇這入叙

粧于賣物吉原之花視于百貫之形編笠茶屋之雪景色有於于山屋豆腐之楓有於于竹邑寂中月四時之佳興無以盡乎越十返舎主人偶然採毫而書盡之是其搜妓館之巣穴而命以謂竅這入者乎於青楼弄屋街之寓居

菊河亭主人題

（印）カゲユキ

自序

和論語曰。野干雨を愁ふとハ。朝歸りの濡るを厭ふにや。伊勢物語に。夜の明バ。狐に喰で鷄をと。後朝の別を怨む。青樓狐の巢穴に侔じ。擧是天窓の九郎助稲荷。玉垣ならぬ籬の中。鼻筋の享し野干。客を抓く掌の働きハ。王子土產の狐に侔く。身仕舞房室の照广鏡に。妲己が化の皮を現し。釣よ〳〵信田の杜に。葛の葉の形を失ふ。されバ本間の床に契あふ。ひとつ竇の狐ハ。美男の狐にして。倡妓の下馬に登り。鼠栗間に小言をいふ。尻聲のなき狐は。醜夫の晝狐追出さるゝに至る叓あり。狐拳の村長の如く。堅くなつて是を看れバ。居續の居風呂。屑

壺かと思はれ。贈物の饅餅。馬の糞かと疑ふ斗。恐べし晦日の夜。狐の灸困究して。遂に尻尾をいだすことを。是を以かの古狐が。混緞手管の秘事は眉毛を濡し給へと。虎の威を借る狐作者。化されぬ顔にて。いふ事しかり

維時享和二壬戌稔正月青樓仲街角之丸伊之樓上におゐて

十偏舎一九識

狐曾道入

四

署篇

第一　野干の由來
第二　後朝の口舌
第三　玉章の性根
第四　次日の空氣
第五　終夜の實情

上件

青樓奇談狐竇這入

十返舍著

○第一章

此に吳王が姑蘇臺。幽王が望邊臺よりも。青樓に名たゝる。紀の字屋の臺に集る。西施あり褒姒あり。黃帝是が爲に製る指南車の歎息其矣〳〵の聲ハ。屏風の裡にきこえて。唐人の寐言。鼠栗間に喧し。由是お釵を賣る子房あれバ。一片羅を脫超無恒あり。大門を閉たる金の威光にハ樊噲が力も追ばず。只錢を貨とする花街の活計にハ。伍子胥も脂を喰へて引込べし。さればバ長者の万燈も。此さとに忽消えて。貧者の一燈侍の作。お釋迦の手を開帳するに至るべきか。理なる哉一角の花にハ唐土の吉野を移し。南鐐の祝義にハ。長安一片の月に愛る心地になん。春秋の佳興こゝに盡すしかのミならず。雪の夜の肉屛に寒さを凌ぎ。夏の日の竹夫人に暑さを拂ふ喜見城の逸樂にハ。樂天ほどきの髭男も。剃立の天窓青苔に似て禿の肩にかゝり。住吉の神寂たる兀親父も。本間の出舟に棹さして。衣〳〵山の帶をしながら。俱に遺感の

情に沈む。さりや。棄がたく遠がたきれ。色慾の一條なり。此にところれ何地にやありけん。万福屋吉太郎といふ富貴の賢子株。三浦やの全盛玉の尾に深く擾合。倶に龜霍の思ひをなし。ちよ萬代の末を契り。けふしも爰に宿傷の客のさしあひ折あしく。名代座敷に獨寐の枕をかたふけ。垂眠し夢の中に。露白髮かひ結たる。やんごとなき翁淨衣の袖ひちて。何やらん荷擔せ爲ふをよく〱見れバ。玉の尾が紋所枝菊を畫たる。吊燈と釣鐘とを一荷にしたり。只の親父と見へたるれ。此吉太郎が日頃信心したてまつる。王子稻荷の御神體。九善の御位備らセ爲ふ御身すがら。吉太郎が枕上に近付たまひ。汝倡家に入ひたり。仮初の色香に迷ひ。諂諛人を欺くの舌頭に狃され。晝夜の娛樂に家業を懈怠し。親々に苦勞をかけるのミならず。その身も石を抱て淵に入るを。糸瓜とも思れぬは。近頃麁忽千万なり。我烏羽僧正の筆跡にれあらねども。斯の如く娼妓の紋所を畫たる。吊燈と釣鐘とを。一荷にかづき出たるれ。汝に異見せん爲の思ひ付なり。是を其方が眼よりミれバ。いづれをもつて重しとするや。ソリャおめへしれたこと。釣鐘れ千万斤の重さなり。是に競るに吊燈微塵の如しといれんが。左にあらず。釣がねれゴンといふ響にも百八煩腦を消滅し。菩提心を起しめ。二六時中人間の用とすること間斷なしそれに此吊燈れ。巧言令色を以て蠟燭の眞とし。不仁不義の妄火をうつして黑光を照す。

此あかりを目撃に探寄ものハ。石の枕に臥て。忽然其身を害ふなり。故に此てうちんの罪ハ重きこと。泰山に尻を搩し。富士の山を跣足になす。況や釣かねの百や二百。是に競ものすれバ。豆と酒陶のごとく。手玉にもとらるゝなり。汝この一條を會得して。自今妓館に洒落ること無用なり。我是を示さんがために。かづきにくきものをかづきて。態ゝ是まで顯たり。釣鍾も張籠にハあらず是見よと。御杖をもつて。ゴン〳〵ハけふあすばかりと打せたもふ。誠や神ハ正直に渡らせ爲ふがゆへに。凡俗の疑ひなきよふにと。これらまでに御氣をつけられ。さバや〳〵とのたまへバ。數多の末社狐火を點じ。道路を拂つて神去せ爲ふ。御うしろかげ伏拜むと。夢見て其儘覺てげれバ。吉太郎奇異の懐をなし。年來信仰し奉る。稲荷の御告心魂に的中し。是迄の放蕩なるを後悔して。初て倡家の薄情なるに心附年月玉のをに馴染たる。縁も最早今霄限あな淺猿の女郎買。恐しの魔界やと。自後運に歸宅の用意をなしにける

○第二章

既に春の夜の明なんとする頃。仲の町の門松に横雲の簾かゝり。注連縄と倶に引榮し。暖簾に春の風匂ふ。曙のむらさき。所縁の色をふり捨て。朝歸りの客の數〳〵その中に。三うら屋

の客【吉太郎】トてつおなんどに。わりさんせうの小もんをおいたる。なんぶぎぬの小そで。八丈の下ぎ。いかゞしけんはをなし。くうちゃあんのふろしきづきん。ゑりにまきこ。女郎やの男におくられ。中の丁のちヤヤへかへる【ちや屋女房】これはおはよふございました【ていしゆ】たゞ今おむけへをあげましたに。どふまちげへましたやら【女郎ヤ男】吉さんさやうなら【吉】ヲイ御くらう。コウきさまけへつたらの。きくの戸さんにそふいつて。おいらが羽折を。ちよつとよこしてくんなせへ【女房】こつちらへいらつしやいませトなかのまへ火ばちをなをす。此内ゑせさきに。てうづをつかい。なかのまへなをる【女房】わたくしはおめへさんのことで夜前から内に。大きにしかられました【吉】なぜへ【てい】承ればおざしきへ。臺ができませぬといふことでござりますが。左助がどふいたしましたやら。惣花を遣はされたもんでござりますから。お禮に出たそふでござりますが。肝心の臺をださぬといふは。さりとは不埒でござります。なぜにそのとき。じきにそふいはねへと。夜前からお才をしかつておりましたが。今も左助をよびにつかはしました【吉】ナニサとりこミで。わすれたものだろふから。もふうちやつておきなせへ【てい】イエ〳〵おめへさんはよふでも。わたくしがすミませぬ。かさねてのためもござりますからト此内むすめ盃をいだす【女房】ちと二かいへいらつしやいませ【吉】イヤけふはそふしてもゐやすめへ。すぐにけへりやしやう【てい】ひとつめしあがつて。おけへりなさいませ。コレ藤すけや。おとふふがよかア。たつぷりとあげさつせへ。サアお

才。お二かいへおつれ申しや　ト吉へいなりの御しめしゆへ。心をあらためしことなれバ。しきりに。かへりたいそぐといへども。いまだ女郎やよりはをりをよこさず。ぜひなく二かいへ上るト。此内女郎やの若イ者の

【左助】コレハおはようございます【てい】左助どんか。コレ貴様ハ吉さんのおざしきへ。臺を出さなんだそふだが。とふしたもんだ。出さずともいゝといふわけてもあつてか。其わけをいわつせへ【左】たゞいま。喜兵へどのに。これハこのちや屋の男の事そのことを承りまして。わたくしも。びつくりいたしました。ゆふべハ客人のとこで。大もめがござりまして。失念いたしたと申すも。おかしなものでござりますが。どふいたしたやら。はつたりと【てい】イヤわすれたじやアなをすまねへ。コレきさまたちやア。お客が氣にいらねへので。そふやすくするのか。たゞしれ。ちや屋がきにいらねへのか。あんまり人をばかにするといふもんだ【左】イヤもふ。いちこんもござりませぬ　これハ正月はつがいのことゆへ。惣花をやつたところがわかいもの。だいのものをいだすことを。わすれたるゆへ。ちや屋のていしゆ。きやくへのまへが。すまぬとこのいさくさなり。此内あいかたのおいらん。このはなしをきゝて。まはしざしきへ行てみれバはや客へかへりしあと也とんだ。せきこみたるよふすにて。ねみだれがみに。くしのはもいれず。ねまきゐしやうの上に打かけをきて。しんぞうに。きやくのはおりをもたせ。こまげたかた〳〵と。ちやゝの内へ。かけあがりながら

【玉の尾】吉さんハ。どふなんしたへ【てい】吉さんどころか。おいらん。おめへさんもすこやせぬ。ゆふべおさしきへ。臺が出ぬそふでござりますが。吉さんハあゝいふおかただから。なにもいやァさつしやらねへが。おめへさんおしよくもしてござる人が。いハれねへといふこたア。よもやありそふもないもんだ。ナゼそふいつて下さりませぬ。コレ左すけどん。もふか

さねてから。おいらがとこの客人ハ。そつちの内へとつてハ。おくらねへから。そふおもわつせへ【玉】わつちも今。そのことをきゝいして。ほんにびつくりいたしいした。なぜかゆふべハ。さつぱりその事にやァ。氣が付いせなんだが。吉さんハ。はらをおたちなんしたかへ【左】イヤもふ。大きに無調法をいたしました。そのくせ。きのじやへそふ申ておきましたが。あつちもわすれまするし。わたくしも又。内所に取こんだことがござりまして。ついそれなりに。きがつきませなんだ。どふぞ吉さんへよろしく。おたのみ申ます。もふ是から。客人もおくらねへとおつしやると。わたくしも暇をとるよりほかァござりやせんから。どふぞ。こゝハ御りやうけん【てい】ソリャァもふ。いくらいつたとつて。あとのまつりで。麥わら細工の唐人笛を見るよふに。むつかしく。ひねくることもねへから。一通りハいふものゝそんなら。マァ吉さんへ。そふ申ておかふから。まづ歸いせへ【左】さよふなら。よろしく【玉】コレこんたァ。けへつたらの。きくのとさんに。ちつとのま。おたのみ申いすといつてくだせへトいふへ・うちにあつゞけのきやくがいろゆへ・それをたのむとのことなり吉さんハ二かいにかへトすいつけたたばこを・一くちふたくちのんではたき・すぐに二かいへかけあがりに吉さん。ぬしやァばからしいよ。もふちつとのま。待てゐておくんなんすりやァよふざんすに。なぜわつちに。さたなしにおけへりなんした【吉】ざまァ見ろへ。お才さん。きいてくんねへ。ゆふべおめへのし

つてるとをり。ねつからこつちへ。かほだしもしねへで。やう〳〵と。ひけ過に。ちよつとつらァミセたなりに。きえてしまつて。とふ〳〵けさまで。よつつきもしねへくらひの眞實(しんじつ)な女(ぢよ)郎衆(らうしゆ)に。ナニいとまごひもいるものかへ。それだから。夜のあけるをまちかねて。けへらふとおもやァ羽折(はをり)がなし。それで。このなりで。かけだしたのだが。女郎衆がやすくするものだから。わけへものまでが。見くびりやァがつて。嘉例(かれい)の臺(だい)も。出さねへとおもやァ。腹(はら)ァたゝねへが。げへぶんがわりい。しかし。こんなことのあるのが。えんのきれるはしだろふさ ゆふべこのおいらん外のきやく人に丸印しのつがうがあるゆへ・吉太郎がざしきをあけたる也しかしこれハ・霄に・さうだんしたるとあるゆへ・吉もしやうちのことなれどももはやこれぎりに・このこゝろゆへきれるつもりにてわざとやかましくいふ・おいらん・きもをつぶしたかほをして・たちそち・目もとになミだをもちて 【玉】ヲヤおめへさん。なぜそんなことをおつしやりいす ト此内下に客人のこへがするゆへわざと 【女房】どなたかお出なすつたそふな。吉さん。ちつと御めんなさいませ。おいらんおたのミ申ます トわざとはづして下へおりる 【玉】ゆふべおめへさんの。さしきをあけへしたれ。霄(よい)におはなし申いした通り。權さんのほうが。よんどころねへことで。ソリヤァ是までもあることざんす。なにかのせわになりいす。權さんのこたァおめへさんも。しやうちでお出なんすじやァおざんせんかへ。それに。ゆふべにかぎつてはらァおたちなんすこたァおざりいせん。よくかんげへても御ろうじいしおめへさんとのなかァそふいふわけじやァおさんせんにへ 【吉】ヱ、やかましいわへ。そし

てけふれ。さだめて權がゐつゞけだろふから。はやくけへるがいゝ。おらァもふこれぎりだ。ヱヽつらァ見るも。いめへましいト わざときづよくいふほど。猶すがりついて。なみだはら〳〵【玉】ついぞねへ。なぜそんなにおつしやりいす。おめへさんの氣がすまねざァ。權さんをきれて。しまいゝしやうから。どふぞきげんをなをしておくんなんし【吉】ヱヽしらねへわへ トつきとばされてなたと兩手をそでの下へまわし。しつかりとすがり付【玉】わたくしがわるかァかんにんしておくんなんし。おめへさんのこゝろのすむよふに。どふでもいたしいすから。どふぞ。けふはゐておくんなんし。一生のおねげへざんす【吉】インニャ用があるから。けへらにやァならねへ。そして。きさまも。權がまつて居よふから。はやく内へけへるがいゝ【玉】わたくしはもふ。けへりいすめへ【吉】かつてにしろへ。おらァけへる トこゝろつよくもぐつとふりはなして。いちもくさんに下へおりるト。おいらんれ。わつといつて。なきたをれる【てい】もふおけへりなさいますか【女房】喜兵へや。おゝくり申ていきや。ハイさよふなら ト此うちドにふりしんがもつていたりし。はをりをとつてかへるト【しんぞう】おいらんれへ トうろたへて二かいへあがり。ミれい。せうたいなくなきふしているゆへ。【新】もしな。おいらん。どふなさりいした トこのこえにちヤヤの女ぼうもかけ上りて【女房】ヲヤどふさしつたへ【玉】いつそもふ。しやくがいたくてなりいせん トくるしきていに。ふたりしていろ〳〵かいほうするうち。かふろきく次つかいに來りかけ上りて【きく次】モシヘきくのとさんがおつしやりいす。權さんがね　おいらんのとこじやァ。どけへいつたとつて。いつそやかましくいわつしやるから。はやくおけへりなさりいしッサ

【新】おいらんのとこじやァ。今しやくがおこらしつた【女房】大かたゞ吉さんが。はらをたつて。おけへりなさつたもんだろふから。モシおいらん。ちつたァよふございますかね【玉】ついぞねへ。吉さんがしんに。はらをおたちなんしたから。わつちやァはつと。おもいゝすと。じきにさしこミいした。もふよふざんすよ。吉さんハおけへりなんしたかへ【女房】今おけへりなさいました【玉】どふいたしいしやうね。もふ是ぎりでこねへといゝなんしたから。わつちやァもふ。どふも。氣にかゝつてなりいせん【女房】ナニそりやァ。客人のくせでおざいますハな。口(くち)へだして。もふこねへと。いハしつた客人が。こずにいたゞためしやァございませぬそれゝも。おめへさんの氣がすまざァ。今に喜兵へを ゐどにつかハしますから。おふミでもおあげなさいませ【玉】そふいたしいせう。どふも。きがすミいせん【新】權さんがまつてお出なんせうから。もふおけへりなんしな【玉】せわしねへ。まちなんしな。權さんのせいで。吉さんにはらをたゝせ申いしたから。ちつたァ。またしておいてもよふざんす。エヽもふじれつてへのふ トはしごを下へおりるト【てい】おけへりなさいますか【玉】又のちにめへりいしやう ト折ふしおいらんのかほを見て なき大こくを見さいな もてにはやしたてゝ【大こくまい】いイちに俵(たはら)をふんまへて。二イににつこりわらつて

下愚といへ共。道心なき事。能ざるの古語侔く。万福尾吉太郎。前禍を悔ミ。ふたゝび傾國の地へふむまじと。はやくも家居に歸けるが。去にても凡夫鄙情のあさましさ。中宿より屆たる。玉の尾が封じ文。見るに目の毒。さわるに煩悩勿然おこり。何事をか書つらんと。ツイひらきミる文言に

○第三章

御かへりのほど心ならず。わさ／＼御とハせあげまいらせ候。ゆふしはさて／＼。よん所なき御事にて。御はらをたゝせ申候。御かへりのふしも。かなしき御事のミ。しんに／＼。つらき御わかれいたし。今に／＼。それのミ心にかゝり。けふしハたゞ／＼うちふしおり々／＼また／＼。けさし御まへ々御おしへにハ。こなた事。心かハり候やうに御申。もはやこれぎりと。御心つよき御ことば。しんに／＼御うらめしく。夕しの御事ハ。かねて御はなし申候とふりのわけゆへ。何かのつがうに候まゝ。かならず／＼。あしく御くませ下さるまじく。こなた事　心にかハり候御事ハなく。たゞ／＼。御まへ々ばかりをたよりにいたし。もはやねんもわずかに候へバ。一日もはやく。御そはへまいりたく。それのミたのしミくらし。

ことに。いなかの母のかたへも。御まへ様御事は。はなしいたし置候へば。今さら。見すてられ候ては。こなた事たち不申。かくごいたし候より外はなく。しんにかなしくぞんじ上ら〱し。あれしきの御事にてあいそを御つかしなされ候。おまへ様の心とはしらず。こなた事は。いちづにおもひくらし。此間にては。髪のゆひよふまで御まへさま御おしへのとをりにいたし。おるい様に これは女のかみゆひ吉太郎久しききやくにてかみゆひまでも しつているゆへかく名をあらはして。かきたると見へたり なぶられ。それに。けさしより。ひとりないており候へは。松やまさんが。また。ふうふげんくわを。しなんしたのかと。なぶられ候て。いとゞかなしく はなしをするよふにかく文言。ながきふみにはぜひあるやつにて。いつでもこゝが大根のところなり。これ心におもふたけは。ふでにまはらぬゆへかく。はなしのよふな文ごんをかく また〱八重ぎく様も このやゑぎくといふは。此おいらんのじつのいもふと也 くらうにいたし。わたくしないており候へば。おなじよふに。ないてばかりおり候ゆへ。さて〱。むねが一ぱいになりら〱。御心のするにも。少しはふびんと。御くませ下さるへく候。御しらせのとふり。まいにち晝（ひる）まで。茶だち。しほだちを。いたし候も。たゞ〱御まへ様の。御心かはらぬよふにとのねがひにて。かくまでも 御したひ。申候事。この身のいんぐはとぞんし。とても。これぎりにいたし候事は。いやにて御ざ候まゝ。いつれにも 此ふミとゞきしだい。ちよつとも。御入らせ下さるへく候。ぜひ〱。たとへ一日なりとも。御まへ様の。にようぼうになり申さず

候ハでハ。わたくしのかほたち申さず。夕し。権さまあてつけて。御申なされ候御事も御さ候ゆへ。今さら見すてられ候てハ。それミたかと。いわれるがくやしく候まゝ。くどふも〳〵。これきりにいたし候御事ハ。いやにて御ざ候。それとも。ぜひ〳〵。是ぎりにもはや御かよハせなき。御心に候ハヾ其よし御しらせ下さるべく。とても。かくごいたし候身に候へバ。せんもし御めにかけ候。くしとかうがいハ。おきんさまへハ。はゞかりさまながら（此おきんといふハ。吉太郎がいもふとにて。まだ十ばかりのむすめ也。坂東おむめがもんていにて。おどりいたつてきやう也。折ふしくハんをんまいりなどに。吉太郎とつれて。よしハらへもきたり。おどりなどおどりて。此おいらんとも心やすく。おいらんさ。すへハ吉太郎がところへ行つもりゆへ。このむすめをかわいがりて。人形など。おくりしことあるゆへ。かくハいふとミへたり）わたくし。かたミに上ヶ申たく。また〳〵御まへさまへも。あげ申たきしなも御ざ候まゝ。せめて。かうしまでなりとも。ちよつとも。御かよハせ。下さるべく候。それがわたくし。いきていぬ。せうこにて御ざ候。御いとまごひにもふ一度。ぜひ〳〵。御げんなし申たく。あとやさきまハらぬふてにて。心せきかきちらしまいらせ候。よきに御よミわけ下され。いづれにも。御返事まち上まいらせ候。あら〳〵めで度かしく

たきゟ

たんなさま　参る

（だんなさまとかき。又おいらんの。しろうと名をふミにかくこと。ミなさま。御ぞんじのことなり）

吉太郎此文を見おわりて。心神有頂天に飛去ければ。つれなくいひし一言も。心の内でハあやまつた。稲荷さまの詫宣さへ。糸瓜の皮の皮財布。よしからつぼにするとても。かゝるせつなる心根を。見捨るも不便也と。日のくるゝをぞ待ゐたる

○第四章

王照君か漢宮万里月　前賜。楊貴妃が梨花一枝春帯雨といふ。容形もかくやとおもふ斗。思ひになやむ。三うらやの玉のをがおもてざしき【玉のを】火ばちの向ふにすへり・ばらつきたるかミを・たけながにてくゝり・そのおもひのかにつき・月もとあかくはれて・うつとしきよふす・そばにしんぞう・かふろ・今すんだといふ・ぜんぶ・とりかたづけている・もつともひるまへのざしき也此内へヤもち・そめさと・くちに・よふじをかミくだきながら・はいりて【染里】權さんハへ【番新きくのと】今湯へおへゝりなんした【染】玉さん。何をおふさぎなんす【玉】どふもづゝうがしてなりいせん【染】そのはづざんす。ゆふべハ。ひさしぶりで。吉さんが。お出なんしたもんでざんすから【やゑぎく】ヲヤ吉さんがお出なんすと。いつそうれしがらつしやるものを。ナニそれで。づゝうがさつしやるもので【染】づゝうのするわけハ。まだおめへさんがたア。しらつしやらねへよ【やゑ】それでもわたくしやァね。吉さんがお出なんすと。いつそ。うれしうおざいますよ【きく】おめへさんがうれしがりなんしたとつて。吉さんハなんともお

もやァなんせんから。あんじなんすなよ【やえ】ナニそんなことじやァおざいません。おいら
んのとこでれ。きがミじかくて。わたくしどもが。いたしいすこたァじれつたがりなんして。
いつそしからつしやるがね。吉さんがお出なんしたときやァ。どんなそゝうをいたしいして
も。しからしつたことが。おざいませんから。【玉】【染】ヲホヽヽヽ【玉】そめさとさん。
わつちやァとんだ。くらうになることができへした【染】なんざんす【玉】アノゆふべ。權さ
んのことで。吉さんがいつそ。はらをたちなんして。もふこれぎりでこねへといゝなんしたか
ら。もふ。それが。きにかゝつて。くらうざんす【染】ナニ吉さんがソリヤァほんの。いゝぐ
さでざんしやう。おあんじなんすこたァおざんせんよ【玉】ほんに。どふしたらよふざんしや
うか。じれつてへのふ　トうつむいて・そで口からでゝいるいとを引はつているトきつそけの客【權七】中ぐらひのところの・だんながぶなれども・いたつてふひとがらにみへ・もつとも・かねはゆミづのごとくつかひ
て・此おいらんのいちきやくなり・左の手におびをかゝへ・右にきもののまへを・あわせたなりにつまをとり・しんぞうにゆかたをゝたせ今ゆからでたといふ・あかいかほつき【權】どふだ染里(そめさと)さん。久しいや
つだが。やつぱりいつミてもうつくしいの【染】ヲヤようしく申ておくんなんし【權】コレば
あさん。ちやをいつぺいくんな　トおいらんとしそだけ・わざとばあさんといふ・此きやくいつたい・しこなしたふうにて・火ばちのむかふに大あぐらをかき・おいらんのかんざしをぬいてミゝをほぢろ・おいらん
少しわきの方へよる【染】おめへさんも。玉のをさんを。ばあさんたァ。あんまりざんす【權】なぜへ。あ
のかほのしわを見なせへ【きく】それでも女郎衆れ。としまのほうがおもしろへといふとざ

んす【權】としまがおもしろへかしらねへが。おいらが。このばあさんなんざァ。ゆふべも。なんのこたァねへ。けんぽ梨(なし)てあけた。鼻(はな)の穴(あな)を見るよふに。すう〳〵いつて。ねるばかりだ【染】いゝかげんにおつしやりいし。ドレいつてめへりいしやう【權】コレあそびなせへ。けふれ茶飯(ちやめし)でも。なめしでも。おのぞミしだいだ【染】又今にめへりいせう ト出て行と。すりちがつて。ちやゝのおとこ。おくりものをもちきたる【權】藤すけか。てうどいゝじぶんだ。八めをおこしてきさつし。よくねるやつだ【やえ】わたくしがそふ申てめへりいせう トたつて行。此うちわかいもの。すゞりぶた。てうしさかづきをいだす ト一座八兵へ。尤このきやく人の神也。目をこすりながらは入り【八】ア、よくふせりました【權】目ざましにやらつせへ ト盃をさす手にうけて【八】ヲト、、、ごうぎにごミのあるさけだ【權】一九が銚子(てうし)から。つれてきた。げいしやをよびにやろふか【ちや男】藤四郎のことでござりますか。此ごろのはやりこで。けふわたくしどもの客人と。ゐどのほうへめへりました【八】時においらん。ちとあげやせう【玉】わつちやァおゆるしなんし。いつそづゝうがいたしいす【權】どふぞしたか。でへぶ。いろがわりい。コレ八や。きかつし。ゆふべかの吉のやろうめが。きをつたもんだんて。こつちも意地悪(いぢわ)にかゝつて。おいらんをひつつかめへて。からつきり。あつちへやらずに。おいたもんだから。ごふてきにおこつて。けへつたといふことだ。なんぼ色男(いろおとこ)でも金(かね)のゐくわうにやァ。たてづかれねへと見へるハ、、、 ト此客

（人ものゝいゝよふから。なにから。少しきほひはだの所もそへて。なんでめじよくみた。大ぜいつかう所のだんなと見へたり。」と同じはたけにて。）【八】そいつはごうせへ〳〵【權】コゥおいらん。なんぼきさまが。かわへかつても。吉やらうめはもふ。なげへこたァねへから。おもひきつてしまわつし【玉】ナニ吉さんだとつて。べつに。かはいゝといふこたァおざりいせんが。なぜまた。なげへこたァねへとおつしやりいす【權】聞きやァもふ。でへぶ。しミつたれなふうをしてくるといふことだから。おきのどくだが錢(ぜに)のきれめが緣(えん)のきれめだ【八】その。吉といふのは何かへ。蜆(しゞミ)とりのかゝとをそるよふに。なましらげたかほの男かへ。それならゆうべ。らうかで。ちらと見かけやしたが。べらやァねへ。やらうの駝鳥(だてう)といふもので。いつそぼろを。ひきずつてゐやしたは（トおまへつひしやうに。やたらにわるくいふ。そのをにとりつき）【ちや男】もし。いろ男のふるくなつたも。つまらねへものでござりやす【權】ナニつまらねへこともねへのさ。あれでも。吉のやらうめハ。三味(しやミ)もちつたァ。やらかすそふだから。壹文づゝ。もらつてあるいても。ひだるいめハせぬといふものだハ、、、、（ゆふべ。すこしのむしんを。きいたをはなにかけて。むしやうに。いろ男をやすくいふ。さきほどより。おいらんのむしにさわり。こらへていたりしが。今ハたまりかねてずつと。立にかゝる。ひざをおさへて）【權】コレどこへ行のだ。吉がことをわるいつたとつて。そんなにはらァ。立こたァねへよ【玉】なぜへ。はらがたちいす。吉さんはわつちァ。でへじの色おとこざんすから（トずつけりといふきやくはむつとしたるかほにて）【權】こいつ。ひらつたくやらかすの。てめへたちのよふな。はした女郎に

やァ。なるほど相應な、色おとこだ【玉】わつちらァはした女郎じやァおざんせん。てうど。三分の女郎ざんす【權】コレエ。あんまり太平樂をいふなへ。きさまのあたまのぎり〳〵から、あしのつまさき迄じやァ。そんなおいらがしているのだ【玉】ソリヤァしれたことざんす。そのかはり、おめへさんのよふな。ふけいきなおとこを。だいてねて。上いすれな【八】コウおいらん。あんまりだ。權さんに。何ふそくがあつて。ちつとおくちがすぎやすぜ【玉】コレぬしやァなんざんすへ。權さんについて來なんす。神じやァおざんせんか。くちがすぎるたァ。ぬしの事ざんす。せんこく吉がことを・わるくいひしゆへ・おいらん・これをむねにもつて・八にてづよくあたる・すゝそよつて【ちやや男】モシおいらん。どふしたものでござります。あんまりものゝおつしやりよふが【玉】なんだへ。こんたァちややのおとこじやァおざんせんか。何もこんたしゆの。しつたことじやァおざんせん。だまつてゐなんし。ふけいきな【權】目くされがねで。うりけへする、からだをもつて。いやァがつて。大きなことをぬかしやァがる【玉】ソリヤァ苦界でざんすから。なるほど。金でからだはうりいすが。心まではうりへせんから。氣にいらねへこたァ。いらねへよふに申いすが。どふいたしいした　此おいらん・こゝのうちでのいちまいかんばん・尤ひらのちうさんなれとも・きかぬきのしろもの・とかたにとつては・大じやうぶ・むかふづらへまはすと・このとふり・おしよくだけ人にもたてられ・一寸とあとへひかぬきしやうなれば・おちつきはらつて・はいふきとん〳〵・へいきのよふすそばに・ばんしんは・手にあせをにぎり・おいらんのそでをひいて・きもをもむ・きやくははや・こらへかねて【權】コノあまァふてへやつだ　トきせるにて・ひと

つくらへせるトばんしんなかへはいりとめる・一座〻なく・なだめるうちにやりてわかいものきゝつけてかけてきたり・いろ〳〵とあやなす・うち・おいらんへずつとたつて・わきへはづす・此さわぎをきゝつけ・へヤもちのそめさと・かねてこの客人とれこゝろやすく・この内でのおしやべり・こんなときにれ・よくでたがるしろもの・ゆふ〳〵とざしきへはいりて【染】ヲヤ權さん。ぬしやァばからしいよ【權】イヤすまねへ〳〵。いゝかとおもつて。ふてへ女郎だ【染】コレサまあ。おすわんなんし。ぬしの氣に似合(にあひ)なんせんよ。何もそんなに。はらァたちなんすこたァおざりいせんよ。玉のをさんだとつて。おめへさんをわるかァおもつちやァ。おいでなんせんものを。ひつきやうが。心やすだてといふものざんす【權】ナニ心やすだても大概(てへげへ)がありやす。おめへのしつてるとをり。何もかも。おいらがせわにッなつていながら【染】サァそれも。おめへさんがしんせつにして。お上ヶなんすから。玉のをさんだとつて。ソリヤァあだにやァおもつちやァお出なんせんわな。これがきのふや。けふのなじミの客人なら。どんなことがおざりいしたとつて。はらをたちもなんすめへし。また玉のをさんだとつて。客人の氣にされることもおつしやりいすめへが。そこがひさしくお出なんす。ぬしの事ざんすものを。たとへせわになんしたとつておんにきせもなんすめへし。又きもせぬといふほどに。ふけへ中じやァ。たげへについ。氣にされることも。いつたりいわれたり。いたしいすれ。ひつきやう心にへだてがねへからの事ざんす。それだからこんなに。けんくれをしなんすのが。やつぱりえんの深(ふか)へのでおざりいすよ　トたていたに水のながるゝごとく・いゝすゝめられ・あ

たまたか きノヽ〔權〕ナニゑんがふけへのあさへのと。九太夫が一りきで。こゞとをいやァしめへし
トもふ。しやれがでゝれ。こつちのものだと。こゝろにおかしく思ひながら〔染〕もしへ。そうてへ客人たちやァ。そんなうれ氣でおいでなん
すもんだから。何ともおもやァなんすめへが。女郎衆ほど。客人の事を。おもふもなァおざん
せんよ〔權〕なぜな〔染〕ソリヤァ玉のをさんも。わつちらもおなじことざんす。客人にふた
いろれおざんせんから。その客人のことを。わるくいわれいすと。むりにはらがたつものざん
す。てうど。せんども吉さんが。ぬしのことを。わるくいゝなんしたときやァけふのよふなこ
つちやァおざりいせん。玉のをさんが。いつそはらをたちなんしてもふ／＼。吉さんをてへ
／＼。おろしなんした。こつちやァおざりいせんよ。〔權〕ハァそんなら。吉やらうめも。お
いらがことをわるくいゝやしたか。ムヽきこへたそんなことで。ゆふべもあのやらうめが。あ
しくされたと見へる。そんならなにかへ。そのとき。ばゞァどのがおこりやしたか。〔染〕お
こりなんした段(だん)じやァおざりいせん。權さんの事なら。わつちやァ命(いのち)でもあげいすくらへにお
もつている。客人でざんすから。あんまりわるくいつて。おくんなんすなと〔權〕しんに。そ
んなことを。ぬかしやしたかハヽヽヽそふきいてれ。かわへそふだノゥ八兵へ〔八〕さやう
／＼。ふうふげんくれは犬(いぬ)もくはぬとやら。性(しやう)れそこらでござりやせう トうれしこなされてくやしくつおくへどさ。かんじんの權が。

もふぐにやついてきたるゆへ・よんどころなく・あはやていろ・かゝるそうどう・染さとがべちやくちヤになんのくもなく・おさまり・これよりさけになりていろ〳〵あれ共・事ながければこゝにはしよる

○第五章

鳥影たへぬ仲の丁に。梁の乙鳥。愛情を囀り。風いたき土手八丁に。曉の霸。執着の聲を震ふ。煩惱の紲ハ。形に景の添ふがごとく。少頃も離れざるハ。此道のならひにして。花街に又もまよひくる。三うら屋の客【吉太郎】こよいぬ名代にて・廻しざしきにひとりねころび・たばこのんでいる・おいらんはやくもきたりて・一もくさんに・よぎのうちへぐつとはいり【玉】吉さんよく來ておくんなんした。しんにうれしうざんすよ【吉】おいらも、ゆふべきさまのしうちが。あんまりはらがたつたから。しよせんもふ。およべねへこつたと。おもひきるつもりで。けへりやァけへつたが。けさのふミで氣がまよつて。やつぱりミれんらしくきたといふもんだが。こんな手のある女郎衆に。かいあつたのが。こつちのふうんといふものだ【玉】かんにんしておくんなんし。そふいつてもおめへさんハ實のねへもんだよ【吉】なぜ【玉】あのくらへのことでこゝろやすく。おもひきられいすくらへなら。こんなに。わつちをまよハせて。おくんなんすこたァおざりいせん。けふハもふ、わつちやァどふしいしやうとおもいゝして。しんにかなしくおざりいした。それにけふハ、權さんハ居なんすし、さつきもおきゝなんし、

いつぞぬしのことをわるくいゝなんすから。わつちやァもふ／＼。くやしくつて／＼。おもいれいつてやりいしたが。あとじやァこんなに。何かのせわになる。きやく人にはがをかゝせたとおもやァ。いつぞ。きのどくでなりいせん。ほんに。おめへさんゆへにやァ。いろ／＼な。つミをつくりいすよ【吉】權がわつちを。何とわるくいつたへ【玉】おめへさん又はらをお立なんしやうから。申いすめへ【吉】いつてきかせな。氣にかゝらァ【玉】おめへさんが。こけへおいでなんすも。もふなげへこたァねへと。いろ／＼なことをおつしやりいした【吉】ソリヤァおいらが。しミつたれでくるもんだから。そふいふも尤だ。手めへの身でさへ。外聞がわりいと。おもつているくらへだけれど。おめへにあひてへばつかりで。來ハくるものゝ。おいらんの身にとつてハ。わつちがこんな形をしてくるのが。さぞげへぶんがわるかろふと。それがどふもきのどくだ ト これハわざといふせりふ也。さすがにちうさんかいなれバ。まんざらのふうにもあらず。されどものハよくても。そうたいひるずきのいしやうつき。たゞきりたての。きん／＼としたる。ふうぞくでたきゆへかくひげしてわざと。ふさぎしていにミせるおいらんきのどくそふなかほつき【玉】ナニおめへさんが。ついど。見ぐるしいふうをしておいでなんしたこたァおざりいせんものを。どふしてわつちが。げへぶんのわりいことがおざりいしやう。よし又。どんなふうをして。おいでなんしたとつて。げへぶんも何もかまいゝすものか。そんな。わつちじやァおざんせんよ ト此うちらう下ぐちにて【染里】玉のをさん。さつきのこたァもふよふ

ざんすよ【玉】もしな。おへゝりなんしな【吉】そめさん。ちつとかほをミせてゝくんねへ【染】そんならおじやまをいたしいしやう トびやうぶのうちに入ル【玉】モシ權さんは。何といつてゐなんしたへ【染】わつちやァね、もふ〳〵。心の内じやァ。おかしくつてなりいせなんだ。もしへ。そのかはり。のちにちよつとも。あつちらへお出なんせんけりやァわつちがわるふざんす【玉】今にめへりいす【染】ほんとうにお出なんしへ。そふいつても。けさからくらうになんした。吉さんがお出なんしたもんでざんすから。今宵(こよひ)はおもひやられいす【玉】ヲャごしやうざんすよ。こんやァそんなこたァいたしいせん【染】ナニおめへさん。あしたァその大きな目が。なをのこと大きくなん〳〵しやう。吉さんいゝかげんに。かわへがつてあげておくんなんし。いのちがあつてのものだねざんす【吉】コリャアめいわくだ。おいらんよりかァ權に。そふいつてくんなされべいゝ【玉】ヲャ〳〵權さんはなんざんすへ。わつちが色がわるいの。目が大きいのと。なぶられいすはミな。おめへさんゆへの事ざんす【吉】おきやァがれ【染】マァいつてめへりいしやう。しつぽりとおたのしミなんし トしやべりちらして出てゆく【玉】コレナいゝかげんに。たばこもおあがんなんし トきせるをとつて。ほうりだし。ぐつと引よせて もしへ。女郎のほれたのは。とんだひつつこへといふことざんすが。そふでざんすかへ【吉】どふだか。おいらァほれらたことがねへから。しりやせ

ん【玉】これほどほれられていなんすものを。わつちやァもふぬしがさげすミなんすだろふとおもいゝす【吉】ナゼ【玉】こんなに。もふどふも。いつそおきのどくざんすよ。ほんにおめへさん。どふぞ。わつちがかゝさんに。あつてやつておくんなんしな【吉】おふくろがきているか【玉】けさ。わつちが氣をもんでいるとけへめへりいして。八重菊さんから。おめへさんがはらをたつていなんすことを。きゝなんしたもんでざんすから。そんならその客人の。きげんのなをるよふにとつて。溝店とやらの。お祖師さまへ。ぐれんがけにいきなんしたといふ事ざんすが。大かたあすのあされ。又きなんしやうから。どふぞあつてやつておくんなんし。しかしおめへさんが見なんしたら。びつくりなんせう。田舎もんといふもなァ。ほんになりにもふりにも。かまいゝせんもんでおざりいすよ【吉】ソリヤァほんとうにあひてへもんだ。しうとどのに【玉】いゝむこをとつて。しやわせざんす。ヲホ、、、ほんに。けさあげへしたふミれ。さだめてよめへせんところが。おざりいしたろふね。わつちやァいつそ。むちうでかきいした【吉】イヤまた。あのふミが大さわぎよ。何がおいらが兄貴のかミさまと。それに此間。いそうろうのおんながひとりあるが。ふたりしてあのふミをひつたくつて。イヤこのへんじをけへてやろふのなんのかのと。ろくにおいらにやァ。見せもしねへ。おへねへばんくるわ

せよ【玉】ヲヤおめへさんなぜ人におミせなんした【吉】ナニ見しやァしねへが。わつちがよんでいるうしろへいつのまにかきていて。ひつたくつてしまつたのだわな【玉】その又。おめへさんのとけへ。きていなんすおかたといふれ。おめへさんのとこのなんざんすへ【吉】ナニそりやァ。よそへかたづいてゐやしたが。さきをりゐんしてけへつたのだから。親のうちがやかましくて。それで。わつちらがとけへきて。かゝつているのさ。今のおふくろのしんるいさ【玉】そのおかたが。なぜまた。ふミをとんなんしたへ【吉】なぜとつたか。それをおいらがしるものか【玉】イヽエそりやァおほかた。おめへさんが。どふぞなんすもんでざんしやうからどふりでこのあへだじやァ。内へいそいでおけへりなんすよ。そのかれり。あしたァおけへしもふすこたァなりいせんから。そふおもつてお出なんし【吉】こいつれとんださいなんだ。あしたれだいぶん用がある【玉】そんなら。わつちかかゝさんにも。あつておくんなんすこたァなりいせんかへ【吉】ナニそりやァあれねへでき【玉】それだから。あしたれとうりうをしておくんなんし　トくびすじへ手をからミつけて　ほんにおめへさんれ。なぜ外に。そんなことをなさりいす。それだからわつちらがとけへ。きなんしちやァ。ねつから【吉】どふした【玉】ヲホヽヽじれつてへのふ　トしがミついてとぎなかぶる

内慾の私に。其身を縛せらるゝ者ハ。遂に。其斃るをしらずとハ。文宣王の確論なり。國を傾け城を傾し漢の武帝。擧色慾の爲に。内主の守を失ふが故に。災害併びいたると有此吉太郎。一回王子の神詫に仍て。その本原に皈るといへ共。遺憾の情忘れがたく。復び玉の尾が深意に迷ひ。妄念の枕に打臥けるが。又もや夢中に王子の神體。出現あつて。此に口詩を吟給ふ

尊兮卑兮抓俠客　脂切髮斷爲巻長
原是賣物倡妓意　汝締褌休成夢中

つゝしめようか〳〵はまる河竹の
　ながれのすへハ借金の淵

吉太郎夢覺て大に駭き。斯る愚昧の身にも。累年信仰し奉りし正報にやと。神意の深長なるを深く感じ。四句の戒在がごとく。心中に的して。再び恐惧し。猶訛を顧て直に爰を遁れ歸宅しけるが。愛情の紲。切てもきれぬハ。その流に溺るゝことの深ければなり。猶將稲荷の慈眼し給ふ。神變不思議の威德に依て。完く本に復したる。其有増ハ來春の後篇に。高覧に入れまいらすべく候目出たくかしこ

狐竇這入後編

青樓日照雨（せいろうひでりのあめ）

十返舍作

來陽

出版

跋

周の鼎も鑄物師の爐にかゝり。秦の玉璽も彫工師の小刀に出ず。擧人の作なす事とや言无。此に十返舎うし倡家の滑稽を帖となし。命て。野干の竇這入といふ。予諂に謂て曰。夫豆腐の田樂ハ狐色に止り。奴の看板。紺々の外を出ず。此小冊。頗古狐の巢穴を扒て。その狂さるゝことを解す。奇とや言无。奇とやいはん。熟れ此は妖怪の巢穴に異なることなくして。一回遭ものハ。冷く手のある事に惧れ。身柱元より慓然して。神靈天涯に飛退。忽情を奪れて迯道を失ひ。遂に自己が身を害ふにいたるとあり。嗚呼怕者の栖所とは云ものゝ。化され安きハ此

道にして。本間の床の和言も。石地藏に語るがごとく。格子先のちやらくらも。案山子に相對するが如しされど予も。昔思へば信田の狐。其尾に取つきて

白銀臺一广呂誌

吉原談語

十返舍著

青樓當時の新手をうがち實情を
あらハしたる滑稽の本なり
合本一冊出來

戌春十偏舍戲作目錄

倡客竅學問	全一冊出來
青樓松之裡	同
素見數子	同
中町雀色時	同

右御求御覽可被下候

狐賓進入

郎の文と書他

廓意氣地序

先師喜三二大人曰。於青樓曲哉。竇識あつて譯知りなしと蓋譯を知つて竅をいふは可也。不知者ハ率痕穴をいふ。是適に。穿窬の罪の其數也。故に十八大通家の口決曰倡客太平樂を演るとも。妓を譽て惡體を吐べしと。虎之卷に歴然たり。痕竅を穿。妓館に忌嫌ふを專と書くハ。其意に悖り逆ふを以て。晒落にあらず無滑稽也。今十返舍が草稿を閲するに。其穴を書ず其譯をいふ。仍而自花實の余情薀積なり。且これを熟察せバ。前禍を觀て其後に。誡を殘する文あるを以て。此に得る所大なりと謂こと爾

鯛絲依識

客 伊三郎

廓意氣地凡例綱目

此書の發る所ハ。傾城虎の巻。二筋道ホ、、、糟粕を振つて書。故に文花。其倣倣するに等し

第一回に。倡妓の原を識るをもつて。遊客是が爲に。仁愛の心あらバ。則大通とも。大粹とも。稱すべきの意味をしるす。

第二回に。傾城の心を奪ふの行狀をあらハす。所謂跡に物を殘し。言を殘して遺感の情を懷しめその意を示すの即妙を以てなり

第三回に。實情を施して。相戀ふの意を起さしむ

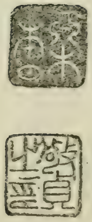
第四回に。すべて人情愛着に逼るの赴きを述て。聊その得失の辨をあきらめしむ

第五回に。通人化して野暮となり。倡妓變じて。愚にかへるの一条なる。意氣地の魂膽手管を著じ。義に因て實有の想にもとづく。其意味の深きを記す。挙是遊戲之中に。悉く功拙を分ち。觀る人の用捨に依て。興廢之差別あるを。朗にあらハすものなり。若九牛が一毛も好士是を得る事あらバ。撰者が偶中の僥幸ならん歟

維時享和二歲

壬戌孟陬吉辰

十返舎一九識



倡客眞話
傳授之卷

鄭意氣地

十返舍戯著

○第一回

梟松桂の枝に鳴き。野干寒菊の本に狂ふ。寂々寥々たる片山里の侘住居。梁垂木も苔むして。軒に吹しくむら落葉、むぐら生ひたる竹椽の臥内を厭ふ破屏風。見る目いぶせき病の床。あるじと見へて五十あまりの女房。おどろの髪を振亂し。疲おとろへしかた手にも。里の子供に手習を。指南車の指さして。教る鳥の跡やさき。廻らぬ處帶も筆一本。むかしの素性顯れて。女ながらも藝ハ身を。助るもまたうき世なり

此にすむ人〳〵は。其以前里見家につかへて。千石の奴したりしに。子細あつてらう人し。此さとにしるべを求めて手習指南素讀けいこに其日をおくり過けるが。夫ハ身まかり後家おやを。其跡をつぐ手跡のけいこ。娘ふたりの其ひとりハ。子細あつて江戸よし原に身をうられ。妹おたみが朝夕のかいほう他事なく氣をつけて。眞身の誠あらハせり

【娘お浪】としの頃は十七。すがたもハごしハひふぬきたれど。つくろハずして。しぜんときりやうの。あてやかなる生れつき。ほぐばりにしたるひばちに。くすりのどびんかけて。あふぎながら モシかゝさんへ。おくすりがあつたまりましたよ。ヲヤよくおよつてござるそふだ【手習子供】いつれをミても山家そだち大ぐちあいて手ほんよミながら。たらう いイろウはァに【口】こんゥ、、、にちイれ。めでエたアく候【浪】コレミんな。ちつとしづかにしなさい。かゝさんがねてゐさしやるから ト此内おもてよりはいるハ。後家おやたが弟。見てくれの太郎作とて。こゝにならてのミだそれ。ちやじきもめんの大ひろそて。ほそおびにすそをはしより。なへすだれをあたにあげて。ぬつとはいり【太郎作】どふだ姉貴ハ。イヤ往生しているな【浪】エヽおまい又そんなことを【太】べらぼうめ。死だことをめでたくなつたといふから。往生しているといふも。やつぱり祝つていつたのだ。時にめしやァあるか【浪】そこにかゝさんのがちつとはかり【太】ドレ〳〵 トめしびつのふたを取 粟の飯がかゝげていらア。膳ハどこだ【浪】出してあげませふ【太】すぐにもつてよこせ。エヽ此がきやアぐつとへしつけろへ。どふせ病人ハくらやァしめへ。ヲツトそれもきらずとゐいぞ トぬかずけ大こんのよこつこうから がり〳〵〳〵 ちやづけめし ざぶ〳〵〳〵【子ども】せんゥじつゥハァ引【太】エヽやかましいがきだ。ソレ靑ばながおちらア。此又新町の見倒やの小びつちよめハ。又してもそこらぢうを。殘屑だらけにしやァがる。ヤイおのりア。塩物やの小ぜがれだな。どうりでさつきから。茶ばつかりのんでけつかる。コリャ〳〵薄縁をこんなに。眞黒くぬりおつたハ。大かた下の町の左官がところのがつそうめが仕爲だろふ。コレそつ

ちらの奴めハ。新田からくる名主どんの甚六だな。ヱ、ちゑのないつらつきだ。そんでもミんごと大きくなつたら。下百性めらをいぢめるだろふくそたれめが。どいつもこいつも。土ほぢりめらが刀作で。きのきいたつらァ。ひとつもないハ、、、〔なぬしのむすこ〕コレそんたァよくおいらを笑うが。字もかけへもしないで〔太〕ばかァつくせ。おりやァ祐筆た〔むすこ〕そんだら此字ハ何といふ字だ〔太〕ヱ、それか。ソリヤァ柄汐といふ字か〔子共〕ワァイ巾といふ字〔太〕ヲ、そふだつけ。ひしやくにしちやァ。あんまり柄が長過るとおもつた〔子共〕ワァイ〳〵ハ、、、〔浪〕ヲホ、、、（トわらひごへに後家〔おやた〕目をさまし）アノけふハ八まんさまのおまつり。もふミなしまいなさい〔子共〕ハァイ（トゑてにほや〳〵わらひがほ・つくえふんこもかたひしかたづけ）〔子共〕アイお師匠さま明日。伯父さんおいとまひしやく〔太〕ヱ、なんのこつた〔子共〕お暇申といふこと〔太〕おきやァがれ。べらさくめら〔子共〕ワハ、、、（とミな〳〵かへる）〔おやを〕太郎こんたァ。此間ハどこへいつた〔太〕わしかへ。上の郷の與五左が。鍬太夫の會をするとつて。そのことにたのまれて。ゑいやつとそれをしまうと。藪の下の三たらめが、新家のむすこをどずきのめし天窓のかけが見へないとつて。新田中の若いやつらが。たづねに行からきてくれろと。それに又。棚田の彌五太が。下の宿の野良七に。鼻柱ァかぶりかゝれてァガ〳〵いつて。ひゆむ

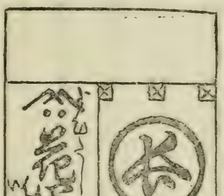
のひゆまぬのとぬかしやァがる。脊高の八太が所でハ。どぶから蛇が出て。婆ミァどのが目をまわすか。摺子木にはねがはへて。天上したと酒やの親仁が。血のミちをおこして大さハぎ。あつちこつちへかゝりやつて。見やしやれ。足が棒になつた。マァそりやァゑいが。姉貴こんたんの病氣も。おれが見脈をひいて見た所が。人參をやらかさざァなをるまいが【やを】それだとつて此貧しい中で。金のいる事ハでき申さぬ【太】ナニそれにも算談があらァ。命が有ての物種だ。ア、それについて。又ひよんなことをおもひ出した。五年跡に。手こねられた。兄貴が煩しやつた時おいそめが言おるにハ。（手こねをあにきといふハ•姉おやをがつれ合のことなり•おいそといふハおなミがあねなり）コレ叔父さんわしをつとめ奉公にでもやつて。其金で藥をかつて。爺さんの病氣を。よくして下されとぬかした時ハ。ほんのこつたが。おらァ男泣に。あつたかななミだをこぼした。ちつぽいなりで。かあいそふだと。留てもとまらずにむりにたのミおる。あいつがよふな孝行なやつハない。ノゥあねき。おなミめもやさしいもんだが。おいそハ又。あねェだけのことがあつたェ、おもひだすとこんなに涙がワァイ〳〵（トどんぐりまなこをむしやうにこすり•ざくろばなをすゝりあげてのそらなミだ•いつたいおなミがあねのおいそをたぶらかして•よしハらへうりこうたあぢをおぼへ•又このいもふとをも•おのがゑてに•引入れんとの下心にて•そろ〳〵とあミをかけておく手段とミへたり）【浪】かゝさん。おまへの病氣のなをることなら。どふぞわしも。姉さんのとこへ。いつしよにいきたふござります。【太】ヤレしほらしいことをいゝおるワァイ

〳〵【やを】イヤ〳〵さきだゝしつた。わしがつれ合ハ義理ある中。それゆへァノながい病氣に身上をいれあげ。いろ〳〵とかいほうするうち。人參代にさしつまり。見かねてあねがわしへの相談。身をうつて共かねを。調たいとやさしい言ぶん。不便にハ思ひながら。恩のあるつれ合の病氣。いかに貧苦にせまれバとて。見てもゐられず。そんならそふかと。なき〳〵相談をきハめた時。あねがいふにハ。わたしこそ勤奉公をいたしても親の爲なりやいとひませぬが。妹がことハかならず〳〵。どのよふなことがあるとても。わしがよふな身にして。下さるなとくれ〴〵のたのミ、それに又。そなたを苦界とやらへしづめてハ。姉めへ義理が立ませぬわしがやまひハなをらひでも大事ござらぬ【浪】それでもおまへがひよつともしものことがあつたらわたしやどふしよふとおもいます【やを】イヤまだ。めつたに死ぬことじやない。氣づかひしやんな　トたがひになミだせきあへず。太郎さくひとりあてがはゝれ。つらふくらしきよろ〳〵と。そこら見まハし。おやたがきたるかいまきに目をつけて　【太】ヲヤァせんどまで紙帳を。かぶつていたつけが。コリヤどつからこんなものを。はへつけてきた油斷のならぬ【やを】コレハわしがこのていを見かねてやら。伊三郎さまが貸て下さつた【太】ハヽツ若いやろうがツリヤァきどくだ。イヤほんに。あねさが病氣を見すてるハきのどくだが。わしも殊によると。遠くへいきます【やを】どこへいくや【太】極樂といふ國へいきます。先立不孝ハゆるして下さ

れハアイ〳〵　ト大ごへあげたるそらなみだ。心のうちではあのかいまき。かみくずかいにね うちさせても二三分はしつかり。なんでもひとちやくつてくれんのもくさん也【やを】コレ〳〵どふしやつた【太】あねきの手まへ面目ないが。下のばくろうが所の娘めを。ちよろまかしたが因果のつくばひ。とふ〳〵腹がこんなになつて。死ぬの生るのとぬかしけつかる。おろそうにもかねがなしわしも男。是非二三分も。さんだんしてやらねばすまず。といつてあてはなし。いつそのことくびでもくゝつて。手こねよふかとおもひハアイ〳〵【浪】ヲホヽ【太】エヽこのがきやア何をわらやァがる。人のこゝろもしらずに。おらアかなしくて〳〵【やを】ひさしいもんだ。いくらないても。こつちにはもふなんにもない【太】エヽこなたまでがそんなことを。こんどのばかりはほんとうでござるは。是がいとまの乞だ　トずつとたつて。ふんどしはづし。ちよいとはりへひつかけてあ りありあふほそおびを。むすびあはせると。あねはおどろきこゑ たか け【やを】コリヤなにをしおる【太】くゝりますは【やを】エヽばかめ。おのれがよふなたわけはないぞ【太】たつた貳分ですてる命。なるほど。ばかともたわけとも見へませふ。あねきさばよ　トぐつとくびを しめにかゝる【やを】コレ〳〵何をしおる　トきもをつぶせば。おなみもかけより。とめる かまわずわざと目たしはくろうしてのどを引ば【太】なんまみ【やを】ばかめよさぬか【太】よしたくても金がない。それとも二三分かしてくんさるなら。死ぬをはのばしませう【やを】ナニ此なかに其かねが【太】かねはあるまいが。そのかいまき【浪】イエ〳〵これはせつかく。伊三さんがもつてきて。下さつたものを【太】そんならなんまみ

トかほをいろ〳〵にしてもがく。あねはまた。たれかりだとはおもひながら【やを】ヱ、おのれはのふ。しかたがない。もつていきや【太】きのとくだがそふして下さい。あしたはじきにもつてくるに【浪】それでもかゝさん。おさむかろふ【太】ヱ、だまつてけつかれァノ伊三やろうめが。又どふで出しおるだろふ。なんでもあいつめは。おなミをはつてけつかるからノゥあねき。そんならちつとのま。かりますべい トたちまちにつこり。かのかいまきをひつとつてかたに。うちかけそう〳〵に出てゆきしなに。入くちのはしらのくぎへかいまきをひつかけ【太】ヱ、いめへましい。こゝの入口はせまくてこれじやァあねきがしんでも。棺桶(くはんおけ)が出ないわへ【浪】アレサそんな氣(き)にかゝることを【太】ヲットあやまつた。そんなら出る〳〵はゝゝゝ トよこちよになつてそう〳〵出て行。引ちがひて入來るはとしの頃廿四五のおとこ。いろじろにしてひんなりとしたるやさ男。もつともゑどものにて名は【伊三郎】いつたい。ゑど何や何がしといふ。大あきんどのひとりむすこ。ほうらつにおほくのかねつかひすてとうぶんこらしめのためとて。しんるいなれバ當地のなにがしのかたへ。さすらへの身ぶん。つミなくて配所の月とは。うけとりにくきどうらくむすこ。ふと此おなミを見そめてはりかけ。きものゝふくろび。せんだくもの。なにかたのミ。そのあたひに。わざとよけいのかぜにおちらはし。ことにあねへよし原に。つとめ奉公ときゝて。約束の上はこのはうへも。出かけるつもりの下心にて。しんせつに何かのせわをしてやり。母おやのびうきたきいにりの見まいにて【伊三郎】けふはどふだね。なんぞあがりなすつたか【やを】おありかたふござります【伊】コリャきのふ江戸から便(たより)があつて。貰(もら)ひやした。味(うま)くもねへものだが トまげもの入のとめがえでんぶをさしいだす【浪】かゝさん。おまへのすきなものだよ【やを】大きにあなたのおせわさまになりますゝこんなに御深切(ごしんせつ)になさつて下さることを。此間江戸の姉(あね)ェの所へもそふいつてやりましたれバ。まだお目にはかゝらぬが。お禮(れい)のふミをあげるから。とゞけてくれろと。コレあなたへも。ま

いつております（トやぶれぶとんの間からふみを出しわたす）【伊】いつ。たよりがありやした【やを】けさほどゑどへいくあきんど人しうが。ことづかつて來たとて【伊】（ふみをひらき）お手すじとつて。姉さまもよくかきなさる。吉原ハ何屋にいなさる【やを】コレお浪。いつぞやの本ハどこにある【浪】これかへ【やを】それ〳〵。コレ御ろうじませ。去年弟めが江戸へいつた時。此細見とやらいふ本をかつてまいつて。姉めハこんなに出世してゐいものハきる。味ひもの丶たべあきして。内にいるよふなことでハない。悦しやれと。自慢らしくこれを見せましたが。ナニわたしがよろこびませう。屋敷方へでも奉公に出して。出世ときいたら嬉しかろうに。是ハ苦界の勤とやら。涙のたねとハおもひながら。仕廻つておいたがコレ御ろうじませ。この花園といふのがそでござります。此花といふ字のついたのハ。ミな姉めが。やつかいものだといふことでござりますが。それでハたいていの苦勞でハあるまいに。なぜ又おめへがこんなに。大ぜいの世話をせねバなりましねへ【伊】ソリヤアミな。姉さんの妹女郎だからさ。ナニあんじなさることたアねへ。お



なじ勤の身でも。これほどになつていなされバ。客も悪い客ハとらず。人にはたてられて。ほんになまなかな所の。おじやうさまも叶ひやせぬ。それだから姉さまに不足ハあるまいが。いとしいハおめへがたの身のうへ。おはなしのよふすでハ。もとハお歴〻で何ひとつ不自由なくおくらしなさつたろふが。こういふしぎになつてござれバ。さぞたよりなくおもひなさるだろふと。それがおきのどくばつかりで。及ずながら。おせわといふもてへそうだが。なるたけの事ハ。どふでもしてあげよふと。おもつているわつちが心。用があるなら遠慮なしに。いゝなさるがいゝによ【やを】何かとやさしいお心ざし。有がたふござります。ほんに此あいだ。おかり申た金もまだ上ませず【伊】ナニけへしなさるにやァおよばぬ。わつちハ江戸からよこす小遣ひであまりやす。時にそりやァいゝが。こまつたことにハ。わつちもちか〴〵に江戸へかへるつもりになりやした【浪】ヲヤほんにかへ　トびつくりしたよふすにかほをあかめてうつむく【やを】さだめて親御さまの御きげんもなをつての上の事でござりませふから。それハ何よりおめでたいが。しかし。わたしどもハおのこりおほい。御ぞんじのとふり。ひとりの弟太郎作めハ。あのとふりのやくにたゝず。外にたよりのない。わたしら親子の身の上【伊】きづけへしなさるな。わつちがたとへ歸つても。江戸からハわづか一日路の所。おり〳〵ハ見廻にきやしやう【浪】おまいさん。今

そふいつても。あつちへおかへりなさつたら。又あつちがおもしろくて。もふこんなとこへハお出なさるまい【やを】どふぞせめて。おり／＼ハ便をなさつてくださいませ。外にくらうハございませぬが。ひよつとわたしが。もしもの事があつたら。あとでこのおなミが便なかろふと思つて。そればつかりが　ト半ぶんいゝさしてなミだはら／＼。むすめもとも／＼うちしほれて。そでうちおほへバ伊三郎も。おやこのこゝろをさつしやり。ともになく目をうちにらひて　【伊】そんなことを。くらうにする事ハねへわつちがその時ハ。お浪さんハ引とつて世話をしやせう【やを】あれもあなたのよふな。實のあるおかたハないといつておりますから。どふぞこれハひとへに【伊】随分承知さ【やを】現在眞身の弟がありながら。あなたをおたのミ申といふハ【伊】ナニサ世話になつたり。なられたりするが。うき世といふ物さ。ドレいつてめへりやせう【浪】マアよふございます【伊】またばんにきやせう【やを】さやうなら　のちほど　トかへるもとまるも目ハなミだなく／＼わかれ立かへる

いつたい此母親伊三郎が人品骨柄人に勝れ。こゝろばへも又優なるに。何とぞ娘おなミかゝる人にそハせたくおもへども。今かく貧しき身をはぢて其事を言出さず。娘も又ッ此男ならべと心におもふ斗にて、まだ世間知らずのおぼこ育。心ある身ハ猶さらに。其男のそばへよるもはづかしく。ものいゝかハすもおもはゆげにて。只おもひの火ハ胸に絶ねど。身をはぢて後もいはず。言合ハさねど伊三郎も

此むすめに心ハあれど。はゝおや側に始終ありて。言出すべき序もなく。神ならぬ身ハ。たがいに心を手合て。いハざる内こそ花なるべし。こゝにあはれなること出來せり。母親にハかに病症變じ四五日の絶食に。神氣おとろへ。つゐに醫巫の驗なく。秋の野もせの露ときへ。殘るおたミが愁傷ハ。目もあてられぬふぜいなれバ。伊三郎始終のよふすを。わが縁者たる名にかたり。葬送をいとなミ。太郎作にあとの家財金子少ゝそへてとらせ。娘おたミをもらひうけ。終に二世のちぎりをなし。やがて江戸のてゝおやも。病氣のよしにて迎ひ飛脚到來しければ。それに打つれ歸國をぞしたりける

○第二回

日ハくれて野にハ臥とも宿かるな。淺草寺のひとつ家と。詠しむかしにひきかハり。今ハ淺茅が原に咲。はなの名どころ戀草の盛目枯ぬ吉原に。五つの街引別れ倡家あまたつらなりて。色を商ふ情の港。得手に帆かける入船や。客の出船の楫とりて。浪のうきねのあだ枕かハすも夢か現にも。魂とんで遊行する。うき世の人の假の宿。さとるもあれバ迷ふもあり。智なるも愚なるも。貴きも賤きも。老も若きも諸ともに。うかれて夜るの賑ひは。筆もことばも及びなき倡家數軒に名をきそふ。全盛もおほかる中に。舞鶴屋の花ぞのときこへたるハ。下つふさの片田舍に

かくれすめる浪人の娘なり。爺親の長病に。此さとへ身をうられ突だしの其日より。客に絶間なきこそ道理。もとハ何の某と弓馬に名たゝる武家の娘。深窓にそだちたれバ。自然と優美のよそほひに。端正艶美おのづから。沈南蘋が神をこらし。ゑがきたる美女のごとくにて。柳の眉蕉紅花の唇ひとたび笑バ。豪傑勇士もたちまちに。こゝろをうバわれ。智者碩學の徒も是が為に。器とろけんふぜいなければ。愚なるハいふもことさらなり。今宵ハ初會の座敷なれど。客のとりなし大様にて。いやみなき男ぶりに。花ぞのも何となく。こゝろときめきたばこぼん引よせて。くゆらすけふりもむねの火に。たぐへてすへるむから座ハ。ゑど神地神相手にして。客ハ余念もなき風情

【女げいしや うた】たがいにそれと岩間もる。おもひハおなじ苔清水。ながれの末の戀の淵。いつか沈て名やながさんチン〳〵シャン【客伊三郎】おやぢの病死に・いなかよりかへるとそのまゝ・家とくのひろめもすんで・三十日たつやたゝず・かのいなかにて・おなじがあねときゝおよびし・はなぞのがかたへしけこミ・まだこゝでハ・なにごともだんまりなり　ミんななぜだまつている。のまねへか〳〵【神里吉】いたゞきやせう【男げいしや 藤吉郎】いたゞき女郎衆ハよい女郎衆か【里】おきやがれハ、、、、ト此内若いものそつとのぞき【若者】初花さんちよつと【ばんしん はつはな】なんだへ　ト立て行らうかのくちにてなにかさゝやき・やがておいらんのそはへきたりべちやくちや〳〵【花ぞの】おりのわりい。どういたしいせうね【初】それだつてもしかたがおざいませぬ。コンナ花野きやトかぶろを引つれ立て行・これハなじミのきやく人きたる事也・ちや屋よりしらせてきたるゆへ・先ばんしんさきへむかひに行と・しばらくしておいらんもざしきに見へず【里】なんだ。おかしくひよりがか

れつてきた　ト伊三郎がかほをみる。伊三郎これをみゝもかけず　【伊】おかくどん。ひさしぶりで氣がはれやした。これだから
かぶるはづだよ【ちや屋娘おかく】おめへさんこんどれ。おかぶりなさらぬよふになされませ
ヲホヽ、そしてもふ。おゝきめにいたしませう【里】いかさまよかつふ。サアぐる／＼廻り
で。千秋万歳千箱の玉のさかづきれ。そこなし男がおさめておこう。サア／＼御かつてにおひら
き／＼　げいしやも手ばやく三みせんをしまひ　【藤】さやうなら伊三さん【伊】御くらう／＼　ト此内きな／＼。それ／＼にあいさつしてかへる。りきちもみいかたのふりしんにいざなはれまへしざしき、かたづく。トしばらくして。ちや屋のむすめおかくと。わかいものつれだちもどりて　【おかく】モシヘおきのどくなことがござります
【伊】なんだの【若もの】はじめて入らしつたのに。さりとは申あげにくひが。おいらんの客
人が。今お出なさいまして。どふぞおざしきをもらつてくれろと。たつてのおたのみでござ
りますなんならお見たてなをしにでもなさいまして【伊】ナニそふせずとも。どふともしや
しやう【かく】ほんにおりのわりい【伊】ずいぶんいゝのさ【若】實はおいらんのひとり客で
何かのせわをさつしやるといふもんでござりますから。外に馴染の客人を。けしてとるなと。
かねてのおやくそくのきやく人でござりますから。どふもいたしにくうござります。さやうな
らおかくさんあちらへ【伊】ドレいきやしやう　トおいたてられたるかつこうのわるさもいとはず。へいきにて。まへしざしきへつれられて行こゝにて。ちや屋の娘もいとまごひして。かへりしあとには。はりばんのふりしんをあいてに。一ツ二ツはなす内。はやくもふねをこぎ出すに。伊三郎ひとりねもやらず

夜も更行まゝに。あたり近所もしづまりかへりて。只いびきの聲のミきこゆる中に。花ぞのがざしきとおぼしく。萩江の新曲二てうつゞミのおとたかくきこへ。女げいしやが上づりごへの高わらひも。耳の根にひゞく斗。じんくのジャジャンかまですく。伊三郎ひとりねられぬまゝに。こしかたの事など思ひつゝけていたりしが。次第にあたりもひそまり。あぶらつぎの男のかほも。ともし火にひかりおのづから凄く見へ。らうを行うハぞうりのおともたへはて。しばらくまどろむとミへしがほどなくきこゆる淺草寺のかねのこへ。耳に入て目をさませバ。あけぼのゝ烏鳴たるにおどろき。まくらふとにふしたる。しんぞうをゆすりおこし

「伊」コレ／＼わつちが羽織が。あつちに有そふだ　しんぞうあたまをあげて。ぎよろ／＼とそこら見まハし。やう／＼氣がついたとミへて。びつくりしたよふす　「夕風」ヲヤもふ夜があけへした。おはをりがおざいませんかへ。そしておいらんハへ「伊」マア羽おりをとつて來てくんな。もふけへる支度にしやせう「夕」むかひのくるまでおまちなんしな　トいゝつゝはをりをとりに行。おいらんしんぞうのしらせに。おどろきたるよふすにて。まへがミだらりとかほに。おひかゝりたるまゝ。ねむたそふなる目をほそくして。らう下ちよこ／＼とかけてはいり。すぐに伊三郎がふとんの上にあがり　「花ぞの」ぬしやァなんとぞおもひなんせう。いつそおきのどくざんす「伊」なにが「花」きやく人がいつそ酒を吞せなんして。わつちやァもふ。あんなにたべェしたこたァおざんせん。それだからけさまで。ツイふせりいして。どふもおきのどくざんす。かんにんしておくんなんし

【伊】ムウなにか。わつちひとりねがしたといふことか。ソリヤア初會（しよくわい）のあたりまへさ、そしてわつちらァ。どけへいつても、そんな目にやあいつけて居（ゐ）るから。なんともおもやァしやせん【花】マアちつと。おやすみなんしな【伊】もふけへりやせう【花】どふぞ今度（こんど）きておくんなんし【伊】くるのさ。ぜひこにやァならねへ事がある【花】なぜへ【伊】おめへにやァ大（だい）分用（ぶよう）がある。田舍（いなか）からことづかつて。きたものもあるから【花】ヲヤいなかとれへ【伊】おめへのうちから【花】ヲホヽヽわつちやァいなかに内（うち）はおざんせん【伊】それでも、おめへがよこしなすつた此文（このふみ）。お目にかゝるやはじめてだが。さだめておぼへがござりやせう　トいつぞや田舍にゝたとき。この伊三郎かたへよこしたる。おいらんのみをいだし見すれバ。手にとりおしひらき見て【花】ヲヤおめへさんかへ　トびつくりして。い三郎がかほをじつと見てにつこりとわらひ。びやうぶを引よせ。あかりをけして。ひつたりとそれによりそひ　モシナ。かんにんしておくんなんし、そふとれしらずに　トひざにもたれかゝりて。何かいハふとするところへ。中のこうのミうらやのおとこ　【茶ヤ】ハイおむけへでござりやす【伊】ヲイさつきから待（まつ）ていた【花】コンナあつちらの客人を。おこし申てきさつせへ　トちやゝのおとこをおつたてやり　どふいたしいせうねへ。おめへさん。けふるなんしちやァわるふざんすか【伊】またこのあいたにきやせう　ト此中しんぞうはおりをもつてくる。い三郎おきて。すくにはおりをきて出かける　【花】いつおいでなんす【伊】つがう次第（しだい）に　トいゝすてゝおつと出かけるところへ。里言もしたくして来り。すぐにつれだちかへるを。のこりおしそふに見おくる

實（げに）や後朝（こうてう）のわかれへ。なべて物（もの）うきものなるに。わけてかゝるのこりおしさ。花ぞのはしごの下まで

おくり。むねふさがりて何となく。儚(うつ〳〵)としていたりけるが。ほどなくならミの客も。新ども引つれ立かへるに。そこ〳〵のいとまごひして。やがてざしきへかへり。火もなき火ばちのそばにつくばひ。

何かおもひありげにうつむきて。灰(はい)かきならしゐる所へ。しんぞう夕風かけては入

「夕」モシナ今のきやく人が。これをわすれなさいましたト 伊三郎がかミ入たもつてきたる 「花」今たしてやりいせう。だれぞ子どもをよんでおくんなんし「夕」アイト かミ入をおいて出てゆく 「はんしん はつはな」おめへさん。なにをあんじてゐなさいますへ「花」わつちやァね。いつそきのどくなことをいたしいした「初」なにをへ「花」せんど。おめへさんにもはなしをいたしいした。わつちが田舎のかゝさんのいところを。せわにしておくんなんしたおかたといふの。ゆふべ三うらやからききさしつた。客人でおざりいす「初」ヲヤ〳〵ほんかへ「花」アノそれを。わつちやァしりいせんもんざんすから。けさまでこつちらにゐて。ぬしひとり。ねかして置申たが。いつそきのどくでなりいせん「初」おめへさん又ちよつともいつておあげなんすりやァよふざんすに「花」ナニサいつでも其夕さんがお出なんすと。むりに酒(さけ)をのませなんすから。ゆふべもあのとふりに酔(よつ)て。ふせりいして。今朝(けさ)夕風(ゆふかぜ)さんがおこしなんすから。びつくりしてあつちらへめへりいしたら。こう〳〵だとそのはなしをしなんした。わつちも初手(しよて)れ。何をいゝなんすやらとおもいゝしたが。こつち

からやつたふミを。出し　見せなんしたから。それでびつくりいたしいして。それから何かをきかふとおもつている内。三うらやのむけへがめへりいすと。じきにたつておけへりなんしたが。どふかはらでも。うちなんしたよふすに見へいす。ひよつと是ぎりにきなせんと。わつちやァてへ〳〵。きのどくな事じやァおざんせん。どういたしいせう子【初】ふミでもおあげなへしな【花】ヲヤばからしい。はしめてきさしつた客人に。三うらやのめへもおざりいすれなトしばらくかんがへいゝことがありいす。そこの硯箱をおくんなんし　トとりよせてさら〳〵とふミをしたゝめ・伊三郎がわすれて行し・かミ入の中へいれておく・此内ミうらやの男きたりて【茶ヤ】はつはなさん。客人が紙入を。おわすれなすつたそふでございます【初】今もたしてやろふとおもつていたトかミ入をわたす【花】まだこんたのとこにゐさつしやるか。アノ客人れどこだへ【茶ヤ】日本ばしのほうでございます【花】そつちへれ。ひさしくきさつしやる客人かや【茶】さやうでございます。去年中れしばらく。田舍のほうへ。お出なすつてござりましたが。此間おけへりなすつたそふでございます【花】いなかへいかつしやるめへにれ。どけへなじんでいかしつたへ【茶】コレハ又かれつた事のお尋ハ、、、【花】コレサいわつせへよ【茶】ハ、、、先いつてめへりませう【花】コレ〳〵そふいつて下せへおまち申ておりいすから此あいだに急度お出なんしと【茶】かしこまりました　トちや屋の男へたちかへる

○第三回

花ハさかりに月ハ隈なきを見る物かハと兼好が筆号ミ隠遁の身ハさもあるべしこゝハ花の咲日よりちる迄絶するさかりなる比ハ彌生の仲の町外に類ひも嵐山よしの初瀬もおよバぬ景色かゝる折にハもろ人もねにハかへらず居續の客にたへまハなかりける

初會のうらやくに四五日すぎて伊三郎花ぞのがもとへ入きたる鼠がへしにけしあられの小もんをおきたるねごやちぶの羽折をきなし上着ハゆふきのあいミぢん下に小べんけいのハたんがけ同じちやじまの八丈ぞろへ紙入はふち川のかうちどんすぼうようぎれのたばこ入かな物に銀をつかわず村田のきせるしんちうのミぢんなゝこ五ぶもすかぬといふこしらへ殊更女のすく風俗たれも否とハ岩本の神の化身の源氏の君の再來かと思ふばかりのやさ男神二三人引つれて二會めのざしきすぐに馴染の約束して地神げいしやわかいものやり手ミなそれ〴〵にひらめかす小判につぶハさながらも九郎助いなりのこのは　とあやしむ斗。朝日の彌陀の光明もけをさるゝかねのゐくハう。きのじやの臺うづ高く。茶屋が見まひのおくりもの。所せきまでならべたる。席のにぎわひ。さかづきの數もめぐりて濱の松風ざゞんざも。うたひおさまりそれ〴〵に。神たち陣を引とれバ。ちや屋もげいしやもミなちり〴〵。本

間に床もおさまりて。金屛風ひきまハし伊三郎ひとつ。寓然と座しゐたるに。花ぞのハねまきゐしや
うとりつくろひはやくもきたりて。おなじふとんの上にすわり

【花その】おめへさんこのあいだハきぞはらがたちいしたらう。かんにしておくんなんしへ

【伊三郎】ナニサたのまれた用があればこそ。くるよふなもので。しよせんおめへがたにつきあふほどのはだやいハなし。あきらめてゐりやァ。さしてはらもたちやせん【花】ソリャァわつちのほうから。いふことざんす。ほんにせんどもおけへりなんしたあとで。いつそおめへさんのことが苦勞になつて。表向からみをあげへすことも。まだできへせんから。紙入のうちへ入れてあげ申たが。御ろうじいしたかへ【伊】アイ見やした。それでけふハこられぬ所を來やした【花】ホンニよく來ておくんなんした。かゝさんのみでぬしのこともくハしくいつてめへりいしたが。大きにおせわさまになりいした。おありがたうおざりいす【伊】ナニサせわをしたといふほどのことでもねへが。おふくろハ病氣なり。叔父御といへバあの通りのしろもの。外にたよりのないよふす。見かねて何角の相談あいてに。なつてしんぜたぶんのことさ【花】いつそぬしが。やさしくしておくんなんすといふことざんす。そしておめへさんハ。いつこつちらへ。おけへりなんしたへ【伊】正月けへりやした【花】かゝさんハ。ちつともよふおさん日

したかへ　トとかれてぎつくり伊三郎・きてへまだはゝおやのびやう死をしらず・今打あけてそれといはゞ・さぞやなげかんかへ、やと心ひとつにおしかくせど・かくれぬなみだをとゞめかね・さしうつむいてゐたりける・花ぞのなんのきもつかず・ふしぎそふによりそひながら【花】モシナどふなんしたかへ【伊】どふもしねへが。ぜんてへちつとあんばへのわりいうへに。酒がすぎたと見へやした【花】ヲヤそれにはいゝくすりがおざんす　ずつとたつて・小だんすのくすりを出しやくわんのさゆを手づからくんで持來り　この薬も。かゝさんがおよこしなんした。奇妙に酒の醉を。さますくすりでおざりいす　トよぎなきていに伊三郎これをのんでむねをさすり【伊】ほんにいゝくすりだ。どふかこれで。氣がせいせいとなつたよふだ【花】わつちが手めへがつてな事ばかり申いして。それでおふさぎなんだろう。もふなんにも申いすめへ。ちつと氣をしづめなんすと。じきに酒がさめへすから。こつちらをむいて。ほんとうにおよんなんし【伊】でへぶもふよくなつた【花】もしな。お浪が。ヲヤもふ申いすめへ【伊】おなみもつれて來てあれせよふ【花】ソリヤアどふしてへ【伊】わつちが內へ來ているから【花】ほんにかへ。そんならかゝさんは。ひとり田舍にゐなんすかへ【伊】エ、おふくろか。アノそれはの。病氣もさつぱりよくなつたから。おなみは江戶で。奉公でもさせてくれろと。たのみなさるからつれてきやした【花】何から何まで。お世わさまでおざりいす。わつちらたアちがつて。あの子は內氣もんで。人中を見たこたアなし。おめへさんばかりを。たよりにしておりいせう。どふぞ不便がつてやつて　おくんなんし。かゝさんは女の事な

り。ほんにわつちら兄弟のよふな。便すくないものはおざんせんよ【伊】おなミはずいぶん、わつちがせわをする氣だが。おめへなんざァ。きつとしたい世わのしてがあろふからいゝのさ【花】しんにそんな人はおざんせん。なじんでに來なんす客人は。たつたひとりおざんすが。外になじミのきやく人をとるなと。何からなにまで。よくせわをしておくんなんすが。スリヤアもふ。孫も子もあるお祖父さんで。何も末の便にやァなりいせん。それだからもふ。是からは。おめへさんをたよりにしいせう。おいやでもそふおもつておくんなんし【伊】そんならャア。あいといつておきやせう【花】アレちやにしておくんなんすな。今からはうるせへほど。なんでもかでも。ぬしに相談をいたしいせうから。どうぞきいておくんなんしへ【伊】かしこまりました【花】ヲホヽヽヽもしなさつそく今。そうだんをすることがおざりいす【伊】なんだ【花】アノ子わつちが年があけへしたら。どけへめへりいしやうね【伊】ソリヤァおめへのすいた所へいくがいゝ【花】すいたとけへめへりいすから。おめへさんせわをしておくんなんすかへ【伊】ずいぶんそふしやせう【花】ほんにかへ。ヲホヽヽヽうれしいのふ（トぐつとだきつかんとするをふりはなして）【伊】すいたとけへいくものが。そんなにせずともいゝことさ【花】わつちがすいたといふは。おめへさんのことざんす【伊】あはせるもんだの【花】しんじつざんす。せんどお

にかゝつた時から。おもひそめた胸の内。殊に男氣なぬしの深切。そのお心にほだされて。まよひにまよつたわたしが心。くミわけておくんなんし「伊」そんなわる義理をいわねへでも。おめへたちの世話を。しよふといふにれちげへねへから。一通りにつきやつてくんなせへ。なま中とげぬ約束だけれ。あとであいそをつかすたねだ「花」エヽおめへさん。にくらしいおじらしなんすな。是までもいくたりか。さだめてぬしゆへ。ういめつらいめ。かなしいめをした女中衆もおざりいせう。ほれたといふ女の心。嘘かまことかしりきつておいでなんせうに。なぜそんなにうたぐりなんす。なんぼいやしいつとめの身でも。義理のあるおめへさんに。うそ僞がいゝれいせうか。それともお心がすミいせすれ。どんなことでもいたしいす「伊」ソリヤアなるほど。指をきるの髪をきるのと。苦界の身の心中れ金づくでもすることだが。そんな事より慥な證據「花」ソレハ又どういたしいす「伊」ナニサなんでもねへことだが。心にへだてがあるかないかれ。じきにわかる事がある「花」ソリヤアきつとわかりいしやう。わつちもぬしを。客人とれおもいゝせんから。もふはづかしこともかまいゝすめへ。あとでわらひなんすときゝいせんにへ。ドレ帶をときいしやう トしごきをとつてほうりだし しつかりとはだとはだ

評に曰嘘より實に入といふハ。初めの嘘氣がこうじ〳〵て。のちにハ違に命をもおしまぬよふになる

ハ。此道のならひ。深入せぬこそ善たるべし。今此ふたりが中ハ。實よりして實に入。いよ〳〵もつて身を虧すべき。未了の惡緣惧るべきの一癖なり。伊三郎いかほどに實情をつくし。身を容るとも醜夫たらバ。義理一へんにかたらふべき與。それ是實より虛に入のちぎりにして。末のとげざること目前なり

或人のいへく虛ハ實の骨。實ハ虛の皮まよふも色里さとるもいろざと哥に

傾城のうたもまことも有礎うミの
はまのまさごのきやくのかず〳〵

○第四回

鶏を養ふものハ狸をかハず。樹を植るものハ蟲を愁ふ。歡樂の究るときハ。必身に苦ミありお浪が今の禍も。むかしに勝る物思ひ。伊三郎が此ほとより。晝夜をわかぬ放埓に花園が色にひかれ。居續して歸らざれバ。いとゞくよ〳〵思ひ羽の。をしのふすまに打臥てつもり〳〵し病の床

評ニ曰お浪母親に別れてより。兼て心におもひ焦れし。伊三郎が情にあひ。終に江戸にいざなハれて

夫婦となり。今又深窓に侍るゝ身となりたれバ。枯木に花さく祥ひの身をよろこび。朝夕他事なく仕へけるが。此ごろの花街がよひを。むねにへくよ〳〵思ひながら。悋氣せバ愛相をつかされ。もしも男に捨られてハ。身をよすべき所もなしと。かれこれを思ひまハしてつもり〳〵しこの病となりたるや。伊三郎が母親慈光尼よめのおなミが枕元によりそひて

【慈光】寸泊さんのおハりハとふだ。ちつともよかァなんぞたべやらぬか【お浪】まだ何も。たべたくハござりませぬ。もふあなたお休ミなさいませ【慈】わしもねよふとおもつても。そなたの病氣がくらうになつてねられませぬ。それに伊三郎めいハ。今宵も戻するまい。女親と侮つて。わしが異見ハ聞入ず。畢竟店ハ權八が何もかも引うけていれバこそ。そうないと此家屋敷。とつくにひと手へわたる時分去手の不埒にこりもせず。こまりはてた吉原通ひ。わしが苦勞もそなたの病氣も。ミなその傾城からおこること。まんざら馬鹿ものにハ產つけねど。その女ゆへさま〲の。あほうをつくして尻のしまひハ。又どんな悲しい目をミせよふかとほんにくらうでなりませぬ　トなミだはら〳〵。伊三郎おなミともに言合して。姉のおいそへやしきかたにほうこうと母おやへハいつわりて。よしわらにいることをいへざれバ。けいせいの花ぞのを。げんざいのおなミかあねとしらずしてなわとりがうらめしいと。たとへのとふり。わが子よりもけいせいを。にくがるハおやのならひ。おなミハこれをきくたびに。むねもはりさく斗にて。いとじなミだにふし沈ミ　【浪】それといふも。ミなわたしがつたなさゆへでござりませう大かたお氣に入らぬので。外に心をひかるゝ夫さら〳〵恨とハ

思ひませぬ。其傾城とやらが女房なら。さためてどこへもござらずに。宿にばかりござろふもの。たられぬわたしが女ぼうに。なつたばかりであなたにも。御くらうかけるが。かなしくてなりませぬ【慈】イヤ夫大事と一随に。思やるそなたをナニきらうもので。女郎買はあれがやまひ。わしがおもふに。あんまりそなたが結構すぎる。ちとやかましくいつて下され【浪】おもひにおもふおつとのミのうへ。わたしに好在ハござりませぬが。假にもりんきがましい事ハ。女の身の。たしなミごとゝ思ひまして。はしたない女だと。もしあいそうをつかされてハ外に便のないわたし【慈】イヤ〳〵それがわるい。女を去る道七ツある中に。悋氣疾妬ふかきものをもさるとハあれど。それハ夫を大切に思ふうへから。女の愚痴に。りんき疾妬もあれバ。男の身にとりてハ。過分なる筋あるゆへに。この科ばかりに女房を。さるほどの事なしと。最明寺さまとやらがおつしやつたといふ事。たとへそれで伊三郎が。どのよふに腹たてゝも。わしが居ればこなたの落度にハせぬほどに。ちと異見して下され。思ひおもふた女ぼうのいふことハ。聞入まいものでもない。わしハもふ〳〵この事がくらうになつて。もつたいないが毎日のお勤もうハのそら。心のうちにハ。ほんに涙がたへませぬ【浪】それハわたくしもおなじこと。それゆへにこそ此病氣【慈】ミなその女郎めからおこること。アヽもふいつて休ミませう

【浪】今宵はこゝむくござります。お風でもめさぬよふに【慈】そなたおたよでもよんで腰でもちとさすつてもらや　ト なく〳〵ふしどへわかれている

おなみハ跡に只ひとり。母親の心の内をさつしやり。いとゞ泪にくれけるが。きつと思案し。あれの方へ内のよふす。母のなげきを言おくり。伊三郎がさとぐるひ。とゞまるよふにと。たのミやるが上分別とおもふより。そろ〳〵おきて硯箱引よせ。なミだをそゝぐ筆の跡。思ひをこめこま〴〵と。文したゝめて人しれず人をたのミて吉原の。花ぞのがもとへつかハしける。

○第五回

心ハすける色にひかれ。言葉ハなるゝに因てかハる。只人ハ向ふ所の境によりて。其鄙情轉するならひ。伊三郎ハいつぞやより。花園が色香に迷ひ。家を忘れ身をわすれ。親に背き妻を捨。夜晝わかぬ通ひ路も。いかゞしけん此四五日ハ音信も。絶てあハねバ花ぞのが。おなじ思ひハかぎりなき。命を削る心地して。案じ煩ふばかり

客まつ座敷に粧ひをかざり。きらびやかに衣裳きかへしんぞうかふろ。火鉢を取まくあだ口ばなし。客の噂を取交て。かたうつ笑ふ其中　。花ぞのものおもひ。たやめる西施泣る虞氏。海棠の雨にしを

れ。水にたゞよふ桃花の如く。衣裝の朱もむらさきも。越女の色にけをさるゝ。雪のおもてにくろ髪のみだれかゝりてうつ〳〵と。おもひなやめる其風情。部屋もち女郎さしよつて

【花山】いもふと女郎なり　おいらんのそふして。何角をくらうになんすを。見る目がつらいばつかりに。又お氣に入らねへことを申いせう。うけたまはれバゆふべ其夕さんが是へおいらんのひとり客なり　はらをたつておけへりなんしたそふざんすが。それといふも。あんまり伊三さんに。身をいれなんすゆへざんす。內證でもなんのかのと噂のあることも。よもやおしんなんせんこたァおざんすめへに。今に身のつまりに。なん〳〵せうとおもいゝして。それがわつちらァくらうざんす　これもいもと

女郎へや持【花崎】ほんに其夕さんが。伊三さんのことをやかましくいゝやんして。アノ客人をきれねへうちハ。もふこねへとおつしやりいした。其夕さんが來なんせんと。なにかのつがふのわりいことも。しりきつてゐなんしやうに。ソリヤァなるほど。あれほどにおもつてゐなんす。伊三さんをきれなんすハ。さぞいやでおざりいしやうが。そふなんせんとさしあたつて。夜具のことも仕廻のことも。できへせんよふになりいす。それじやァ內證のめへもすまいせず。てへ〳〵げへぶんのわりいことぢやァおざんせん　ばんとうしんぞう【初花】わつちらが申いすとナァニうつちやつておきなんしと。いつそはらをたちなんすが。せんども。其夕さんが來さしつた時。伊

三さんのほうにばつかりゐさしつて。こつちらのざしきへハ。さつぱりきなんせんもんざんすから。はらをたつて。おけへりなんしたを。やう／＼のことでわつち等が。みをあげたり何かして。ゆふべせつかく來さしつたものを。あんなに又。あいそづかしをいゝなんして。そばにいるわつちらが。てへ／＼きのどくなことじやァおざんせん【花その】わつちやァなぜ。こんな氣になりいしたやら。此ごろじやァ何も手にやァつきいせん。ほんに伊三さんのことの胸にたへるまハおざんせんが。そんなが又。そんなにいつておくんなんすものを。なるほどよくおもつてミりやァ。其夕さんにやァかへられいせんよ　トいふへ。きのふお湯が所よりないノ＼にてふミがきたり。いなかの母おやのしんだることも。おなミが今。伊三郎とふうふになつていることも。はじめてしつてびつくりし。人にハそれといわねども。かなしきむねにはりさくばかり。きのふへそのことのミ心にありて。客が來てもうれいの中。あいさつするもいやになり。おなミがびやうき。しうとめの心づかひをさつしやり。おもひきらねバぎりたゝずと。ふかくもちぎりし善中を。今はたれねならぬといふ。ぎりになりしをなきかこつ。こゝろの内のせつなさつらさ。それとハしらずはんとうしんぞう【初】今宵(こよい)ハ是悲(ぜひ)其夕さんをつれ申て來て下せへと。竹田(たけだ)やの吉どんを。さつき(先刻)賴(たの)んでやりいしたから。大かたお出なんしやうに。おめへさんゆふべのよふなこたァ。かならずいつておくんなんすなへ【峠】ほんに伊三さんも。一とふりの客人でハなし。だん／＼義理(ぎり)のある上のことざんすから。そんなにおもひなんすも。尤(もつとも)でおざんすが。ちつと間遠(まどを)のくよふにしなんすと。其夕(きせき)さんのきげんもなをりいせうし。又そのうへてハどふも仕方(しかた)がおざんしやうから。マァ當分(とうぶん)されたぶんで。二ヶ月と三つ

き。伊三さんがきなんせんよふにしなんし。それがおめへさんの身の爲ざんす【山】なにかに所在のねへ伊三さんの事ざんすから。打明てそふおつしやりいし。たゞつきだすとおもいなへしちやァ。ぬしもはらァたちなんしやうから【花】ソリヤァわつちが。いゝよふにいたしいすトしじう目をすりあかめ。心の内では其ことよりおなミがふそのわけゆへに。きらねばならぬ懸中を。あんじつゝけてさしうつむき。人目をつゝむ心のなげき。折からわかいもの【喜助】モシ竹田やから。其夕さんがいらしつたと申てめへりました【初】今にいかつしやるよ。サァおいらんかほをなをしてお出なんし。コレはな野やァノ\。これへ水をもつてきや。花浦さん衣裳を出しておくんなんし。トうれいにしづむ花ぞのを。むりにすゝめてしたくさせ。そこノ\に取つくろひ。立出んとする所へ。又わかいもの【彌八】伊三さんがお出なさつたと。三うら屋から人がまいりました【花】初花さんわつちへハ竹田やへハめへりいすめへ。おめへさんいつておくんなんし【初】アレサそれがわるふざんす。マァちよつともお出なんし。わつちがさきへけへつて。伊三さんのほうハ。いゝよふにしておきいせう。おあんじなんすなトむりにいざなひたけたやへ出かけてゆく

程なく竹田やの客其夕。いざなハれ來てざしきの内。例の酒宴も事終り。本間に床も結ればべ。三うら屋の客伊三郎も。廻しざしきに只ひとりつゝくりとしているおりから。花ぞのハ座敷の首尾。取つくろひてこゝにきたり。しほれたりし其風晴。いつにかへりしよふすなればべ

【伊三郎】今夜ァさつぱりこつちらへハ。顔出しもしねへで。さつきから度々そふいつてやつ

たが。何をしていたへ【花】其夕さんがはなしなんせんから【伊】どうせしめへ(仕舞)ハ。こんな事だろふとおもつてゐいたが。あんまり飽よふがはや過るぜ （トいへどこなたハ只つくゎ・ゑりにかほさしいれて・なミだかくすばかり也）【伊】コレどふぞしたか。なんぞはらのたつことでもあるか。なぜそふしている。こつちらァむかねへか （ト手をとるをふりはなし・わきのほうをむいて・目をこする）【伊】ヲャなんだ。しれつてへ女郎だ【花】わつちもじれつたうざんす【伊】なにが【花】モゥおめへさんときれにやァなりいせん【伊】なぜへ【花】其夕さんがせんどから。ぬしのことをやかましくいゝなんして。ぜひきれろとつて。わつちも何かのせわになる。其夕さんの事ざんすから。いやたァいわれす。殊にはじめから。外になじミの客人ハ。とらぬはづのやくそくざんすから。どふも義理ならしかたがおざんせん．ぬしハもふ。是ぎりにしておくんなんし【伊】ソリャァずいぶん。どふともしよふと。いつたらよかろふがいやだ。手めへそのはつじやァ有めへが【花】なぜへ【伊】なぜたァふてへらくしやうめだ。【花】ソリャァくげ(苦界)へでおざんすものを．時のはりやいにやァ。どんなことを申いしたやらしりいせんが。ぬしもはじめてこけへお出なんしたおかたじやァおざんすめへし。女郎のいつたことを。あてになんすもあんまりちゐのねへよふざんす【伊】手めへ氣でもちがつたか【花】イ、エ【伊】急にうつてかわつてそういふにハ。譯があろふそれをいへ【花】外にわけハおざ

んせん。其夕さんのわけゆへに【伊】いよ〳〵それできれるのか【花】しれたことざんす【伊】おなじ兄弟でも心ハ別〳〵おなミがやさしい心いきにくらべてハ雪と炭。母の手まへや内ののに。馬鹿ものといハれても。うぬにほだされうか〳〵と。まよつたがヱ、くやしい。のぞミのとをり是ぎりだ【花】ソリヤァほんにかへ【伊】ヱ、うそでないせうこ。うぬがつらへしるしをつけてやろう。コノちくしやうめが トゑりがうとつてぐつと引よせ・ふんづたゝいつはたちなミだ・たゝかれながらはなぞのお・わつとなくのをくちにそでおしあてこらへるためなミだ・い三郎べいゝすいにうちすへし【伊】其夕とやら。どんな色男か金もちかしらねども。おれも意地づく。疲身上をたゝきしまうまでなりとも。うぬへ。つらあて。此町内で外にうき名をたてゝ見せう トたちげにけとばしまくらる とのはをりをとつて立いづるすそにすがつて【花】コレおまちなんし【伊】なぜとめる【花】もふ〳〵いふまい〳〵とおもへとも。ぬしの今一言で。いわねバならぬ其わけハ。これを見ておくんなんし トかゞミぶくろのあいだより・とりいたしたるおなミがふミ伊三郎おしひらき・見れバおぼへのある手跡【花】わつちかとが。ちくせうだのなんのといゝなんしたが。きこへぬハおめへさん。妹と夫婦になつてゐなんすとを。なぜわつちにおかくしなんした。それとしつたら。たとへとんなにほれてゐて。こがれ死にするとても。ぬしに肌身ハふられぬ義理。それにまだかなしいハ。かゝさんの死なんしやんしたとも。おめへさんハかくしなんして。お浪がふミでしつたがはしめて。命日忌日の精進も。しらずにくらしたわたしか不孝。いもとの手ま

へ面目(めんぼく)ない。かなしいことになりいした　（トウラミのかず〳〵くどきたて。すがりついてなくなミだ。ひざにふちなす斗りにて。伊三郎も今さら手もちぶさた。よミくだすお涙がみ）

その事ゆへに此あいだよりわが身すぐれ申さず打ふし候へどもそれハいとひ不申たゞ〳〵母さまの御こゝろづかい伊三郎ゐ御るすのうちハ其事のミ御なげき遊ハしこのほど少しハおしよくもあがらずおとしよりのあまり〳〵御いたハしくわが身ミるめもいとゞかなしくそんしゟ〳〵とにおめへさまのわたくしあねとは御ぞんじなくあのけいせいめゆへとおんはらたちも御自身の御子のかわいさゝつし上なしくれ〳〵わが身のつたなさゆへ御まへゐにみかへられし事ハさら〳〵うらミとは折ふし候へとも母ゐの御いたハしさぜひなく申上ゟ〳〵とふぞ〳〵伊三郎ゐ其御かたへしげ〳〵御かよはせなきよふに御はからひねがひ上けゟ〳〵

【伊】こういふみ(ふミ)が來(き)ているとハ。しらなんだかんにんしや【花】ほんにわつちが胸(むね)のうち。すいりやうしておくんなんし

そのかハりわたくしハ髮をおろしいなかの母ゐの御あととひ申たきねがひに候まゝ御まへゐねんのあきしだい伊三郎さまと御ふうふに御なり下さるべく候わが身神かけてこのとくれ〴〵もねんし上候それまでの所そのおんかたへあまり御出なきよふ御なし下さるへく候

【花】これを見るとかなしくて。ないてばかりおりいした。そして此ふミをよこしたとハ。か

ならずおめへさんへハ。さたなしにしてくれろと。いつてめへりいしたから。それとハいわずぬしにむかつてあいそづかしも。きれたあとでハ死ぬ心で。きづよくあんなに申いしたも。もふこけへハ。きなせんよふにとおもふ斗。それにわつちへつらあてに。外へ又かよひなんして。うき名をたゝて。ミせよふといゝなんす。こつちをきれても。やつぱり外へいきなんしてハ。いもふとの心遣ひも。わつちがつらいこのおもひも。むだになるがかなしくて。ぜひなくあけて申いす。あきもあかれもせぬ中を。義理にせかれてきれるといふハ。かなしいものでおざりいす【伊】よく／＼おもへバ。ミなおれか悪性から。お浪といゝ手めへに迄。うきめをミせるかんにんしや【花】おめへさんゆへにハ。どんなういめつらひめも。いとふ心ハおざんせんが。このよふにかなしいことになろふとハ。ほんにゆめにもしりいせん。モゥわつちやァあしたからつとめもしいせん。了簡かおざんすから。とによると。これかいとまごひさんす【伊】ばかな思案を出しやんな。手めへがひよつとどうぞすると。又お浪めも。うろてへたとをしめへもんでもない。モゥねんもわずかなり。やがてめて度兄弟かほをあハせるを。たのしミにつとめをしや【花】それでもぬしとえんをきつて。どふしていきていられいしやう【伊】ばかァいやんな。きるといふハ表向。心の縁ハきらずにおかう【花】イヱ／＼そふいゝなんすとミれん

がのこつて。やつぱり心のもめるもとゐ。とてもかくごをきハめたわたし。ふびんとおもつておくんなんし【伊】ソリヤア手めへ。おれにも死ねといふ事か。おふくろのしなれたことも。そなたの歎きをおもひやり。つゝミかくしたハおれが科。お浪と夫婦になつたる事もかくしていわぬハ。そなたに心かまよつたゆへ。今のうきめももとハといへバ。ミんなおれからおこつた事。はゝのおもハく。おなミが手まへ。そなたにばかり罪をおらせ。むごい目を見て。なにめんぼくにいきていられふ【花】おめへさんがおんなじよふに。そんなことをいゝなんして。かわへそうにおなミがなげき【伊】お浪がなげきをおもなら。手めへもしぬな。ころしてハおれかすまぬ【花】イヱヽわたしハどふあつても【伊】そんならどふとも。かつ手にしや （トすつと立つて行かんとするを引とゞめ）【花】ヨンナどふなんす【伊】かへるのだ。人のいふ事をきかねへものにミれんハのこらぬ。そこをはなせ【花】マアおまちなんし。そんならもうしにハいたしいせん。したにいつておくんなんし （トむりにひきすへおとこのひざにしがミつき。こへのかぎりをしのびなき。こなたもふびんさいちらしさいやまさり。いたきあふたるおしどりの。はなれがたなきりん気のきつな。今さらおさひきられぬあくえん）【伊】ア、こうして見れバ。やつぱりそなたに心がまよふ【花】わたしもどふも。氣がひかされてかなしうざんす【伊】いつその事。月に一度ハかくれてこよふか【花】どうぞそうしておくんなんし。おなミが手まへ今宵かぎり【伊】いとま乞にちつとねよふ （ト引よせられてにつこりと。たちまちうたゝをこゝろのまこひ）

【花】わたしハおなミがうらやましい。こんな男と誰はゞからず。ヱ、じれつてへはらがたつ

【伊】おれもひよんなことした。姉さまにすれバよかつたものを【花】ヱ、にくらしいくちだのふ【伊】アイタ、、、、トはづミにすつぽりかぶりしよぎ。戀のとこやミ六ぢんの。ちまたにまよふ夢のよに。かねのゆめたやむすぶらん

次第に更る風の音。連子のすき間もる月の。光も失てほのくらき。行燈の火にむねの火を。たぐへてもゆる煩腦の眞恚のほむらしのびかね。忽然としてあらはるゝ。お浪が顔ばせ蒼々と。たけの黒かミふり亂し。痩おとろへし病のすがた。なげきふしたる枕もと。ふつと目さめて花ぞのが。見るより愕り狼敗し。しがミついて身をふるへば。伊三郎おどろきめをさまし。何ごとやらと見るそバに。ありありお浪が妖幻の。すがたに憶轉しおき上れバ。そのまゝおなミハけふりのごとく。髣髴として散亂たり。折から聞ゆる夜あけのかね。ねふりの夢ハさめにける。伊三郎大汗たら〳〵

【伊】コレ〳〵花ぞのふどしたか　トおそハるゝはなぞのたゞ。おこすかた手にあせふき〳〵。こなたも目さめてためいきつき。やう〳〵にこゝろをしづめ【花】どうあつてもぬしとのゑんハ。是ぎりでおざんしやう【伊】なぜどふして【花】今夢にいもふとが。わつちにうらミのありたけを。いゝにきたそのふうぞく。やせおとろへてみすぼらしい。すがたが今に目のさきに。ちらつくよふにおもいゝす【伊】そんなら。そなたも其夢を。おれもあり〳〵お浪がすがた。言あれさねどふたりいつしよに。おなじ夢を見るといふハ。おなミが日頃の憶念

か。たゞしれふたりが憶念か。いづれにしてもふしぎな夢。これをおもへばどうあつても【花】きらねばならぬふたりが中【伊】こんなはかない【花】かなしいことわおざんせん ト又ふししづむなミだのあめ床にふちなす折も折・ミうらやの【若者】ハイおむかひでござりまます

色慾に耽るものハ。羅に針を包て。是を身に負ふるがごとしと。馴染し抑より。次第に遺感の情を残し。雲にしたひ雨にかこち。相戀ふの心逼りて。まかせぬをうらミ痴のごとくなり。遂に其身を斃すにいたる。此雨子が不良の悪縁暗中に香を探る。其匂に心をうばわれ。迷惑の念層ことゝ。不詢の道に奔逸し。天理の正路をうしなふ例 慎ずんばあるべかず。猶草稿の遺子あれど。余ハ後編にゆづりはべりぬ

鄽意氣地 大尾

後篇

倡客晦日の月

全一册　一九著　近刻

青樓十炷香之記

同作　同

當時名高き遊君の生寫し彩色ずりし各自筆の發句狂詠等花押の印を加へてあられず附錄十返舍戲作の青樓之記其外遊君の意氣地あるを集む

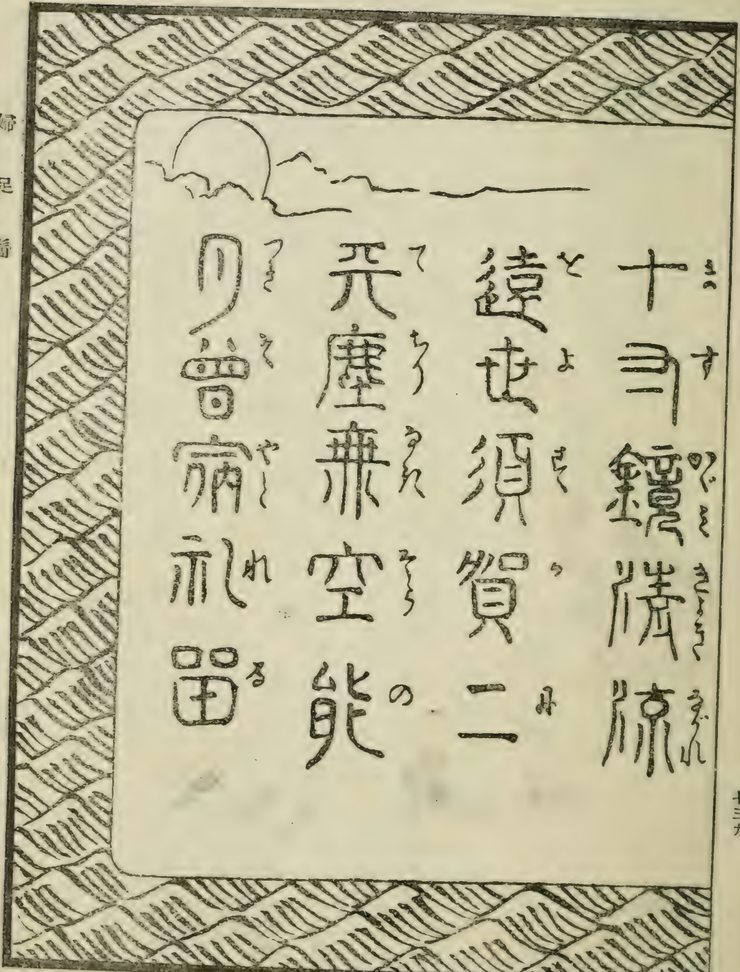
傾城買虎之巻

自序

有客卒爾云曰無鷄卵方晦日不出月於爰傾城買可思切乎對曰深實矣見雖宜不可恕貴雅又唱婦有誠不智徒也可察博才眞智深情之人假令醜而初會雖嫌連々通隨可惚短才淺智薄情之人唱婦及妻妾無有誠妹多言雖諂馴染後可突出也又云則是自諂可云其有誠證據死同穴生同室之二也其期不到難定又對曰則短才也思離不思片付緣也無是非可云亦雖存命因果到來難計自切相對死雖思定業不任心此故有誠而無緣時不可爲如何其越意記所有戲作一覽可考爾云

戊の　成三樓

初春　酒盛誌


十寸鏡淺涼
遠世須賀二
天塵無空能
月曾寂礼留

目次

第一　短夜の月
禿だちから廓に育戀の手習精出して男波女波の清書に二世愛戀人れ

第二　打解し雪
斯とだに得れ伊吹のさし艾燃る思ひの入黑痣消のも掘も可愛さの共傍の似人れ

第三　枯木に花
嫌な客にも解紐れ好た男にする苦界緣れ盡せす蓬生の元の心の穗出し其稀人れ

第四　散失る紅葉
燈を背てれ共に哀な立聞に眞如の月の曇なくかたく契て我妻と定る人は

以上

婦足髷

成三樓主人著

思ひにハどふした花の咲ことゝ身にぞしらるゝうやつらやいかに習ひしや勤しやとてもいやな客にも逢ねバならぬ野夫ならこふしたうきめハせまじいとしとのごハあゝ儘ならぬとハ苦界の中の樂たのしミの中の苦界なるべし爰に鳥羽屋の一構樓上塵埃をはらつて皎歯謳ひ細腰舞妨寵たる娼妓嬋娟たる新雛荘〻たる禿喧聲譜笑盛〻として吉野立田の花錦色香あらそふさま〳〵に客の信實をよろこぶあれハ薄情なるを怨あり或ハきれて哀ミ呼で樂ミ意氣なるをか愛かり己惚を悪ミ或ハ都合を欲あれハさがりをはらつて仁るあり義顯あり大門迄禮るあり智廻て呼あり信迷てかへすあり五常七情もまのあたりなる其中にミつきハたちし月汐のつき出しのその日からふとなれそめし戀人をかひせし朝ハしぬばかりおしき別の曉やいつにかわりし衣〳〵に二世とかわせしむつごともどうかかうかとあんしられ互にあどなき心から思ひすごしハ人いちばいおもて座敷にしんないたこも身にしむ折から せうじをあけて せハしんぞう 【清川】さつきのおミくじ本

をかりてめへりやした何番ざんす「月汐」よくかりておくんなんした六十四でざんすわたしがよみんしやうからはんだんしておくんなんしさあよみいすよ安居且慮危「清」ムゥ心やすくいたと思へども危ことはかりありそふにみへて心ぐろうきづかいたえぬなり「月」ほんにそふざんす一昨日の晩ねどふもつねのやうでおざりひせなんだそれにわたくしに灸をすへろのやれかん積をおこすなのとそのほか夜ひとへ心にかゝることばつかりさ「清」あんまりおゐらんがこつておいでなんすからわざとそんなことをおつせへしたらう「月」情深主別離なんとおざりいす「清」ふかく心にかけて思ふ人にわかるゝことおゝくあるべし慎べし「月」それもしれんせんきのふのあさかへりなんすときついぞないつめて酒をちやわんでのみなんすからあたりなんしてわるうおざんすからあたゝめィしやうからおだしなんしといゝしたならあたつてしんだらいつこふよからうそふすりやァ是がおいとまごひだといつたきり出ていきなんしたからわるひことをいつたとおもいゝして道〳〵何をいつてもろく〳〵あいさつもしなんせなんだか大門でわたしが顔をふりむき〳〵みていきなんした「清」つゝしむべしとおざんすがどふしなんすりやいひのだね「月」風飄波浪急あとをはやくみておくんなんし「清」おまちなんしよァ、ト風つよく水をふきかへし波あらくしきりに吹かへるゆへ水鳥うろたへとほ

ふをうしなふたり【月】鴛鴦各自飛【清】ゑんわうはおしどりなりめすおす中よくたつも
いるもはなれぬ鳥なれどうろたへはなれ〴〵になつてとび行ていなり【月】それがほんならど
ふうろたへずにいられへしやう何そつまらぬことでもできつきつめた心からひよんなことできき
くやうなことがあつたらなんとしいしやう【清】マアどふいふやうすか人をやつておきなんし
【月】わたしがゆめミからす啼おミくじの表はわるしなんぞ子細がなかあかないすめへ【清】
それならマア文をおかきなんし山里屋へもたしてやりひせう（トうわさの所へ茶やのワかいものいそがしそふに來り）【茶】おゐらんと
んだことでこぜへます志厚さんがねミへなさいませんとさそれで手分をして尋ねるとつてお
もだちが二人づれでお出なさるましたが上を下へと大さわぎおミくじでも占でもなにとも様
子はしれず母御は狂氣の樣になつておつしやるには吉原にふかくなじんでいつた所があるそふ
だが親にはたとへかくしても女郎は樣子をしつているめへものでもないひ茶屋はたしか山ざと屋
と聞ていれどもひよつとまちがはふかと書付をもつてお出なされましたおとゝひのとき何ぞか
わつたおはなしはございましなんだか（トきくよりはつとさしこむしやくなきたいところをじつとこたへて）【月】親御さんさへそふおもつ
ておくんなんすものをどふしたわけであろうともかくしなんすが恨しうおざんす金のわけでも
あるならばたとへくがいをかさねてもどふなりとなりひせうものを【茶】サアそりよゥあちらで

もおつしやるそうさ女郎のことやなにかなら請出しなりとどふなりと金にハかへぬ大事な御身分さて〳〵きのどくでごぜへます【清】なにと書て有るそのかきつけをおミせなんし トひろげてミて 覺歳十九色白く脊高く鼻筋とをり眼尻あがり眉こく髪中たぶさ歯なミそろひし方【茶】夫にこゝがあきらかといふもんだから トむねたゝき おゐらんのまよわつしやるもむりハござりやせん【清】一ッ羽織結城島一ッ下着嶋ちりめん胴非ぢりめんに島ちりめん額小袖ト二ッしかもこりやァおゐらんといつしよにこしらへさつしつた小袖さんす一ッじゆばんしぼりちりめん一ッ帶花色繻子【月】一昨日のときがそうでおざりひしたホンニ親とも兄弟ともたのミに思つて居るわたしをすてゝあとでどうなろうと思ひなんすかたとへどの樣におちぶれなんしやうともかわらず顔を見るならばまたすこしハ氣もはれなんせうに此雪のふるさむいのにどこにどうしていなんすやら トわつとなきだす二人りとても思ひやられてもらいなきしバしことバもなかりしが どふぞ仕樣ハおざんすまひか【茶】おゐらんで御存知なけりやァミやくハあかつたやうなものそれに三日がすぎてハしれてもどふもなりませんとさしかしお命さへあつたならまたどうかおせわの仕樣もごぜへませうがひよつと此書付と引合て見るようなことがあつては【清】どふいう譯であんなんすやらおとゝひの晩あのなつめばりとやらの銀の喜世留をいつそすいたなりだともふしひしたら越川の黒船とやらの多葉粉入ときせる

筒もいつしよにしてもふこんな物もいらねへからやらふとおつせへすからそれでもお歸りがふじゆうでさんせうともふしひしたら是ハおれがすんしたからしまつておきやといつておくんなんして色男にやるだらうのなんのとからかつたり何か致ひしたに此樣なことゝいふは【茶】ョン＝夢のやうでござります【月】そふざんすならたづねて見るのも今日一チ日【清】入相まではまだ二時【茶】日のたけぬうち【月清】ちつともはやう【茶】どりやけへつてそうもふさう

晝見世のしらせガラ〳〵ガラ〳〵

第二　打解し雪

さるものハうとし燈籠の細工すぎとハ花街の情にかなへる俳諧なり月汐ハ志厚にわかれてより明くれあんじて積となり思ひ出してハかきくどき悲歎のなミだにしづみしが内所をはじめはうばい女郎さま〳〵に異見をしたりなぐさめたり兎やかく月日をおくるうちもとより發明の生れなれば呼ひ出す名も瀧川のわれてもすへにあハんとぞおもき身がらハ一トしほに世間も廣きつけとゞけ新造禿も花やかに全盛なほど苦界ハなをもますかゝみうつり替ハ夜毎の枕かはらぬ心

のそのうちに別れし人にどこやらが似たと思ふが縁となりむかしぞつらきあれてふことをあまたに思ひいだしもたまさかにこなたハ猶もかよふ神かけてちぎりし客「兆雅」マァだまつていやなおもしろそうないたこがきこへる　おもてざしきにてしんないいたこ　〽かわひ男のまれに來ておもひのふちのうわさゝへとふさかるほどあさくなり「兆」おりよゥよんだはじまりハてめへがわかれた色男に似て居るからのことだと「咲川」アレサだまつてあとをおきゝなんし〽思ハぬ人もしげ〳〵になれそめごゝろうつかりとあふ瀬つもればふかくなる「兆」あのいたこもてめへがつくつたといふこともなにもかも知てゐながら色おとこのけへ玉につかハれるでもあるめへす「咲」それをしつておいでなんすおめへさんなりやそふも思ひなんしやうかそりやァまたとしにもゆかす何のわけもしりいせんじふんのこと「兆」しらねへときかいかねへしふんかなんだかそれを苦にしてわづらつたじやァねへか「咲」そりやァ子供ごゝろのかなしさにつひなミだがでゝなりんせなんたいきたかしんだかしれもせん志厚さんおなじうき世にいなんすほどならたよりのないはづもおざんせんこればつかりハちつとも思やいたしひせんまだ似たからほれたとおもひなんしやうがそれもあつてすんだむかしのことこうなつたうへからハ今さらぐちをおつせへすおめへさんでもおざんすめへ「兆」それも聞たからいふものゝこれまで手めへがいつたこと

もまんざらうそばかりでもあるめへがかうといふ何ぞわかつたこともねへにうか〳〵きた所がつまりもせず此頃しやァおやぢも番頭も氣をつけるやうすおふくろにもそう〳〵はいはれず何かに都合もあしゝだから手めへにもちよつとはなした茶屋の殘りや内〻の借金もいつそぶちだしてしまをふかそふすりやァしばらく氣づまりもしにやァならず　トしはらくかんがへ　しかしてめへにももふあうまいとおもやァ大きな事もねへ【咲】それそんなに情がおざりひせんこれほどまでに思つていゝすものをおめへさんの氣のすむやうにどんなことでもいたしひせうまた内證のことをおつせいしたなら金が出來いせうがそれじやァ來ておくんなんすこともなんなんすめへちつと心あたりもおさんすからはたらひてゞもふしいせうそしてどれほどやらとおつせへしたね【兆】ちや屋ののこりが十五六匁もあろふしどふあつてもけへさにやァならぬがたしか三十目であつたけへ目のまへにたくさんあるをみながらわづかなことにつまるといふはさりとはしがねへ身のうへだぞ　ト急にふさぐ　【咲】こんどこそわづかでもこれまで段〻の後でざんすものどのみちわたしがはたらきひしやうからそんなにふさいでおくんなんすな【兆】それができりやあんしんだがどふもきざな志厚とやらたとへたよりがあるめへが土左衛門になつてしまをうが手めへの目に見へるうちはおれが心ははれやらぬのさ　トいわれてさすがの咲川もしばしあんにおちさりしが　【咲】おめへさんにお

願がおざんすおいやならおいやの様におめえさんのお心いつぱいをほつておくんなんし　ト左りの手をまくつてたす【兆】そりやァおもしれへおれが思ふとをりをほつたあとで彼是があつちやァすまねへよ　兆椎二世のつまとほる　是でもふしぶんはあるめへな【咲】　目をあいてミてにつこりとわらふ　是でわたしが願はたりひした【兆】てめえこれでもふいひのか【咲】よくなくつてはさ【兆】手めへおりよゥばかにするな此あいだがうからちらりとにらんでおいた朝夕てめへが目にミへる此色男はどふするつもりだ　ト手ばやく右の手たもつ【咲】こりやァ心でかためた二世のおつとさ【兆】　ぐつとせきこんで　うぬがそのくそおちつきが氣にくわねへそれをしらねへおれだと思ふか右と左りにそのほりものかくそふともしやァからんでわたしか夫もおゝわらひだ常の女の密男日前こゝなすそつぱりめがうぬ　トぐつと引よせひきまくればあざやかに米稚二世のつま【咲】そんなにびつくりしなんせすとよふざんさァ【兆】信實ミへし此ほりもの今迄おれになぜかくした【咲】しりなんせばあつかましいとおさけすミなんすがはづかしさ手づからおほんなんしたうへからは【兆】心晴ての二世の女房【咲】　手を合せ　嬉うござんす【兆】したがおれにやァ大きに氣をもませた【咲】かんにんしておくんなんし　ト例のころし目しりめでにつこり此ときの顔うちへかえつてもたつてもいてもねてもさめてもちら〱とミゆべしこれらはなしいたつてひくゝなり何かきこへるやうできこへぬやうなりとういふひやうしかたんすのくわんが　カチ〱カチ〱

第三　枯木の花

第四　散失る紅葉

一ト夜あふゆきゝの人のうかれ妻いく度かハる契りなるらんとハ遊女をよめる歌にていとあわれなり中から下はいざしらず物の哀もワきまへて何かの道もくらからぬ實も厚き心から幾度かワる枕たも客の心を思ひやりいやとおもへハおもふほと猶すてがたき座敷の客 名代ざしきハ秋の夜の千夜を一夜となせりとも言葉殘りて雞のなくおしき枕をふり切るもとハといえハ人のため「唉」ちよつといつてめへりいすから寐ずにおいでなんしへ「兆」おれにハねつにいろといつておひて手めへハ座しきへいつてちきるもよつぽと虫がいゝ「唉」よしてもおくんなんしすきいせんよ「兆」すいたことばつかりあれバ苦けへといわねへハそりやァそふとかのことを首尾よくやれよ「唉」ずいぶん如才ハおさりひせんかいやな客人に出るのも勤のならひなれハしようこともおさんせんかどうぞしておめへさんがよひたィけれバこそなんほいやな客人てもワたくしをにくひとも思つておりひせんものをうそをついたりだましたりするのが氣はづかし

くつてきのどくで是が誠の苦界でおざんさァナ【兆】なるほど手めへハよつぽどすそつぱりの情の有るものだれへそのきのどくなことをさせるのもこんなおれゆへと思へバ口おしひやらかなしひやらまたきやつがむくつてきてどこぞの果にはどのやうなめにあふまゐものでもねへはやく了簡をするのが上分別かもしれねへ【唉】またそんなことをおつせへす人に無心もいわずりつぱにおめへさんをよびもふすやうなれバなんにもいゝふんはおざんせんハなまだ此上にどの様なことでもいとやいたしひせん【兆】そりやァお互のことだてめへがさういふ氣なりやいうことハねへがきつく迷惑そうだからさェ、モウこんなことハうつちやつて一盃のもふ【唉】おめへさんの氣に入りの猪口ハ今たしにいつちやァわるうざんすからこれにしなんしと（ありあふちやわんにてたがいにかほをしかめながら一二はいぐつとのむ）清川さんこのあいだの雁金とやらをよくはふじて煮ばなをしてあけておくんなんしそしてぬしをねかしもふしておくんなんすなへ【兆】そんなにうかさねへでも寐ることではねへよさ早くいかざァあしからうせ【唉】がつてんでおざんす【兆】おさらバョろうかハタ〳〵ハタ〳〵〳〵（ひつかへしになる唉川がざしきとかわる）【唉】あつかましい寐なんすのかへ（ト夜茶のそでを上ケねどこへは入ル）あんまり早速だがこないだおたのミもふしひしたこたァとふしておくんなんすいつそ苦勞ざんすハな【薄情】おまつがいわんしよと思ふて持てきれ來レども夫につひてわしもいふことが有て兎。

いふてぐた〳〵しくならべた所が紙づるへ第一板木屋のそんじやによつて肝用な所ばかりちよつほりいふからようきかんせいわずともな大切なものをおいといふにはこちにもちつと望があるがきいておくれるか「咲」そりやァのぞみも望によりひせう私も勤の身でざんす「薄」そのつとめの身知て居るとや外でもないがあの生がとやらにきれてもらゐたい「咲」兆雅さんのことならいつてもおくんなんすな今じやあ先から愛そをつかしてめへりひせんものをたとへわたくしがどう思つても歯れたちいせんからかんにんしておやんなんし夫ともならどのよふなことでもいつて遣ひせういまこゝでみをかきひせうかね「薄」たとへ目の前で突出してみせてもわしはおつゝけ上とへ登た其後幕の筋もわからん狂言にうかつに金元はマァならぬ「咲」してどうすれば氣がすみひすへ「薄」互にあいそはつきはてゝも心はうごかぬ此野郎を火あぶりにしておみせイヤ其ほりものが消てもらひたいなんとイヤコレとふじや物をいはずにうつむゐて居るはできぬといふことかそつちが出來にやこつちも出來ぬ咲川ともいわるゝ全盛では金のいるもしつているが此金ばかりは敵をよぶさんだんとふからわしがねめておるたにちがひはごんすまいが「咲」くどうおざんす足をちかくおいでなんした時分は互におもつてもおりいしたのさ又いきな男でおさんすものを此様なことも致しいしたはおめへさんのきなせんさきのことす

へもとげなひ此ほりもの【薄】そんならきやすか是ばつかりハなるまいて【唉】ばからしい神鳴さんじやあるめへし夫程消してほしくハけしてもあけィせう　ト灸をとり出し口のうちでおめへさんのほんなんしたほうでハおざんせんからかならすはらをたつておくんなんすなと思ひ切て火をつけすつはりと消て仕まい　目をあひてよくころうじいし【薄】夫でこそト一ゝゝゝのおやゝまさんなれでかした〳〵一向粋しやそれほんにまで思ふてくれるものをとうかんがへても年きのあけるまでハまたれんそれじやさかいで今七百九十両迄に相談すれど八百両でなけにや手をうたぬと亭すがいふに寄て見合ていたが今の信實を見るうへは上ゝへのぼつてもふ十両きばつて女房にするほどにそふ思てたもれや【唉】若もそれがほんの事さんすりやわたしやしんでしまいィす程うれしうおさんしやう【薄】ゐろうあぶらをいふてじやワしもかふして年に二どつゝお江戸へ下るたんび貳百と三百ハどこへかしらやつていくがこよひのやうなこきみのよい嬉ひ事ハ京大阪でもはつものじや此悦に一ッ盃のまにやならんサァ手まいにさすぞ【唉】おつぎなんすなたべィせんよ【薄】こゝでお肴をするじやト　ふところより五十匁出し　サァむかでゞなひぞへ【唉】こりやァもふおありかたふおさんすあの子にワたしておくんなんしそして猪口と夫とをあのよしかはやくよ【清】承知でおざんす薄さんちとおやすミなんしと　そこ〳〵にあいさつして包のまゝ持て行　【唉】サァこれで一ッおあがんなんし【薄】これでのんでは大きに過るがなんのだいじかようてこませィヤよう

つひでならあの礒ハどふしたかちつともよいかしらん【咲】宵にいつそあげたりもどしたりしなんすとつて姫川が金丹圓をとりにめへりィした　トうわさのひめ川とつれだつて薄情が所の居候礒次郎とほうをうしないしていにて來る　【礒】扨〻大きに酔ました【薄】どうしや今噂をしてゐた二階へ上ルがはやいかたをれてのけたが心持ハもふよいか【礒】もふさつぱりさめましたなにがたゞすてたへたうへ馬道の富士屋で呑だまでハ覺てゐますが夫からハどこをどうまいつたかさつハり夢中でおぼへませんコリヤアもふ思ひかけねへあの子の大やつかいになりました【姫】この客人ハいつそ氣さんじざんさァなさつき目を覺しなんしてこゝハどこだとおつせへすから戸羽屋でざんすともふしいしたりやぬし一人が薄さんと一所にきたかのなんのといろ〳〵なことを根問ィなんしてきよろ〳〵とそこらあたりを見廻しなんすからいつそ氣味がわるうおざんした私を狸だとてもおもひなんしたそふさ【咲】そりやァてめへがあんまり眠ルからさ【礒】いやおいらん先刻ハお藥をありがたうおさいます薄さんのおはなしてお名ハ毎度伺ましたそんざいものでごさひますお目をかけられてくださいませ【咲】とこてかいつそお過なんしたそうざんすかもふさめなんしてとこもおわるかァおさんせんか　トいふものごしからつまはつれにと思へと口もと目元むかしにかわるかほのやせよもやと思ふこなたにもかつてかわしりなりかたちさき川ハあんとふかきたてながらつく〳〵とこてとり寐すかき立ぼう　ヲヤ【礒】ホィ【薄】手まひたちハ何をうかゞァしな身ふりをする【咲】アィサたれにか能似てお出なんすか

ら【磯】色男にハ及もねへが金持に似ていやしたならいゝとりかゝるめへものでもござりやせんノゥ薄さん【薄】おゝきにさなんちを呼ハ金のことしやそこでこちらハこちらじやてや【磯】おうら山しひお身のうへだしたか女郎買斗ハさつぱり思ひきつて居ますよ【咲】まもりぶくろより一つうとり出し此書付によく似ておいでなんすこりやァさる所のおいらんの十六の突出しから深く馴染ミなんした客人がありなんしていろ〳〵言かわせなんした事もあんなんしたさうだにどふいふ譯かそのおいらんをふりすてゝどけへかいつてしまいなんした後で此書付をもつてつれ衆が尋ておいてなんした人相がきとやらざんす夫で其おいらんの思ひなんすにハ此世にさへおいでなんす程ならば風の便ハある筈海川へ身でもなげなんしたやらそれさへ知れねバ回向もならず毎日〳〵泣てばつかりそれがもとになつてわつらひなんしたからほつこりとした風だつたけが今じやァ痩おとろへなんして昔のさうがうはおさりィせんから見違いすよ【磯】其様な馬鹿者に似てハわたしもあんまりかしこかァねへとミへやすしかし身でも投りやァいつそよふござせへせうが海えも川へもへへりやあいたしやすめへさだめてわづかな金にでもつまつてほんの若氣の誤り今じやァ嘸後悔でござせへせう【薄】どのやうな衆かハしらんが我身ハ覺悟のまへじやが其親よがゑろうなきおるしやあらうおやまハ其當分ばかりでつひわすれて仕廻おらう【咲】いく

ら流の身でざんすとつてさう浮氣ばかりでもおざんせんのさおやごさんのおつせへすのにハ添たひと思ふ女郎衆でもあんなんすならそれせてやろ金にはかへぬたつた一人りの血筋だからとつておなげきなんしたさうさ【礒】ハテそういふことでごぜへましたかそれほど迠にお慈悲の深ひ親をすてるちくせう同前な子ならばちがあたらざァなりやすめへ　此雅ハ咲川がざしきにてまどろハしさぞあらんと名代しんぞうがいづきをさいわいにそつとねけ出たちぎゝをするとハさすが神ならず【咲】そのおいらんも幾度とか死ふと思ひなんしたなれどねんのうちハ主人のからだ手めへの自由にやせぬはづとつれなひ命をながらへなんす其内にわかれなんした客人に似た人があつてせめてもと思つて呼なんしたうち互に今じやァ深くなんなんしてた客人のことでいろ／＼な苦勞もしなんすそふだが思ひがけねへことでその死になんしたと思つておいでなんす客人にひよつとあいなんしたといふやうなことでもおざんしたなら末木にまさる元木なしとやらで後の客人への義理もちじよくも打わすれなつかしひとうれしいで人目かなくハ物もいわず抱付てと心であせつておいでなんせう【礒】それさ夫がうわ氣といふもの夜ごと日毎にかわる枕永ひ月日の其うちにハおもしれへこともできにやかなわぬ指を切るの髪をきるのと深くなる程ぐちになりふたれたりふまれたりする度ことにかわひさが増てきて末は夫婦と神かけていひかためたうへハこんりんならく心ハうこかぬはづそふまたよりが戻てハちかつた

神の罪があたりあぶもとらず蜂もとらずのちにやァがいこつの置ところにもこまりいやな男に身をまかせ一生を誤るハミえてゐるそれよりか初の客の事ハ宵の間の客とさとりいひかわした男にまことを盡し一生樂でくらすがやうごぜへセうしたが其おゐらんに引かへて其男ハミるかげもねへ居候の身となりしつけもせんしミつたれた業をしても其傾城とそふことがめへどのことを思ひ出してふさゐだ時分一盃のんでわすれやうと思ふわづかな酒さへも儘にならぬつらひくやしひはづかしひことはかり不了簡からとハいふものゝ其傾城とも馴染ず家を出ざァ今頃ハと思ふ度に血の淚同しうい孫の顔を見る親達も其息子なら嬉しかろうに跡は他人を養子にして親には苦勞をかけ其身ハうきかんなんそれも誰ゆへと思ふ人ハ色ある花の仇つきに面白さうなを余所ながらミたならバにくいやらなつかしいやらうら山しいやらで咲川がかほたきつとミて三十日に月ハ出ぬはづとあきらめてもあんまり心持チはよくもごぜへすめへ【咲】嘸そうでおざんせうにくるやつだとおもハれなんしてもさら〳〵むりとハおもやァなんすめへ似たのをたのしミに呼なんした程てざんすものを其はじめのにあいなんして今其やうなことをお聞なんしたならかなしひとはづかしいとでいつそのこと別なんした客人のなミたをふきながら思ひなんす存ン分突なりと切る成りと手にかゝつて殺されなんしたなら嘸本望夫もならずハ目の前で其言譯に死で仕廻ふと思

ひなんせう【磯】けがらわしい犬同前な傾城をだが手にかけて殺やせうそのやうなくされた根性でまさかといへバ死にゐゝることしやァごぜへせんのさ【唉】何の死鏁やあしなんすめへ トやうすかわつてかけいだすたもとをとつて【磯】ャレはやるまひ月汐わりやァ氣かちかつたな ふつときがつきて ハ、ハ、ハ、〳〵ワたくしとしたことがよその事をたわひもねへこりやァモ大笑ひでごせへます ト薄清をミれバ胥のこつぷにめいてい トせんこもしらすねている【唉】ァイ氣がちがひました トワつとふきたし おはなしなんし志厚さん トふりきらんとする袖の匂ひにまたもへ出るあいじやしん

【磯】あひもかわらぬ手めへがそぶり思へバ戀しいこの袖の香【唉】こうならうとハ露しらすいかに年はがいきィせなんだとつて氣儘ばつかりもふしひして澤山そうにしたことゝないてばかりおりいしたを寄てたかつて異見をしたり呵たりいろ〳〵なことを申ィしたについたまされて今迠たてぬかなんだハぢう〳〵ワたしが誤りどふぞかんにんしておくんなんし トこれ〳〵そつといだき付身をく ゆるなミたのふち【磯】そのやうなたのしみもなくつてハ長い苦界がどふ命がつづくものかそりやァさら〳〵無理とハ思わねどこのしミつたれた今の身のうへ手めえまでのつらよごしだ【唉】あのもつたいなひことをおつせへすいくら働のないワたしでもおめへさん一人り立派にすぐしかねもいたしィすめへ其上でわたくしが呼申ィすに誰がなんと申ィせう【磯】そうした所がとゞれ手めへの身のつまり是まで段ゝの世話にもなりすへハ女夫と身をまかせて居る家への義理たゝ

すおれだといつても寐てゐる人にハ言葉に盡せぬ深ィ恩今度店をもたせようと迄の懇せつまことに實身の親同前どう思つてもあわれぬ時宜ゐんのないのと思ひ切るのが互の身のためといふもんだ〔咲〕それだといつてもこれがマアどう思ひきられいせうほかにしかたハおざんすめへか〔磯〕さればさそふいふことハそんな後編のことにしてしまつて義理もへちまも打すてふか〔咲〕そんならどうぞ〔磯〕つれて〔咲〕にげて〔磯〕コレサ聲が高へ　薄情がね かへり　エヘン　びつくり してひざ よりほつりだすさき川がそでがまくれて半ぶんミへるほりもののいかなる所存 やたちき丶へあんどん目あてになげこむ　十夂ばつたりきへてしんのやミ　エヘン。エヘン〳〵

婦足禿　大尾

青山茂

大槻正二

大槻尹一

高木好次

山本錬藏

渡邊幸

校

昭和六年十月十五日印刷
昭和六年十月二十日發行

洒落本大系第十巻

非賣品

著作權所有

編纂者　高木好次
編纂者　山本鍊藏
編纂者　渡邊幸

東京市日本橋區呉服橋二丁目五番地
發行者　林平次郎

東京市牛込區辨天町一五七番地
印刷者　本間十三郎

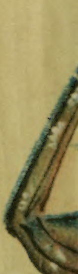
發行所
東京日本橋區呉服橋
振替東京二三七一
六合館

印刷所　清揚社

京傳筆

[illegible]

貫之



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1829